—」。㊁すみか。すまひ。

ちゆう[重](名)「ぢゅうばこ」(重箱)の略言。

(ちゆう-あい[忠愛](名)まごゝろをつくしていつくしむこと。又、忠義となさけと。

(ちゆう-あう[中央](名)㊀まんなか。たゞなか。まなか。なか。㊁首府。首都。㊂楯型。楯軸。——**-えうねん-がくかう**[中央幼年學校](名)教育總監の管理に屬し、各地方幼年學校の卒業生に、士官候補生たるに必要なる教育を施す所、別に地方幼年學校と同一程度の授科を設く。——**-きくわん**[中央機關](名)【法】中央行政を處理する機關、即ち中央行政官廳の如きこれなり。——**-きしやりだい**[中央氣象臺](名)文部大臣の管轄に屬し、氣象に關する事項を研究し、氣象事業を既轄する所、現時東京に置かる。——**きんかう**[中央銀行](名)全國一般の銀行の銀行となり、資金供給の源泉となり、特殊の權限と特殊の責務とを有する銀行、我國の日本銀行の如きこれなり。——**-きんこ**[中央金庫](名)【法】金庫の條を見よ。——**-くわとうきう**[中央火口丘](名)【地】噴成火山の中央に新に生じたる火山。——**-くわんちやう**[中央官廳](名)中央行政官廳に同じ。——**-くわんぶ**[中央官府](名)前條に同じ。——**-きふけん**[中央集權](名)㊀政務の施行はすべて中央政府の權に歸し、地方官廳はたゞ其意思を受け奉ずるに過ぎずして、自由の活動なき狀態。㊁すべて權力の中央にあつまる現象。——**-せいど**[中央制度](名)國家が直接に官府を設けて行政する組織。——**-へうおんきう**[中央標準時](名)【地】東經百三十五度の子午線の時刻、東は千島より西は琉球(八重山及宮古列島を除く)に至る間に於て一般に用ひらるゝもの、故に該經線以西は地方時より早く以東は地方時より後る。

(ちゆうあう-きやうせい[中央行政](名)全國一般に施行する行政、即ち中央機關の擧る行政。——**-くわん**[中央行政官](名)中央機關に同じ。——**-くわん**[中央行政機關](名)中央機關が其職務を處理する所。——**-くわんぶ**[中央行政官府](名)前條に同じ。——**-くわんぶ**[中央行政廳](名)中央行政官廳に同じ。——**-ちやう**[中央行政官廳](名)【法】全國一般に施行する權限及責任ある機關、即ち各省大臣の如きこれなり、又、其機關が其職務を處理する所。——**-ふ**[中央行政府](名)前條に同じ。

(ちゆう-い[誅夷](名)うちたひらぐること。又ころしつくすこと。

(ちゆう-い[注意](名)㊀氣をつくること。心をそゝぐこと。㊁警戒。用心。㊂傍より戒め告ぐること。そばより氣をつけていふこと。㊃【心】意識作用が或物事に集注すると、所動的と能動的とに分つ、前者は外部の刺激を受けたるために起るものをいひ、後者は自ら求めてなすものをいふ、此作用によりて事物は分明となる、されど其範圍と強度とは反比例をなし、また其強度も同一律に繼續することなく、時として或は強く或は弱し。——**-おんぶつ**[注意人物](名)其筋より目をつけられてある人。——**-りよく**[注意力](名)注意の能力。

(ちゆう-いん[中陰](名)【佛】(い)「ちゆうう」(中有)に同じ。(ろ)人の死後、四十九日間の稱。

(ちゆう-う[中有](名)【佛】色身已に死して未だ後來の生を託せざる間、魂—と迷よ。

(ちゆう-えい[柱楹](名)はしら。「なさと。

(ちゆう-えい[冲幼](名)をさなきこと。いとけなさ。

(ちゆう-えう[重要](名)かんえうなること。大事なること。

(ちゆう-えふ[中葉](名)なかごろ。中世。

(ちゆう-えん[重緣](名)既に親類又は緣類たるものが、重れて婚姻又は緣組を取結ぶこと。「ぐみ。

(ちゆう-れん[重恩](名)厚きなさけ。おもきめぐみ。

(ちゆう-か[仲夏](名)陰曆五月の異稱。「ど。

(ちゆう-か[中夏](名)「ちゆうくわ」(中華)に同じ。

(ちゆう-が[駐駕](名)貴人がのりものをとゞめらるゝこと。又、貴人が其地に羈在せらるゝこと。

(ちゆう-か[住家](名)すみか。すまひ。

(ちゆう-かい[註解](名)註を入れて本文の意義を解釋すること。又、其もの。(註釋)。

(ちゆう-かい[中海](名)【地】陸地に圍繞せられたる海、即ち地中海の如きこれなり。

(ちゆう-かい[仲介](名)㊀隣者のなかに立つこと。㊁【法】第三國が當事國の間に立ちて、其國際上の紛議を調停するため、一定の條件を提出してこれに從はしめんとすること。「害。

(ちゆう-がい[蟲害](名)蟲のために受くる損

(ちゆう-かう[忠孝](名)よく臣たる義務を盡くすとよく子たる義務を盡くすと、よく君に事(カ)ふるとよく親に事ふること。「項」に同じ。

(ちゆう-かう[中項](名)【數】「ないかう」(內項)に同じ。

(ちゆう-がく[中學](名)「ちゆうがくかう」の略言。——**-かう**[中學校](名)男子に須要なる高等普通教育を施すことを目的とする學校、即ち小

學校と高等學校との中間の程度のもの。——**-せい**[中學生](名)中學校の學生。——**-せいと**[中學生徒](名)前條に同じ。——**-ていど**[中學程度](名)中學校に於て教授する學術の程度、又、中學生の通常有する學力の程度。——**-りん**[中學林](名)佛教の僧侶の學校にて、中學程度の教育を施す所。

ちゆう-がた[中形](名)染模樣の名、大形及小形に對して、稍々細(ア)き形の稱。「一の浴衣」

ちゆう-がへり[中返](名)「もうがへり」(宙返)に同じ。「のいさめ。

(ちゆう-かん[忠諫](名)まごころの意見、忠義

(ちゆう-かん[忠姦](名)忠義なるものと姦惡なるものと。(忠奸)。

(ちゆう-かん[中間](名)㊀相對するものとの空隙又は距離。相對するものとの關係又は離隔。なか。㊁未だ經(ヘ)をはちざる時。未だ事件の濟(ミ)みをはちざる時。あひだ。——**-きゆく**

きゆ[中間宿主](名)【動】寄生蟲が終結宿主に寄生する前に寄生する或動物の稱、例へば條蟲の人身に寄生する前に寄生する豚などの如きこれなり。——**-そきより**[中間訴訟](名)【法】訴訟事件の進行中、其或部分の事實の爭ひとなりて、特別に調査すべきものあるときの稱。——**-はんけつ**[中間判決](名)【法】終局判決の準備として、其事件の進行中、或部分の爭點に就てのみ行ふ判決。

(ちゆうかん-きたん[忠肝義膽](名)《忠義の肝膽の義》忠義にとりかたまる心。

(ちゆう-き[注記](名)寺院にて、論議の節に題を讀みあぐる役僧。

(ちゆう-き[中氣](名)「ちゆうふう」(中風)に同じ。——**-やみ**[中氣疾](名)中氣を病む人。

(ちゆう-き[忠義](名)まごゝろを盡くし臣たる義務を守ること。——**-がほ**[忠義顏](名)忠義らしきさまをよそほふこと。——**-たて**[忠義立](名)忠義らしく餘計なるふるまひをなすこと。

(ちゆう-き[重器](名)大事なるうつは。「ると。

(ちゆう-きう[誅求](名)せめもとむること。せび

(ちゆう-きよ[冲虛](名)心にわだかまりなきこと。

(ちゆう-きよ[蟲魚](名)むしとうを。

(ちゆう-きよ[住居](名)すみか。すまひ。

(ちゆう-きん[忠勤](名)まめやかにつとむること。「—をはげむ」。

(ちゆうきん-がくは[重金學派](名)【經】貨幣を唯一の財物なりとし、能ふだけ國內の貨幣を增加して其流出を防遏することを以て得策となす學派、現時に於ては、誤謬の見として用ひられざるもの。

(ちゆう-きんこ[重禁錮](名)【法】輕罪に科する主刑の一、一定の場所に留置して定役に服せしむるもの、現行法にては、十一日以上五年以下の期間なりとす。

(ちゆう-きんこく[重禁獄](名)【法】重罪に科する主刑の一、內地の獄に入れ、定役に服せしめざるもの、現行法にては、九年以上十一年以下の期間なりとす。「部の空虛。

(ちゆう-くう[中空](名)㊀こくう。そら。㊁內

(ちゆう-ぐう[中宮](名)㊀三宮の總稱。㊁皇后の稱。㊂後世、皇后の外に設けられたる妃の位。——**-ぢき**[中宮職](名)古昔、中務省の所屬にして皇后宮の事を掌りしもの。

(ちゆう-ぐらゐ[中位](名)中間の程度。あひだのほど。なかほど。

ちゆうクロームさんカリ[重—酸加里](名)【化】「ちゆうクロームさんカリウム」に同じ。

ちゆう-クロームさんカリウム[重—酸—](名)【化】赤色を帶びたる結晶物「クロム」酸「カリウム」に硝酸を加ふればこれを得、廣く染料に用ひらる。

(ちゆう-くわ[中華](名)《四方の蠻夷に對して、中央の開化したる國の義》支那人の自國の詩稱。

(ちゆう-くわ[中和](名)「ちゆうわ」に同じ。

(ちゆう-くわ[重科](名)おもきとが。おもき罰。

(ちゆう-くわい[衷懷](名)おもひ。又、まこと。

(ちゆう-ぐわい[中外](名)うちとそと。內外。

(ちゆう-くわび[中果皮](名)【植】果實の厚き肉質の部分即ち食用に供せらるゝ部分。

(ちゆう-くわりんさん-せきくわい[重過燐酸石灰](名)【化】過燐酸石灰に比すれば殆ど三倍の燐酸を含有する物質、肥料として使用せらる。

(ちゆう-くわん[中浣](名)月のなかの十日即ち十一日より二十日までの稱。(中澣)

(ちゆう-くわん[重患](名)おもきやまひ。大病。

(ちゆう-くん[忠君](名)君に忠義をつくすこと。君のために身命を惜まざること。「—愛國」。

(ちゆう-ぐん[中軍](名)左右若しくは前後の兩部隊の中間にある軍隊、古昔多くは大將自らこれを統率したり。

(ちゆう-けい[中啓](名)親骨の上端を外へ反(ク)らしたる扇子、たゝみても尙はなかばひらける狀をなす。(折腰扇)。

(ちゆう-けい[仲兄](名)第二番目の兄。

[いけうゆち]

(ちゆう‐けい)[重刑](名) おもき刑罰。おもき志むき。
(ちゆう‐けうせい)[中教正](名) 大教正に次ぐ教導職。
(ちゆう‐けん)[中堅](名) 「ちゆうぐん」(中軍)に同じ。
(ちゆう‐げん)[中元](名) 陰暦七月十五日の稱。盂蘭盆。
(ちゆう‐げん)[忠言](名) ㊀忠諫のことば。㊁忠告のことば。
(ちゆう‐げん)[中間](名) ㊀ちゆうかん。あひ。㊁「ちゆうげんをとこ」の略言。 ——をとこ[中間男](名) ㊀侍(サムラヒ)と小者(コモノ)との間に召使はるゝもの。㊁武家の末もべの長。
(ちゆう‐こ)[中古](名) ㊀なかむかし。中世。㊁はしたもの。㊂歴史上の區別、大古と近古との間の稱にして、我國にては大化の改新より源頼朝の總追捕使となるまでをいひ、西洋にては、民族の大移轉頃より新世界の發見頃迄をいふ。
(ちゆう‐ご)[中午](名) まひる。正午。
(ちゆう‐こう)[中興](名) 一旦衰へたるをなかごろ再び盛ならしむると。なかたびにおこすと。
(ちゆう‐こく)[忠告](名) 眞意を以て人の過ちなどを告げ戒(イマシ)むると。こゝろぞへ。
(ちゆう‐ごく)[中國](名) ㊀國の中央の部分。㊁古昔は山陽道の特稱、後世は山陰・山陽兩道の總稱。㊂「ちゆうくわ」(中華)に同じ。 ——かいだう[中國街道](名) 大阪と下關とを連絡する街道。
(ちゆうこ‐し)[中古史](名) 中古の歴史。
ちゆう‐ごし[中腰](名) 腰を半ばあげて立ちかゝりたる姿勢。
(ちゆう‐こん)[忠悃](名) 篤實にして欺(アザム)かざるまごゝろ。
(ちゆう‐こん)[忠魂](名) ㊀忠義を盡くす精神。忠義のたましひ。㊁忠義のために斃(タフ)れたる人のたましひ。「—を祀る」。 ——ぎはく[忠魂義魄](名) 前條に同じ。
(ちゆう‐こん)[重婚](名) 【法】配偶者ある男又は女が、更に他の女又は男と婚姻をなすと。 ——ざい[重婚罪](名) 【法】重婚をなしたる犯罪。
(ちゆう‐ごん)[重言](名) 同一のことばを重ねていふと。ことばのかさなると。
(ちゆう‐さ)[中佐](名) 第二位の佐官、大佐の下にして少佐の上に位するもの。
(ちゆう‐ざ)[中座](名) 中途にて座を去ると。
(ちゆう‐さい)[仲裁](名) ㊀あらそひの調停。なかなほりのとりもち。㊁【法】第三者若しくは第三國が、當事者間又は當事國間の爭議に立ち入りて、これを裁斷して和解せしむると。 ——けいやく[仲裁契約](名) 【法】仲裁人をして爭ひの裁斷をなさしめんとする當事者間の契約。 ——さいばん[仲裁裁判](名) 【法】當事國雙方の合意によりて選定したる委員が、其國際間の紛議を裁斷すると。 ——にん[仲裁人](名) 仲裁にあたる人。又、仲裁判斷をなす人。 ——はんだん[仲裁判斷](名) 【法】仲裁契約に基き當事者若しくは裁判所の選定したる一人若しくは數人の仲裁人が、其爭ひにつきて判斷すると。若し仲裁人數人にして契約に別段の定めなきときは、過半數に因りてこれを決す。文書は作成の年月日を記載し仲裁人署名捺印し、正本は當事者に送達し原本は送達證書を添へて管轄裁判所書記課に備へ置くものとす。仲裁判斷の効力は、裁判所の判決と同じく當事者間には確定の効力を生ず。
(ちゆう‐ざい)[駐在](名) ㊀とゞまりゐると、とゞまりすむと。㊁派遣せられて其地にあると。 ——くわん[駐在官](名) 受持の地方に駐在して、徴兵事務を取扱ふ陸軍の士官。 ——こく[駐在國](名) 公使などの駐在してある國。 ——しよ[駐在所](名) ㊀或人の駐在してある所。㊁巡査が受持區域内に駐在して事務を取扱ふ所。
(ちゆう‐ざい)[重罪](名) ㊀おもきつみ。重科。㊁【法】死刑・徒刑・流刑・懲役・禁獄の中の何れかに處せらるべき犯罪。 ——はん[重罪犯](名) 【法】重罪にあたる犯罪。
(ちゆう‐さう)[重創](名) ておもききず。
ちゆう‐ざかな[重肴](名) 重づめのさかな。
(ちゆう‐さつ)[駐劄](名) 「ちゆうざい」に同じ。(多く使臣にいふ)「日本—公使」。
(ちゆう‐ざら)[中皿](名) 小皿より大きく大皿より小さき皿。
(ちゆう‐し)[注視](名) 目をつけて離さゞると。みつむると。
(ちゆう‐し)[中試](名) 試驗に及第すると。
(ちゆう‐し)[中指](名) なかゆび。
(ちゆう‐し)[忠士](名) 忠義のさむらひ。
(ちゆう‐し)[忠死](名) 忠義のために死ぬると。
(ちゆう‐し)[中止](名) 中途にて止むると。
(ちゆう‐しう)[仲秋](名) 陰暦八月の異稱。
(ちゆう‐しう)[中秋](名) 陰暦八月十五日の稱。「—の明月」。
(ちゆう‐じき)[中食](名) ひるめし。
ちゆう‐しこ[中鉋](名) あらしこの次に用ふるかんな。
(ちゆう‐じつ)[忠實](名) 正直によくつとむると。すなほにしてねんごろなると。まめやか。
(ちゆう‐しはん)[中止犯](名) 【法】着手中止犯及實行中止犯の總稱。

(ちゆう‐しや)[注射](名) ㊀そゝぎかくると。そゝぎこむと。㊁皮下注射の略言。
(ちゆう‐じや)[忠邪](名) 忠なるとよこしまなると。
(ちゆう‐しやう)[中傷](名) 他人の惡事をしひつくりて、其名譽をきずつけそこなふと。
(ちゆう‐しやう)[中症](名) 「ちゆうふう」(中風)に同じ。
(ちゆう‐じやう)[中將](名) 次條に同じ。
(ちゆう‐じやう)[中將](名) ㊀古昔、近衛府の次官、正と權とあり。㊁第二位の將官、即ち大將の次にして少將の上なるもの。
(ちゆう‐じやう)[中情](名) こゝろのうち。内心。「—怯なるのみ」。
(ちゆう‐じやう)[衷情](名) まごゝろ。まこと。
(ちゆう‐しやう)[重傷](名) おもきてきず。
(ちゆう‐しやう)[重賞](名) おもき賞美。
(ちゆう‐しやう)[重症](名) おもき病氣。
(ちゆう‐しやう‐せき)[重晶石](名) 【鑛】多くは諸金屬の鑛脈中に存在せる硫酸鹽類、通常板狀・粒狀其他種々の狀をなす、比重多し、塊色は白色にして時に黄褐色又は褐色等を帶ぶ、粉砕して顔料などに使用せらる。
(ちゆう‐しやう‐は)[重商派](名) 「志やうしやうは」(商商派)に同じ。
(ちゆう‐しやく)[註釋](名) 本文のときあかし。註解。
(ちゆう‐しゆ)[中酒](名) 飯の間に酒を飲むと。
(ちゆう‐しゆん)[仲春](名) 陰暦二月の異稱。
(ちゆう‐しゆん)[中旬](名) 「ちゆうくわん」(中浣)に同じ。
(ちゆう‐しゆん)[忠純](名) 心のすなほにして、すこしもわだかまりなきと。
(ちゆう‐しよ)[中暑](名) あつさあたり。志よきあたり。
(ちゆう‐じよ)[忠恕](名) まごゝろを盡くして事に從ひ、己を推して人に及ぼすと。正直にしてもおもひやりあると。
(ちゆう‐しよ)[誅鋤](名) ころしのぞくと。ころしたやすと。
(ちゆう‐しよ)[住所](名) ㊀すみか。すまひ。㊁【法】生活の本據たる場所。
(ちゆう‐しよう)[中稱](名) 【文法】稍や距(ヘダタ)りたる物事又は場所等に用ふる指示代名詞、それ・そこ・そなた等の如きこれなり。近稱、遠稱の對。
(ちゆう‐しよく)[重職](名) 重大なる責務ある職。おもきやくめ。
(ちゆう‐しよく)[住職](名) ㊀住持の役目。㊁住持。方丈。
(ちゆう‐しん)[忠心](名) 忠義のこゝろ。
(ちゆう‐しん)[忠臣](名) 忠義の臣下。
(ちゆう‐しん)[忠信](名) まごころをつくしていつはらざると。まことゝ。まめやか。
(ちゆう‐しん)[衷心](名) まこと。本心。
(ちゆう‐しん)[注心](名) こゝろをとゞむると。氣をつくると。
(ちゆう‐しん)[注進](名) 事變を上申すると。大事を報告すると。(申報)。
(ちゆう‐しん)[中心](名) ㊀まなか。まんなか。㊁【數】有限直線の兩端又は圓形の周端より等距離にある點。圓周又は球面のすべての點より等距離にある點。㊂「ぢゆうしん」(重心)に同じ。㊃むねのうち。こゝろのそこ。㊄樞要。樞軸。 ——てん[中心點](名) ㊀中心たる箇所。眞中の點。㊁「ぢゆうしんてん」(重心點)に同じ。
(ちゆう‐じん)[中人](名) 中等の身柄の人。
(ちゆう‐じん)[冲人](名) をさなきもの。こども。
(ちゆう‐じん)[廚人](名) くりやの事をつかさどるもの。まかなひかた。料理方。
(ちゆう‐しん)[重臣](名) 重き役の臣。祿高き臣。
(ちゆう‐しん)[重心](名) 【理】物體の各部に作用する重力の合力が通過する點、此點を通過する方向に重力と反對の力を作用せしむれば、物體は釣合を保つ。 ——てん[重心點](名) 【理】物體の重心たる點。
ちゆう‐す[誅](他、さ變) ㊀法に處して殺す。しおきに行ひて殺す。㊁せむ。㊂とがむ。
ちゆう‐す[註](他、さ變) ㊀しるす。かきあぐ。㊁ときあかす。とく。
ちゆう‐す[中](自、さ變) まなかに至る。「日巳に—」。
ちゆう‐す[冲](自、さ變) たかくあがる。ひゝる。「天に—」。
ちゆう‐す[住](自、さ變) すまふ。すむ。
(ちゆう‐すう)[中數](名) 【數】量の互に異る二個以上の數を平均して得たる數。又、甲數と或數との比が、或數と乙數との比に等しきとき、其或數の稱。
(ちゆう‐すう)[中樞](名) ㊀まんなか。まなか。㊁主要。樞軸。 ——しんけい[中樞神經](名) 「しんけいちゆうすう」(神經中樞)に同じ。
(ちゆう‐せい)[忠誠](名) まごゝろ。まこと。
(ちゆう‐せい)[中世](名) 古より今に至る間のなかごろの世。祖先より現代に至る間のなかごろの代。「—以降」。
(ちゆう‐せい)[中正](名) ㊀過不及なき程度。偏頗なき義理。㊁過不及なく偏頗なくよろしきほど

にあたること。
(ちゆう-せい)［中性］(名) ㊀彼にもつかず此にもつかざる中間の性質。㊁【化】酸性又は鹽基性ならざること。――はんおう［中性反應］(名)【化】「リトマス」液を赤若しくは青に變ぜざること。
ちゆう-ぜい［中背］(名) 身長の高くも低くもあらぬこと。なみの身長。
(ちゆう-せう)［中宵］(名) よなか。
(ちゆう-せき)［柱石］(名) ㊀はしらといしずゑと。㊁はしらともいしずゑとも頼むもの。「一の臣」。
(ちゆう-せき)［誅責］(名) せむること。たゞすこと。
(ちゆう-せき-ど)［沖積土］(名)【地】海岸又は河岸に、土砂の沈澱によりて形成せられたる最新の地層。
(ちゆう-せつ)［忠節］(名) 忠義のみさを。忠義のおこなひ。
(ちゆう-ぜつ)［中絶］(名) 中途にて絶(タ)ゆること。なかほどにてきるゝこと。(中斷)。
(ちゆう-せん)［忠戰］(名) 忠義を守りてたゝかふこと。
(ちゆう-せん)［中線］(名)【數】三角形の一の頂點より對邊の中央點に引きたる線。
(ちゆう-そ)［註疏］(名)「ちゆうかい」(註解)に同じ。
(ちゆう-ソウ)［住僧］(名) 其寺に住む僧。
(ちゆう-たい)［中隊］(名) 軍隊の編制の名目、三乃至四小隊より成るもの。
(ちゆう-たい)［柱體］(名)【數】相對する等しき平行二面と平行四邊形をなせる多くの平面との間に含まれたる多面體。
(ちゆう-たい)［重體］(名) 容體のむづかしきこと。おもき病狀。
(ちゆう-だい)［重代］(名) 先祖より代々傳はること。「家一の寶物」。

(ちゆう-だい)［重臺］(名) 重箱をのする臺。
(ちゆう-だい)［重大］(名) ㊀つねなみの事にあらざること。容易ならざること。㊁大切なること。
(ちゆう-たい-せき)［中堆石］(名)【地】氷河の中央に集まれる土砂又は岩塊。
(ちゆう-たう)［偸盜］(名) 物をぬすむこと。ぬすみ。
(ちゆう-だう)［中道］(名) ㊀中途。半途。㊁よろしきほどにかなふ正道。㊂【佛】有に偏せず空に偏せざること。非有非空。
(ちゆう-たく)［住宅］(名) 住みて居る家。すみか。
ちゆう-だち［中裁］(名) 十五六歳のものゝ着る和服を、鯨巾二丈三尺にて仕立つること。又、其服。
(ちゆう-たん)［忠膽］(名) 忠義にあつきこゝろ。
(ちゆう-だん)［中斷］(名) 中途にて切れたゆること。又、中途にて切りたつこと。「時効の一」。
(ちゆう-だん)［中段］(名) ㊀なかのきだ。なかのだん。㊁劍道又は槍術などにて、上段と下段との間ごろに刀又は槍をかまふること。㊂陰暦のこよみの中段に書き入れたる建(タツ)・除(ノゾク)・滿(ミツ)・平(タヒラ)・定(サダム)・執(トル)・破(ヤブル)・危(アヤフ)・成(ナル)・納(オサム)・開(ヒラク)・閉(トヅ)の十二語、これを十二直といひ、各日に配當して吉凶を定む。
ちゆう-たんさんソーダ［重炭酸曹達＝Bicarbonate of soda］(名)【化】白色にして細粒狀をなす結晶體、醫藥等に使用せらる、即ち、炭酸水素「ナトリウム」の稱。
(ちゆう-ち)［中池］(名) 心の異稱。
(ちゆう-ち)［蟲豸］(名) むし。
(ちゆう-ぢ)［住持］(名) 一寺の主たる僧侶。住職。
(ちゆう-ちやう)［中腸］(名) はらのなか。こゝろのうち。

(ちゆう-ちやう)［拄杖］(名) つゑ。拄杖。
(ちゆう-ちゆう)［忡忡］(名、副) うれふるさまにいふ語。「憂心一」。
〔ちゆう-ちゆう〕(名、副) ㊀雀又は鼠などの鳴聲。轉じて雀又は鼠の稱。(小兒の語)。㊁汁などを吸(ス)ふ音にいふ語。
(ちゆう-ちゆう)［重重］(名、副) かさね〴〵。たび〴〵。
(ちゆう-ちよく)［忠直］(名) まめやか。りちぎ。
(ちゆう-ちん)［重鎭］(名) おもきおさへ。又、一方のかしら。
(ちゆう-つゐはう)［中追放］(名) 追放の條を見よ。
ちゆう-づめ［重詰］(名) 料理などを重箱につめこむこと。又、其料理。
(ちゆう-つゐはう)［重追放］(名) 追放の條を見よ。
(ちゆう-てい)［廚丁］(名) めしたき男。又、料理方。
(ちゆう-てい)［中庭］(名) なかには。
(ちゆう-てい)［忠貞］(名) 心根のまめやかにして行爲のたゞしきこと。
(ちゆう-てい)［住邸］(名) すまひ。やしき。
(ちゆう-てい)［重體］(名) 容體のおもきこと。
(ちゆう-てん)［中天］(名) ㊀なかぞら。空中。㊁天の中心。
(ちゆう-てん)［沖天］(名) 天にひひること。「一の勢」。
(ちゆう-てん)［重典］(名) おもき制度又は儀式。
(ちゆう-てん)［重點］(名)【理】槓杆にて動かさんとする物體のかゝる點。
(ちゆう-と)［中途］(名) なかほど。半途。中頃。
(ちゆう-ど)［重土］(名)【化】酸化「バリウム」の稱、水に溶(ト)け易く、性質は生石灰に類似す。
(ちゆう-とう)［中等］(名) 上等又は高等と下等又

は初等との間。――けういく［中等教育］(名)「ちゆうがくけういく」(中學教育)に同じ。
(ちゆう-とう)［柱棟］(名) ㊀はしらとむなぎと。㊁はしらとむなぎとに比すべきほどのたのみとなるもの。「國家の一」。
(ちゆう-とう)［柱頭］(名)【植】雌蕊の頭部。
(ちゆう-とう)［仲冬］(名) 陰暦十一月の異稱。
(ちゆう-どう)［冲童］(名) こども。
(ちゆう-どく)［中毒］(名) 飲食又は身體に塗抹するもの、毒性に感じて、病氣をかもすこと。どくにあたること。どくあたり。
〔ちゆうと-はんぱ〕［中途半端］(名) 物事の完結せず又は十分ならずして、何等の效もなき狀態。
(ちゆう-どほり)［中通］(名) ちゆうぐらゐ。
(ちゆう-とん)［駐屯］(名) 軍隊が其處に陣營を構(カマ)へて屯在すること。――ぐん［駐屯軍］(名) 其地に駐屯してある軍隊。「韓國一」。
┼ちゆう-なごん［中納言］(名) 古昔、太政官の重職の一、令外の官にして掌るところ大納言に近し、正と權とあり。なかのものまうすつかさ。
(ちゆう-にかい)［中二階］(名) 普通の二階よりは稍や低く平屋よりは稍や高きかまへの二階、通常其下には住室の設けなし。
(ちゆう-にく)［中肉］(名) 人の身體の肉つきの、肥えてもあらず瘦(ヤ)せてもあらず程のよきこと。
(ちゆう-にち)［中日］(名)【佛】彼岸七日間の正中の日、即ち、春分及秋分の當日。
(ちゆう-にち)［重日］(名) 陰暦にて、巳亥の日の稱、
(ちゆう-にふ)［注入］(名) ㊀そゝぎいるゝこと。つぎこむこと。㊁【敎】兒童の敎育上、物事の記憶と諳誦とによりて、其知識を增長せしめんとすること。開發の對。――しゆぎ［注入主義］(名)【敎】敎育上の二大主義の一、即ち注入を以て敎育法の本旨となすもの。
(ちゆう-にん)［仲人］(名) ㊀仲裁する人。㊁なかだち。(中保)。
(ちゆう-にん)［住人］(名) 其土地に住(ス)む人。
(ちゆう-にん)［重任］(名) 重大なる任務。おもきつとめ。おもきうけもち。
(ちゆう-ねん)［中年］(名) ㊀兒童と老人との間。㊁年稍や長(タ)けて後、年季奉公に入りたるもの。子養(コガヒ)の對。――もの［中年者］(名) 中年の人。
(ちゆう-のう)［中農］(名) 中農地を所有し、農夫を使役すれども自分もまた農業に從事するもの。――ち［中農地］(名) その面積大農地よりは狹く小農地よりは廣き耕作地、即ち中農の所有地。
ちゆう-の-うち［重內］(名) 重箱の內につめたるもの。
(ちゆうのう-は)［重農派］(名)【經】「ぢゆうのうは」(重農派)に同じ。
(ちゆう-ばい)［仲媒］(名) なかうど。なかだち。
(ちゆうばい-くわ)［蟲媒花］(名)【植】雄花に止まりたる昆蟲などの身體に雄蕊の花粉附着し、其昆蟲の更に雌花に止まりて、雌蕊の柱頭に其花粉を附着するによりて、受粉の作用をなし得る花、即ち、きうり・あさがほ・あぶらな等これなり。
(ちゆうばい-しよくぶつ)［蟲媒植物］(名)【植】蟲媒花を有する植物。
(ちゆう-はう)［重砲］(名) 口徑九珊以上の火砲の稱、輕砲の對。
(ちゆう-はう)［重寶］(名) 大切なる寶物。大事なるたから。

〔ちゆう-はく〕［中白］(名) 中等の白米。
ちゆう-ばこ［重箱］(名) 食物を入れ盛(モ)る器、方形にして、同形のもの數個組み重なるやうにつくるを通常とすれども、また一個なるもあり、多くは漆器にして蒔繪などを置く。(食櫃)。――ざかな［重箱肴］(名) 重箱にもり入れたる肴。〔――づら［重箱面］(名) 重箱の如く方形なるかほ。――よみ［重箱讀］(名) 重箱の「ぢゆう」は音にして「はこ」は訓(ヨミ)なるが如き、音と訓とを混同する讀方の稱。〔――のすみをやうじでほじくる〕すみからすみまで干渉するにいふ。
(ちゆう-ばつ)［誅伐］(名) 其罪をたゞし、兵を以てこれをうつこと。
(ちゆう-ばつ)［誅罰］(名) しおきに行ふこと。
(ちゆう-ばつ)［重罰］(名) おもき罰。
ちゆう-はば［中幅］(名) 大幅と小幅との中間のもの、通常一尺二三寸位なり。――おび［中幅帶］(名) 中幅の布帛にて仕立てたる帶、十三四歳の女子の結ぶもの。
〔ちゆう-はん〕［中半］(名) はんぱ。はんと。
(ちゆう-はん)［重犯］(名) おもき犯罪。
(ちゆう-はん)［重版］(名) 他人の出版物をひそかに出版すること。
(ちゆう-ひ)［忠婢］(名) 忠義なる下女。
(ちゆう-ひ)［廚婢］(名) 臺所の事をする下女。
(ちゆう-ひつ)［駐蹕］(名) ㊀(さきばらひをとゞむる意)君王の行幸中にとゞまりたまふこと。
(ちゆう-ひやう)［重病］(名) おもきやまひ。大病。
(ちゆう-ひん)［中品］(名) ちゆうくらゐの品。
(ちゆう-ぶ)［中部］(名) まんなかの部分。
〔ちゆう-ぶ〕［中風］(名) 次條に同じ。

(ちゆう-ぶう)［中風］(名) 腦をめぐれる血管破れて溢血するより生ずる病氣、或は全身或は半身或は一部局の痲痺して感覺のなくなるもの。中氣。
(ちゆう-ふく)［中腹］(名) 山のいたゞきとふもととの間。「山の―」。
(ちゆう-ふく)［重複］(名) 「ちようふく」に同じ。
(ちゆう-ふん)［忠憤］(名) 忠義の心よりおこるいきどほり。
(ちゆう-へい)［駐兵］(名) 兵をとゞむること。又、とゞまりたる兵。
(ちゆう-へい)［重幣］(名) おもき幣物。たふとき幣物。
(ちゆう-ぼく)［忠僕］(名) 忠義なるしもべ。
(ちゆう-ぼん)［中本］(名) ㊀小菊紙に摺(ス)りて其まゝの大きさに仕立てたる書物。㊁轉じて、人情本の異稱。
(ちゆう-みん)［住民］(名) 其土地に住(ス)まへる民。居民。
ちゆう-むかし［中昔］(名) 「ちゆうこ」(中古)に同じ。
(ちゆう-めつ)［誅滅］(名) うちほろぼすこと。ころしたやすこと。
(ちゆう-もく)［注目］(名) 目をつくること。
(ちゆう-もつ)［重物］(名) 大切なるもの。
ちゆう-もとゆひ(中元結)(名) 「ひらもとゆひ」の一名。(御殿詞)。
(ちゆう-もん)［中門］(名) 高貴の屋敷の外門と寢殿との間にある門。
(ちゆう-もん)［註文］(名) ㊀あつらへもの、條件、又、其書付。㊁製作を依賴すること。あつらふること。㊂斯くなさん又は斯くあれかしと期待すること。㊃(掛金請求の書付。(中國邊の方言)。 ―・とり［註文取］(名) 方々をかけまはりてあつらへものを聞き出すこと、又、其事を擔當する人。

(ちゆう-やう)［仲陽］(名) 「ちゆうしゆん」(仲春)に同じ。
(ちゆう-やく)［重役］(名) ㊀おもき役目。頭立つ役目、又、其人。㊁特に銀行會社などにて、社長・取締役・支配人・監査役等の稱。 ―・くわいぎ［重役會議］(名) 重役が其擔當せる事務上につきてなす會議。
(ちゆう-ゆ)［重油］(名) 【化】一・二乃至一・三の比重を有する粘質の石油。
(ちゆう-ゆう)［忠勇］(名) 忠義に厚く勇氣に富むこと。又、忠義と勇氣と。
(ちゆう-よう)［中庸］(名) 偏頗なく過不及なき中正の道。
(ちゆう-よう)［重用］(名) おもき地位におきてつかふこと。おもく用ふること。
(ちゆう-らう)［中老］(名) ㊀昔時、武家にて家老の次席の重臣。㊁昔時、武家の奧向にて老女の次席の女。
(ちゆう-らふ)［中臈］(名) ㊀後宮などにて、上臈の次席の人。㊁京侍。
(ちゆう-らふ)［蟲蠟］(名) いぼたらふ。
(ちゆう-りう)［中流］(名) ㊀水流のなかほど。河のまなか。㊁中等の地位。中等の階級。 ―・しやくわい［中流社會］(名) 中流の社會。 ―・に ふねをうしなへば いっこ もせんきん［中流失舟一壺千金］(名) (瓠は水をわたるとき腰につくるふくべの稱)大危難に際しては、僅かのたよりも平時に比べて幾層倍の價値あるにいふ。
(ちゆう-りく)［誅戮］(名) 法によりて殺すこと。罪をたゞしてころすこと。
(ちゆう-りつ)［仲立］(名) ㊀あひだにあること。なかにはさまること。㊁なかだち。ちゆうにん。

(ちゆう-りつ)［中立］(名) ㊀相敵對せる雙方の何れにも味方し若しくは反對せざること。㊁局外中立。 ―・こく［中立國］(名) 局外中立國又は永世中立國の稱。 ―・は［中立派］(名) 何れの黨派にも屬せざる一派。 ―・ふへん［中立不偏］(名) 中立してかたよらざること。
(ちゆう-りやう)［忠良］(名) 心根のすなほにしてわだかまりのなきこと。忠義の心厚くして善良なること。「―なる臣民」。
(ちゆう-りやう)［柱梁］(名) はしらとうつばりと。轉じて、はしらともうつばりとも賴まるゝもの。
(ちゆう-りやう)［重量］(名) ㊀【理】物體の重き程度、即ち其物體が地心に向つて引かるゝ力の程度。おもさ。㊁はかりにかけてはかりたるおもさ。かけめ。
(ちゆう-りやく)［中略］(名) 文句の上と下とを記して、其中間をはぶくこと。
(ちゆう-りよく)［重力］(名) 【理】地球が地球上の物體を引く力。 ―・たんゐ［重力單位］(名) 【理】重力を標準とする力の單位、即ち單位の質量の重さを以て力の單位とするもの、例へば一貫のおもさ又は一瓩のおもさ等これなり。
(ちゆう-れつ)［忠烈］(名) 忠義の極めてあつきこと。すぐれて忠義なること。
(ちゆう-れん)［註連］(名) しめかざり。
(ちゆう-れん)［駐輦］(名) 天子の御車をとゞめ給ふこと。
(ちゆう-れん)［柱聯］(名) はしらかけ。
(ちゆう-ろ)［中呂］(名) ㊀十二律の一。㊁陰暦四月の異稱。
(ちゆう-ろく)［重祿］(名) たかき知行。おほきふち。
(ちゆう-ろく-みやく)［中肋脈］(名) 【植】葉の

中央に貫通したる脈。
(ちゆう-わ)［中和］(名) ㊀偏頗なき性德の發して過不及なき義理にあたること。㊁【理】等量の陰陽兩電氣の相あひて、電氣性を顯せざるに至ること。㊂【化】酸性物が鹽基性物にあひて、酸性若しくは鹽基性を顯せざるやうになること。㊃異性の物質相融合して、おの〳〵其特徵若しくは作用を喪失すること。 ―・ねつ［中和熱］(名) 【化】酸と鹽基との中和するときに發する熱。
(ちゆう-ゐ)［中尉］(名) 第二位の尉官、大尉の下にして少尉の上なるもの。
(ちゆう-ゐ)［重位］(名) おもきくらゐ。たかきくらゐ。
(ちゆう-をく)［住屋］(名) すみか。すまひ。
(ちゆっ-ちよく)［黜陟］(名) 官職をのぼすとおとすと。ちっちよく。
ち-よ［千代］(名) ちとせ。千年。(千載)。
ち-よ［千夜］(名) 多數の夜。
(ちよ)［著］(名) ㊀いちじるしきこと。あらはれたること。㊁のべつくること。あらはすこと。「某氏の―」。
(ちよ)［儲］(名) ㊀たくはへ。㊁よつぎ。「―君」。
(ちよ)［除］(名) ㊀のぞくこと。㊁わりざん。
(ちよ)［女］(名) ㊀をんな。㊁むすめ。「某氏の―」。㊂廿八宿の一。
(ちよ-い)［苧衣］(名) かたびら。
(ちよ-い)［女醫］(名) 女子にして醫術を業とするもの。をんないしや。
(ちよ-いう)［女優］(名) をんなやくしや。
(ちよい-ちよい)(名、副) 度しげからざれど絶えざるさまにいふ語。をり〳〵。
(ちよい-と)(副) 「ちよっと」に同じ。
(ちよい-と)(感) 人を呼びかくる聲。

(ちよう)［寵］(名) ㊀殊の外のかはゆがり、特別のいつくしみ。㊁さかゆること、時めくこと。㊂目上の人の心にかなふもの、上のきにいり。
(ちよう)［徵］(名) ㊀よびだし。めし。㊁とひ。たづね。㊂きざし。兆候。
(ちよう-あい)［寵愛］(名) 特別にいつくしみ愛すること。「殿の―」。
(ちよう-あく)［懲惡］(名) 惡をこらすこと。
(ちよう-えい)［塚塋］(名) つか。はかば。
(ちよう-えい)［寵榮］(名) 特別の恩愛を受けて時めきさかゆること。
(ちよう-えき)［懲役］(名) 【法】重罪の主刑の一、即ち重懲役及輕懲役の稱。 ―・ぢやう［懲役場］(名) 懲役に處せられたる囚徒を拘禁し定役に服せしむる場所。 ―・にん［懲役人］(名) 懲役の處刑を受けて定役に服する囚徒。 ―・ば［懲役場］(名) 「ちようえきぢやう」に同じ。
(ちよう-おう)［徵應］(名) 善惡の所行に應じて其しるしのあらはるゝこと。
(ちよう-おん)［寵恩］(名) 寵愛の恩。
(ちよう-かい)［懲戒］(名) ㊀こらし戒(イマシ)むること。㊁不正又は不當の所爲に對して制裁を加ふること。 ―・けん［懲戒權］(名) 【法】懲戒を行ふ權力。 ―・さいばん［懲戒裁判］(名) 【法】或官吏に懲戒處分を加ふべき形跡ある時、其實否を審判し、其實なる場合には懲戒處分を宣告する裁判。 ―・さいばんしよ［懲戒裁判所］(名) 懲戒裁判を行ふ國家の機關。 ―・ぢやう［懲戒場］(名) 「ちやうぢやう」(懲治場)に同じ。 ―・しよぶん［懲戒處分］(名) 【法】懲戒を加ふる國家の處分。 ―・めんしよく［懲戒免職］(名) 懲戒によりて命ぜらるゝ免職。

(ちよう-かう)［寵幸］(名) 特別にかはゆがらるゝこと。
(ちよう-きう)［重九］(名) 九月九日の節句、重陽。菊節。
(ちよう-ぐう)［寵遇］(名) 寵愛の待遇。
(ちよう-くわい)［徵會］(名) よびあつむること。よせあはすること。
(ちよう-けん)［寵眷］(名) 特別になさけをかけらるゝこと。
(ちよう-ご)［重五］(名) 五月五日の節句、端午。
(ちよう-こう)［徵候］(名) きざし。しるし。
(ちよう-こん)［重婚］(名) 「ぢゆうこん」に同じ。
(ちよう-さい)［冢宰］(名) 家臣の長。からう。
(ちよう-さん)［重三］(名) 三月三日の節句、上巳。
(ちよう-ざん)［重塹］(名) 幾重にも設けめぐらしたるほり。
(ちよう-し)［徵士］(名) ㊀朝廷又は官府が、諸方よりめし出す人士。㊁明治の初年に、朝廷に召し出されし諸藩の人士の特稱。
(ちよう-し)［寵賜］(名) 特別のめぐみのたまもの。
(ちよう-じ)［寵兒］(名) ㊀とりわけかはゆがるこども。㊁時めく人。
(ちよう-しう)［徵收］(名) 官府が人民より財物をとりたつること。 ―・はうこくしよ［徵收報告書］(名) 收入官吏が、徵收の結果を管理廳に報告する文書、毎月作製するもの。
(ちよう-しふ)［徵集］(名) ㊀めしあつむること。㊁現役兵を召集すること。 ―・いうよ［徵集猶豫］(名) 師範學校・中學校・官立學校(小學校及別科を除く)又は文部大臣が中學程度以上と認めたる學校又は文部大臣の認可を經たる專門學校等の在學者、若しくは外國(韓國を除く)に在留する兵役義務者に對し、本人の願によ

り、在學者は二十八歳まで在留者は三十二歳まで、普通兵役徴集の猶豫せらるゝと、其期限過ぐれば、普通抽籤によらずして徴集せらるゝものとす。——えんき[徴集延期](名)徴集にて身體檢査の當時、身體未發達若しくは病中乃至病後甚しく衰弱して徴集に適せざるもの若しくは公權の剝奪又は停止の附加刑ある重輕罪の刑事被告人、若しくは其徴集せらるゝときは家族自活すると能はざる者の徴集を一年延期すること。——めんぢよ[徴集免除](名)徴集延期を受けたるものが、其次年若しくは三個年目に猶は其事情の繼續してある場合に徴集を免除せらるゝこと。

(ちよう-しやう[寵賞](名)特別に厚き賞與。

(ちよう-しやう[重賞](名)厚き賞與。

(ちよう-しやう[徴償](名)㊀つくのひをもとむると。つくのはすると。㊁徴償處分をなすと。——しよぶん[徴償處分](名)【法】犯罪人に、其刑事裁判の費用又は贓物の還給若しくは損害の賠償等を命ずる處分。

(ちよう-しよう[徴證](名)しるし。あかし。

(ちよう-しよく[寵辱](名)かはゆがらるゝとはづかしめらるゝと。時めくとはぢ多きと。

ちよう-す[徴す](他、さ變)㊀めす。よびだす。㊁證す。あかす。㊂とふ。たゞす。㊃をさむ。とりあぐ。㊄もとむ。

ちよう-す[寵す](他、さ變)なさけをかく。めぐむ。いつくしむ。かはゆがる。

(ちよう-ぜい[徴税](名)租税を徴收すると。又、徴收する租税。

(ちよう-せう[徴召](名)めしだすと。よびだすと。

(ちよう-せう[徴招](名)よびまねくと。

(ちよう-せう[寵招](名)特別の待遇を以てまねくと。「卿—に預り」。

(ちよう-せふ[寵妾](名)氣に入りのめかけ。

(ちよう-せん[重選](名)かさねてえらばるゝと。

(ちよう-そ[重祚](名)一旦位を退(ソ)きたる帝王が、更に再び位に即(ツ)き給ふと。(複辟、復祚)。

(ちよう-ち[懲治](名)こらして善人とならしむると。こらすと。——かん[懲治監](名)【法】不論罪にかゝる幼者又は瘖啞者を懲治するために入れおく監獄。——ば[懲治場](名)前條に同し。

(ちよう-てい[重訂](名)再度の改正。

(ちよう-てう[徴兆](名)しるし。きざし。

(ちよう-てつ[澄徹](名)すみてすきとほると。

(ちよう-でふ[重疊](名)㊀かさなると。たゝまりつむと。㊁此上もなき滿足。

(ちよう-にん[重任](名)任滿ちて後、かさねて其職に任ぜらるゝと。

(ちよう-ねん[重年](名)年齡をかさぬると。又年期をかさぬると。

(ちよう-はう[重寶](名)㊀「ぢゆうはう」に同じ。㊁便利なると。利用多きと。

(ちよう-はつ[徴發](名)戰時又は事變若しくは行軍·演習等にて、軍需を其地の人民に賦課して徴收すると。

(ちよう-ばつ[懲罰](名)㊀後來をこらして罰を加ふると。㊁不正又は不當なる行爲に對して、制裁を加ふると。——ゐゐん[懲罰委員](名)議員の懲罰に關する事實を調査する議院內の委員。

(ちよう-はん[重犯](名)かさねて罪をおかすと。

(ちよう-ふく[重複](名)同一なるものごとのかさなると。

(ちよう-へい[寵嬖](名)氣にいり。

(ちよう-へい[徴聘](名)禮をあつくしてまねきよぶと。

(ちよう-へい[徴兵](名)㊀國家が國中一般の壯丁卽ち兵役義務者を強制的に徴集して、一定の期間內兵役に服せしむると。㊁徴兵適齡又は徴兵檢査の略言。——きひ[徴兵忌避](名)【法】徴兵適齡者が兵役を免(マヌカ)れんため、身體を毀傷し疾病を作爲し其他詐僞の行爲をなし若しくは逃亡し潜匿したる等の罪。——けんさ[徴兵檢査](名)徴兵官が每年各地に於て、其地方の徴兵適齡の壯丁を召集して、兵役に服せしむる資格の有無を檢査すると、體格檢査は其おもなるものなり。——てきれい[徴兵適齡](名)兵役義務者が、その十二月三十一日迄に滿二十歳に達する年にして卽ち當年の徴兵檢査に出頭すべき年齡に適當せると。——くわん[徴兵官](名)徴兵の事務を取扱ふ官吏。

(ちよう-へき[徴辟](名)上にめされて官職をさづけらるゝと。

(ちよう-ぼ[徴募](名)めしつのると。徴集。

(ちよう-やう[重陽](名)《九を陽數となすに出づ》九月九日の節句。重九。

(ちよう-よう[懲膺](名)うちこらすと。うつと。

(ちよう-り[重利](名)【數】「ふくり」(複利)に同じ。

[ちよう-ろ[女郎](名)あそびめ。遊女。

ちよう-ろぎ[草石蠶](名)【植】唇形科に屬する草、高さ數尺、葉は對生し、花は淡紫色を呈す、根は蠶の形に似て食用とすべし。ちよろぎ。(甘露子)。

(ちよう-ゐ[重圍](名)幾重にもとりまきたるかこひ。「—を脫す」。

(ちよか[瓶](名)土瓶などすべて液體を盛る器の汎稱。ビン。(薩摩地方の方言)。

(ぢよ-がい[除害](名)害惡をのぞくと。

(ぢよ-がう[除號](名)【數】除法の符號、卽ち÷の稱。

(ぢよ-がく[女學](名)女子のをさむべき學問。

(ぢよ-がく[女樂](名)女子の奏する音樂。又、音樂を奏する女子。

(ぢよ-がくかう[女學校](名)女子に教育を施す學校。

(ぢよ-がくせい[女學生](名)女子の學生。女學校の生徒。

ちよ-がみ[千代紙](名)面に花紋を摺(ス)り出したる紙。

(ぢよ-かん[女監](名)女囚を收容する監房。

ちよ-き[猪牙](名)「ちよきぶね」の略言。——ぶね[猪牙船](名)明曆の頃江戸にて造られたる稍や細長き形の川舟、舟行はやきもの。ちよき。(梭舡)。

[ちよきぶね]

++ちよ-き[千代木](名)【植】松の異稱。

(ぢよ-き[除棄](名)のぞきすつると。

(ちよき-ちよき(名、副)ものをきざむ音又はそのさまにいふ語。

(ぢよ-きよ[除去](名)のぞきさると。

(ちよ-きん[貯金](名)㊀金錢をたくはふると。㊁郵便貯金の略稱。——かよひちやう[貯金通帳](名)郵便貯金をしたる人に、其取扱局より渡しおきて、預入又は引出の都度其金額を記入する通帳。

(ちよく[勅、敕](名)天子の親しく命令を下し給ふと。天子の親しく意思を發表し給ふと。みことのり。

(ちよく[直](名)㊀たゞしきと。なほきと。すぐなると。㊁たゞしきみち。たゞしきおこなひ。たゞしきもの。「友—」。㊂たうばん。とのゐ。宿直。㊃氣がるなると。たかぶらざると。「—な人」。

ちよ-く[猪口](名)《鐘の福建及朝鮮音に出づといふ》形小さくして、下窄(スボ)み上開きたる陶製の杯。ちよこ。(琖、鍾子、酒鍾)。

(ちよく-い[勅意](名)みことのりの御趣意。

(ちよく-いん[直音](名)「ちよくおん」に同じ。

(ちよく-おん[直音](名)【文法】拗音及促音以外の音。

(ちよく-か[直下](名)㊀すぐ下にあたる部分。ました。まっした。「赤道—」。㊁たゞちにくだると。ひたおしにくだると。

(ちよく-かう[直航](名)途中にて寄港せず、直に目的地へ航行すると。

(ちよく-かう[直行](名)㊀途中にて乘換又は停宿せず、其まゝすぐに行進すると。㊁心のまゝをあらはし行ふと。

(ちよく-かく[直角](名)【數】互に垂直なる二直線のなす角、卽ち九十度をなしたる角。——さんかくけい[直角三角形](名)【數】一つの角が直角なる三角形。

(ちよく-かく[直覺](名)「ちよくくわん」(直觀)に同じ。——せつ[直覺說](名)「ちよくくわんせつ」(直觀說)に同じ。

(ちよく-がく[勅額](名)天子の御親筆の額面。

(ちよく-かく-たう[直角壔](名)【數】側稜が端面に垂直なる角壔。

(ちよく-かつ[直轄](名)直接の支配。直接の管轄。——がくかう[直轄學校](名)主務省の直轄に屬する學校。

(ちよく-かん[勅勘](名)勅命に由りての勘當。

(ちよく-かん[直諫](名)うちつけに諫言すると。直接に其非をあげていさむると。

(ちよく-きよ[勅許](名)勅命の免許。(欽准)。

ちよく-きりくち[直截口](名)【數】角壔の側稜に垂直なる平面による截口。又、圓壔の母線に垂直なる平面による截口。

(ぢよ-ぐわい[除外](名)其範圍の外におくと。其規定の外におくと。とりのけ。——れい[除外例](名)除外したるためし。又、除外すべきためし。

(ちよく-くわん[直管](名)「ちよくかつ」(直轄)に同じ。

(ちよく-くわん[直觀=Intuition](名)㊀【哲】推理又は經驗等によらずして、直接に知得識別すると。㊁【數】感官の作用により、直接に外物の知識を得ると。——せつ[直觀說=Intuitionism](名)㊀【倫】吾人は先天的に道德的意識を具有し一切の善惡を直觀すといふ倫理說。㊁【哲】直觀によりて絕對の認識に到達すべしといふ認識說。

(ちよく-ぐわん[勅願](名)天子の御祈願。——しよ[勅願所](名)天子の御祈願あらせらるゝ社寺の稱。

(ちよく-けい[直徑](名)【數】物體の中心を通過し其表面にて終(ヲ)はる有限直線。二點間に引く直線の距離。圓·球·楕圓等の如き中心を有する圖形の中心を通過し且つ其圖形の周にて終はる有限直線。さしわたし。

(ちよく-けい[直系](名)【法】祖先より直線的に繼續して其人に至りたる系統。又、其人より直線

的に繼續して後裔に至る系統。傍系の對。——-いんぞく［直系姻族］(名)【法】或人と其人の配偶者の直系血族との關係。——-けつぞく［直系血族］(名)【法】直系尊屬及直系卑屬の稱。——-しん［直系親］(名)【法】或人と其人の直系血族及直系姻族との關係。——-しんぞく［直系親族］(名)【法】或人と直系親あるものゝ稱。特に、六親等内の直系血族と三親等内の直系姻族との稱。——-そんぞく［直系尊屬］(名)【法】祖先より直線的に繼續して其人に至る間の血族即ち其人のよりて生れ出でたる直系血族に屬する尊屬、例へば父母・祖父母等の如し。(尊屬の條を見よ)。——-ひぞく［直系卑屬］(名)【法】其人より直線的に降下して後裔に至る間の血族、即ち其人によりて出づる直系血族に屬するもの、例へば、子・孫等の如し。(卑屬の條を見よ)。

(ちよく-げん［直言］(名) ❶憚(はゞか)らずにまつすぐにいふこと。かざらずにありのまゝにいふこと。❷言の絶對無條件なること。——-めいれい［直言命令＝Categorical imperative］(名)【倫】絶對無條件に服從を命令する道德法。

(ちよく-ご［勅語］(名) 天子ののりたまひたる御言。みことのり。「敎育—」。

(ちよく-こん［直根］(名)【植】牛蒡などの根の如く、主根の支根より長大なるもの。

(ちよく-さい［勅裁］(名) 天子親らの御裁決。(天裁)。

(ちよく-さい［勅祭］(名) 勅命の祭事。

(ちよく-さい［直裁］(名) ❶たゞちに裁決すること。親ら裁決すること。❷「ちよくせつ」(直截)に同じ。

(ちよく-さん［勅參］(名) 勅任の參事官。

(ちよく-さんかくけい［直三角形］(名)【數】「ちよくかくさんかくけい」(直角三角形)に同じ。

(ちよく-し［勅使］(名) 勅命を傳ふる使者。(天使)。

(ちよく-し［勅旨］(名) みことのりの御旨意。

(ちよく-し［直視］(名) 視線を其ものに眞直にそゝぐこと。みつむること。

(ちよく-しや［直寫］(名) 其まゝうつすこと。

(ちよく-しや［直射］(名) ❶まともに射(い)ること。まともにさすこと。❷彈道の殆ど直線をなすこと。

(ちよく-じやう［直上］(名) ❶すぐ其上。まうへ。❷ひたおしに上(のぼ)ること。

(ちよくじやう-けいかう［直情徑行］(名) 心のまゝをかざらずつゝまず、これを擧動にあらはすこと。

(ちよくしや-はう［直射砲］(名) 彈道の殆ど直線をなす砲、僅少の俯仰角度にて發射するもの。

(ちよく-じゆ［勅授］(名) 天子親しく位を授け給ふこと、古昔は五位以上に限る、現今は從四位以上にして、宮内大臣これを奉行す。

(ちよく-しよ［勅書］(名) 勅命の文書。(詔書)。

(ちよく-しるゐ［直翅類］(名)【動】昆蟲類の一目、變態不完全にして、喙(くち)は咀嚼する口器を有す、翅(はね)は直くして脈多く其形狀差異あり、即ちとんぼ・かげろふ・ばつたなどこれなり。

(ちよく-しん［直進］(名) たゞちにすゝむこと。ためらはずにすゝむこと。まつすぐに進むこと。

(ぢよく-せ［濁世］(名)【佛】濁(にご)りたる世。この人間世界。

(ちよく-せい［直請］(名) ぢかにねがふこと。

(ちよく-ぜい［直稅］(名) 「ちよくせつぜい」(直接稅)に同じ。

(ちよく-せう［勅詔］(名) みことのり。

(ちよく-せつ［直接］(名) ❶間に他のものなくして直に相對すること。❷さしつけ。うちつけ。ぢか。——-こくぜい［直接國稅］(名) 直接稅の性質なる國稅、例へば地租・所得稅の如きこれなり。——-ぜい［直接稅］(名) 稅を納(をさ)むるものと稅を負擔するものとの同一人なる租稅、例へば地租又は所得稅の如く、土地を有する人又は所得ある人が、これを納めまたこれを負擔するものをいふ。間接稅の對。——-せんきよ［直接選擧］(名) 一般の選擧人の選擧によりて選擧の結了するもの。間接選擧の對。——-だんぱん［直接談判］(名) 仲人を立てず、ぢかに先方と談判すること。——-とりひき［直接取引］(名) 仲買人の手を經(へ)ず、ぢかに先方と取引をなすこと。——-りかう［直接履行］(名)【法】義務の履行を怠りたるものに對し、裁判所これが履行を命ずること。

(ちよく-せつ［直截］(名) 直覺的に辨識すること。たゞちに裁斷すること。「簡明—」。

(ちよく-せつ-はふ［直說法］(名)【文法】動詞の活用をありのまゝに言ひ切るもの、例へば、「飄る」「行く」などの類。終止言。

(ちよく-せん［勅宣］(名) みことのり。

(ちよく-せん［勅撰］(名) 天子親ら撰作したまふこと。又勅命によりて撰作すること。

(ちよく-せん［勅選］(名) 天子親ら選拔したまふこと。——-ぎゐん［勅選議員］(名) 天皇親ら勳勞又は學識ある滿三十歲以上の男子中より選拔して、任命せらるゝ貴族院議員、任期は終身なりとす。

(ちよく-せん［直線］(名) ❶【數】最も簡單なる線にして、其中何れの部分を取りてこれを他の部分

の上に如何樣に置くとも、其二點が必ず其上に落つべきもの、即ち、何れの部分も全く相重なるものゝ稱。又、有限直線の略言。❷まつすぐのすぢ。まつすぐの方向。——-けい［直線形］(名)【數】「ちよくせんへいめんけい」に同じ。——-へいめんけい［直線平面形］(名)【數】直線を以て圍みたる平面。

(ちよく-ぜん［直前］(名) ❶ためらはずに進み出づること。すぐにすゝみ出づること。❷すぐまへ。

(ちよく-だう［直道］(名) ❶なほきみち。すぐなるみち。❷自家の信ずる道を曲げずして行ふこと。

(ちよく-たふ［直答］(名) ぢかに其人にこたふること。又、即座にこたへをなすこと。

(ちよく-たふ［勅答］(名) ❶天子の御こたへ。❷勅命に答へ奉ること。

(ちよく-ちやう［直腸］(名) 大腸の末端、肛門に向つて開口するもの。

(ちよく-ぢやう［勅諚］(名) 天子のおほせ。みことのり。勅命。

(ちよく-ちゆうたい［直柱體］(名)【數】側稜が底に垂直なる柱體。

(ちよく-つう［直通］(名) ❶一の地點より他の地點に向け異狀なしに通ずること。❷其列車が直に某地に通ずること。——-れつしや［直通列車］(名) 中間にて乘換なしに某地に通ずる列車。

(ちよく-ていけい［直梯形］(名)【數】梯形の平行せざる二邊の中の一邊が平行邊に垂直なるもの。

(ちよく-にん［勅任］(名) ❶天皇親ら或人を官に任ぜらるゝこと。❷「ちよくにんくわん」の略言。——-ぎゐん［勅任議員］(名) 勅選議員及多額納稅者議員の總稱。——-くわん［勅任官］(名) 天皇の御發意にて、其辭令書に御璽を鈐し、内閣總理大臣これを奉行して任命せらるゝ官吏、即ち一等二等の高等官これなり。

(ちよく-ひつ［直筆］(名) ❶ふでをまつすぐに持ちて書くこと。❷事柄をありのまゝにかきあらはして、すこしもつゝみかくさざること。

(ちよく-ひつ［勅筆］(名) 天子の御手筆。宸筆。(宸翰)。——-りう［勅筆流］(名) 書道の一派、後圓融天皇の宸筆を祖とするもの。

(ちよく-ふう［勅封］(名) 勅命に由りての封印。

(ちよく-めい［勅命］(名) 天子が特定の人又は機關に命令を下さるゝこと。みことのり。ちよくぢやう。「—を受けて外國に使す」。　　「ゝと。

(ちよく-めん［勅免］(名) 勅命によりてゆるさる

(ちよく-もん［勅問］(名) 天子親らの御たづね。

(ちよく-やく［勅約］(名) 天子親らの御約束。

(ちよく-やく［直譯］(名) 外國語の文章の文句其儘の翻譯。意譯の對。——-たい［直譯體］(名) 文章の體裁が直譯風なるもの。

(ちよく-ゆ［勅諭］(名) 天子親しく人民にさとしつげたまふこと。

(ちよく-りう［直流］(名) ❶まつすぐのながれ。❷【理】方向の一定せる電流。

(ちよく-りつ［直立］(名) ❶まつすぐに立つこと。❷山などのけはしくして高きこと。「—數千丈」。❸まつすぐの高さ。❹垂直。——-せん［直立線］(名)【數】水平面に垂直なる直線。——-めん［直立面］(名)【數】水平面に垂直なる平面。

(ちよく-れい［直隷］(名) 直接に隸屬すること。天子に隸屬すること。

(ちよく-れい［勅令］(名)【法】天皇の親裁して公布したまふ命令、内閣に於て起草し又は各省大臣に於て案を具して内閣に提出し、上奏して裁可を請ひ、親署の後御璽を鈐し、内閣總理大臣年月日を記入して、主任大臣と倶にこれに副署す、其各省專任の事務に屬するものは、主任大臣年月日を記入してこれに副署するものとす。

(ちよく-ろ［直路］(名) すぐなるみち。

(ちよく-ろ［直廬］(名) 古昔、禁中宿直の官司。又、攝關大臣若しくは大納言などの休息所。

(ちよく-ろくめんたい［直六面體］(名)【數】各面の矩形なる平行六面體。

(ちよく-わ［直話］(名) 當人よりぢかにきゝたるはなし。

(ちよく-わう［直往］(名) ためらはずにゆくこと。たゞちにゆくこと。——-まいしん［直往邁進］(名) ためらはずおそれずすゝみ行くこと。

(ぢよ-くわう［女皇］(名) 女性の皇帝。

(ぢよ-くわん［女官］(名) 宮中に仕ふる女。にようくわん。女房。

(ちよく-ゑんすゐ［直圓錐］(名)【數】直角三角形の直角に隣る一邊を軸として一回轉せしむるとき生ずる立體。

(ちよく-ゑんたう［直圓壔］(名)【數】矩形の一邊を軸として一回轉せしむるとき生ずる立體。

(ちよ-くん［儲君］(名) 太子。又、世子。

(ぢよ-けい［女兄］(名) あね。

(ぢよ-けい［女系］(名) をんなの系統。

(ぢよ-げつ［如月］(名) 「きさらぎ」に同じ。

(ぢよ-けん［女權］(名) 婦人の權利。「—擴張」。

(ぢよけん-はんけつ［除權判決］(名)【法】公示催告にて、適當なる時期に屆出なきとき、催告者

の中立により、其請求又は權利の消滅する判決。
〔ちよ-こ［猪口］(名)「ちよく」の訛。
(ぢよ-こう［女工］(名) 女子の職工。
(ぢよ-こう-ぢやう［女工場］(名) 女子の手仕事する工場。(女紅場)。
ぢよ-こう-ば［女工場］(名) 前條に同じ。
〔ちよこざい (名) なまいきなること。小才あること。
(ぢよ-こしゆ［女戸主］(名) 女子の戸主。
〔ちよこ-ちよこ (名、副) 小さきものゝ走るさまなどにいふ語。
〔ちよこまか (名、副) 前條に同じ。
チヨコレート［Chocolate］(名)「カカオ」(二)に同じ。
(ちよ-さい［樗才］(名)《莊子に吾有大樹、人謂之樗、其大本擁腫不中繩墨、其小枝卷曲不中規矩とあるに出づ》役にたゝぬ才。
(ちよ-ざい［樗材］(名) 一前條に同じ。 二役に立たぬ材木。
(ちよ-ざい［貯財］(名) たくはへの財物。
(ちよ-ざう［貯藏］(名) 一たくはへをさむること。たくはへおくこと。 二【經】生產を助くることなくたゞものをあつめおくこと。貯蓄の對。 ——こん［貯藏根］(名)【植】主根肥大して養分澱粉を貯藏せるもの。 ——でんぷん［貯藏澱粉］(名) ジヤガタラいもなどの塊莖が貯藏せる澱粉。
(ぢよ-さう［女裝］(名) 男子が婦人のよそほひをなすこと。
(ぢよ-さう［除草］(名) 生じたる雜草をのぞき、又、土地をうちかへして雜草を生ぜしめざること。 ——き［除草器］(名) 除草に使用する農具、熊手の如きこれなり。
(ちよ-さく［著作］(名) 一文書をあらはしつくること。著述。 二【法】文藝・學術若しくは美術の範圍に屬するもの、即ち、製作、自己の思想若しくは意見を、文書・圖畫・彫刻・摸型・寫眞等によりて發表すること。 ——か［著作家］(名) 著作を業とする人。又、著作者。 ——けん［著作權］(名)【法】著作物を複製又は飜譯し若しくはこれを興行する權利。 ——しや［著作者］(名) 著作物を著作したる人。 ——ぶつ［著作物］(名) 著作者によりて著作せられたるもの。
(ちよ-し［儲嗣］(名) 太子。又、世子。
(ちよ-じ［儲貳］(名) 前條に同じ。
(ぢよ-し［女子］(名) 一をんなのこ。 二をんな。
(ぢよ-し［女史］(名) 女の學者又は女の畫工などの稱。
(ぢよ-じ［女兒］(名) をんなのこ。
(ぢよ-しう［女囚］(名) 女子の囚人。
(ぢよ-じつ［除日］(名)《舊年を除く義》おほみそか。おほつごもり。
(ちよ-しや［著者］(名) 書物を著述したる人。作者。著作者。著述者。
(ぢよ-しや［除砂］(名) 一すなをとりのぞくこと。 二養蠶にて、蠶を入れたる箙(エビラ)又は籃(ムシロ)より蠶の屑又は蠶の糞(フン)をとりのぞくこと。
〔ぢよ-しやう［女將］(名) 旅宿・待合又は飲食店などの女主人。
(ぢよ-しやうぐん［女將軍］(名) 萬事に干涉して幅(ハ)を利(キ)かす婦人の稱。
(ちよ-じゆつ［著述］(名) 書物をあらはしのぶること。書物を作りて世に出だすこと。著作。 ——か［著述家］(名) 著述を業とする人。又、著述者。 ——しや［著述者］(名) 書物をあらはしのぶる人。 ——しよ［著述書］(名) 著述したる書物。
(ちよ-しよ［著書］(名) 著作したる書物。著述書。
(ぢよ-しよく［女色］(名) 婦人の色香。婦人の容顔。「——に迷ふ」。
(ぢよ-しん［女神］(名) 女性の神。めがみ。「——の姿」。
ちよ・す（せしすする、すれ、せよ）［瀦］(他、さ變) 水をせきとめてたゝふ。
ちよ・す（せしすする、すれ、せよ）［除］(他、さ變) 一官に任ず。役目につかす。 二割算をなす。わる。 三のぞく。
(ちよ-すゐ［瀦水］(名) 水をせきとむること。又、せきとめたる水。
(ちよ-すゐ［貯水］(名) 水をたくはふること。又、たくはへたる水。 ——ち［貯水池］(名) 水をたくはふるために設けたる池。
(ぢよ-せい［女性］(名) 一女の性質。女の性狀。 二女子。婦人。
(ぢよ-せい［女生］(名) ぢよせいと。
(ぢよ-せい［女婿］(名) むすめのむこ。
(ぢよ-せいと［女生徒］(名) 女子の生徒。
(ちよ-せき［貯積］(名) たくはへつむこと。
(ぢよ-せき［除斥］(名) 一のぞきしりぞくること。 二【法】判事及書記が、或訴訟事件に就て、其職務の執行よりのぞかるゝこと。
(ぢよ-せき［除籍］(名) 戶籍より其名をのぞくこと。脫籍せしむること。
(ぢよ-せき［除夕］(名) おほみそか。おほつごもり。
(ちよ-せんせい［楮先生］(名) 紙の異稱。
(ぢよ-ぞく［除族］(名) 華士族の身分を除(ノゾ)かるゝこと。華士族の待遇を停止せらるゝこと。
(ぢよ-そん［女孫］(名) むすめの生(ウ)みたるまご。
(ちよ-だい［著大］(名) いちじるしく大いなること。
(ぢよ-たい［女隊］(名) 婦人達の一くみ。

(ぢよ-たい［除隊］(名) 現役兵が規定の期限を經過するか又は他の事由によりて、服役を免除せらるゝこと。
(ぢよ-だう［女道］(名) 女子の履行すべきみち。
(ぢよ-だつ［除脫］(名) のぞきさること。
(ちよ-たん［貯炭］(名) 石炭などをたくはふること。又、たくはへおく炭。 ——しよ［貯炭所］(名) 石炭をたくはへおく所。
(ぢよ-ち［除地］(名) 租稅を免ぜられたる土地。
(ちよ-ちく［貯蓄］(名) 一たくはふること。たむること。(儲蓄)。 二【經】財を無用に費さずして、後來の生產のためにたくはふること。貯藏の對。 三たくはへたるもの。たくはへたる財。 ——きん［貯蓄金］(名) たくはへおきたる金。 ——ぎんかう［貯蓄銀行］(名) 一種の銀行、公衆の貯金の便を圖る信用機關にして、複利の方法により、公衆の零碎なる貯蓄金をも預ることを營業とする銀行。
(ぢよ-ぢやうふ［女丈夫］(名) 男まさりの女子。
(ぢよ-ぢゆう［女中］(名) 一婦人。女子。 二仕官又は奉公する女子。「奥——」。 三はしため。下女。 ——ことば［女中詞］(名) 御殿ことば。女房ことば。 ——しゆう［女中衆］(名) 女中の人たち。
〔ちよっかい (名) 一手を出して手早く物を攫(カ)きとること。 二橫合より手を出すこと。
チヨッキ (名)《「イギリス」語、Jacket の訛》洋服の上着の下に著る短き衣服、袖なくしてたゞ腹と背とを被(オホ)ふもの。
〔ちよっきり (名、副) ちよっとなすさまにいふ語。 ——むすび (名) 手輕く結びおくこと。
〔ちよっくら (名、副) ちよっとなすさまにいふ語。 ——もち (名) こぬすびと。こそ〳〵どろぼう。
〔ちよっくり (名、副)「ちよっくら」に同じ。
〔ちよっと［一寸］(名、副) 一わづか。いさゝか。 二しばし。しばらく。 三てがるく。たやすく。 四やゝ。 ——した (形) やゝなみよりすぐれてあり。「——女」。
(ぢよ-てい［女帝］(名) 女性の皇帝。
(ぢよ-てい［女弟］(名) いもうと。
(ぢよ-てい［女貞］(名)【植】「ねずみもち」に同じ。
(ぢよ-てつ［女姪］(名) 兄弟のむすめ。めひ。
〔ちよっと［一寸］(副)「ちよっと」に同じ。
(ちよとつ-きゆう［猪突豨勇］(名)《猪はゐのしゝ、豨はゐのこ》向見ずの勇士。ゐのしゝむしや。
‡‡ちよな-ぐさ［千代榮草］(名)「わかな」の異稱。
(ぢよ-なん［女難］(名) 男子が婦人の事に因緣して災難を受くること。「今日は擂むちん——」。
(ぢよ-はふ［除法］(名)【數】一の數を他の數にて割る算法。わりざん。
(ぢよ-ふく［除服］(名) 喪服を脫すること。いみあけ。
(ぢよ-ふく［女服］(名) 婦人の服。
(ぢよ-ふじん［如夫人］(名)「によふじん」に同じ。
(ちよ-へい［楮幣］(名)「しへい」(紙幣)に同じ。
(ちよ-ぼ［樗蒲］(名)「かりうち」の條を見よ。ばくち。ばくえき。 ——いち［樗蒲一］(名) ばくえきの一種、一個の賽(サイ)にて行ふものにして、豫定の目出づれば賭金の四倍を得るものといふ。
〔ちよぼ (名) 一芝居にて、脚本の地の文を義太夫節にて語ること。「——にあはして踊る」。 二「ちよぼがたり」の略言。 ——がたり (名) 芝居にて、ちよぼを語る人。
〔ちよぼ［點］(名) しるしの點。ぽち。 ——ちよぼ (名、副) 一點のまばらに又はつゞきてあるさまにいふ語。 二「ちびちび」に同じ。
〔ちよぼくれ (名) 東京にて乞食などが、野卑なる文句に節を附け、小さき木魚を叩きながら、口早く謠(ウタ)ふもの。
(ちよ-ま［苧麻］(名)【植】「からむし」に同じ。
(ぢよ-まく-しき［除幕式］(名) 銅像の建設などに、工事終はりて後尙は其四方に蔽(オホ)ひたる幕を、日を卜(ボク)して撤去する儀式。
‡‡ちよ-み-ぐさ［千代見草］(名) 菊の異稱。
(ちよ-めい［著名］(名) 名のあらはれたること。いちじるしき名あること。
(ちよ-めい［著明］(名) いちじるしくあきらかなること。あらはれたること。
(ぢよ-めい［除名］(名) 名籍より其人の名前を除(ノゾ)くこと。又、連中の内より其人を斥(シリゾ)くること。
(ぢよ-めん［除免］(名)「めんぢよ」に同じ。
(ぢよ-もく［除目］(名)「ぢもく」を見よ。
(ぢよ-や［除夜］(名) おほみそかの夜。おほつごもりの夜。
(ちよ-ゆう［猪勇］(名) 猪詐に突進する勇氣。
(ぢよ-ら［女蘿］(名)【植】「ひかげかづら」に同じ。
(ぢよ-らう［女郎］(名) 一婦人の汎稱。 二遊客の枕席に侍ることを業とする女。あそびめ。うかれめ。遊女。娼妓。 ——あがり［女郎上］(名) もと遊女にて今は堅氣の人となりたること。又、其人。 ——かひ［女郎買］(名) 遊女をあげて遊興すること。 ——ぐも［女郎蜘蛛］(名)【動】蜘蛛の一種、大形にして長さ一寸許、四對の脚を有し、全身に黃斑あり、毒甚し。(斑蜘、絡新婦)。 ——や［女郎屋］(名) 遊女をかゝへおきて、客に遊興せさする

とを謂とする家。

(**ちよ-りう**)[女流](名) 女性の人。をんな。

(**ちよ-りつ**)[佇立](名) たゝずむこと。

(**ちよ-れい**)[女禮](名) 女子のたしなみふるまひの禮式。——**ぶき**[女禮式](名) 前條に同じ。

(**ちよ-れき**)[樗櫟](名) 《樗は樗才の條を見よ、櫟は莊子に、匠石見"櫟社樹"、其大蔽"牛、觀者如"市、匠石不"顧とあるに出づ》役に立たぬ木。又、役に立たぬもの。

{**ちよ-ろ**}(名) ちよきぶね。

{**ちよ-ろ**}[女郎](名) 「ぢよらう(二)」に同じ。——**あがり**[女郎上](名) 「ぢよらうあがり」に同じ。——**かひ**[女郎買](名) 「ぢよらうかひ」に同じ。——**ぐも**[女郎蜘蛛](名) [動]「ぢよらうぐも」に同じ。——**や**[女郎屋](名) 「ぢよらうや」に同じ。

ちよろぎ[草石蠶](名) [植]「ちようろぎ」に同じ。

チヨロケン[著羅紹](名) 木目ありて買かいきに似たる一種の羅布、はじめ「オランダ」又は廣東等より舶來せり。

{**ちよろ-ちよろ**}(名、副) ㊀水のすこしばかり流るゝさまにいふ語。㊁間をすばしこくゝり行くさまにいふ語。——**みづ**(名) 少しばかりながるゝ水。

{**ちよろっか**}(名) 粗忽なること。思慮なきこと。——**もの**(名) 深き思慮なくものに取りかゝる人。そこつもの。《東京地方の方言》

{**ちよろまか-す**}(他、さ四) 人目をかすめて取る。「さまにいふ語。

{**ちよろり**}(名、副) 人目をかすめて手早くものする。

(**ちよ-わう**)[女王](名) ㊀女性の王。㊁親王の宣下なき皇族の尊君。

(**ちよ-ゐ**)[儲位](名) 太子又は世子のくらゐ。

{**ちよん**}(名) ㊀ちばし。すこしばかり。わづか。㊁拍子木の音。——**ぎね**(名) 眞摯の一種、「ちよんがなのはなし〜ちよんがなのはなし〜ちよんがはい」と唱へ(ながら拍子をとり、其ごとに「ちよ〜〜んがはい」と唱へながら拍子をとり、語の終を合圖に雙方より摯を打ち、負けたるものは、衣服若しくは身に着したるものを一つ脱ぐ。

{**ちよんの**}[手斧](名) 「てをの」の訛。《大阪地方の語》

{**ちよんびり**}(名、副) すこしばかり。 [方言]。

{**ちよんぼり**}(名、副) 前條に同じ。

{**ちよん-まげ**}(名) 男のまげの小さきもの。又、其結髪の人。——**あたま**(名) ちよんまげを結びたる頭。又、其頭の人。

(**ぢ-らい**)[地雷](名) 「ぢらいくわ」の略言。——**くわ**[地雷火](名) 地下に仕掛けたる爆裂藥。

(**ぢ-らう**)[地牢](名) 地下に設けたる牢。

{**ぢらか-す**}(他、さ四) ちらかるやうにす、ちらす。

{**ぢら-か-る**}(自、ら四) ちらばる。ちる。

{**ぢらくら**}(名、副) 「ちらちら」に同じ。

(**ぢ-わう**)[女王](名) ㊀女性の王。㊁親王の宣下なき皇族の尊君。

(**ちよ-ゐ**)[儲位](名) 太子又は世子のくらゐ。

{**ちよん**}(名) ㊀ちばし。すこしばかり。わづか。㊁拍子木の音。——**ぎね**(名) 眞摯の一種、「ちよんがなのはなし〜ちよんがなのはい」と唱へ(ながら拍子をとり、其ごとに「ちよ〜〜んがはい」と唱へながら拍子をとり、語の終を合圖に雙方より摯を打ち、負けたるものは、衣服若しくは身に着したるものを一つ脱ぐ。

{**ちよんの**}[手斧](名) 「てをの」の訛。《大阪地方の語》

{**ちよんびり**}(名、副) すこしばかり。 [方言]。

{**ちよんぼり**}(名、副) 前條に同じ。

{**ちよん-まげ**}(名) 男のまげの小さきもの。又、其結髪の人。——**あたま**(名) ちよんまげを結びたる頭。又、其頭の人。

(**ぢ-らい**)[地雷](名) 「ぢらいくわ」の略言。——**くわ**[地雷火](名) 地下に仕掛けたる爆裂藥。

(**ぢ-らう**)[地牢](名) 地下に設けたる牢。

{**ぢらか-す**}(他、さ四) ちらかるやうにす、ちらす。

{**ぢら-か-る**}(自、ら四) ちらばる。ちる。

{**ぢらくら**}(名、副) 「ちらちら」に同じ。

{**ちらし**}[散](名) ㊀ちらすこと。ちらばすこと。㊁廣告にくばる引札。㊂「ちらしがき」の略言。㊃「ちらしどもく」の略言。㊄「カルタ」をまきちらしてとること。——**がき**[散書](名) 女の消息文又は歌。「艷書などに文をとび〜又は一くだりもきなどに書くこと。文字の太きと細きとによりて調み分けしむ。美しく走書せること。——**がみ**[散髪](名) 結ばずして散らしたる頭髪。——**どもく**[散五目](名) いろ〜の具を入れたる飯。どもくずし。《骨董語》——**だいこ**[散太鼓](名) 芝居などのをはりに打つ太鼓。——**もやう**[散摸樣](名) とび〜又は一つまきなどにまきたる模樣。——**よね**[散米](名) 「さんまい」に同じ。

{**ちら-す**}(他、さ四) ㊀ちるやうにす。ちらしむ。㊁わかつ。くばる。㊂いひふらす。ふる。㊃或動詞に添へて、其動作の為たゝかなる意を表はす語。「呑み—」「食ひ—」。

{**ちら-ちら**}(名、副) ㊀とび散るさまにいふ語。㊁ひらめくさまにいふ語。㊂目さきに何ものか明滅する如く感ぜられて、視力のたしかなちざるさまにいふ語。㊃少しづゝ、たび〜見え又は聞ゆるさまにいふ語。「一耳にはいる」。

{**ちらつ-く**}(自か四) ちら〜す。

{**ちら-と**}(副) わづかに。ちよっと。すこしく。

{**ちらば-す**}(他、さ四) ちらばるやうにす。

{**ちらば-る**}(名) ㊀ちらばること。㊁まばら。

{**ちらば-る**}(自、ら四) ちりみだる。ちり〜になる。

++**ちら-ふ**[散](自、は四)「ちる」の延言。

{**ちら-ほら**}(名、副) 此方彼方にまばらにあらはるゝさまにいふ語。「人影—」。

++古語　〰俚語方言　〇字音

{**ちらり**}(名、副) ㊀ちら〜〜。㊁ちよっと。——**ちらり**(名、副)「ちらちら」に同じ。

(**ぢ-らん**)[治亂](名) 世の治まると亂れること。「と。

ちり[散](名) ちること。ちりみだるゝこと。「さくら花—のまがひの春の山風」。

ちり[塵](名) ㊀ものゝ粉末(ナヒ)又は微滓(カス)の飛びちるもの。㊁あくた。ごみ。㊂煩(ワヅラ)はしき俗事。煩(ワヅラ)はれる世間。「—の外」。㊃けがれ。よごれ。㊄さわぎ。みだれ。㊅わづか。いさゝか。㊆取るに足らぬもの。ねうちなきもの。㊇道標。「—をつぐ」。——**にまじはる**[交塵](名) 世間にまじはる。——**をいづ**[出塵](名) 世俗の縁をはなる。——**をたつ**[絶塵](名) 世俗と隔るにいふ。又、前のものと後のものとの隔り遠きにいふ。又、走るとの極めてはやきにいふ。——**をのぞむ**[望塵](名) 晉の石崇の故事に出づ》長上にあもねりつかふるにいふ。——**をはいす**[拜塵](名) 前條に同じ。

(**ちー-り**)[地利](名) ㊀地勢の便利。㊁土地の生産。

(**ちー-り**)[地理](名) ㊀山川・海陸のすぢみち。「俯察—」。㊁地上に於ける山川・海陸乃至氣候・生物・人口・物産等の形勢狀態。

ちり(名) 一種の料理、魚肉などを茹(ユ)で、酢醬油をつけて食ふもの。

ちり-あくた[塵芥](名) ㊀ちりとあくたと。ごみくづ。㊁ねうちなきもの。やくざもの。すたりもの。

ちり-あな[塵穴](名) ちりを入るゝための穴。

(**ちり-りう**)[遲留](名) とゞこほること。とゞまること。

(**ちり-がく**)[地理學](名) 地理を研究する學科。

ちり-がた[散方](名) ちるところ。又、ちるさま。

ちり-か-ふ[塵交](自、は四) ㊀たがひに散りまじはる。「—花」。㊁處々にちらばる。

ちり-がみ[塵紙](名) 楮の皮の滓(カス)にてすきたる粗末なる紙。「茅紙」。

ちり-け[身杜](名) ㊀炎所の名、項(ウナ)の下にして兩肩の中央の處、ぼんのくぼ。㊁小兒の病名。

{**ちり-ざうり**}[塵草履](名) 藁(ワラ)草履。《奥州地方の方言》。

(**ちり-ぞよ**)[地理書](名) 地理を記載せる書籍。

ちり-すゑ[塵居](名) 柳厨子などの足の稱。

チリ-せうせき[智利硝石](名) Chili saltpetre。(化)水に溶解し易き粒狀の結晶體、性質は硝石に類似す、産「アノリカ」の「チリ」國に多くして此名あり。

++**ちり-たり**(名) 笛の音譜。《笛の音の春面白く聞ゆるは、花—と吹けばなりけり》。

ちり-ぢ[塵地](名、副) ㊀ちゝる、さまにいふ語。㊁あそれちゝまるさまにいふ語。

ちり-ぢり[散散](名) ㊀ちらばるさまにいふ語。㊁はなれわかるゝさまにいふ語。「ためし。「塵堆。

ちり-づか[塵塚](名) 塵埃を棄(ス)つる處。ごみ具。

ちり-ざり[塵取](名) 塵を取り入れて棄(ス)つる「てのこと。

ちり-のこ[散殘](自、ら四) 散ちずしてのこる。

ちり-の-さかひ[塵境](名) 世のなか。世俗。

++**ちり-の-すゑ**[塵末](名) 物のかずならぬ末葉。「—をも歟にもちすな」。

ちり-の-ほか[塵外](名) 世俗とへだゝりはなれたる境。浮世の外。

ちり-の-み[塵身](名) 物のかずならぬ身。又、けがれたる身。

ちり-の-よ[塵世](名) けがらはしき世の中。

ちり-ばかり[塵許](名、副) いさゝか。わづか。つゆほど。

{**ちり-はたき**}(名) ちりはらひ。

ちり-はな[散花](名) ちりたる花。落花。「みる。

ちり-ば-むる[散ばめる](自、ま四) 塵に染む。はこりにまく。はり掛ける。ちる。

ちり-ば-むる[鏤](他、ま下二) 刻(ヤ)みつ

ちり-はらひ[塵拂](名) 塵をはらひ去る具、采配の狀をなすもの。ちりはたき。

++**ちり-ひぢ**[塵泥](名) ㊀ちりと泥(ヒヂ)と。㊁取るに足らぬもの。——**の-くに**[塵泥國](名) 小さくして取るに足らぬ國。

ちり-ほとり[塵埃](名) ちりあくた。

++**ちり-ぼ-ふ**[塵埃ふ](自、は四) ㊀ちりばる。㊁ちりぢりになる。

ちり-めん[縮緬](名) 一種の絹織物、左右兩樣のねり強き生絲を鑄(コ)として縮織にしたるもの。《鑄紗》。——**がみ**[縮緬紙](名) 皺をよせてちりめんのごとくしたる紙。——**さこ**[縮緬雜魚](名) ㊀《動》いさざの一名。㊁ちらすぼし。——**ぢわ**[縮緬皺](名) ちりめんの如き細かき皺。

(**ちー-りやく**)[智略](名) よく活動する才能。又、しこき謀略。《智謀》。

(**ちー-りよ**)[智慮](名) かしこきもんばかり。又、かんがへはかる能力。

(**ちー-りよく**)[智力](名) ちゑのはたらき。

(**ちー-りよく**)[地力](名) 土地の生産力。——**げん**[地力遞減](名) 【經】「ちうえきていげん」に同じ。

ちり-れんげ[散蓮華](名) ㊀短小なる陶器の匙

++古語　〰俚語方言　〇字音

(汁)、其形の散りたる蓮花の一瓣に似たるより名づく。㊁長くして凹(くぼ)みたる顔をあざけりていふ語。
++ちり·ゐ［塵居］(名) 塵埃のつきてあること。
ち·る［散］(自、ら四) ㊀わかれ〲になる。ばら〲になる。はなる。ちらばる。「花—」。㊁みだる。「ちりたるものとりやりなどす」。㊂走る。「匕(さ)じ」。㊃世間に聞こゆ。「此事ちらさじ浮世の恥なりと」。㊄にじむ。「墨が—」。
(ち·るゐ)［地類］(名) 土地の類別。「—變換」。
(ち·れう)［治療］(名) 病をなほすこと。れうぢ。
(ち·れう)［知了］(名) 知りさとること。
(ち·れきせい)［地瀝青＝Asphalt］(名) 石油中の粘油の凝固せるもの。
(ち·ろ)［地爐］(名) 地上に設けたるゐろり。
(ち·ろう)［痔漏］(名) 痔の一種、肛門のまはりに腫物生じて穴のあくもの。あなぢ。はすぢ。
(ちろ·ちろ)(名、副) ㊀「ちらちら」に同じ。㊁「ちよろちよろ」に同じ。
++ちろぼ·ふ［はひぶ］(自、は四) 「ちりぼふ」に同じ。
ちろり［銚釐］(名) 酒を溫(あた)むるに用ふる金屬製の器、筒形にして注(そそ)ぎ口あるもの。
(ちろり)(名、副) 「ちらり」に同じ。
(ち·わ)［痴話］(名) なれなじめる男女間のざればなし。(情話、艶話)。——ぐるひ［痴話狂］(名) 男女の相親しみあひてたはむれくるふこと。——げんくわ［痴話喧嘩］(名) 男女の痴情よりあらそひをおこすこと。——ぶみ［痴話文］(名) こひしき心の丈をしたためたるてがみ。いろぶみ。
(ち·わう)［地黃］(名)【植】玄參科に屬する草、葉は地黃に似、厚くして皺あり、花は紫色又は淡白色を呈す、根は藥劑に用ふ。「地髓」。——せん［地黃煎］(名) 地黃の根を加へてねりたる飴。
ち·わり［地割］(名) 地面の區劃。地所の割附。
(ち·ゐ)［地位］(名) ㊀ゐどころ。をりば。たちば。㊁くらゐ。身分。㊂存在せる場所。
(ち·ゐ)［地維］(名) 大地を維持するもの。
(ち·ゑ)［智慧］(名) 物事を分別し知職する心の作用。物事を計畫し處置する心の作用。++——さきら［智慧辯舌］(名) 智慧深く辯舌さわやかなること。——しや［智慧者］(名) 智慧多き人。——なし［智慧無］(名) 智慧なきこと。おろかなること。又、其人。——のいた［智慧板］(名) 小兒の玩具、小さき板を集めさま〲の形に組みたてゝあそぶもの。——のわ［智慧輪］(名) 小兒の玩具、種々の輪を寄せ集めて組み立て或はこれを拔き離しなどするもの。(九連環)。——ぶくろ［智慧袋］(名) ㊀智慧の總量。㊁其部内の智謀者。
++ち·ゑひ［血醉］(名) 出血を見て茫然たること。
(ち·をん)［地溫］(名) 土地の溫度。
(ちん)［賃］(名) ㊀報酬を拂ひて使用すること。㊁使用したる報酬。「—錢」。
(ちん)［鴆］(名) 支那にていふ毒ある鳥、嘴紫黑にして頸長し、其羽を酒に加へて飲ますれば、人を殺すに足るといふ。(一擲鳥)。
(ちん)［珍］(名) ㊀めづらしきこと。めづらしきもの。
(ちん)［鎭］(名) ㊀しづめ。㊁おさへ。
チン［亭］(名) (亭の唐音) 庭園などに造るあづまや。「屋」。(榭)。
チン［狆］(名)【動】狗の一種、もと舶來せるもの、體軀小にして面貌滑稽なり、室内に飼ふ。
(ちん)［朕］(代) (秦の始皇帝の制定に始まる) 帝王の自稱。われ。
(ちん)［陣］(名) ㊀兵士を列ねて隊伍を形づくること。又、兵士を列ねて形づくりたる隊伍。「長蛇の—」。㊁軍士の屯所、兵士の營所。㊂古昔、衛士の禁裏に出仕列坐せしこと。又、其衛士の詰所。㊃むれ。「雁—」。
(ちん)［沈］(名) 「ぢんかう」(沈香)の略言。
(ちん·あ)［沈痾］(名) 久しくなほらぬやまひ。
(ちん·あい)［珍愛］(名) めづらしがりて愛すること。
(ぢん·あい)［塵埃］(名) ちりほこり。あくた。
(ちん·あつ)［鎭壓］(名) おししづむること。おさへつくること。——き［鎭壓器］(名) ものを上よりおさへつくるに用ふる器械。
(ちん·い)［珍異］(名) めづらしきこと。
(ぢん·えい)［陣營］(名) ぢんや。
(ぢん·かい)［塵界］(名) ちりの世界。世の中。
(ぢん·かい)［塵芥］(名) ちりあくた。
(ちん·かう)［沈降］(名) しづみくだること。
(ぢん·かう)［沈香］(名)【植】瑞香科に屬する木、熱帶地方に產す、幹は柳に似て花は白色なり、材は香料に使用せらる。
(ちん·かく)［珍客］(名) たまに來りたる客人。めづらしき客人。
ぢん·がさ［陣笠］(名) ㊀昔時、陣中にて用ひし笠、雜兵のは薄き鐵若しくは革などにて造り、將士のは木製にして漆塗なり。([illegible]笠)。㊁「ぢんがされん」の略言。㊂雜兵。歩兵。——れん［陣笠連］(名) ㊀したまはり。部下。㊁多數の雷同者。

〔ぢんがさ(一)〕

ちん·がし［賃貸］(名) 賃をとりてものを貸すこと。
ぢん·がたな［陣刀］(名) 「ぢんたう」に同じ。
ぢん·がね［陣鐘］(名) 陣中にて進退の合圖に打ち鳴らす半鐘。

ぢん·がひ［陣貝］(名) 陣中にて進退の合圖に吹き鳴らす法螺貝。(陣螺)。
(ちん·がら)［珍柄］(名) めづらしき品柄。
ちん·がり［賃借］(名) 賃を出してものをかること。
(ちん·かん)(名、副) 鉦などを打ちきたふ音。
(ちん·き)［珍奇］(名) めづらしきこと。奇妙なること。
(ちん·き)［珍稀］(名) めづらしきこと。まれなること。
(ちん·き)［珍貴］(名) めづらしくたふときこと。
(ちん·き)［珍器］(名) めづらしきうつは。
チンキ［丁幾＝Tincture］(名) 「アルコホル」にて或物質を溶(と)きたる液。
(ちん·きち)［陣吉］(名) 布にてつくりたる財布。
(ぢん·きやう)［塵境］(名) ちりにまみれたる境遇。煩(わづら)はしき世間。
(ちん·きやく)［珍客］(名) めづらしき客人。
(ちん·きよう)［陳供］(名) そなへさゝぐること。
(ちん·ぎよらくがん)［沈魚落雁］(名) (其美貌にあひて魚ために沈み雁ために落つる義) 美人の容貌すぐれてあでやかなるにいふ語。
(ちん·きん)［賃金］(名) ㊀賃借人が賃貸人に支拂ふ報酬。㊁「ちんぎん」(賃銀)に同じ。
(ちん·きん)［沈金］(名) 漆塗に彫刻を施せる一種の蒔繪細工、漆器に陰文を彫刻して、これに金末を嵌入したるもの。
(ちん·ぎん)［沈吟］(名) ㊀くりかへしてくちずさむこと。㊁おもひいること。かんがへこむこと。
(ちん·ぎん)［賃銀］(名) ㊀ちんせん。手間代。㊁【經】勞力を供したるものが其報酬として受くる所得の稱、これを強制的と契約的とに分つ、前者は官吏の俸給の如きをいひ、後者は勞働者の報酬の如きをいふ、更に名義上のものと實際上のものとの區別ありて、名義上とは貨銀として受取りたる貨幣の總額をいひ、實際上とは賃銀によりて享受し得る生活の總額をいふ。又、支拂の財物によりて、物品拂と貨幣拂とに分ち、支拂の方法によりて、時間拂と出來高拂と利益配分とに分つ。——きんせつ［賃銀基金說］(名)【經】各國に賃銀の支拂に使用せらるゝ一定の基金あり、即ち全體の勞働者が受くべき賃金の總額なり、勞働者の總數にて此額を除すれば、賃銀の平均額を得、故に賃銀を高くせんとせば、基金を增加するか勞働者を減少するかの二途あるのみといふ說、現今にては用ひられざるもの。
ちんきん·ぬり［沈金塗］(名) 沈金に同じ。
ちんきん·ぼり［沈金彫］(名) 前條に同じ。
(ちん·く)［沈酗］(名) 飲酒にふけりくるふこと。
(ちん·ぐ)［珍具］(名) めづらしき道具。
(ちん·くわ)［珍菓］(名) めづらしき果實又は菓子。
(ちん·くわ)［鎭火］(名) ㊀火事のきえしづまること。㊁火事をけすこと。——さい［鎭火祭］(名) ひぶせのまつり。
(ちん·くわい)［珍怪］(名) めづらしくあやしきこと。
(ちん·ぐわん)［珍玩］(名) ㊀めづらしがりてもてあそぶこと。㊁めづらしきもてあそびもの。
(ぢん·くわん)［塵寰］(名) 「ぢんかい」(塵界)に同じ。
チン·けう［聽叫］(名) (「チン」は聽の宋音) 禪家の奴僕、禪家にて使ふ童子。
(ちん·こ)(名) 陰莖。(小兒の語)。
(ちん·ご)［鎭護］(名) 世の中をしづめまもること。
(ぢん·ご)［陣伍］(名) 軍隊の隊伍。
(ぢん·こう)［塵垢］(名) ㊀ちりとあかと。㊁よごれ。けがれ。㊂世間の俗事。
ぢん·ごや［陣小屋］(名) 軍隊の宿舍せる小屋。
(チン·ころ)(名)【動】「チン」(狆)に同じ。
(ちん·こん·さい)［鎭魂祭］(名) ㊀「たましづめのまつり」に同じ。㊁神葬にて、死者のたまをしづめまつるといふ意のまつり。
(ちん·ざ)［鎭座］(名) 神靈の其地に鎭(しづ)まりますこと。
(ちん·ざい)［珍財］(名) めづらしきたから。
(ちん·ざう)［珍藏］(名) 珍物として秘藏すること。
(ちん·し)［鎭子］(名) もの、おもしに置くもの。
(ちん·し)［沈思］(名) 思ひにしづむこと。しあんすること。「—黙考」。
(ちん·じ)［珍事］(名) ㊀めづらしき事。㊁意外の事。「てき事」。(椿事)。
(ぢん·じ)［塵事］(名) 世間の煩(わづら)はしき事。
(ちん·しう)［珍羞］(名) めづらしきさかな。めづらしき膳部。
ちん·しごと［賃仕事］(名) 賃錢をとりてする仕事。
(ちん·じふ)［珍什］(名) めづらしきだうぐ。
(ちん·しや)［陳謝］(名) あやまりわぶること。
(ちん·じやう)［枕上］(名) まくらべ。
(ちん·じやう)［陳情］(名) 情實を陳述すること。——しよ［陳情書］(名) 陳情の文書。
(ちん·しやく)［賃借］(名)【法】賃貸借により報酬を支拂ひて、他人のものを使用又は收益すること。——けん［賃借權］(名)【法】賃貸借に基きたる債權、即ち賃借人が賃貸人に對して、其所有物の使用及收益を要求する權。——ち［賃借地］(名) 賃貸借の目的たる土地を賃借人より見ての稱。——にん［賃借人］(名) 賃借する人、即ち賃貸借の當事者たる借主。——ぶつ［賃借物］(名) 賃貸借の目的たるものを賃借人より見ての稱。
(ちん·しゆ)［鴆酒］(名) 鴆毒をまぜたる酒。毒酒。
(ちん·じゆ)［鎭守］(名) ㊀兵士を屯在せしめて、

其地を志づめ守ること。㊁寺院内に置く寺院守護の御靈神。又、其廟。㊂其土地を鎭め守る神。又、其社。（城隍）。――のもり［鎭守森］（名）田舍にて、鎭守のある森。
（ちん-じゆつ［陳述］（名）口にてのぶること。「言上」。――しよ［陳述書］（名）陳述の次第を書きしたゝめたる文書。
（ちん-じゆ-ふ［鎭守府］（名）㊀古昔、東北地方の鎭守として陸奥國膽澤郡に置かれし府。將軍・副將軍・軍監・軍曹等の職ありき。㊁現時、各軍港に置かれ、出師準備・防禦計畫・海軍區警備等に所轄事務を監督する所。――しやうぐん［鎭守府將軍］（名）古昔、鎭守府の長官。――しれいちやうくわん［鎭守府司令長官］（名）部下を統率し鎭守府一切の事務を總理し、海軍大臣の命を受けて軍政を掌るもの。海軍大將又は中將を以てこれに充て、親補にして天皇に直隷す。
（ちん-じよ［珍書］（名）めづらしき書籍。
（ちん-じよ［陳叙］（名）のべいづること。
（ぢん-じよ［陣所］（名）陣屋。（軍營、軍屋）。
（ちん-ず［陳］ちんずる［陳］（他）（自さ變）のべいふ。いひはる。
ちん-すゐ［沈醉］（名）㊀いたくゑふこと。ゑひつぶること。㊁ふけりゑふこと。ふけりすさむこと。
（ちん-ずゐ［珍瑞］（名）めづらしきさが。
（ちん-せい［鎭靖］（名）志づめやすんずること。
（ちん-せい［沈靜］（名）おちつきて志づかなること。
（ちん-ぜい［鎭西］（名）九州の稱。「一僅存臣武光。」――は［鎭西派］（名）【佛】淨土宗の一派。鎭西國聖光上人よりはじまる。――ふ［鎭西府］（名）㊀古昔、九州地方の鎭守として置かれたる府。將軍・判官及主典の職ありき。㊁太宰府の別稱。
（ちん-せい［塵世］（名）ちりの世。けがれたる世。〔此世。〕
（ぢん-せい［陣勢］（名）陣のいきほひ。
（ちん-せき［枕席］（名）まくらとしきものと。（枕頭。）――にはんべる［侍枕席］婦人が男子の夜のとぎをなすにいふ。――をすすむ［薦枕席］前條に同じ。
（ちん-せつ［珍說］（名）めづらしきはなし。（奇說。）
（ちん-せん［賃錢］（名）使用したる報酬の金。
（ちん-せん［珍饌］（名）めづらしき料理。めづらしき膳部。
（ちん-ぜん［闐然］（名、副）罰をさし出すさまにいふ語。
（ぢん-せん［陣扇］（名）ぐんばいうちは。
（ぢん-ぜん［陣前］（名）陣のまへ。
（ぢん-そう［陣僧］（名）昔時、陣中に伴ひし僧侶。
（ちん-ぞく［塵俗］（名）塵の世のなか、世間。
（ちん-たい［沈滯］（名）㊀志づみとゞこほること。㊁下位にありて昇級せざること。
（ちん-たい［賃貸］（名）【法】賃貸借により、報酬を受けて自己の物を他人に使用又は收益せしむること。
（ちん-だい［鎭臺］（名）㊀一地方の鎭守として設置せられたる軍隊。㊁「ちんだい（へい）」の略言。
（ぢん-だい［陣代］（名）昔時、大名の陣屋を守りし重役。又、地方の代官。
（ちんたい-かかく［賃貸價格］（名）賃貸物を賃貸する價格。
（ぢん-だいこ［陣太鼓］（名）陣中にて、軍勢進退の合圖に打ち鳴らし、太鼓。（戰鼓）。
（ちん-たいしやく［賃貸借］（名）【法】當事者の一方が相手方に對して、自己の所有物を使用及收益せしむることを約し、相手方がこれに對して、其賃金を支拂ふことを約すること。
（ちんたい-にん［賃貸人］（名）賃貸する人。即ち賃貸借の當事者たる貸主。
（ちんたい-ぶつ［賃貸物］（名）賃貸借の目的物を賃貸人より見ての稱。
（ちんだい-へい［鎭臺兵］（名）鎭臺の兵士。
（ちん-たう［陳套］（名）ふるき範圍。「舊套。」
（ぢん-たう［陣刀］（名）戰鬪にて使用する刀。
ぢん-だて［陣立］（名）軍勢を揃へ隊伍を列ぬること。軍隊の配置又は編制。
ちん-だひ（名）【動】ちぬに同じ。
（ちん-だん［珍談］（名）めづらしきはなし。
（ぢん-ち［陣地］（名）軍隊の配備又は戰鬪に適したる地。陣どる場所。
（ちん-ちく-りん（名）丈低（せい）きものをあざけりていふ語。
（ちん-ちやう［沈丁］（名）「ちんちやうげ」の略言。――げ［沈丁花］（名）【植】瑞香科に屬する小木本。常綠なり。花は白色又は紫赤色にして香氣あり。觀賞用として栽培せられ、樹皮の纖維は製紙の料に供せらる。〔七里香。瑞香。〕
（ちん-ちやく［沈着］（名）落ちつきてゐること。かろ〴〵しからざること。物事に動ぜざること。
（ちん-ちよう［沈重］（名）おちつきておも〴〵しきこと。
（ちん-ちよう［珍重］（名）㊀めづらしくして大切なること。㊁珍しがりて大事にすること。㊂めでたきこと。いはふべきこと。「一至極。」
（ぢん-ちゆう［陣中］（名）陣屋のうち。
（ちん-ちゆう［塵中］（名）ちりのなか。世のなか。

（ちんちろりん（名）㊀鉦（かね）などをすりつゝ、絞かにたゝく音にいふ語。㊁まつむしの叫聲。轉じてまつむしの異稱。
（ちん-ちん［沈沈］（名、副）㊀志づまりてひつそりしたるさまにいふ語。㊁夜のふけゆくさまにいふ語。「深夜—。」
（ちん-ちん［陳陳］（名、副）もの〻ふるびたるさまにいふ語。
（ちん-ちん（名）やきもち。
（ちん-ちん（名）犬が前足をあげて招くさまをなすこと。
（ちん-ちん（名）陰莖の稱（小兒の語）。
（ちん-ちん［陣陣］（名、副）風の吹きまさるさまにいふ語。
（ぢん-ぢん-ばしより（名）脊縫の裾（すそ）より七八寸上を摘（つま）みて、帶の結目の下に端折り込むこと。
（ちんちん-もがもが（名）小兒の遊戲。片足をあげ、他の片足のみにて飛びあるくこと。
（ちん-つう［鎭痛］（名）いたみをとゞむること。――ざい［鎭痛劑］（名）いたみをとゞむる藥。
（ぢん-つう［陣痛］（名）妊婦の產氣づきて腹のいたむこと。むしかぶり。
（ちん-づき［賃搗］（名）賃錢を受けて餅又は米などをつくこと。
（ちん-てい［鎭定］（名）志づめさだむること。又、志づまりさだまること。（鎭靜）
（ちん-でき［沈溺］（名）おぼるゝこと。志づむこと。
（ちん-でん［沈澱］（名）水中又は液中に志づみてよどむこと。――くわうぶつ［沈澱礦物］（名）天然水の溶液の沈澱物より成る鑛物。方解石・石膏等これなり。――ぶつ［沈澱物］（名）水に沈みてよどみたるもの。
（ちん-ど［塵土］（名）㊀ちりとつちと。㊁ねうちなきもの。
（ちん-とう［枕頭］（名）まくらべ。
（ぢん-とう［陣頭］（名）陣のさき。「馬を一に躍らせ。」
（ちん-どく［鴆毒］（名）鴆の羽。酒に加へて人を殺すに用ふ。
ぢん-どり［陣取］（名）㊀ぢんどること。又、ぢんどりたるさま。（布營、排陣。）㊁小兒の遊戲。各陣地を定めおきて、互に攻めうばひあふこと。
ぢん-どる［陣取］（自ら四）㊀陣を布きて屯（たむろ）す。陣をかまふ。㊁場所を占有す。
（ちん-にふ［闖入］（名）突然にはいりこむこと。
（ぢん-の-ざ［陣座］（名）古昔、禁中にて節會神事等の公事のとき上卿の座りて事を執行せし座。
（ちん-ば［跛］（名）㊀片足の正しく步み得ざること。又、其人。（跛者。）㊁對にてあるべきものゝ揃（そろ）はざること。
（ちん-ばう［賃房］（名）かしま。
（ちん-ばう［珍寶］（名）めづらしきたから。
（ぢん-ばう［陣亡］（名）うち志に。
（ぢん-ばおり［陣羽織］（名）昔時、陣中にて鎧（よろひ）の上に着たる袖なき衣。形羽織に似て袖細し。

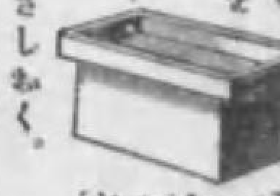
［ぢんばおり］

（ぢん-ぱふ［陣法］（名）陣立又は陣取の法。
ぢん-ばらひ［陣拂］（名）陣所をひき拂ふこと。
（ちん-ぱん［鎭藩］（名）其地方のおさへに置きたる大名。
（ちん-ぴ［陳皮］（名）熟したる柑子の皮を乾して藥用とするもの。今多く蜜柑の皮を代用す。
（ちん-びき［賃挽］（名）賃錢をうけて糯をつむぐこと。
（ちん-ぴん［珍品］（名）めづらしき品。
（ちん-ぶ［鎭撫］（名）志づめ安んずること。おさへなぐさむること。「一使。」
（ちん-ぷ［賃夫］（名）賃錢を出してやとふ人夫。
（ちん-ぷ［陳布］（名）[illegible]
（ちん-ぷ［陳腐］（名）ふるくさきこと。
（ちん-ぶつ［珍物］（名）めづらしきもの。
ぢん-ぶれ［陣觸］（名）陣中にての布告。
（ちん-ぶん［珍聞］（名）珍奇なる風聞。めづらしきはなし。（奇聞）。
（ちん-ぶん-かん［珍糞漢］（名）わけのわからぬことをいふ人。又、其語。もと儒者の用ふる漢語を世俗の聞きていひし語なりといふ。
（ちん-べん［陳辯］（名）のべとくこと。まうしのぶること。
（ちん-ぼ（名）陰莖。――こ（名）前條に同じ。
（ちん-ぼつ［沈沒］（名）水中に沈みてあとかたを失ふこと。水中に志づみいること。
（ぢん-ぼつ［陣歿］（名）うち志に。（陣亡、戰死。）
（ちん-まい［陳米］（名）ひねごめ。
（ぢん-まく［陣幕］（名）陣營に張る幕。
（ちん-み［珍味］（名）めづらしき味の食物。
（ちん-むるゐ［珍無類］（名）めづらしくして他に比類なきこと。
（ちん-めん［沈湎］（名）飲酒にふけりすさむこと。
（ちん-もく［沈默］（名）おちつきて口數をきかぬこと。言を發せざること。
（ちん-もち［賃餅］（名）賃錢を受けて餅を搗くこと。
（ぢん-もん［陣門］（名）陣屋の出入口。
ぢん-や［陣屋］（名）㊀軍兵の屯所。㊁小諸侯又は郡代・代官などの居所。（營舍）。
（ちん-らう［塵勞］（名）ぼんなう。（煩惱）。
（ちん-りん［沈淪］（名）㊀志づみおちいること。㊁おちぶれはつること。
（ちん-れつ［陳列］（名）物品をならべつらぬること。――ぢやう［陳列場］（名）物品の陳列

してある場所。
(ちん-れつ[陣列](名) 陣の排列。
(ちん-ゑ[塵穢](名) 塵埃のけがれ。
(ちん-を[塵汚](名) 前條に同じ。

つ づ

つ 齒的破裂音Ts即ち舌端を硬口蓋の前部に觸れて破裂せしむる音と、母音「ウ」との綴音。
づ 「つ」の濁音、凡て「つ」と同じくして、たゞ破裂音に聲帶の振動の伴ふを異なりとす。
つ[津](名) ㊀船舶の泊(ト)る處。ふなつき。みなと。「安濃—」。㊁わたし場。渡頭。
つ[唾](名) つばき。「固—」。
++つ(助動) 半過去の動作を示す語。「今日も暮し—」。
++つ(助) 所屬の意を示す語、殆ど「の」と同じ。「天—風」。「外—國」。
—つ[個、箇](接尾) 數詞の下に添へて呼ぶ語。「ひと—」。「ふた—」。「いは—」。「いく—」。
(づ[圖](名) ㊀ちづ。地圖。㊁ゑづ。繪圖。㊂ゑ。繪畫。㊃【數】面・線・點等の或集合より成れるもの。㊄こゝろだくみ。思ふつぼ。「—に中る」。「—に乘る」。「—星」。
(づ[徒](名) 「づざい」(徒罪)に同じ。
(づ[頭](名) かしら。かうべ。「—巾」。——がたかい 敬禮のうやうやしからざるにいふ。又、分に過ぎてたかぶるにいふ。
++つい(副) 「つき」の音便。ちよっと。そのまゝ。「—掘ゑ」。「—居る」。「—はさむ」。
(つい(副) ㊀はからず。意外に。「—したこと」。㊁すぐに。ちよっと。「—今しがた」。
++つい-がき[築墻](名) 《「つきがき」の音便》ついぢ。
++つい-がさね[衝重](名) 三方の一種、檜(ヒノ)の白木にて造りたる方形のをしきに臺を重ねたるもの。


[ついがさね]

++つい-しろ[土代](名) 地上にしくもの。
++つい-す・う(他、わ下二) さしおく。
つい-たけ[衝丈](名) 《「つきたけ」の音便》身の丈ほどに布帛を裁(タ)ちて衣服となすこと。
つい-たち[月立](名) 《「つきたち」の音便》㊀先月の立ち去りて今月に至ること。「—ごろの夜」。㊁月の第一日。(朔)。
つい-たて[衝立](名) ㊀「ついたてさうじ」の略言。㊁直立してある物體。++——さうじ[衝立障子](名) 席上の隔てにたてゝおく具、襖・障子などに似て、下に臺あるもの。ついたて。
つい-ぢ[築地](名) 《「築泥(ツイヒヂ)」の義》板を心とし其上を泥土にて塗(ヌ)り固(カ)め、屋根を瓦にて葺(フ)きたる垣。ついひぢ。ついがき。
つい・づ(他、た下二) ㊀次第を立つ。順序を定む。(次)。㊁次第正しくならぶ。順序よくおく。
つい-て[就](接) 《「つきて」の音便》然るに由りて。それゆゑ。
ついで[序](名) ㊀順番。次第。順序。㊁よき都合。よき便。よきをり。——に[序に](副) ㊀よき便に。よきをりに。㊁一緒に。つゞけて。
つい-で[尋](接) 《「つぎて」の音便》引き續きて。はどなく。まもなく。
つい-ば・む(他、ま四) 《「つきはむ」の音便》鳥、嘴にて物をつゝき食ふ。(啄)。
++つい-ひぢ[築墻](名) 「ついぢ」(築地)に同じ。
++つい-まつ[續松](名) たいまつ。(松明)。
++つい-ゐる(自、わ上一) かしこまる。つくばふ。
(つう[通](名) ㊀つうりき。神通力。㊁人情にゆきわたりてさばけたること。「—がる」。㊂其物事にゆきわたりてよく知りてゐること。㊃とゞこほりなきこと。さはりなきこと。
(—つう[通](接尾) 證文・書面・手紙などを數ふる語。「屆書一—」。
(つう-あい[痛愛](名) いたくかはゆがること。
(つう-あい[痛哀](名) いたくかなしむこと。
(つう-いう[通有](名) 一般のもの、有すること。すべてのもの、具すること。——せい[通有性](名) 一般のもの、すべて具有せる性質。
(つう-いん[通音](名) 「つうおん」に同じ。
(つう-いん[痛飲](名) いたく酒をのむこと。
(つう-うん[通運](名) 荷物を送りとゞくること。(運送、運搬)。——くわいしや[通運會社](名) 貨物をうけて通運を業とする會社。
(つう-おん[通音](名) 【文法】音と音と相通ふこと、例へば「へみ」を「へび」、「けぶり」を「けむり」といふ類。
(つう-か[通加](名) すべてを加ふること。
(つう-かい[通開](名) さはりなくなりてみちのひらくること。又、さはりをとりてみちをひらくこと。
(つう-かう[通好](名) よしみを通ずること。まじはりをむすぶこと。
(つう-かう[通航](名) 船舶の通行。
(つう-かう[通行](名) かよひゆくこと。とほり過ぐること。往來すること。——けん[通行權](名) 或場所を通行する權利。——ぜい[通行稅](名) 通行するものに賦課する稅。——せん[通行錢](名) 通行するものよりとりたつる料金。——めんじやう[通行免狀](名) 通行することを許可して、下付する免狀。
(つう-かく[痛覺](名) いたさを感ずる感覺。
(つう-かく[通客](名) 「つうじん」(通人)に同じ。
(つう-がく[通學](名) 學校又は私塾などへ、我が家又は下宿屋などより通(カヨ)ひて修學すること。
〜つう-が・る(自、ら四) 通を氣取る。
(つう-かん[痛諫](名) いたくいさむること。てひどくいさむること。
(つう-き[通規](名) 一般に適用せらるゝ規定。
(つう-ぎ[通義](名) 世間一般に通ずる理義。
(つう-ぎ[通誼](名) 世間一般の履行すべき道。
(つう-きん[通勤](名) かよひてつとむること。かよひづとめ。
(つう-く[痛苦](名) いたみ。くるしみ。
(つう-く[通衢](名) 通行のみち。とほりみち。ちまた。
(つう-くわ[通貨](名) 通用の貨幣及紙幣。
(つう-くわ[通過](名) ㊀とほりすぐること。とほりこすこと。㊁議會にて、議案の否決とならざること。又、官廳にて、願書の却下とならざること。——くわぶつ[通過貨物](名) 外國より他の外國へ運送するため、一旦我國に輸入せらるゝ貨物。
(つう-くわい[痛快](名) 極めて心地よきこと。
(つう-くわん[通患](名) 一般のうれひ。すべてのものゝ弊害。
(つう-くわん[通觀](名) 全體に目をとほすこと。すべてをずっとみること。
(つう-くわん[通貫](名) 「くわんつう」(貫通)に同じ。
(つう-くわん[通欵](名) ひそかにまことを敵に通ずること。うちぎり。
(つう-けい[通計](名) 總數を貫して勘定すること。全體の計算。總計。(合計)。
(つう-げう[通曉](名) くはしく知ること。つらぬきさとること。
(つう-けん[通券](名) 通行の手形。
(つう-けん[通見](名) ずっと一とほり目をとほすこと。
(つう-げん[痛言](名) ㊀耳にいたきほどのたゞしき言。身に徹するほどの直言。㊁てひどく言ふこと。きびしくいふこと。
(つう-げん[通減](名) すべての數よりひきさること。
(つう-げん[通言](名) 普通一般に行はるゝことば。とほりことば。
(つう-こ[通鼓](名) 太鼓をならして、全體のものに相圖をなすこと。
(つう-ご[通語](名) 「つうげん」(通言)に同じ。
(つう-こく[通告](名) つげしらすること。
(つう-こく[通國](名) 一國の全體。
(つう-こく[痛哭](名) いたくなげくこと。
(つう-こん[痛恨](名) いたくうらむること。いと殘念がること。
(つう-さ[通差](名) いづれにも通じたるちがひ。
(つう-さつ[通察](名) 全體をあきらかにみること。
(つう-さん[通算](名) 全體をひきくるめて計算すること。
(つう-じ[通事](名) 互に言語の異なる人の間に立ちて、雙方の言語を譯して告ぐるもの。通辯。通譯。(通詞、舌人)。
〜つう-じ[通](名) ㊀通ずること。㊁大小便。——ぐすり[通藥](名) くだしぐすり。下剤。
(つう-しき[通式](名) 一般の式。
つう-じ-て[通](副) ひきくるめて。すべて。あまねく。みな。
(つう-しやう[痛傷](名) ㊀いたみ。㊁いたみかなしむこと。
(つう-しやう[通商](名) 異なる國の人の互に交通して商事をいとなむこと。——きよく[通商局](名) 外務大臣の管轄の下に屬し、其意思を受けて通商・航海及移民に關する事を取扱ふ外務省の一局。——でうやく[通商條約](名) 通商上に關して締結せられたる國際條約。
(つう-じやう[通情](名) ㊀普通一般の人情。㊁普通一般の事情。
(つう-じやう[通常](名) なみ。つね。つうれい。——いうびん[通常郵便](名) 小包郵便に對して、通常の取扱による郵便の稱。——いうびんぶつ[通常郵便物](名) 通常郵便の取扱による郵便物の稱。小包郵便物の對。——かはせ[通常爲替](名) 電信爲替及小爲替以外の郵便爲替の稱。——かはせしようしよ[通常爲替證書](名) 通常爲替の證書。該通常爲替取扱の郵便局より、其手續によらんために現金を拂込みたる差出人に交附するもの、該證書に指定せる現金拂渡郵便局にて、受取人はこれと引換に現金を受取ることを得。——くわい[通常會](名) 定期に開設する集會又は會議。——けいさつ[通常警察](名) 直接に個人の身體財產の危害を豫防し又は排除する警察行政。高等警察の對。——さいばんしよ[通常裁判所](名) 一般臣民の民事刑事の訴訟を裁判する裁判所。特別裁判所の對。——しはふさいばんしよ[通常司法裁判所](名) 前條に同じ。特別司法裁判所の對。——そうくわい[通常總會](名) 定期に開く總會。臨時總會の對。——そしよう

[通常訴訟](名)【法】簡易訴訟などに對して、通常の手續による訴訟の稱。——**でんぽう**[通常電報](名)特別電報に對して、通常の取扱による電報の稱。——**れいふく**[通常禮服](名)燕尾服の稱。大禮服の對。

つう-ぞく[通俗](名)㊀普通にとなふる名前。俗名。㊁一般に通ずる名稱。

つう-ぞん[痛心](名)心をいたむること。心配する「と。

つう-ぞん[通信](名)㊀たより。もとづれ。(報知)。㊁郵便・電信・電話其他或機關又は手段によりて相互の意思を通ずること。——**ぎぞく**[通信技師](名)通信に關する事務を取扱ふ官署に於て、技術上の事を掌る高等官——**ぎぞくゆ**[通信技手](名)通信に關する事務を取扱ふ官署に於て、技術上の事を掌る判任官。——**きょく**[通信局](名)逓信大臣の統轄の下に屬し、其意思を受けて郵便・小包郵便・郵便爲替・郵便貯金・電信・電話、其他陸運及電氣等の事項を掌る逓信省の一局。——**ぼ**[通信簿](名)小學校より在校の各生徒に與へ、おき、當人の動惰其他要用の事項を摘記して、其父兄に通信する帳簿。——**ぶん**[通信員](名)新聞雜誌等に、其地の出來事を通知するもの。

つう-ぞん[通人](名)㊀人情に通じて野暮ならざる人。㊁花柳社會の事情に通じたる人。

つうじる[通](自、他)「つうず」の訛。

つう-ず[通](自、他)(サ変)㊀かよふ。㊁とはる。㊂まじはる。㊃つゞく。つながる。㊄偏(ヘン)くゆきわたる。㊅さはりなく行はる。㊆くはしく明かなり。又、なれて巧(たく)なり。「學藝に—」。㊇自己の配偶者にあらざる人と色情の關係を結ぶ。密通す。㊈知らる。解せらる。「意味つうぜず」。㊉大小便出づ。

つう-ず[通](他、さ變)㊀かよふやうにす。かよはす。㊁とはす。㊂つちぬ。つゞく。㊃およぼす。いたす。㊄知らす。つぐ。㊅すべてを計算す。「賀」

つう-せい[通性](名)一般のもの、具有する性

つう-せい[通宵](名)夜どほし。よもすがら。

つう-せき[痛惜](名)いたくをしむこと。

つう-せつ[痛切](名)㊀いたく事情に適すること。㊁いとねんごろなること。

つう-せふ[通渉](名)ひろく物事にゆきわたりて知りてゐること。「ん。

つう-せん[通船](名)ゆきかよふふね。かよひせ

つう-そく[通則](名)一般の規則。全體の定則。

つう-ぞく[通俗](名)㊀世間一般。世俗。㊁世間一般に通ずること。誰にも分り易きこと。——**ぶん**[通俗文](名)㊀世間一般のものに分り易き文體。㊁書簡文。「かなしむこと。

つう-たう[痛悼](名)人の死にたるをいたみ

つう-たう[通道](名)㊀通行の道路。㊁一般のもの、履行すべきみち。

つう-たつ[通達](名)㊀ゆきわたること。とゞくこと。㊁つちぬきいたること。とはること。㊂とりつぎ。㊃たちせ。

つう-たん[痛歎](名)いたくなげくこと。

つう-ち[通智](名)すべての物事に通ずる智能。

つう-ち[通知](名)報じ知らすること。告げ知らすること。たちせ。——**ぶん**[通知書](名)物事を通知する書面。——**ぼ**[通知簿](名)「つうぼんぼ」通信簿に同じ。

つう-つう(名、副)とゞこほりなくとほり又は進むさまにいふ語。

つうづう-し(形、二)つゞけと、横着なり。あつかましい。

つう-てつ[通徹](名)とはること。つちぬくこと。

つう-てふ[通牒](名)書面を以て告げたちす「ること。

つう-てん[通典](名)一般ののり。

つう-ねう-き[通尿器](名)小便を通ぜしむるために使用する醫術の器械。

つう-はう[通寶](名)《世に通用する寶の義》昔時、錢面に鑄(イ)つけし語「貫永—」。「せ。

つう-はう[通報](名)告げたちすること。たち

つう-はつ-さよう[通發作用](名)【植】葉が根より吸收せる水を水蒸氣となして、其面より蒸散せしむる作用。

つう-はつ-りう[通發流](名)【植】根より吸收せる水が莖及枝を經(ヘ)て葉に上昇する狀態。

つう-はふ[通法](名)㊀一般の場合に通じたる法則。㊁【數】種々の單位にて表はされたる量を、一つの單位に表はすこと。例へば二十七町四十六間四尺をなほして、一萬尺となすが如し。「諸等—」。

つう-ひ[通比](名)すべてに通じたる割合。

つう-ふう[痛風](名)「ふうたつ」に同じ。

つう-ふう-き[通風器](名)風の通じあしき場所に風を送(オク)りかよはすための器械。

つう-ふん[通分](名)【數】二つ又は二つ以上の分數若しくは分數式の各分母の値をひとしきものになほすこと。其法は各分母の公倍數を各分母とし、もとの分母にて其公倍數を除して得たる數をもとの各分子に乘じたるものを各分子とす。

つう-へい[通弊](名)一般に通じたる弊害。

つう-べん[通辯](名)「つうぜん」通事に同じ。

つう-ぼう[通謀](名)はかりごとを共にすること。「かなること。

つう-めい[通明](名)あまねくゆきわたりて明

つう-やう[痛痒](名)㊀いたきとかゆきと。㊁其物事のために、自己の利害關係に影響あること。「—を感ぜず」。

つう-やく[通約](名)【數】分數の分子と分母との中より互に有する因子をひとしく除き去ること。

つう-やく[通譯](名)㊀互に言語を異にし意思相通ぜざるもの、間に立ちて、雙方の言語を譯し傳ふること。又、其人。㊁「はんやく」「翻譯」に同じ。——**くわん**[通譯官](名)通譯の事に當る高等官。

つう-よう[通用](名)㊀かよひゆくこと。とはること。㊁雙方に通じて用ひらるゝこと。㊂一般に通じて用ひらるゝこと。——**ぐち**[通用口](名)つねにゆきかよひする出入口。——**もん**[通用門](名)つねに出入する門。「ること。

つう-らん[通覽](名)一體に目を通して翼(ヨク)

つう-り[通理](名)一般に通ずる道理。すべてに通ずる道理。「きながること。

つう-りう[通流](名)とはりながること。つちぬ

つう-りき[通力](名)萬事萬物に通じて自由自在なる不思議の力。如何なる物事をもなし得る妙なる力。神通力。

つう-りつ[通律](名)一般に通ずるおきて。

つう-れい[通例](名)㊀ならはし。ならひ。「みち。なみ。普通。

つう-ろ[通路](名)通行の路。かよひぢ。とはり

つう-ろん[痛論](名)ていたく論ずること。はげしく論ずること。

つう-ろん[通論](名)㊀よく事物の道理に通じたる議論。㊁一般にわたりたる議論。

つう-ゐん[通韻](名)音韻の相通ずること。

つうえる(自)「つゆ」の訛。

つか[塚](名)㊀土を小高く築(キ)きて物事の標(シルシ)となしたるもの。「一里—」。㊁土を小高く築きたる墓(ハカ)。

つか[柄](名)㊀刀劍の手に持つべき處。(劍夾)。㊁筆のぢく。筆管。

つか[束](名)㊀四本の指にて握(ニギ)りたる程の長さ。そく。「十—の劍」。㊁つかぼしら」の略言。㊂わづか。短少。「一の間」。

つか[栂](名)【植】「とが」に同じ。

つか-あな[塚穴](名)死人を葬(ホフ)る穴。

つか-あな[圖解](名)㊀圖を挿入して文字の說明をもぢなひたすくるおくみの冊子。㊁系圖の如く、書中に說く所の事物中、主たるものを起點とし、これより線を引きて、他との關係を表示したるもの。

つか-がい-とつ[頭蓋骨](名)頭部をつゝみおほふ骨の總稱。あたまのほね。

つか-いさ[柄絲](名)刀の柄に卷く組絲。(緋)。

つかう-まつ-る[仕](自、ら四)「つかへまつる」の音便。即ち「つかふ」の敬語。「女御の御かへまつる」の音便。即ち「つかふ」の敬語。「女御の御もとに—やうにて」。

つかう-まつ-る[仕](他、ら四)「行さ。そく。「十—の劍」。㊁つかぼしら」の略言。㊂わづか。短少。「一の間」。

つか[束](名)㊀四本の指にて握(ニギ)りたる程の長さ。そく。「十—の劍」。㊁つかぼしら」の略言。㊂わづか。短少。「一の間」。

つか[栂](名)【植】「とが」に同じ。

つか-あな[塚穴](名)死人を葬(ホフ)る穴。

つか-がい[圖解](名)㊀圖を挿入して文字の說明をもぢなひたすくるおくみの冊子。㊁系圖の如く、書中に說く所の事物中、主たるものを起點とし、これより線を引きて、他との關係を表示したるもの。

つか-がい-とつ[頭蓋骨](名)頭部をつゝみおほふ骨の總稱。あたまのほね。

つか-いさ[柄絲](名)刀の柄に卷く組絲。(緋)。

つかう-まつ-る[仕](自、ら四)「つかへまつる」の音便。即ち「つかふ」の敬語。「女御の御かへまつる」の音便。即ち「つかふ」の敬語。「女御の御もとに—やうにて」。

つかう-まつ-る[仕](他、ら四)「行ふ」又は「す」の敬語。「あまたをつかうまつらんなどいふに」。

つか-がしら[柄頭](名)刀の柄のさきにつくる「金具。

つかさ[丘](名)高き部分。高處。「山の—」。

つかさ[官、司](名)㊀やくにん。やくば。官廳。㊁をさ。かしら。長官。——**なびき**[官名](名)官職の名稱。やくめのとなへ。——**びと**[官人](名)官職につきてある人。官吏。——**めし**[官召](名)古昔、京都に在勤する官吏即ち京官の除目、毎年秋に行はる。「召の對。

つかさ[官奴](名)やくばの小使。

つかさ-どる[掌、司](他、ら四)《つかさ》を取る義》㊀職務として取扱ふ。官職として擔當す。㊁すべをさむ。支配す。主掌す。

つか-ざめ[柄鮫](名)鮫の皮の粒狀の突起ある所にて、刀の柄に卷くもの。

つか-つか(名、副)忌憚なくことばやく進み出て又はいひ出づるさまにいふ語。

つか-づか(名、副)前條の意味を強めたる語。

つか-ぢか[柿](名)「ぼう」に同じ。

つか-なみ[束並](名)「ぼう」に同じ。

つか-なぎ(名)古昔、藁(ワラ)を組みて壘の厚さ程につくりて座に敷きしもの。「わらびのほどろを敷き—をしきて夜のとゝとぎ」(藁稿)。

づ-がに[津蟹](名)【動】蟹の一種、河海の岩石の間に棲息す。鰲(ゴウ)にも手蟹生す。(毛蟹)。

つか-ぬ[束](他、な下二)㊀あつめて一つにくゝる。㊁あはせて一つにす。㊂あはせてすべつかさどる。

つかねる(他)「つかぬ」の訛。

つか-の-あひだ[束間](名)「つかのき」に同「じ。

つか-の-き[樽木](枕)「つかのき」は常擔木なるにより、「いやつぎ〳〵」に冠らする詞。

つか-の-ま[束間](名)曾時のあひだ。(頃刻)。

つかはし-めし(名)神佛の常に使役すと稱せらるゝ動物、即ち宇賀神の蛇、稻荷の狐の類。つかひ。

つか-ばしら[束柱](名)《支(ツカ)柱の義》梁(ハリ)

と棟(むね)との間などに立つる短き柱。(楹)。

つかは・す [遣](他、さ四) ❶さしだす。さしむく。❷たまふ。あたふ。❸命じて行かす。

つかはれもの [被使者](名) 「つかはしめ」に同じ。

つかひ [使](名) ❶つかふこと。もちふること。❷或事を傳へ又は辨ずるため、命じて先方へ行かする人。走使。 —**かた** [使方](名) つかふ方法。使用の法。 —**こな・す** [使](他、さ四) 用ひて役に立たす。巧(たくみ)にあつかふ。活用す。運用す。 —**て** [使手](名) ❶つかふもの。用ふる人。❷巧(たくみ)につかふ人。使用に熟したる人。「槍の—」。❸金錢を惜しまず費す人。 —**ざね** [使眞](名) 二人以上ある使者の中の重なる人。正使。使主。 —**どころ** [使處](名) 其ものを使用するに適當なる場合。 —**なら・す** [使馴](他、さ四) 久しく使ひて其事になれしむ。 —**な・る** [使馴](自、ら下二) 使用に馴る。 —**なれる**(自) 「つかひなる」の訛。 —**のをさ** [使長](名) ❶つかひのをさ。 —**ばと** [使鳩](名) 「でんしよばと」(傳書鳩)に同じ。 —**はらひ** [使拂](名) ぜにつかひ。 —**ばん** [使番](名) 昔時、本陣の號令を諸陣に傳へしもの。即ち武家の傳令使。 —**びと** [使人](名) ❶めしつかふ者。❷つかひする人。 —**みち** [使道](名) ❶使用の方法。用法。❷使用する地位。つかひどころ。 —**ひめ** [使姫](名) 「つかはしめ」に同じ。 —**め** [使女](名) めしつかひの女。 —**やっこ** [使奴](名) めしつかひの男。 —**をとこ** [使男](名) ❶前條に同じ。❷使者たる男子。

つがひ [番](名) ❶つがふこと。❷つがふもの。❸つがひめ。「骨の—」。❹雌雄の鳥獸を一對、牝牡。❺めをと。匹偶。 —**あ・ふ** [番合](自、は四) ❶くみあふ。❷つるむ。 —**め** [番目](名) つがふ所。くみあふ所。關節。「骨の—」。

つかひもの [遣物](名) 進物。おくりもの。

つか・ふ [使](他、は四) ❶用をなさしむ。役をなさしむ。使用す。はたらかす。もちふ。「槍を—」 ❷もてあそぶ。なす。演ず。「魔法を—」「手品を—」 ❸ひやす。「金を—」 ❹くらふ。「辨當を—」

つか・ふ [仕](自、は下二) ❶目上に侍して其用をなす。目下となりて其人のためにはたらく。「父母に—」「夫に—」(事)。❷仕官す。奉公す。

つか・ふ [支、閊](自、は下二) ❶さしつかへありて通らず。さしはりありて達せず。❷痞(つかへ)を起こす。

つが・ふ [番](自、は四) ❶二つのもの組み合ふ。くみあふ。❷配偶となる。對となる。❸牝牡つるむ。

つがふ [都合](名) ❶てつづき。てはず。だんどり。❷なりゆき。次第。❸をり。ばあひ。

つが・ふ [番](他、は下二) ❶くみ合はす。❷弦に當つ。「矢を—」。❸ことばを固(かた)む。「言葉を—」。

つ・がふ [都合](副) ひきくるめて。すべて。總じて。「—五圓」(通計)。

つかぶくろ [柄袋](名) 刀又は脇差の柄にかくる袋。古昔、雨雪又は旅行のときなどに用ひしもの。

つかへ [仕](名) つかふること。仕官。奉公。

つかへ [支、閊](名) ❶さしつかへ。さしつどひ。❷さしはり。ふさがり。❸痞などにて、胸の塞がるが如く苦しきこと。(痞)。

つかへどころ [仕所](名) ❶つかふる所。又、つかふるに適當なる所。❷古昔、院につかへし無位無官の人。又、其詰所。❸古昔、雜人・仕丁などの詰所。

つかへまつ・る [仕](自、ら四) 「つかふ」の敬語。

〔**つがへる**〕[番](他) 「つがふ」の訛。

〔**つかへる**〕[仕](自) 「つかふ」の訛。

つかまつりびと [仕人](名) つかへまつる人。

つかまつ・る [仕](他、ら四) 「つかうまつる」に同じ。

〔**つかま・へる**〕[捉](他、は下一) 「とらふ」。「つかまふる」の訛。

つかみ [摑](名) ❶つかむこと。❷圍碁にて、互先のものが、先方の握(にぎ)りて出したる碁石の數をいひあてたると然らざるとによりて、其先後を定むること。❸花合にて、場役の札をすべて手に持つこと。 —**あひ** [摑合](名) つかみあふこと。 —**あ・ふ** [摑合](自、は四) 徒手にてうちあふ。くみあふ。 —**ころ・す** [摑殺](他、さ四) ❶素手にて無造作にころす。❷つかみてころす。 —**だ・す** [摑出](他、さ四) ❶無造作に持出す。又、あらあらしくひつぱり出す。❷つかみて外へなげて出す。 —**どり** [摑取](名) ❶つかみて取ること。❷無造作に取ること。

つか・む [摑](他、ま四) ❶貪りて取る。❷手ににぎりもつ。手に握(にぎ)りとる。❸握りてあり。持ちてあり。

つがもない [形] ❶わけなし。❷不都合なり。

〔**つかゆる**〕[支](自) 「つかふ」の訛。

—**づから** [接尾] 名詞に添へて、「から」又は「より」の義を表す語。「身—」「手—」「心—」。

つからか・す [疲](他、さ四) つからす。

つから・す [疲](他、さ四) つかるるやうにする。つかれしむ。

つがり [連鎖](名) ❶鎖に似て絡(つな)ぎたるもの。❷くさり。❸口をくさりの如く仕立たる袋。茶入などを包(つつ)むに用ふ。

つか・る [漬](自、ら四) ❶ひたる。❷よく熟す。

つか・る [疲](自、ら下二) 氣力うせて事に堪へず。勢力おとろへてよわる。くたびる。(疲)。

†**つが・る** [連鎖](自、ら四) 相連なる。つらなる。つづく。

つがるぬり [津輕塗](名) 陸奥國津輕弘前地方より産出する漆器。若狹塗に似て彩漆を用ひ、あや雲の如し。たゞ金銀箔を用ひざるを異なりとす。

つかれ [疲](名) つかるること。くたびれ。よわり。

〔—**る**〕「つかる」の訛。

〔**つかん・とと**〕(名) 突然なる事柄。

〔**づかん・そくねつ**〕[頭寒足熱](名) 健康法にして頭の上部のすゞしく下部のあたゝかきこと。

つき [月](名) ❶たいいん(太陰)に同じ。❷月の影。太陰の光。「—にすかして見る」。❸遊星の衛星の總稱。「土星の—」。❹一年を十二に區別したる一。太陽暦にては三十日と三十一日と二十八日閏年には二十九日とし、太陰暦にては二十九日若しくは三十日を以て一個月とせり。❺一個月ごとになること。 —**とすっぽん** [月鼈] 兩者の懸隔甚しきにいふ。 —**をこゆ** [越月] 翌月になる。 —**をさせばゆびをみる** [指月認指] 月をゆびざして敎ふれば、さす指を見る義にして、道理を說き聞かせども其主意を認め得ず、徒に言語文字に拘泥して證索するにいふ。 —**をまたぐ** 兩月にかゝる。

つき [坏](名) 飲食物を盛る器。古昔のはすべて土器なりしが、後世に至り種々の製となれり。「高—」。

つき [槻](名) [植]楡科に屬する木。落葉の喬木。材は緻密にして木理あり。昔時は弓に作れり。

つき [盡](名) つくること。はて。「—お足らぬ」。

つき [搗](名) ❶つくこと。❷撞くこと。

つき [附](名) ❶つくこと。❷附屬すること。❸たより。てがかり。たづき。便宜。❹つきそひ。とも。❺火の移ること。「—のわるい炭」。

つき [突](名) 擊劍にて、のどのあたりを竹刀にて突くこと。

†**つき** [調](名) みつぎ。「—の布」。

—**づき** [付](接尾) 名詞に添へて、様子の意を表する語。「顏—」「口—」「言葉—」。

つぎ [次](名) ❶其後に續くこと。其あとにつゞくこと。「—の日」。❷其ものより一段低き地位。其もののすぐ下位。(亞)。

つぎ [繼](名) ❶つぎあはすこと。つぐこと。❷着物又は布帛のやぶれを、他の布帛の切にて補ひ繕ふこと。又、其補ひ繕ふに用ふる布帛の切。(補綴)。❸あとつぎ。後繼。「—のもののしまぬことを、いかで口惜しう思ふ」(源)。

〔**づき**〕(名) あとをくらましたる罪人に、其常の日をあはすこと。

つきあかり [月明](名) 月のひかり。月のかげ。

つきあ・ぐ [築上](他、か下二) 土石をつみて高くす。

つきあ・ぐ [突上](他、か下二) 下よりつきて上にあぐ。

つきあげ [築上](名) つきあぐること。 —**る**(他) 「つきあぐ」の訛。

つきあげ [突上](名) つきあぐること。 —**る**(他) 「つきあぐ」の訛。 —**ど** [突上戸](名) 突き上げて、庇(ひさし)の如くさし出だして置く戶。あげびさし。つきあげびさし。(活戶)。 —**びさし** [突上庇](名) 前條に同じ。 —**まど** [突上窗](名) 突上庇のあるまど。

つぎあし [繼足](名) 繼ぎたる足。

つきあたり [突當](名) ❶つきあたること。❷ゆきつまりたる所。

つきあた・る [突當](自、ら四) ❶行き進んで物に觸る。ゆきあたる。衝突す。❷ゆきつまる所まで行き進む。「—りて右へまがる」。

つきあ・つ [突當](他、た下二) つきあたらす。

つきあて・る [突當](他) 「つきあつ」の訛。

つきあは・す [突合](他、さ四) 雙方を相對せしめてとひあはす。

つぎあは・す [繼合](他、さ四) つぎてつけあはす。

つきあはせ [突合](名) つきあはすること。 —**ぎんみ** [突合吟味](名) 對審。對決。

つぎあはせ [繼合](名) つぎあはすること。

つきあひ [附合](名) つきあふこと。交際。

つき-あひ[ーアヒ][突合](名)つきあふこと

つき-あ-ふ[ーアフ][附合](自、は四)㊀互に附着す。つく。㊁交際す。まじはる。㊂道ゲれとなりて其人と同一の事をなす。「突く。

つき-あ-ふ[ーアフ][突合](自、は四)互に相

つき-いだ-す[ーイダス][突出](自、さ四)つきだす。

つき-い-づ[ーイヅ][突出](自、た下二)つきでる。とつ出ゆつす。

つき-いざ[ーイザ][繼絲](名)つぎをなすに用ふる絲。

つき-い-る[ーイル][突入](自、ら四)勢はげしく進み入る。

つき-い-る[ーイル][突入](他、ら下二)もしこむ。さしこむ。つきこむ。

〔つき-いれ[ーイレ][搗入](名)頼まれたる米或は餅を搗(ツ)き終(ヲ)へて、これを其人の家にをさむること。

〔つき-いれる(他)「つきいる」の訛。

つき-うす[搗臼](名)臼の一種、内にものを入れ杵(キ)にてつくもの。すりうすの對。(歩臼)。

つき-うた[次歌](名)元祿の頃に流行したる歌。つぎぶし。

〔つき-うま[附馬](名)馬四)に同じ。

つぎ-うま[繼馬](名)去ゆくつぎのうま。

つぎ-うるし[繼漆](名)物をつぎあはするに用ふる漆。(脂灰)。

つき-おくり[月送](名)㊀今月の事を來月へ送ること。㊁月毎におくること。

つぎ-おくり[次送](名)其次へ順操におくりゆくこと。

つぎ-おくり[繼送](名)つぎ〳〵におくりつたへること。「たへむとす。

つき-おと-す[ーオトス][突落](他、さ四)突きて去

つき-かか-る[ーカカル][突掛](自、ら四)㊀其もの

を目がけて突く。㊁せめかゝる。うってかゝる。㊂つきあたる。

++つき-がき[築垣](名)「ついがき」に同じ。

つき-かげ[月影](名)㊀月のひかり。つきあかり。㊁月のひかりにて映(ウ)る物の影。「髮をあげて居たる—」。㊂月の或は益(ミ)ち或は蝕(シ)けたる形。

つき-かけ[月掛](名)月々掛金を出すこと。

つき-がた[月形](名)㊀弦月の形。半圓形。㊁(數)二つの大圓の半圓周にて圍める球面形。

つき-がね[突鐘](名)「つりがね」に同じ。「撞鐘」。

つき-かは-す[ーカハス][突交](自、さ四)互に

つきあふ。「と。

つき-がはり[ーガワリ][月代](名)一月ごとに交代する

つき-かふ[ーカフ][築替](他、は下二)あらためてきづく。更につきなほす。

つき-かへ[ーカヘ][築替](名)つきかふること。又、つきかへたるもの。

つき-がへ[ーガヘ][月替](名)一月おき。

つき-かへ-す[ーカヘス][突返](他、さ四)㊀つきてあとへかへす。㊁勢強くあとへかへしやる。

㊂受けとらずして返却す。「本」。

つき-がみ[繼紙](名)つぎあはせたる紙。「一の

つき-がんね[突鎗](名)突出すやうに用ひて物を削るかんな、刃廣くして其隅端に柄あるもの。(曲刀、推刀)。

つき-き[接木](名)臺木に他の木の枝を接(ツ)ぎあはせて、生長せしむること。せつぼく。「るきず。

つき-きず[突傷](名)つき或はつかれて生じたる

〔つき-きめ[月極](名)一月ごとに事の始末をつくること。「一にて新聞をとる」。

〔つき-きり[附切](名)片時も其もの丶傍を離れず つきそひて居ること。又、其ものに手がかゝりて他の事にすこしも關係せざること。

つき-き-る[ーキル][突切](他、ら四)㊀つきてきりたつ。㊁とはしぬく。つちぬく。「切(キ)」。

つき-きれ[繼切](名)衣服又は布帛の屬とするもの。

つき-くだ-く[ークダク][搗碎](他、ら四)搗(ツ)きて細かくくだく。「ゞれしむ。

つき-くづ-す[ークヅス][突崩](他、さ四)つきてくずす。

つき-け[月毛](名)馬の毛色、茶毛の少しく赤ばみたるもの。(絡白馬、桃花馬)。

つき-げやき[槻](名)【植】「つき」に同じ。

〔づき-ごと(名、副)かたくなにして心のさばけざるさまにいふ語。「かゝると。

つき-ごし[月越](名)つきをまたぐること。二月に

つき-と-む[ートム][突込](自、ま四)㊀他の弱點に乘じてこれをせめなじる。㊁突擊す。

つき-と-む[ートム][突込](他、ま四)㊀さしこむ。さしいる。㊁入れまじふ。

つき-と-む[ートム][注込](他、ま四)㊀器の中にそゝぎ入る。㊁其人のために多くの費用を出す。

つき-ごめ[搗米](名)つき去ちげたる米。——

や[搗米屋](名)米を搗(ツ)き去ちげて賣る家。

つき-ごろ[月頃](名、副)數月このかた。月來。

つき-ごろ-す[ーコロス][突殺](他、さ四)刃物などを其もの丶體にさしこみてころす。

つき-ころば-す[ーコロバス][突轉](他、さ四)突きて其ものをころばす。

つき-さ-す[ーサス][突差](他、さ四)㊀つきたつ。たつ。㊁つきとほす。つちぬく。

つき-ざらひ[ーザライ][月復習](名)月毎にする遊藝などの復習。

つき-ざを[繼竿](名)とりはづし又はたゝみこみの出來るやうにつくりたる竿。(繼棹)。

つき-ざた-が-ふ[ーガシタガフ][附從](自、は四)㊀あとにつき行く。そばにつき行く。ともす。㊁をむかず。もとちず。㊂部下となる。配下に屬す。㊃おもねる。へつらふ。

++つき-ざ-むむ[ーザムむ](自、ま四)ものゝけたゝる。

つき-ざら-ぐ[ーザラグ][搗精](他、か下二)米などを搗(ツ)きて白くす。

〔つき-ざらげる(他)前條の訛。

つき-ざろ[月代](名)㊀++古昔、男の冠の下の髮を、半月の如くに剃(ツ)り下げたるもの。さかやき。㊁額に白毛のある馬。うびたひ。(蠟屋馬)。

つき-ざろ[月白](名)月の出でんとするとき、空の白み渡ると。「月の—ばかり見えて」。

++つき-ざろ-ふ[ーロフ][附](自、は四)互に突きあふ。つゝきあふ。「つき去ろひ目ぐはす」。

++つき-ず[ーセズ][盡](自、さ變)つきはつ。つく。「つきせぬ愛」。

〔つき-すう[ーフウ][突据](他、わ下二)勢あらく坐す。又、茫然として坐す。

〔つき-すわ-る[ーラリル][突坐](自、ら四)勢あらく坐す。又、茫然として坐す。

つき-ずゑ[月末](名)月の末日。げつまつ。

つき-そで[突袖](名)狹の隅に手を伸ノべ入れて、これを前へ張り出だすこと。

つき-そひ[ーソヒ][附添](名)つきそふこと。又、其人。

——-にん[附添人](名)つきそひてゐる人。

つき-そ-ふ[ーソフ][附添](自、は四)其人のそばにつきてあり。其人につき去たがひてあり。

つぎ-だい[接臺](名)㊀つぎ木の臺木。だいぎ。㊁ふみだい。

つき-たし[突出](名)㊀つきだすこと。㊁始めて

お始めて店を張り客をとること。——-**まど**[突出窓](名)つきあげ戸のある窓。

つき-たし[繼足](名)つぎ足すこと。補ふこと。

つき-だ-す[ーダス][突出](自、さ四)㊀突きて外へ出す。㊁勢はげしく出す。

つき-た-す[ータス][繼足](他、さ四)すでにある上に繼ぎて足す。おぎなふ。

++つき-たち[月立](名)「ついたち」に同じ。

++つき-た-つ[ータツ][月立](自、た四)㊀月改まる。

つき-た-つ[ータツ][突立](自、た四)㊀さゝる。又、たつ「とげがー」。㊁かどゝしく立つ。

つき-た-つ[ータツ][突立](他、た下二)㊀さしこむ。さす。たつ。㊁はげしく突く。

つき-た-つ[ーテツ][繼立](他、た下二)窗欄にて、人馬を繼ぎ贅ふ。

つき-たて[繼立](名)つぎたつること。——-**ば**[繼立場](名)人馬の繼立をなす所。窗欄。「——る(他)「つぎたつ」の訛。

つき-たてる(他)「つきたつ」の訛。

つき-たら-ず[月不足](名)胎兒の十個月に滿(ミ)たずして生まるゝこと。

つき-ち[築地](名)沼又は海などを埋(ウ)めて築(ツ)きたる土地。「一町」。

つき-づき[月月](名、副)月ごと。毎月。

〔づき-づき(名、副)刺傷又は腐物などの絕(タ)えずいたむさまにいふ語。

++つき-づき-し[ーヅキシ](形、二)「つかはし。ふさはし。「—く今めきたちんに」。

つぎ-つぎ-に[次次](副)㊀引き續きて。相次ぎて。㊁逐次に。かはるゞ〳〵。

つき-つ-く[ーツク][突付](他、か下二)㊀目前に差し出す。㊁強ひて其人にあてつく。

〔つき-つ-む[ーツム][突詰](他、ま下二)㊀むしきはむ。むしつむ。㊁其事を思ひこむ。

〔つき-つける(他)「つきつく」の訛。

つき-つ-む[ーツム][突詰](他、ま下二)㊀むしきはむ。むしつむ。㊁其事を思ひこむ。

〔つき-つめる(他)「つきつむ」の訛。

つき-て[繼手](名)つぎめ。

つき-て[注手](名)酒などを注(ツ)ぐ人。

++つぎ-て[尋](名、副)「ついで」に同じ。

つき-てあて[月手當](名)月々の手當。

〔つき-でっぱう[ーポウ][突鐵砲](名)「かみでっぱう」に同じ。「きゞる。

つき-とば-す[ートバス][突飛](他、さ四)ひどく突

つき-とほ-す[ートホス][突通](他、さ四)つきぬく。つちぬく。

つき-とほ-る[ートホル][突通](自、ら四)つちぬきとはる。

つき-と-む[ートム][突止](他、ま下二)㊀つきころす。さしころす。㊁突きさして動かぬやうにす。㊂むしつむ。むしきはむ。㊃いよ〳〵確(シ)かなる所を見屆く。

〔つき-とめる(他)「つきとむ」の訛。

つき-な-し[ーナシ][附無](形、一)㊀便宜なし。たづきなし。「人にあはんつきのなきには」。㊁不相應なり。にあはしからず。「折ふしの色合つきなからず」。

つき-なほし[ーナオシ][築直](名)つきなほすこと。又、つなきはしたるもの。「めてきづく。

つきなほ-す[ーナオス][築直](他、さ四)更に改

つき-ぬ-ぐ[突抜](自、か下二) とほり過ぐ。「つく。

つき-ぬけ[突抜](名) ㊀つきとほると。㊁表より裏へ行きかよひの出來ると。——**-ぢら**[突抜窓](名) 路次のつきぬけてある窓。{——**る**(自)「つきぬく」の訛。

++**つき-ぬの**[調布](名) 調(ヅ)に奉る布。

つき-ね-ぐさ[及己](名) 《搗き根草の義》【植】「ふたりしづかの一名。(根耳、細辛)。

++**つき-ね-ふ**[次嶺經](枕) 《山城と大和との間は、嶺(ネ)多くしてつぎ〳〵にあるよりいふ》「山背」に冠らする詞。

つき-の-え[月宴](名) 月を眺(ナガ)めてのさかもり。觀月の宴。

つき-の-かつら[月桂](名) 支那にて、月球中にありといひ傳ふる高さ百丈の桂樹。

つき-の-かほ[月顏](名) つきのかげ。つきのおもて。「人もなくて月の顏のみきら〳〵として」。

つき-の-き[槻](名) 【植】「つき」に同じ。

つき-の-く[突除](他、か下二) つきてのぞく。おしのく。

{**つき-の-ける**(他) 「つきのくの訛。

つき-の-とほり[月氷](名) 月の光の水に映りてきらめけるさまを、氷にたとへていふ語。

つき-の-さはり[月障](名) つきやく。月經。月期華水、天癸。

つき-の-ぢづく[月雫](名) ㊀一種の茸子、蒲萄の實に砂糖のころもを掛けたるもの。㊁露の異稱。

つき-の-ぢも[月霜](名) 月の光の明かなるさまを、霜にたとへていふ語。

つき-の-で-ぢほ[月出汐](名) 月ののぼると共に差し來る汐。

++**つき-の-ぬの**[調布](名) つきぬの。「ぢ。

つき-の-みち[月道](名) 月の光めてらすみち。

つき-の-みやこ[月都](名) ㊀月の中にありといふ都。月宮殿。㊁都の美稱。

つき-の-めぐり[月經](名) つきやく。つきのもの。

つき-の-もの[月物](名) 前條に同じ。

つき-の-わ[月輪](名) ㊀滿月の如き圓形。㊁裝束に飾る輪狀のもの。㊂象牙などにて造る。㊃熊の喉にある新月形の白毛。㊄蒔(ヲ)を輪にしたる茶碗。

つき-ば[織場](名) 人馬の織立をなす所、即ち廣場。志ゆくば。「郵亭」。

つき-ばえ[月映](名) 月の光のうるはしきと。

++**つき-ばし**[織橋](名) 柱を立て板を渡してかけ渡したる橋。「淀の—」。「曲板橋」。

つき-は-つ[盡果](自、た下二) 盡く盡てつつる。「つてつつる。

{**つきはてる**(自) 「つきはつ」の訛。

++**つき-はな**[洟](名) はなたる。

つき-はな-す[突放](他、さ四) ㊀突きてはなれしむ。㊁おして分れ去らしむ。

++**つき-は-む**[突食](他、ま四) 「ついばむ」に同じ。

{**つきはら**(自) 「つきはつ」の訛。

つき-ばら-ひ[月拂](名) 月末ごとに支拂をなす。

つき-ばん[月番](名) 月々交代しての受持。月がはりの番。又、其番にあたる人。

つき-ひ[月日](名) ㊀太陽と太陰と、日と月と。㊁時間の經過。光陰。——**-おひ**[月日貝](名) 【動】鋼鎧類中同柱類に屬する貝、大さ二三寸にして殼の半片は白く半片は紅し。「日月蟬」。「同じ。

++**つき-ひたひ**[月額](名) 「つき丸ろ」月代に

つき-ひと[附人](名) ㊀かしづき。つきそひ。もり。とも。「舞」。㊁+風附夫神附などの人。(遷人)。

++**つき-ひと-をとこ**[月人男](名) 月の異稱。

つき-ひは[織毘琶](名) 取外(ハズ)しの出來るつくりかたの琵琶。

つき-ふ[月賦](名) 「げつぷ」に同じ。

つき-ふし[次節](名) 「つぎうた」に同じ。

つき-ふそく[月不足](名) 「つきたちぢ」に同じ。

つき-ほ[接穗](名) 接木に接(ツ)ぐ苗木。

つき-また[月跨](名) 二個月にわたること。

つき-まち[月待](名) 二十三夜又は二十六夜などに、寢(ネ)ずして月の出づるを待つこと。

++**つき-まつ**[織松](名) 「たいまつ」に同じ。

つき-まざ-ふ[附纏](自、は四) 常に「囚など。つき從ひて離れず。

つき-まはり[月廻](名) めぐり來たる月の吉凶など。

つき-み[月見](名) 月をながめ賞すること。即ち觀

++古語　〃傳語方言　一字音

月、陰曆八月十五夜及九月十三夜を最も好期とす。——**-ぐさ**[月見草](名) 【植】蕨の異稱。——**-づき**[月見月](名) 陰曆八月の異稱。——**-の-えん**[月見宴](名) 月見のさかもり。觀月の宴。

つき-みず-づき[月不見月](名) 《さみだれにて月の見えざる義》陰曆五月の異稱。

つき-め[突眼](名) 點景畫などにて、人物の眼を、唯だ筆さきにて黑く點じてあくこと。

つき-め[織目](名) ㊀物と物と織ぎ合はせたる所。㊁家曾相續。

つき-もち[搗餅](名) 臼にて搗(ツ)きたる餅。

つき-もど-す[突戻](他、さ四) 「つきかへす」に同じ。

つき-もの[附物](名) ㊀其物に是非附屬してあるべきもの。例へば鎧に鍵の類。㊁つきそふ人。又、つきまとふ人。㊂人に遷(コ)りたる靈。もの、けの。「と。たとり。

つき-もの[織物](名) 衣服のやぶれを織ぎ繕ふ。

{**つき-や**[春屋](名) つきどめや。「の。(月經)。

つき-やく[月役](名) つきのさはり。つきのもの。

つき-やとひ[月雇](名) 一個月の給料を定めて雇ふこと。又、其雇はれたる人。

つき-やぶ-る[突破](他、ら四) ㊀つきてやぶる。㊁突進して一方を打破る。

つき-やま[築山](名) 庭園などに山の形に築きつくりたるもの。「た(やる。

つき-や-る[突遣](他、ら四) 突きてかな

つき-ゆみ[槻弓](名) 槻(ツ)の木を用ひてつくりたる弓。

つき-よ[月夜](名) 月のある夜。月の照る夜。(白夜、宵夜)。——**-がらす**[月夜烏](名) 月の光りに鳴く鴉。うかれがらす。

{**つき-よどみ**[月澱](名) あぶらしぐすり。

++**つきよみ-をとこ**[月夜見男](名) 月の異稱。

つき-わり[月割](名) ㊀月の數に分割すること。「もの。(賴、幡)。

{**づ-きん**[頭巾](名) 布帛にて作り、頭に被(カ)るげつぷ。

{**づきん-づきん**(名、副) 創などの絕(タ)えず痛(ダ)むさまにいふ語。

++**つく**[木菟](名) 【動】「みみづく」に同じ。

つく[釟](名) 弓に矢をつがふ所の去るしにうちたる金具。(唇牙)。

つ-く(他、か四) ㊀接合す。ひたとあふ。くっつく。あふ。㊁とゞく。いたる。達す。㊂離れず。去らず。とゞまる。㊃よりつどふ。よりあつまる。あつまる。「砂糖に蟻が—」。㊄つきそふ。かしづく。ともす。「隨」。㊅味方す。徒黨す。くみす。㊆服從す。志たがひ學ぶ。屬。㊇去たがひ學ぶ。よりゆく。「師に—」。「道に—」。「鼠」。「靈が—」。㊈加はる。添はる。㊉感染す。うつる。「病氣が—」。㊊のりうつる。よる。「狐が—」。「憑」。㊋向ふ。近づく。寄る。㊌浸き所に—」。㊍つたはる。ふ。「壁につきて廻り行く」。(沿)。㊎因緣す。關係す。よる。かゝる。「彼の身上につきて」。㊏あたひす。あたる。「一つが十錢に—」。(直)。㊐業務にかゝる。職務にあたる。「鼠」。㊑位にのぼる。即)。㊒居を占む。「墨に—」。㊓ともる。ひもむ。「墨に—」。㊔はじまる。そむ。「病み—」。㊕火燃ゆ。火移る。㊖結了す。をはる。「蔵置が—」。㊗成立す。なる。きまる。「思案が—」。㊘見ゆ。知らる。「人目に—」。㊙檀(ヲ)為たるもの根をおろす。接(ツ)ぎたるものあひたつ(植物にいふ)。

つ-く(他、か下二) ㊀接合せしむ。ひたとあはす。くっつかす。あはす。㊁とゞかす。いたす。及ぼす。㊂とゞむ。おく。㊃寄す。近づく。㊄向く。注ぐ。「目を—」。「氣を—」。㊅つきそはす。かしづかす。ともなはす。㊆味方となす。徒黨となす。くみとす。㊇服從せしむ。從屬せしむ。志たがひ學ばしむ。「よい師匠につけて稽古せさす」。㊈そむ。ぬる。抹す。「墨を—」(塗)。㊉加ふ。添ふ。㊊よちす。そはす。㊋はる。「紙を—」(貼)。㊌まろく。つくる。施す。「ふしを—」。「路を—」。㊍あとを追ふ。追尾す。「つけて行く」。㊎書き記す。志るす。「帳に—」(錄)。㊏あたひを定む。「値を—」。㊐業務にかゝらしむ。職務にあたらしむ。㊑臥(ネ)かす。坐(ヲ)らす。㊒ことよす。かこつく。(託)。㊓よそはふ。きる。「衣冠を—」(飾)。㊔をふ。はたす。「見—」。「考へ—」。㊕授く。あたふ。(付)。㊖火を點す。火を移す。

つ-く[盡](自、か上二) ㊀空しくなる。なくなる。(竭)。㊁をはる。はつ。㊂極に達す。きはまる。「文章此に至つて—」。

つ-く[築](他、か四) 土石を突き固(カ)めて積む。きづく。「石垣を—」。

つ-く[衝突](他、か四) ㊀勢急に觸る。一氣に當つ。「槍で—」。㊁棒などの先端にて打ち鳴ちす。「鐘を—」。「鐵」。㊂勢はげしく向ひ進む。㊃嘔吐す。はく。「反吐を—」。「うそを—」。㊄志のぐ。おかす。「雨を—」。

つ-く[搗](他、か四) 杵(キ)の先端にて強く觸(ツ)れあつ。「餅を—」。「春」。

つ-く[漬](自、か四) ㊀うるはふ。ひたる。つ

++古語　〃傳語方言　一字音

かる。㊁漬物よく熟す。

つ・く[漬く]（他、か下二）㊀うるはす。ひたす。㊁漬物に馴す。

つぐ[梼榔]（名）【植】棕櫚科に屬する木、暖國に產す、形棕櫚に類す、材は黑褐色の斑條ありて堅く、種々の用に供せられ、皮毛は繩又は刷毛などの料に用ひらる。

つ・ぐ[次]（自、か四）㊀其後に接續す。つゞく。㊁其下に位す。其後につく。（亞）。

つ・ぐ[注]（他、か四）器の中に注(ツ)ぎ入る。たちしとむ。そゝぐ。「酒を—」。

つ・ぐ[繼、續]（他、か四）㊀たえたるをつなぐ。離れたるをつゞくる。こはれたるを合はす。「茶椀を—」「骨を—」「接」。㊁後を承く。次に立つ。「位を—」（圖）。㊂前の物事をうけ傳ふ。㊃前の物事により從ふ。「襲」。㊄加へ足す。たす。「扶を—」。

つ・ぐ[告]（他、か下二）㊀報知す。志らす。㊁かたる。はなす。㊂教へ說く。いひ聞かす。㊃ふれ示す。「天下に—」。㊄まうしあぐ。まうす。㊅あはす。のたまふ。

づく[木菟]（名）【動】「みみづく」に同じ。

づく[銑]（名）「づくてつ」（銑鐵）に同じ。

づ・く[豆蔻]（名）【植】膽八蔻科に屬する木、葉は長楕圓形にして銀色を有す、花は五瓣にして淡綠黃色を呈し尖頭開裂す、果實は龍眼肉に似て尖(ガ)り、辛くして香しく藥用に供せらる。「膽八蔻」。

〔—づく[盡]（接尾）㊀或名詞に添へて、ある限りを盡くす意を示す語。「相談—」。㊁或名詞に添へて、それゆゑに自由にせらるゝ意を表はす語。「力—」。

つく・いも[佛掌薯]（名）【植】ヂ頭科に屬する植物、形やまのいもに似て葉稍や圓し、地下莖は大にして塊狀をなし味美なり。「麗」(ユ)りてとろゝを製するに用ふ。「つくいも」。（佛頂薯）。

〔**つくね・にんぎやう**[捏人形]（名）つちにんぎやう。

〔**つく・ねる**[捏]（他、な下一）手にて「捏」(ユ)ねて作る。

〔**つくねん・と**（副）何事をもなさず茫然としてあるさまにいふ語。

つぐの・き[枕榔木]（名）【植】「つぐ」に同じ。

つく・の・くに[木菟國]（名）「つくとりのくに」に同じ。

つく・の・ぢま[木菟島]（名）前條に同じ。

つぐの・ひ[賃]（名）つぐのふと。つぐのふ財。あがなひ。——**きん**[賃金]（名）つぐのひに出だす金。——**びと**[賃人]（名）やとはれて勞働する人。ひようとり。（客作兒）。

つぐの・ふ[賃]（他、は四）㊀財物を出だして製ふい補ふ。うめあはす。かへす。㊁財物を出だして賃任又は罪過をまぬかる。

つぐ・ばね[舶]（名）海上に浮ぶる大船。

つく・ばね[衝羽根]（名）㊀はね。羽子。㊁【植】檀香科に屬する小木本、深山に生ず、葉は尖頭を有し、花は初夏に開き四瓣にして淡綠色を呈す、果實

つくし[土筆]（名）【植】「つくづくし」に同じ。

—**づくし**[盡]（接尾）或名詞に添へて、其範圍のものを列擧する義にいふ語。「紋—」。「國—」。

つくし・ごと[築紫琴]（名）㊀琴の一名。字多天皇の時、筑紫の石川の色子といふ金鍵、豐前國彥山より此名あり。㊁俗曲を奏する十三絃の琴の稱、後奈良天皇の頃、肥前の賢順といふ人これを創始し、筑後の善導寺の僧法水圓東に下りて其技寶文の頃、を傳へしより此名あり。

つく・す[盡]（他、さ四）㊀空しくなるやうにす。無くなす。㊁ある限りをあげて、これに致す。「力を—」。「繩」。㊂をふ。はたす。㊃詳かにす。（悉）。

づく・せん[銑錢]（名）鐵にて吹きたる錢。なべせん。（鑄錢）。

つく・だ[佃]（名）《作田(ツクダ)の義》耕作する田。つくりた。墾田。墾田。——**に**[佃者]（名）《もと江戸佃島にて腹出したるより此名あり》一種の食品、小魚を醬油にて煮しめたるもの。——**びと**[佃人]（名）耕作する人。

つく・づく[熟]（副）念を入れて。つらつら。志っさて生ずる子囊群の稱、其形筆に似て節あり、食用とす。

つくづくし[土筆]（名）【植】杉菜の地下莖より出づ。つくし。ふでのはな。「筆頭菜」。——**ばな**[土筆花]（名）前條に同じ。

++**つくつく・ぼふし**[蜩]（名）《昭蟬(クシ)の一種、最も小形にして、體色黑く黃綠の斑紋あり、秋の末に鳴く。寒蟬。（頓蛄）。

づく・てつ[銑鐵]（名）鐵鑛をとかして其鐵分のみを採取したるもの、稱、堅くして折れ易く、鍋釜などを鑄造する料とす。なべがね。

++**つく・さり**[木菟]（名）【動】「つく」に同じ。

—**の・ぢま**[木菟島]（名）筑紫の異稱。

つぐ・ひ[賃]（名）「つぐのひ」に同じ。

つぐな・ふ[賃]（他、は四）「つぐのふ」に同じ。

〔**づくに・ふ**[木菟入]（名）づくの如く肥滿して、にく〳〵しき坊主頭の人をのゝしりていふ語。

つくね・いも[佛掌薯]（名）【植】ヂ頭科に屬する植物、形やまのいもに似て葉稍や圓し、地下莖は大にして塊狀をなし味美なり。「麗」(ユ)りてとろゝを製するに用ふ。「つくいも」。（佛頂薯）。

〔**つくね・にんぎやう**[捏人形]（名）つちにんぎやう。

〔**つく・ねる**[捏]（他、な下一）手にて「捏」(ユ)ねて作る。

〔**つくねん・と**（副）何事をもなさず茫然としてあるさまにいふ語。

++**つく・の・き**[木菟國]（名）「つくとりのぢま」に同じ。

++**つく・の・ぢま**[木菟島]（名）前條に同じ。

つぐの・ひ[賃]（名）つぐのふと。つぐのふ財。あがなひ。——**きん**[賃金]（名）つぐのひに出だす金。——**びと**[賃人]（名）やとはれて勞働する人。ひようとり。（客作兒）。

つぐの・ふ[賃]（他、は四）㊀財物を出だして製ふい補ふ。うめあはす。かへす。㊁財物を出だして賃任又は罪過をまぬかる。

++**つぐ・の・ふね**[舶]（名）海上に浮ぶる大船。

つく・ばね[衝羽根]（名）㊀はね。羽子。㊁【植】檀香科に屬する小木本、深山に生ず、葉は尖頭を有し、花は初夏に開き四瓣にして淡綠色を呈す、果實

は頭上に四分せる廻りて羽子狀をなし食用に供せらる。はじのき。こぎのき。（胡鳥子）。——**さう**[衝羽根草]（名）【植】百合(ユリ)科に屬する草、東北の深山に生ず、一莖にして四個以上の葉輪生し、其頂上に一花を著く、葉はさゝゆりに似て薄し、花は四瓣にして綠色なり。（王孫、杜蘅）。

つく・ばひ[蹲]（名）㊀つくばふと。㊁庭の手洗鉢のある處、つくばひて洗ふが故に此名あり。

つく・ば・ふ[蹲]（自、は四）《突き這(ハ)ふ義》うづくまる。

++**つく・ぶ**[嚏]（他、は四）「つぐむ」に同じ。

++**つぐ・ふね**[舶]（名）「つぐのふね」に同じ。

つく・ぼり[突棒]（名）昔時、罪人などを抽(ク)ふるに用ひし三道具の一、頭部は鐵にてつくり、形は擂木(モノ)に似て多くの齒あり、長くして丈夫なる柄をつく、其頭部を抽へんとする人の袖などにからむ。

[うぼくつ]

++**つくま・ねべ**[筑摩鍋]（名）古昔、筑摩祭に里の女のかぶりて神與に從ひたりといふ鍋、もち冠る男の數だけを重ねて被れりといふ。

つくま・まつり[筑摩祭]（名）近江國阪田郡の筑摩神社の祭事、四月一日に行はる。

つぐみ[鶇]（名）【動】蟲雀類中つぐみ科に屬する鳥、山中の穴などに棲(ス)む、嘴は大くして上稜稍々彎曲す、腹部は黃白色にして紫黃色の斑點あり、雄はよく囀(ヅリ)る。

[みぐつ]

つぐ・む[嚏]（他、ま四）口を閉ぢて言を發せず。無言にてあり。だまる。もだす。「鉗」。

—**づくめ**[盡]（接尾）㊀或語に添へて、其限りをつくす意を表はす語。「乾—」。㊁或語に添へて、其物事のみを用ひたる意を表はす語。「黃金—」。㊂或語に添へて、其物事ゆゑに自由にせらるゝ意を表はす語。「力—」。「金—」。

++**つくも**[江浦草]（名）海草の名。藻。++——**がみ**[江浦草髮]（名）老女の白髮、其江浦草に似たるによりていふ語なりとぞ。

++**つくも**[九十九]（數）《「百年に一年足らぬつくもがみ我をこふらしもかげに見ゆ」といふ古歌に出づ、白の字は百より一劃を除きたる形なれば白髮の意に喩へたるなりといふ》百より一を減じたる數。即ち九十九の稱。

++**つくも・どころ**[作物所]（名）古昔、禁中進物所の西にありて、腹造・彫刻・鎔冶等をなしゝ細工

つくり[造、作]（名）㊀つくること。㊁つくりたるさま。つくりたる體裁。㊂よそほひ。粧飾。「若—」。㊃

++**つく・よ**[月夜]（名）「つきよ」に同じ。「星—」。「場」。

つくり[旁]（名）漢字の偏に添へたる部分の稱、例へば鮑・妙の「包」「少」の類。（右文）。

つくり[造、作]（名）㊀つくること。㊁つくりたるさま。㊂よそほひ。粧飾。「若—」。㊃

つくり・いだ・す[作出]（他、さ四）㊀こしらへいだす。「に同じ。

つくり・い・づ[作出]（他、た下二）前條に同じ。

つくり・えだ[作枝]（名）草木の枝に擬してつくりたるもの。

つくり・ぬや[作親]（名）かりのおや。とりおや。

つくり・かた[作方]（名）㊀つくる方法。つくるさま。㊁つくりたる體裁。つくりたるもの。「鞠」。

つくり・かは[革]（名）《作皮の義》なめしがは。

つくり・ざま[作樣]（名）つくりたるさま。

つくり・ざね[作字]（名）我國にて創作したる漢字、即ち國字、例へば辻又は峠等の如し。

つくり・だ[作田]（名）「つくだ」佃に同じ。

つくり・た・つ[作立]（他、た上二）㊀こしらへあぐ。㊁盛によそほふ。盛にかざる。「(ア)ぬと。

つくり・たて[作立]（名）つくりをはりて未だ程經ぬうちにつくると。又、其つくりのもの。

つくり・つち[作土]（名）耕地の上層の土壤。

つくり・て[作手]（名）つくる人。さくにん。

つくり・どり[作取]（名）年貢などなく、耕作したる土地の全收穫を自己の所有とすること。

つくり・な[作名]（名）いつはりなのる名。僞名。

つくり・ぬき[作泣]（名）恐しくもなきに泣(ナ)くさまをよそほふこと。

つくり・ばな[造花]（名）紙又は布帛などを用ひて花の形を作ること。又、其つくられたるもの。ざうくわ。剪綵花。

つくり・か・ふ[作替]（他、は下二）更に改めて作る。こしらへなほす。

つくり・かへ[作替]（名）㊀つくりかふること。つくりかへたるもの。㊁在來の歌曲の口調に擬して作りたる歌曲。——**る**（他）「つくりかふ」の訛。

つくり・ごと[作事]（名）其事實なくたゞつくり構(カ)へたる事柄。こしらへごと。流言。

つくり・ごゑ[作聲]（名）よそほひてわざと出だす地聲。なちぬ聲。又、其さまをよそほひてわざと出だす聲。

つくり・さいも[作才子]（名）才子ぶる人。

つくり・ざかや[造酒屋]（名）酒をかもしつくりてあきなふ家。

くりーくりく

くりーくりく

くりーくりく

つじ-だはら [辻茶屋] (名) 路傍に小屋掛して飲食する下等の茶屋。

つじ-すまふ [辻相撲] (名) 路傍に小屋掛して興行する下等の相撲。

つじ-せつぼふ [辻説法] (名) 辻に立ちて往来の人に説法すること。

つじ-だう [辻堂] (名) 辻に建てゝある堂宇。

†**つじ-だま** (名) 【動】「よくい」(蓑虫)の古語。

つじ-だんご [辻談議] (名) 辻に立ちて往来の人にする議論。「たゆること」

つじ-つじ [辻辻] (名) それ〴〵の辻。「一々か」

つじ-つじ (名、副) 幾のあちこちの一方に、そこかに歩む足音にいふ語。「音」

つじ-はたご [辻馬車] (名) 辻に客待する乗合馬車。

つじ-はなん [辻番] (名) ❶「つじばん」と上又は「つじばんにん」の略言。❷「アンケート」の一名、其形の番小屋に似たるより云ふ。——**ばしよ** [辻番所] (名) 徳川時代に、江戸市中警備の目的外に設けてあるもの。街衢を警衛せしめし所。——**にん** [辻番人] (名) 辻番所に詰め居て番所にあたりし人。

[じばん]

つじ-はんつけ [辻番附] (名) 辻に張り出した芝居附。「芝居附」

つじ-ぼ-ドケ [辻子仏] (名) 辻子の中に安置した地蔵。

つじ-まつり [辻祭] (名) 古昔、辻神にて流星祭を行ふこと。

つしま-ど [対馬産] (名) 対馬国より産出する硯石。かゝりの新出しに用ふるもの。「もしくひと」

つじ-みせ [辻店] (名) 路傍にある店。

†**つじ-むらさき** (名、形動) 紫に色つきにしも。

†**つじ-ぬり** (名、形動) 紫に色つきにしも。

つじ-ぼ [辻坊] (名) 辻に出でて物を売る人。

つじ-やう [頂上] (名) あたまのうへ。

†**つしやか** (名) たしかなるさま又はあちこちとさまざまなるにいふ語。「一なる人」

つじ-やくしや [辻社] (名) 路傍にたてたる社、道祖神。

つ-ぞえ [図書] (名) 「こぞえ」に同じ。——**くわん** [図書館] (名) 「こぞえくわん」に同じ。——**の-かみ** [図書頭] (名) 図書寮の長官。——**ぬりつ** [図書寮] (名) 古昔、中務省に隷して図書一切の事を掌りたる官。又、現今、宮内省の所管にして、帝室の図書・記録を保存し且図書・典籍講習に関する事務を管理する所。

(**つ-せき** [図書] (名) ❶地図と口絵。❷図書。

(**つ-せつ** [図説] (名) 図を挿入して説明してある書。

つた [蔦] (名) ❶【植】葡萄科に属する草、葉茎にして初に直立すれど、茎は茎状に分岐して互生し、秋季に至りて紅葉す。花は小形にして淡黄色を呈し、夏の頃開花し、漢名爬墻虎。❷蔦所の名。つたの葉を描(え)きたるもの。——**うるし** [蔦漆] (名) 【植】漆科に属する草、山野に生ず。茎に似て物に纏繞し、花もまた茎に類す。やまうるし。

つた [寸法] (名) 「すき」の音。

ヅ-ダ [頭陀] (名) 梵語 Dhuta-anga の音。仏の行〴〵(修)を修(ま)ひて修行すること。又、其僧。

(**つ-だい** [図題] (名) 作図又は絵画の題。

つ-だし [井出] (名) 堰(いで)より船を出だすこと。

†**つた-つた** (名、副) 切れ切れになるさまにいふ語。「ずたずた」(すた〳〵段〳〵分々)。

(**つた-つた** (名、副) 前後に同じ。

つた-なし [拙] (形ク) 〔古〕(ツ)無しの義。

つち-あな [土穴] (名) 土中にはりたる穴。「色」

つち-いろ [土色] (名) 黒くして所々を帯びたる色。

つち-かご [土籠] (名) 土をいれてはこぶかご。

つち-か-ふ [培] (自、は四) 〔古〕土を根にかけて、草木を養ふ。培養す。

つち-かべ [土壁] (名) つちにて塗りたる壁。

†**つち-ぎみ** [土公] (名) 土公神。

つち-くさ-し [土臭] (形ク) ❶土のにおひあり。❷〔比〕ひなびたる気風あり。

つち-ぐも [土蜘蛛] (名) ❶〔動〕蜘蛛の一種、頭胸大くして赤黒し、岩石又は腐木の土に接する所などに、蜘蛛の巣を造りて棲(す)む。あなぐも。ふくろぐも。❷上古、穴居せし一種の異族、性強暴なりしもの。

つち-ぐら [土倉] (名) ❶地を掘りて物を貯ふる所。あなぐら。❷土を塗りたる蔵。どぞう。

つち-ぐるま [田車] (名) 鉄所の名。昔より田(ま)き田でたる多くの車の尖の端末に鉄をとりつけたるもの。

つち-くれ [土塊] (名) ❶土のかたまり。❷塵。「資宮の忌詞」。——**ばど** [土塊鳩] (名) 【動】「きじ」の一名。「んよりと異し」

つち-ぐろ-し [土黒] (形ク) 土の如くどす黒し。

つち-けぶり [土煙] (名) 塵土のたち揚(ア)がるもの。煙の如く見ゆるもの。(蒙)。

つち-けむり [土煙] (名) 前項に同じ。

†**つち-ごあ** [土埃] (名) ❶土をこねるもの。❷塵土をこねるに用ふる道具。

つち-ざいく [土細工] (名) 土を用ひたる細作。

†**つち-すりこ** [陝] (名) 〔古〕土摺りの臼。魚の頭の肉を取る。

つち-せい [土製] (名) 土を用ひて製すること。又、其製したるもの。

†**つち-たち** [獨活] (名) 【植】「うどの」の古語。

つち-ど [土戸] (名) 外面に土を塗りたる引戸。多く土蔵の戸口などに用ふ。

†**つち-どの** [土殿] (名) 土を塗りたる殿。

つち-なべ [土鍋] (名) 土製のなべ。

つち-ならし [土均] (名) つちくれを砕きて土壌をならすこと。

つち-にんぎやう [土人形] (名) 泥土にて作りたる人形。土偶(泥製人)。「埴」

つち-の-え [戊] (名) 干支の第五。十干の第五。

つち-の-かみ [土神] (名) 土を守るといふ神。は土地神。「屋敷神」

つち-の-と [己] (名) 干支の第六。十干の第六。

つち-の-とし [土年] (名) 地中に設けたる年。「蔵」(土蔵)

つち-はし [土橋] (名) どばし。

†**つち-はじかみ** [土蔵] (名) 【植】生薑の古語。

つち-はち [土蜂] (名) 【動】「あなばち」の一名。

つち-はた [土蚕] (名) 【動】蚕蛾科中蛾蚕科に属する昼蛾にして黄褐色を呈し黄色の斑紋あり、初にも淡黒色の斑紋あり、よく飛ぶ。くもばった。「ふはつ」

つち-はつけ [土蛾] (名) 地に手臥せしめて行く。

つち-はりつけ [土蛾] (名) 前項に同じ。

つち-はんめうり [土斑猫] (名) 【動】はんめうの一種、長さ一寸余、全体暗黒色にして紫色を帯び、細(ほそ)き斑点あれど、翅は光石同に輝(て)む。はつ。(蜀)。

†**つち-ばり** [土物] (名) 古昔、土の附属具、泥を除くための物。「泥」

つち-ふる [土振] (名) 土を振ふこと。

つち-ふまず [土不踏] (名) 足の裏の凹みたる部。(足心)。

つち-ふ-るひ [震] (自、ら四) 〔古〕土地を震動。地の地方より甚き震ふられたる土砂所の如く陸る。

つち-ふるひ [土揺] (名) 土のかたまりをふるひ目のあらき篩。

つち-へん [土偏] (名) 漢字の偏の名。即ち城・垣等の左方にある土の字の偏。

つち-ぼとり [土筆] (名) 土筆の異称。

つち-ぼたる [地蛍] (名) 【動】蛍の幼虫の水中に生じて尾に光りあるもの。「ぶ」。

つち-ぼ-トケ [土仏] (名) 泥土にて作りたる仏像。

つち-や [土屋] (名) ❶岩屋。土室。❷屋土又は砂などを貯ふる家又は人。

†**つち-やぐら** [図帳] (名) 古昔、民部省に備付けられたる田畑の図面。

つち-やき [土焼] (名) 素焼の土器。

つち-やだう [土物] (名) 土地のやどり。

つち-ゆうり [土年] (名) 地中に設けたる年。「蔵」

つち-わり [土割] (名) 土地を割るに用ふる斧。

†**つち-ゐ** [土居] (名) 土を盛りてきづきたる堤。

つつ [筒] (名) ❶圓く長くして中の空虚なるもの。くだ。(管)。❷鉄砲又は砲身。❸精巧にて、小鉄又は大砲。「大一」。❹井戸。

つつ (助) 〔現在の意を表す助動詞「つ」の重なりたる語〕❶この時を賞しながらかの時を賞す意を表はす語。「ながら」「知り一行く」。❷其はたゝきの現に繰返す語。「富士の高根に雪は降り一」。

つつ [十] (数) とを。「語り」で、十九。「一や」はたち。

つつ-ぬけ [筒抜] (名) 筒の中を通ること。

つつ-ぬ-ぐ [脱] (自、が四) 〔古〕(ツ)抜ぐの義。

つつ-ぬ-ける [筒抜] (自、か下一) 筒の中を通る。

つつ-ぬ-ぬ [脱] (自、な四) 〔古〕(ツ)抜ぬの義。

つつ-ぬ-ぬ-ける [筒抜] (自、か下一) 〔古〕(ツ)抜ぬけ

ヅ-ツ[豆子](名)《字の唐音》中の深き桐の如きもの。

—づつ[宛](接尾)《個々の義、宛は充の字の訛》各同一の數を配當する意を表する語。あて。「十—」。

(づ-つう[頭痛](名) ㊀頭の痛(ヅ)む病氣。(頭病、頭疾)。㊁心配。心痛。

つづ-ら-ら-ら[津津浦浦](名) 到る所の傳遍。

つつ-え-り[筒領](名)「くびかみ」に同じ。

つつが[恙](名) ㊀やまひ。わづらひ。㊁「つつがむし」の略言。**——なし**[無恙] やまひなし。わづらひなし。

つっ-かか-る[突掛](自、ら四) ㊀つきかゝる。㊁ひっかゝる。

つっか-く[突掛](他、か下二) ㊀履物を指先にすゑしかけて履(ハ)く。㊁むしつけて其世話をせさす。

つっかけ[突掛](名) ㊀つっかくること。㊁だしぬけになすと、直接になすと。**——-ぎり-**[突掛草履](名) 職人などが足の指先につっかけて草履をはくこと。**——る**(他)「つっかく」の訛。

つつが-の-むし[恙蟲](名)【動】「つつがむし」に同じ。

つつ-ガハラ[筒瓦](名)「をガハラ」に同じ。

つっ-かひ[突支](名) つっかふこと。つっかふもの。つっぱり。**——-ぼしら**[突支柱](名) 物をつっかふための柱。**——-ぼり**[突支棒](名) 物をつっかふための棒。

つっ-か-ふ[突支](他、は四) ㊀物にあて、これを支(サ)へ持つ。かふ。㊁傍より支へ持つ。さゝふ。たすく。

つっ-か-ふ[突支](自、は四) 對抗す。はりあふ。あたる。

つっ-かへ-す[突返](他、さ四)「つきかへす」に同じ。

つつが-むし[恙蟲](名)【動】蜘蛛類に屬する小蟲、形狀「だに」に類し、人の皮膚に寄生す。

つづき[續](名) つゞくこと。又、つゞくもの。**——-もの**[續物](名) 一回又は一席若しくは一卷にて讀切とならざる小說・講談などの稱。「ぎり」。

つつ-きり[筒切](名) 長き物を眞横に切ること。わり。つながる。つちなる。

つっ-き-る[突切](他、ら四)《つきつくの略言》とはりぬく。

つっ-く[突](他、か四)《つきつくの略言》㊀或事をなさしめぬくるしむ。㊁[水]をさす。なかをさく。

つづ-く[續](自、か四) 絶えずにあり。切れずにあり。つながる。つちなる。(連續、連續)。

つづ-く[續](他、か下二) つゞくやうにす。つちぬ。つなぐ。「よろづに思しつゞけられて」。

つつ-ぐち[筒口](名) つゝき。

つつ-げ[淋巴](名) 鳥の初生の毛。

つづけ-うた[續歌](名)「れんが」(連歌)に同じ。

つづけ-うち[續打](名) つゞけざまにうつこと。

つづけ-ざま[續樣](名) 物事のひきつゞきてやまざるさまにいふ語。

つづける(他)「つづく」の訛。

つっ-けんどん[突慳貪](名) いと邪見なること。(東京の方言)。

つっ-とみ[突込](名)「つきこみ」に同じ。

つっ-と-む[突込](他、ま四)「つきこむ」に同じ。

つっ-ころ-す[突殺](他、さ四)「つきころす」に同じ。

つっ-かへ-す[突返](他、さ四)「つきかへす」に同じ。

つつが-むし[恙蟲](名)【動】蜘蛛類に屬する小蟲、形狀「だに」に類し、人の皮膚に寄生す。

つづき[續](名) つゞくこと。又、つゞくもの。**——-もの**[續物](名) 一回又は一席若しくは一卷にて讀切とならざる小說・講談などの稱。「ぎり」。

つっ-きり[筒切](名) 長き物を眞横に切ること。わり。つながる。つちなる。

つっ-き-る[突切](他、ら四)《つきつくの略言》とはりぬく。

つっ-く[突](他、か四)《つきつくの略言》㊀或事をなさしめぬくるしむ。㊁[水]をさす。なかをさく。

つづ-く[續](自、か四) 絶えずにあり。切れずにあり。つながる。つちなる。(連續、連續)。

つづ-く[續](他、か下二) つゞくやうにす。つちぬ。つなぐ。「よろづに思しつゞけられて」。

つつ-ぐち[筒口](名) つゝき。

つつ-げ[淋巴](名) 鳥の初生の毛。

つづけ-うた[續歌](名)「れんが」(連歌)に同じ。

つづけ-うち[續打](名) つゞけざまにうつこと。

つづけ-ざま[續樣](名) 物事のひきつゞきてやまざるさまにいふ語。

つづける(他)「つづく」の訛。

つっ-けんどん[突慳貪](名) いと邪見なること。(東京の方言)。

つっ-とみ[突込](名)「つきこみ」に同じ。

つっ-と-む[突込](他、ま四)「つきこむ」に同じ。

つっ-ころ-す[突殺](他、さ四)「つきころす」に同じ。

つっ-とろば-す[突轉](他、さ四)「つきころばす」に同じ。

つっ-さき[筒先](名) ㊀筒のさき。㊁鐵身又は銃身の口。㊂消防夫にて「ポンプ」のさきをあやつるかゝりの者。

つっ-さき[筒咲](名) 花瓶の筒の如くになりて咲くもの、朝顏の花の類。「同じ。

つっ-さ-す[突差](他、さ四)「つきさす」に同じ。

つつじ[躑躅](名) ㊀【植】石南科に屬する木、高さ丈餘に達す、葉は深綠色を呈し、花冠は漏斗狀をなす、花は色種々ありて初夏に開く。「映山紅、杜鵑花」。㊁かさねの色目、表は蘇芳又は紅梅にして裏は青又は濃き蘇芳なり。「同じ。

つつしみ[慎](名) ㊀つゝしむこと。㊁德川時代に、士分に科せし閉刑の一にして還塞の輕きもの、家にともちしめて白晝外出することを許さず。

つつし-む[慎](他、ま四) ㊀大事にす。かろんじしくせず。むもんず。「言行を—」。㊁嚴重にす。むごもかにす。㊂專一に守る。まもる。「其開く所を—」。㊃ろゝ〳〵しくす。ひかへめにす。㊄自ら警戒す。いましむ。㊅齋戒す。ものいみす。

つっ-ぶり[筒尻](名) 筒の後部。つゝさきの對。

つづしり(名)「つゝしりうたふ歌」。**——-うた-ふ**(名) つゝしりうたふ歌。

つづしり(名、副) 多量なるさまにいふ語。(は四) つゝしりて歌ふ。

つづし-る(他、ら四) ㊀少しづゝ事をす。「つゝしり歌ふ」。㊁少しづゝ食ふ。「藍鯛丟はからなとを—はどに」(曬)。㊂くちずさむ。「謠言。

つづしろ-ふ[謠言](他、は四)「つづしるこ

つっ-そで[筒袖](名) 衣服の袖の袂(ハ)なくして筒の狀をなすこと。又、其衣服(窄袖)。

つつ-だい[筒臺](名) 鐵身又は砲身をむく臺。

つつ-だけ[筒竹](名) 節切にしたる竹。

つっ-た-つ[突立](自、た四) ㊀まっすぐに立つ。㊁急に立つ。「ヒ。

つっ-つ-く[突突](他、か四)「つつく」に同

つつっぽ[筒袖](名) つゝそで。

つっ-ざ(副) 急に身を動かすさまにいふ語。

つっ-ぱり[突張](名) ㊀つっぱること。㊁つっぱるために用ふる柱。

つっ-ぱ-る[突張](他、ら四)《「つきはる」の音便》㊀ものを突きあてゝ推(オ)す。㊁ものを突きあてゝ支(サ)ふ。㊂さゝふ。うけとむ。㊃あす。ふせぐ。

つつま-し(形、二) 慎かし。うひ〳〵し。辭酌せらる。「—ながちひきならしけるを」「—けれどゐざりよりて」。

つづま-やか[約](名) ㊀つゞまりて小さきこと。つゞまりて短きこと。つゞまりて少なきこと。㊁てみじかく。簡單。簡略。㊂詩文ならざること。はしいまゝならざること。

つづまり[約](名) つゞまること。つゞまる所。

つづま-る[約](自、ら四) ㊀小さくまとまる。短くまとまる。ちゞまりて少なくなる。㊁てみじかになる。てがるになる。簡易になる。㊂為まる。まとまる。㊃終決す。落着す。

つつみ[包](名) ㊀つゝむこと。㊁つゝみたるもの。㊂ものをつゝむに用ふるもの。「綿—につゝみてもてまゐれり」。

つつみ[堤](名) ㊀水を圍み又は水に沒(ツ)ひて、其水のあふれざるふせぎに土を築きたるもの。どて。堤、陸。㊁水をたゝへたる溜池。ため。㊂病氣。

つつみ[病](名) やまひ。つゝが。病氣。

つつみ[慎](名) ㊀つゝしみ。遠慮。「はゞかしきこと—もなく」。㊁ものいみ。齋戒。

つづみ[鼓](名) ㊀莫(カハ)を張りてうち鳴らす樂器の總稱、即ち太鼓。㊁櫻の木にて造り、中部くびれて內の空しき胴の周端に、猴の革を圍く張りたるものを搭へたる一種の樂器、調の緒を革の頭に貫きて胴にかゝり、これを左手にて為めつゆるめつして調子を取り、右手にて撥(ヒ)ち鳴らすもの、大小二種あり。くれつゞみ。腰鼓。胡鼓、鞨鼓。

つつみ-いひ[包飯](名) にぎりめし。屯食。

つつみ-おほひ[包覆](名) ㊀つゝみおほふもの。㊁ものをつゝみおほふに用ふるもの。

つつみ-おほ-ふ[包覆](他、は四) ㊀つゝみおほふ。中に入れてかぶらす。㊁つゝみかくす。

つつみ-かくし[包隱](名) つゝみかくすこと。

つつみ-かく-す[包隱](他、さ四) ㊀つゝみて外より見えざるやうにす。㊁極して人に口ルざるやうにす。

つつみ-かざり[包飾](名) つゝみかざること。

つつみ-かざ-る[包飾](自、ら四) 實體を かくしてうはべをよそほふ。うはべをかざる。

つつみ-ガハラ[疏瓦](名) 日本風の瓦屋根にて、「棧(サン)より軒(ケン)につゝきて堤の如く見ゆる瓦、即ち「をガハラ」の稱。(筒瓦)。

つつみ-がみ[包紙](名) ものをつゝむに用ふる紙。

つつみ-ぶくろ[包袋](名) ものを入れてつゝむ袋。

つつみ-ぶみ[包文](名) 薄葉などにて上をつゝみたる文、古昔、婚嫁の後朝の艷書に用ひしもの。

つつみ-ボタン[包釦](名) 上面を布帛又は羅紗などにて包みたる「ボタン」。

つづみ-ボタン[腰鼓釦](名) 二つの「ボタン」をつなぎて腰鼓のさまになしたるもの、被と此との孔に通して二つのものをかけとむるに用ふ。

つつみ-やき[包燒](名) ものゝ中に肉などを包みて燒くこと。又、其燒きたるもの。

つつみ-ゐ[包井](名) 塵埃などの入らぬやう蓋などし又は上に庵をつくりたる井。

つづみ-をけ[鼓桶](名) かゞち桶。

つっ-む[包](他、ま四) ㊀全體を覆(ヒ)ひて、中に籠(コ)め入る。「風呂敷に—」(裹)。㊁周圍をとりまく。まはりをかこむ。㊂をさむ。ふくむ。「胸心を—」。㊃ひめて人に知らしめず。かくして然らざるが如く裝ふ。「惡事をつゝみかくす」。㊄あはせとる。かねてもつ。

つつ-む[慎](他、ま四) ㊀つゝしむ。たしなむ。「人に—ことありてまたあひがたく」。㊁はゞかる。いむ。㊂はぢらふ。はゞ(羞)。

つづ-む[約](他、ま下二) つゞまるやうにす。ちゞめまとむ。

つづめ[約](名) ㊀つゞむること。つゞむる所。㊁法め。決算。

つっ-め-く[囀](自、か四)「ささめく」に同じ。

つづ-る[葛](名) ㊀【植】あをかづら。「蔓黑色にして裏の淡青色なるもの。

つつ-もたせ[美人局](名) 夫となれあひの上、他人と姦通し、これをかゝりとして金錢を強奪すること。なれあひまをとこ。「奸盜」。

つっ-や-く[囀](自、か四)「つつめく」に同じ。

つづら[葛](名) ㊀【植】あをかづら。「蔓黑色にして裏の淡青色なるもの。

つづら[葛籠](名) もとは、あをかづらの蔓(ツル)をもて編りたる籠。今は、あもに竹又は檜(ヒノキ)の薄板などにて作り、上に紙を貼(ハ)りて、衣服を納るゝに用ふる籠。(柳箱)。

++つづらか[圓](名)「つゞらか」に同じ。「目を—にさし出給へ」。

つづら-がさ[葛笠](名) 明暦の頃に流行せし笠、わかき女の被(カブ)りものにして、形は市女笠に似て、中のみね稍や低し。「同じ。

++つづら-かづら[葛蔓](名)【植】「あをかづら」に同じ。

++つづら-と[葛籠](名)「つゞら」に同じ。

++つづら-づくり[葛籠造](名) つゞらを造ること。又、其業の人。「じ。

つづら-ふぢ[葛藤](名)【植】「あをかづら」に同じ。

つづら-をり[葛折](名) 葛のつるの如く折れ曲がれる義。(一)甚しく折れ曲(マ)がりたる坂路。(羊腸、九折坂)。(二)馬術にて、幾度ともなく折り返して、馬を乘り廻(マ)はすこと。

つづり[綴](名) (一)つゞること。(二)つゞりあはして仕立たる衣、僧衣をいふ。(納衣)。(三)ずつづれ」に同じ。——**あは-す**[綴合](他、さ下二) つゞりて一つにまとむ。——**あはせ**[綴合](名) つゞりあはすること。——**かた**[綴方](名) 文字又は言語をつゞる方法。

++つづり-させ(名) きりぎりす即ち今いふこはろぎの鳴き聲。「—てふきりぎりす」。

つづ-る[綴](他、ら四) (一)つなぎ合はす。つゞりあはす。つゞけあはす。(二)ことばを連ねて文章を作る。「詩歌を—」。(三)「アルハベット」を連ねて言語を作る。

[ちづつ]

つづれ[綴](名) 多くの布帛をつゞりあはせたる衣。やぶれごろも。ぼろ。襤褸。(百結衣)。——**の-にしき**[綴錦](名) 花鳥人物など種々の模様を織りなしたる錦。(金絲錦)。

つつ-ゐ[筒井](名) 圓く堀りたる井。——**つつ-ゐ-つつ**[筒井筒](名) 筒井の井筒。

つて[傳](名) (一)ことづて。ひとより。(二)てづる。えんびき。たより。

++つて[傳](他)「つたふ」の變化なる「つたへ」の約言。「言語—に武藏の風」。——**と-ざ**[傳言](名) いひつたふることば。うはさ。流言、飛語。

つと[苞苴](名) (一)藁(ワラ)などにてつゝみに作りたるもの。わらづと。あらまき。「かれいひの—」。(二)携へ行く其土地の産物。どさん。(三)い(づと。みやげ。

つと[髻](名)「たぼ」に同じ。

つ-さ(副) (一)動かずに。ぢっと。「—待ひける」。(二)[急に身を動かして。「—寄る」。「毎」。

(つ-ど[都度](名、副) 其たびごと。まいくわい。「毎

つ-ど-がみ[髻髮](名) たぼの髮。

つ-ど-さし[髻差](名)「たぼさし」に同じ。

つ-ど-どうふ[苞豆腐](名) 藁づとなどに入れたる豆腐。堅くまぼりたるもの。

つ-ど-なっぢ[苞納豆](名) 藁に入れたる納豆。

つ-ど-に[夙](副) (一)朝はやく。あした。「—に、寝(ネ)て、晨」。(二)幼時に。こどものときに。「—聞く」。(三)其前に。早く。「我—此事あるを知れり」。

つど-ふ[集](自、は四) 寄り集まる。寄り合ふ。よる。あつまる。(聚)。

つど-ふ[集](他、は下二) つどはしむ。あつむ。よす。

(つ-ど-む[勤](自、ま四) 勤むることを得。

つど-む-る[勤務](他、ま下二) (一)力を盡くして行ふ。出精してなす。勤み行ふ。すゝみなす。(勉、力、努)。(二)氣すゝまざれども強ひて行ふ。好むにあらざれど抑へてなす。(勉)。(三)職務を扱ふ。役目を行ふ。(四)職務にあたる。役目に就く。(五)其人のために盡くす。其人に好意をきゝ。

つとめ[勤務](名) (一)つとむべき事。つとめべきわざ。(二)役目。職務。(三)職分。義務。(四)遊女などの境遇。「浮川竹の—」。(五)借倒などの日々の修行。即ち看經の如きこれなり。「柳—過ぐれば、もてに出ず」。——**き**[勤氣](名) 遊女などが、其稼業上、表面のみのとりあしらひをして、深く心を傾けぬこと。「—を離れてのもてなし」。——**と**[勤子](名) 客商賣をなす妓女。——**ざかり**[勤盛](名) 經驗多くして智慮熟し、職務のとりあつかひに最も適當せる年頃。——**さき**[勤先](名) 勤めてゐる所。

++つとめ-て(副) 其翌朝早く。はやく。「—などは、世になく心あるさまに可笑し」。

つとめ-て[勉、勤](副) 氣すゝまざれども強ひて。好むにあらざれどもあして。

つとめ-にん[勤人](名) 官廳又は會社などに勤務せる人。

つとめ-むき[勤向](名) 勤務の樣子。

づ-どり[圖取](名) 物の形を圖に取ること。

(づ-どめる(他)「つとむ」の轉。

づ-どん(名) 鐵砲などを放ちたる音。又、重き物のおちたる音。

つな[綱](名) (一)ものをつなぐに用ふる太き繩。(雲)。(二)より繩(ヨリ)りてたのみとするもの。「命の—」。(三)別力。(四)もと。主要。「斯道の—」。(四)をさ。主領。

つながり[繋](名) (一)つながること。つながるもの。(二)はだし。きづな。

つなが-る[繋](自、ら四) (一)つらなる。つゞく。(二)はださる。たばらる。(三)むすばる。むすばる。(四)關聯す。かゝる。

つなぎ[繋](名) (一)つなぐこと。つなぐもの。(二)はだし。きづな。「絆」。——**うま**[繋馬](名) 紋所の名、杭に繋ぎたる馬のさまを描(エガ)きたるもの。——**ばしら**[繋柱](名) ものをつなぎむく柱。

つな-ぐ[繋](他、か四) (一)牛・馬・綱・鎖などをもて、離れざるやうに結び附く。むすぶ。くゝる。(二)たばる。はだす。(三)永く持たしむ。引き續かしむ。「命を—」。(四)關聯せしむ。かゝはらす。かく。(五)拘囚す。とらふ。

つなし[鰹](名)【動】「このしろ」の幼期の稱。

++づ-なし[圖無](名) はどを超(コ)えて大なること。

++つなし-にく-し(形、ク) いとにくゝし。「つなしにくゝぞ見え給ふや」。

つな-そ[綱麻](名)【植】「いちびの一名。

(つなっ-ひき[綱曳](名)「つなひき」に同じ。

つな-で[綱手](名) 船に繋(ツナ)ぎて曳(ヒ)く綱。(百丈)。——**なは**[綱手繩](名) 前條に同じ。——**ぶね**[綱手船](名) 綱手をつけて曳(ヒ)き行く船。ひきふね。

++つな-ぬき[貫](名)「つらぬき」の轉。

++つな-ね[綱根](名) 上古の建築にて、柱を結び固めし綱。

つな-ひき[綱曳](名) (一)物に綱を繋(ツナ)ぎて引くこと。(二)一種の遊戯。綱の兩端を數人にて曳(ヒ)き合ひて勝負を爭ふもの。(三)人力車などに乘りて急行するとき、梶棒に綱をつけ、梶棒をとれるものと綱を引けるものとの兩人に挽(ヒ)かしむること。(四)牛馬などが引かゝ方に寄らしと意地を張ること。

つな-ひ-く[綱曳](自、か四) (一)牛馬などの引かゝ方に寄らしと意地を張る。

つ-なみ[津浪](名)「かいせう」(海嘯)に同じ。

++つな-むかはし[嗜](他、さ四) たしなむ。

++つな-わたし[綱渡](名) 早瀬の河などにて大いなる綱を兩岸に渡し繋(ツナ)ぎ、それに騎(ノ)りて船を渡すこと。又、其渡場。

つな-わたり[綱渡](名) 空中に張りたる綱を、手に傘などを持ちながら渡り行く輕業。(行戲)。

++つぬ[角](名)「つの」の古稱。

(づ-ぬけ[圖抜](名) づぬけること。なみはづれ。

(づ-ぬ-ける[圖抜](自、か下一) なみにはづる。

つね[常](名) (一)何時も其まゝにてあること。とこしなへに變ぜざること。恒。(二)一定して動かざる理義。普遍なる道。(三)よのつね。あたりまへ。なみ。普通。尋常。(四)平日。平素。(五)ふだん。平生。定まちず。かはりやすし。——**なし**[無常](名) いつもとことなり。——**ならず**[不常]

++つね-とことば-どり[常言葉鳥](名)【動】「ほとゝぎす」の異稱。

(づ-ねつ[頭熱](名) 逆上して頭の熱氣をもつこと。のぼせ。

つね-づね[常常](名、副) ふだん。平生。

(つね-てい[常體](名) (一)なみのさま。(二)ふだんのさま。

つね-なみ[常並](名) 普通一般。尋常一樣。ひとゝはり。なみ〳〵なみ。

つね-に[常](副) 平生に。ふだんに。いつも。

つね-びと[常人](名) なみ〳〵の人。つねのひと。たゞびと。凡人。

(つね-る[抓](他、ら四)「つめる」に同じ。

つの[角](名) (一)生物の頭上にある突起物の稱。哺乳類のは堅硬にして骨質又は皮質より成る。普通「つのゝ」といふは、おもにこれを指す。(二)冠の笄(カウガイ)即ち巾子(コジ)の基部と髮(ヒモリ)とを貫くもの。(三)とげ。「蓮蟻の—」。(四)すべて物の頭上又は表面に突起したるもの。(五)婦人が悔事に關して、嫉妬を僅(モヨ)すこと。——**をためてうしをとろす**[矯角殺牛] 欠點をためなほさんとして、手段其度を過ぎ、ために其物事をして廢物とならしむることをいふ。

つの-かくし[角隠](名) 昔時、婦人が佛參のときなどに用ひし一種の帽子。

つの-がみ[角髮](名) あげまき。(總角)。

つの-ぎり[角切](名) かゞいもの實。

++つの-ぐ-む[自、ま四) つのゝ如くめぐむ。「—あしの見えみ見えずみ」(夜寒)。

つの-ぐ-る(他、ら四) 婦人の髮を結ふに、束ねて角の出でたるやうになす。

つの-ざいく[角細工](名) 獸の角を細工すること。又、其細工したる物。

つの-さき[角尖](名) 角のとがりたるさき。

つの-ぶぼり[角絞](名) つの立ちたる鹿子絞。

つの-た-つ[角立](自、た四) (一)角だちてあるさま。

[しくかのつ]

り。㊁かどだつ。㊂きはだつ。

つの-だ-つ[つてたつつる。[角立](他、た下二)㊀角をおこしたつ。㊁かどをおこす。㊂きはだゝす。

つの-だらひ[ライ][角盥](名) 左右に角の如く柄の出てたる盥、多くは漆器にして、口又は手を洗(ア)ひすゝぐなどに用ふ。みゝだらひ。(瓢鑑)。

つの-だる[角樽](名)「えだる」柄樽」に同じ。

つの-つき[角突](名)㊀角をもて突き合ふこと。㊁うしあはせ。闘牛。㊂[仲惡しく相衝突すること。

——-あひ[イア][角突合](名) 前條(三)に同じ。

つの-ざ-る[らりる。[角](他、ら四) 獸の角を掴め、轉じて、敵の前面を制す。

つの-ばし[角箸](名) 角細工の箸。

++つの-はず[角筈](名) 優曇華(「齋宮の忌詞」)。

++つの-ふで[角筆](名) 字さし又は字突の類。

つの-また[角俣](名)【植】紅色藻に屬する海草、ふのりに似て大きく、乾せば色黑し、食用にも供せらるれど、多くは糊(ノリ)を製するに用ふ。(赤藻)。

つの-むし[蜣螂](名)【動】「あぶらむし」の一名。(蟲歷)。

つの-めか-す[すさしせ](自、さ四) 次條に同じ。

つの-め-だ-つ[つたらつて](自、た四) ㊀かどだつ。㊁目角を立つ。

つのめ-つきあひ[イア][角目突合](名) 互に懸み合ふこと。感情の衝突。

++つの-ゆみ[角弓](名) 角にて弓筈を作りたる「弓」(弭)。

++つのり[募](名) 求め寄すること。招き集むること。

つの-る[らりる。[募](他、ら四) ひろく求め寄す。あまねく招き集む。

つの-る[らりる。[募](自、ら四) ます〳〵甚しくなる。いよ〳〵はげしくなる。「病—」。

つは[ワ](名)【植】「つはぶき」の略言。

つは-[ワ][唾](名)「つばき」に同じ。

つ-ば[唾](名)《古言「つみは」の約》㊀刀劍の柄と刀身との間に挿(サシ)む金具、鼻(ハナ)くして孔(アナ)あり、これに刀身を貫きて柄頭に入る、柄を握る手のふせぎとなすもの、形は圓若しくは方にして、大小種々あり。「刀鐔、劍鼻」。㊁釜の脚のまはりに庇(ヒサシ)の如く拡出でたるもの。㊂帽子の周邊に庇の如く差出でたるもの。

つば-い-もち[椿餅](名)「つばきもち」の音便。

つば-い-もも[椿桃](名)【植】「つばきもも」の音便。

つば-うち[唾打](名) 昔時、唾を掌にのせ、これを指にて打ち、其飛び去りし方を吉なる方向と占ひしと。

つば-がたな[鍔刀](名)「うちがたな」に同じ。

つ-ばき[唾津](名)《唾吐(ツバ)の義》口中の唾腺の分泌する粘液(ネバ)き消化液。つば。つ。(口液、口沫)。

つばき[椿](名)㊀【植】山茶科に屬する木、葉は茶に似て硬(カタ)く、常綠にして光澤厚(ツヤ)し、花はあもに春開く、大小形色種類多けれどもすべて美し、果實より油を搾(シボ)る。(山茶)。㊁かまれの色目、表は蘇芳にして裏の赤きもの。——-**あぶら**[椿油](名) 椿の果實より搾(シボ)り採(ト)りたる油、婦人の髮などにつゝみたる餅、便。

つば-き-は[ワギ][鍔際](名) 刀身と鍔との相接する所。

つば-き-むし[唾蟲](名)【動】「あわふきむし」に同じ。

つばき-もち[椿餅](名) 椿の葉につゝみたる餅、物場などに用ふるもの。

つばき-もも[椿桃](名)【植】桃の一種、果實に毛なく、熟すれば赤くして光澤あり。

++つば-く[くけく][燕](名)【動】「つばくらめ」の略言。

つばくら[燕](名)【動】携帶用の袋、布帛にて製し、口を開けば燕の尾の如きさまをなすもの。

つばくら-め[燕](名)【動】燕雀類中つばめ科に屬する鳥、嘴短く扁平にして口圓(ロ)く裂けたり、體は黑色にして、翅と尾と共に長く、尾は分岐せり、春分の頃、暖地より渡り來りて人家の軒などに巢を構へ、秋分の頃、また暖地へ去る。つばくろ。つばめ。(乙鳥、玄鳥)。

つばくろ[燕](名)【動】「つばくらめ」に同じ。——-**ぐち**[燕口](名)「つばくらぐち」に同じ。

つばさ[翼](名)㊀鳥の左右の肢、羽毛生じ、飛行の用をなすもの。はね。(翅)。㊁左右のたすけ又はそなへ。——-**たま-ぎり**(名)【動】鷲の異稱。

++つば-ぢる[つば-ぢる][唾汁](名) つばき。つば。

++つは-つは[ツツ](名、副) 中にもの、含まれたるさまにいふ語。「ぬけ。

{づ-はづれ[圖外](名) なみをはづれてあること。づ-**ばな**[茅花](名)㊀茅(チガ)の花。㊁茅の異稱。——-**か-す**[すさしす](他、さ四) 摺みひろげて、つばなの如くはけさす。「鬚を—」。

++つばひ[燕](名)【動】「つばめ」の古稱。

++つばひらけ-し[けしけ][詳](形、ク) 「つまびらけし」に同じ。

++つばひら-と[燕](名)【動】「つばくらめ」に同じ。

つは-ぶき[ツツ](名)【植】菊科に屬する草、葉は圓狀腎形にして蹄の如く、深綠色にして光澤あり、莖は紫紅色にして、花は單鋼黃色なり、觀賞用として栽

〃 俚語 方言　　++ 古語　　〱 字音

培せらる。「蜀音」。

つば-め[燕](名)【動】「つばくらめ」の略言。——-**ぼくおやうにすくふ**[燕巢幕上] 立場の甚だ危險なるにいふ。

つば-もと[鍔元](名) つばぎは。

つは-もの[ツツ][兵](名)《鍔(ツバ)物の略言》㊀戰爭に使用する器具。武器。兵器。㊁武器を使用して戰爭に參加する人。いくさびと。軍人。兵士。㊂勇士。猛者。

++つはもの-さねり-の-つかさ[ツツ][兵衛府](名)「ひやうゑふ」に同じ。

++つはもの-の-くら[ツツ][兵庫](名) 武器を入るゝくら。ひやうご。——-**の-つかさ**[兵庫寮](名)「ひやうごれう」に同じ。

++つはもの-の-つかさ[ツツ][兵部省](名)「ひやうぶしやう」に同じ。

++つはもの-よそひ[ツツヨイ][兵裝](名) 軍裝、武裝。

++つばら[委曲](名)「つまびらか」に同じ。——-**か**[委曲](名)「つばらか」に同じ。

++つばら-つばら[山曲](名、副) いとつばらなるさまにいふ語。

つはり[ツツリ][悪阻](名) 婦人が懷妊したる當初に起る一種の病氣、多くは胸もとあしく吐氣を催し、酸氣を好むもの。(擬食)。

つは-る[ツツル][らりる。[張](自、ら四)《衞張(ハリ)の義》㊀つはりを起す。「いつしかとつはり給へば」。㊁めぐむ。きざす。「つはりせしふたゝの山のはゝそ原」。

つは-る[ツツル][らりる。[熟](自、ら四)「つゆ」に同じ。

つひ[イツ][終](名)㊀をはり。はて。末。「一のたのみ所」。㊁生命のをはり。終焉。「一の住家」。「ちに。

一つひ[イツ][終](副)㊀つひに。㊁もゝろに。㊂たちまち。

++つび(名)「いんもん」陰門の稱。

++つび[螺](名) 螺類の總稱。つぶ。

つひ-え[エイ][弊](名)㊀くづれやぶるゝこと。㊁くるしみ疲るゝこと。よわりはつること。

つひえ[エイ][費](名)㊀いりめ。ひよう。入費。㊁無用の入費。無用のいりめ。冗費。

つひえる(自)「つひゆ」の訛。

づ-ひき[圖引](名)㊀圖を引く人。——-**がみ**[圖引紙](名) 圖を引くに使用する紙。——-**きかい**[圖引機械](名) 圖引に使用する器具、即ち鳥口・定規・コンパス等の「ヒ」。

つび-おらみ[陰虱](名)【動】「つぶおらみ」に同じ。

{つひ-ぞ[イ][終](副) かつて一度も。

つひ-に[イ][終](副)㊀をはりには。はては。とうとう。㊁いまもって。いまだに。「ゐに。

つひ-は[イハ][終](副)㊀つひには。㊁「とかく。そゞろに。

++つひやか-す[カスイヤ][費](他、さ四)「つひやす」に同じ。

つひや-す[ヤスイ][費](他、さ四)㊀財貨を用ひ散らす。㊁消耗す。へらす。㊂徒(イタ)に使用す。もちふ。「酵を—」。

つひ-ゆ[ユイ][ええゆゆる。[弊](自、や下二)なりゆく。害生ず。㊁つかる。くたびれやぶる。くるしむ。よわる。㊂つく。きはまる。㊃+痩せおとろふ。やつれはつ。「年頃いたうつひえたれど」。

つひ-ゆ[ユイ][ええゆゆる。[潰](自、や下二)㊀潰れやぶる。軍隊解け散る。「軍—」。

つひ-ゆ[ユイ][ええゆゆる。[費](自、や下二)消耗す。とぼしくなる。へる。

つぶ[粒](名)《圓(ツブ)の義》㊀穀類の種子。「米の—」。㊁圓くして小さき物。「珠數の—」(顆)。㊂算盤の珠。㊃「つぶぎん」の略言。㊄一體を形成せる小さき各個。

つぶ[螺](名) 螺類の總稱。つび。

{づぶ—(接頭)「ずぶ」に同じ。

つぶ-きれ[粒切](名) こまかくきれさくること。

つぶ-ぎん[粒銀](名) ぎんだまの異稱。

つぶさ[悉、具備](名) もちなくそろひてあること。くはしくもれなきこと。つぶら。(詳)。

++つぶざめ(名) 老人の異稱。

つぶし[潰](名)㊀ふしくづすこと。㊁あはひふさぐこと。「目—」。㊂はろぼすこと。たやすこと。㊃器物になりてある金屬を鎔(ト)かして地金にすること。又、其地金。㊄一定の殺目又は地位にあかずして、たゞの人としてのはたらき。「一の利かぬ人間」。——-**アン**[潰餡](名) 赤豆(アヅ)を擂(ス)り潰して漉(コ)さずに製せる餡。——-**きん**[潰金](名) つぶして地金となしたる金屬。

つぶ-おひたけ[イレ][粒椎茸](名) 椎茸の細くして粒狀をなしたるもの。

つぶ-おらみ[陰蝨](名)【動】陰部の毛に生ずる虱ちみ。つび。おらみ。

つぶす[すさしす][潰](他、さ四)㊀ふしくづす。ふさへこはす。㊁あはひふさぐ。ふさぎとざす。㊂たやすこはす。「身上を—」。㊃器物になりたる金屬を鎔(ト)かして、地金にす。

つぶ-た-つ[たつてつて][粒起](自、た四)㊀粒群(ム)れ立つ。粒もこりたつ。「肌—」。㊁中にて目立ちてあり。

++つぶ-つぶ[曲曲](名、副) つまびらかなるさまにいふ語。

つぶ-つぶ[圓圓](名)㊀まろらかなるさまにい

〃 俚語 方言　　++ 古語　　〱 字音

つ

つ-ぼ[ツボ] (名) 壺。

つ-ぼ-む[ツボム] (自,他,四) 蕾。

つ-ぼ-め[ツボメ] (名) 蕾。

つ-ぼ-め-る[ツボメル] (他,下一) 蕾。

つ-ぼ-ん-だ[ツボンダ] (連体) 蕾。

つ-ぼ-ん-で[ツボンデ] (連体) 蕾。

つ-ぼ-ん-だ-ら-ば-な[ツボンダラバナ] (名) 蕾。

つ-ま[ツマ] (名) 妻。

つ-ま-ど[ツマド] (名) 妻戸。

つ-ま-ど-の-ま[ツマドノマ] (名) 妻戸の間。

つ-ま-ど-の-ま-の-ま-ま-ど[ツマドノマノマノママド] (名) 妻戸の間の間の間の戸。

**つ-ま-ど-の-ま-の-ま-ま-ど-の-ま-の-ま-ま-ど-の-ま-の-ま

ふ

ふ[名]

ふ[接尾]

ふ[接尾]

ふ[接尾

もの。回ちゃ茶道の変形物なり。回茶をひっくるめて指先には「ひっくるめ」。回物を引きかくるために設置したるもの。回ちゃはその類(たぐい)。——に**ひっくるめる** 簡略して概括するにいう。

つめ [詰] (名) ❶つまること。❷孔又はすき間につめこむもの。❸きは。はし。❹かぎり。「先きり。

—づめ [詰] (接尾) ❶食器に盛りて、其ものにて満ちつめ又はつめこむ意を表す語。「茶碗一」「石子一」。❷食器に盛りて、其ものの中につめいる意を表す語。「重一」。❸食器に盛りて、其所に在動する意を表す語。「本者一」。

つめ-あと [爪痕] (名) ❶物につきてあるつめのかた。❷爪にてかきたるあと。

つめ-あひ [詰合] (名) 共に同じ所につめ居ること。又、其人。「一の愛」。

つめ-いん [爪印] (名) 銀石の下に實印の代はりに、爪に墨をつけて押すこと。又、其印。「つめばん」(墨)。

つめ-かた [詰方] (名) つまる方法。[指紋]。

つめ-がた [爪形] (名) ❶つめのあと。❷つめのかたち。

つめ-かふ [つめかふ] [詰巻] (他は下二) 更に詰めてつむ。

つめ-かく [詰巻] (名) つめかふること。——る (他) 「つめかふ」の誤。

つめ-きり [詰切] (名) つめきること。

つめ-きり [爪切] (名) 「つめきりばさみ」の略言。——**ばさみ** [爪切鋏] (名) のびたる爪のききを切りこまるに用ふる小さき鋏。

つめ-きり-ぞ [詰切] (自ら四) 絶終其所につめてなる。「ぞ」。

つめ-きり-ぞ [詰切] (他ら四) つめこみをはけ

つめ-く-ふ [つめくふ] [爪食] (自は四) 歯にて爪をかみて居る。「一べきことにもあらぬ」。

つめ-こすり [爪擦] (名) 未熟(まじ)りたる木片、切りたる爪の鋏(ばさみ)などにすること。

つめ-こま [詰込] (名) つめこむこと。

つめ-こ-む [詰込] (自ま四) 多くのものの人りこむ。

つめ-こ-む [詰込] (他ま四) ❶つめ得らるゝだけつめ入れる。❷つめふたす。❸面倒を全す。

つめ-ざ-ら-ぎ [詰将棋] (名) 將棋にて、相手の王をつむる方。

つめ-ざゆら [詰衆] (名) つめあひの人々。

つめ-ざと [詰所] (名) ❶多くの人の詰めて居る所。❷かゝりの人の出勤してゐる所。「同じ」。

つめ-だ-がい [爪螺] (名) 【動】「つつぼがひ」に同じ。

つめ-た-し [冷] (形ク) ひやゝかに感ずる。ひやゝかなり。

つめ-つめ (名) つめること。(小兒の語)。

つめ-ぞり [爪取] (名) 「つめとりばさみ」の略言。——**ばさみ** [爪取鋏] (名) 「つめきりばさみ」に同じ。

つめ-ぼち [詰腹] (名) 他人の強(し)ひるまゝに、自己の意を捨て腹を切ること。

つめ-ぼん [爪判] (名) 「つめいん」に同じ。

つめ-ぼん [詰番] (名) 宮廷宮等。

つめ-びき [爪弾] (名) 三味線などを、絃の音の立たぬやうに、爪にてひくこと。

つめ-びら-き [爪開] (名) 貴人の前を過ぐるとき、身をきりゝとひらくこと。はりて立ち上ること。

つめ-ふ-す [詰伏] (他ま下二) あひかけひつこらくて、あきく伏す。

つめ-ふ [つめふ] [爪食] (自は四) 歯にて爪をかみて居る。「一べきことにもあらぬ」。

つめ-ぶり [詰年] (名) 手(ぶり)にて身を管(ぐ)ること。

つめ-ぶ-ら [爪] (他ら四) 爪先又は指先にて、強く持ちて搾(ま)ぐ。

つめ-ま (他) 「つむ」の誤。

つめ-れんげ [爪蓮華] (名) 【植】睡蓮科に属する草。葉は卵形又は古き皇居の上などに生ず。葉は水面に浮かべて、葉柄は根茎に生ず。花は白色にして、蕾は紫色なり。かはらまつ。いはれんげ。(酢漿草、草甲草、帽甲草)。

つもり [嗜] (名) 「つどもり」の略。(京阪地方又は中國地方の方言)。

つもり [津藤子] (名) 伊勢國津より出だす扇の名。夏羽織などに用ふ。

つもり [積] (名) ❶つもること。かさなり。❷あらかじめの計算。かつもり。積算。❸こゝろづもり。かんがへ。心算。❹酒宴にて、其酒を限りとしてをさめること。——**がき** [積書] (名) あらかじめの計算をかきたるもの。

つもり-ぞ [積] (自ら四) かさなりて嵩(かさ)ふえたる。加はりて豆多くなる。たゝまる。かさなる。「雪一」(連歌)。

つもり-ぞ [積] (他ら四) ❶積り計算す。かつもる。❷積り思考す。あもひはかる。かんがふ。

つや [艶] (名) ❶艶(えん)しく光ある色。うつくしくあざやかなる色。光澤。(艶麗、光澤)。❷生氣。愛敬。❸はなやかなる意。はなあるもの。「一打」。

つや [邸宅] (名) 「屋敷」の略。屋は物貨のあつまる場。邸宅の古語。

つ-や [通夜] (名) ❶佛家に參詣して、終夜所願する

のねもにな　とてつちた　そせすしき　こけくきか　あえういあ

をえうゐわ　るれるりら　よえゆいや　もめむみま　はへふひほ

日祭をいふ。

つゆ [波] (名) ❶こゝかり。水滴。❷こゝろ。「涙」。❸素田の汁に調味料を加へたるもの。「吸物の汁」。❹蕎麦切又は素麺などをつけて食ふこゝろ。

つゆ [露] (名) ❶水蒸氣の凝結が露結以下に下り液化して水滴となり地上にあらはるゝもの。「結露」。❷わづか。すこしばかり。「一の間」。❸はかなきこと。消え易きこと。「一の命」。❹水手・付水などの地拵の結の素(ま)れたる潮(ぢ)。❺のれんなどのうちのあまり。

つゆ-ゆ [露] (自ゆ下二) あふれてつゆる。

つゆ-ゆ [熟] (自ゆ下二) 愛してつゆる。うむ。

つゆ [露] (副) 少しも。さらに。「一知らず」。[む]。

つゆ-ぞら [出梅] (名) 「つゆ」の條を見よ。

つゆ-ぞらし [梅雨空] (名) 【植】「はなあやめ」に同じ。(關東)。

つゆ-いろ-か-ら [露可] (副) ちらとも。すこしも。「一間違はじ」。

つゆ-くさ [露草] (名) 【植】鴨跖草科に屬する草。各地に自生す。莖は多の稚苗に立生し、葉稚圓卵狀卵形にして頂部鞘頭を有す。鞘頭狀の苞は始め手狀をなり、花は三數莖頂色にして、夏季枝間に生じ、朝開き午後(ご)わ、結實に供せらる。つきくさ。(鴨跖草)。

つゆ-け-し [露] (形ク) 露多くなりけ多し。露ぬれし。「露けき秋なり」。

つゆ-ぞら [露霜] (名) 露の霜は霜となりたるもの。「いとあはく消え易き霜」。かつぞら。——**の** [露霜] (枕) ❶つゆ霜のごとく消え易き意。「一けなきもの」。❷つゆ霜のごとく消え易き意。「一の玉はにあきらかなる」。

つゆ-だま [露玉] (名) 玉のごとくしてあるもの。

つゆ-の-いのち [露命] (名) つゆの如く消え易きいのち。はかなきいのち。「回じ」。

つゆ-の-いりあひ [梅雨入] (名) 「にゅうばい」に同じ。

つゆ-の-いりて [露滋] (名) 「つゆだいに」に同じ。

つゆ-の-ま [露間] (名) ❶つゆのあひだの間。❷やがて消えなんとせしの間。わづかの間。「身」。

つゆ-の-み [露身] (名) はかなき身。ながからぬ。

つゆ-の-やど [露宿] (名) ❶露のふくゝとこゝ。❷つゆ多きあり。野宿のやど。

つゆ-の-やど-り [露宿] (名) 前條に同じ。「一の松」。「世」。

つゆ-の-よ [露世] (名) はかなき世。世。「前條の世」。

つゆ-はかり [露計] (名・副) すこし。いさゝか。

つゆ-はらひ [露拂] (名) ❶先驅して道を開くこと。❷殿等のことにて、先づ最初に御(ま)わること。❸相撲(スモウ)にて、勝負の土俵入のとき、其先に立ちて土俵に上る力士。「前」。

つゆ-むすび-ぶみ [露結文] (名) 【動】蚕の異。

つゆ-も [露] (副) すこしも。いさゝか。

つゆわけ-ごろも [露分衣] (名) 露深き道を分け行くに着る衣。

つよ-が-る [頑] (自ら四) 自ら強しと思ひてはこる。

つよ-し [頑] (形ク) ❶たゆまず。ひるまず。勇(ま)まず。すこやかなり。❷かたし。こはし。❸筋肉の力多し。ちからつよし。❹意力たくましし。意氣すぐれたり。❺はげし。はなはだし。ひどし。

つよ-ぶ [頑] (名) ❶つよきこと。又、つよきもの。❷はなはだしきこと。すこやか。

つよ-むし [頑] (他ま下二) つよくす。

つよめ-ぞ (他) 「つよむ」の誤。

つゆの—つよめ　つゆ—つゆの　つゆ—つや　10画

つよ-ゆみ［強弓］（名）弦（ゲン）の張り強くして、引きやすかちざる弓。

つよ-る（ラ四）［強］（自、ら四）つよくなる。

++つら［顔］（名）顔の兩傍、即ち目の下の處。ほゝ。「跳って其—を掩む」。

つら［面］（名）㊀おもて。かほ。「顔面」。㊁物の表面。「海—」、「水の—」、「山—に煙たつ家あり」。

つら［連、列］（名）㊀つらなり。ならび。なみ。（行）。㊁なかま。連中。

++つら［蔓］（名）「つる」に同じ。

++つら［弦］（名）「つる」に同じ。

つら-あかり［面燈火］（名）古賀、芝居の舞臺にて、夜間に役者の面を見物人によく見するため、其前に差し出し、燈火。つちび。

{つら-あて［面當］（名）其人の面前に於て、其人に對する怒を他のものに遷してあらはすこと、又、恐（カシ）しと思ふ其人に對して、これ見よがしの態度を取ること。

++つら-かまち［輔］（名）かまち。（顎）。

つら-がまへ（マエ）［面搆］（名）かはつき。つらつき。（面格、面相）。

++つら-き［列樹］（名）なみき。

++つら-ぐし［面櫛］（名）櫛を前髪にさすこと。

つら-し（ケレ）［形、二］㊀恥ぢうちつれなし。とりあつかひむづし。㊁難儀なり。「堪（タ）へがたし。くるし。

つら-だましひ（シイ）［面魂］（名）面色につれなみならぬ精神のほどの現れであること。（面相）。

つら-つき［面付］（名）かはつき。

++つら-つくり［面作］（名）顔のかたち。「あやまちしたる—して」。

つら-つら［熟］（副）念を入れて。ねんごろに。つく〳〵。よく〳〵。（倩）。

つら-つら［滑滑］（名、副）澀（ジウ）らかなるさまにいふ語。

つら-づゑ［面杖］（名）ほゝづゑ。

++つら-な-む（ム）［列並］（他、ま下二）つらねならべる。

つら-な-る（ラ四）［連］（自、ら四）㊀つゞきつく。つながる。㊁もよほ。かゝる。㊂合して一となる。あふ。——**えだ**［連枝］（名）「れんりのえだ」（連理枝）に同じ。

つら-に-く-し（ク）［面憎］（形、一）其顔を見るだにも憎きばかりなり。あもにくし。

つら-ぬ（ネ）［連］（他、な下二）㊀つゞけつく。ならべ續く。一列にそろへむく。ならぶ。（列）。㊁

++つら-ぬ-く（ク）［列］（他、か四）連なる。つらなる。「これをつらぬ」。㊁つゞく。つゞ。㊂もよほす。かく。㊃合して一となす。あはす。「諸侯の兵を—」。

つら-ぬき［貫］（名）足に穿（ハ）く一種の武具。皮にて作る。（釘靴）。

つら-ぬ-く（ク）［貫］（他、か四）連貫（ツラヌ）の義。㊀端より端へ通す。表より裏へ通す。つきぬく。つきとほす。とほす。㊁つゞけ通す。あまねく通す。「吾道一以—之」。㊂

{つらぬ（名）《つらぬうた》の義に出づ》芝居の顔見世狂言などに用ふる臺詞、多くは語句の雄壯なるもの。「志ばちくの—」。

つらぬ-うた［連歌］（名）「れんが」に同じ。

つら-の-かは（ワ）［面皮］（名）㊀顔面の表皮。かはのかは。㊁自家の面目をかざり又は思ふ狀態。{——**の-せんまいばり**［面皮千枚張］（名）ぶつ〳〵しきと。恥を恥とも思はぬと。鐵面皮。——**があつい**　ぶつ〳〵しくあつかまし。——**をむく**　恥辱を與（ア）ふ。はぢをかゝす。

つら-ぴ［面火］（名）「つらあかり」に同じ。

つら-ぶち［面扶持］（名）家族の人數に由りて與（ア）ふる扶持米。めんぶち。（口米）。

++つら-ぼね［頬骨］（名）ほゝぼね。

++つらまし（シ）［嗜］（形、二）たしなむべし。

{つらまへる（ヘル）［捉］（他、は下一）とらふ。

{つらまる（ラ）［捉］（自、ら四）㊀とらへらる。㊁すがる。つかまる。

{つら-みせ［面見世］（名）㊀かはみせ。㊁「の對面」。

{つら-よごし［面汚］（名）其もの事のために面目を失すること。其もの事のためにはぢをかくこと。

++つらら［氷］（名）こほり。ひ。

つらら［氷柱］（名）たるひ。——**いし**［氷柱石］（名）《氷のようにゆうせき》鍾乳石の一名。

++つらら-く（ク）［列］（自、か四）つらなる。ならぶ。

++つらら-に［列］（副）つらなりて。ならびて。「ぶ。

{づらり（副）つらなりならびなるさまにいふ語。

++つら-を［弦緒］（名）ゆみづる。

つり［釣］（名）㊀引き釣くること。つること。つるすこと。㊁物を引き釣くるために設けたる紐などの稱。㊂釣絲をくゝりたる釣針に餌（エ）をつけて水に投じ、寄りてこれを食ふ魚を、其釣針に引きかけて捕ふること。㊃買物をなすに、代價より以上の貨幣を仕拂ひたるとき、其代金を引き去りて拂ひもどさるべき餘分の金。㊄相撲（スマ）の手、敵のまはしに雙手をかけて、其體をつりあぐること。

つり-あ-ぐ（グ）［釣上］（他、か下二）㊀つりて上へあげる。㊁魚を釣りてこれを捕ふ。

{つりあげる（他）「つりあぐ」の訛。

つり-あひ（イ）［釣合］（名）㊀つりあふこと。かねあひ。㊁［理］數多の力が一物體に作用するとき、これ等の力が作用せざると同一の結果となりたる狀態の稱。例へば、或物體が机上にあるは、其重さと机の反作用との釣合によるなり、これを分つて安定の釣合・不安定の釣合・中性の釣合となす、安定の釣合とは、物體の重心下方にあるが故に、少しくこれを傾くとも、重心上るを以て直ちに原位に復せんとし、顚覆し難き位置にあるとをいひ、不安定の釣合とは、物體の重心上方にあるが故に、少しくこれを傾くとも、重心下るを以て、忽ち顚覆せんとする位置にあるとをいひ、中性の釣合とは、水平面上にある球の如く、これを動かすとも、重心の高さ變ぜずして常に釣合を得るとをいふ。——**にんぎやう**（ギヤウ）［釣合人形］（名）一種の玩具、竹を骨とし紙にて作りたる人形にして、兩脚を細長くし、其端にむくろ玉などをつけて、重心の位置を甚だ低くし、其釣合によりて倒れぬやうにしたるもの。彌次郎兵衛・彌之助・正直正兵衛・水汲人形・張合人形。（定風珠）。——**ぜ-とる**　釣合を正しくす。

つり-あ-ふ（ハ）［釣合］（自、は四）㊀彼此平均を保つ。もちあふ。かねあふ。㊁相應す。にあふ。かなふ。

つり-いと［釣絲］（名）㊀つりばりを結びつけて魚を釣るに用ふる絲。「糸」。㊁すべてものをつるすに用ふる絲の稱。

つり-ざを［釣竿］（名）魚を釣るに用ふる編き竹、これにつりいとをつく。

つり-おさみ［釣薤］（名）釣り上ぐるやうに作りたる志とみ。

つり-ぶのぶ［釣忍］（名）志のぶ草を鐵（テツ）れて、夏日蔭（カ）などにつるすもの。

つり-せいろう［釣井櫓］（名）昔時、軍中にて用ひし高きやぐら、滑車にて上下する箱を裝置し、其中に人を入れ、つりあげて敵狀をうかゞはしむるもの。（釣藻籠）。

つり-せん［釣錢］（名）つりに出だす錢。（貼錢）。

つり-だい［釣臺］（名）ものをのせて擔（カ）き行く具、板を床とし其兩端に繩（ジ）ねたる竹を裝置し、これに棒をとほしてかく。

つり-だうぐ（ドウ）［釣道具］（名）魚をつるに要する一切の道具、即ち釣餌・釣絲・釣竿等の類。

つり-だ-す（サ）［釣出］（他、さ四）㊀つりはじむ。㊁さそひ出だす。

つり-だな［釣棚］（名）天井よりつるしさげたる「棚」。

つり-ぢやうちん（ヂヤウ）［釣提燈］（名）つりさぐるやうにつくりたる提燈。

つり-て［釣手］（名）㊀つりする人。（釣徒）。㊁蚊屋などをつるに用ふる紐（モヒ）。

つり-てんおやう（ヨウ）［釣天井］（名）つるしさげて必要のとき落下せしむる裝置の天井、下に居るものをおしつぶすために設くといふ。「字都宮—」。

つり-どうろう［釣燈籠］（名）㊀蓋（ヒ）の鎖などにつるす燈籠。㊁妾を賤しみていふ語。

つり-ぢと［釣床］（名）つりさげてある臥床、船中などに設くるもの。「棚」。

つり-さだな［釣戸棚］（名）つるしまうけたる戸

て上へあがる。㊁つりあげたる如くにてあり。「目玉ばかり—」。

つり-あ-ぐ（グ）［釣上］（他、か下二）㊀つりて上へあぐ。㊁魚を釣りてこれを捕ふ。

{つりあげる（他）「つりあぐ」の訛。

つり-あひ（イ）［釣合］（名）㊀つりあふこと。かねあひ。㊁［理］數多の力が一物體に作用するとき、これ等の力が作用せざると同一の結果となりたる狀態の稱、例へば、或物體が机上にあるは、其重さと机の反作用との釣合によるなり、これを分つて安定の釣合・不安定の釣合・中性の釣合となす、安定の釣合とは、物體の重心下方にあるが故に、少しくこれを傾くとも、重心上るを以て直ちに原位に復せんとし、顚覆し難き位置にあるとをいひ、不安定の釣合とは、物體の重心上方にあるが故に、少しくこれを傾くとも、重心下るを以て、忽ち顚覆せんとする位置にあるとをいひ、中性の釣合とは、水平面上にある球の如く、これを動かすとも、重心の高さ變ぜずして常に釣合を得るとをいふ。——**にんぎやう**（ギヤウ）［釣合人形］（名）一種の玩具、竹を骨とし紙にて作りたる人形にして、兩脚を細長くし、其端にむくろ玉などをつけて、重心の位置を甚だ低くし、其釣合によりて倒れぬやうにしたるもの。彌次郎兵衛・彌之助・正直正兵衛・水汲人形・張合人形。（定風珠）。——**ぜ-とる**　釣合を正しくす。

つり-あ-ふ（ハ）［釣合］（自、は四）㊀彼此平均を保つ。もちあふ。かねあふ。㊁相應す。にあふ。かなふ。

つり-いと［釣絲］（名）㊀つりばりを結びつけて魚を釣るに用ふる絲。「糸」。㊁すべてものをつるすに用ふる絲の稱。

つり-ざを［釣竿］（名）魚を釣るに用ふる編き竹、これにつりいとをつく。

つり-おさみ［釣薤］（名）釣り上ぐるやうに作りたる志とみ。

つり-ぶのぶ［釣忍］（名）志のぶ草を鐵（テツ）れて、夏日蔭（カ）などにつるすもの。

つり-せいろう［釣井櫓］（名）昔時、軍中にて用ひし高きやぐら、滑車にて上下する箱を裝置し、其中に人を入れ、つりあげて敵狀をうかゞはしむるもの。（釣藻籠）。

つり-せん［釣錢］（名）つりに出だす錢。（貼錢）。

つり-だい［釣臺］（名）ものをのせて擔（カ）き行く具、板を床とし其兩端に繩（ジ）ねたる竹を裝置し、これに棒をとほしてかく。

つり-だうぐ（ドウ）［釣道具］（名）魚をつるに要する一切の道具、即ち釣餌・釣絲・釣竿等の類。

つり-だ-す（サ）［釣出］（他、さ四）㊀つりはじむ。㊁さそひ出だす。

つり-だな［釣棚］（名）天井よりつるしさげたる「棚」。

つり-ぢやうちん（ヂヤウ）［釣提燈］（名）つりさぐるやうにつくりたる提燈。

つり-て［釣手］（名）㊀つりする人。（釣徒）。㊁蚊屋などをつるに用ふる紐（モヒ）。

つり-てんおやう（ヨウ）［釣天井］（名）つるしさげて必要のとき落下せしむる裝置の天井、下に居るものをおしつぶすために設くといふ。「字都宮—」。

つり-どうろう［釣燈籠］（名）㊀蓋（ヒ）の鎖などにつるす燈籠。㊁妾を賤しみていふ語。

つり-ぢと［釣床］（名）つりさげてある臥床、船中などに設くるもの。「棚」。

つり-さだな［釣戸棚］（名）つるしまうけたる戸

［ねがりつ］

++**つり-どの**[釣殿](名) 水に臨みたる殿舎。

つり-どほし[釣糸](名) つりさげて用ふる大いなるとはし。「縄。

つり-なは[釣縄](名) ものをつるすに用ふる

++**つり-の-を**[釣緒](名)「つりいと」に同じ。

つり-ばし[釣橋](名) ㊀必要あるときにかけ、用なきときはつりあげておく橋。鎖又は縄(ナワ)などに設くるもの。㊁柱又は礎なく藤葛又は鋼鐵などにてつるしてかけわたしたる橋。

つり-はしご[釣梯子](名) ものにつるしかけて用ふる梯子、綱などにて作る。(同じ。

つり-はないけ[釣花瓶](名)「つりくわびん」に

つり-ばり[釣針](名) 魚を釣(ツ)るに用ふる針、さき曲りてとがりたるもの。(鉤。

つり-ふね[釣船](名) つりをする小船。

つり-ぼり[釣堀](名) 池に魚を養(ヤシナ)ひ、慰(ナグサ)みにつらしむるもの。

つる[鶴](名) ㊀(動)渉禽類に属する鳥、大形にして高き三四尺、種類多けれど、すべて脚・嘴・頸共に長く、全身多くは白色なり、よく水を渉(ワタ)り魚を食とす、鳴聲高し。「九助君」。㊁「つるばし」の略言。

つる[蔓](名) ㊀(「つる」の轉) ㊁或種の植物の莖の細長く延(ノ)びて物に絡(マ)はり又は地に匍(ハ)ふもの、蔓。「蔦の—」。㊂鏑物の鎖、鏑鎖。㊃すぢ。系統。

㊄[つて。たより。

つる[弦](名) ゆみづる。

つる[鉉](名) ㊀鍋・土瓶・鼎などにかけわたしたる弓形若しくは半圓状のとって。(提梁)。㊁枡の上面に針に渡し、斗概の當たる標指とするもの。

つ-るる[釣](他、ら四) ㊀上のものに懸(カ)けて下(サ)に、上のものに懸けて持たす。つるす。「柵を—」。(吊)。㊁高きにかけわたす。宙にわたしかく。㊂釣針に餌(エ)をつけて、これを食はんとする魚をかけて捕る。㊃あざむき誘(ナヅ)ふ。あびき出す。㊄つるして舁(カ)く。かく。「栗物を—」。

つ-るる[釣](自、ら四) ㊀引かれ寄る。ひかれちゃむ。「筋が—」。㊁上(向く。あがる。「目尻が—」。

つ-るる[釣](自、ら下二) 前條に同じ。

つ-るる[連](自、ら下二) ㊀ともなはる。つき去たがふ。「壁に—」。㊁志たがひうつる。「世につれて」。

つ-る[連](他、ら下二) 携へ行く。從へ行く。ともなふ。つれだつ。

つる-あぢさゐ[蔓紫陽花](名) 【植】虎耳草科に屬する灌木、莖は上昇す、花は二樣あり、外圍の花は大形にして花瓣樣の萼を有す、觀賞用として栽培せられ、葉は食用に供せらる。「藤繡球」。

つる-あまちや[蔓甘茶](名) 【植】「あまちやづる」に同じ。

++**つる-うち**[弦打](名) 物怪(モノ)などを退治するに、ゆみづるを引きならすと。

++**つる-うり**[弦賣](名) ゆみづるをあきなふ人。

++**つる-れざ**[弦音](名) 弓蓋(ユミハ)につがひたる矢をきって放したるときのつるのおと。

つる-がき[鶴柿](名) 【植】柿の一種、果實は形長くして、早く熟す。

つる-かけ[弦掛](名) 弦を弓蓋(ユミハ)にかくること。

つる-かめ[鶴亀](名) 《つるとかめと、共に壽命ながくめでたきものといひ傳ふるに出づ》縁起をいはひていふ語。

つる-き[劍](名) 《「つむがり」の略言》「けん」に同じ。——**の-まひ**(イマ)[劍舞](名) 劍をもちて舞ふこと。

つる-ぐさ[蔓草](名) 蔓の出づるたちの草。

つる-くび[鶴頸](名) ㊀徳利又は花瓶などの口の鶴の頸(クビ)の如く細長きもの。㊁【植】ゆふがほの一種、果實は圓くして柄状をなす尺餘の帶あり。(同じ。㊂類の長き人。

++**づる-ける**[釣](他、か下一)「ずるける」に

つるし[吊](名) つるすこと。——**-がき**[吊柿](名) えだがき。くしがき。白柿、搭柿。——**-ぎり**[吊切](名) ㊀つるし置きて切ること。㊁あんかう魚を、鍋にてつるし、腹に水を滿たしたる後、皮・骨を去りて料理すること。——**-だいこん**[吊大根](名) つるしかきて乾したる大根。

つる-すぢ[吊](他、さ四) つりてたれ下ぐ。つり下ぐ。(つるもの。

つる-たち[蔓立](名) 草の莖になりて生ずる。

つる-だ-つ[蔓立](自、た四) つる生ず。

++**つる-つる**(名、副) すべるさまにいふ語。

つる-で-まり[蔓杏](名) 【植】蔓杏科に屬する草、海岸に自生す、花は卵形にして黄綠色の萼あり、葉は食用に供せらる。

つる-なべ[鉉鍋](名) つるのとってのあるなべ。

つる-にがな[蔓苦菜](名) 【植】「ぢさばり」の一名。(剪刀股)。

つる-にんぢん[蔓人參](名) 【植】桔梗科に屬する草、山中に生ず、莖は他物に纏繞す、花は小形白色にして秋の頃開く。

++**つる-の-かみ**[鶴髮](名) 志らが。白髮。

つる-の-はし[鶴嘴](名)「つるはし」に同じ。

つる-の-はやし[鶴嘴](名) ㊀釋迦牟尼が涅槃に入りたる沙羅雙樹の林の異稱、其時樹色鶴の毛の如く白くなりたりといふに出づ。㊁貴人の末期にいふ語。

つる-の-ひざとろ[鶴一聲](名) 其場に於て最も目上の人又は最も尊ばるゝ人のいひ出でたる言。

つる-の-まる[鶴丸](名) 鎧所の名、鶴の翼を延べたる形を、環の如くに猪(ヰ)けるもの。

つる-はぎ[鶴脛](名) ㊀つるのあし。「—もきるべからず、鴨のはぎもつぐべからず」。㊁++衣短くして脛(ハギ)の長く現はれたること。「加茂川を、—にても渡るかな」。

つる-ばし[鶴嘴](名) 土地を掘るに用ふる具、鐵にてつくり形鶴の嘴の如し、これに柄をつけたるもの。

つる-はじき[弦彈](名) ゆがけ。(この。

つる-ばしり[弦走](名) 弓にかけたる弦の自然に切るゝこと。

つる-はみ[樫](名) ㊀++【植】「どんぐり」の古稱。㊁つるばみの樫(カシ)を煮(ニ)たる汁にて染めたる黒色、にびいろ。

++**つるび**(名) つるぶと。つるむこと。(遊牝)。

++**つる-ぶくろ**[弦袋](名) 携備の弓弦を入れおく袋、つるまき。

つる-べ[釣瓶](名) 縄又は竿をつけて、井戸の水をつり上げて汲む桶。吊桶、汲器。——**-おとし**[釣瓶落](名) 釣瓶をおとすが如く、急に落つること。「—の秋の日」——**-さを**[釣瓶竿](名) 釣瓶につけて水を汲む竿。——**-なは**(ナワ)[釣瓶縄](名) 釣瓶につけて水を汲む縄。みどなは。みどづな。(縄、縄。

つるべ-うち[連發](名) 鐵砲をならべて輕(カル)けざまに打つこと。つゞけうち。

つる-まき[弦卷](名) 携備の弓弦を卷きて置く具、茎(クキ)にて算盤珠の如く杉形(スギガタ)を二つ合はせたる樣につくり、中に穴を明け、大刀などに下げて携ふるもの。「つるぶくろ」。

[きまるつ]

つる-む[交](自、む四) 禽獸交合す。つるぶ、つがふ。(交尾、琴尾、遊牝)。

++**つるり**(名、副)「つるつる」に同じ。

++**づるり**(名、副) ものゝぬけもつるさまにいふ語。

つる-れいし[蔓荔枝](名) 【植】葫蘆科に屬する草、莖は上昇し、葉は掌狀に深裂して鋸齒を具へ、花は小形にして黄色なり、果實は長楕圓形にして瘤狀の突起を有し、初め綠色にして熟すれば黄赤色となり、裂開して紅色の肉を現はす、味淡泊にして稍々甘し。にがうり。「錦枝蔓」。

つれ[連](名) ㊀つるゝこと。ともなふこと。「三人—」。㊁なかま。ともの。伴侶。同伴。㊂能又は狂言などにて、仕手にともなひて技を演ずる者。

つれ-あひ(イア)[連合](名) ㊀つれあふこと。㊁めをと。つま。配偶。匹耦。

つれ-あ-ふ(ハ行四)[連合](自、は四) ㊀相伴ふ。ともなふ。㊁つれそふ。

つれ-と[連子](名) 再縁の婦の携へ來れる先夫の子。「假子、携養」。

つれ-そ-ふ(ハ行四)[連添](自、は四) 夫婦となる。配偶となる。めをとなる。つれあふ。

つれ-だ-つ(タ行四)[連立](自、た四) つれあひて行く。相伴ひて行く。つれあふ。

++**つれづと**[連子](名)「つれこ」に同上。

つれ-づれ(名) ㊀つくづくと物を思ひつゞくること。㊁なす事もなくものさびしくあること。徒然、無聊。——**-がる**(ラ行四)(自、ら四) つれづれに堪へず。さびしがる。

++**つれなし**[強顔](名) つれなきこと。

つれ-なし(ク活)[強顔](形、一) ㊀心強くして知らざるさまをなす。㊁なさけ心なし。薄情なり。無情なり。——**-がほ**(オカ)[強顔](名) そ志らぬかほ。——**づく-る**(ラ行四)[強顔作](自、ら四) つれなきさまになす。

つれ-びき[連彈](名) 琴・三味線などを、人の彈(ヒ)くにつれあひて彈くこと。相共に彈くこと。(合奏。

つれ-ぶし[連節](名) 相共に謠(ウタ)ふこと。つれてうたふこと。(合唱)。

++**つれ-も-なし**(ク活)(形、一) ㊀わけもなし。いはれもなし。「つれもなき城上宮に大殿を」。㊁ひとりなり。孤獨なり。㊂つれなし。心強し。(く。

つれ-ゆ-く(カ行四)[連行](他、か四) ともなひゆ

++**つれる**[連](他)「つる」の誤。

++**つれる**[釣](自)「つる」の誤。

++**づ-ろ-ろ**[杜漏](名) 《杜撰より轉じたる語》志めくゝりのなきこと。ぬけおちの多きこと。そこつ。そろそろ。

つる[對](名) つがひそろふこと。又、つがひそろふもの。「三幅—」。

—つる[對](接尾) 對の物を數ふる語。「二—の机」。

つる-ぬく[追憶](名) 後よりおひあふこと。

つる-か[縊下](名) すがりてさがること。とりつきてくだること。

つる-か[追加](名) 後より增し加ふること。後よりおぎなひ加ふること。つぎたし。おぎなひ。——**-で**

じるはい　[形]　❶ 物事をよくわきまえている。

じるはち　[名]　❶ 出放題。

じるはつ　[名]　❶ 出発。

じるはつ　[名]　❶ 出発点。

じるはつ　[名]　❶ 出来上がり。

じるはつ　[名]　❶ 出来上がり。

じるはつ　[名]　❶ 出来上がり

つく［若手］なしはにも"又"目下の女に対す"
——をつくす なし得る限りをなしつくす"
——をぬく すべて事柄をはぶきてなす"——
をぬけうをする 骨折らず"はたらかず"——を
ぬむ ものを手をなす"——をやく 失敗す"苦く
になる"——をわかつ［分手］別離す"わかる"
又"相離す"すべてばなりす"

て—［手］（接頭）言語に冠して"てづから又は自ら
の意を表する語"「一蹟本師」「一製」

—て［手］（接尾）❶動詞に続く"代名の意を表す
る語"「酒一」「盃一」❷動詞に続く"其事をなす人
を表する語"「射一」「賞一」（人）"❸的を射(イ)る矢
を二種を一組として数えるにいふ語"「矢一一」

て［而］（助）動詞・助動詞・形容詞に続く"一事を終く
て他に接続する意を表はす語"

で［出］（名）❶いづること"でること"「人の一がすくな
い」❷［かさ］家をでること"「一がある」

で（接）「それで」の約言"「一すから」「一あるから」

で（助）動詞・助動詞に続く"打消の意を表する語"
即ち「ずて」の約言"「ゆかー」「かざはぬ」

で（助）「にて」の約言"「島一暮る」「山一越す」

テーブル［卓子＝Table］（名）座敷を飾"椅子に
腰をかけ又は立ちてこれを使用するもの"——**か
け**［卓子掛］（名）卓子にかけるはぎれ布"

テール［Tael］（名）清国の重量の単位"即ち四(ツ)
の銀"（支那洋銀米人の語）"

テール［圓］（名）清国の貨幣の単位"我国の一圓に
十九銭餘に相当す"

て-あき［手明］（名）❶用事なきこと"仕事なきこと"ひま"
❷ひまにてある人"（幾手）"

て-あそび［手遊］（名）❶手にもてあそぶこと"
❷あそび"玩具"

て-あたり［手当］（名）❶手にあたること"手にさわること"
❷手にあたる"感覚"「一がよくない」"
——**あたい**［手当次第］（副）手にあたりたる
ものはことごとくの意"「手にあたるものはすべて
「一打ちこはす」"——**はなたい**［手当
放題］（副）前後に回ら"

て-あつ・し［手厚］（形ク）あつかひ厚き
り"とりなしねんごろなり"

て-あて［手当］（名）❶費の補ふこと"かねて用意
をなしおくこと"さうい"そなへ"❷報酬として與
ふる金銭"支給する金"❸手段"方法"「最後の一」
❹［かしこまり］"報酬"「其道の一」——**ぜん**［手当
金］（名）手当として與ふる金銭"

て-あはせ［手合］（名）❶あひ手とならしてはり
あふこと"「碁将棋の一」❷賞賜の
約束をとり結ぶこと"「約束の一」

て-あひ［手合］（名）❶仲間"連中"（徒）"❷そ
なたとひと"❸てづから"てあはせ"

で-あひ［出合］（名）❶偶合すること"出会すること"
❷事柄をとの配合"❸別文の密合"——**がしら**
［出合頭］（名）歩行より行き合ふこと"——
はしょ［出合場所］（名）歩行のてある場"

で-あ・ふ［はたらく］［出合］（自"は四）❶会合す"
出会す"あちあふ"ゆきあふ"❷よく配合す"よく
うつる"❸別文密合す"

て-あぶり［手炙］（名）手を炙(ア)るに用ふる小さき
火鉢"（手爐）"

て-あぶ・す［手炙］（他"さ四）てをあぶす"

テアマン（名）《「ヂャマン」語 Diamant》金剛石"

て-あら・し［手荒］（形ク）そあらあらし～

て-あらひ［手洗］（名）❶手をあらふこと"❷洗
水などをもりて手をあらふ器"❸てをあらふため
の湯又は水"——**バチ**［手洗鉢］（名）てをうつ
バチ"——**みづ**［手洗水］（名）手をあらふた
めの水"「ひもーと"（圓）"

て-あらう・ふ［はたらく］［手洗］（自"は四）手をあらふ

てい［帝］（名）❶天皇陛下の主宰者"かみ"ていうつ
つ"❷皇帝の尊称ある君主"きみ"ていうてい"

てい［禎］（名）「たいに回ら"

てい［邸］（名）❶やしき"邸宅"❷はたご"やど
や"❸地方の都城又は国の為に"皆より京都に
設けたるやどや"

てい［悌］（名）❶上に対(ツ)くて兄に対(ツ)くて従順なること
又"よく年長者に対(ツ)くて従順なること"❷兄弟又は長
幼の間の相愛敬すること"

てい［貞］（名）❶清潔なること"きよこ"潔(ヒ)り
守る所を変ぜざること"❷婦人の貞操正しきこと"

てい［禎］（名）吉兆にて"帝王の皇先の大業"

てい［氏］（名）廿八宿の1"とも"

てい［廷］（名）❶朝廷"❷法廷"❸やくそよ"

てい［程］（名）❶はどど"程度"❷のり"法式"❸か
ちのり"道程"❹たび"旅中"

てい［経］（名）こよれ"はやふね"はしけ"ボート"

てい［底］（名）そこ"そた"

てい［亭］（名）❶あづまや"チン"❷料理屋"又茶
屋"❸［帝］帝王の略称"

てい［丁］（名）❶十干の1"ひのと"「一表"」❷壯
年"1人前"❸壯年のもの"1人前のもの"❹天皇
に対するもの"

でい［泥］（名）❶どろ"ひぢりこ"❷路水に溶解し
たる金銀の総称「金一」——**のこと**［和泥］
いたく飾りて正体なきさまにいふ"

てい-あつ［低圧］（名）低度の圧力"——**ぶ**
［低圧部］（名）【理】低気圧の部分"

てい-あん［定安］（名）きだまりあちつくこと"又"
きだめやすんずること"

てい-あん［定案］（名）定まれる案"

てい-あん［提案］（名）きし出だす案"

てい-い［渝快］（名）なみだこはなたること"

てい-いう［悌友］（名）兄弟又は幼の間の相愛
厚きこと"

てい-いう［亭宇］（名）園の中にあること"

てい-いうん［帝胤］（名）帝室のちすぢ"

てい-いうん［低音］（名）「ていおんに」回こ"

てい-えいら［提携］（名）手提げかばん"田すこ"

てい-えき［定役］（名）一定の夫役又は苦役"

てい-おん［低音］（名）ひくきこと"「れ"

てい-か［定価］（名）定まりたる値段"きまりの

てい-か［低価］（名）やすきこと値段"廉価"

てい-か［低下］（名）ひくきこと"さがること"

てい-か［諦観］（名）先かること"さがること"「こ"

てい-か［逗留］（名）等を留めて次第に加くまこ

てい-か［定住］（名）【相】同等又は敵対等の如く
一定の場所に生ずる事(ヒ)"

てい-かう［締交］（名）まこはりをむすぶこ"
交際をはじむること"/「訂交"」「ていこ"

てい-かう［訂校］（名）文書中のあやまりを直
すこと"

てい-かう［遭遇］（名）たがひにかはりあふ
こと"

てい-かうり［丁香］（名）【植】丁子"「こ"

てい-かうり［抵抗］（名）❶はりあふこ"きかち
ふこと"てむかひ"はむかひ"❷【理】甲の物質が乙の物
質に作用する時"乙はこれに対して作用する中に次第に
増加する抵抗の原因を指(ス)す性質の称"
電流の流るる時は"其抵抗に応じ所ずるものなり"——
ぜつ［抵抗箱］（名）【理】電流の原さる抵抗を箱
(ハコ)きたるもの"電流を作りて抵抗の原因とし"これ
を箱に入れたるもの"電圧の抵抗を測(ハカ)るに用ふ"

てい-がく［停学］（名）学校より其学生の学校を
停止すること"

てい-がく［定額］（名）定まりたる額"——
くりこし［定額繰越］（名）【法】会計法にて"
当年度の定額を翌年度に繰越すこと"——**ひきこし
れ**［定額貸入］（名）【法】歳出超過額の
を"歳入の定額に貸し入るること"

てい-き［定期］（名）❶定まりたる期限"❷定期
預金又は"定期貸付等"しくは定期乗車の略称"

てい-き［定規］（名）一定の規則"

てい-き［提起］（名）❶あげおこすこと"ちちあこる
こと"❷ちちなすこと"きこしなすこと"「訴訟を一す」"

てい-き［定期］（名）一事物に関する確固の期間
を限定すること"

てい-ぎ［定議］（名）朝廷の評議"

てい-ぎ［程儀］（名）はなむけ"「したる言葉"

てい-ぎ［提議］（名）事議を提出すること"又"提出

てい-きあつ［低気圧］（名）❶【理】温度の増加
し又は水蒸気の多量なる事の為に"大気の圧力の
低くなること"大気圧に向ひて対抗し
風を生ずる"❷轉じて"或社会のなりゆきの傾向(ヒ)
かなこうすして"物議の起らんとする気運にいふ語"

ていきーあつかり［定期預］（名）定期預金をあ
づかり主の方より見ての語"

ていきーあつけ［定期預］（名）定期預金をあづけ

る"——**がある** わざまくがうまくなる"又"
学がお上手になる"——**がこお** 屋工の精密なるに
いふ"——**がさがる** わざまくがおくなる"
又"学が下手になる"——**がない** 仕事多くして
人足らず"——**がなかい** 手前がおおい"のようす
すること多くもあり"——**がなる** 手をたゝく賛同ゆ"
——**がふさがる** 気がゝりの仕事ありて"他の
事は出来ず"——**にあやそに**［綾手］ことはこと
葉を選び"——**にあはす** 取捨ひにくし"力にかなはず"——**にあまる**
取捨ひにくし"力にかなはず"——**にいる** 自己のものとなす"占
有に属す"又"要求する"——**にれつ**［落手］前後
に回ら"——**にかく** 手づからなす"又"自ら世
話す"——**につぱさす**［晒手］一段の所業を
鼓舞して奇手す"——**にさるばかり** 極めて
近くに回こゆるにいふ"——**さるはす**［合手］
手のひらをあはす"又"そがむ"——**さりつ** 手
と手とを合はしてこつす"又"そかなはりをなす"
又"製釣を留す"——**されふ** てをすを受く"
——**さかく** てをくだす"又"打消"——**さ
くだす** 自らなす"為す"——**さかくさだ
さかく** いろ〳〵まとりにならし試みるにいふ"
——**さ**［さ］くりくだる"回復す"あまる"——
さする 手と手とをすりあはす"ものをなす"
——**さそで**［和手］何事をもなさず"
——**さだす** 其事に関係す"又"其人と色別の関
係を絶ぶ"——**さたたく** 人を呼ぶ又は歓迎し
若しくは賛成の意を表し或は拍手をもたゝ"手を
何たゝきならす"——**さつかぬ**［束手］傍観して
し何事をもなさず"又"回復して何等の結果をもな
し得ず"——**さつく** あやまる"わるく"——**さ
つく**［若手］なしはにも"又"目下の女に対す"
——**さつくす** なし得る限りをなしつくす"
——**さぬく** すべて事柄をはぶきてなす"——
さぬけうさす 骨折らず"はたらかず"——**さ
ぬむ** ものを手をなす"——**さやく** 失敗す"そこく
にる"——**さわかつ**［分手］別離す"わかる"
又"相離す"すべてばなりす"

て—［手］（接頭）言語に冠して"てづから又は自ら
の意を表する語"「一蹟本師」「一製」

—て［手］（接尾）❶動詞に続く"代名の意を表す
る語"「酒一」「盃一」"❷動詞に続く"其事をなす人
を表する語"「射一」「賞一」（人）"❸的を射(イ)る矢
を二種を一組として数えるにいふ語"「矢一一」

て［而］（助）動詞・助動詞・形容詞に続く"一事を終く
て他に接続する意を表はす語"

で［出］（名）❶いづること"でること"「人の一がすくな
い」❷［かさ］家をでること"「一がある」

で（接）「それで」の約言"「一すから」「一あるから」

で（助）動詞・助動詞に続く"打消の意を表する語"
即ち「ずて」の約言"「ゆかー」「かざはぬ」

で（助）「にて」の約言"「島一暮る」「山一越す」

テーブル［卓子＝Table］（名）座敷を飾"椅子に
腰をかけ又は立ちてこれを使用するもの"——**か
け**［卓子掛］（名）卓子にかけるはぎれ布"

テール［Tael］（名）清国の重量の単位"即ち四(ツ)
の銀"（支那洋銀米人の語）"

テール［圓］（名）清国の貨幣の単位"我国の一圓に
十九銭餘に相当す"

て-あき［手明］（名）❶用事なきこと"仕事なきこと"ひま"
❷ひまにてある人"（幾手）"

て-あそび［手遊］（名）❶手にもてあそぶこと"
❷あそび"玩具"

て-あたり［手当］（名）❶手にあたること"手にさわること"
❷手にあたる"感覚"「一がよくない」"
——**あたい**［手当次第］（副）手にあたりたる
ものはことごとくの意"「手にあたるものはすべて
「一打ちこはす」"——**はなたい**［手当
放題］（副）前後に回ら"

て-あつ・し［手厚］（形ク）あつかひ厚き
り"とりなしねんごろなり"

て-あて［手当］（名）❶費の補ふこと"かねて用
意をなしおくこと"さうい"そなへ"❷報酬として與
ふる金銭"支給する金"❸手段"方法"「最後の一」
❹［かしこまり］"報酬"「其道の一」——**ぜん**［手当
金］（名）手当として與ふる金銭"

て-あはせ［手合］（名）❶あひ手となりてはり
あふこと"碁将棋の一"❷賞賜の
約束をとり結ぶこと"「約束の一」"

て-あひ［手合］（名）❶仲間"連中"（徒）"❷そ
なたとひと"❸てづから"てあはせ"

で-あひ［出合］（名）❶偶合すること"出会すること"
❷事柄をとの配合"❸別文の密合"——**がしら**
［出合頭］（名）歩行より行き合ふこと"——
はしょ［出合場所］（名）歩行のてある場"

で-あ・ふ［はたらく］［出合］（自"は四）❶会合す"
出会す"あちあふ"ゆきあふ"❷よく配合す"よく
うつる"❸別文密合す"

て-あぶり［手炙］（名）手を炙(ア)るに用ふる小さき
火鉢"（手爐）"

て-あぶ・す［手炙］（他"さ四）てをあぶす"

テアマン（名）《「ヂャマン」語 Diamant》金剛石"

て-あら・し［手荒］（形ク）そあらあらし～

て-あらひ［手洗］（名）❶手をあらふこと"❷洗
水などをもりて手をあらふ器"❸てをあらふため
の湯又は水"——**バチ**［手洗鉢］（名）てをうつ
バチ"——**みづ**［手洗水］（名）手をあらふた
めの水"「ひもーと"（圓）"

て-あらう・ふ［はたらく］［手洗］（自"は四）手をあらふ

てい［帝］（名）❶天皇陛下の主宰者"かみ"ていうつ
つ"❷皇帝の尊称ある君主"きみ"ていうてい"

てい［禎］（名）「たいに回ら"

てい［邸］（名）❶やしき"邸宅"❷はたご"やど
や"❸地方の都城又は国の為に"皆より京都に
設けたるやどや"

てい［悌］（名）❶上に対(ツ)くて兄に対(ツ)くて従順なること
又"よく年長者に対(ツ)くて従順なること"❷兄弟又は長
幼の間の相愛敬すること"

てい［貞］（名）❶清潔なること"きよこ"潔(ヒ)り
守る所を変ぜざること"❷婦人の貞操正しきこと"

てい［禎］（名）吉兆にて"帝王の皇先の大業"

てい［氏］（名）廿八宿の1"とも"

てい［廷］（名）❶朝廷"❷法廷"❸やくそよ"

てい［程］（名）❶はどど"程度"❷のり"法式"❸か
ちのり"道程"❹たび"旅中"

てい［経］（名）こよれ"はやふね"はしけ"ボート"

てい［底］（名）そこ"そた"

てい［亭］（名）❶あづまや"チン"❷料理屋"又茶
屋"❸［帝］帝王の略称"

てい［丁］（名）❶十干の1"ひのと"「一表"」❷壯
年"1人前"❸壯年のもの"1人前のもの"❹天皇
に対するもの"

でい［泥］（名）❶どろ"ひぢりこ"❷路水に溶解し
たる金銀の総称「金一」——**のこと**［和泥］
いたく飾りて正体なきさまにいふ"

てい-あつ［低圧］（名）低度の圧力"——**ぶ**
［低圧部］（名）【理】低気圧の部分"

てい-あん［定安］（名）きだまりあちつくこと"又"
きだめやすんずること"

てい-あん［定案］（名）定まれる案"

てい-あん［提案］（名）きし出だす案"

てい-い［渝快］（名）なみだこはなたること"

てい-いう［悌友］（名）兄弟又は幼の間の相愛
厚きこと"

てい-いう［亭宇］（名）園の中にあること"

てい-いうん［帝胤］（名）帝室のちすぢ"

てい-いうん［低音］（名）「ていおんに」回こ"

てい-えいら［提携］（名）手提げかばん"田すこ"

てい-えき［定役］（名）一定の夫役又は苦役"

てい-おん［低音］（名）ひくきこと"「れ"

てい-か［定価］（名）定まりたる値段"きまりの

てい-か［低価］（名）やすきこと値段"廉価"

てい-か［低下］（名）ひくきこと"さがること"

てい-か［諦観］（名）先かること"さがること"「こ"

てい-か［逗留］（名）等を留めて次第に加くまこ

てい-か［定住］（名）【相】同等又は敵対等の如く
一定の場所に生ずる事(ヒ)"

てい-かう［締交］（名）まこはりをむすぶこ"
交際をはじむること"/「訂交"」「ていこ"

てい-かう［訂校］（名）文書中のあやまりを直
すこと"

てい-かう［遭遇］（名）たがひにかはりあふ
こと"

てい-かうり［丁香］（名）【植】丁子"「こ"

てい-かうり［抵抗］（名）❶はりあふこ"きかち
ふこと"てむかひ"はむかひ"❷【理】甲の物質が乙の物
質に作用する時"乙はこれに対して作用する中に次第に
増加する抵抗の原因を指(ス)す性質の称"
電流の流るる時は"其抵抗に応じ所ずるものなり"——
ぜつ［抵抗箱］（名）【理】電流の原さる抵抗を箱
(ハコ)きたるもの"電流を作りて抵抗の原因とし"これ
を箱に入れたるもの"電圧の抵抗を測(ハカ)るに用ふ"

てい-がく［停学］（名）学校より其学生の学校を
停止すること"

てい-がく［定額］（名）定まりたるこだか"——
くりこし［定額繰越］（名）【法】会計法にて"
当年度の定額を翌年度に繰越すこと"——**ひきこし
れ**［定額貸入］（名）【法】歳出超過額の
を"歳入の定額に貸し入るること"

てい-き［定期］（名）❶定まりたる期限"❷定期
預金又は"定期貸付等"しくは定期乗車の略称"

てい-き［定規］（名）一定の規則"

てい-き［提起］（名）❶あげおこすこと"ちちあこる
こと"❷ちちなすこと"きこしなすこと"「訴訟を一す」"

てい-き［定期］（名）一事物に関する確固の期間
を限定すること"

てい-ぎ［定議］（名）朝廷の評議"

てい-ぎ［程儀］（名）はなむけ"「したる言葉"

てい-ぎ［提議］（名）事議を提出すること"又"提出

てい-きあつ［低気圧］（名）❶【理】温度の増加
し又は水蒸気の多量なる事の為に"大気の圧力の
低くなること"大気圧に向ひて対抗し
風を生ずる"❷轉じて"或社会のなりゆきの傾向(ヒ)
かなこうすして"物議の起らんとする気運にいふ語"

ていきーあつかり［定期預］（名）定期預金をあ
づかり主の方より見ての語"

ていきーあつけ［定期預］（名）定期預金をあづけ

る"——**がある** わざまくがうまくなる"又"
学がお上手になる"——**がこお** 屋工の精密なるに
いふ"——**がさがる** わざまくがおくなる"
又"学が下手になる"——**がない** 仕事多くして
人足らず"——**がなかい** 手前がおおい"のようす
すること多くもあり"——**がなる** 手をたゝく賛同ゆ"
——**がふさがる** 気がゝりの仕事ありて"他の
事は出来ず"——**にあやそに**［綾手］ことはこと
葉を選び"——**にあはす** 取捨ひにくし"力にかなはず"——**にあまる**
取捨ひにくし"力にかなはず"——**にいる** 自己のものとなす"占
有に属す"又"要求する"——**にれつ**［落手］前後
に回ら"——**にかく** 手づからなす"又"自ら世
話す"——**につぱさす**［晒手］一段の所業を
鼓舞して奇手す"——**にさるばかり** 極めて
近くに回こゆるにいふ"——**さるはす**［合手］
手のひらをあはす"又"そがむ"——**さりつ** 手
と手とを合はしてこつす"又"そかなはりをなす"
又"製釣を留す"——**されふ** てをすを受く"
——**さかく** てをくだす"又"打消"——**さ
くだす** 自らなす"為す"——**さかくさだ
さかく** いろ〳〵まとりにならし試みるにいふ"
——**さ**［さ］くりくだる"回復す"あまる"——
さする 手と手とをすりあはす"ものをなす"
——**さそで**［和手］何事をもなさず"
——**さだす** 其事に関係す"又"其人と色別の関
係を絶ぶ"——**さたたく** 人を呼ぶ又は歓迎し
若しくは賛成の意を表し或は拍手をもたゝ"手を
何たゝきならす"——**さつかぬ**［束手］傍観して
し何事をもなさず"又"回復して何等の結果をもな
し得ず"——**さつく** あやまる"わるく"——**さ
つく**［若手］なしはにも"又"目下の女に対す"
——**さつくす** なし得る限りをなしつくす"
——**さぬく** すべて事柄をはぶきてなす"——
さぬけうさす 骨折らず"はたらかず"——**さ
ぬむ** ものを手をなす"——**さやく** 失敗す"そこく
にる"——**さわかつ**［分手］別離す"わかる"
又"相離す"すべてばなりす"

て—［手］（接頭）言語に冠して"てづから又は自ら
の意を表する語"「一蹟本師」「一製」

—て［手］（接尾）❶動詞に続く"代名の意を表す
る語"「酒一」「盃一」"❷動詞に続く"其事をなす人
を表する語"「射一」「賞一」（人）"❸的を射(イ)る矢
を二種を一組として数えるにいふ語"「矢一一」

て［而］（助）動詞・助動詞・形容詞に続く"一事を終く
て他に接続する意を表はす語"

で［出］（名）❶いづること"でること"「人の一がすくな
い」❷［かさ］家をでること"「一がある」

で（接）「それで」の約言"「一すから」「一あるから」

で（助）動詞・助動詞に続く"打消の意を表する語"
即ち「ずて」の約言"「ゆかー」「かざはぬ」

で（助）「にて」の約言"「島一暮る」「山一越す」

テーブル［卓子＝Table］（名）座敷を飾"椅子に
腰をかけ又は立ちてこれを使用するもの"——**か
け**［卓子掛］（名）卓子にかけるはぎれ布"

テール［Tael］（名）清国の重量の単位"即ち四(ツ)
の銀"（支那洋銀米人の語）"

テール［圓］（名）清国の貨幣の単位"我国の一圓に
十九銭餘に相当す"

て-あき［手明］（名）❶用事なきこと"仕事なきこと"ひま"
❷ひまにてある人"（幾手）"

て-あそび［手遊］（名）❶手にもてあそぶこと"
❷あそび"玩具"

て-あたり［手当］（名）❶手にあたること"手にさわること"
❷手にあたる"感覚"「一がよくない」"
——**あたい**［手当次第］（副）手にあたりたる
ものはことごとくの意"「手にあたるものはすべて
「一打ちこはす」"——**はなたい**［手当
放題］（副）前後に回ら"

て-あつ・し［手厚］（形ク）あつかひ厚き
り"とりなしねんごろなり"

て-あて［手当］（名）❶費の補ふこと"かねて用
意をなしおくこと"さうい"そなへ"❷報酬として與
ふる金銭"支給する金"❸手段"方法"「最後の一」
❹［かしこまり］"報酬"「其道の一」——**ぜん**［手当
金］（名）手当として與ふる金銭"

て-あはせ［手合］（名）❶あひ手となりてはり
あふこと"碁将棋の一"❷賞賜の
約束をとり結ぶこと"「約束の一」"

て-あひ［手合］（名）❶仲間"連中"（徒）"❷そ
なたとひと"❸てづから"てあはせ"

で-あひ［出合］（名）❶偶合すること"出会すること"
❷事柄をとの配合"❸別文の密合"——**がしら**
［出合頭］（名）歩行より行き合ふこと"——
はしょ［出合場所］（名）歩行のてある場"

で-あ・ふ［はたらく］［出合］（自"は四）❶会合す"
出会す"あちあふ"ゆきあふ"❷よく配合す"よく
うつる"❸別文密合す"

て-あぶり［手炙］（名）手を炙(ア)るに用ふる小さき
火鉢"（手爐）"

て-あぶ・す［手炙］（他"さ四）てをあぶす"

テアマン（名）《「ヂャマン」語 Diamant》金剛石"

て-あら・し［手荒］（形ク）そあらあらし～

て-あらひ［手洗］（名）❶手をあらふこと"❷洗
水などをもりて手をあらふ器"❸てをあらふため
の湯又は水"——**バチ**［手洗鉢］（名）てをうつ
バチ"——**みづ**［手洗水］（名）手をあらふた
めの水"「ひもーと"（圓）"

て-あらう・ふ［はたらく］［手洗］（自"は四）手をあらふ

てい［帝］（名）❶天皇陛下の主宰者"かみ"ていうつ
つ"❷皇帝の尊称ある君主"きみ"ていうてい"

てい［禎］（名）「たいに回ら"

てい［邸］（名）❶やしき"邸宅"❷はたご"やど
や"❸地方の都城又は国の為に"皆より京都に
設けたるやどや"

てい［悌］（名）❶上に対(ツ)くて兄に対(ツ)くて従順なること
又"よく年長者に対(ツ)くて従順なること"❷兄弟又は長
幼の間の相愛敬すること"

てい［貞］（名）❶清潔なること"きよこ"潔(ヒ)り
守る所を変ぜざること"❷婦人の貞操正しきこと"

てい［禎］（名）吉兆にて"帝王の皇先の大業"

てい［氏］（名）廿八宿の1"とも"

てい［廷］（名）❶朝廷"❷法廷"❸やくそよ"

てい［程］（名）❶はどど"程度"❷のり"法式"❸か
ちのり"道程"❹たび"旅中"

てい［経］（名）こよれ"はやふね"はしけ"ボート"

てい［底］（名）そこ"そた"

てい［亭］（名）❶あづまや"チン"❷料理屋"又茶
屋"❸［帝］帝王の略称"

てい［丁］（名）❶十干の1"ひのと"「一表"」❷壯
年"1人前"❸壯年のもの"1人前のもの"❹天皇
に対するもの"

でい［泥］（名）❶どろ"ひぢりこ"❷路水に溶解し

主の方より見ての称。

ていきゅう[庭球](名)「テニス」に同じ。

ていきゅうかいせん[定期改選](名)議員又は補闕者の選挙に對して、規定の任期を經過したるときに行ふ選挙の称。

ていきゅうからかい[定期航海](名)一定の時期に一定の航路による航海。

ていきゅうかんかう[定期刊行](名)文書・圖畫などを一定の時期に刊行すること。——**ぶつ**[定期刊行物](名)一定の時期に刊行する文書・圖畫・即ち新聞・雜誌の如きもの。

ていきゅうきん[定期金](名)一定の時期に支拂ふべく又は請取るべき金。

ていきゅうしけん[定期試驗](名)一定の時期に學行せらるゝ試驗。

ていきゅうせん[定期船](名)定期航路をなす船。

ていきゅうとりひき[定期取引](名)取引所に於て、當日契約から三箇月以内に履行せらるゝもの。

ていきゅうねんきん[定期年金](名)年數に一定の期限ある年金。「同じ」

ていきゅうばいばい[定期賣買](名)定期取引に

ていきゅうばらひ[定期拂](名)❶一定の時期の支拂。❷手形支拂人が、一定の期日又は日附後一定の期日を經て後に支拂ふこと。「こと(商法)」

ていくふ[泥泛](名)なかだちたれてなく。

ていくふ[低級](名)ひくき階級。

ていきふう[定期風](名)【地】時季を定めて風向を異にする風。季節風の如きこれなり。

ていきまい[定期米](名)定期取引の米。

ていきもの[定期物](名)定期取引のもの。

ていきゅうきょ[帝居](名)皇帝の宮居。

ていきゅうこく[提訴](名)❶ひったくること。❷かゝげること。

ていきょく[體言](名)「ていきゅうこと」に同じ。

ていきょ[帝居](名)❶「ていきゅうきょ」(皇居)に同じ。❷上帝のすまひ。「こと」

ていきょう[提供](名)さし出すこと。もち出すこと。

ていきょうきゅう[體胸筋](名)「ちやうきんき」(胸筋)に同じ。

ていきょきん[定期預金](名)銀行が期限を定めてあづかる預金。普通三箇月又は六箇月若しくは一年等を期限と定め、其半途には拂戻(ひきもどし)に引出すことを得ざるものとす。利子の割合は普通預金より高し。「く」

ていきん[庭訓](名)家庭の教訓。「にはのをし」

ていきん[提琴](名)清樂に用ふる胡琴。

ていきん[低吟](名)こゑひくく口ずさむこと。

ていくわい[停會](名)❶會議を一時休止すること。❷帝國議會の議事を一時休止すること。又、衆議院解散の場合に、貴族院の議事を閉止すること。

ていくわい[低徊](名)たちもとほること。おちつきまよはること。

ていくわいがん[泥灰岩](名)【鑛】粘土と石灰との合して成りたる岩。

ていくわいど[泥灰土](名)【鑛】粘土に多量の石灰混入して等質に富める土壌。

ていくわく[邪惑](名)❶あしのおもはかなくこゝろのまどはかなくこと。❷古音、文語にて臨刑の罪囚を糾問するに用ひしより、轉じて臨刑にいふ語。「一を問ふ」も轉せず。

ていくわつ[締括](名)しめくゝること。

ていけい[提携](名)❶さげたづさへること。❷共同して事をなすこと。

ていけい[定型](名)一定のかたち。

ていけい[定形](名)一定のかたち。

ていけい[梯形](名)【數】一邊の相對する邊が互に平行なる四邊形。

ていけい[帝京](名)「ていきゅうきょ」に同じ。

ていけい[帝系](名)皇帝の譜系。

ていけいかう[定繫港](名)其船舶をつなぎ繫ぐ場所と定めたる港(ハ)。

ていけいばしょ[定繫場](名)其船舶をつなぎ繫ぐ一定の場所。

ていけつ[定決](名)さだめきわること。又さだまりきまること。「りきわること」

ていけつ[締結](名)❶しめむすぶこと。❷約束をとること。

ていけつ[提撕](名)❶ひったくること。さしあげること。❷耳にたたきつけること。

ていけいの-はな[手活花](名)手づから活(イケ)たる花。又、活花をしめて茶室などに生たる茶頭樣。

ていけいぎょう[帝業](名)帝王の國業を統御經營すること。「一を定む」

ていけん[定見](名)一定の意見。

ていけん[低減](名)❶ひくくすること。又、價をひくくすること。❷ほのかすくなくすること。又、價をひくくすること。

ていけん[定款](名)社團法人の組織及其業務執行の方法の規定。

ていけ[天氣](名)てんき。そこ模樣。てけ。「一のことにつけていのる」

ていけ[手活](名)❶みづから手を下して、花などを花瓶に挿入すること。❷一轉して、妓女などを茶箱をしかけて、わが事業とすること。

ていけい[提携](名)❶さげたづさへること。❷ともなひつれること。❸共同して事をなすこと。

ていけい[定型](名)一定のかたち。

ていけい[定形](名)一定のかたち。

ていけい[梯形](名)【數】一邊の相對する邊が互に平行なる四邊形。

ていけい[帝京](名)「ていきゅうきょ」に同じ。

ていけい[帝系](名)皇帝の譜系。

ていけいかう[定繫港](名)其船舶をつなぎ繫ぐ場所と定めたる港(ハ)。

ていけいばしょ[定繫場](名)其船舶をつなぎ繫ぐ一定の場所。

ていけつ[定決](名)さだめきわること。又さだまりきまること。「りきわること」

ていけつ[締結](名)❶しめむすぶこと。❷約束をとること。

ていけつ[提撕](名)❶ひったくること。さしあげること。❷耳にたたきつけること。

ていけの-はな[手活花](名)手づから活(イケ)たる花。又、活花をしめて茶室などに生たる茶頭樣。

ていけいぎょう[帝業](名)帝王の國業を統御經營すること。「一を定む」

ていけん[定見](名)一定の意見。

ていけん[低減](名)❶ひくくすること。又、價をひくくすること。❷ほのかすくなくすること。

ていけん[低減](名)❶ひくくすること。又、價をひくくすること。❷ほのかすくなくすること。

ていけん[定款](名)社團法人の組織及其業務執行の方法の規定。

ていけ[天氣](名)てんき。そこ模樣。てけ。「一のことにつけていのる」

ていけ[手活](名)❶みづから手を下して、花などを花瓶に挿入すること。❷一轉して、妓女などを茶箱をしかけて、わが事業とすること。

ていけい[提携](名)❶さげたづさへること。❷ともなひつれること。❸共同して事をなすこと。

ていけい[定型](名)一定のかたち。

ていけい[定形](名)一定のかたち。

ていけい[梯形](名)【數】一邊の相對する邊が互に平行なる四邊形。

ていけい[帝京](名)「ていきゅうきょ」に同じ。

ていけい[帝系](名)皇帝の譜系。

ていけいかう[定繫港](名)其船舶をつなぎ繫ぐ場所と定めたる港(ハ)。

ていけいばしょ[定繫場](名)其船舶をつなぎ繫ぐ一定の場所。

ていけつ[定決](名)さだめきわること。又さだまりきまること。「りきわること」

ていけつ[締結](名)❶しめむすぶこと。❷約束をとること。

ていけつ[提撕](名)❶ひったくること。さしあげること。❷耳にたたきつけること。

ていけの-はな[手活花](名)手づから活(イケ)たる花。又、活花をしめて茶室などに生たる茶頭樣。

ていけいぎょう[帝業](名)帝王の國業を統御經營すること。「一を定む」

ていけん[定見](名)一定の意見。

ていけん[低減](名)❶ひくくすること。又、價をひくくすること。❷ほのかすくなくすること。

ていこ[提壺](名)❶ひったくること。❷かゝげること。

ていこ[體言](名)「ていきゅうこと」に同じ。

ていこ[帝居](名)❶「ていきゅうきょ」(皇居)に同じ。❷上帝のすまひ。「こと」

ていこ[提供](名)さし出すこと。もち出すこと。

ていこきゅう[體胸筋](名)「ちやうきんき」(胸筋)に同じ。

ていこきん[定期預金](名)銀行が期限を定めてあづかる預金。普通三箇月又は六箇月若しくは一年等を期限と定め、其半途には拂戻(ひきもどし)に引出すことを得ざるものとす。利子の割合は普通預金より高し。「く」

ていこん[庭訓](名)家庭の教訓。「にはのをし」

ていこん[提琴](名)清樂に用ふる胡琴。

ていこん[低吟](名)こゑひくく口ずさむこと。

ていくわい[停會](名)❶會議を一時休止すること。❷帝國議會の議事を一時休止すること。又、衆議院解散の場合に、貴族院の議事を閉止すること。

ていくわい[低徊](名)たちもとほること。おちつきまよはること。

ていくわいがん[泥灰岩](名)【鑛】粘土と石灰との合して成りたる岩。

ていくわいど[泥灰土](名)【鑛】粘土に多量の石灰混入して等質に富める土壌。

ていくわく[邪惑](名)❶あしのおもはかなくこゝろのまどはかなくこと。❷古音、文語にて臨刑の罪囚を糾問するに用ひしより、轉じて臨刑にいふ語。「一を問ふ」も轉せず。

ていくわつ[締括](名)しめくゝること。

ていけん[定款](名)社團法人の組織及其業務執行の方法の規定。

ていけ[天氣](名)てんき。そこ模樣。てけ。「一のことにつけていのる」

ていけ[手活](名)❶みづから手を下して、花などを花瓶に挿入すること。❷一轉して、妓女などを茶箱をしかけて、わが事業とすること。

ていけい[提携](名)❶さげたづさへること。❷ともなひつれること。❸共同して事をなすこと。

ていけい[定型](名)一定のかたち。

ていけい[定形](名)一定のかたち。

ていけい[梯形](名)【數】一邊の相對する邊が互に平行なる四邊形。

ていけい[帝京](名)「ていきゅうきょ」に同じ。

ていけい[帝系](名)皇帝の譜系。

ていけいかう[定繫港](名)其船舶をつなぎ繫ぐ場所と定めたる港(ハ)。

ていけいばしょ[定繫場](名)其船舶をつなぎ繫ぐ一定の場所。

ていけつ[定決](名)さだめきわること。又さだまりきまること。「りきわること」

ていけつ[締結](名)❶しめむすぶこと。❷約束をとること。

ていけつ[提撕](名)❶ひったくること。さしあげること。❷耳にたたきつけること。

ていけの-はな[手活花](名)手づから活(イケ)たる花。又、活花をしめて茶室などに生たる茶頭樣。

ていけいぎょう[帝業](名)帝王の國業を統御經營すること。「一を定む」

ていけん[定見](名)一定の意見。

ていけん[低減](名)❶ひくくすること。又、價をひくくすること。❷ほのかすくなくすること。

ていこ[提壺](名)❶ひったくること。❷かゝげること。

ていこ[體言](名)「ていきゅうこと」に同じ。

ていこ[帝居](名)❶「ていきゅうきょ」(皇居)に同じ。❷上帝のすまひ。「こと」

ていこ[提供](名)さし出すこと。もち出すこと。

ていこきゅう[體胸筋](名)「ちやうきんき」(胸筋)に同じ。

ていこきん[定期預金](名)銀行が期限を定めてあづかる預金。普通三箇月又は六箇月若しくは一年等を期限と定め、其半途には拂戻(ひきもどし)に引出すことを得ざるものとす。利子の割合は普通預金より高し。「く」

ていこん[庭訓](名)家庭の教訓。「にはのをし」

ていこん[提琴](名)清樂に用ふる胡琴。

ていこん[低吟](名)こゑひくく口ずさむこと。

ていくわい[停會](名)❶會議を一時休止すること。❷帝國議會の議事を一時休止すること。又、衆議院解散の場合に、貴族院の議事を閉止すること。

ていくわい[低徊](名)たちもとほること。おちつきまよはること。

ていくわいがん[泥灰岩](名)【鑛】粘土と石灰との合して成りたる岩。

ていくわいど[泥灰土](名)【鑛】粘土に多量の石灰混入して等質に富める土壌。

ていくわく[邪惑](名)❶あしのおもはかなくこゝろのまどはかなくこと。❷古音、文語にて臨刑の罪囚を糾問するに用ひしより、轉じて臨刑にいふ語。「一を問ふ」も轉せず。

ていくわつ[締括](名)しめくゝること。

ていこく[帝國](名)❶天皇陛下の統治せる國。我日本國。❷皇帝の統治せる元首の君臨せる國。——**ぎくわい**[帝國議會](名)【法】天皇の立法行政に參與し、これを協賛する憲法上の合議機關。貴族院と衆議院とより成る。——**しゅぎ**[帝國主義＝Imperialism](名)權會の許す限り國力の許す限り、ひろく其國の領土を擴張し若しくは其國の權力範圍を擴張せんことを目的とする主義。——**ていこくとしょくわん**[帝國圖書館](名)文部大臣の管理に屬する國書館。——**とせいとくわん**[帝國圖書館](名)前條に同じ。

ていこくだいがく[帝國大學](名)國家の必要に應ずる學術技藝を教授し及其研究を攻究することを目的とする帝國の最高の學校。大學院及分科大學より成る。——**ていこくだいがくしょく**[帝國大學總長](名)其帝國大學の一般の事務を掌り所屬職員を監督する官。

ていこく[帝座](名)皇帝の座し給ふ座。玉座。

ていさい[體裁](名)❶ものかたち。ありさま。❷かたち。面目。❸ていたらく。ざま。

ていさう[丁壯](名)壯年。又、壯年の人。

ていさう[貞操](名)婦女のみさを。女子の節義。

ていさつ[偵察](名)敵又は匪徒などの動靜をひそかにうかゝふこと。——**ぜん**[偵察船](名)偵察の任務に從事する船。——**たい**[偵察隊](名)偵察のために派遣せらるゝ一小部隊。

ていさん[弟子](名)でし。もんてい。

ていさん[梯子](名)はしご。「こぢ」

ていさん[定止](名)とゞまること。「一する所を知る」

ていさん[清酒](名)なみだとはだ流るゝこと。「一交」

ていさん[抵死](名)死にいたること。「下る」

ていさん[呈示](名)さし出して示すこと。

ていさん[諦視](名)あきらかにみること。

ていさん[停止](名)❶中途にてとゞまること。❷一時とゞしとゞまること。

ていさん[定時](名)一定の時期。

ていさん[遞次](名)❶次ゆんぱん。次ゆん次。❷次ゆくこと。

ていさんかんかう[定時刊行](名)一定の時期に印刷發行すること。——**ぶつ**[定時刊行物](名)定時刊行のもの。即ち新聞・雜誌の類。

ていしき[定式](名)一定の法式又は儀式。

ていしき[程式](名)のりかた。

ていしきかん[呈示期間](名)其ものを先方に示すべき一定の期間。「手形の一」

ていしこうけん[停止公權](名)【法】犯罪者の一定の期間內公權の行使を停止すること。

ていしつ[帝室](名)天子の家。「一案」「皇室」——**はくぶつかん**[帝室博物館](名)帝室の繼續帝國にて帝室博物館現時發展國にては東京・京都・奈良にあり。「こと」

ていしつ[低濕](名)土地ひくくして濕氣多きこと。

ていしつ[貞實](名)婦人のみさをかたくして篤實なること。

ていしゃ[邸舍](名)いくやしき。「邸舍」

ていしゃ[停車](名)車をとゞめること。

ていしゃ[亭榭](名)あづまや。こしかけ茶屋。「ちやうゝもの」

ていしゃ[帝者](名)一國に君臨して帝と稱せ

ていしゃく[低唱](名)こゑひくくうたふこと。

ていしゃく[提唱](名)意義をとゝきあかすこと。「道理のあるところをとゝきあかすこと。「高説會の一」

ていしゃく[抵掌](名)手をたたくこと。「一して談ず」

ていしゃく[定酌](名)「ていせい」に同じ。

ていしゃく[祇園](名)もとより其人の名。昔をもとゝなふこと。

ていしゃく[抵觝](名)❶つゞのひ。あがき。❷ひきあひ。かきいれ。

ていしゃく[遞相](名)遞信大臣の略。

ていしゃく[禎祥](名)めでたきまがつ。

ていしゃく[帝城](名)皇帝の居す城。宮城。

ていしゃく[呈上](名)人にものを贈ること。さしあげること。

ていしゃく[停止公權](名)【法】犯罪者の一定の期間內公權の行使を停止すること。

ていしつ[帝室](名)天子の家。「一案」「皇室」——**はくぶつかん**[帝室博物館](名)帝室の繼續帝國にて帝室博物館現時發展國にては東京・京都・奈良にあり。「こと」

ていしつ[低濕](名)土地ひくくして濕氣多きこと。

ていしつ[貞實](名)婦人のみさをかたくして篤實なること。

ていしゃ[邸舍](名)いくやしき。「邸舍」

ていしゃ[停車](名)車をとゞめること。

ていしゃ[亭榭](名)あづまや。こしかけ茶屋。「ちやうゝもの」

ていしゃ[帝者](名)一國に君臨して帝と稱せ

ていしゃく[低唱](名)こゑひくくうたふこと。

ていしゃく[提唱](名)意義をとゝきあかすこと。「道理のあるところをとゝきあかすこと。「高説會の一」

ていしゃく[抵掌](名)手をたたくこと。「一して談ず」

ていしゃく[定酌](名)「ていせい」に同じ。

ていしゃく[祇園](名)もとより其人の名。昔をもとゝなふこと。

ていしゃく[抵觝](名)❶つゞのひ。あがき。❷ひきあひ。かきいれ。

ていしゃく[遞相](名)遞信大臣の略。

ていしゃく[禎祥](名)めでたきまがつ。

ていしゃく[帝城](名)皇帝の居す城。宮城。

ていしゃく[呈上](名)人にものを贈ること。さしあげること。

でいおーあやう（ー）[梯状]（名）はしごがた。

でいおーあやう（ー）[定常]（名）きだまりて變ざること。きまりてあること。——**は**[定常波]（名）【電】波形の前後せざるもの。陸面にあたりて反くる波が進み來る波と重なるのにより生じ起る。繩の一端を固定して他端を動かすときに見ゆる波形これなり。「駐動」動せざる所と動の發も初しき所を固と いひ、動の發も初しき所を固といふ。

でいあーあやう（ー）[庭上]（名）にはのもの。

でいあーあやう（ー）[泥匠]（名）きづあんかべぬり。

でいあやーぢやう（ー）[停車場]（名）電車又は汽車の運行を一時とゞめて乘客又は貨物をあげおろしする所。

でいあやーば[停車場]（名）停車場に同じ。

でいあーあゆ[低首]（名）頭を垂れさゞること。

でいあーあゆ[亭主]（名）❶一家の主人。特に商家の主人。❷をゝと。良人。

でいあーあゆ[庭樹]（名）庭のうゑ木。

でいあーあゆく[貞淑]（名）女子のみさをかたくしてえとゞかざること。「ナモ」

でいあーあゆつ[提出]（名）さしいだすこと。もち出。

でいあーあゆつ[挺出]（名）ぬきいづること。

でいあーあゆつ[呈出]（名）❶あらはしいだすこと。❷さしをどりること。さしだすこと。

でいあーあゆん[恍順]（名）兄又は長上によく事へてさからはぬこと。

でいあーあよ[汀渚]（名）なぎさ。みぎは。

でいあーあよく[停職]（名）懲戒のため官吏又は公吏の職務執行を一時停止すること。

でいあーあよく[抵屠]（名）刀に衝突又は手所すること。

でいあーあやう[梯状]（名）はしごがた。

でいあーあやう（ー）[定常]（名）きだまりて變ざること。きまりてあること。——**は**[定常波]（名）【電】波形の前後せざるもの。陸面にあたりて反くる波が進み來る波と重なるのにより生じ起る。繩の一端を固定して他端を動かすときに見ゆる波形これなり。「駐動」動せざる所と動の發も初しき所を固といひ、動の發も初しき所を固といふ。

でいあーあやう（ー）[庭上]（名）にはのもの。

でいあーあやう（ー）[泥匠]（名）きづあんかべぬり。

でいあやーぢやう（ー）[停車場]（名）電車又は汽車の運行を一時とゞめて乗客又は貨物をあげおろしする所。

でいあやーば[停車場]（名）停車場に同じ。

でいあーあゆ[低首]（名）頭を垂れさゞること。

でいあーあゆ[亭主]（名）❶一家の主人。特に商家の主人。❷をゝと。良人。

でいあーあゆ[庭樹]（名）庭のうゑ木。

でいあーあゆく[貞淑]（名）女子のみさをかたくしてえとゞかざること。「ナモ」

でいあーあゆつ[提出]（名）さしいだすこと。もち出。

でいあーあゆつ[挺出]（名）ぬきいづること。

でいあーあゆつ[呈出]（名）❶あらはしいだすこと。❷さしをどりること。さしだすこと。

でいあーあゆん[恍順]（名）兄又は長上によく事へてさからはぬこと。

でいあーあよ[汀渚]（名）なぎさ。みぎは。

でいあーあよく[停職]（名）懲戒のため官吏又は公吏の職務執行を一時停止すること。

でいあーあよく[抵屠]（名）刀に衝突又は手所すること。

でいあーあよく（ー）[定則]（名）一定の規則。きまりたること。

でいあーあよく[挺足]（名）❶あしがなくの足の如く、三方に相對立すること。❷「一に足らず」。

でいあーあよくーすう[定足數]（名）規定の最少數。

でいあやーおん[泥塑人]（名）つちにんぎやう。

でいあーた[手板]（名）❶講義にて強りたる小さき板。要ることはこれに字を記し、要なきことはこれを拭ひ去るもの。なりいた。❷初め。

でいあーたい[停滯]（名）❶物事の一處にとゞまりて進歩又は進捗せざること。とゞまること。❷食物の胃中にとゞこほりて消化しかねること。——**する**[停滯水]（名）とゞこほりて流れざる水。

でいあーだい[邸第]（名）やしき。

でいあーたいーせき[底堆石]（名）【地】水河の下底に沈(ッ)びて堆積せらるゝ土砂及巨石。

でいあーたい[抵當]（名）❶ひきあてがた。❷えこもつ。えこう。❸【法】債權者の目的物。

でいあーたいーけん[抵當權]（名）【法】債務者又は第三者の「占有のまゝ債務の擔保に供したる不動産につき、債權者が他の債權者に先だちて弁済を受くる權利。——**しやく**[抵當權者]（名）【法】債權者。——**せつていしや**[抵當權設定者]（名）【法】債權者に對して、抵當を設

でいあーたい（ー）[定則]（名）一定の規則。きまりたること。

でいあーたい（ー）[挺足]（名）❶ぬきいづること。❷「一に足らず」。

でいあーたいーすう[定足數]（名）規定の最少數。

でいあやーおん[泥塑人]（名）つちにんぎやう。

でーいた[手板]（名）❶講義にて強りたる小さき板。要ることはこれに字を記し、要なきことはこれを拭ひ去るもの。なりいた。❷初め。

でいあーたい[停滯]（名）❶物事の一處にとゞまりて進歩又は進捗せざること。とゞまること。❷食物の胃中にとゞこほりて消化しかねること。——**する**[停滯水]（名）とゞこほりて流れざる水。

でいあーだい[邸第]（名）やしき。

でいあーたいーせき[底堆石]（名）【地】水河の下底に沈(ッ)びて堆積せらるゝ土砂及巨石。

でいあーたい[抵當]（名）❶ひきあてがた。❷えこもつ。えこう。❸【法】債權者の目的物。

でいあーたいーけん[堤塘]（名）どて。つゝみ。

でいあーたいーどう[定道]（名）一定して守るべきみち。

でいあーたいーこう[帝道]（名）帝王の行ふべき道。又、仁政を主とするべき政道。

でいたいーけん[抵當權]（名）【法】債務者又は第三者の「占有のまゝ債務の擔保に供したる不動産につき、債權者が他の債權者に先だちて弁済を受くる權利。——**しやく**[抵當權者]（名）【法】債權者。——**せつていしや**[抵當權設定者]（名）【法】債權者に對して、抵當を設

でいあーたい（ー）[定則]（名）一定の規則。きまりたること。

でいあーたいーそく[挺足]（名）❶ぬきいづること。❷「一に足らず」。

でいあーたいーすう[定足數]（名）規定の最少數。

でいあーたいーそく[定足]（名）常に同一の位置にあるが如く見ゆる足。即ち恒足。「ねりこと」

でいあーせい[訂正]（名）文書のあやまりを正し改むること。

でいあーせい[修聲]（名）【文】新字音時代の節圓はその音調正確ならざりきといふに出づる新字又は別音。「治聲」

でいあーせい[低聲]（名）ひくきこえ。こごえ。

でいあーせい[定省]（名）朝夕にあやのきげんうかがひをすること。「治」

でいあーせい[帝政]（名）帝室の政治。又、帝道の政。

でいあーせい[啼聲]（名）なきごえ。「地層」

でいあーせいーちそう[汀成地層]（名）【地】沿岸の

でいあーせいらう[誠笑]（名）まことしやがわらふこと。

でいあーせいらう[泥沼]（名）どろぬまかぬま。

でいあーせいき[定敵]（名）一定の敵。

でいあーせいき[帝國]（名）帝室の國體。

でいあーせいつ[定說]（名）定まりたる說。きまりたる議論。「う」

でいあーせつ[貞節]（名）たゞしきみさを。ていさ

でいあーせん[汀線]（名）【地】海面が其岸と相接する

でいあーせん[停船]（名）船をとゞめること。「ゴ」

でいあーせん[挺然]（名）（副）ぬきんでゝ、すぐれ

にいふ語。

でいあーぜん[庭前]（名）にはさき。

でいあーそ[帝祚]（名）皇帝の位。又、皇帝の國體。

でいあーそ[泥塑]（名）土を用ひてつくりたる人形。などの類。

でいあーそう[邁進]（名）つゝしんで進むこと。又、さ

物]（名）機械に固定せる物。

でいあーちゆう[庭中]（名）にはのなか。

でいあーちゆう[停住]（名）とゞまること。「ゴ」

でいあーちゆう[定住]（名）其處に住居をさだむること。

でいあーちよ[帝女]（名）内親王。皇女。ひめみや。

でいあーちよ[貞女]（名）みさをたゞしき婦人。みさをかたき女子。

でいあーちよ[庭除]（名）にはの「ゴ」

でいあーちよ[制除]（名）きりのぞくこと。かりのぞく。

でいあーちよう[鄭重]（名）注意深きこと。親切なること。「てゝ」ていねいなること。「丁寧」ねんごろ。

でいあーちよく[亭直]（名）すなはちにのぼたつこと。

でいあーちよく[手一束]（名）手ににぎり得るほどの束。「ハ」兄を四寸ばかりといふ。「かぎり」

でいあーはい[手一杯]（名）（副）力のかぎり。能ふ

でいあーはい[亭亭]（名）（副）樹木などの大高くすぐなはにのびたるさまにいふ語。

でいあーはい[廷丁]（名）裁判所にて、法廷又は訴訟事務に使役せらるゝ雇手役の小吏。

でいあーはい（名）（名）もと総田館より出でたるより「ひ」でんなん、ひでんなんといひたるを、國り易くたるなりとも、いひ、手入手入の略言なりとも、いふ。詩歌又は下歌のなはしの略言、又詩歌又は下歌のなはしを譯とするもの。

でいあーはち[低潮]（名）【地】ひきしほが其極に達せしときの潮。干潮の對。

でいあーはつ[馬蹄]（名）馬のひづめにうつ鐵。かなづち。——**こう**[馬蹄工]（名）馬に蹄鐵をうつこと。

でいあーはん[邁進]（名）❶つゝしんでつたくゝること。❷えゆくつゝしんでつたくゝること。

でいあーはん（ー）[梯状]（名）はしごがた。

でいあーあやう（ー）[定常]（名）きだまりて變ざること。きまりてあること。——**は**[定常波]（名）【電】波形の前後せざるもの。陸面にあたりて反くる波が進み來る波と重なるのにより生じ起る。繩の一端を固定して他端を動かすときに見ゆる波形これなり。「駐動」動せざる所と動の發も初しき所を固といひ、動の發も初しき所を固といふ。

でいあーあやう（ー）[庭上]（名）にはのもの。

でいあーあやう（ー）[泥匠]（名）きづあんかべぬり。

でいあやーぢやう（ー）[停車場]（名）電車又は汽車の運行を一時とゞめて乗客又は貨物をあげおろしする所。

でいあやーば[停車場]（名）停車場に同じ。

でいあーあゆ[低首]（名）頭を垂れさゞること。

でいあーあゆ[亭主]（名）❶一家の主人。特に商家の主人。❷をゝと。良人。

でいあーあゆ[庭樹]（名）庭のうゑ木。

でいあーあゆく[貞淑]（名）女子のみさをかたくしてえとゞかざること。「ナモ」

でいあーあゆつ[提出]（名）さしいだすこと。もち出。

でいあーあゆつ[挺出]（名）ぬきいづること。

でいあーあゆつ[呈出]（名）❶あらはしいだすこと。❷さしをどりること。さしだすこと。

でいあーあゆん[恍順]（名）兄又は長上によく事へてさからはぬこと。

でいあーあよ[汀渚]（名）なぎさ。みぎは。

でいあーあよく[停職]（名）懲戒のため官吏又は公吏の職務執行を一時停止すること。

でいあーあよく[抵屠]（名）刀に衝突又は手所すること。

でいあーあよく（ー）[定則]（名）一定の規則。きまりたること。

でいあーあよく[挺足]（名）❶ぬきいづること。❷「一に足らず」。

でいあーたいーすう[定足數]（名）規定の最少數。

でいあやーおん[泥塑人]（名）つちにんぎやう。

でーいた[手板]（名）❶講義にて強りたる小さき板。要ることはこれに字を記し、要なきことはこれを拭ひ去るもの。なりいた。❷初め。

でいあーたい[停滯]（名）❶物事の一處にとゞまりて進歩又は進捗せざること。とゞまること。❷食物の胃中にとゞこほりて消化しかねること。——**する**[停滯水]（名）とゞこほりて流れざる水。

でいあーだい[邸第]（名）やしき。

でいあーたいーせき[底堆石]（名）【地】水河の下底に沈(ッ)びて堆積せらるゝ土砂及巨石。

でいあーたい[抵當]（名）❶ひきあてがた。❷えこもつ。えこう。❸【法】債權者の目的物。

でいあーたいーけん[堤塘]（名）どて。つゝみ。

でいあーたいーどう[定道]（名）一定して守るべきみち。

でいあーたいーこう[帝道]（名）帝王の行ふべき道。又、仁政を主とするべき政道。

でいたいーけん[抵當權]（名）【法】債務者又は第三者の「占有のまゝ債務の擔保に供したる不動産につき、債權者が他の債權者に先だちて弁済を受くる權利。——**しやく**[抵當權者]（名）【法】債權者。——**せつていしや**[抵當權設定者]（名）【法】債權者に對して、抵當を設

でいあーたい（ー）[定則]（名）一定の規則。きまりたること。

でいあーたいーそく[挺足]（名）❶ぬきいづること。❷「一に足らず」。

でいあーたいーすう[定足數]（名）規定の最少數。

でいあーたいーそく[定足]（名）常に同一の位置にあるが如く見ゆる足。即ち恒足。「ねりこと」

でいあーせい[訂正]（名）文書のあやまりを正し改むること。

でいあーせい[修聲]（名）【文】新字音時代の節圓はその音調正確ならざりきといふに出づる新字又は別音。「治聲」

でいあーせい[低聲]（名）ひくきこえ。こごえ。

でいあーせい[定省]（名）朝夕にあやのきげんうかがひをすること。「治」

でいあーせい[帝政]（名）帝室の政治。又、帝道の政。

でいあーせい[啼聲]（名）なきごえ。「地層」

でいあーせいーちそう[汀成地層]（名）【地】沿岸の

でいあーせいらう[誠笑]（名）まことしやがわらふこと。

でいあーせいらう[泥沼]（名）どろぬまかぬま。

でいあーせいき[定敵]（名）一定の敵。

でいあーせいき[帝國]（名）帝室の國體。

でいあーせいつ[定說]（名）定まりたる說。きまりたる議論。「う」

でいあーせつ[貞節]（名）たゞしきみさを。ていさ

でいあーせん[汀線]（名）【地】海面が其岸と相接する

でいあーせん[停船]（名）船をとゞめること。「ゴ」

でいあーせん[挺然]（名）（副）ぬきんでゝ、すぐれ

にいふ語。

でいあーぜん[庭前]（名）にはさき。

でいあーそ[帝祚]（名）皇帝の位。又、皇帝の國體。

でいあーそ[泥塑]（名）土を用ひてつくりたる人形。などの類。

でいあーそう[邁進]（名）つゝしんで進むこと。又、さ

物]（名）機械に固定せる物。

でいあーちゆう[庭中]（名）にはのなか。

でいあーちゆう[停住]（名）とゞまること。「ゴ」

でいあーちゆう[定住]（名）其處に住居をさだむること。

でいあーちよ[帝女]（名）内親王。皇女。ひめみや。

でいあーちよ[貞女]（名）みさをたゞしき婦人。みさをかたき女子。

でいあーちよ[庭除]（名）にはの「ゴ」

でいあーちよ[制除]（名）きりのぞくこと。かりのぞく。

でいあーちよう[鄭重]（名）注意深きこと。親切なること。「てゝ」ていねいなること。「丁寧」ねんごろ。

でいあーちよく[亭直]（名）すなはちにのぼたつこと。

でいあーちよく[手一束]（名）手ににぎり得るほどの束。「ハ」兄を四寸ばかりといふ。「かぎり」

でいあーはい[手一杯]（名）（副）力のかぎり。能ふ

でいあーはい[亭亭]（名）（副）樹木などの大高くすぐなはにのびたるさまにいふ語。

でいあーはい[廷丁]（名）裁判所にて、法廷又は訴訟事務に使役せらるゝ雇手役の小吏。

でいあーはい（名）（名）もと総田館より出でたるより「ひ」でんなん、ひでんなんといひたるを、國り易くたるなりとも、いひ、手入手入の略言なりとも、いふ。詩歌又は下歌のなはしの略言、又詩歌又は下歌のなはしを譯とするもの。

でいあーはち[低潮]（名）【地】ひきしほが其極に達せしときの潮。干潮の對。

でいあーはつ[馬蹄]（名）馬のひづめにうつ鐵。かなづち。——**こう**[馬蹄工]（名）馬に蹄鐵をうつこと。

でいあーはん[邁進]（名）❶つゝしんでつたくゝること。❷えゆくつゝしんでつたくゝること。

ぎの忠馬・人夫。

（ていでん）［停電］（名）発電所・配電所又は電線等に故障生じて、送電のとまること。

（ていど）［程度］（名）一定のかぎり。適當のかぎり。はどあひ。ほど。

（でいど）［泥土］（名）水にとけたる土。どろ。

（ていさら）［丁東］（名）玉などの觸れあふ聲。

（ていさら）［飣餖］（名）以前の文詞により云たがふと、又、無用の文句をかさねもちふること。

（ていさら）［低頭］（名）頭を垂（た）るゝと、又、頭を垂れて禮をなすこと。——**へいぢん**［低頭平身］（名）頭をたれ體をひくゝして、ひちあやまりにあやまること。

（ていさく）［帝德］（名）天子の御威德。

（ていさく）［提督］（名）總隊の司令官又は司令長官。

（ていど・もんだい）［程度問題］（名）程度の如何が議論のもとゝなる問題。

（ていない）［邸内］（名）やしきうち。

（ていにん）［聽認］（名）ゆるすこと。きゝいるゝこと。

（ていねい）［丁寧］（名）ねんごろ。親切。鄭重。

（でいねい）［泥濘］（名）ぬかるみ。

（ていねん）［丁年］（名）㊀一人前に成長せること。現今にては男滿二十歳をいふ。成年。㊁一人前の男子。二十歳以上の男子。——**ぢゃ**［丁年者］（名）前條（二）に同じ。——**みまん**［丁年未滿］（名）年齢の未だ丁年に達せざること。

（ていはい）［停廢］（名）やむること。行はれざること。

（ていはう）［綈袍］（名）ぬのこ。わたいれ。

（ていぼう）［堤防］（名）水を防ぐために設けたる土石の築造物。つゝみ。土手。

（ていはく）［碇泊］（名）船舶が碇（いかり）をおろして泊（とま）ること。ふなが、りすること。——**かう**［碇泊港］（名）船舶の碇泊するみなと。

（ていはつ）［剃髮］（名）僧尼となりて髮を剃（そ）ること。「髮」。

（ていばん）［丁番］（名）番にあたること。

（でいはんがん）［泥版岩］（名）【鑛】流の縁（ふち）き水底に、粘土の沈澱凝結して成りたる地層。

（ていひゃう）［定評］（名）一定の批評又は評判。「世自有一」。

（ていふ）［貞婦］（名）みさをのいと正しき婦人。

（ていふ）［逓夫］（名）荷物をはこぶ人夫。

（ていふつ）［鼎沸］（名）《鼎の湯の沸くが如しといふ義》多くの人がいとさわがしくあこりたつこと。

（ていべつ）［帝廟］（名）天子のみたまや。

（ていへん）［底邊］（名）【數】平面圖形の一邊にして、其圖形が此邊上に立つと考へらるゝもの。例、二等邊三角形の底邊は、相等（ひと）しからざる第三邊なり。「に見ると。

（ていべん）［睇眄］（名）ながしめに見ること。よこめ。

（ていぼ）［帝謨］（名）天子の事業。

（ていまい）［弟妹］（名）おとうとといもうと。年下の兄弟。

（でいまん）［泥鰻］（名）泥工の用ふるこて。かべつちを塗るこて。

（ていめい）［帝命］（名）上帝又は天子の命。

（ていめい）［締盟］（名）同盟をむすぶこと。條約をむすぶこと。——**とく**［締盟國］（名）互に條約をとりむすびたる當事國。

（ていめい）［定命］（名）定まりたる命數。——**うん**［定命論］（名）「ていだうろん」（定道論）に同じ。

（ていめん）［體面］（名）「たいめん」に同じ。

（ていめん）［睇眄］（名）「ていべん」に同じ。

（ていめん）［庭面］（名）にはのおもて。

（ていめん）［底面］（名）【數】多面體の一面にして、其多面體が此面上に立つと考へらるゝもの、例、角壔・角錐・圓錐等の底面の如し。

（ていやう）［瓶羊］（名）をひつじ。

（ていやく）［締約］（名）約束をむすぶこと。又、條約をむすぶこと。「訂約」。——**とく**［締約國］（名）「ていめいとく」（締盟國）に同じ。

（ていら）［偵邏］（名）悪のびのみまはり。

（ていらく）［低落］（名）さがること。ひくゝなること。

（ていらず）［手不入］（名）㊀手のかゝらぬこと。世話のなきこと。㊁いまだ一度も用ひざること。㊂未だ一度も手入をなさざること。㊃〔きむすめ〕。

（ていらん）［提籃］（名）てさげ。手籃。

（ていり）［定理］（名）已に眞なりと知られてある理論によりて、證明せられたる一定の理論。

（ていり）［偵吏］（名）探偵の事にあたる官吏。

（ていり）［提理］（名）すべをさむること。又、其職。

（でいり）［出入］（名）㊀出づると入ること。てはいり。㊁金錢の收入と支出と。㊂もつれ。もめ。㊃訴訟。公事。㊄ちかしく其家に往來すること。㊅其家の愛顧を受けて、たゞくてはいりすること。又、其人。

（ていりう）［停留］（名）とゞまること。とまること。又、とゞむること。とむること。

（ていりう）［定流］（名）【地】方向の一定せる海流。

（でいりう）［泥流］（名）【地】火山よりやけくづれたる岩石の水と共に噴出するもの。

（でいり・こ）［出入子］（名）【動】蚊（か）の子の稱、其

はひふへほ　まみむめも　やいえゆよ　らりるれろ　わゐうゑを

一定の成長期までは、母の口より其腹に出入するといふより此名あり。

（ていりつ）［鼎立］（名）三者相對向して、鼎のあしの如くに立つこと。「めたつること。

（ていりつ）［停立］（名）とゞまりたつこと。又、とゞ

（ていりつ）［定率］（名）一定のわりあひ。

（ていりつ）［定律］（名）さだまりたる法律・法則。

（ていりやう）［程量］（名）㊀ほど。㊁めかた。

（ていりやう）［定量］（名）一定の分量。——**ぶんせき**［定量分析］（名）【化】化合物を分析して、各屬素の分量をはかること。

（ていりよう）［帝陵］（名）天子のみさゝぎ。

（ているゐ）［滿涙］（名）なみだ。

（ていれ）［手入］（名）㊀もち。保存。㊁なほし。つくろひ。「補修」。㊂てをつくること。着手。㊃〔なかま多き犯罪の檢擧〕「ばくち場の—」。

（ていれい）［定例］（名）㊀一定の事例。きまりてあるためし。㊁きまり。さだめ。

（ていれう）［庭燎］（名）にはにてたくかゞり。にはび。「しきと。

（ていれつ）［貞烈］（名）婦人のみさをのいとたゞ

（ていれん）［低廉］（名）ねだんのやすきこと。

（ていろ）［鼎鑪］（名）かなへの形をなしたる香爐。

（でいろ）［泥路］（名）ぬかるみのみち。どろみち。

（ていろん）［定論］（名）さだまりてある議論。

（ていわう）［帝王］（名）國土人民を統治する元首。——**きくわんせつ**［帝王機關說］（名）主權の本體は國家に存して、帝王は其最高機關たりといふ說。——**きゆけんせつ**［帝王主權說］（名）帝王は主權の本體にして、國家の最高機關にあらずといふ說。

（ていゐ）［帝位］（名）帝者のくらゐ。天子のみくら「ゐ」。

（ていゐ）［庭闈］（名）宮中。後宮。

（ていゐ）［廷尉］（名）㊀漢時代に、刑罰を掌りし高官。㊁檢非違使佐の唐名。——**のすけ**［廷尉佐］（名）前條に同じ。

（ていゐん）［定員］（名）定まりたる人數。

（ていゐん）［庭院］（名）にはは、その。

（てう）［朝］（名）㊀あさ。あした。㊁朝廷。廟堂。㊂一人の君主相つぎて統御する間。王朝。㊃一人の君主の統御する間。御代。㊄君主の臣下に會見する。君主の座敷を嚴くと。「不—見」。㊅我君主の治下。我父母の國。「歸—」。

（てう）［兆］（名）㊀きざし。ためし。前表。㊁數のいと多きこと。「一民」。㊂まつりのには。又、はかば。

（てう）［調］（名）㊀古昔、夫役のつぐのひとして、正丁各一人より、其土地の狀態に從ひ、定規の布帛又は其他のものを官に納めしもの。㊁音律の調子。ちゝ。㊂字句の調子。くてう。㊃おもむき。趣致。㊄詩賦・歌謠。

（てう）［條］（名）【數】儻の十倍。

（てう）［條］（名）㊀すぢ。みち。「一理」。㊁くだり。

（でう）［條］（接）によりて。につきて。「指令候—」。かど。「一項」。㊂えだ。「風鳴—」。

（でう）［條］（接尾）すぢ又はかどを數ふるにいふ語。

（てうあい）［朝靄］（名）あさがすみ。

（てうい）［朝意］（名）朝廷の意見。「す」。

（てうい）［弔意］（名）とむらふこゝろ。「—を表

（てうい）［朝衣］（名）朝廷に出づるに着くる服。

（てうい）［弔衣］（名）とむらひに着る衣服。

（てういん）［調印］（名）印を押（す）すこと。捺印。

（てういん）［調勻］（名）とゝのひてひとしき「みゆること。

（てうえつ）［朝謁］（名）朝廷に參して君主にまと。

（てうおん）［朝恩］（名）君主のめぐみ。

（てうか）［朝家］（名）帝王の家。帝室。王室。

（てうか）［弔歌］（名）とむらふうた。

（てうが）［朝賀］（名）㊀古昔、正月一日辰刻に天皇大極殿に出御ましまして行はせられし公事。群臣皆な禮服を着して其位に列し、天皇の高御座につかせたまふとき、與儀の再拜を唱ふるにつれて、群臣再拜し、次に舞踏すれば、武官萬歲の旗をふりきといふ。朝拜。㊁朝廷に參賀すること。

（てうかい）［調諧］（名）とゝのひやはらぐこと。

（てうかい）［潮解］（名）【化】固體が空氣中より濕氣を吸收して溶解すること。不純なる食鹽はよく潮解す。

（てうかい・ぼへん）［朝改暮變］（名）あさあらためかへたるを暮にまたかふること。即ち物事の定まらざること。

（でうかう）［條項］（名）くだり。かど。かぢう。

（でうがく）［調樂］（名）古昔、加茂の臨時祭に行はれし舞樂の稱。其最初の試を試樂といふに對す。

（でうがふ）［調合］（名）藥材を盛り合はすこと。

（でうかん）［釣竿］（名）つりざを。「（調劑）」。

（でうきき）［朝紀］（名）朝廷の風紀。「こり。

（でうき）［肇基］（名）もとゐを開くこと。もと。あ

（でうき）［跳起］（名）はねあがること。とびたつ

（でうぎ）［朝嘗］（名）あさひ。「と。

（でうぎ）［朝儀］（名）朝廷の儀式。

（でうぎ）［朝議］（名）朝廷の評議。「と。

（でうぎ）［調戲］（名）からかふこと。たはむゝ

ちょうかい【懲戒】（名）❶ 悪いことをこらしめること。❷ 罪人に刑を加えること。

ちょうかい【懲悔】（名）自分の悪いことを反省すること。

ちょうかい【聴解】（名）人の話を聞いて理解すること。

ちょうかい【長会】（名）長い会議。

ちょうかい【朝会】（名）朝の会。

ちょうかい【朝開】（名）朝、開くこと。

ちょうかい【朝海】（名）朝の海

「マンダラげ」の一名。

てらせん-あめ[チョウ]-[朝鮮飴]（名）一種の菓子、ぎうひあめの類。

てらせん-うぐひす[チョウ]-[朝鮮鶯]（名）【動】「カウライうぐひす」に同じ。

てらせん-きばうきゆ[チョウ]-[朝鮮擬寶珠]（名）【植】「ぎばうきゆ」(三)に同じ。

てらせん-こま[チョウ]-[朝鮮駒]（名）【動】こまどりの一種、咽は黑く頭と背とは赤く、胸と腹とは白し。あかひげ。りうきうごま。

てらせん-さくち[チョウ]-[朝鮮石榴]（名）【植】ざくろの一種、幹短小にしてよく花實を結ぶ。

てらせん-おやり[チョウ]-[挑戰狀]（名）挑戰のため送におくる書狀。

てらぜん-おゆき[チョウ]-[超然主義]（名）或事實に關係せず其外に地位を占めて事を行ふ主義。

てらぜん-ないかく[チョウ]-[超然內閣]（名）超然主義を執る內閣、何れの政黨にも關係せざる內閣。

てらせん-にんおん[チョウ]-[朝鮮人參]（名）【植】朝鮮の開城附近に特產する人參、人參中最も佳良なるものにして、藥用として古來有名なり。

てらせん-はまぐり[チョウ]-[朝鮮蛤]（名）【動】はまぐりの一種、多く九州及南海等に產す、殼大くして厚く色白し、甚石などに作る。「ごいしはまぐり」ごいしがひ。

てらせん-べっかふ[チョウ]-[朝鮮鼈甲]（名）うみがめの甲に、水牛の角などにて黑き斑(ラ)を入れたる擬鼈のべっかふ。「に同じ。

てらせん-まつ[チョウ]-[朝鮮松]（名）【植】「カラまつ」

てらそう[チョウ]-[朝宗]（名）㊀群臣の天子に謁見すること。㊁小水の大水に注ぎ入ること。

てらだ[チョウ]-[蟬娜]（名）たをやか。たをやか。

てらだう[チョウ]-[朝堂]（名）君王の政事を聽きたまふ所。君王の群臣に謁見をたまふ所。

てらだう[チョウ]-[鳥道]（名）山中のいとほそき路。

てらたく[チョウ]-[彫琢]（名）きざみがくと。又、みがきかざること。

てらたく[チョウ]-[超卓]（名）こえすぐれたること。

てらたつ[チョウ]-[超脫]（名）こえ出づること。ぬけいづること。

てらたつ[チョウ]-[調達]（名）とゝのへてとゝくること。とりそろへておくること。調進。

でらだつ[チョウ]-[條達]（名）すぢのよくとほること。

てらたん[チョウ]-[朝旦]（名）あした。あさ。

てらち[チョウ]-[手打]（名）㊀空手にて打ち殺すこと。「虎を—にす」（暴）。㊁てづから人を斬ること。㊂取引の約束が成立したる志ら作ること。「一番夢」。㊃取引の約束が成立したる志るしに、兩の掌をうち合はせて鳴らすこと。㊄喧嘩の和睦が成立したる志るしに、兩の掌をうち合はせて鳴らすこと。

てらち-てらち[チョウ]-(名)《手打手打の音便》雙方の掌を打ち合はせて、音を立つること。(小兒の語)。

テウ-チン[チョウ]-[挑燈]（名）《字の唐音》「チャウチン」(提燈)に同じ。(燃火)。

てらづ[チョウ]-[調度]（名）㊀貴人の持つ矢の特稱。

てらづ[チョウ]-[手水]（名）㊁手又は顏を洗ふ水。てみづ。㊂轉じて、厠に行くこと。又、小便。——。

たらひ[ライ]-[手水盥]（名）㊀厠手水を盛る盥。面盥。——。**ば**[ライ]-[手水場]（名）㊀厠の僧の手水をつかふ所。㊁轉じて、かはや。はゞかり。——。**パチ**[手水鉢]（名）手水を入れおく鉢。

てらち-ていし[チョウ]-[朝廷]（名）君王の大政を聽きたまふ所。一國の大政の出づる所。

てらて-ていし[チョウ]-[釣艇]（名）つりぶね。

てらて-ていし[チョウ]-[調定]（名）調査して確定すること。「と。仲裁。とり去らべきわること。

てらて-てい[チョウ]-[調停]（名）なかなはりをせさすること。

でらでら[チョウ]-[條條]（名）すぢ〳〵。かどかど。

でらでら[チョウ]-[孀孀]（名、副）㊀風のそよ吹くさまにいふ語。㊁去なやかなるさまにいふ語。「餘音—」。㊂音聲のながくひゞくさまにいふ語。

てらてき[チョウ]-[朝敵]（名）朝廷に敵する反賊。

てらてき[チョウ]-[挑剔]（名）えぐること。くじること。

てらてき[チョウ]-[羅羅]（名）うりよねとかひよね。

てらてつ[チョウ]-[條鐵]（名）細長き鐵材。「と。

てらてん[チョウ]-[朝典]（名）朝廷の制度又は儀式。

てらでん[チョウ]-[弔電]（名）電報にてくやみをのぶること。

てらと[チョウ]-[釣徒]（名）魚をつるもの。「ると。

てらと[チョウ]-[刁斗]（名）古昔、支那にて、軍隊が晝間は食物をかしぐに用ひ、夜間は警戒に抱(ウ)ちならし、一種の銅器、即ちどちの類。

てらど[チョウ]-[調度]（名）㊀手まはりの道具。てだうど。㊁武家にて、弓矢の特稱。——。**がけ**[調度懸]（名）㊀弓矢を飾りて置く具。㊁主君の弓矢を持ちて從ふ者。——。**きよく**[調度局]（名）御服・御物及宮內省中の器用物品・被服等に關する事務を管理し兼て宮中の掃除を掌る宮內省の一局。——。**もち**[調度持]（名）調度懸(二)に同じ。

[(一)けがどうて]

てらど[チョウ]-[挑動]（名）いどみて其心を動かすこと。いどみまよはすこと。

てらと[チョウ]-[朝暾]（名）あさひ。

てらね[チョウ]-[手斧]（名）《「てをの」の音便》材木を斧にて削(カ)りたる後、これを平にするに用ふる刃物、內へ曲がりたる二尺餘の木の柄あり、刃を內へ向けて用ふ。てをの。——。**はじめ**[手斧始]（名）㊀大工が、年改まりて後、始めて仕事をなすこと。㊁大工が其慰勞にとりかゝりたる最初。——。**め**[手斧目]（名）手斧にてけづりたる痕。

てらに-く[チョウ]-[鳥肉]（名）とりのにく。

てらねん[チョウ]-[超年]（名）としをこすこと。

てらば[チョウ]-[嘲罵]（名）あざけりのゝしること。

てらば[チョウ]-[調馬]（名）馬を乘り馴(ナ)らすこと。

てらはい[チョウ]-[朝拜]（名）「てうが」(朝賀)に同じ。

てらばい[チョウ]-[糴賣]（名）米をうること。うりよね。

てらばう[チョウ]-[眺望]（名）景色をながめ見渡すこと。ながめ。

てらばし[チョウ]-[調馬師]（名）主馬寮の職員、寮馬の調習に從事するもの。

てらはつ[チョウ]-[挑撥]（名）事件をかゝげおこすこと。事端をいどみおこすこと。

てらはつ[チョウ]-[髫髮]（名）小兒のたれがみ。

てらふ[チョウ]-[釣父]（名）つりするをのこ。

てらふ[チョウ]-[調布]（名）調(ツ)に出すぬの。

てらふ[チョウ]-[調賦]（名）みつぎもの。「と。

てらぶ[チョウ]-[跳舞]（名）はねまふこと。をどりまふ

てらふく[チョウ]-[朝服]（名）朝廷に出づるときに着る服。

てらぶく[チョウ]-[調伏]（名）【佛】い身・語等の業を調和控柳して、諸の惡行を制伏禁除すること。「其心を—す」（ろ）眞言宗又は天台宗にて、佛力を頼み願(ガ)りて惡敵などを降伏せしむること。（は）人を呪(ロ)ひて殺すこと。

てらぶ[チョウ]-[兆物]（名）もろ〳〵のもの。

てらぶん[チョウ]-[甲文]（名）とむちふ文。

てらぶん[チョウ]-[彫文]（名）ほりたるもやう。ゑりたるあや。

でらぶん[チョウ]-[條文]（名）個條書の文。規則の文。

でらぶん-せき[チョウ]-[鳥糞石]（名）鳥の糞の化石して成りたる石。

てらへい[チョウ]-[調弊]（名）おとろへつひゆること。

てらぼ[チョウ]-[朝暮]（名、副）あさばん。あけくれ。

てらほふ[チョウ]-[調法]（名）《重寶の轉》用ひに便利多きこと。

てらぼん[チョウ]-[超凡]（名）なみをこえ出づること。

てらま[チョウ]-[鳥馬]（名）【動】「つぐみ」の一名。(東の方言)。

てらまい[チョウ]-[超邁]（名）こえまさること。

てらみ[チョウ]-[調味]（名）食物をとゝのへまさむること。食物を料理すること。

てらみん[チョウ]-[兆民]（名）あをひとぐさ。たみ。萬「民。

てらめい[チョウ]-[朝命]（名）朝廷の命令。

てらめい-まり[チョウ]-[朝名市利]（名）《張儀の卑名者於朝、卑利者於市の言に出づ》名と利とは人の多くあつまりつどふ所にあらざれば求め得ちれずといふこと。

てらもく[チョウ]-[鳥目]（名）背錢の異稱、中に孔(ナ)ありて其形鳥の目に似たるが故にいふ。

でらもく[チョウ]-[條目]（名）個條を書きつらねたるもの。「個條書。

てらもん[チョウ]-[弔問]（名）とひともらふこと。くやみをいふこと。「と。

てらや[チョウ]-[朝野]（名）朝廷と民間と。かみとたもと。

てらや[チョウ]-[朝陽]（名）あさひ。日出。

てらやく[チョウ]-[跳躍]（名）をどりあがること。とびあがること。「と。

てらやく[チョウ]-[調藥]（名）「てうざい」(調劑)に同じ。

でらやく[チョウ]-[條約]（名）㊀個條をたてゝする約定。㊁(法)二つ以上の國家が、其國際間に於ける相互の權利義務を定むるためになす契約。——。**とく**[條約國]（名）「ていやくこく」(締約國)に同じ。

てらよう[チョウ]-[跳踊]（名）をどりあがること。とび「あがること。

てらら[チョウ]-[手占]（名）手すぢを見て吉凶をうらなふこと。てさうを見ること。

てらら-ら[チョウ]-[鳥羅]（名）とりあみ。「てあそぶ。

てららが-す[チョウガス]-(他、さ四)たはむれもて

てらら-く[チョウ]-[凋落]（名）㊀花ばみかるゝこと。㊁おちぶれはつること。

てらり-り[チョウ]-[調理]（名）㊀とゝのへをさむること。㊁料理。「一法」。

でらり-り[チョウ]-[條理]（名）すぢみち。すぢめ。すぢ。

でらり-り[チョウ]-[條里]（名）市街の區劃。

てらり-う[チョウ]-[潮流]（名）㊀うしはのながれ。㊁【地】內海と外洋との水面の高さに差あるがために生ずる海水の流動。㊂時勢のなりゆき。

てらり-やう[チョウ]-[跳梁]（名）とびはしること。かけまはること。

てらる-る[チョウ]-[鳥類]（名）【動】脊椎動物の一、體血朔生にして、體は羽毛を以て蔽(オ)はれ、前脚は翼に變ず、後頭骨はたゞ一個の踝狀突起あり、肺にて呼吸す。とり。

でられい[チョウ]-[條例]（名）㊀個條書にしてある法令。㊁自治體の發布せる法規。

てられい-ぼかい[チョウ]-[朝令暮改]（名）あした

に下したる令をくれがたにかくもらたむるこ"回ち合令のきまらざるこ"

てら-れん(ヤウコ)[調練]（名）兵士を訓練するこ"練練" ——**-たいこ**[調練太鼓]（名）兵士の進退の合圖に打ち鳴らす太鼓" ——**-は**[調練場]（名）兵士の調練をなす場所"

てら-うち(ヤウコ)[朝餐]（名）朝の餐(ヨシ)"主に"人生のはかなきことに譬へいふ語" 「茶」

てら-うら(ヤウコ)[明斧]（名）あざけりなぶるこ"（題

てら-うらう(ヤウコ)[彫鏤]（名）えるこ"きざむこ"

てら-わ(ヤウコ)[調和]（名）「てらうわ」に回じ"

てら-るる(ヤウコ)[朝廷]（名）朝廷の意光"

てら-るる(ヤウコ)[弔慰]（名）死者をとむらひ生者をなぐさむこ" ——**-きん**[弔慰金]（名）死者の家族などに贈與する金"

てら-るる(ヤウコ)[兆城]（名）はかば"墓所" 「じ"

てら-ろつ(ヤウコ)[超越]（名）「てらうつ」(超絶)に回じ"

て-たくれ[手後]（名）横合に後ゆゝこ"意思のあらゝこ"

て-たち[手落]（名）あやまこ"てゐけ"えあやま"

て-たひ(イヤ)[手負]（名）戰鬪などにて創(キズ)を負(オ)ふこ"又"其創を負ひたるもの"「一番"(負傷)"

て-たほえ[手覺]（名）手ごゝろを覺えてゐるこ"

て-たも[手重]（名）てあもきこ"

て-たも-し(ヤウ)[手重]（形ク）❶とりあつかひ面倒なり" ❷容易ならず"むづかし"

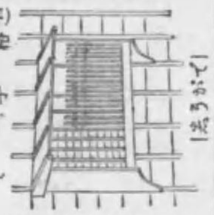
て-たり[手織]（名）手づから織るこ"又"手づから織りたる織物"「一木綿"

て-か[手下]（名）てだた"配下"

でか（名）「だんてい」(探偵)に回じ"

でかい（形）大いなり"いかめしゝりつはなり"

でがら[出格子]（名）外へ張り出して作りたる格子"



「えろうがで」

て-がか-り[手懸]（名）❶手をかくる所" ❷着手の便宜"てづる"上手が"

で-かか-り[出懸]（名）てかゝるこ"

で-かか-る(ラ)[出懸]（自ラ四）將に出でんとす"

て-かき[手書]（名）巧(タク)に文字を書く人"書道に長じたる人"（能筆"能書）" 「を書く"

て-か-く(ヤウ)[手書]（自カ四）巧(タク)に文字

て-か-く(ヤウ)[手撮]（自カ四）手にて指揮す"手にて示し教ふ"

て-か-くば(ヤウ)[手懸]（他カ下二）自ら手を下して其物事をあつかふ"自ら其物事に當る"

で-か-くば(ヤウ)[出懸]（自カ下二）其所に赴(ユキ)かんとて出で行く" 「はじに"

てかく-ばかり-に[手懸若]（副）手のとゞく

て-かけ[奚]（名）手に懸けて愛するもの"妾(メカケ)の"ものはめ"愛妾"

で-かけ[出掛]（名）將に出でんとする時"てゐな"

でかけ-る（他）「てがくこ」の訛"

でかけ-る（自）「てかくこ」の訛"

て-かけん[手加減]（名）❶手にて行ふこゝろひ"とゞこゝろひ" ❷はどゝろひ"こゝろゝひ" 「(塩梅)"

て-かご[手籠]（名）手に提(サゲ)げて持つ小きき籠"

てかご[手傘]（名）きしかさ"

て-かし[手械]（名）囚人などの手にかけてその動けなやうにする刑具"てかせ"

て-かす[手數]（名）「てすうに回じ" ——**-れう**[手數料]（名）「てすうれうに回じ"

で-か-す[出來]（他サ四）❶出來るやうにす" ❷えとゝ"はたす" ❸初穂を祭る"成かす"

て-かせ[手械]（名）「てかし」の轉"

て-かぜ[手風]（名）手を動かすに つれて起る風"

で-かせぎ[出稼]（名）故鄕を出でて他國に赴きて働くこ" ——**-にん**[出稼人]（名）出稼をする人"

て-かた[手形]（名）手形の略 ❶後日の證として交替に出さるもの"上古は"人の掌に墨を塗りてこれを押したりしが"後世に至り"印形を用ふるもとなれり" ❷切手"切手"證券" ❸一定の時期に一定の場所にて一定の金額を支拂はるべき有價證券"即ち貨幣爲替の證券の類"貨幣手形・約束手形及小切手の三種あり" ❹馬に鞍(クラ)をとゝ"手を觸くる後の部分" ——**-うけとりにん**[手形受取人]（名）貨幣手形の手形金額を受取るべき人" ——**-かうくわんぢよ**(ヤウコ)[手形交換所]（名）銀行組合に加入せる銀行が"互に行員を派出して"日々同受取したる手形を交換し"其差引勘定によりて相互の貸借を清算する一定の場所" ——**-きんが**く[手形金額]（名）手形面に記載したる金額" ——**-ぢはらひにん**(ハウ)[手形支拂人]（名）貨幣手形の手形金額を支拂ふ人" ——**-ばらひ**(ハウ)[手形拂]（名）現金を用ひず"手形を振出して支拂をなすこ" ——**-ひきうけにん**[手形引受人]（名）手形金額の支拂を引受くる人" ——**-ふりだしにん**[手形振出人]（名）手形を振出したる人" ——**-わりびき**[手形割引]（名）手形の所持人が"其手形の支拂期日以前に現金を得んとして"これを銀行に持參したるとき"銀行にて"

其記載の金額より支拂期日までの利子を引き去りたる殘金を以て"其手形を買受くるこ"原に割引こもいふ"

で-かた[出方]（名）❶建屋のやうす"そもけや"ずるもの" ❷來客の座に附屬して"客を案内しもの用を辨ずるもの"

て-かた-し(ヤウ)[手堅]（形ク）確實にして危險なし"たしかなり"かたし" 「に出でゝかたるこ"

で-かたり[出語]（名）來客にて挨拶談話が終來

てか-つ-く(ヤウ)[自カ四]てかゝ"す"

てか-つて[手勝手]（名）手の働手"

てか-て-か（名）副）初のつゞやよくひかりかゞやくさまにいふ語"「一した旭日"

て-かね[手鐵]（名）德川時代に"庶人に持せし罔刑"二つあはせたる鐵環をもて"罪人の兩手を束ねしこ"手錠"

て-かは-り(ワリ)[手替]（名）❶仕事を代はりてなす人" ❷書載の異なるこ"さまのかはりてあるこ"

で-かは-り(ワリ)[出替]（名）❶さきの人出で"後の人入りてこれに代(カ)はるこ"（交替" ❷「奴婢などが"屋敷限を終(ヲ)くて相代はるこ"

て-かひ(イヤ)[手回]（名）手づから回(カ)ふこ"從業に回ふこ"又"其もの"「一の犬"

て-かみ[手紙]（名）❶はんきれ"半切紙" ❷用事を記し又は安否を尋ね"若しくは事情を報じて送くるべくりやうの文書"ふみ"書簡"書狀"手紙"尺牘" ——**-づかひ**(イヤ)[手紙使]（名）❶手紙をあくりて用事をなすまこと"「一してすます" ❷手紙をあくりとゝくるつかひ"

て-かめ[手瓶]（名）肥手のある瓶"

て-がら[手紙]（名）婦人の袋の袋面に掛けて帶とし切"綿類などにて作り"種々の色に染めたるもの"

て-がら[手柄]（名）いきる"かを"功績" ——**-がは**(ヤウ)[手柄顏]（名）あの れひとりてがらを誇りたりとばかりに"はこれる顏つきはこりがは"

て-がら-の-を[手柄緒]（名）帶鐵につくる紐"

て-がる[手輕]（名）てがるきこ"簡易"輕便"簡略" ——**-し**(ヤウ)[手輕]（形ク）煩(ワツラ)はしからず"難からず"むづかしからず"簡易なり"輕便なり"たやすし"やすし" 「に"

て-がろ-し(ヤウ)[手輕]（形ク）てがるし」に回

てき[敵]（名）❶かたき"あだ" ❷相方"相手" ❸我に對して抗敵するもの"

てき[鏑]（名）「らやゝ」に回じ" 「はす語"

(一てき[的]（接尾）石鏑は鏑ゝて「の」の義を表

(一てき[滴]（接尾）ものゝ數を數ふるにいふ

て-き[手木]（名）「天」て(十手)に回じ" 「語"

で-き[出來]（名）❶でくるこ"えゆ"たい"えゆ"こゝろ" ❷できたるさまでできたる書載" ❸なりたち" ❹みのり"きゝ" ❺できばえ"成績" ❻できあひ" ——**-あがり**[出來上]（名）❶できあがるこ"成就"成功" ❷できばえ" ——**-あが-る**(ラ)[出來上]（自ラ四）つくりて成る"つくりなさはる"成就す"成功す" ——**-あき**[出來秋]（名）米稻のよく實のりたる頃"

でき-あひ(イヤ)[出來合]（名）❶已に出來てあるこ"かねてつくられてあるこ"又"其もの"あつらへの物"「一の品" ❷「てつきあひ」密通"野合" ——**-ふうふ**[出來合夫婦]（名）ひもかに情を通じて後"夫婦となりたるもの"

(てき-い[適意]（名）❶心にかなふこ"心にたのしきこ" ❷こゝろのまゝ"隨意"

(てき-い[敵意]（名）あだせんとするもこゝろ"又"はわかひせんとするもこゝろ"

(てき-えい[敵營]（名）敵の陣營"

(てき-えう(ヤウ)[摘要]（名）肝要なる點をつまみ取るこ"要點をかゝゝこ"「るこ"

(てき-ぐ[適宜]（名）ふさふこ"かなふこ"あた

(てき-がい[敵愾]（名）完結の意味"敵愾王所"愾而敵"其力"より出づ"敵に對するいきどほり"敵を毋はんとする意氣"——**-しん**[敵愾心]（名）敵愾のこゝろ" 「こ"

(てき-かく[的確]（名）たゞしきこ"たしかなる

(てき-がふ(ヤウ)[適合]（名）あてはまるこ"あたる

(てき-かん[敵艦]（名）敵の軍艦" 「こ"

て-きき[手利]（名）手腕の利くこ"うてまくのすぐれてゐるこ"又"其人" 「るこ"

(てき-き[適當]（名）ゆきあるもわんこ"えたふひよ

(てき-き[摘記]（名）かいつまんで記すこ"

(てき-き[敵騎]（名）敵のうまのり"敵の騎兵"

(てき-ぞく[敵族]（名）敵のはた" 「❶隨意"

(てき-ぢ[適宜]（名）❶宜しきはどにかなふこ"

(てき-きやう(ヤウ)[敵境]（名）敵地のきかひ"

(てき-きやく(ヤウ)[鏑却]（名）なげうつこ"すてゝあく

(てき-ぐわん[敵丸]（名）敵のうつ彈丸" 「こ"

(てき-ぐん[敵軍]（名）敵の軍隊"

(てき-ぐん[敵前]（名）敵人のわれ"

(てき-けつ[副決]（名）えこゝろこ"えこゝろこ"

(てき-こく[敵國]（名）我國の敵なる國"

でき-こころ[出來心]（名）不圖うかびたるかんがへ"國樣にあこりたるあもひ"「一てなる"

でき-ごと[出來事]（名）不圖起りたる事變"

(てき-さい[鏑裝]（名）「らやゝさい」に回じ"

(てき-ぐん)[敵軍](名)敵の軍。
(てき-ぐん)[的中](名)まとにあたること。
(てき-ぐん)[適中](名)正しくあたること。
(てき-ぐん)[滴虫](名)【動】水中に生じ、動物に寄生して運動し又は食物を捕食する原生動物。つりがねむしの類これなり。
(てき-ぐよく)[滴欲](名)❶あらひのぞく。❷【法】裁判官がその所有権又は地上権等を裁判所に提訴して、規定に従ひ、其價格の全部を裁判官に提訴して、裁判所を法廷せしむること。
(てき-ぐよく)[敵愾](名)❶【国】つねに国に。❷たからふこと。❸あしざまにすること。
(てき-ぐよく)[イ丁](名)たゞひとこと。
(てき-ぐん)[敵陣](名)敵の陣営。
(てき-ぐん)[横陣](名)「ぢやくぐんに同じ。
(てき-ど)[適度](名)程度にかなふこと。又、適合の程度。
(てき-にん)[適任](名)任務に適合すること。又、其人。才能に適合したる任務。
てき-ぢゑ[手杵](名)中央を手ににぎりて搗(つ)く。
てき-ぢは[手際](名)❶てきぱきと。❷てきぱきと。❸うつくしく。おごそかく。手腕。
で-ぢは[出際](名)出てたつときは。でしな。
(てき-ぢは)い[敵背](名)敵軍の背面。
(てき-ぢは)ら[敵陣](名)敵軍のとりで。
で-ぢば[出来映](名)❶出来あがりてはえあること。出来あがりのよさ。❷出来あがりたる情況。出来たるさま。
でき-はぎ(名)(副)すばやくなすさまに又はかひ〻しくなすさまにいふ語。
で-きはじめ[出来初](名)出来たるはじめ。

(てき-ぢゆう)[敵中](名)敵のなか。
(てき-ぢゆう)[的中](名)まとにあたること。
(てき-ぢゆう)[適中](名)正しくあたること。
(てき-ぢゆう)[滴虫](名)【動】水中に生じ、動物に寄生して運動し又は食物を捕食する原生動物。つりがねむしの類これなり。
(てき-ぢよ)[滴除](名)❶あらひのぞくこと。❷【法】裁判官がその所有権又は地上権等を裁判所に提訴して、規定に従ひ、其價格の全部を裁判官に提訴して、裁判所を法廷せしむること。
(てき-ぢよく)[敵愾](名)❶【国】つねに国に。❷あしざまにすること。
(てき-ぢよく)[イ丁](名)たゞひとこと。
(てき-ぢん)[敵陣](名)敵の陣営。
(てき-でん)[横陣](名)「ぢやくぐんに同じ。
(てき-ど)[適度](名)程度にかなふこと。又、適合の程度。
(てき-にん)[適任](名)任務に適合すること。又、其人。才能に適合したる任務。
てき-ぢゑ[手杵](名)中央を手ににぎりて搗(つ)く。
てき-ぢは[手際](名)❶てきぱきと。❷てきぱきと。❸うつくしく。おごそかく。手腕。
で-ぢは[出際](名)出てたつときは。でしな。
(てき-ぢは)い[敵背](名)敵軍の背面。
(てき-ぢは)ら[敵陣](名)敵軍のとりで。
で-ぢば[出来映](名)❶出来あがりてはえあること。出来あがりのよさ。❷出来あがりたる情況。出来たるさま。
でき-はぎ(名)(副)すばやくなすさまに又はかひ〻しくなすさまにいふ語。
で-きはじめ[出来初](名)出来たるはじめ。

(てき-ぢゆう)[的中](名)まとにあたること。
(てき-ぢゆう)[適中](名)正しくあたること。
(てき-ぢゆう)[滴虫](名)【動】水中に生じ、動物に寄生して運動し又は食物を捕食する原生動物。つりがねむしの類これなり。
(てき-ぢよ)[滴除](名)❶あらひのぞくこと。❷【法】裁判官がその所有権又は地上権等を裁判所に提訴して、規定に従ひ、其價格の全部を裁判官に提訴して、裁判所を法廷せしむること。
(てき-ぢよく)[敵愾](名)❶【国】つねに国に。❷あしざまにすること。
(てき-ぢよく)[イ丁](名)たゞひとこと。
(てき-ぢん)[敵陣](名)敵の陣営。
(てき-でん)[横陣](名)「ぢやくぐんに同じ。
(てき-ど)[適度](名)程度にかなふこと。又、適合の程度。
(てき-にん)[適任](名)任務に適合すること。又、其人。才能に適合したる任務。
てき-ぢゑ[手杵](名)中央を手ににぎりて搗(つ)く。
てき-ぢは[手際](名)❶てきぱきと。❷てきぱきと。❸うつくしく。おごそかく。手腕。
で-ぢは[出際](名)出てたつときは。でしな。
(てき-ぢは)い[敵背](名)敵軍の背面。
(てき-ぢは)ら[敵陣](名)敵軍のとりで。
で-ぢば[出来映](名)❶出来あがりてはえあること。出来あがりのよさ。❷出来あがりたる情況。出来たるさま。
でき-はぎ(名)(副)すばやくなすさまに又はかひ〻しくなすさまにいふ語。
で-きはじめ[出来初](名)出来たるはじめ。

デキストリン[Dextrin](名)【化】澱粉より製する白色の粉末。水に溶解し易く、アラビアゴムの代用として用ひらる。
(てき-ぜい)[適性](名)性質にかなふこと。「動」
(てき-ぜい)[敵勢](名)敵のいきほひ。又、敵の軍
(てき-ぜつ)[適切](名)いとよく適合すること。いとよくあてはまること。
(てき-ぜん)[敵前](名)敵の面前。
(てき-ぜん)[的然](名)(副)はつきりしたるさまにいふ語。
(てき-ぜん)[間然](名)(副)すべき隙間のなきさまにいふ語。「く」
(てき-ぜん)[敵前](名)敵のたゞまく。敵陣のまへ。
(てき-そう)[横宗](名)「ぢやくそうに同じ。
(てき-そこなひ)[出来損](名)❶出来の不完全なること。出来の欠陥。❷かたは。不具者。
(てき-そこな-ふ)[出来損](自)(四)不完全に出来あがる。出来あがり十分ならず。
(てき-そん)[横孫](名)「ぢやくそんに同じ。
(てき-たい)[敵対](名)てきたふこと。はむかひ。はりあひ。抵抗。
(てき-たり)[適当](名)かなふこと。ふさふこと。あてはまること。あたること。
(てき-たう)[滴瀝](名)あらひすゝぐこと。
(てき-たう)[的確](名)警官のすぐれ出でたること。人格の大なること。(後漢・呂翼・奇才)
で-たか[出来高](名)出来上りたる量計。
で-た-ふ[出来](自)(四)❶はむかふ。❷はりあふ。
(てき-だん)[敵弾](名)敵のうつ弾丸。「占領地」
(てき-ち)[敵地](名)敵の出はらる土地。又、敵の

(てき-ぢゆう)[的中](名)まとにあたること。
(てき-ぢゆう)[適中](名)正しくあたること。
(てき-ぢゆう)[滴虫](名)【動】水中に生じ、動物に寄生して運動し又は食物を捕食する原生動物。つりがねむしの類これなり。
(てき-ぢよ)[滴除](名)❶あらひのぞくこと。❷【法】裁判官がその所有権又は地上権等を裁判所に提訴して、規定に従ひ、其價格の全部を裁判官に提訴して、裁判所を法廷せしむること。
(てき-ぢよく)[敵愾](名)❶【国】つねに国に。❷あしざまにすること。
(てき-ぢよく)[イ丁](名)たゞひとこと。
(てき-ぢん)[敵陣](名)敵の陣営。
(てき-でん)[横陣](名)「ぢやくぐんに同じ。
(てき-ど)[適度](名)程度にかなふこと。又、適合の程度。
(てき-にん)[適任](名)任務に適合すること。又、其人。才能に適合したる任務。
てき-ぢゑ[手杵](名)中央を手ににぎりて搗(つ)く。
てき-ぢは[手際](名)❶てきぱきと。❷てきぱきと。❸うつくしく。おごそかく。手腕。
で-ぢは[出際](名)出てたつときは。でしな。
(てき-ぢは)い[敵背](名)敵軍の背面。
(てき-ぢは)ら[敵陣](名)敵軍のとりで。
で-ぢば[出来映](名)❶出来あがりてはえあること。出来あがりのよさ。❷出来あがりたる情況。出来たるさま。
でき-はぎ(名)(副)すばやくなすさまに又はかひ〻しくなすさまにいふ語。
で-きはじめ[出来初](名)出来たるはじめ。

るむすめ。

て-とは-し[ワシ][くしけれ]き[手強](形、一) 相手として手に餘る。勝つにむづかしい。てづよし。

てと-へん(名)「へんてこ」に同じ。

てと-まひ[イマ][手古舞](名) 東京にて、祭禮などのとき、踊屋臺にてする一種のをどり。

でとま-ひとま(名) たかひく。ふそろひ。東京の[方言]。

て-とみ[手込](名) 次條に同じ。

て-とめ[手込](名) ㊀腕力によりて、理不盡に人の身體又は所有物を害せんとすると。㊁強奪。

て-どろ[手頃](名) ㊀我が力に適する程なると。㊁手に握[ニ]るに適する程なると。

++て-どろし[手殺](名) 空手にてうちころすこと。

て-ざいく[ツ][手細工](名) 手にてする細工。手工。

て-さう[ツ][手相](名) 手のすぢを觀て、其人の運命又は性質等を說[ト]くこと。——**み**[手相見](名) 手相を見て占[ウラ]ふ人。

で-さかり[出盛](名) 出かゝること。[「る。

で-さか-る[られれ]る[出盛](自、ら四) 盛んに出て來る。

て-さき[手先](名) ㊀手のさき。指。㊁あひつかひ。たばたらき。㊂をかつぴき。探偵。

で-さき[出先](名) 家を出でゝ行きて居る先方。

て-さく[手作](名) てづくり。(自作、手製)。

て-さぐり[手探](名) 手先にて探ること。(摸索)。

て-さげ[手提](名) ㊀手にさげてもつ袋又は籠若しくは「カバン」の類。㊁小さき手桶。——**カバン**[手提鞄](名) 手に提[サ]げて持つ鞄[カバ]。

て-さけ[手酒](名) 自家の用料に醸造したる酒。てづくりの酒。

て-さはり[ツリ][手障](名) 手あたり。

て-さを[手棹](名) みさを。

で-こ[弟子](名) をしへを受くる人。門人。門弟。——**いり**[弟子入](名) 弟子となること。入門すること。——**と**[弟子子](名) いとけなき弟子。「工。

て-こと[手仕事](名) 手さきにてする仕事。手

て-こた[手下](名) くみこ。くみこた。配下。

て-こだね[手品](名) ㊀いろ〳〵さまざまに人目をまぎらはす變幻の技術。(魔術)。㊁工夫をめぐらして人を惑はす手段。——**こ**[手品師](名) ㊀手品を演ずるを業とする人。㊁[よく人を惑はす手段をなす人。——**つかひ**[カイツ][手品遣](名) 前條に同じ。

で-こね(名) でぎは。てがけ。

で-こなかま[弟子仲間](名) 師を同じうする弟子のなかま。同門の友。

て-こは[オシ][手鹽皿](名)「てこはざら」の略言。——**ざら**[手鹽皿](名) 小さき皿の稱。香の物などを盛るに用ふ。もと勝部の不淨を拂ふ心より、これに豆を盛りたるよりいふ。(小碟)。

て-こは[オシ](名) 手づかち世話すること。「高の上より

で-こは[オシ][出潮](名) 《「いでこは」の約》月の出づると共に差し來る潮。(差潮)。

デシ-メートル[Decimeter](名) 一「メートル」の十分の一。即ち我國の三寸三分に當る。

て-こや[手者](名) ㊀巧[ヨウ]に文字を書く人。のうひつ。㊁武藝に達したる人。てきゝ。

て-こやう[ヨウ][手性](名) 手のさきにてするわざ。「と。(獨酌)。

て-こやく[手酌](名) 手づかち酌して酒を飲むこ

デシャチン[Desiatin](名)「ロシヤ」國の地積の單位、一〇九・二四「アール」即ち我國の三千三百四坪八勺に當る。

で-こやは-る[らり][れる](自、ら四) さしいづ。ですぎる。

で-こゆ[手酒](名) てづくりの酒。

て-おゆん[手順](名) てつゞき。だんどり。

て-およく[手燭](名) 燭火を立てゝ持ち行く具。燭臺の小なるものにして柄あり。(手燈)。

て-およく[手職](名) 手さきをはたらかしてする職業。手工の職業。

で-ころ[出城](名) 本城に附屬して其外に張り出して築きたる城。つけ城。出丸。

で-ず(助) 《「でありません」の略言》ものに同類以上に用ふる敬語。「さう—」。「綺麗—」。

で-ず-いらず[不出不入](名) ㊀出入なきこと。㊁增減なきこと。㊂過不及なきこと。

て-すう[手數](名) ㊀てまひまかゝること。手つゞきの簡單ならざること。㊁特に其物事のために費力すること。又、わざ〳〵他人のために用を辨ずること。——**れう**[ヨウ][手數料](名) ㊀手數の報酬。又、周旋の報酬。㊁[法]國家又は自治體が、特に私人のためにする行爲の報酬若しくは營造物を使用せしむる報酬として、其當事者より徵收する料金。

で-すから(接) 《「でありますから」の略言》さるによりて。それゆゑ。

て-すき[手透](名) なすべき仕事なくしてひまなること。てあき。又、其人。(閒暇)。

で-すぎ[出過](名) ですぎること。——**もの**[出過者](名) ですぎる人。なまいきなる人。

で-す-ぎる[ぎれ][ぎる][出過](自、か上一) ㊀さしでがましき言動をなす。なまいきなる事をいひ又は行ふ。然出づ。㊁適當の程度より多く出づ。

++**て-ずさび**[手遊](名) 手にてするなぐさみ。もてあそび。てあそび。

て-すぢ[手筋](名) ㊀手にあちはれたるすぢ。㊁文字のかき方の巧拙。

て-すり[手摺](名) 《すがりて手にて摺[ス]る欄》ばしま。欄干。

て-ずり[手刷](名) 印刷機械を手にて動かして印刷すること。又、其印刷物。

て-せい[手製](名) 手づかち製すること。てづくり。[(自作)。

て-せい[手勢](名) 手下の兵卒。部下の軍勢。

て-せま[手狹](名) 場所又は座敷などの狹きこと。てびろの對。——**し**[くしけれ]き[手狹](形、一) てぜまにてあり。

で-ぞめ[出初](名) ㊀始めて出づること。㊁てぞめ式きの略言。——**しき**[出初式](名) 消防夫などが、年改まりて始めて出揃ふ儀式。

で-そろひ[ヨイ][出揃](名) でそろふこと。

で-そろ-ふ[はひふへほ][出揃](自、は四) ことごとく出づ。すべてのもの出づ。

て-だい[手代](名) ㊀德川時代に、代官の下にありて庶務に從事せしもの。㊁頭[カシ]たる人の代理をする者。てつき。㊂商業使用人の一、本店又は支店にて、委任せられたる事のみに就き、一切の行爲をなす權限あるもの。普通には、番頭と丁稚との間に使はるゝ者の稱。(番頭)。「度。

て-だうぐ[ドウ][手道具](名) 手まはりの道具。調

て-だか[手鷹](名) 手飼の鷹。

て-だし[手出](名) ㊀其もの事の世話をやくこと。其もの事に關係すること。㊁最初にあちそひなど仕掛くること。いどみかゝること。「幇助すること。

て-だすけ[手助](名) 仕事を助くること。たすけ

で-たち[出立](名) いでたち。「てだて」に同じ。

で-たつ[たちつ][出立](自、た四)「いでたつ」に同じ。

++て-だて[手楯](名) 手にもつ楯。狹く長きもの。

て-だて[手段](名) てつゞき。たゆだん。たかた。方法。

で-だな[出店](名) でみせ。(支店)。

で-だま[手玉](名) ㊀++手の飾りにつくる玉。「—もゆちに。㊁一種の玩具、布帛の袋に小豆を包[ツツ]みたるもの、女兒などの投[ナ]げて弄[アモテ]ぶもの。㊂輕々と投げもてあそぶこと。又、自由にあやなすこと。——**にする** 其物をなげもてあそぶ。其人を自由にあやなす。

て-たらひ[ライ][手盥](名) てうづだらひ。

で-たらめ[出鱈目](名) 口のまゝ心のまゝに勝手次第のことをいひ又は行ふこと。ではうだい。

++て-たり[手足](名)「てだれ」に同じ。

++て-だれ[手足](名) 技倆すぐれひいてたること。てきゝ。「—の精兵」。

て-ぢか[手近](名) ちかきこと。そば。ほとり。近邊。——**し**[くしけれ]き(形、一) 手許に近し。近邊なり。ちかし。

て-ちがひ[ガイ][手違](名) もの事の心の如くならざること。もの事のゆきちがふこと。「な。

て-ちやり[ヨウ][手帳](名) 雜事を記入する帳面。手控[カヘ]に去るしおく册子。

て-ぢやう[ヨウ][手錠](名) ㊀罪人などの兩手を合せてはめ、手のはたらけぬやうになしおく鎖。㊁「てがね」に同じ。

て-ぢやうぶ[ヨウ][手丈夫](名) ㊀てきの堅牢なること。つくりのたつかりしてあること。㊁てがたきこと。たしかなること。

(てつ[鐵](名) ㊀[鑄]金屬元素の一、單體にして存在すること甚だ稀なれど、化合物としては廣く散在す、概ね鐵鑛より採取せられ、乾きたる空氣中にては變化せざれども、濕氣中にては銹[サビ]を生じ易し、金屬中磁性最も強し、質硬[カタ]くして展性・延性に富み、且つ製煉法によりて種々の性質を與ふることを得、其產額多く價も廉なるが故に、利用最も多し。㊁てついろ。㊂はもの。きれもの。兵器。「寸兵尺—」。㊃かたきこと。堅硬。「一心」。

(てつ[哲](名) 智識明かにしてよく道理に通ずること。又、其才德ある人。

(てつ[埴](名) ㊀小高き土地。をか。㊁ありづか。ありのタフ。

(てつ-あん[鐵案](名) 動かざる斷案。

(てつ-い[鐵衣](名) ぐそく。よろひ。「—の血痕」。

(てつ-ういで[手序](名) 仕事のついで。「色」。

(てつ-いろ[鐵色](名) 黑色に赤みを帶びたる染色。

(てつ-えふ[ヨウ][鐵葉](名)「ブリキ」。

(てつ-ぢなんど[鐵御納戶](名) もなんど色に紺氣のかゝりたる染色。

(てつ-か[鐵架](名) てっきう。

(てつ-かい[鐵拐](名) 鐵製の杖。

(てつ-かりく[哲學](名)【哲】自然・人生及知識の現實及理想に關する根本的原理の學。——**てき**[哲學的](形) 根本的原理を追求するにいふ語。

++て-つがひ[ガイツ][手結](名) 射術にて、二人づゝ組みあひて射ること。

て-づかひ[カイツ][手遣](名) 手のつかひやう。

てっぱい【鉄砲】(名)

てっぱい【鉄杯】(名)

てっぱい【鉄拍子】(名)

てっぱい【鉄拍子】(名)

てっぱい【鉄拍子

てづつ[手筒](名) 昔時、大將分の使用したる小銃の一種。

てづつき[手續](名) 事をなし行ふ順序。て志ゆん。てはず。——**はふ**[法](名)【法】實體法を活用する手續を規定する法律、即ち民事訴訟法・刑事訴訟法の如きこれなり。

てつつる[鐵鎚](名) 大いなるかなづち。(鐵槌)。

てつてい[徹底](名) 底までつらぬくとはなると。奥に達すると。「大悟—」。

てつてい[鐵蹄](名) ㊀かなづつ。㊁駿馬の蹄。

てつてい[鐵挺](名) かなてこ。

てつでう[鐵條](名) 鐵製の太きはりがね。——**まう**[鐵條網](名) 鐵丈に立てたる杭などに、鐵條を網狀にまげくかけわたして敵兵の突進を防禦するもの。

てつてき[鐵笛](名) 鐵製のふえ。

でつてふ・ぼん[牒帖本](名)「ぞまととぢ」に同じ。(粘葉本)。

てつ・さら[徹透](名) とはると、つらぬくと。

てつ・さら[鐵桶](名) 鐵製の桶(ヲケ)。——**みづを もらさず**[鐵桶不漏水] すこしの間隙もなきさまにいふ。

てつさう・てつび[徹頭徹尾](名、副) はじめより末まで。總體。始終。

てつさり・ばやく[手取早](副) はやく。すばしこく。

てつ・ば[鐵馬](名) よろひたる馬。又、戰に用ふる馬。

でつ・ば[出國](名)「てばに」に同じ。

てつ・ぱう[鐵砲](名) ㊀火藥によりて彈丸を發射する器械の總稱。大なるを大砲といひ、小なるを小銃といふ。㊁小銃の特稱。㊂掘風呂桶に裝置する鐵製又は銅製の筒、其中にて火を焚(タ)くもの。㊃「のりまきずし」の異稱。㊄はち。大言。「—をはなす」。——**かち**[鐵砲鍛冶](名) 鐵砲を製造する職工。——**さま**[鐵砲疵間](名)「志ゆうがん」(銃眼)に同じ。——**たま**[鐵砲玉](名) ㊀鐵砲の彈丸。㊁行きたるまゝにて歸ちぬもの。——**ぶろ**[鐵砲風呂](名) 桶に火を焚(タ)く鐵製又は銅製の筒を設けたる掘風呂。

てつ・パツ[鐵鉢](名) 僧侶の食器となす鐵製の鉢。

でつ・ぱ・る[出張](自、ら四) 突出す。つきでる。でばる。

てつ・ぴつ[鐵筆](名) ㊀印刻に用ふる小刀。はりものこがたな。㊁いんばんをにると、印刻。「—に巧なり」。㊂志っかりして勢づよき筆力。㊃鐵にて筆の形につくりたるもの。——**ばん**[鐵筆版](名)「とう志やばん」(謄寫版)に同じ。

てつ・ビン[鐵瓶](名) 飲料用の湯を沸(ワ)す具、鐵製にして形土瓶に似る。

てつ・ぶ[哲夫](名) さかしき男子。

てつ・ぶ[哲婦](名) さかしき婦人。

てつ・ぶ[轍鮒](名)《わだちの中の鮒の義、莊子の寓言に出づ》殆ど生活の道なき貧窮のもの。——**の急ふ**[轍鮒急](名) 目前の危急。

てつ・ぶり(名、副) 肥滿せるさまにいふ語。

てつ・ぶん[鐵粉](名) 鐵の細末、鐵のこな。

てつ・ぺい[撤兵](名) 其地に派遣したる軍隊を引きあぐること。「滿洲の—」。

てつ・ぺき[鐵壁](名) ㊀鐵をはりたる壁(ヘキ)。㊁轉じて、堅固なるかこひ。「金城—」。

てつ・ぺん[鐵挺](名) 鐵製のかなてこ。

てつ・ぺん[鐵頼](名) 鐵製のむち。

てつ・ぺん[鐵片](名) 鐵のきれはし。

てつ・ぺん[天邊](名) いたゞき。頂上。

てつ・ぼう[鐵棒](名)「かなぼう」(一)(三)に同じ。

てつ・づま[手妻](名)「て志な」に同じ。——**ぢ**[手妻師](名)「て志なぢ」に同じ。——**つかひ**[手妻遣](名)「て志なつかひ」に同じ。

てつ・まう[鐵網](名) ㊀鐵線にてあみたるあみ。㊁「てつざうまう」(鐵絲網)に同じ。

てつ・づまり[手詰](名)「てづまると」の約。

てつ・づま・る[手詰](自、ら四) ㊀手許くるしくなる。㊁手段盡つく。

てつ・づめ[手詰](名) きびしく詰めよると。猶豫なくつめかくると。「—の談判」。

てつ・めんぴ[鐵面皮](名) 恥辱を感ぜざると。あつかましきこと。厚顏。

てつ・づもり[手積](名) 手にて好き加減に量ると。

てつ・や[徹夜](名) 夜どほし。よあかし。

てつ・よ・し[手強](形、一) つよし。はげし。あちし。

てつ・り[哲理](名) 哲學上の道理。玄妙なる理義。

てつ・り[手釣](名) 竿(サオ)を用ひずに、釣絲を手に取りて魚を釣ること。

てつ・りん[鐵輪](名) 鐵製のわ。かなわ。

てつ・ろ[鐵路](名) てがゝり。たより。つて。

てつ・ろ[鐵爐](名) 中に火をおこし又は火を貯(タク)ふる鐵製の具。鐵製のゐろり。

てつろ・ざん[鐵國山](名)【佛】外洞を鐵圍せりといふ鐵山。

てて[父](名)「ちち」の轉。——**かた**[父方](名)「ちちかた」に同じ。——**ぞみ**[父君](名)「ちちぎみ」に同じ。

てて[父御](名)「ちちごに」に同じ。——**なし・ご**[父無兒](名) ㊀父のたしかならぬ私生子。㊁孤兒。——**はは**[父母](名) ふたおや。ちゝはゝ。

てて[手手](名) 手の稱。(小兒の語)。

でで・むし[蝸牛](名)【動】「かたつむり」の一名。

ててれ[囮](名) 鳥を鵰にて捕(ト)るときに用ふるをとり。「讀めり。

ててれ(名)《「つづれ」の轉》下民の服。或は褐をもて・ど・ころ[出處](名) ㊀物事のいで來りたるもと。志ゆっ志よ。㊁出でゝ官につかふると退きて野に處(ヲ)ると。「一語默者君子之大節」。

てどほ・り[手遠](名) 手許より遠きこと。左右より隔(ハナ)りたること。手近の對。

てさぼし[手點](名) 手燭。

てさり[手取](名) ㊀相撲(スマ)の技に巧(タク)なること。又、其人。㊁人をあやなす技に巧者なること。又、其人。

てどり[手捕](名) 素手にて捕(ト)ふること。

てどり[手取](名) ㊀絲などを器械にかけずして手にて繰(ク)り取ること。㊁自己の受取るべき總金額の中より、諸種の費用を引き去りて、實際自己の手に殘る金員。

てどり・あしどり[手取足取](名、副) 多人數かゝりて其人の身體をかゝへもつさま又はおさへつくるさまにいふ語。「—してさげおろし奉る」。

てどり・なべ[手取鍋](名) 把手のある鍋。

てない志よく[手内職](名) 手先にてする内職。

てな・が[手長](名) ㊀手の長きこと。㊁【動】てながえび の略言。

てなが・えび[手長蝦](名)【動】えびの一種、首大きくして、前脚は、體軀よりも長し。美味なり。「草蝦」。——**ざる**[手長猿](名)【動】猿類に屬する獸、熱帶地方に產す、たけ三四尺、よく歩立す、前肢長くして、擧動敏捷なり。——**志ま**[手長島](名) 手の餘めて長き一種の人類が梗(ス)むといふ想像上の島。(長臂國)。——**ぞ**[手長蛸](名)【動】「あしながだこ」の一名。

てなぐさみ[手慰](名) ㊀てあそび。㊁博奕。

てなし[手無](名) 古昔、下賤の人の着用せしもの、そでなしの類といふ。

てなづ・く[手慣](他、か下二) 手につけて馴染ます。なつかす。

てなづける(他) 前條の訛。

てなは[手繩](名) ㊀幕の乳(チ)に貫きて張りわたす繩。㊁とりなは。はやなは。

てなべ[手鍋](名) てとりなべ。

てなみ[手並](名) わざまへ。うでまへ。伎倆。

てなら・す[手馴](他、さ四) 手につけて馴らす。なつけならす。

てならひ[手習](名) 字を書くを學ぶこと。習字。「—は阪に車をおすごとし」(學書)。——**と**[手習兒](名) 其人に就きて手習する兒童。——**ざう志**[手習草紙](名) 手習をするに用ふる帳。——**志志やう**[手習師匠](名) 兒童に習字などををしふる人。——**はじめ**[手習始](名) 始めて習字すること。

てな・る[手馴](自、ら下二) ㊀手にあつかひ馴る。用ひ馴る。㊁熟練す。巧(タク)になる。

てなれ[手馴](名) てなゝと。「てなる」の訛。

テニス[Tennis](名) 一種の遊戲、一定の地積の中央に網を張り、一個の「ゴム」球を「ラケット」と稱するものにて其間側より、互に網を越えて打込むもの、打損じたる方を負とし、點數を採りて勝敗を決す。「庭球」。

てに・は[豆爾波](名)【文法】「てにをは」の略言。

てに・もつ[手荷物](名) てまはりの荷物。

てに・をは[豆爾乎波](名) ㊀【文法】名詞・動詞又は種々の語の下に附きて、主客などの關係を示し、又は自他の區別を表し若しくは上を受けて下に續けなどする獨立の意義なき詞。「をことてん」の四隅にある假字より出でたる語。「柳は綠に花は紅」の「は」「に」の類これなり。助詞。㊁てにをはの用法。をことてんの法。語法。

てぬかり[手脫](名) てぬけ。てゐち。「くと。

てぬき[手拔](名) なすべき筈の事をなさずにゐ

てぬぐひ[手拭](名) 一幅を三尺に切りたる木綿の布。手又は身體などを拭(ノゴ)ふに用ふるもの。てのごひ。手巾。手帕。——**かけ**[手拭掛](名) 手拭をかけおくもの。——**ち**[手拭地](名) 切りて手拭にするやうにつくりたる地のあらき木綿。

てぬけ[手拔](名) てゐち。ぬかり。「し・にぶし。

てぬる・し[手緩](形、一) 緩慢なり。のろ

ての・あや[手文](名) 手のすぢ。てすぢ。

ての・うち[手内](名) ㊀てのひら。たなごゝろ。(掌)。㊁わざなみ。てなみ。わざまへ。伎倆。「—見事」。㊂權力の範圍。占有の圍内。㊃にぎると。もつと。㊄乞食などに一握の白米など與ふると。

ての・うら[手裏](名) てのひら。たなごゝろ。

ての・くぼ[手凹](名) 手のうちを凹(ボ)くすると。又、其所に食物を入れて食ふと。

てのごひ[手拭](名)「てぬぐひ」に同じ。

てのすじ　手筋

てのつけ　手付

てのつけどころ　手付所

てのつけようもない　手付様もない

てのつけられない　手付られない

てのつけ　手付

てのつけ　手付

てのつけ　手付

ごばん（碁盤）

ごばんじま（碁盤縞）

ごばんだい（碁盤台）

ごばんのめ（碁盤の目）

ごばんぶし（碁盤節）

ごばんぼり（碁盤彫り）

ごばんめ（碁盤目）

ごばんもの（碁盤物）

ごばんやく（碁盤役）

ごばんゆか（碁盤床）

ごばんりょう（碁盤料）

ごばんわり（碁盤割り）

ごばん（碁番）

ごばんがしら（碁番頭）

ごばんがしらぶ（碁番頭部）

ごばんがしらぶ（碁番頭部）

ごばんがしらぶ（碁番頭部

てり-ふ[照斑](名) 驚甲のいとつやよき斑。

てり-ふり[照降](名) ㊀晴天と雨天と。㊁予想と然らざると。㊂「てりふりがさ」の略言。——**がさ**[照降傘](名) 晴天にはひがさとなし雨天にはあまがさとなす晴雨兼用の傘。

てり-やき[照焼](名) 一種の料理。魚肉に味醂と醤油とを混じたる濃き汁をつけて、これをつやよく焼きたるもの。

て-る[照る](自、ら四) 光明を放つ。光輝を発す。かがやく。ひかる。

でる[出る](自、た下一)「いづ」に同じ。——**くびはりたれる** 進み出でゝ踏まふものは、他に惑まれ又は妨げらるゝにいふ。「じ」。

てる-かがみ[照鏡](名)「ますみのかがみ」に同じ。

てる-たへ[照栲](名) つやのいとよき白栲。

てるてる-ぼうず[照照坊主](名)「てりてりぼうず」に同じ。

テルビュム[Terbium](名)【化】稀有の金属。

テルル[Tellurium](名)【化】稀有の元素、黒鉛色にして金属性の光輝を帯ぶ。

て-れうぢ[手療治](名) 醫師に頼まずに、自ら病疾又は創痍の療治をなすこと。

て-れうり[手料理](名) 料理屋などに頼まずに、自らなしたる料理。

テレガラフ[Telegraph](名) 電信機。

でれ-すけ(名) 色に迷ひやすき人。でれ〳〵する人。浮薄柔弱にしてなまけたる人。

でれつ-く(自、か四) でれ〳〵す。

でれ-でれ(名、副) ㊀色好みにして志まりなきさまにいふ語。㊁よわ〳〵しくのろまさまにいふ語。

テレビン-ゆ[——油](名)【化】松柏科の植物より分泌する粘塊を水と共に蒸溜して得たる油狀の液、一に松節油ともいふ。

テレメンテイナ[丁列綿油](名)《「スペイン」語、"Terebinthina"》テレビンゆに同じ。

テレメン-ゆ[丁列綿油](名) 前條に同じ。

て-れる[出れる](自、ら下一) ㊀興さむ、志らく。㊁はぢらひ懼る。ちゞまりはにかむ。

で-れる[出れる](自、ら下一) それ〳〵す。

て-れん[手練](名) 人をあやなす手段。人をたらすわざ。——**てくだ**[手練手管](名) 前條に同じ。

て-ろくろ[手轆轤](名) 手にて使用する轆轤。

でろ-れん(名)「でれんざいもん」の略言。——**ざいもん**(名)「せっきやうざいもん」に同じ。

て-わけ[手分](名) 仕事又は方面を分けて、それ〳〵の人に負擔せさすること。「部署」。

て-わざ[手業](名) 手にてするたわざ。手仕事

て-わたし[手渡](名) 手ゞから先方の人へ授け渡すこと。「金の—」。

て-をけ[手桶](名) 把手のある桶、水などを汲むに用ふるもの。

て-をどり[手踊](名) ㊀坐しながら手振のみにてなすをどり。㊁語略なるをどりの。

て-をの[手斧](名)「てうなに同じ。

てん[貂](名)【動】肉食類中いたち科に屬する小獸、體は狹長にして黄色、尾は長大なり、四肢短けれども、進退敏捷にしてよく樹木を攀ぢ高處などを疾走す、多く荒廢せる殿堂などに棲む。

てん[點](名) ㊀物事のたるしに記する細小の標識。たるし。ぽち。ちょぼ。㊁文章のくぎりに記する細小の標識。くとう。㊂漢文の左傍に記して、其返り讀むべき順序を示めす標識。かへりてん。㊃散在せる小さき斑文。附着せる細き痕迹。「血—斑々」。㊄漢字の字畫中、一點にて示すべきほどのもの。「一—一畫」。㊅志づく。志たゝり。㊆ひら。細片。「風飄萬—」。㊇指し示す個所。あげていふ個所。「此—がよくない」。㊈文詞の部前。けし。なはし。㊉文詞の品評。答案の評點。てんつけ。てんすう。「あの人の—はからい」。㊊きず。非難。瑕疵。「—のうち所がない」。㊋けがれ。志み。汚染。㊌【數】位置ありて大いさのなきもの。即ち線の部分の境界。

てん[天](名) ㊀【天】地球を包圍し晴れたそこき吾人の頭上遥かなる方に青色の穹窿をなす空球、日月星辰其中に配列せらるゝが如く見ゆ、其半徑の長さは測り知るべからざる無限なり、其青色に見ゆるは、大氣が主として青き光線を反射するによる、大氣の高さは約七里にして地球の半徑は一千五百九十里なるを以て、其青色に見ゆる限界は、地球の中心を中心として一千五百九十七里の半徑ある球なり。そら。あめ。こくう。㊁天地萬物の主宰者。かみ。「天神」。上帝。造物。㊂あめの上にありて、かみ又は天使・天人等これに住み、清淨無垢なりといふ想像界、古來、非凡の人若しくは或宗教の信者の靈魂はこゝにのぼり行くといふ所。㊃自然の道。造化の法。「—にのっとる」。㊄自然の結果又は造化の賦與にかゝり、人力の如何ともなしがたき事態。「吾の此に至るは—なり」。㊅宇宙。世界。「—人合一」。㊆【佛】諸般の事物勝妙にして光明照耀尊貴他に比すべきものなきをいふ、其數多しといへども、大梵は大千世界の主にして帝釋は三十三天の主なるより、此二者を首となす。㊇たふとびあがめるもの。いたゞきつかふるもの。「是我所事之—」。㊈いたゞき。てっぺん。うへ。「かみ」「神」の—地」。㊉時節。時候。「梅雨の—」。㊋はじめ。最初。「—から出來ぬ」。

—にせぐくまりちにぬきあしす[蹋天踏地] 天地ひろしといへど、身の置き處なく、おそれちゞむにいふ。

—にむかってつばきす[向天而唾]「てんをあふぎてつばきす」に同じ。

—はたかくしてひくきにきく[天高聽卑] 天道は嚴にして、人生の善惡共に其結果の直ちにあらはるゝにいふ。

—をあふきてつばきす[仰天而唾] 空を仰ぎてつばきをはく義にして、人を害せんとする事の却つて己の身の害となるなどにいふ。

—をまくさしちをせきさす[幕天席地] 志氣豪放にして境遇に拘礙せざるにいふ。

てん[篆](名) 漢字の一體、即ち楷書・隷書の祖たるもの、秦以前にはもにこれを用ひしかど、後には鐘鼎の銘題及符圖の文字などにのみ用ふ、大篆と小篆とあり。

てん[虫](名) ㊀ぎ志き。さはふ。「蝋燭の—」。㊁のり。ふきて。「法—」。㊂志ちいれ。志ち。「—物」。

てん[轉](名) うつると。かはると。てんじたると。

てん[奠](名) ㊀まつり。㊁供物。

てん[—天](接頭) 天子の御物事に冠する語。「—覽」「—顔」。

—てん[點](接尾) ㊀點數を數ふるにいふ語。「百—」「五十—」。㊁志づくを數ふるにいふ語。㊂水時計の時を數ふるにいふ語。

でん[傳](名) ㊀つたふると。さづくると。㊁志ゆくばゞ。宿驛。㊂志ゆくつぎの車馬又は人夫。㊃別門圍入の符圖。わりふ。㊄經書の義解。「春秋左氏—」。㊅賢人の著書。「聖經賢—」。㊆記錄。史乘。「—に

これあり」。㊇個人の生涯の事蹟を記したるもの。

でん[田](名) ㊀た。はたけ。㊁支那の古代にて、井田の一區劃即ち百畝の稱。㊂かり。狩獵。「ゴ—」。

でん[殿](名) ㊀高大にして壯嚴なる家屋、即ち天子の宮居又は貴人の邸宅若しくは神佛の祠堂などの稱。㊁あとおさへ。志んがり。いなづま。いなびかり。

でん[電](名) ㊀いなづま。いなびかり。㊁電氣又は電流の略言。㊂電信又は電報の略言。

—でん[殿](接尾) 貴人の苗字又は法名などの下につけて呼ぶ敬語。「光明寺—」。「冷光院—」。「台德院—」。

てん-あ[詔阿](名) 〈つちひもねると。〔—〕。

でん-あつ[電壓](名)【理】二つの導體の電位の差即ち電動力の稱。

てん-あん[恬安](名) やすらかなること。

てん-い[天意](名) ㊀造化の心。「—に悖る」。㊁こゝろのかはると。

てん-い[轉意](名) こゝろのかはると。又、うつると。

てん-い[轉移](名) うつると。「禍福。

てん-い[典衣](名) 衣服を質入すること。

てん-いう[天佑](名) 天のたすけ。又、自然の幸志ゆくつぎの車馬人夫。

でん-いう[傳郵](名) 志ゆくつぎの車馬人夫。

でん-いち[天一神](名) なおかみ。

てん-いち-てんおやう[天一天上](名) 天ふ十六日間の稱。

てん-いつ[恬逸](名) やすらかにしてたのしむこと。

てん-いん[天胤](名) 帝王のちつゞき

でん-う[殿宇](名) 殿堂。

てん-うん[天運](名) ㊀天體の運行。「—如車輪」。㊁自然のまはりあはせ。天然の運命。天命。「—非にして」。

でん-えき[傳驛](名) ㊀志ゆくば。志ゆくえき。㊁志ゆくつぎの車馬人夫。

てん-えつ[展閲](名) ひらきのべてけみすること。

てん-えん[篆煙](名) 香爐の香の煙の立ちのぼるさまの篆文に似たるもの。

てん-おん[霑恩](名) めぐみにうるほふこと。

てん-おん[天恩](名) ㊀造化のめぐみ。㊁天子の御恩。「—を辱うす」。㊂陰陽家にて、天より萬民に恩澤を垂るといふ最上吉日の稱。「—日」。

てん-か[天下](名) ㊀天の覆ひ〔〕くる下。あめがした。世界。㊁一國全體。全國。㊂德川時代に、下民より將軍をさしていひし稱。「—茶屋」。㊃〔おもひのまゝに支配するを「鳥—」。

てん-か[天家](名) 帝室。皇族。

てん-か[點假](名) きず。かけ。

てん-か[添加](名) そへくはふること。又、そはりくはゝること。

てん-か[轉嫁](名) ㊀再度のよめいり。㊁罪過又は責任などを他人にぬりつくること。

てん-が[天河](名) あまのがは。

てん-が[典雅](名) おもゝ〳〵しくして品よきこと。又、たゞしくみやびやかなること。「文章—」。

でん-か[殿下](名) 國王又は太子・親王・諸王等皇族の御名の下につくる敬語。古昔は國白・將軍などにも用ひたり。

でん-か[田家](名) ゐなかや。「田舍」。

でん-か[傳家](名) 家につたはること。「—の寶刀」。

でん-が[殿下](名)「てんか」に同じ。

てん-かい[展開](名) ㊀のびひらくこと。又、のべひらくこと。㊁密集せる部隊が散兵となること。㊂【數】多項式の或冪の次數だけ掛け合はせて乘積を求むること。

(てん-がい[天涯](名) ㊀そちのはて。そちのきはみ。「一萬里」。㊁遠く隔りたる他郷。「一の孤客」。

(てん-がい[天蓋](名) ㊀佛像又は棺などの上にかざすきぬがさ、其周邊にかざりを垂(タ)れ、先端の曲りたる柄につるすもの。寶蓋。㊁虚無僧のかぶる笠。㊂蜻の隠語。(曾家にていふ)。

[(一)いがんて]

(でん-かい[電解](名) 【化】電流の通ずるとき物質の分解すること。電氣分解。　「同じ。

てんがい-さめ[天蓋鮫](名) 【動】「はたざめ」に

てんか-いち[天下一](名) 天下に比すべきものなきこと。最もすぐれたること。　「ヤゼに同じ。

てんがい-はね[天蓋花](名) 【植】「マンジュシ

(でんかい-ぶつ[電解物](名) 【化】電流により て分解する物質。一般に金屬鹽類の溶液又は融解液は電解物なり。　「の略稱。

(てん-かう[天幸](名) 自然のさきはひ。天與

(てん-かう[天行](名) 天體の運行。又、天道の行動。「一健」。

(てん-がう[霹靂](名) ふでのほをうるほすこと。即ち書畫をかくこと。

(てん-がう(名) 《蜘蛛の音轉或は田樂の音轉なるべしといふ》ふざけること。たはむるゝこと。

(てん-かう-せき[天降石](名) 天より降(フ)る石、即ち隕石。

(てん-がく[天樂](名) 天上の音樂。

(てん-がく[點額](名) 《鯉の龍門を登り得たるものは龍となり、然らざるものは額に點(キズ)きて還るといふ故事に出づ》試驗に落第すること。

(でん-がく[田樂](名) ㊀《もと田植のときの樂なればいふ、又神樂を中樂と書けるが更に變じて田樂となれるなりともいふ》古昔、農夫の耕作の勞を慰むるために奏したる一種の舞樂。後、一藝となりて專ら法師の業となる。つゞみ・さゝら・鼓・笛などを用ひて歌ひ舞ひ、又手玉をとり、高足(アシダ)に乘りて輕業などす。鎌倉時代より室町の頃にかけて盛に行はれ、遂に本座・新座などの家に分る。㊁「でんがくどうふ」又は「でんがくやき」の略言。——**・さし**[田樂刺](名) 田樂豆腐の如くにさしつらぬくこと。——**・どうふ**[田樂豆腐](名) 《田樂法師の長き棒にとりつきてをどるさまに似たるよりいふ》豆腐を方形に切りて里芋(ジ)に貫き、味をつけたる味噌を塗りて、火に炙(ア)りたるもの。——**・ほふし**[田樂法師](名) 田樂を舞ふ法師。——**・やき**[田樂燒](名) 一種の料理、魚菜などに味をつけたる味噌をぶし、火に炙りたるもの。

[(一)くがんて]

(てん-がゆう[天鵝絨](名) ビロウド。

(てんか-はれ-て[天下晴](副) 勝に慢(ハバ)る處なく。あはやけに。「一夫顔となり」。

(てん-かん[癲癇](名) 一種の腦病、俄に痙攣を起し、倒れ伏して手足をもがき、口より沫(ア)を吹くもの。多くは先天的なり。「顧癇」。

(てん-かん[天鑑](名) 天のみそなはすこと。

(てん-かん[天漢](名) あまのがは。　「尺す」。

(てん-がん[天顔](名) 天子の御顔。龍顔。「一に咫

(てん-がん[天眼](名) ㊀神通力ある眼。肉眼に超越して、自在に物事を洞見する眼。㊁經驗を起して眼球の上へつること。——**・つう**[天眼通](名) 天眼の神通力。又、其神通力を有するもの。——**・きやう**[天眼鏡](名) 人相見の用ふる凸「レンズ」、物體を大きく見するにより、これにて物事を洞見し得となす。にんさうめがね。

(でん-かん[田間](名) ㊀田圃のあひだ。㊁ぬなか。餘地。㊂農夫のなかま。　「ぞすり

てん-がん-する[點眼水](名) めぐすり。さし

(てん-き[天氣](名) ㊀そもの機樞。そもあひ。天象。㊁《地》一定の場所に於ける氣溫・氣壓・濕度等氣圏内全體の模樣。㊂《天氣よろし》の略言。晴天。晴空。「一になる」。

(てん-き[天機](名) ㊀天然自然の性狀又は活動。「嘆惑深者—淺」。㊁天地造化の秘密又は意思。㊂おくふかき秘密又は意思。㊃天子の御機嫌。「一伺」。

(てん-き[天癸](名) つきのさはり。つきぞくめぐり。月經。

(てん-き[典儀](名) 昔時、天皇御即位のとき、儀式に關する事を掌りし少納言の稱。　「義。

(てん-き[轉義](名) 本來の意義より轉じたる別

(でん-き[電氣](名) 【理】「ガラス」の棒を絹布にて摩擦するか、又は封蠟の棒を毛皮にて摩擦するとき、「ガラス」の棒又は封蠟の棒は、輕き物體を引きつくる性質を得、物體が崩る性質を得たるを稱して電氣を帶びたりといふ。電氣に二種あり、「ガラス」棒を絹布にて摩擦したるとき「ガラス」が帶びたるものと、封蠟の棒を毛皮にて摩擦したるとき封蠟が帶びたるものとこれなり、前者を陽電氣といひ後者を陰電氣といふ、互に異種の電氣を帶びたる二つの物體は相引き、互に同種の電氣を帶びたる二つの物體は相反撥す。

(でん-き[電機](名) 電力を使用する機械。「具。

(でん-き[田器](名) たつくるに使用する器具。農

(でん-き[傳記](名) 個人一代の事蹟を記したるもの。人物傳。「記錄」。

(でん-き[傳奇](名) 傳記をいろ〳〵潤色して、實際になき事柄を附會せし小說體の記錄。

(でん-き[傳騎](名) 號令をつたへに行く騎兵。

(でん-き[殿騎](名) えんがりの騎兵。あとあさへの騎兵。

(てん-きう[典廐](名) 馬寮(ウノカミ)の唐名。

(てん-きう[天球](名) 【天】觀測者を中心としたる天の空球の稱、總ての天體此球上にあり、吾人は地上にあるを以て、常に其半を視得るのみ。——**・ぎ**[天球儀](名) 【天】一の球體の上に、天球上に見ゆる總ての星の位置を記したるもの。　「ヒ。

(てん-きう-かがひ[天牛](名) 【動】「かみきりむし」に同

てん-きう-かがひ[天機伺](名) 參内して天皇陛下の御機嫌をうかゞふこと。　「計る器械。

(でん-きけい[電氣計](名) 【理】物體の電位を

(でん-き-ぎやく[電氣磁石](名) 【理】「でんぎやく」電磁石に同じ。　「ヒ。

(でん-き-ぎせき[電氣磁石](名) 【理】前條に同

(でん-き-ぎりよくせん[電氣指力線](名) 【理】電氣の作用する方向を示す曲線。「ガラス」の器に「テレビン」油を入れ、これに硫酸「キニーネ」の粉末少許を入れ、起電機の兩極を「テレビン」油中に入るれば、硫酸「キニーネ」は相實なる數多の曲線狀に整列して兩極を連結す、此曲線は電氣指力線なり。

(でん-き-ぎんが[電氣振子](名) 【理】「ガラス」の支柱の上端に鉤を附し、これに絹絲にて接骨木心の球を吊(ツ)るしたるもの、電氣を有する物體にこれを近づくるときは、初は引き附けられ、物體に觸れたる後は反撥せらる、よりて或物體の電氣の有無を檢するに用ひらる。

(でん-きんどう[電氣振動](名) 【理】電氣が二つの導體間に反復往復するとき、電位の相異なる二つの導體を近づくるときは、其距離及導體の形狀により放電するに、先づ陽電氣は甲より乙へ陰電氣は乙より甲へ流れ、次の瞬間には、陽電氣は乙より甲へ陰電氣は甲より乙へ流れて、電氣は其間を反復往復す、其際電氣量漸々減じて振動遂に全く止むに至る。——**・き**[電氣振動器](名) 【理】電氣振動を起すもの、二つの金屬球を並べたるものを普通とす、又二球の間に一種の油を入れたるものもあり。

(でん-せき[電氣石](名) 【鑛】硅酸鑛物の一種、玻璃光澤を有し、色は黑・褐・青・紅等種々あり、熱すれば電氣を起す。

てん-づ[天氣圖](名) 【地】廣き區域に於ける定時の天氣を觀測し、等溫線・等壓線其他諸種の符號を以て、各地の天氣の模樣を示したる圖。

(でん-てつだう[電氣鐵道](名) 電車の走る鐵道。

(でん-さう[電氣燈](名) ㊀電流の潛作用を利用したる燈火、弧光燈と白熱燈とあり。電燈。㊁《つやよき光頭をあざけりていふ語》。

(でん-どうばん[電氣銅版](名) 電鑄術によりて原版と同一に製造したる銅版、原版の模型の面に石墨を塗りだるものを陰極とし銅塊を陽極とし銅類溶液中に入れ、其溶液の電氣分解を行はしむれば銅は模型の面に附著す、これを取り去れば原版と同一の銅版を得。

(でん-どうばん[電氣發動機](名) 【理】「でんどうき」電動機に同じ。　「氣銅版」に同じ。

(でん-はつどうき[電氣發動機](名) 【理】

(でん-はん[電氣版](名) 「でんきどうばん」電

(でん-ぶんかい[電氣分解](名) 【化】「でんかい」電解に同じ。

(てん-ぽ[點鬼簿](名) 死者の名をえるしもく帳簿、即ち過去帳。

(でん-ぼん[電氣盆](名) 【理】電氣を集むる器、「エボナイト」板と「ガラス」の柄を備へたる金屬板とより成る、「エボナイト」板を毛皮にて摩擦して陰電氣を起こさしめ、これに金屬板を載(ノ)するときは、兩板は密着せずして僅かに數點にて接觸するが故に、總體により金屬板の下面に陽電氣現はれ上面に陰電氣現はる、指を其上面に觸れ身體を通じて陰電氣を地に去らしめ、金屬板を引き上ぐれば、これに陽電氣のみ現はる。

でん-めっき[電氣鍍金](名) 電鑄術によりてめっきすること。又、其めっきしたるもの。

(てん-きやう[鄭狂](名) きちがひ。

(てん-きゆう[天弓](名) 虹の異稱。　「やがへ。

(てん-きよ[轉居](名) 住居をかふること。やうつり。

(でん-きよ[敢漁](名) かりとすなどりと。

(でん-ようりやう[電氣容量](名) 【理】蓄電器の内外二面の電位の差を一「ボルト」丈のぼすに要する電氣の量。

(でん-きよはう[天氣豫報](名) ㊀天氣圖によりて其地方の氣溫・氣壓等の高低を知り、これを基として風向を考へ、豫め天氣の變化を察して報告すること。㊁《多くあてにならぬ豫言》。

(でん-ざいん[電氣鍍金](名) 「でんきめっき」に同じ。

(でん-はつどうき[電氣發動機](名) 【理】「でんどうき」電動機に同じ。

(でん-はん[電氣版](名) 「でんきどうばん」電氣銅版に同じ。

(でん-ぶんかい[電氣分解](名) 【化】「でんかい」電解に同じ。

(でん-ぼん[電氣盆](名) 【理】電氣を集むる器、「エボナイト」板と「ガラス」の柄を備へたる金屬板とより成る、「エボナイト」板を毛皮にて摩擦して陰電氣を起こさしめ、これに金屬板を載(ノ)するときは、兩板は密着せずして僅かに數點にて接觸するが故に、總體により金屬板の下面に陽電氣現はれ上面に陰電氣現はる、指を其上面に觸れ身體を通じて陰電氣を地に去らしめ、金屬板を引き上ぐれば、これに陽電氣のみ現はる。

でん-めっき[電氣鍍金](名) 電鑄術によりてめっきすること。又、其めっきしたるもの。

(でん-きやう[鄭狂](名) きちがひ。

(てん-きゆう[天弓](名) 虹の異稱。　「やがへ。

(てん-きよ[轉居](名) 住居をかふること。やうつり。

(でん-きよ[敢漁](名) かりとすなどりと。

(でん-ようりやう[電氣容量](名) 【理】蓄電器の内外二面の電位の差を一「ボルト」丈のぼすに要する電氣の量。

(てん-きよはう[天氣豫報](名) ㊀天氣圖によりて其地方の氣溫・氣壓等の高低を知り、これを基として風向を考へ、豫め天氣の變化を察して報告すること。㊁《多くあてにならぬ豫言》。

てんきり（副）はじめから。最初から。「—知れぬ」。

でんき-れうちりやう（電氣療治）（名）電氣を身體に通じ、神經筋肉に刺激刺戟を與へて疾病を癒治すること。「治の方法」。

でんき-れうはふ（電氣療法）（名）電氣療

てん-きん（轉筋）（名）こむらがへり。

てん-きん（轉勤）（名）つとめ所のかはること。

てん-く（轉句）（名）漢詩にて、絶句の第三句の稱。調をふまざるもの。

てん-く（天狗）（名）支那の天文にて、奔星の稱。

てん-ぐ（天狗）（名）㊀深山に棲むといふ想像上の怪物、人の形をなし、鼻高くして翼あり、常に羽團扇を持ちて飛行自在なり。㊁【佛】佛界と生界と、企闕界と餓鬼界と。又、其人。——**たふし**（天狗倒）（名）深山にて突然暴風の吹き荒るゝが如きすさまじき音の起ること。——**さびきり-の-おゆつ**（天狗飛斬術）（名）劍道にて、高く飛びあがりて敵を斬りたふすといふ術。——**ばいかい**（天狗俳諧）（名）一句を五字・七字・五字に分けて、これを各人に配し、其隨意に詠ひみたるものを續ひ合はせて一句となす俳諧。

てん-くう（天空）（名）そら。こくう。——**かいくわつ**（天空海濶）（名）天のむなしきが如く海のひろきが如く、度量廣大にして氣象壯快、胸中に何等の障碍なきさまにいふ語。

てん-ぐ-でふ（天具帖）（名）質極めて薄く且つ柔軟なる紙、樓の欄縁に、襲す、白くして麗はし、貴重品を包み又は硯子の敷貼・版下・紙布などに用ふ。「典工帖、天部上」。

てんぐ の-まさ（天狗）（名）「らいふせき」雷斧石の一名。

でんぐり-がへし（名）㊀手を地に立て足を天に向けて、身體を後へ轉がすこと。㊁位置を顚倒せさすること。「ひつくりかへす」。

でんぐり-がへ-す（仙、さ四）「でんぐりがへしをなす。

でんぐり-がへり（名）「でんぐりがへる」。

でんぐり-がへ-る（自、ら四）㊀身體を後へ轉がす。㊁位置を顚倒せらる。

てん-ぐるま（手車）（名）「てぐるま」の音便。

てん-くわ（天火）（名）㊀陰陽家にて、天に火氣の甚だしき時といふ日、此日屋根葺又樑上などするを忌む。㊁格當によりて起る火災。

てん-くわ（甜瓜）（名）【植】「まくはうり」に同じ。

てん-くわ（點火）（名）火をともすこと。

てん-くわ（轉化）（名）㊀うつりかはること。㊁[Becoming]【哲】常住不變ならざる狀態。又、一定の狀態に到達する過程。「てんなりたること。

てん-くわ（轉訛）（名）正しき本來の語のかはり。

てん-くわ（點化）（名）僧載をつくりかふること。

てん-くわ（典貨）（名）質入の品物。ものもつ。

でん-くわ（電火）（名）いなびかり。（電光）。

てん-くわ（轉回）（名）めぐりまはること。又、めぐらしまはすこと。

てん-くわう（天光）（名）㊀日のひかり。㊁色の赤き一種の砂糖、黒糖より稍や上等なるもの。

てん-くわう（天藏）（名）「まのがは」。

でん-くわう（電光）（名）なびかり。いなづま。——**せき-くわ**（電光石火）（名）㊀極めて短少なる時間。㊁極めて迅速なる舉動。

てん-くわく（點畫）（名）漢字の點と畫と。又、漢字の書方。

てん-くわ-ふん（天花粉）（名）きからすうりの根を水飛して製したる白色の粉、藥用とするもの。

てん-くわん（展觀）（名）ひらきのべてみること。

てん-くわん（轉官）（名）官職をかへること。

てん-くわん（轉換）（名）うつしかふること。かへうつすこと。——**き**（轉換子）（名）【理】發電器の發電子の一端にありて、銅片數個を絶緣物にて組合せて圓筒狀となしたるもの、發電子に起こる交流を變じて電線に直流を通ぜしむる用をなす。

てん-ぐん（天軍）（名）天子の派遣せられし軍。

でん-くん（電訓）（名）電報にて訓令すること。

でん-ぐん（殿軍）（名）ぢんがりする軍隊。「書。

でん-けい（典經）（名）㊀のり。規範。㊁聖經。經

でん-けい（典型）（名）のり。かた。てほん。「し。

てん-けい（天啓）（名）神の靈現。天帝のおしめ

てん-けい（天系）（名）天子の御系統。

てん-けい（天刑）（名）天の法。又、天の罰。——！**びやう**（天刑病）（名）ういびやう。かつたい。

でん-けう（傳教）（名）【佛】のりのみちをつたふること。をしへをつたふること。

てん-けつ（轉結）（名）漢詩の轉句と結句と。

てん-げふ（轉業）（名）職業をかふること。

てん-けん（天眷）（名）天のあはれみ。天のなさけ。

てん-けん（天譴）（名）天のとがめ。

てん-けん（點檢）（名）一つ〳〵に点らぶること。よくあらたむること。「の檢組」。

てん-けん（天嶮）（名）天然にけはしき所。天然

てん-げん（天元）（名）㊀萬物生々のもと。㊁君主。——**おゆい**（天元術）（名）算木にて行ふ等なる和算、即ち開平・開立の類。

でん-げん（傳言）（名）「でんごん」に同じ。

てん-と（典故）（名）故事。故實。「閲—」。

てん-と（點呼）（名）一々名をさして呼ぶこと。「簡

てん-と（天狐）（名）天上に棲むといふ靈狐。

てん-と（天吳）（名）水の神。

でん-と（傳呼）（名）多くのもの、つたへよぶこと。

でん-と（傳語）（名）ことづて。ことづけ。

でん-と（殿後）（名）㊀ぢんがり。あとあさ（。㊁最下等。

てん-とう（天公）（名）あめ。上帝。

てん-とう（天工）（名）天のわざ。自然のでき。

てん-とう（天候）（名）「てんき」天氣に同じ。

てん-とく（篆刻）（名）印に文字を刻ること。いんとく。——**き**（篆刻師）（名）篆刻を業とする人。

てん-とく（天國）（名）神又は天使のすむ所にして清淨無垢なりといふ天上の想像世界。「キリスト」教にて、其信者の靈魂のおもむくといふ所。

てん-とく（典獄）（名）監獄の事務を掌る高等官。

てん-とち（天骨）（名）「てんこつ」に同じ。「—邪見にして」。

てん-と-ぢやう（點呼場）（名）舊國點呼を行ふ場所。

てん-とつ（天骨）（名）うまれつき。天性。「天禀」。

でん-とん（天閣）（名）㊀天門。㊁宮門。「密語」。

でん-とん（傳言）（名）ことづて。ことづけ。傳語。

てん-さ（點茶）（名）ひき茶をたつること。

てん-ざ（典座）（名）禪家などにて、儀式の事をつかさどるもの。

てん-さい（天裁）（名）天子の獨裁決。

てん-さい（天災）（名）天然のわざはひ、即ち、地震・風・雷・洪水などの稱。（天變）。

てん-さい（天才）（名）練磨研修によりて金て及ぶべからざる獨得の才能、即ち自然に具はりてある才能、又、其才能ある人。

てん-さい（天際）（名）天のはて。天のきは。

てん-さい（轉載）（名）他よりうつしとりて記載すること。「—を禁ず」。

てん-さく（添削）（名）詩歌・文章を或は書きそへ直すこと。「刪正、斧鉞」。

てん-さん（天蠶）（名）【動】「チグハむし」に同じ。

てん-さん（天産）（名）天然に產出するもの。

—ぶつ（天產物）（名）前條に同じ。

てん-ざん（添竄）（名）「てんさく」竄刪」に同じ。

てん-ざん（點竄）（名）【數】和算の代數。

てん-ざん（靦慚）（名）はづかしくして顏をあからむること。はぢらふこと。

てん-し（天子）（名）天の子の義。天に代はりて國を治むるもの、即ち一國の君主。主上。至尊。

てん-し（天使）（名）天國に於て上帝に奉仕するもの。上帝より派遣せらるゝ使者。

てん-し（天賞）（名）うまれつき。たぐひなし。

てん-し（天賜）（名）㊀天子よりたまふ所。天子よりたまもの。「—清福」。㊁天子より賜ふ所。天子よりのたまもの。

てん-し（轉徙）（名）所をかふること。うつること。

てん-し（覘視）（名）のぞきみること。うかゞふこと。

てん-し（天師）（名）德の最もすぐれたる道士。

てん-し（塡詞）（名）漢詩の一體。樂府より轉化したるものにて、李白が鷺鷥・菩薩蠻の二闋を祖とす、平仄・字數・句數・韻脚はすべて古人の詞に準據して詞を塡め成すより此名あり、多くは情景をうたふ。詩餘。

てん-し（天時）（名）㊀干支の錯行して其をり〳〵に吉凶あること。㊁自然にめぐり來れる時機。

てん-し（典侍）（名）㊀內侍のすけ。㊁宮中に奉仕する最高等の女官。

てん-し（點示）（名）指さしためすこと。

てん-し（顚字）（名）轉倒したる文字。

てん-し（篆字）（名）篆書の文字。

てん-し（點字）（名）點を組み合はせたる文字の符號。盲者の使用するものにして、厚き西洋紙に針などにて凸起をつくりて記したるもの、盲者指頭にてこれを摸して讀む。西曆千八百三十四年「フランス」國人「ブレーユ」の發明にかゝり、六個の點を基として組み合はす、現時我國に行はるゝは、石川倉次の發案になりたるものなり。

でん-し（電子）（名）【理】物質の原子を構成する假想的極微粒子、電氣より成るものといふ。陰電氣より成るを陰電子と稱し、陽電氣より成るを陽電子と稱す。陰電子の質量は水素原子の二千分の一にあたり、陽電子の質量は水素原子に匹儔すといふ。陽電子は一に陽粒子と稱す。——**せつ**（電子說）【理】物質の原子は陰陽兩電子より成るといふ假說。

でん-しやく（電磁石）（名）【理】「コイル」に軟鐵の心を入れたるもの、「コイル」に電流を通ずるときは磁石となる。

でん-せき（電磁石）（名）【理】前條に同じ。

でん-ち（轉貿）（名）【法】質權者が自己の質權ある質物につきて質權を設定すること。即ち質權者が占有する質物を他に質入すること。また、ちぢ。

てん-ちつ（天質）（名）うまれつき。せいしつ。

てん-ちつ（天日）（名）にちりん。たいやう。——！**えん**（天日鹽）（名）特殊の方法により、專ら天

日にさらして製造したる食鹽。

(でん-ぢは)[電磁波](名)【理】電氣振動の行はるゝとき、其周圍の電場に振動的變化の傳はるもの。

(でん-ぢふ)[傳習](名)つたへならはれてならふこと。うけつたへてならふこと。

(てん-ぢや)[轉寫](名)彼を此にうつしとること。

(てん-ぢや)[點者](名)和歌又は俳諧などに批點を加ふるもの。「天社」。

(てん-ぢや)[天敕](名)「てんぢやにち」の略言。

(でん-ぢや)[田舍](名)ゐなか。又、ゐなかや。

(でん-ぢや)[殿舍](名)どてん。やかた。

(でん-ぢや)[傳舍](名)ぢゆくばのはたごや。

(でん-ぢや)[電車](名)電力によりて軌道の上を疾走する車、車臺の下部に電動機を裝置し、これに軌道或は空中に架したる電線より電流を傳へて運動を起さしむるもの。

(でん-ぢや)[傳寫](名)㊀寫したるものを更に寫すこと。㊁たうつし。㊂多くのものゝうたへ寫すこと。

(てん-ぢやう)[天象](名)㊀日月星辰の集。㊁天空の樣子。そらあひ。「—」。

(てん-ぢやう)[典章](名)のり。きそく。「文物—」。

(てん-ぢやう)[典掌](名)つかさどること。

(てん-ぢやう)[天上](名)次條に同じ。

(てん-ぢやう)[天上](名)㊀そらの上。「—に昇る」。㊁そら。蒼天。㊂天にのぼること。(昇天)。

(てん-ぢやう)[天井](名)㊀屋根裏に、數多の棧を基礎の目の如くに組み又は前行に敷べて、其上に板を張りたるもの、天井の名は火災を忌みてこれを壓するに起る。㊁すべて、頭上を蔽ふものゝ裏面、即ち其内部の最も高き所。

(てん-ぢやう)[天孃](名)あめつち。天地。「—と共に窮りなし」。

(てん-ぢやう)[典常](名)きまり。つね。

(でん-ぢやう)[傳唱](名)つたへとなふること。

(でん-ぢやう)[殿上](名)㊀宮殿又は殿堂の上。㊁古昔、禁中の清涼殿又は紫宸殿の上の特稱。㊂殿上に昇ること。

(てん-ぢやう)[天上天下](名)宇宙

(てん-ぢやう)[天上天下唯—獨尊]《釋迦牟尼が生れしとき、一手は天を指し、一手は地を指し、周行すること七歩四方を顧みていひたりといふ語》宇宙の間我よりたふときものなしといふ義なりともいひ、又、人性の尊嚴を道破したるものなりともいふ。

(でん-ぢや)[田舍漢](名)ゐなかもの。ゐなかをとこ。

(てん-ぢや)[天爵](名)官位なけれども、德高くして自然にたふとまるゝこと。

(てん-ぢや)[天錫](名)「てんせきに」同じ。

(てん-ぢや)[轉借](名)他人のかりてゐるものを更に其人よりかること。またかり。

(でん-ぢや-ぢん)[田舍人](名)ゐなかもの。

(てん-ぢや-にち)[天敕日](名)陰曆にて、第一の吉日、即ち何事をなすにも吉なりといふ日、卷は戊寅、夏は甲午、秋は戊申、冬は甲子とす。(天社日)。

テン-シユ[天主](名)《デウス》の音譯》「キリスト教の神」。上帝。天帝。

(てん-ぢゆ)[天守](名)城の本丸に孤に高く設け

(てん-ぢゆ)[典、章](名)

(でん-ぢゆ)[殿上人](名)殿上人の出仕する所。

(でん-ぢゆ)[殿上間](名)殿上に昇ることを許されたる人、即ち、四位以上の公家及六位の藏人をいふ。

(でん-ぢゆ)[殿上人](名)たかまゆ。

(でん-ぢゆ)[殿上眉](名)たかまゆ。

(てん-ぢゆう-てんげ)[天上天下](名)宇宙の間。

(てん-ぢゆう-そん)[天上天下唯—獨尊]《釋迦牟尼が生れしとき、一手は天を指し、一手は地を指し、周行すること七歩四方を顧みていひたりといふ語》宇宙の間我よりたふときものなしといふ義なりともいひ、又、人性の尊嚴を道破したるものなりともいふ。

(でん-ぢゆ-かん)[田舍漢](名)ゐなかもの。ゐなかをとこ。

(てん-ぢゆく)[天爵](名)官位なけれども、德高くして自然にたふとまるゝこと。

(てん-ぢゆく)[天錫](名)「てんせきに」同じ。

(てん-ぢゆく)[轉借](名)他人のかりてゐるものを更に其人よりかること。またかり。

(でん-ぢゆ-ぢん)[田舍人](名)ゐなかもの。

(てん-ぢゆ-にち)[天敕日](名)陰曆にて、第一の吉日、即ち何事をなすにも吉なりといふ日、卷は戊寅、夏は甲午、秋は戊申、冬は甲子とす。(天社日)。

テン-シユ[天主](名)《デウス》の音譯》「キリスト教の神」。上帝。天帝。

(てん-ぢゆ)[天守](名)城の本丸に孤に高く設け

(てん-ぢゆ)[轉輸](名)はとぶうつすと。ゐくりはこぶこと。

(てん-ぢゆ)[天授](名)㊀天のさづくる所。㊁うまれつき。

(てん-ぢゆ)[天壽](名)自然の壽命。いのち。

(てん-ぢゆ)[轉手](名)琵琶の頭に貫きて絃(ヒ)を卷く所、三味線にては絲卷ともいふ。

(でん-ぢゆ)[傳授](名)藝術をつたへさづくること。をしふること。

(てん-ぢゆう)[塡充](名)ふさぎみたすこと。又、ふさがりみつること。

—せい[塡充性](名)【理】物質が空間を占(シ)むる性。

(てん-ぢゆ-かく)[天守閣](名)「てんぢゆ」(天守)に同じ。

(てん-ぢゆく)[轉宿](名)やどをとりかふること。

テン-シユ-けう[天主教](名)「キリスト」教の一派、最も舊き派にして「ローマ」法皇を首領と仰ぐもの、一に「ローマ」教といふ。

(でん-ぢゆ-ぢつ)[電鑄術](名)【理】電氣分解によりて鑄物を作ること、即ち模型に黑鉛を塗りたるものを陰極とし、鑄造せんとする金屬の板を陽極として、其金屬は模型に附着す。

[てんぢゆ]

(でん-ぢゆん)[轉醫](名)まわりきする問。また「すと」。

(てん-ぢゆん)[靄潤](名)うるはしさと、又、うるほひ。

(てん-ぢよ)[添書](名)そへがき。そへよ。

(てん-ぢよ)[篆書](名)漢字の一體、即ち篆に同じ。

(てん-ぢよ)[轉所](名)場所をかふること。「七」。

(てん-ぢよ)[天助](名)天のたすけ。「後嗣」。

(てん-ぢよ)[天序](名)㊀自然の順序。㊁帝者の

(てん-ぢよ)[展舒](名)ひらきのぶること。

(てん-ぢよく)[天職](名)㊀天子が國家を治めたまふつとめ。㊁其身に自然そなはりたるつとめ。

(てん-ぢよく)[轉職](名)職務をかへらるゝこと。

(てん-ぢよく)[天色](名)そらもやう。そらあひ。

(でん-ぢよ-ばと)[傳書鳩](名)戰地などの通信に使用する鳩、鳩は舊巢の地によく立ちかへるものなるが故に、これを使用する前、發信する地のものと受信する地のものとを交換しおき、書狀を其足に結びつけてこれを放つ。

(てん-ぢん)[點心](名)㊀定まりたる食事と食事との間に物を食ふこと。あひだぐひ。㊁ちやうけ。ちやのこ。「の心」。

(てん-ぢん)[天心](名)㊀大空のまなか。㊁上天

(てん-ぢん)[天神](名)天のかみ。あまつかみ。

(てん-ぢん)[天眞](名)天賦自然の眞情。うまれつきのまゝ。

(てん-ぢん)[展、宗](名)のぶること。

(てん-ぢん)[天人](名)宇宙と人生と。「一合一」。

(てん-ぢん)[天神](名)㊀天にまします神。あまつかみ。「—地祇」。㊁天滿宮即ち菅原道眞の靈を祀(ツリ)りたるもの。「—樣」。㊂「てんぢんまげ」の略言。

(でん-ぢん)[輻輳](名)三味線の頭のいとぐちとゝくひき。

(でん-ぢん)[輻輳](名)三味線の頭のいとぐちとゝくひき。

(でん-ぢん)[電信](名)電信機による通信。(電報)。

(でん-ぢん)[田紳](名)《田舍紳士の略言》ゐなかの紳士。

でんぢん-かはせ[電信爲替](名)郵便爲替の一種、電信によりて取扱ふもの、其振出局より電信にて爲替金額及差出人の氏名受取人の宿所氏名を其拂渡局に通知し、拂渡局はこれによりて電信爲替證書を作成して受取人に送達し、受取人は其證書を拂渡局に差出して現金を受取るものとす。——

ぢよう-ぢよ[電信爲替證書](名)電信爲替の受取人に、其拂渡局より送達する爲替證書。

(でん-ぢん-き)[電信機](名)【理】電流によりて通信する機械、發信機は電流の斷續器にして、受信機は電磁石より成る、發信局にて電流を斷續すると、受信局の電磁石は其上に裝置せる軟鐵片を或は引き或は放ち、軟鐵片より出でたる棒の端にある針は、時計仕掛にて出づる細長き紙に、點と線とより成る文字の記號を印す。「局」。

(でんぢん-きよく)[電信局](名)電信を取扱ふ

(てんぢん-ぢちだい)[天神七代](名)地神五代の前に我國をおろしたまひし七代の天神の稱、即ち國常立(クニトコタチ)尊・豐斟渟(トヨクモノ)尊・泥土煮(ウヒヂニ)尊・沙土煮(スヒヂニ)尊・大戸道(オホトノ)尊・面足(オモタル)尊・惶根(カシコネ)尊・伊弉諾(イザナギ)尊・伊弉冉(イザナミ)尊の稱。

(でんぢん-せん)[電信線](名)電信機の電流を通ずる針金。

(でんぢん-たい)[電信隊](名)電信の架設に從事する工兵の一部隊。

でんぢん-はしら[電信柱](名)電信線を支持する柱。

てん-ぢん-まげ[天神髻](名)婦人の髮の結方、銀杏返に似て其髻に髮を卷き簪にて止めたるもの。

[てんぢんまげ]

(てん-ぢん-らんまん)[天眞爛漫](名)つゝみかざりなく、心のまゝの言動にあらはるゝこと。「金。

(でんぢん-れう)[電信料](名)電信取扱の料

(てん-ぢ)[轉](名)

(てん-ぢ)[轉](名)

(でん-ぢ)[點

てん-せい[展生](名) 物質のたゝきのばすとの出來る性質。

(てん-せい[恬靜](名) やすらかにして志づかなむき。のり。

(てん-せい[典制](名) 〈つちひわらふと。

(てん-せう[諂笑](名) 〈つちひわらふと。

(てん-せう[纏綿](名) まとひつくと。まきつくと。——**けい**[纏綿](名) まとひつくと。まきつせずして他のものにまとひつくもの、即ち朝顔の蔓の類。

(てん-せき[天戚](名) 帝室。皇族。

(てん-せき[天錫](名) うまれつき。

(てん-せき[典籍](名) 志よもつ。志よせき

(てん-せき[轉籍](名) 本籍の管轄地をかふると。本籍をうつすと。——**ち**[轉籍地](名) 轉籍したる管轄地。

(てん-せつ[點綴](名) つゞりあはすると。又、とりあはすると。

(でん-せつ[傳說](名) いひつたへ。かたりつた

(てん-せん[點染](名) うるはしそむると。又、うるはしそむると。

(てん-せん[轉戰](名) 此處彼處にあちもむきてたゝかふと。又、場所をかへてたゝかふと。

(てん-せん[點線](名) ぽち〳〵のつゞきて線狀をなすもの。

(てん-ぜん[恬然](名、副) やすらかなるさま又はあだやかなるさまにいふ語。「まにいふ語。

(てん-ぜん[靦然](名、副) はぢらひあかちむさ

(てん-ぜん[塡然](名、副) 太鼓をうつさまにいふ語。「一鼓之」。

(てん-ぜん[天然](名) 〈てんねんに同じ。

(てん-ぜん[典膳](名) 內膳司の判官。

(でん-せん[電線](名) 電流を通ずる針金。

(でん-せん[電閃](名) ㊀いなづまの如くにひらめくと。「刀光一」。㊁いなづま。いなびかり。

(でん-せん[傳染](名) うつりそむと。つたはりそむと。うつると。

(てんぜん-くわぢつ[天然果實](名) 【法】草木に結ぶ果實の稱。法定果實の對。

(でん-せん-びやう[傳染病](名) 病毒の他人にうつり易き病氣。傳染病豫防法にては、特にコレラ・赤痢・腸窒扶斯・痘瘡・發疹窒扶斯・猩紅熱・實布垤利亞ペストをいふ。

(てん-そ[天祖](名) 天照皇太神を申し奉る語。

(てん-そ[天葬](名) 天子のみくらゐ。

(てん-そ[天鼠](名) 【動】「かはほり」の異稱。

(てん-そ[田鼠](名) 【動】「むぐらもち」の異稱。

(でん-そ[田租](名) 田圃に課する租稅。

(てん-そう[天窓](名) ㊀あたま。つむり。㊁てんまど。ひきまど。

(てん-そう[轉送](名) うつしおくると。

(でん-そう[傳送](名) ㊀つぎ〳〵につたへおくると。㊁志ゆくゑふくり。

(でん-そう[電奏](名) 電報にて奏聞すると。

(でん-そう[傳奏](名) ㊀とりつぎて奏聞すると。㊁古昔、禁裏にて、武家よりの奏聞を傳達せし職。——**ぢよ**[傳奏所](名) 慶長年間に町奉行所の稱、正保以後は評定所と改稱せられたり。——**や**[傳奏屋敷](名) 德川時代に、江戸に設けたる朝使の旅館。

(てん-そく[典則](名) のり。きそく。

(てん-そく[天則](名) 天地自然の法則。

(てん-そく[天測](名) 航海者が船のある經度緯度を知るために、天體を觀測すると。

(てん-そく[塡塞](名) つめふさぐと。ふさがると。

(てん-そく[塡足](名) つめたすと。ふぎなひた

(てん-そん[天尊](名) 【佛】如來の別稱。

(てん-そん[天孫](名) ㊀神の御子孫。㊁天津彥彥火瓊瓊杵尊の御別稱。「一降臨」。

(てん-たい[轉貸](名) 或人に借りたるものを更に他の人に貸すと。またがし。

(てん-たい[天體](名) 【天】天上にあちはるゝ物體、即ち日月星辰の稱。——**がく**[天體學](名) 【天】星圖の製法に就きて研究する科學。——**ぢやくんがく**[天體寫眞學](名) 【天】天體の最も精微なる寫眞をとることを研究する科學。——**につぺう**[天體日表](名) 曆の一種、太陽・太陰・遊星・恒星等の日々の位置を掲げたる表、神宮司廳にて發行せる曆及「イギリス」國「グリンウヰッチ」にて發行せる航海曆等これなり。——**ぶつりがく**[天體物理學](名) 【天】天體の放つ光・形狀・零圖氣等の如き總て天體の物理的現象に就きて研究する科學、天體寫眞術及天體分光術を研究の基礎となす。——**ぶんくわうぢゆつ**[天體分光術](名) 【天】天體の光の最も精微なる「スペクトル」を求むることを研究する科學。——**りきがく**[天體力學](名) 【天】天體相互の作用及運動に就きて研究する科學。——**りよくがく**[天體力學](名) 前條に同じ。

(てん-だい[天台](名) 【佛】「てんだいさゆう」の略言。——**ぢゆう**[天台宗](名) 【佛】宋台は支那の浙江省にある山の名にして、宗祖智者大師以後其宗の根據地たり。佛教の一派、法華經を根本の所依となし釋迦牟尼一代の所說を助成とす、邊多善

薩より次第に相傳したるものといふ、我國にては天平勝寶六年唐僧鑑眞來りてこれを傳へたれど未だ盛ならず、延曆二十三年僧最澄勅を奉じて入唐し、天台山の道邃和尚に就きて指奧を極め、同二十四年歸朝してこれを敷き、法波大に揚がりたり、故に我國にては最澄を開祖とす、其後天安二年僧圓珍入唐しまた天台山に於て其教旨を受け、歸朝後園城寺にゐて更にこれを弘めたり、前者を眞に天台宗と稱し、後者を天台宗寺門派と稱す。

(てん-たいさよう[點對稱](名) 【數】二つの圖形上の各點が、互に一定點に對して反對の位置にありて、且つ此定點よりの距離が互に等しきとき、此二つの圖形は點對稱をなすといふ、又、一つの圖形內の或一定點に對し等距離にして、反對の位置にある一雙の點が必ず此圖形上にあるときも、此圖形は點對稱なりといふ、而して此點を對稱の中心と稱す。

てんたい-の-ふで[慊大筆](名) 《たるきの大きの筆の轉》堂々たる議論を草するといふ語。

(てん-たう[天道](名) ㊀天地自然の道。㊁天地主宰の神。「一人を殺さず」。㊂にちりん。太陽。

(てん-たう[典當](名) ひきあて。志ちもつ。

(てん-たう[覺湯](名) 神前にて湯をわかして神を祭ると。

(てん-たう[顚倒](名) ㊀さかさになると。又、さかさにすると。轉倒。㊁常を失ふと。又、常にたがはすると。「心氣一」。㊂たふゝと。又、たふすと。

◎國文にて、逆字の位置が常規にたがふと。

(てん-たう[顚倒](名) 前條に同じ。

(てん-たう[天道](名) ㊀「てんたう」(一)に同じ。「一是耶非耶」。㊁【佛】欲界・色界・無色界の總稱。

(てん-だう[天堂](名) ㊀天上にありて神とれにいますといふ想像上の殿堂。㊁極樂世界。

(でん-だう[殿堂](名) ㊀高大にして壯麗なる家屋。㊁神又は佛のおはする建物。

(でん-だう[傳導](名) ㊀つたへみちびくと。㊁【理】熱又は電氣が物體內を通過すると。

(でん-だう[傳道](名) 教旨をつたへひろむると。多く「キリスト」教にていふ。——**ぢ**[傳道師](名) 教旨をつたへひろむる人、宣教師。

てんたう-ぼし[天道乾](名) ㊀日光にさらしはすと。㊁ほしみせ。

てんたう-まかせ[天道任](名) 自然のなりゆきにまかすると。

てんたう-むし[天道蟲](名) 【動】鞘翅類に屬する小蟲、變種頗る多く、或は黑色にして赤紋を有するもの、或は黃色にして黑紋を有するものあり、色澤斑紋一定せず。「こし。

(てん-たく[轉宅](名) やうつり。わたまし。ひき

(でん-たく[田宅](名) 田地と第宅と。

(でん-たつ[傳達](名) つぎ〳〵に傳へ屆くると。

(てん-たん[恬憺](名) やすらかなると。

(てん-ち[天地](名) ㊀天と地と。あめつち。㊁字宙。㊂うゝまた。かみさも。「動物の一」。

(てん-ち[天池](名) 御の稱。「南溟者—也」。「へ。

(てん-ち[轉地](名) 居所をかふると。ところが

(でん-ち[電池](名) 【理】化學作用によりて電流を起す裝置の稱。

(でん-ぢ[田地](名) 田となりたる土地。

(でん-ぢ[田疇](名) たはた。

テン-ヂク[天竺](名) ㊀印度の古稱。㊁もち。天竺玉。㊂高處、頂上。㊃(テンヂクもめん)の略言。{——**たま**[天竺玉](名) 最高處、頂上。「髮を—に結ふ」。——**ねすび**[天竺茄子](名) 【植】「マンダラげ」に同じ。——**ねずみ**[天竺鼠](名) 【動】齧齒類に屬する小獸、もと南「アメリカ」「ブラジル」國の產にして舶來したるもの、形は兎に似て趾指に蹄狀の爪あり、毛色種々にして圓(まる)し。——**もめん**[天竺木綿](名) 舶來せる一種の木綿、丈夫にて厚きもの。——**らうにん**[天竺浪人](名) 定まりたる住所なく、所々に彷徊するもの、やどなし。

(てん-ちや[點茶](名) 抹茶を湯にたつると。

(てん-ちやう[天聽](名) 天皇のきゝ給ふと。「一に達す」(飯聞)。

(てん-ちやう[天頂](名) ㊀いたゞき。てっぺん。㊁【天】地球上觀測者の直上の點、即ち觀測者を起點としたる鉛直線の天球と會する點。——**ぎ**[天頂儀](名) 【天】天頂距離を測るに用ふる望遠鏡。——**きより**[天頂距離](名) 【天】天頂より或天體に至る角距離、即ち高度の餘角。——**てん**[天頂點](名) 【天】「てんちやうこう(二)」に同じ。

(でん-ちやう[電場](名) 【理】電氣を帶びたる物體の作用の及ぶ場所。

(てん-ちやう-せつ[天長節](名) 天皇の御降誕の祝日、今上皇帝のは十一月三日なり。

(てん-ちやう-ちきう[天長地久](名) 《老子に出づ》物事の天地と共に永遠につゞくと。

(てん-ちやく[纏着](名) まとひつくと。

(てん-ちゆう[轉註](名) 漢字の六書の一、同一文字を異なる訓に轉用したるもの、咽喉の咽をむせぶの義に用ひ、汚穢の汚をそゞぐの義に用ふる類。

でんさい【電波】[名]

でんさく【電気分解】[名]

でんさつ【紙幣】[名]

でんさん【電算】[名]

でんし【電子】[名]

でんしゃ【電車】[名]

でんしゅ【電波】[名]

でんしょう【電圧】[名]

でんしょう【電灯】[名]

でんしょう【電鈴】[名]

でんしょう【電信】[名]

でんしょう【電話】[名]

でんしょう【電線】[名]

でんしょう【電柱】[名]

でんしょう【電報】[名]

でんしょう【電力】[名]

でんしょう【電流

てん-ぴやう-がは[ヒヤウ-ガハ]〔天平革〕(名) 白革に地を柿色に染め模様を白く摺(ス)り出だしたるもの、不動の像・唐草・八幡の二字・梵字及天平十二年八月などの模様を染め出せり、此版肥後國八代郡古閑橋に傳はりしが、中古一度禁止せられ、正平年中再び発さる、此新製を正平卿発革といふ。

テン-ビン〔天秤、天平〕(名) 《天平の唐音》㊀物の重さを量る一種の器械、丈夫なる金屬の棒を其重心より稍々上の點にて支(ツカ)へ、兩端に皿を吊(ツル)したるもの、支點より兩端に至る距離等(ヒト)しきを以て、一方の皿に其重さを量らんとする物體を載(ノ)せ、他の皿に重さの知れたる分銅を載せて釣合はすれば其重量を知るべし。㊁一本の絲の端に釣(ツリ)を二つつけたるもの。㊂「テンビンぼう」の略言。㊃二つの物事の相同じきと。㊄物事を兩端にかくると。——**ぼう**〔天秤棒〕(名) 兩端に荷を掛けて擡(カタ)ふ棒、たごのぼう、かたげぼう、あふご。

てん-ぴん〔天稟〕(名) 《天よりうくる所の義》うまれつき、天性。

てん-ぴん〔典品〕(名) 志ちもつ。

てん-ぶ〔天賦〕(名) 《天よりわかち與ふる所の義》うまれつき、もちまへ。〔天稟〕。

てん-ぷ〔天府〕(名) 土地沃饒にして產出物のいとゆたかなる土地。

てん-ぷ〔顔仕〕(名) たふゝと、又、たふすと。

てん-ぷ〔添附〕(名) ㊀そへつくると。又、そひつくると。㊁〔法〕所有權所得の原因なる附合・混和・加工の總稱。

てん-ぷ〔轉付〕(名) ㊀彼より此にうつしわたすと。㊁〔法〕代位の手續を要せずに、債務者の債權を差押債權者に移して其取立をなさしめ、又は支拂に換へ、毎面額にて債務者の債權を差押債權者にうつして、辨濟に充(ア)てしむると。

でん-ぷ〔田麩〕(名) 一種の食品、麩面の細末を、砂糖と醬油とにて煎(ニ)ためたるもの、魚肉などにても製す。「鯛—」。

(でん-ぷ〔田夫〕(名) あなかもの。「—野人」。

(てん-ぷく〔顔覆〕(名) ㊀ひっくりかへると。くつがへると。㊁ひっくりかへすと。くつがへすと。㊂ほろぼすと。又、たふすと。

(てん-ぷ-ぞぜん〔天賦自然〕(名) 天より付與したるものにして、人力のこれを如何ともなしがたきもの、即ち本來の性質。

(てんぷ-おんけん〔天賦人權〕(名) 天より人類に平等に賦與したる權利、即ち絶對に他人の制壓を受くる理由なしと想像せらるゝ權利。

(てん-ぷつ〔典物〕(名) 志ちもつ。

(でん-ぷつ〔質物〕(名) 沈質したるもの。

(てんぷめいれい〔轉付命令〕(名) 〔法〕差押債權者が債務者の債權に就き、轉付を裁判所に申請して得たる命令。

テンプラ〔天麩羅〕(名) ㊀一種の料理、魚介などの肉に饂飩粉のころもを掛け、これを油にて揚げたるもの。——**そば**〔天麩羅蕎麥〕(名) 天麩羅を入れたる汁そば。

(てん-ぷん〔篆文〕(名) 篆の文字。〔篆の條を見よ〕。

(でん-ぷん〔電文〕(名) 電報の文句。

(でん-ぷん〔傳聞〕(名) つた〈聞くこと。

(でん-ぷん〔澱粉〕(名) 〔化〕植物體殊に穀類・蕃薯・甘薯・馬鈴薯等より製ずる白色の粉末、滋養の効あり、攝氏六十度以上に熱するときは糊狀の粘液となる、又、其粘液の冷(ヒ)えたるものは、沃素に逢へば暗青色の沈澱を生ず、これによりて其微量をも檢出するとを得。——**ぶつ**〔澱粉質〕(名) 澱粉を採取し得べき物質。

(てん-ぺい〔天兵〕(名) 天皇の派遣せられたる兵。

(てん-ぺう[ヒヤウ]〔天飈〕(名) 高處より吹き來る風。

(でん-ぺう[ヒヤウ]〔傳票〕(名) 支拂の通知に發せられたる切符、これを支拂方に差出して現金を受取る。

(てん-ぺん〔天變〕(名) 天空の變動、即ち風・雷・日蝕などの類。「—地異」。〔光明こ〕。

(てん-ぺん〔天邊〕(名) 天空の高處。「—大月缺」。

(てん-ぺん〔轉變〕(名) うつりかはると、又、うつしかふると。

(てん-ぽ〔展墓〕(名) 墓前にものをそなへてまつると。はかまゐり。

(てん-ぽ〔典鋪〕(名) 志ちみせ。

(てん-ぽ〔廛鋪〕(名) みせ。たな。

(てん-ぽ〔天步〕(名) 天のまはりあはせ。「—厭難」。

(てん-ぽ〔塡補〕(名) 不足をうめもぎなふと。

(でん-ぽ〔田畝〕(名) たはた、でんぱた。〔田圃〕。

(てん-ぽう〔手棒〕(名) 胸の授に立たぬやうになりたるもの。又、腕若しくは指のなきもの。——**えび**〔手棒蝦〕(名) 〔動〕蝦の一種、海に產す、一方の手の特に大いなるもの。——**がに**〔手棒蟹〕(名) 〔動〕蟹の一種、海に產す、色赤く、其はさみの一方の大いなるもの。

(てん-ぼう〔轉蓬〕(名) 《根のとれてとびうつるよもぎの義》人の故郷を出でゝ處々に漂泊するとにたとへいふ語。

(てん-ぼく〔顔仕〕(名) 「てんぷ」に同じ。

てん-ぼとり〔貂詩〕(名) 《詩(ウタ)のなき間に詩の

一 字音　　二 假語方言　　三 古語

はとる義》已よりすぐれたるもの、あらざる所にて、はとりたかぶると。

でん-ぼふ[ヒウ]〔傳法〕(名) 《昔時、江口淺草傳法院の奴僕どもが、寺の威を頼みて亂暴を働き、境内の觀物場に無代にて押し入りたるとありしに出づ》㊀觀物又は芝居などに、無錢にて押し入り見物するとの稱。㊁わるずれて粗暴なると。㊂女のいさみ肌をまゐると。——**はだ**〔傳法肌〕(名) 亂暴なるたち。又、いさみはだ。

(でん-ぼふ[ヒウ]〔傳法〕(名) 傳授の法。

(てん-ぼふりん[ヒウ-リン]〔轉法輪〕(名) 〔佛〕教法を說き正道を開き、衆生一切の惑網を摧破すると。

てん-ま〔傳馬〕(名) ㊀宿つぎの馬。㊁公用に出だす駄馬。㊂「てんまぶね」の略言。

(てん-マ〔天魔〕(名) 人を惱亂してもろ〳〵の障碍をなし、智慧善根を喪失せしむるもの。

(てん-まう[モウ]〔天網〕(名) 天のあみ。——**くわいくわい そにしてもらさず**〔天網恢恢疎而不漏〕天道は嚴にして、惡事には早晩必ず惡報のあるにいふ。

(てん-まく〔天幕〕(名) ㊀天井に張り飾る幕。㊁雨露を志のぐため、屋宇のかはりに張りおほふ幕。

(てん-まつ〔顚末〕(名) 事のはじめよりをはりまでの情狀。事のなりゆき。「話の—」。

てん-まど〔天窓〕(名) あかりを取り又は煙を通(ツ)すため屋根に明けたる窓。

てんまぶね〔傳馬船〕(名) 運送に用ふるはしけぶね。

てんみやう-がま[ミヤウ-ガマ]〔天明釜〕(名)

〔てんまぶね〕

伏見天皇の頃、下野國安蘇郡天明(佐野)より出だし、鐵製の釜、茶家の珍重せるもの。〔天猫〕。

(てん-めい〔天明〕(名) あけがた。よあけ。

(てん-めい〔天命〕(名) 其身にめぐり來れる運命。

(でん-めい〔傳命〕(名) 命令をつたふると。

(でん-めい〔電命〕(名) 電報にて命令すると。

(てん-めつ〔殄滅〕(名) ほろぼしたやすと、又、ほろびたゆると。

(てん-めん〔纏緜〕(名) まとひつくと。かちみつくと。「情緒—」。

(てん-めん〔轉免〕(名) 轉職と免職と。

(てん-もく〔天目〕(名) ㊀茶家にて用ふる抹茶茶碗の一種、支那建安の天目山の產を原形としたるもの、淺くして開き擂鉢形をなす。㊁茶碗の泛稱。〔四國・九州・北國地方の方言〕。——**ちやわん**〔天目茶碗〕(名) 前條に同じ。

(てん-もん〔天門〕(名) 天にのぼる入口の門。

(てん-もん〔天文〕(名) 天のあや、即ち天體の現象。——**がく**〔天文學〕(名) 〔天〕天體の距離・大いさ・運行等總て天體に關するとを研究する科學。——**がくしや**〔天文學者〕(名) 天文を研究する學者。又、天文に精通したる學者。——**たい**〔天文臺〕(名) 天文の觀測所。〔觀象臺、司天臺〕。——**だう**[ドウ]〔天文道〕(名) 古昔、陰陽寮の一科、天文及氣象に關する事を教へしもの。——**はかせ**〔天文博士〕(名) 古昔、陰陽寮の所屬の官、天文に關する事を掌りしもの、相當は正七位下なり。〔豐臺郎〕。

(てん-もんどう〔天門冬〕(名) 〔植〕百合(ユリ)科に屬する草、葉の形は杉に似、柔軟にして光澤あり、小形の白花を開き實を結ぶ、根は藥用とし又は砂糖漬とす。すまろぐさ。

てん-や〔店屋〕(名) ㊀商人の店。㊁食物を賣る店。——**もの**〔店野物〕(名) 店屋の品物。

(でん-や〔田野〕(名) のら。はたけ。

(てん-やく〔轉役〕(名) やくがへ。〔轉任〕。

(てん-やく〔典藥〕(名) 昔時、宮廷などの醫藥を掌りしもの。——**れう**[リヤウ]〔典藥寮〕(名) 古昔、宮內省の被管にして、宮中の醫藥に關する事を掌りし所。

(てんやわんやに(副) 先を爭ひて、われがちに。

(てん-ゆ〔詔諛〕(名) あもねると。へつらふと。

(てん-よ〔天與〕(名) 天のあたへ。

(てん-より〔轉用〕(名) 他へうつしもちふると。他へかへてつかふと。

(てん-らい〔天來〕(名) 人間界に生じたるものにあらずして天より來れると。

(てん-らい〔天籟〕(名) ㊀風の稱。㊁絶調の詩歌。

(でん-らい〔傳來〕(名) 受けつぎきたれると。

(でん-らう[ロウ]〔殿廊〕(名) 宮殿又は殿堂などのわたりどの。

(てん-らう-せい[ロウ-セイ]〔天狼星〕(名) 〔天〕恆星中の最大なるもの。

(てん-らく〔顚落〕(名) ころびおつると。

(てん-らん〔天覽〕(名) 陛下のみそなはすと。「—に供す」。

(てん-らん〔展覽〕(名) ㊀ひろげてみると。㊁品物を陳列してみると。

(でん-らん〔電覽〕(名) 人の見るとの敬語。

(でん-らん〔傳覽〕(名) つぎ〳〵に傳へてみると。

(てん-らん-くわい〔展覽會〕(名) 物品を陳列して縱覽せしむる會。

一 字音　　二 假語方言　　三 古語

(てん-り)[天利](名) 金を貸すとき、其元金より先づ引き去る契約期間の利子。

(てん-り)[天理](名) 天然自然に定まれる道理。天地萬物に通ずる道理。

(でん-り)[電離](名)【化】電解物の水溶液中に於て、分子の幾分が自然に陰陽兩種の「イオン」に分解してあること。

(でん-りう)[電流](名)〔理〕電位の異なる二物體を導線にて繋ぐとき、電氣が其導線を傳はりて通ずること、即ち電氣の流動の稱。陽電氣の流動する方向を其方向となす。——**けい**[電流計](名)〔理〕電流の強さを計る器械。正切電流計・無定位針電流計・其各條を見よ)などあり、工業上に用ふるは、針の指す目盛を見て直に幾「アンペア」なるかを知る装置より成る。これを「アンペア」計といふ。

(てん-りく)[殄戮](名) みなごろしにすること。

(てん-りけう)[天理教](名) 神道の一派。天理王尊を祭る。前川みちの創始せしもの。

(てん-りやう)[天領](名) ㊀天子の直領地。㊁德川時代に、僭して將軍の領地の稱にいひき。

てんりわう-のみこと[天理王尊](名) 天理教にて、國常立尊・豐斟渟尊・面足尊・惶根尊・伊弉諾尊・伊弉冊尊・大苫邊尊・大日孁尊・月夜見尊の十柱の神を合しての稱。

(てん-りん)[天倫](名) ㊀天地自然のつね。「叙—之變事」。㊁ていりん」人倫に同じ。

(でん-りン)[電鈴](名)「でんれい」に同じ。

(てん-りんざう)[轉輪藏](名)【佛】經文を收むる書櫃、旋轉するやうにつくりたるもの。「輪藏」。

(てん-りん-わう)[轉輪王](名)【佛】梵語、遮加越羅「インド」國の神、其持する所の輪寶の種別によりて金輪・銀輪・銅輪・鐵輪の四種に分つ、輪の旋轉によりて一切を威服屈導する徳あるものといふ。「と、文章—」。

(てん-れい)[典麗](名) たゞしくしてうるはしき。

(てん-れい)[典禮](名) 定まりたる儀式。

(でん-れい)[電鈴](名) 電流によりて鳴る裝置の一端は釦に、其他端は電磁石の前にて軟鐵片を支ふる彈簧(ばね)に連なる、軟鐵片は尖端に白金の附着せる振子(ふりこ)に觸れ、釦と振子とは電池に連なる、平素釦は彈機により て電池と電磁石とを斷つ、今圖する人これを押して輪道を作れば、電磁石は鐵片を吸引し白金の尖端より離れしめて電流を斷つが故に磁石は磁性を失ひ、鐵片は彈機により て舊位に戻り再び白金の尖端に觸る、かくて今圖する人釦を押す間は、鐵片は絶えず振動し、それより出づる鈴は鈴を打ちて鳴らす。

[いれんで]

(でん-れい)[傳令](名) 命令をつたふること。——**ぶ**[傳令使](名) 本陣の命令を諸軍に傳ふる職。

(でん-れふ)[田漁](名) 山野のかり。「の武官。

(でん-ろ)[電路](名) 電流の通ずる路。

(でん-わ)[電話](名) 電話機により て通話すること。

(でん-わう)[天皇](名) 大日本帝國を統治したまふ位にまします元首。すめらぎ。すめろぎ。

(てん-わう)[天王](名) ㊀【佛】欲界・色界の天主の稱。又、牛頭天王の尊稱。㊁支那にて、君主の稱。

てんわうぢ-かぶら[天王寺蕪](名)【植】攝津國天王寺村に產する一種の蕪、大形にして、稍や細長く、味上品なるもの。

(てんわう-せい)[天王星](名)【天】上遊星の一、太陽よりの平均距離七億二千萬里にして、直徑は一萬三千里なり、八十四年にて太陽を一周す、時としては肉眼にて見ゆるあり、四個の衛星を有す。

(でんわ-かうくわん)[電話交換](名) 電話機により て雙方互に話をなしあふこと。——**きよく**[電話交換局](名) 遞信大臣の管轄に屬し、電話交換に關する事務を取扱ふ所、其管轄内の電話加入者の許に通ずる電線は、すべて此所に集まり、彼此の電線を連接して、電話交換をなさしむ。

(でんわ-き)[電話機](名) 電流により て通話する機械。送話機は炭素板とこれに觸るゝ數多の炭素粒とより成り、受話機は棒磁石と其一極を圍む小さき「コイル」及其前にある軟鐵薄板とより成る、甲地にて送話機に向ひ談話するときは、其炭素板振動して炭素粒を壓する力に強弱を生ずるにより、抵抗も亦振動的に變化し、電池より電話線に通ずる電流に強弱を起きしむ、これにより乙地の受話機の「コイル」内の磁場變化し、從つて棒磁石の強さ變化して軟鐵板を引く力變ずるが故に、軟鐵板を振動せしめて談話したると等しき音聲を發せしむ。

[きわんで]

(でんわ-ばんがう)[電話番號](名) 電話加入者の番號。

(でんわ-ばんりやく)[電話料](名) 自動電話などにて通話をなすもの、其都度納付する金。

(てん-ゐ)[天位](名) 天子の御位。「天祚」。

(てん-ゐ)[天威](名) 天子の御威光。

(てん-ゐ)[天爲](名) 天のたわざ。自然の作用。

(でん-ゐ)[電位](名)【理】電氣を帶びたる二つの導線を繋ぐとき、電氣が導線に流動すれば、其二つの導線は電位異なりといふ、若し甲より乙に向つて陽電氣動くときは、甲の電位は乙の電位よりも高しといふ、流水は水平の低き所に流れ行くが如く、陽電氣もまた電位の高き所より低き所に向つて流動す。

(てん-ゐん)[店員](名) みせにつとむる人。

(てん-ゐん)[天淵](名) 天とふちと即ち相互の懸隔太だしきにいふ。

(でん-ゐん)[田園](名) ㊀田とそのと。㊁郊外。——**ぢぶん**[田園詩人](名) 主として田園の間に於ける天然自然の美をうたふ詩人。——**せいくわつ**[田園生活](名) 都會を離れ田園の間に棲みて農事などに生活を送ること。

(てん-を)[點汚](名) ㊀ぢみ。けがれ。よごれ。㊁きず。非難。

と　ど

と 齒的破裂音T 即ち舌端を硬口蓋の前部に觸れて破裂せしむる音と、母音「オ」との綴音。

ど「と」の濁音、すべて「と」と同じくして、たゞ破裂音に壁帶の振動の伴ふと異なりとす。

と[戸](名) ㊀家の出入口。かど。とぐち。くち。「門」。㊁門又は窓などに閉ぢて塞ぐもの、普通は木の框に板を張りたるものなれど、中には土を塗りたるもあり、又は「ガラス」を張りたるもありて、其製種々なり。㊂水流の出入口。瀬戸。「由良の—」。

と[籐](名)「とう」の略言。「—細工」。

と[砥](名) ㊀刃物又は玉類などをすりみがく石、種類多し。といし。㊁平かなると又は均しきとにたとへいふ語。「周道如—」。

と[斗](名) ㊀容量の單位、即ち一升の十倍。㊁とます。轉じて、ます。「掊—折衝」。㊂〔天〕二十八宿の一、北方にあるもの。ひつき。㊃ひたやく。柄杓。

と[賭](名) 財物をかけて勝負を爭ふこと。かけごと。

と[途](名) みち。みちすぢ。

と[堵](名) かき。かこひ。「觀るものーの如し」。

と[土](名)「ど」に同じ。

と[徒](名) ㊀かち。步行。㊁あしがる。步卒。㊂たもべ。從僕。㊃ともがら。なかま。㊄門弟。學生。㊅めしうど。囚人。㊆苦役。懲役。「一刑」。

と[外](名) そと。はか。「—にたてわたしたる屏風」。「内にも—にも」。

と[時](名) あひだ。ま。「夜のふけぬ—に」。

と[跡](名) あと。「—絶ゆ」。

と[十](數) 五の二倍。とを。たふ。

と(名、副) 《助詞の「と」より轉じたる語》かやう。このやう。「—やかくや」。「—いひかくいひ」。

と(助) ㊀それと定むる意を表す語。「十日—いふ日」。㊁「として」の意を表す語。「雪—見る」。㊂「のごとく」の意を表する語。「月日のみ流るゝ水—早ければ」。㊃「其上に」の意を表する語。「有り—有る」。「生きー し生ける」。㊄「といへども」の意を表する語、未定の場合に用ふ。「千倉に置く—積みやあまちん」。

と[與](助) ㊀同じ種類のものを連接するに用ふる語。「山—河—」。(及)。㊁「ともに」の意を表する語。「汝—行かん」。

—と(接尾) 或語に添へて、これを副詞となす語。「やみくーー」。「いろくーー」。

(ど)[奴](名) めしつかひの男。たもべ。やっこ。

(ど)[弩](名) いしゆみ。おほゆみ。

(ど)[駑](名) ㊀のろき馬。にぶき馬。㊁つたなきもの。おとれるもの。

(ど)[笈](名) 鷹を捕る具、竹を筒狀に編み、鷹の入りて出づるを得ざるやうに作れるもの。うへ。(笈)。

(ど)[度](名) ㊀長短。地積。㊁ものさし。さし。㊂はど。かぎり。「—を過ぐ」。㊃のり。きそく。㊄角の取位、即ち直角の九十分の一。㊅たび。かへり。「一數」。「往—」(回)。㊆ところ。時代。「安政—」。㊇樂器計に盛りたる目。㊈きりやう。品性。「深沈大—」。㊉【佛】生死を海にたとへ、煩惱を此岸とし證果を彼岸とし、煩惱を脱し生死の苦を出で、證果を得ると、又、佛門に入りて出家受戒すること。

(ど)[土](名) ㊀つち。とち。㊁領地。領分。「—を拓く」。㊂增界。場所。「樂—」。㊃住處。居處。「—に安んず」。㊄ふるさと。故郷。㊅とちの神。

ど(助)「ども」に同じ。「見れ—見えず」。

ど—(接頭) 或語に冠して、のゝしる意を表する語。「—めくら」。「—根性」。

—ど[所](接尾) ところ。場所。「あて—」。「目—」。

—どあさ[遠淺](名)「とほあさ」に同じ。

どーあひ[度合](名) ほど。はどあひ。程度。

ぢんぢ—**ぢんぢ**

ぢんぢ—**ぢんぢ**

ぢんぢ—**ぢんぢ**

ぢんぢ—**ぢんぢ**

ぢんぢ—**ぢんぢ**

ぢんぢ—**ぢんぢ**

ぢんぢ—**ぢんぢ**

ぢんぢ—**ぢんぢ**

と。㊁韓國に於て日本帝國政府を代表し、帝國駐劄外國代表者を經由する以外の韓國に於ける外國領事館及外國人に關する事務を統轄し、韓國の外國人に關係ある施政事務を監督し、韓國に於ける帝國官憲の政務を施行し、韓國の安寧秩序を保持するため必要なるときは、守備軍の司令官に兵力の使用を命ずる等の特權を有する官職、親任官にして天皇に直隸す、又、親しく韓國皇帝に內謁する權利あり。

(ざら-がん)[冬瓜](名)「とうぐわ」の訛。

(ざら-かん)[同感](名) 感ずる所の同じきこと。

(ざら-がん)[童顏](名) こどものかほ。としわかきときのかほ。「白髮—」。

(ざらかん-ふ)[統監府](名) 統監が事務を取扱ふ所、韓國京城に設けらる。——-はふむをん[ハ-ム]-[統監府法務院](名) 韓國に於ける理事廳の裁判に對する上訴を管轄する所、評定官三人を以て組織したる部に於て審問裁判す、檢察事務は檢察官とれを行ふ。——-れい[統監府令](名)【法】統監が其職權によりて發する行政命令、禁錮一年以下罰金二百圓以內の罰則を附することを得るもの。

(ざら-き)[登記](名)【法】權利・身分等に關する事項を、規定によりて登記所に設けたる公の帳簿に記載し其法律關係を確實にすること、即ち戶籍又は財產の登記等これなり、通俗には、財產の登記を專稱す。

(ざら-き)[臘貴](名) あたひのあがること、相場の高くなること。

(ざら-き)[投棄](名) なげすつること。はかすこと。

(ざら-き)[投寄](名) おくりやること。おくること

(ざら-き)[投機](名) ㊀機會に乘ずること。㊁確實なる成否の心算なき射倖的の行爲、成れば大利を博し、成らざれば大損を招く冒險的行爲。やま。㊂株券又は米穀の相場を利用し、現物を提供せずして取引をなすこと。さうば。

(ざら-き)[冬季](名) 冬の季節。(冬期)。「ふと。

(ざら-き)[鬪技](名) わざをくらべて其優劣を爭ふこと。

(ざら-き)[鬪議](名) 議論をたゝかはすこと。

(ざら-き)[同氣](名) あなじたぐひ。あなじなかま。——あひもとむ[同氣相求]「つは。類をもつて

(ざら-き)[銅器](名) あかがねを以て製したるうつわもの。

(ざら-き)[動機](名) ㊀意志活動を決定する意識的目的。㊁行動の目的要素、意志活動を決定する最も直接なる根底の原因。

(ざら-き)[動氣](名) 血液の循行急にして、心臟の鼓動烈しきこと。むなさわぎ。(動悸)。

ざら-き[胴脊](名) 上着と肌着との間に着る短き衣。

ざら-き[同義](名) 同じ意義。

ざら-き[動議](名) 其場に臨みて、討議に附せんため、一職員より意見を提出すること。

(ざら-きう[鬪牛](名) うしあはせ。

(ざらき-きうげふ[冬季休業](名) 年末より翌年頭(かけての一定の休業。ふゆやすみ。

(ざらき-げふ[投機業](名) 冒險的業務。射倖的業務。やまかた。と 又、相場師などの業務。

(ざらき-ぎやう[投機商](名) 投機業の商賈。又、其人。

(ざらき-ぎよ[登記所](名) 登記の事務を取扱ふ所、財產に關するものは區裁判所又は其出張所にして、戶籍に關するものは戶籍役場なり、通俗には財產に關するものをいふ。

(ざらき-ぼ[登記簿](名) 登記所に備へおきて登記する公の帳簿。

(ざらき-れう[登記料](名) 登記の手數料。

(ざらき-ふ[等級](名) きな。くらゐ。(階級)。——-せんきよ[等級選擧](名) 選擧者の財產額により等級を設けて、各等級によりて其中より議員を選擧せしむる制度、即ち一級選擧・二級選擧・三級選擧等これなり。

(ざらき-ふ[同級](名) あなじ等級。——-せい[同級生](名) 同一の等級に屬する生徒。

(ざらき-やう[同鄕](名) 同じ故鄕。あなじくに。——-くわい[同鄕會](名) 同鄕のもの、集會。「前の稱。

++ざら-きやう[童形](名) 昔時、貴人の元服以前の稱。

(ざら-きやう[同行](名) ㊀つれのもの。みちづれ。「一三人。㊁あなじ道の修行者。——-きやゆう[同行者](名) 同行のもの。なかま。——-きやう[同行衆](名) 同行の人々。

(ざらきやく-さんかくけい[等脚三角形](名)「とうへんさんかくけい」に同じ。

(ざら-きよ[統御](名) すべをさむること。すべとりきまること。「統馭」。

(ざら-きよ[同居](名) 共に一家に住むこと。一きよに住みあふこと。——-にん[同居人](名) 其家族にあらずして同居せる人。

(ざら-きよく[登極](名) 天皇の御位につかせ給ふこと。(即位、登祚)。

ざら-きり[胴切](名) つゝぎり。

ざら-きん[同衾](名) ともね。ひとつね。

ざら-きん[同勤](名) 同じ役を勤(つと)むること。同じ所に勤むること。又、其人。(同僚、同役)。

(ざら-ぐう[東宮](名) 皇太子のまします宮殿。

轉じて、皇太子の尊稱、はるのみや。みこのみや。ひつぎのみや。春宮。——-きき[東宮職](名) 宮內大臣の管理に屬し、東宮の宮事を管理し供奉・用度・營繕及主管に屬する會計を掌る所、大夫・主事・侍從長・侍從・侍講等の職員あり。——-きよく[東宮職](名) 前條に同じ。——-ぼう[東宮坊](名) 古昔、東宮の事を掌りしつかさ、大夫・亮・進・屬などの職員ありき。春宮坊。++——-ふ[東宮傅](名) 古昔、東宮を輔敎育申すためにおかれしつかさ。——-ぶくわん[東宮武官](名) 東宮に常侍奉仕し、儀式演習其他公然の儀式に屬從する武官。

(ざら-くつ)[洞窟](名) ほらあな。

(ざら-くわ)[燈火](名) ともしび。あかり。——-あたしむべし[燈火可親]「涼氣催(モヨ)して ともしびに近寄られるやうになる。

(ざら-くわ)[燈花](名) ちやうそくばな。

(ざら-くわ)[草科](名)【植】草本又は灌木若しくは喬木にして、葉は互生し概ね羽狀複葉をなす、等は五裂し花冠は不整齊花冠にして蝶形をなす、果實は概ね莢をなし稀に梭果を結ぶ、そらまめ・くず・ふぢ・はぎ・さいかち等これに屬す。

(ざら-くわ)[透過](名) とはりぬくること。又、すきとはること。

(ざら-ぐわ)[冬瓜](名)【植】葫蘆科に屬する草、葉は大形にして掌狀に分裂し、花冠は黃色にして五裂す、果實は大形白色にして食用に供せらる。(白瓜、水芝、地芝)。「ると。

(ざら-くわ)[同和](名) わつまじきこと。よく一致す

(ざら-くわ)[銅貨](名) 銅にて鑄造したる貨幣。

(ざら-くわ)[同化](名) ㊀動物が食物を消化してその體質となすこと。又、植物が攝取したる無機物を有機物となすこと。㊁【心】舊觀念が新觀念を類化すること。又、意識中の諸要素を結合すること。㊂繼きたる講義又は讀みたる書物の意義をよく了解して、これを自己の知識となすこと。㊃自己と異性質たるものを自己と同性質のものとなすこと。——-さよう[同化作用](名) 同化するはたらき、「植物の—」。

(ざら-ぐわい)[同化力](名) 同化する能力。

(ざら-ぐわい)[等外](名) ㊀等級の外。㊁明治十九年以前に、判任官の下の官吏。

(ざら-くわう[透光](名) すきとはるひかり。

(ざら-くわう[燈光](名) ともしびのひかり。

(ざら-くわう[銅鑛](名) 銅を含有する岩石。

(ざら-くわつ[統括](名) 個々のものをすべて一つにくゝること。すべくゝること。

(ざら-くわん[洞貫](名) ぬけとはること。又、ぬきとはすこと。

(ざら-くわん[洞觀](名) ㊀事物の未來又は根底をみぬくこと。㊁普通の思考推理によらず、直接に其眞理を覺知すること。

(ざら-くわん[同官](名) あなじ官職。

(ざら-くわん[同家](名) 同じ家族。同一の家族。

(ざら-けい[燈檠](名) ともしびをのせむる臺。とうだい。

(ざら-けい[鬪雞](名) けあひ。とりあはせ。

(ざら-けい[統系](名) すぢみち。すぢ。

(ざら-けい[統計](名) ㊀ひきくるめて併(ア)せ數(Statistic)。同一範圍に屬する個々の現象をあつめ、數字計算によりて其狀態を表示すること。——-がく[統計學](名) 統計に就きて研究する科學。——-きよく[統計局](名) 行政各部の統計の統一、行政各部に屬せざる統計、其他統計に關する事務を取扱ふ內閣の一局。

(ざら-けい[同慶](名) 同一によろこばしきこと。同一にめでたきこと。

(ざら-けい[同形](名) かたちのあなじきこと。

(ざら-げき[撞擊](名) つきうつこと。

(ざら-けつ[洞穴](名) ほらあな。

(ざら-げつ[冬月](名) ㊀ふゆ。冬季。㊁冬の夜の月。「こと。「偕老—」。

(ざら-けつ[同穴](名) 死して同じ穴に葬らるゝこと。

(ざら-げつ[同月](名) あなじ月。

(ざら-げふ[同業](名) あなじ職業。あなじ營業。又、其人。——-きや[同業者](名) 同業の人。

(ざら-げふ-くみあひ[同業組合](名) ㊀【法】一地方に於ける重要なる物產の產出・製造乃至販賣を營業とする者若しくはこれと密接なる關係を有する營業者が、一定の規定に基きて組織する組合、協同して營業上の弊害を矯正し利益を增進することを目的とする法人なり。㊁すべて同業者によりて組織せられたる組合、即ち、理髮組合・湯屋組合等の如きものにして法人にあらず。——-れん[同業組合聯合會](名)【法】二つ以上の同業組合が、相互の氣脈を通じ、其目的を達するために設置したる法人。

がふくわい[ハ-ヨ]

(ざら-けん[洞見](名) みぬくこと。「男女—」。

(ざら-けん[同權](名) 權利の相互相同じきこと。

(ざら-けん[同縣](名) あなじ縣下。「一人」。

(ざら-こ[投壺](名) つぼうち。つぼなげ。

(ざら-こ[銅壺](名) 銅にて造りたる中空の器、篇の側壁の中に塗り込め、若しくは火氣あるもの、傍に置き、其中に入れたる水のあのゲから沸く仕掛

のもの。近来は鐵にてつくりたるものをもいふ。銅[管]。

(ざう-とう)[筒口](名) つゝのくち。

(ざう-とう)[瞳孔](名)【生】虹彩にて圍まれたる眼球内の小孔、光線の強弱に應じ虹彩伸縮して瞳孔を或は狹め或は廣む。「曲—」

(ざう-とう)[同工](名) たくみのあなじきと。「異—」

(ざう-どく)[東國](名) ㊀東方のくに。㊁あづま。くわんとう。

(ざう-とく)[同國](名) あなじくに。「と。

(ざう-とく)[慟哭](名) 聲をたてゝなきさけぶこと。

(ざう-とつ)[頭骨](名) 頭部を構成する骨。あたまのほね。

ざうと-のふで[董狐筆](名)《董狐は春秋時代の晉の大史の名にして、趙盾が時の上卿たるにも係ちず、「趙盾弑其君」と書せし故事に出づ》勢威にあそれず事をありのまゝに記すること。

(ざう-とん)[痘痕](名) もがさのあと。あばた。

(ざう-さ)[等差](名) 差なし。わかち。ちがひ。

(ざう-さ)[動作](名) ㊀身體手足の運動。はたらき。たちゐ。ふるまひ。「進退—」(所作)。㊁【倫】道德的意識を有するものが、意識的になしたるはたらき、即ち善惡批判の對象となるもの。

ドウサ[礬水](名) ㊀明礬を溶解したる水。㊁明礬を溶解したる水に膠を和したるもの、紙に延(と)きて、墨・繪具などの擴散を防ぐと。「と。

(ざう-ざ)[動座](名) 貴人の居所を他へ移さゝ

(ざう-ざ)[同座](名) ㊀あなじ茣蓙の席。同席。者」。㊁あなじ集會の席。同席。

(ざう-ざ)[同坐](名) かゝりあひ。まきぞへ。

(ざう-さい)[登載](名) かきのすると。

(ざう-ざい)[東西](名) ㊀東と西と。㊁むき。方向。「—がわかぬ」。㊂興行物などにて、見物の鳴りを鎰(ジ)むるとき又は口上を演ぶるときなどにいふ語、もと相撲(スマ)の東西に始まるといふ。㊃身うごき。「袖を捉へて—をさせず」。——**ざうざい**[東西東西](名)《東西を重ねたる語》前條(三)に同じ。{——**や**[東西屋](名) 人に屋(ト)はれて諸方の辻などに立ち、廣告の口上をのぶるもの。「の。

(ざう-ざいく)[同罪](名) あなじつみ。

ざう-ざいく[藤細工](名) 籐の幹を材料として細工すると、又、其細工物。

(ざう-さう)[鬪爭](名) あらそひ。たゝかひ。

(ざう-さう)[痘瘡](名) はうさう。

(ざう-さう)[凍瘡](名) ㊀もがさ。

(ざう-さう)[同窓](名)《同じ窓下にて學ぶ義》共に同じ學校又は同じ師匠の許にて學問すること。

(ざう-ざう)[銅係](名) 銅にて鑄造したる官どうがく。——**くわい**[同窓會](名) 同窓たりし人々の會。「僕。

(ざう-ざう)[荳草類](名) 家畜の芻草となす雲雷英・胡枝子等の總稱。

ドウサ-がみ[礬水紙](名) 表面に「ドウサ」を延(と)きたる紙、圖畫などをかくに用ふるもの。

(ざう-さ-さふすう)[等差級數](名)【數】順次の項の差が常にひとしき級數、例へば5,7,9,11の如し。

(ざう-さ-さんにく)[動作筋肉](名)【生】動作するときの筋肉の狀態、即ち動作するときには、筋肉收縮して起點に近づき中部膨大するものなり。

(ざう-さく)[同作](名) ㊀あなじ人の作。㊁じかたの作。「ぬくと。

(ざう-さつ)[洞察](名) あきらかに見やぶること。みもしびのあぶらざら。

(ざう-さ)[燈盞](名) ㊀ひがしのやま。㊁とうさんだう」の略言。——**たう**[東山道](名) 八道の一、近江・美濃・飛彈・信濃・上野・下野・陸奥・岩代・陸前・陸中・陸奥・羽前・羽後の十三個國の總稱。

(ざう-さん)[動產](名)【法】土地及其定着物即ち所謂不動產以外の有體物、其性質・形狀等を變化せずして移轉せしむることを得るもの。——**ぎんかう**[動產銀行](名) 動產の擔保に對して資金を供給することを目的とする銀行即ち興業銀行の如きこれなり。——**ぎち**[動產質](名)【法】動產を質權の目的物となしたること。

(ざう-ざん)[銅山](名) 銅を出だす山。

(ざう-ざ)[凍死](名) こゞえ死に。「ふと。

(ざう-ざ)[鬪詩](名) 詩をつくりて互に優劣を爭

ざうじ[刀自](名)《戶主の轉》「とじ」に同じ。

ざうじ[刀自](名)《醴酒家に屋はれて、專ら酒を醴すことをつかさどるもの。「杜氏、酒家保」。

(ざう-ぢ)[冬至](名) 二十四氣の一、陽曆にては毎年十二月二十二日頃にして即ち太陽が冬至點に達する時なり、北半球にては夜最も長く晝最も短し、南半球にてはこれに反す、陰曆にては十一月末にあたり、古來此日より春氣にかゝるとて、一陽來復と稱し節日として觀ひたり、若し朔旦にあたれば、特に瑞祥として朝廷に公事ありき。

(ざう-ぢ)[動詞](名)【文法】事物の動作を表する語、其語尾の變化するもの、例へば「花咲く」「空晴る」「机あり」の「咲く」「晴る」「あり」の類にして、其變化に正格・變格の二樣あり、正格は四段活用・上二段活用・下二段活用・上一段活用・下一段活用に分れ、變格は「かゝ行變格・さ行變格・な行變格・ら行變格・わ行變格」の五種に分る。

—ざうし(接尾)《「ども」の轉》なかま。つれ。「友達—」。

(ざう-ぢ)[同志](名) 志を同じうすること、又、其人。

(ざう-ぢ)[瞳子](名) ひとみ。瞳孔。

(ざう-ぢ)[動止](名) ㊀うごくことゝまること。㊁たちゐ。ふるまひ。

(ざう-ぢ)[同視](名) 同一のものとみなすこと。

(ざう-ぢ)[同次](名)【數】多項式の各項の次數相同じきこと。

(ざう-ぢ)[同時](名) あなじとき。あなじ時代。

(ざう-ぢ)[同事](名) あなじことがら。

(ざう-ぢ)[童子](名) わらべ。こども。「兒童」。

(ざう-ぢう)[銅臭](名)《後漢の崔烈錢五百萬を入れて司徒の官に登りたるとき、其子鈞に世評の如何を問ひしかば、鈞が論者樣「北銅臭」と對へたる言に出づ》財貨によりて成功し又は財貨を貪り若しくは財產を誇る氣習にいふ語。かねくさい。

(ざう-ぢう)[同舟](名) あなじ舟にのりあはすこと。又、其もの。——**あひすくふ**[同舟相救]同一の危難にあふものは、見ず知らずのものも互に助けあふ情あるにいふ。

ざうぢうめ[冬至梅](名)【植】梅の一種、冬至の頃に咲くもの。とうぢばい。

(ざう-ぢうみ)[同臭味](名)《あなじくさみの義》あなじなかま。同類。

ざうぢがうぢ[童子格子](名)《古昔、丹波國大江山に棲みたりといふ酒顚童子の衣服の模樣に出づ》子持筋のある太き格子縞。

(ざう-ぢき)[等式](名)【數】等號を以て二つの式又は一つの式と一つの數とを結びたるもの、例へば $3x+6=2x+9$ 若しくは $3+8=11$ の如きこれなり。

(ざう-ぢわ)[透視畫](名) 物體を遠近に從ひて眼に映ずる大さの割合に畫く法。

(ざう-ぢき)[同次式](名)【數】すべての項が同次なる整式の稱、例へば $a^2+2ab+b^2$ は二次の同次式にして、$p^3+3p^2q+3pq^2+q^3$ は三次の同次式なり。

(ざう-ぢや)[同志者](名) 同志のもの。

(ざう-ぢせい)[等時性](名)【理】等(ト)しき時間に等しき運動を行ふと、例へば螺旋の振動の如きこれなり。

(ざう-ぢせん)[冬至線](名)【天】南回歸線に同じ。(回歸線の條を見よ)。

(ざう-ぢつ)[同室](名) 同一の室にゐること。

(ざう-ぢつ)[同質](名) 同一の成分。又、同一の物質。——**いざう**[同質異像](名)【鑛】同一物質にして互に結晶を異にするもの。——**いせいたい**[同質異性體](名)【化】同物質にして互に性質を異にするもの、例へば「オゾーン」は酸素の變態なれど、酸素に比すれば遙かに活潑なるが如きこれなり。

(ざう-ぢつ)[同日](名) あなじ日。又、その日。——**のろん**[同日論](名) 彼此の間に差別を立てず、同樣に看なして論ずること。

(ざう-ぢつ-たい)[等質體](名)【理】物質分布の割合が何れの方向にも等(ト)しき物體、水・「ガラス」の如きこれなり、木片などは等質體にあらず。

(ざう-ぢて-ん)[冬至點](名)【天】黃道上赤道以南の最も遠き點、太陽の此點に至る日は即ち冬至なり。

+ざう-ぢみ[蹬心](名)「とうぢん」の訛。「り。

(ざう-ぢめ)[胴締](名) 胴を去むるに用ふるもの。

(ざう-ぢや)[投射](名)【理】一の物質内に於て、他の物質との境界面に波動の達すること。(入射)。

(ざう-ぢや)[投舍](名) やどること。とまること。「と。

(ざう-ぢや)[謄寫](名) 書きうつすこと。かきとる

(ざう-ぢや)[同車](名) 共に一つ車に乘ること。

(ざう-ぢや)[同舍](名) ㊀同じき舍。㊁同じき舍にすみ又はやどること。

ざう-ぢや[礪砂](名)《「でうぢや」の轉訛》【化】鹽化「アムモニウム」に同じ、動物の糞などより製す、鹽に似て白し。

(ざう-ぢや-う)[凍傷](名) ㊀もがさ。「る。

(ざう-ぢや-う)[痘漿](名) はうさうのうみ。

(ざう-ぢや-う)[銅匠](名) 銅の製作の職人。

(ざう-ぢや-う)[同性](名) 性分の同じきこと。

(ざう-ぢや-う)[同上](名) 上にある物事と同一なること。

(ざう-ぢや-う)[同情](名) 他人の境遇狀態等をおもひやりてこれに情を寄すること。

(ざう-ぢや-う-くわ)[筒狀花](名)【植】菊花の如く、中心に筒(ツ)の狀をなす花をつくるもの。

(ざう-ぢや-う-くわ)[頭狀花](名)【植】菊花の如く數多密集して、大きく頭(カシラ)の狀となれる花軸上に着生せる花の稱。

(ざう-ぢや-かく)[投射角](名)【理】投射線と投射點に於ける法線とのなす角。

ざうぢや-せい[礪砂精](名)【化】礪砂を精製して其鹽素を去りたるもの。

(ざう-ぢや-せん)[投射線](名)【理】波動が一の物質より他の物質に向つて進む方向。

(ざう-ぢや-てん)[投射點](名)【理】投射線が第

（そうちゃくしょう）【着衣】（名）身にまとう衣服。

（そうちゃくしょく）【着色】（名）❶色をつけること。❷（比喩的に）ある事柄に対して、ある特定の意味を与えること。

（そうちゃくする）【着する】（サ変）❶ある場所に到着する。❷（比喩的に）ある事柄に対して、ある特定の意味を与える。

（そうちゃくせん）【着船】（名）船が港に入ること。

（そうちゃくせんきょ）【着船渠】（名）船を修理するために、船を陸に上げておくための施設。

（そうちゃくだい）【着台】（名）❶着物を掛けておくための台。❷（比喩的に）ある事柄を行なうための場所。

（そうちゃくだま）【着弾】（名）弾丸が目標に命中すること。

（そうちゃくだまけいしゃ）【着弾距離】（名）弾丸が目標に命中するまでの距離。

（そうちゃくだまはんい）【着弾範囲】（名）弾丸が目標に命中するまでの範囲。

（そうちゃくちゅう）【着陸】（名）飛行機が地上に降りること。

（そうちゃくちゅうしゃ）【着陸者】（名）❶着陸した人。❷（比喩的に）ある事柄を行なった人。

（そうちゃくちゅうしゃ）【着陸車】（名）着陸した車

的を達するため命令し強制すること。「大日本帝國は萬世一系の天皇これを—す」。——**きくわん**[統治機關](名)【法】統治者が統治を行ふために設置使用する機關、即ち統治の機關、我國にては、帝國議會・裁判所・國務大臣其他國家の事務に從事するものすべてこれなり。——**けん**[統治權](名)【法】國家を統治する權力、其主體は、我國にては天皇にして、其客體は何れの國にても國土臣民なり、すべて統治機關によりてこれを行使す、其作用の形式は、我國にては、大權・立法・司法・行政及其他の國家行爲なり。——**ぬや**[統治者](名)國土臣民を統治するもの即ち統治權の主體。

(**ぞう-ち**[同値](名)【數】二つの一次方程式又は二組の聯立方程式の未知數の値が相等(ヒ)しきこと。

(**ぞう-ち**[動地](名)大地をうごかすこと。轉じて、大いに世をゆるがすこと。「驚天—」。

(**ぞう-ち**[同地](名)あなじ土地。「等しきこと。

(**ぞう-ちく**[等軸](名)【鑛】結晶體の軸の長さの「等しきこと。

(**ぞう-ちやう**[同町](名)あなじまち。又、あなじ町目。

(**ぞう-ちやう**[登場](名)舞臺などに出てあたること。㊁前後相一致せざること。

(**ぞう-ちゆう**[銅柱](名)あかがねのはしら。

(**ぞう-ちよ**[童女](名)をみなのこども。

(**ぞう-つう**[疼痛](名)うづきいたむこと。

(**ぞう-つう**[頭痛](名)づつう。

(**ぞう-つう**[洞通](名)ぬけとほること。

ぞう-づき[胴突](名)《土突(ドヅク)の轉》建築する場所をつきかたむること。ぢきやう。ぢかため。

++**ぞう-で**[取出]「とりいで」の音便と略言。

(**ぞう-で**(副)どうした所が。どうせ。つまり。

(**ぞう-てい**[登程](名)出ゆっぱつ。ほっそく。

(**ぞう-てき**[投擲](名)なげうつこと。

(**ぞう-てつ**[透徹](名)すきとほること。

(**ぞう-てつ**[洞徹](名)ぬけとほること。

(**ぞう-でも**(副)如何しても。どうしても。

(**ぞう-てん**[登天](名)天上にのぼること。

(**ぞう-てん**[冬天](名)ふゆのそら。「めのそら。

(**ぞう-てん**[東天](名)㊁ひがしのそら。㊂出のの東に點數のあなじきこと。

(**ぞう-てん**[同點](名)共に點數のあなじきこと。

(**ぞう-てん**[動天](名)天をうごかすこと、即ち狀勢の極めて盛大なること。

(**ぞう-でんき**[動電氣](名)【理】流動せる電氣即ち電流。靜電氣の對。

(**ぞう-てん-とう**[東天紅](名)《東の空が紅になりて白む雞鳴の鳴く聲。

(**ぞう-でんりよく**[動電力](名)【理】でんどうりよく」電動力に同じ。

(**ぞう-と**[同途](名)あなじみち。

(**ぞう-ざ**(副)ものゝ倒るゝさまにいふ語。「語。

(**ぞう-ざ**[鼕鼕](名、副)太鼓のひゞきにいふ語。

(**ぞう-ざ**[疾疾](副)「とくとく」に同じ。「一鎌倉(「語源)。

ぞう-ざ-ぞう(名、副)水の流れ落つるさまにいふ語。

(**ぞう-ざ**(副)終に。遂まひに。果は。到頭。

(**ぞう-ざ**[同等](名)同じ品等。同じ程度。同じ等級。——**くわん**[同等官](名)等級のあなじき官職。

ぞう-ざ(名、副)「とうとう」に同じ。(語源)。

ぞう-さ-たらり(名)鼓の譜にいふ語。

ぞうぞう-めぐり(名)㊁一種の遊戯、多くの人の圓狀をつくりて一所をぐるぐるめぐること。㊂小兒の遊戯、直立して開手を左右に伸ばしなどしながら、目を閉ぢて身をぐるぐると旋(モ)ちすること。

(**ぞう-さく**[童督](名)つかさどりとり志まること。

(**ぞう-さく**[統督](名)すべとり志まること。

ぞう-ざり[頭取](名)銀行又は組合などにて、其代表者となり業務執行の任にあたるもの。かしら。

ぞう-ざり[筒取](名)博奕の座をかして、其出來高の歩合を取ること。「し。

++**ぞう-ね-し**(ぞうしき、[動無](形、一)動ずるもやうな

++**ぞう-ねり-かう-ねり**(副)辛うじて。やっと。

(**ぞう-ねん**[東南](名)ひがしみなみ。たつみ。

(**ぞう-ねん**[童男](名)「どうだん」に同じ。

ぞう-に[疾](副)「とくに」の音便。

(**ぞう-によ**[童女](名)をんなのこ。めのわらは。

(**ぞう-にん**[頭人](名)かしら。をさ。「少女。

(**ぞう-にん**[同人](名)㊁同じ人。其人。㊂なかま。ともがら。

(**ぞう-ぬき**[胴抜](名)下着などを胴だけ別の布帛にて仕立つること。又、其仕立の衣服。

(**ぞう-ねん**[同年](名)㊁同じ年。そのとし。㊂同じよはひ。

(**ぞう-ねん**[童年](名)いとけなきこと。

++**ぞう-のちゆう-おやう**[頭中將](名)古昔、藏人頭にて近衛の中將を兼ねたる官。

++**ぞう-の-べん**[頭辨](名)古昔、藏人頭にて辨官を兼ねたるもの。

ぞう-の-ま[胴間](名)和船の中央の室。

ぞう-は[同派](名)あなじ派。(語源)。

(**ぞう-はい**[等輩](名)なかま。ともがら。

(**ぞう-はい**[同輩](名)同じやから。同じ地位の

もの。ともがら。

(**ぞう-はう**[東方](名)ひがしのかた。

(**ぞう-はう**[同邦](名)あなじくに。

(**ぞう-はう**[同胞](名)㊁はらから。兄弟。姉妹。㊂同一國民。「五千萬の—」。

(**ぞう-ばう**[同房](名)へゝを同じくすること。

(**ぞう-ばう**[洞房](名)㊁ねや。ねどこ。㊂遊女屋。女郎屋。

(**ぞう-ばう**[童坊](名)足利義滿のとき、執事細川頼之が、將士の間に廢恥の氣風を養成し諂諛の弊を絶たんため、俳優の徒を剃髮せしめて、將士の間に周旋せしめ、多くのものゝ玩弄物となして其醜態を見せたるもの。「蓑坊、俵坊」。

(**ぞう-はう-たい**[等方體](名)【理】何れの方向へも物理的性質の等(ヒ)しき物體。「ガラス」・水・空氣等の如きこれなり。

(**ぞう-はう-もんだい**[東方問題](名)東方に於ける國際關係の問題。

(**ぞう-はう-ゐかく-せん**[等方位角線](名)【地】地圖上、磁氣子午線の方位角の等しき點を連ぬる線。

(**ぞう-はう-ゐ-せん**[等方位線](名)【地】前條に同じ。

(**ぞう-はふ**[同法](名)㊁あなじつみ。

(**ぞう-はふ**[同法](名)㊂あなじのり。

(**ぞう-はち**[銅鉢](名)次條に同じ。

(**ぞう-ハチ**[銅鉢](名)僧侶が鐘經のときにうちならす銅鑼の具。

(**ぞう-はん**[同藩](名)あなじ藩中。

(**ぞう-はん**[同班](名)あなじくみ。あなじ列。

[チハうど]

(**ぞう-はん**[同伴](名)同行。道づれ。(同道)。

(**ぞう-ばん**[銅版](名)一種の印刷版、面の平滑なる銅の板に蠟を塗抹し、其上に印刷せんとする文字又は圖畫を針の尖端にて彫(ホ)り、これに硝酸を注ぎて蠟なき部分即ち針端によりて彫りたる文字・圖畫の痕を腐蝕してつくりたるもの。

(**ぞう-ばん**[銅盤](名)かなだらひ。

(**ぞう-ひ**[等比](名)【數】二つの比の等しきこと。——**きふすう**[等比級數](名)順次各項の比が常に等しき級數、例(ばa,ar,ar²,ar³,ar⁴の如し。——**のり**[等比理](名)【數】二群の量ありて、各群の第一の量と第二の量との比相等しく、又、各群の第二の量と第三の量との比相等しく、以下最後の量に至るまで皆なかの如きときは、各群の第一の量と最後の量との比は相等しといふ原則。

(**ぞう-ひ**[橙皮](名)橙(ダイダイ)の皮を乾したるもの、藥用に供す。——**ゆ**[橙皮油](名)橙皮より採取したる油。

(**ぞう-ひつ**[同筆](名)同じ人の筆蹟。

(**ぞう-ふ**[豆腐](名)一種の食品、水に浸(ヒ)したる大豆を磨(ヒ)き碎き、其液を煮(ニ)、これを袋に入れて搾(ガ)り、滓を去りて固(カタ)まらせたるもの。「豆腐滓」。——**がら**[豆腐滓](名)豆腐を搾りたるかす。きらず。うのはな。

(**ぞう-ぶ**[頭部](名)かしらの部分。

(**ぞう-ぶ**[胴部](名)胴の部分。

(**ぞう-ぶ**[童舞](名)わらはまひ。

(**ぞう-ふう**[東風](名)㊁ひがしのかぜ。こち。㊂はるかぜ。春風。「—」。

(**ぞう-ふう**[同風](名)おなじならはし。「千里の風俗をつくりて一所をぐるぐるめぐること。

(**ぞう-ふく**[同腹](名)㊁同一の人の腹より生まれたること。又其もの。はらから。(同母)。㊂同じかんがへ。同じたくらみ。——**ちゆう**[同腹中](名)前條(二)に同じ。

(**ぞう-ふくかく-せん**[等伏角線](名)【地】地圖上、磁針の伏角の等しき點を連ねたる線。

(**ぞう-ふく-せん**[等伏線](名)【地】前條に同じ。

ぞう-ふくら[胴脹](名)腹端狹(セバ)くして中部の膨(フク)れたるもの。

ぞう-ふくれ[胴脹](名)前條に同じ。

(**ぞう-ぶつ**[動物](名)生物の一、自由に運動し、知覺を有するもの、營養を流體のみならず固體にも取れど、無機物を有機物に同化する力なし。鑛物・植物の對。——**かい**[動物界](名)自然界に於て動物と名づけらるゝもの、範圍。——**がく**[動物學](名)動物界に於ける諸種の狀態・事項を研究する科學の總稱、動物の內部の構造を研究するを動物解剖學といひ、動物の外部の形態を研究するを動物形態學といひ、動物の諸器官の作用を考察し其生活の原理を研究するを動物生理學といひ、系統を立て、動物の區別を研究するを動物分類學といひ、動物の發生に就きて研究するを動物發生學といふ。——**がん**[動物岩](名)【鑛】動物體の沈積又は變化によりて成りたる岩石。——**きつ**[動物質](名)動物體を組成する物質。——**そうはい**[動物崇拜](名)或動物を靈なるものとなしてこれを崇拜すること。——**たい**[動物體](名)動物と稱する物體。——**でんき**[動物電氣](名)動物の具有する電氣。——**ぶん**[動物園](名)いろ〳〵の動物をやしなひかゝくこと。

ぞう-ふるひ[胴震](名)全身震ひわなゝくこと。

ちゅう[回文](名)五文字を一つ置いて、同じ文字を置くこと。

ちゅう[回分](名)❶[数]二つ以上の分母を通分すること。❷[数]二つ以上の分数を通分すること。❸[数]二つ以上の分数を通分すること。

ちゅう[回目](名)かしら。さき。

ちゅう[回目](名)❶回目。❷[数]二つ以上の分数を通分すること。

ちゅう[回文](名)[言]前から読んでも後から読んでも同じ文

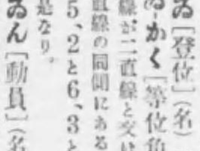
或事實の公證となるもの。——**いたやう**[登錄意匠](名)登錄の手續を經(ヘ)たる意匠。——**ものへう**[登錄商標](名)登錄の手續を經たる商標。——**せい**[登錄稅](名)官府が公の帳簿に或事實の登錄を請ふものより徵收する料金。

(**どう-ろん**[同論](名) おなじ議論。

{**どう-わすれ**[胴忘](名) 不圖忘却して、いかにしても思ひ出だされぬと。

(**さう-ゐ**[登位](名) 君主の位につかせたまふと。

(**さうゐ-かく**[等位角](名)【數】一直線が二直線と交はるとき、各の直線の同側にある角、即ち1と5、2と6、3と7及4と8是なり。



[くかゐうと]

(**どう-ゑん**[動員](名) 在鄉軍人を召集し、軍隊の平時の編制を變じて戰時の編制となすこと。——**けいくわく**[動員計畫](名) 動員を行ふ準備。——**れい**[動員令](名) 在鄉軍人を召集して軍隊の動員を行ふ命令。

(**どうをん-せん**[等溫線](名)【地】地圖上、等(ヒ)しき溫度の點を連ねたる線。

(**どう-えう**[土曜](名) ㊀七曜の條を見よ。㊁土曜日の略言。——**おつ**[土曜日](名) 一週の最終日、即ち日曜日より第七番目の日。——**び**[土曜日](名) 前條に同じ。

(**どう-えん**[度緣](名) 古昔、官より僧尼となるとを許可して、其人に與へたる文書、どてふ。

(**どう-か**[都下](名) 都の內。みやこ。

どが[梅](名)【植】松杉科に屬する木、瑞は常綠にして圓長なり、蕊果は扁平にして下垂し成熟して果鱗脫落す、木理細かくして種々の用に供せらる。——**とがむべき所行**。あやまち。㊁惜すべき缺點。きず。

(**どが**[都雅](名) みやびやか。えとやか。

(**どが**[駑下](名) にぶきと。あとなると。

(**どが-い**[渡海](名) 船にて海を渡ると。(航海)。

(**どが-い**[蠹害](名) ㊀むしばむこと。むしくふこと。㊁そこなひ害すること。

(**どが-かい**[土階](名) つちのきざはし。

(**どが-かい**[土芥](名) つちあくた。轉じて、ねうち なきもの。

(**どが-かう**[都講](名) 首座の塾生。學生の長。塾頭。

(**どが-かう**[杜舊](名)【植】「つぶねぐさ」に同じ。

(**どが-かう**[徒行](名) あゆみゆくこと。かちにて ゆくこと。かちあるき。「徒歩」。

(**どが-かう**[渡航](名) 船にのりて海を渡ること。

(**どが-かう**[左右](副) 「とかく」の音便。「—ためらひて」。

(**どが-かう**[士答](名) あなぐら。

(**どが-かう**[怒號](名) ㊀いかりさけぶこと。㊁風又は波の烈(ハ)しき音のするといふ語。

(**どが-がう**[士豪](名) 《斗播の義》桁に穀類を盛りてこれを桁の緣なみに平均するに用ふる棒。ますかき。かいならし。《斗槩》。

どが-かく[左有冤角](名) 《角角亀毛》の義》妄想より起る現象にして、實際とかめの毛との義》妄想より起る現象にして、實際にあちざるにいふ語。「如—常无」。

(**どが-かく-きもう**[冤角亀毛](名)

どが-かげ[蜥蜴](名) 《百隆に榎むの義》【動】蜥蜴類に屬する爬蟲、四脚にして長さ六七寸許、舌短し、尾は切れ易けれどもまた再生し易し、石垣の穴隙などに榎(ス)み細蟲を捕食す。(蠑螈、石龍子)。——**いろ**[蜥蜴色](名) 蜥(ヲ)を淺黃又は黃褐に染め鮮(コヨ)を赤く染めたる織色。

++**どが-かげ**[常陰](名) いつも日かげのさゝざる所。「山の—に鳴く鹿」。

どか-す[溶](他、さ四) ㊀或液體內に他の物質をひろがらす。「砂糖を水に—」。㊁鎔解せしむ。ゆるむ。「氷を—」。㊂鎔解せしむ。とらかす。「鐵を—」。

{**どか-す**[解](他、さ四) とけ散らしむ。とけ離れしむ。「帶を—」。「髮を—」。

++**どか-た**[枓](名) 《斗形の義》柱の上にむく方形の木。ますがた。

どか-た[外方](名) そとの方。そと。

どか-た[土方](名) 地を掘り又は土を運びなどする勞働者。

++**どか-ち**[兎褐](名) 兎(ウサ)の毛と絲とを混(ア)ぜて織りたる織物。

{**どか-どか**(名、副) 物事の急にあつまり來るさまにいふ語。「びと」。

どが-にん[答人](名) とがある人。罪ある人。つみびと。

++**どか-へり-の-はね**[十返花](名)【植】松の花、松は百年に一度、千年に十度、花咲くといひて、稀貴の意に用ふる語。「ひさにへん友とや君に契るちん十か〳〵りの松の花のきくまで」。「〳〵かま。

どが-ま[利鎌](名) 切味のするどき鎌。よくきる。

どが-ま[土竈](名) 「どがまずみ」の略言。——**ずみ**[土竈炭](名) 竈の蓋(ク)を閉きむきて燒きたる炭、鹽(モ)くして火燼(コ)りやすし。

どが-がまへ[外構](名) そとがまへ。

どが-かみ[楣](名) 門扉(ムラ)の上に橫にわたしたる木、ねずみばしり。ねずみばしり。

どが-む[苫](他、ま下二) ㊀なじる。せむ。たゞす。「尤」。㊁にくむ。きらふ。いむ。㊂贈物を刺擊して、ためにいたみを增し憔をたかむ。

どがめ[苫](名) ㊀にくみ。うらみ。㊁つみ。あやまち。㊂そしり。非難。㊃わざはひ。災難。「天より—を降す」。——**る**(他)「とがむ」の訛。

{**どがらか-す**[尖](他、さ四) とがるやうにす。とがらしむ。

{**どがら-す**[尖](他、さ四) 前條に同じ。

どがり[尖](名) とがると。又、とがりたるさき。——**がほ**[尖顏](名) 口さきをとがらして怒れるかほつき。——**や**[尖矢](名) やだりのするどき矢。

++**どが-り**[鳥狩](名) 鳥を狩(カ)ること。

どが-る[尖](自、ら四) 端するどくはそる。

どき[間](名) ㊀昔時、戰の始まりに兩軍互に聲を發せし聲、大將「えいえい」と掛聲をなせば、軍勢一同が「あう」と聲を合はす、これを行ふこと三度なりといふ、又、戰に勝ちて後、凱旋の酒宴あるとき、大將右手に腦槽を取り左手に扇子を開きて頤(ア)ぎながら發聲するに、諸軍勢一同の聲を合はすを勝鬨といふ、其式戰の始まりに於けるものと同じといふ。㊁轉じて、多人數のものが、一度にどつと揚(ア)でる聲(餘波)。——**をつくる** ときの聲をあぐ。

どき[時](名) ㊀光陰の移り行く間、即ち時間。㊁一晝夜の區分の稱、現今は、子夜より正午までを十二分し、午前何時とかぞへて、一時より十二時に至り、又正午より子夜までを十二分し、午後何時とかぞへて、一時より十二時に至る。昔時は、子夜を九つと立て、正午までを六分して、八つ・七つ・六つ・五つ・四つと逆算し、又、正午より子夜までを六分して前

[と き(二)]

と同じく逆算す、此法は日出・日沒を基として明け六つ暮れ六つと定むるが故に、晝夜の長短に從ひて一時の長さ同じからず、又これに十二支を配當して晝夜中を子と定め、丑・寅・卯と數へて午に至れば晝となり、以下順次亥の刻に至る。㊂年代、世。㊃其頃、當時。「—の大臣」。㊄をり。ころ。㊅程よき去は。好機會。㊆刻限、期限。「—を過たず」。㊇季節。時季。「—のもの」。㊈世運、時勢。「—を知らず」。㊉時めくほど。さかゆるをり。㊊【文法】動詞及助動詞の過去・現在・未來の區別。㊋時の去らせ、即ち時鐘・時太鼓の類。「—を打つ」。——**にあふ** 好運に出あふ。——**にあたがふ** 時勢に出たがふ。——**はかねなり** 時を空しく過ごさずしてよく勉強するは、富貴成功の基なりといふ語。——**をつくる** 雞鳴きて夜明の時を知らす。

どき[齋](名)【佛】僧家にて、食事の稱、正午を過ぎざるを法とし、午後のを非時(ヒ)といふ。

どき[鴿](名) ㊀【動】鴿食類に屬する鳥、嘴長くして角質なり、眼の周圍は露出す、足もまた長くして趾間に小膜あり、形態に似、背部灰色にして、翅の裏は淡紅色なり。「朱鷺、桃花鳥」。㊁「ときいろ」の略。

(**どき**[菫葵](名)【植】「いへれ」に同じ。[言]。

(**どき**[姤忌](名) ねたみいむと。

どき[側](名) ㊀相手となりて機嫌をとること。又、其事をなす人。㊁看護すること。又、看護人。

どき[砑](名) とぐと。みがくと。

(**どき**[土器](名) 素燒のやきもの。カハラけ。「い。

(**どき-あかし**[怒氣](名) 怒りたる意氣。

どき-あかし[說明](名) ときあかすこと。せつめ

どき-あか-す[說明](他、さ四) 說きて物事を明かならしむ。わけのわかるやうに說く。

どき-いろ[鴿色](名) 鴿の翅裏の色、灰色を帶びたる淡紅色。(鴿)。

++**どき-あらひ-きぬ**[解洗衣](名) 解きて洗濯したる衣服。「に同じ。

++**どきあらひ-どろも**[解洗衣](名) 前條

(**どき-うう**[菫裘](名) 《菫裘は魯の地名、魯の隱公が「今魯菫裘に吾將老」といひたる言に出づ》世の中を去りぎきて生を送るべき地、隱遁する所。「一」。

(**どき-うう**[斗牛](名) 斗と牛と、共に二十八宿の

(**どき-うう**[屠牛](名) 屠牛する場所。

どき-うま[駿馬](名) 走るとすみやかなる馬。

どき-がね[時鐘](名) 時刻を知らするためにう

つ鎖。ときのかね。

ときかはぎ[研革](名)刃物又は金屬をとぐに用ふる革。

ときかす[說聞](他、さ下二)いうて聞かす。いひきかす。

++**ときぎぬ**[解衣](名)羈縻をとりてときはなしたる衣服。——**の**[解衣](枕)ときはなしたる衣はみだれやすきものなれば、「みだる」に冠する詞。「—思ひみだれて」。「なる櫛。

ときぐし[解櫛](名)髪を解くに用ふる櫛の疎

++**ときどろも**[解衣](名)「ときぎぬ」に同じ。

ときさとし[說諭](名)ときさとすこと。せつゆ。

ときさとす[說諭](他、さ四)物事の道理をいひきかす。せつゆす。

ときぎ[研師](名)鎖又は刀などをとぐ業の人。

++**ときじ**[非時](形、二)㊀其時節にあらず。時ならず。「—くず雪はふりける」㊁常に其さまを變ぜず。

++**ときじく-の-かぐ-の-とのみ**[非時香菓](名)橘の果實の稱。其夏に實り秋冬に至るも、尚ほ木にありて香味變ぜざるよりいふ。

ときし-も(副)其とき、其をり。——**あれ**(副)恰も其をりに打ちあひて。ときもときとて。

ときぞ-ぎり-がほ[時知顏](名)我こそ時節に會したれとほこるが如きさま。得意なるさま。

ときす-すむ[說勸](他、ま下二)說きてすゝめいざなふ。

ときすすめ[說勸](名)ときすゝむること。

ときすすむ[說勸](他、さ四)刃物などを研(ト)ぎて、すこしもくもりなきやうにす。

++**ときそう-す**[時奏](自、さ變)古昔、大内に宿直せる官人が、亥の刻の初より寅の刻の終まで、一時毎に時の杖をさし、時刻をよばゝりたるにいふ。「に。

ときぞ-ども-なく(副)いつといふ時を定めずに。

ときたいと[時太鼓](名)時の去らせにうち鳴らす太鼓。

ときだし[研出](名)蒔繪にて、金銀の粉を蒔(マ)きたる上に漆をかけ、これを研ぎて下の金銀をあらはしたるもの。「磨出」。

ときたち[研立](名)とぎをへて間もなきこと。

ときたて[研立](名)前條に同じ。

++**ときつかさ**[時司](名)古昔、時刻を告ぐることをつかさどりし職名。又、其事務をつかさどりし所。

ときつかぜ[時津風](名)《時の風の義》㊀潮の滿つる時に吹く風。「—吹飯の濱に」。㊁五風十雨といふ如く、時に順なる風。「—枝も鳴らさぬ、柳代なれや」。

ときつく[說附](他、か四)にいひなして強に我言に從はしむ。

{**ときつ-く**(自、か四)胸安からず。どきゝ〳〵。

ときつ-くる[圓作](自、ら四)多人數共にときをあぐ。「同にそろひて聲をあぐ。

ときつ-くる[時作](自、ら四)雞時を定めて鳴く。

++**ときつ-どり**[時津鳥](名)「の異稱。

ときつ-どき[時時](副)をり〳〵。をりふし。

{**ときつ-どき**(名、副)㊀胸安からずして、動悸するさまにいふ語。㊁危ぶみもそるゝさまにいふ語。

ときつ-さ-して(副)或時は。をり〳〵は。たまには。

++**ときつ-さ-ねく**(副)時を定めずに。いつとなく。

++**ときつ-なか**[時生](名)はんとき。

ときぞ-ども-なく(副)いつといふ時を定めずに。

ときたいと[時太鼓](名)時の去らせにうち鳴らす太鼓。

ときだし[研出](名)蒔繪にて、金銀の粉を蒔(マ)きたる上に漆をかけ、これを研ぎて下の金銀をあらはしたるもの。「磨出」。

ときたち[研立](名)とぎをへて間もなきこと。

ときたて[研立](名)前條に同じ。

++**ときつかさ**[時司](名)古昔、時刻を告ぐることをつかさどりし職名。又、其事務をつかさどりし所。

ときつかぜ[時津風](名)《時の風の義》㊀潮の滿つる時に吹く風。「—吹飯の濱に」。㊁五風十雨といふ如く、時に順なる風。「—枝も鳴らさぬ、柳代なれや」。

ときつく[說附](他、か四)にいひなして強に我言に從はしむ。

{**ときつ-く**(自、か四)胸安からず。どきゝ〳〵。

ときつ-くる[圓作](自、ら四)多人數共にときをあぐ。「同にそろひて聲をあぐ。

ときつ-くる[時作](自、ら四)雞時を定めて鳴く。「の異稱。

++**ときつ-どり**[時津鳥](名)「の異稱。

ときつ-どき[時時](副)をり〳〵。をりふし。

{**ときつ-どき**(名、副)㊀胸安からずして、動悸するさまにいふ語。㊁危ぶみもそるゝさまにいふ語。

ときつ-さ-して(副)或時は。をり〳〵は。たまには。

++**ときつ-さ-ねく**(副)時を定めずに。いつとなく。

++**ときつ-なか**[時生](名)はんとき。

ときぞ-ども-なく(副)いつといふ時を定めずに。

ときたいと[時太鼓](名)時の去らせにうち鳴らす太鼓。

ときだし[研出](名)蒔繪にて、金銀の粉を蒔(マ)きたる上に漆をかけ、これを研ぎて下の金銀をあらはしたるもの。「磨出」。

ときたち[研立](名)とぎをへて間もなきこと。

ときたて[研立](名)前條に同じ。

++**ときつかさ**[時司](名)古昔、時刻を告ぐることをつかさどりし職名。又、其事務をつかさどりし所。

ときつかぜ[時津風](名)《時の風の義》㊀潮の滿つる時に吹く風。「—吹飯の濱に」。㊁五風十雨といふ如く、時に順なる風。「—枝も鳴らさぬ、柳代なれや」。

ときつく[說附](他、か四)にいひなして強に我言に從はしむ。

{**ときつ-く**(自、か四)胸安からず。どきゝ〳〵。

ときつ-くる[圓作](自、ら四)多人數共にときをあぐ。「同にそろひて聲をあぐ。

ときつ-くる[時作](自、ら四)雞時を定めて鳴く。「の異稱。

++**ときつ-どり**[時津鳥](名)「の異稱。

ときつ-どき[時時](副)をり〳〵。をりふし。

{**ときつ-どき**(名、副)㊀胸安からずして、動悸するさまにいふ語。㊁危ぶみもそるゝさまにいふ語。

ときつ-さ-して(副)或時は。をり〳〵は。たまには。

++**ときつ-さ-ねく**(副)時を定めずに。いつとなく。

++**ときつ-なか**[時生](名)はんとき。

ときたち[研立](名)とぎをへて間もなきこと。

ときたて[研立](名)前條に同じ。

++**ときつかさ**[時司](名)古昔、時刻を告ぐることをつかさどりし職名。又、其事務をつかさどりし所。

ときつかぜ[時津風](名)《時の風の義》㊀潮の滿つる時に吹く風。「—吹飯の濱に」。㊁五風十雨といふ如く、時に順なる風。「—枝も鳴らさぬ、柳代なれや」。

ときつ-つ-く[說附](他、か四)にいひなして強に我言に從はしむ。

{**ときつ-つ-く**(自、か四)胸安からず。どきゝ〳〵。

ときつ-くる[圓作](自、ら四)多人數共にときをあぐ。「同にそろひて聲をあぐ。

ときつ-くる[時作](自、ら四)雞時を定めて鳴く。

++**ときつ-どり**[時津鳥](名)「の異稱。

ときつ-どき[時時](副)をり〳〵。をりふし。

{**ときつ-どき**(名、副)㊀胸安からずして、動悸するさまにいふ語。㊁危ぶみもそるゝさまにいふ語。

ときつ-さ-して(副)或時は。をり〳〵は。たまには。

++**ときつ-さ-ねく**(副)時を定めずに。いつとなく。

++**ときつ-なか**[時生](名)はんとき。

ときぞ-ども-なく(副)いつといふ時を定めずに。

ときたいと[時太鼓](名)時の去らせにうち鳴らす太鼓。

ときだし[研出](名)蒔繪にて、金銀の粉を蒔(マ)きたる上に漆をかけ、これを研ぎて下の金銀をあらはしたるもの。「磨出」。

ときたち[研立](名)とぎをへて間もなきこと。

ときたて[研立](名)前條に同じ。

++**ときつかさ**[時司](名)古昔、時刻を告ぐることをつかさどりし職名。又、其事務をつかさどりし所。

ときつかぜ[時津風](名)《時の風の義》㊀潮の滿つる時に吹く風。「—吹飯の濱に」。㊁五風十雨といふ如く、時に順なる風。「—枝も鳴らさぬ、柳代なれや」。

ときつ-つ-く[說附](他、か四)にいひなして強に我言に從はしむ。

{**ときつ-つ-く**(自、か四)胸安からず。どきゝ〳〵。

ときつ-くる[圓作](自、ら四)多人數共にときをあぐ。「同にそろひて聲をあぐ。

ときつ-くる[時作](自、ら四)雞時を定めて鳴く。

++**ときつ-どり**[時津鳥](名)「の異稱。

ときつ-どき[時時](副)をり〳〵。をりふし。

{**ときつ-どき**(名、副)㊀胸安からずして、動悸するさまにいふ語。㊁危ぶみもそるゝさまにいふ語。

ときつ-さ-して(副)或時は。をり〳〵は。たまには。

++**ときつ-さ-ねく**(副)時を定めずに。いつとなく。

++**ときつ-なか**[時生](名)はんとき。

ときぞ-ども-なく(副)いつといふ時を定めずに。

ときたいと[時太鼓](名)時の去らせにうち鳴らす太鼓。

ときだし[研出](名)蒔繪にて、金銀の粉を蒔(マ)きたる上に漆をかけ、これを研ぎて下の金銀をあらはしたるもの。「磨出」。

ときたち[研立](名)とぎをへて間もなきこと。

ときたて[研立](名)前條に同じ。

++**ときつかさ**[時司](名)古昔、時刻を告ぐることをつかさどりし職名。又、其事務をつかさどりし所。

ときつかぜ[時津風](名)《時の風の義》㊀潮の滿つる時に吹く風。「—吹飯の濱に」。㊁五風十雨といふ如く、時に順なる風。「—枝も鳴らさぬ、柳代なれや」。

ときつ-つ-く[說附](他、か四)にいひなして強に我言に從はしむ。

{**ときつ-つ-く**(自、か四)胸安からず。どきゝ〳〵。

ときつ-くる[圓作](自、ら四)多人數共にときをあぐ。「同にそろひて聲をあぐ。

ときつ-くる[時作](自、ら四)雞時を定めて鳴く。

++**ときつ-どり**[時津鳥](名)「の異稱。

ときつ-どき[時時](副)をり〳〵。をりふし。

{**ときつ-どき**(名、副)㊀胸安からずして、動悸するさまにいふ語。㊁危ぶみもそるゝさまにいふ語。

ときつ-さ-して(副)或時は。をり〳〵は。たまには。

++**ときつ-さ-ねく**(副)時を定めずに。いつとなく。

++**ときつ-なか**[時生](名)はんとき。

ときぞ-ども-なく(副)いつといふ時を定めずに。

ときたいと[時太鼓](名)時の去らせにうち鳴らす太鼓。

ときだし[研出](名)蒔繪にて、金銀の粉を蒔(マ)きたる上に漆をかけ、これを研ぎて下の金銀をあらはしたるもの。「磨出」。

ときたち[研立](名)とぎをへて間もなきこと。

ときたて[研立](名)前條に同じ。

++**ときつかさ**[時司](名)古昔、時刻を告ぐることをつかさどりし職名。又、其事務をつかさどりし所。

ときつかぜ[時津風](名)《時の風の義》㊀潮の滿つる時に吹く風。「—吹飯の濱に」。㊁五風十雨といふ如く、時に順なる風。「—枝も鳴らさぬ、柳代なれや」。

ときつ-つ-く[說附](他、か四)にいひなして強に我言に從はしむ。

{**ときつ-つ-く**(自、か四)胸安からず。どきゝ〳〵。

ときつ-くる[圓作](自、ら四)多人數共にときをあぐ。「同にそろひて聲をあぐ。

ときつ-くる[時作](自、ら四)雞時を定めて鳴く。

++**ときつ-どり**[時津鳥](名)「の異稱。

ときつ-どき[時時](副)をり〳〵。をりふし。

{**ときつ-どき**(名、副)㊀胸安からずして、動悸するさまにいふ語。㊁危ぶみもそるゝさまにいふ語。

ときつ-さ-して(副)或時は。をり〳〵は。たまには。

++**ときつ-さ-ねく**(副)時を定めずに。いつとなく。

++**ときつ-なか**[時生](名)はんとき。

ときぞ-ども-なく(副)いつといふ時を定めずに。

ときたいと[時太鼓](名)時の去らせにうち鳴らす太鼓。

ときだし[研出](名)蒔繪にて、金銀の粉を蒔(マ)きたる上に漆をかけ、これを研ぎて下の金銀をあらはしたるもの。「磨出」。

ときたち[研立](名)とぎをへて間もなきこと。

ときたて[研立](名)前條に同じ。

++**ときつかさ**[時司](名)古昔、時刻を告ぐることをつかさどりし職名。又、其事務をつかさどりし所。

ときつかぜ[時津風](名)《時の風の義》㊀潮の滿つる時に吹く風。「—吹飯の濱に」。㊁五風十雨といふ如く、時に順なる風。「—枝も鳴らさぬ、柳代なれや」。

ときつ-つ-く[說附](他、か四)にいひなして強に我言に從はしむ。

{**ときつ-つ-く**(自、か四)胸安からず。どきゝ〳〵。

ときつ-くる[圓作](自、ら四)多人數共にときをあぐ。「同にそろひて聲をあぐ。

ときつ-くる[時作](自、ら四)雞時を定めて鳴く。

++**ときつ-どり**[時津鳥](名)「の異稱。

ときつ-どき[時時](副)をり〳〵。をりふし。

{**ときつ-どき**(名、副)㊀胸安からずして、動悸するさまにいふ語。㊁危ぶみもそるゝさまにいふ語。

ときつ-さ-して(副)或時は。をり〳〵は。たまには。

++**ときつ-さ-ねく**(副)時を定めずに。いつとなく。

++**ときつ-なか**[時生](名)はんとき。

ときぞ-ども-なく(副)いつといふ時を定めずに。

ときたいと[時太鼓](名)時の去らせにうち鳴らす太鼓。

ときだし[研出](名)蒔繪にて、金銀の粉を蒔(マ)きたる上に漆をかけ、これを研ぎて下の金銀をあらはしたるもの。「磨出」。

ときたち[研立](名)とぎをへて間もなきこと。

ときたて[研立](名)前條に同じ。

++**ときつかさ**[時司](名)古昔、時刻を告ぐることをつかさどりし職名。又、其事務をつかさどりし所。

ときつかぜ[時津風](名)《時の風の義》㊀潮の滿つる時に吹く風。「—吹飯の濱に」。㊁五風十雨といふ如く、時に順なる風。「—枝も鳴らさぬ、柳代なれや」。

ときつ-つ-く[說附](他、か四)にいひなして強に我言に從はしむ。

{**ときつ-つ-く**(自、か四)胸安からず。どきゝ〳〵。

ときつ-くる[圓作](自、ら四)多人數共にときをあぐ。「同にそろひて聲をあぐ。

ときつ-くる[時作](自、ら四)雞時を定めて鳴く。

++**ときつ-どり**[時津鳥](名)「の異稱。

ときつ-どき[時時](副)をり〳〵。をりふし。

{**ときつ-どき**(名、副)㊀胸安からずして、動悸するさまにいふ語。㊁危ぶみもそるゝさまにいふ語。

ときつ-さ-して(副)或時は。をり〳〵は。たまには。

++**ときつ-さ-ねく**(副)時を定めずに。いつとなく。

++**ときつ-なか**[時生](名)はんとき。

ときならず[不時](副)然るべき時にあらざるに。又、思ひもよらざる時に。

++**ときな-る**[時成](自、ら四)時機到來す。物事出來そろふ。「ときなりて柳車寄せつれば」。

——ひと[時成人](名)時めく人。衆ゆる人。

ときに[時](副)㊀其時に。其をりに。「—明治元年なり」。㊁をり〳〵。ときゝ〳〵。

++**ときに**[時](接)話をあらたむる冒頭に用ふる語。「一例の一件はどうなった」。

++**ときの-あめ**[時雨](名)去ぐれ。

ときの-かね[時鐘](名)「ときがね」に同じ。

++**ときの-きざみ**[時刻](名)漏刻の籌のめもり。

++**ときの-くひ**[時杙](名)古昔、禁中にて、十二時の時毎に立てゝ去るしとせし杙。

++**ときの-け**[時氣](名)はやりやみ。えやみ。(時疫、流行病)。

ときの-とゑ[鬨聲](名)衆人一同に發する聲。「くと、ときつくる聲。

++**ときの-さかり**[時盛](名)今をさかりと時めく人。

ときの-たいと[時太鼓](名)ときだいこ。

++**ときの-ざり**[時鳥](名)【動】「ときつどり」に同じ。

ときの-ひと[時人](名)㊀當時の人。其時の人。㊁時めく人。時なる人。「いみじき—なり」。

++**ときの-ふだ**[時札](名)古昔、禁中にて時毎にかけて去るしとせし札。

++**ときの-ほど**(名)去ばしのあひだ。またゝくひまに。「ま。

++**ときの-ま**(名)前條に同じ。

++**ときの-もの**[時物](名)其時節のもの。

ときは[常磐](名)㊀《ときといはの義》永久不變なること。ととしなへに其さまを保つこと。「常磐」。㊁草木の葉の四時其色を變ぜざること。「—の松」。(常綠、常葉)。

——あけび[常磐通草](名)【植】「むべ」に同じ。

——かきはに[常磐堅磐](副)永久不變に。とこしなへに。

——き[常磐木](名)葉の四時落下せずして綠色を保つ樹木、即ち、松・柏の類。「長磐木、長青樹、常綠木」。

——ぐさ[常磐草](名)【植】(い)松の異稱。(ろ)「かんあふひ」の一名。

ときはづ[常磐津](名)「ときはづぶし」の略言。

——ぶし[常磐津節](名)淨瑠璃の一派、宮古路節より轉じたるもの。常磐津文字太夫より始まる。

ときはぬ-すきしぢ[解離](他、さ四)㊀解きて別々にす。はなしてわかれ〳〵にす。㊁次條に同じ。

ときはね-つたちつて[解放](他、た四)きづなを解きてはなちやる。束縛をときてはなちやる。

ときふ-すれぬ[說伏](他、さ下二)ときやぶりて屈服せしむ。ときて去たがはす。

{**ときふせる**(他)「ときふす」の訛。

++**ときべ**[解部](名)昔時、刑部省に附屬せし官、大・中・少に分れて總員六十人あり、罪人を糺明する事をつかさどりしもの。

ときへら-すきしぢ[研減](他、さ四)とぎて形をはそむ。すり〳〵す。

++**ときぼうとう**[伽奉公](名)めかけぼうこう。

ときほど-くくけこ(他、か四)細かくときはなす。

ときまい[齋米](名)齋(ニ)として僧に施す米。

++**ときまう-すすせそ**[時申](自、さ四)「ときそうす」(時奏)に同じ。

{**どきゝ-ぎき**(名、副)うろたへあわつるさまにいふ。

ときみづ[研水](名)ものをとぐに用ふる水。

ときみづ[浙水](名)米を浙(ト)ぎたる水。去ろみづ。(泔)。

ときめか-すきしぢ[時](他、さ四)時めくやうにす。籠愛す。「園基卿は後一條院ときめかし給ひて」。

ときめ-くかきくけこ[時](自、か四)時機にあひてはえさかゆ。運よくして勢さかる。

{**ときめ-もの**[解物](名)衣服をときはなすべき衣服。

ときもの[研物](名)物をとぎみがくこと。又、みがくべき物。——**ぢ**[研物師](名)とぎものを業とする人、即ち刀研又は鏡研の類。

++**ときも-り**[時守](名)古昔、禁中にて、漏刻を守り時刻を報ずるとをつかさどりし官吏。(守辰丁)

——の-はかせ[時守博士](名)「ろうこくはかせ」(漏刻博士)に同じ。

ときや[研屋](名)刃物又は鏡などをとぐ業の人

(**どーきやう**[讀經](名)聲をたて、經文を讀むこと。看經の對。

ときよ[時世](名)去せつ。時代。「—うつろひて」。

(**ど-きよ**[渡御](名)主上又は神輿のいでまし。

(**ど-きよ**[鹽魚](名)【動】(ま)みをむし)に同じ。

(**ど-きよう**[度胸](名)物事に臨せざる意氣。物事を決行する意志。きもだましひ。「—がすわる」。(俗)。

{**どきゝ-り**(名、副)「どきんこ」に同じ。

ど-きゝ-る(名、副)「跡切」(自、ら下二)㊀あしあと絶ゆ。ゆきき絶ゆ。㊁中絶す。たゆ。とまる。

ときれ[跡切](名)とぎるゝこと。

[跡切跡切](名、副)とぎれつゝもの、つゞくさまにいふ語。{——**る**(自)「とぎる」の訛。

ときわ-くかきくけこ[說分](他、か下二)區別順序を立てゝ說明す。

ときわ-くかきくけこ[解分](他、か下二)㊀ときほどきて別々にす。ときはなす。ときはどく。㊁區別をつけてといへをさむ。

ときわ-わけ[說分](名)ときわくること。

(他)「ときわく」の訛。

ときわ-わけ[解分](名)ときつくること。

{**ときわ-ん**[頭巾](名)修驗者のかぶる小さき頭巾、布にて作り、十二因緣に象りて十二の襞(ヒダ)を設く、紐にて頤(オトガヒ)に結びとむるもの、役行者が苦行せしときの帽の破れたるにもとづく側なりといふ。「兜巾」。

[んきと]

——いばら[頭巾薔薇](名)【植】「どびし」(茶藨)に同じ。

(**ど-きん**[鍍金](名)めっき。

——えき[鍍金液](名)寫眞術の條を見よ。

{**どきん**(名、副)動悸のうつさま又はおどろきあそるゝさまにいふ語。

(**どく**[德](名)㊀心に得て行ひにあらはるゝこと。品性の傾向及活動。㊁心正しく行善なること。道にかなひ義にかたがふこと。㊂正義、善道。㊃そゝろに人を敬服せしむる力。他を自然に服從せしむる能。「人に長たる—」。㊄天性、天賦。㊅功用、能力。「貪獸もかやうの—をもつて君をなやまし奉る」。㊆聲譽、名望。㊇感化、教化。㊈めぐみ、恩惠。㊉さいはひ、幸福。㊊ため、かげ。「正直の—で、難を免る」。㊋とみ。うとく。かねもち。「いみじく—あるが妻になりて」。㊌賢者、君子、正人。「便宜。

(**どく**[得](名)㊀まうけ。りえき。利潤。㊁べんり。

(**どく**[犢](名)【動】とうし。

ひへ[ひ]（名）「[風]」の古語。

ひへ-ぐも[ひ]（名）「[風]」の古語。

ひへ-ぐも[ひ]（名）「[風]」の古語。

**ひへ-ぐも

（名）【法律】一定の公的な関係者間の行為を法律上の効果を生ずる意思表示とする法律行為。

りそく【利息】（名）❶貸借した金銭の使用料。❷利子。

りそく【利足】（名）利息。

りそく【離縁】（名）縁組の解消。

りそく【理屈】（名）❶物事の道理。❷こじつけの理。

りそく【理足】（名）理屈。

りそく【利息】（名）❶貸借した金銭の使用料。❷利子。

りそく【理足】（名）理屈。

りそく【離縁】（名）縁組の解消。

りそく【理屈】（名）❶物事の道理。❷こじつけの理。

りそく【利足】（名）利息

さくしゅ―さくにん　さくにんけん―さくはい　さくはいき―さくはつ　さくはつ―さくひん　さくひんこう―さくべつ　さくべつ―さくもつ　さくもつ―さくらい　さくらい―さくりょく　さくりょくけん―さくれつ　さくれつ―さこく　さこく―さしあ　さしあ―さしず　さしず―さしょう　さしょう―さしょう　さしょう―さつい　さつい―さつえい　さつえい―さつき　さつき―さつじん　さつじん―さつ　さつ―さつ　さつ―さつ　さつ

ところの一ところを

ところを[場所,現場,場面]

ところを[床山](名)

ところを[常圏](名)

ところを[床屋](名)

ところをめぐらして[常参](副)

ところをめぐらし[常参](形,シク)

ところ[床屋](名)

ところ[常圏](名)

ところ[床屋](名)

ところ[床店](名)

ところ[床録](名)

ところ[常圏](名)

ところ[所,場](名)

ところ[常参](名)

ところ[常参](名)

ところ[常参

ところ-の-もの[所物](名) 其土地の産出物。
ところ-ばらひ[所拂](名) 德川時代の一種の刑、其居住せる場所より追放せしこと。
{**ところ-まだら**[所斑](名、副) ところ〳〵にちらばりてあるさまにいふ語。
{**ところ-まんだら**[所斑](名、副) 前條に同じ。
++**とし-わか**[常若](名) つねにわか〳〵しきこと。不老。
++**とし-ゐ**[常井](名) 水のつねにかゝるゝことなき井。
++**とし-ゐ**[常聲](名) 何時もかはらぬ聲。「鹿の—」。
(**と-ざい**[吐劑](名) のみ下しゝ飲食物をはき出さしむるために飲用する藥劑。
(**と-ざい**[徒罪](名) 「つざい」に同じ。
(**ど-さい**[駑才](名) 才能にぶきこと。器量あとれること。
(**ど-さい**[駑材](名) 前條に同じ。
(**と-さら**[抖擻](名) 頭陀。行脚。「かくて—修行の後料び」。
(**と-さら**[斗胥](名) 《斗はとます、胥は二升を入るべき竹器》 ㊀度量の小なること。「—之人」。 ㊁狀態の少なきこと。「—の役」。
(**ど-さう**[土葬](名) 屍體を土中に葬(ハフ)ること。
(**ど-ざう**[土藏](名) 四面を土にて塗りたる倉庫。つちぐら。 ——**づくり**[土藏造](名) 土藏の如く家の四面を土にて塗りたる構造。又、其構造の家。{——**やき**[土藏燒](名) 一種の料理、魚肉に山椒味噌又は胡麻味噌などをつけて燒きたるもの。{——**やぶり**[土藏破](名) 土藏をきり破りて、中の財物をぬすみとること。又、其盜賊。
と-さか[鳥冠](名) 雞・雉などの頭部に露出せる冠狀の肉。とさか。 ——**のり**[雞冠菜](名)【植】紅色藻に屬する植物、形とさかに似て高さ一二寸許、海中の石に着生す、稍〻軟質にして、散生せる帶狀の枝を有し、通常暗紫色をなす、食用とすべし。
とさ-け[土佐家](名) 繪畫の一派、土佐守藤日經隆を祖とす。
と-ざし[扃](名) 門戸をとざし固むるもの、即ちかけがね又はまやうの類。
と-ぎ-すぎ[鎖](他、さ四) ㊀戸を閉(ト)ぢて其まりをなす。ものを中に入れて出づるとを得しめず。「銅雀春深—二喬」。
{**ど-さ-くさ**(名、副) 物事のたゝまりて混雜するさまにいふ語。 ——**-まぎれ**(名) とりこみにて物事の區別つかぬこと。
{**ど-さ-と**(副) もゝき物をゆるしゆくさまにいふ。
{**ど-さ-どさ**(名、副) 多人數の一時にいりこむさまにいふ語。
とさ-の-さんびつ[土佐三筆](名) 土佐家の傑出たる光信・光長・光起の稱。
とさ-ばんし[土佐半紙](名) 土佐國より産出する半紙。
どさ-ぶし[土佐節](名) 土佐國より産出する鰹節、品質佳良なるもの。
++**と-さま**[外方](名) そとのかた。そとのはう。
と-さま[外樣](名) 德川時代に、將軍の一門又は譜代にあらざる大名の稱。
とさま-かうさま(名、副) あれこれ。いろ〳〵。
とさま-ものゆう[外方衆](名) 外樣の人々。
とさま-たいみやう[外樣大名](名) 「とさま」に同じ。
{**どさり**(名、副) 重き物の緩やかにゐたるさまにいふ語。
とさ-ぶ[土佐紙](名) 土佐家の畫風、又其畫。
{**どさぶもん**[土左衛門](名) 《享保の頃の力士成瀬川土左衛門といふもの色白く極めて肥大なりしを、溺死者の死狀になぞらへていひしに始まるといふ》溺死人。水死人。東京の方言。
(**と-さん**[登山](名) 山にのぼること。
(**ど-さん**[土産](名) ㊀其地の産物。 ㊁みやげもの。
とし[年、歲](名) ㊀太陽曆にては、地球が太陽の周圍を一周する時間の稱にして、太陰曆にては、太陰が地球の周圍を十二周する時間の稱、又、天文學にて、恆星年と太陽年との別あり。「太陽曆・太陰曆及恆星年太陽年の各條を見よ」。 ㊁他の遊星が其軌道を一周する時間の稱にもいふ。 ㊂よはひ。年齡。 ㊃とき。時代。 ㊄つきひ。光陰。 ㊅穀類のみのり。「—もよし」。 ㊆せつ。時候。「—むそし」。 ㊇++年號。「—かはる」。 ——**あらたまる** 新年となる。又、改元となる。 ——**あり**[有年] 豐年なり。穀類よくみのる。 ——**かへる** 新年となる。 ——**に ふそくは ない** 高齡なるにいふ。 ——**をいのる** 豐年をいのる。 ——**をとす** 新年を迎ふ。 ——**をざる** よはひを重ぬ。 ——**をひろふ** 前條に同じ。 ——**をまたぐ** 二年にかゝる。
(**と-ざ**[都市](名) みやこ。とくわい。
(**と-ざ**[徒死](名) むだ死に。いぬ死に。
と-し[疾](形、一) 速かなり。はやし。「し。
と-し[利](形、一) 刃鋭し。切味よし。すると
と-し[敏](形、一) ㊀行動はやし。すばしこし。すばやし。 ㊁才智多し。かしこし。さとし。
(**と-ざ**[途次](名、副) みちすがら。途ついで。
(**と-ざ**[徒爾](名、副) いたづらに去かるさまにいふ語。
++**と-ざ**[刀自](名) ㊀專ら家事をつかさどる婦人。「いへ—」。 ㊁他に事へて、其家事をつかさどる婦人。

一 字音　〃 俚語方言　++ 古語

㊂下萬の女官。「憂愁所の—」。 ㊃婦人の尊稱。「母—」。
(**と-ざ**[屠兒](名) 獸類をほふることを業とするもの。ほふり。ほふた。
(**ど-ざ**[怒視](名) いかりてみつむること。にらむこと。
いくさ[同士](名) つれ。とも。なかま。「女—」。 ——**-うち**[同士軍](名) なかまとなかまの相戰ふこと。 ——**-ぢち**[同士打](名) ㊀前條に同じ。 ㊁なかまとなかまと相排擊すること。(內訌)。
とし-うへ[年上](名) 年齡の長けてあること。又、其人。(年長)。
とし-かさ[年嵩](名) ㊀前條に同じ。 ㊁老年。高齡。
とし-がしら[年頭](名) 其中にて年齡の最も多きこと。又、其人。「ひ。としごろ。
とし-がっかう[年恰好](名) 年齡のころあひ。
{**とし-がひ**[年甲斐](名) 年齡多ければ、思慮分別も從ひて多きこと。「—もなく」。
++**とし-ぎき**[屯食](名) 「とんぎき」に同じ。
++**とし-ぎきみ**[戶闕](名) 「ぎきみ」に同じ。
++**とし-ぎきみ**[軾](名) 車の前の橫木。
++**とし-ぎれ**[年切](名) 次條に同じ。
++**とし-きり**[年切](名) 年によりて擅木の實を結ばぬこと。
とし-ご[年子](名) 年毎に打續きて生まれたる子、即ち、同腹の兄弟にて其齡の一つちがふ子。
とし-こし[年越](名) ㊀年を越(コ)えて新年に移ること。(越歲)。 ㊁節分の夜。又、大晦日。 ——**-そば**[年越蕎麥](名) 細く長くといふ緣起より、年越に食ふ蕎麥切。
とし-ごと[年毎](名、副) まいねん。
とし-どひ[祈年](名) ㊀五穀の豐(ユタ)なちんとをいのること。 ㊁「としごひのまつり」の略言。 ——**-の-まつり**[祈年祭](名) 陰曆二月四日の祭祀。風雨の災なく年穀の豐ならんことを祈ちせらるゝものにして、古昔は、神祇官にて國司より集める白猪・白鷄などを供物にさゝげて行ひ、現時は、伊勢神宮へ勅使を遣(ツカ)され、諸國の官幣社・國幣社へ班幣せらる。
++**とし-ともり**[年籠](名) ふゆごもり。
とし-ごろ[年頃](名) ㊀年齡の程。としばへ。 ㊁一人前の年齡。成年。
とし-どろ[年頃](副) 過ぎつる年よりこのかた。むかしから。ねんらい。 ——**-ひごろ**[年頃日頃](副) むかしからつねに。いつも。
とし-ざかり[年盛](名) 最も強壯なるとしばへ。壯年。
(**と-ざ-ざ**[冤絲子](名) 【植】「ねなしかづら」に同じ。
とし-ざた[年下](名) 齡の劣りてあると。又、其人。「—のつれあひ」。(年少)。
とし-たか[年高](名) 「としかさ」に同じ。 ++ —**びと**[年高人](名) 高齡者。老人。
とし-だま[年玉](名) 新年の祝儀の贈物。(年賀)。
(**ど-ざつ**[士賣](名) 其土地の性質。
とし-つき[年月](名) ㊀年と月と。 ㊁日月の經過。つきひ。光陰。
(**とし-ざく**[歲德](名) ㊀歲德神のある方向、即ち明(アク)の方。 ㊁歲德神の略稱。 ——**-がみ**[歲德神](名) 陰陽家にて祭る神、即ち其年のふさがりの方と相對する方を司る神、此神のある方を明(アク)の方又は原方(エハ)といひて萬事に吉なりとす。
とし-どし[年年](名、副) としごと。毎年。
{**どし-どし**(名、副) ㊀ためらはずにすゝみなすさまにいふ語。 ㊁足音あらく語(ゴ)むさまにいふ語。
とし-ど-るる[年取](自、ら四) 年多くなる。老ゆ。
++**とし-なか**[年半](名) 一年のなかば。半年。
++**とし-なみ**[年並](名) ㊀としごと。毎年。 ㊁年齡の順序。
とし-なみ[年波](名) 年老いて顏に皺(ワ)のよること。
とし-に[年](副) 一年に。
とし-の-いち[年市](名) 年のくれに新年の必用品を賣る市。
とし-の-うち[年內](名) ㊀其年のうち。ねんない。 ㊁一年の間。年中。
とし-の-かみ[年神](名) 年をつかさどるといふ神。
とし-の-くれ[年暮](名) 年末。歲暮。
とし-の-こう[年功](名) 年多きが故に、自然に經驗を積みて相應の役に立つこと。
++**とし-の-は**(名) 毎年。としごと。「—に春の來ちぬ、かくしこそ」。
とし-の-まめ[年豆](名) 節分の夜にまく豆。
とし-の-や[年矢](名) 光陰の經過の速かなるを矢にたとへいふ語。
とし-の-よ[年夜](名) 大晦日の夜。又節分の夜。
++**とし-を**[年緒](名) 年の長く續くを緒にたとへいふ語。「松にかゝれる苔なればながくなりにけるかな」。
とし-は[年端](名) 年齡のほど。としばへ。
++**とし-ばと**[鳥柴](名) 鷹の捕りたる鳥を人に贈るときなどにわすびつくる木、梅・松・櫻・楓などの四季によりて樣々の

[ばと]

一 字音　〃 俚語方言　++ 古語

ぞうりみち　ぞうれきし　ぞうれつ　ぞうれつ　ぞうれつ

さち-かね［綴金］（名）ものをとづるに用ふるかすがい。

さち-がめ［鼈］（名）【動】「スッポン」に同じ。［ね。

さち-がゆ［粥］（名）粥（ヲモ）の實を入れて炊（カシ）ぎたる粥。

さち-がら［土地柄］（名）ところがら。

〔**さち-くさやり**［人名］（名）人をのゝしりていふ語。

〔**さち-ぐるひ**（名）ともぐるふと。

〔**さち-ぐ-るふ**［共謀ふ］（自、は四）狸（ナ）れたはむる。たはむれくるふ。ふざけける。

さち-ことば［土地語］（名）ところの方言。

さち-とみ［綴込］（名）とぢこむと、又、とぢこみたるもの。

さち-と-むる［綴込］（他、ま四）㊀とぢ合はす。一つにとぢ。㊁あとより次第にとぢあはす。

さち-と-む［閉込］（他、ま下二）中に入れこめ、戸を閉ぢて出だざず。おしこむ。

さち-とめ［閉込］（名）とぢこむると。おしこめ。（廻閉。）——**る**（他）「とぢこむ」の訛。

さち-とも-り［閉籠］（名）とぢこもると。

さち-とも-る［閉籠］（自、ら四）戸を閉ぢて内に籠もりゐる。たれこもる。

さち-ごよみ［綴暦］（名）冊子にしたる暦。

〔**さち-さうよう**［土地收用］（名）【法】國家が公用のため、一定の地所を強制的に收用すること。

さち-さろ［綴代］（名）㊀とぢたる報酬。㊁ものをとぢんために、其端を少しのこしおくこと。

〔**さち-たいちやう**［土地臺帳］（名）地租徵收のため、土地を筆別にしてこれに關する要件を擅記したる臺帳、其土地を管轄する收稅署に備へたるもの。

さち-つ-く［綴附］（他、か下二）綴ぢて

うごかぬやうにす。

さち-つけ［綴附］（名）とぢつくると。又、とぢつけたるもの。——**-いと**［綴附絲］（名）とぢつくるに便用する絲。——**る**（他）「とぢつく」の訛。

さち-ねまり［土地訛］（名）ところのなまり。

さち-の-くわんかつ［土地管轄］（名）【法】裁判所が其裁判權を行使し得る土地の管轄區域。

さち-の-き［栃木］（名）【植】「とち」に同じ。

さち-の-もの［土地物］（名）其土地の產物。

さち-の-もの［土地者］（名）其土地の人。

〔**さち-ぶた**［綴蓋］（名）こはれたるをつくろひなはしたる蓋「われ鍋に—」。

さち-ほん［綴本］（名）綴ぢてつくりたる書物。

さち-まき［綴卷］（名）前條に同じ。

さち-む［綴］（他、ま下二）事を終（ヲ）み。「卷」。はたす。とぐ。

さちめ［綴］（名）とぢむると。をふると。結局。落

さち-め［綴目］（名）綴ぢたるところ。

さち-めん［栃麵］（名）一種の食品、椹（ヒ）の實の粉をこれて練にて練くのばし、これを切麥の如く製したるもの。

さちめん-ぼう［栃麵棒］（名）《麵麭を製するに、淺（ト）ゆればちゞみて延びざるが故に、棒の使ひ方頗る急を要するよりいふとぞ》麵麭するとうるたゝ（あわつ。あどろきまよふ。——**をくふる**　うるたゝ（あわつ。あそぎなす。「たるもち。

さち-もち［栃餅］（名）栃（ヒ）の果實をまじへつき

さち-やう［斗帳］（名）帳臺の上又は神佛の祠などに垂るゝ小さきとばり。

（**さち-やり**［賭場］（名）賭博を行ふ場所。とば。

ざ-ちやう［泥鰌］（名）㊀【動】脊椎類中どぢやう科に屬する魚、淡水に棲み多く泥中に產す、體長三四寸許、圓筒狀をなし、腹部は普通白く他は暗黑色にして斑點あり、口頭に六條乃至十條の鬚（ヒ）を有す、時々水面に出でゝ空氣を呼吸す。（鰌）。㊁「どぢやうひげ」を生じてある人又は小官吏をあざけりていふ語。——**おる**［泥鰌汁］（名）一種の料理、泥鰌を味噌汁の實となしたるもの。——**なべ**［泥鰌鍋］（名）一種の料理、春間にして骨を去りたる泥鰌に、牛蒡をきゝがしたるものを加へ、これを淺き土鍋にて煮（ニ）て、其上に玉子をかけたるもの。——**ひげ**［泥鰌髭］（名）すこしの口ひげ。うすき口ひげ。——**や**［泥鰌屋］（名）泥鰌をきゝて賣る人又は家。

（**ざ-ちやく**［土着］（名）其土地に住みつきてゐること。「—の人」。

（**さ-ちゆう**［途中］（名）㊀往來のなか。みちなか。（途上）。㊁先方に未だ到着せざる中。ちゆうと。「—からひきかへす」。㊂物事の未だ結了せざる中。はんと。

（**さ-ちゆう**［杜仲］（名）【植】「ささき」に同じ。

（**ざ-ちゆう**［十柱］（名）【地】土の柱狀をなして上に岩石を頂（イタ）きたるもの。

（**ざ-ちゆう**［土中］（名）つちのなか。とちのなか。「—に埋む」。

＋**さ-ちよ-ぐさ**［千千代草］（名）【植】松の異稱。

［**ざち-ら**［何方］（代）㊀いづち。いづかた。㊁いづれ、どれ。

［**さぢる**（他）「とぢ」の訛。

（**さつ**［納］（名）㊀言說の喋々しかちざると。「—於言」。㊁收納行。㊂言語の讒謗すること。どもり。

〔古語　〔俚語　方言　〔字音

（**さつ**［咄］（感）㊀ものたうちの聲。㊁呼びかくる聲。㊂むどろき怪む聲。

さ-づ［閉］（自、た上二）ふさがる。ふさまる。おはばる。むすばる。「氷—」。

さ-づ［閉］（他、た上二）ふさぐ。とざす。おはふ。ふさむ。鎖。

さ-づ［綴］（他、た上二）一つに綴ひつゞる。重ねてつゞる。つゞりあはす。

（**さつ-あふ**［凸凹］（名）たかひく。でこぼこ。

さ-つ-れい-つ（副）《取りつ置きつ》の音便》彼此と思案定まらずして。とやかくと迷ひて。躊躇して。

（**さつ-かつ**［咄喝］（名）聲立てゝ、ふかりつくると。

（**ざつ-かり**（名、副）㊀重きものをおろしおくさま又は體たゆげに腰をおろすさまにいふ語「—坐して」。㊁一時に物事の集まりつどふにいふ語。㊂急に土地などの深くくぼむさまにいふ語。

（**さつ-かん**［吶喊］（名）をめきさけぶと。ときをつくると。「の。

（**さつ-き**［凸起］（名）なかだかくおこると。又、其も

（**さつ-き**［突起］（名）高くおこりたつと。長くのびいづると。又、其もの。

（**さつ-き**［突騎］（名）敵陣に突進する騎兵。

さつき［嫁］（名）とつぐこと。——**-どき**［嫁時］（名）とつぐに適當なる年齡。＋＋——**をしへ-ぐり**［嫁道］（名）男女の交合。＋＋——**-の-みち**［嫁教鳥］（名）【動】「せきれい」の古稱。

（**さつ-きやう**［凸鏡］＝（Convex mirror）（名）【理】中央の凸起せる鏡、光線これにあたるときは發散するを以て、物體の實像を結ぶことなし。

さつ-ぐ［嫁］（自、か四）㊀人の妻となる。よめに行く。えんづく。（廻）。㊁＋＋交合す。

＋**さつ-く**［屆］（自、か四）「とどく」に同じ。

さづ-く［屆］（他、か下二）「とどく」に同じ。

ドック［Dock］（名）造船所にて、艦船を入れて其水線下の修理又は塗換等をなす所。「船渠」。

さ-つ-くに［外國］（名）㊀古昔、畿內以外の諸國の稱「—は水草清し、こと繁き都のうちは住まぬまされり」。㊁我國以外の諸國。でわいこく。「異國、異邦」。

〔**さつ-くに**［疾］（副）「とくに」の訛。

〔**さつ-くの-むかし**［疾昔］（名）最早餘程時を經過したる以前。

〔**さつ-くみあひ**［取組合］（名）とっくみあふこと。

〔**さつ-くみあ-ふ**［取組合］（自、は四）「とっくみあふ」に同じ。

［**さつ-く-む**［取組］（自、ま四）「とりくむ」に同じ。

〔**さつ-くり**［德利］（名）「とくり」の訛。

ご［德利壺］（名）【植】「なついちご」の一名。

〔**さつくり-さ**［熟］（副）よく〳〵。とくと。

（**さつ-くわん**［突貫］（名）㊀つきつゝぬくと。㊁喊喊して敵陣に突擊すると。㊂一氣に進みよると。急激に進みなすと。

（**さつ-げき**［突擊］（名）突進して敵をうつと。

（**さつ-げん**［訥言］（名）㊀喋々しかちざること。は。㊁どもることば。

〔**ざっこい**（感）用意するときに發する語。「—さうは行かぬ」。——**-ぢよ**（感）前條に同じ。

ざっこい（名）小兒の玩具、圓盤を中心より四邊へ引きたる線によりて幾區劃し、獲得物の種類及數を其中に記す、中心にある軸上に自由に回轉する指針樣のものを載（ノ）せ、これを回轉し其止まりて指したる區劃內に志るせるものを取る仕組なり、或は指針を用ひず、圓盤を回轉して、吹矢を吹きあつる仕組のもあり。——**-や**（名）どっこい〳〵を使用し小兒を客として菓子のあてものをなす人。

（**さつ-どつ**［突兀］（名）高くけはしくそびゆると、突（ガ）りてそばだつと。

（**さつ-さ**［咄嗟］（名）㊀志たうちしてうなると。「—赴之」。㊁志ばし。ちよっと。——**-のあひだ**［咄嗟間］（名）ちよっとのま。志ばしのあひだ。

〔**ざっさり**（名、副）㊀重き物の落つるさまにいふ語。㊁數多きさまにいふ語。

（**さつ-さふ**［訥澁］（名）言語のどもり志ぶると。

（**さつ-さふ-ゆつ**［突出］（名）つきいづると、つきでると。「いふ語。

（**さつ-さよ**［突如］（名、副）だしぬけなるさまに

〔**ざっ-さり**（名、副）㊀「どっさり」に同じ。㊁めかたの多きさまにいふ語。

（**さつ-さん**［突進］（名）一氣にすゝむと。たちちはずにすゝむと。つきすゝむと。「擊—」。

（**さつ-せん**［突戰］（名）突進してたゝかふと。「奮

（**さつ-せん**［突然］（名、副）だしぬけなるさまにい

（**さつ-そつ**［突猝］（名）だしぬけ。にはか。「ふ語。

〔**さっ-たか-みたか**（名、副）うんぬてんぬ。いちかばちか。

（**さつ-たかくけい**［凸多角形］（名）【數】各の角がことごとく直角より小なる多角形。

〔**さっ-たり**（名）㊀芝居にて、役者の投したる捕手。㊁《芝居の捕手が常に滑ずるよりいふ》とんぼかへり。㊂相撲（スマフ）の手、敵の手を取り體を後に反（ウ）すやうにしてこれを引き倒すこと。

〔古語　〔俚語　方言　〔字音

〔ぞだ〕[ぞだ]（他'は下一）つかまえる。

〔ぞだ〕[ぞだ]（他'は下一）つかまえる。

〔ぞだ-ち〕[取]（名）とりつぎ。「回」

〔ぞだ-ち-ぐち〕[取口]（名）「とりつぐ」に同じ。

〔ぞだ-ち-けんぶつ〕[取検物]（他'は下一）とりつけること。

ぞて[取手]（名）手にて取り持つべき器具につけ設けたる部。つまみ。柄。（足手）。

〔ぞて-い〕[突出]（名）手用なること。あるく所のなること。「奇策一」

〔ぞて-かく-す〕[取返]（自'さ四）あとくちをかくす。あとくちをかくす。

〔ぞてのつかぬ〕[手]なすべき仕由なくなること。「いひかんやうなし」「一あいさつ」

ぞて（副）❶実人一度に度をたつるさまにいふ語。「一変ふ」（世間胸算）❷病気のいと重くなるさまにいふ語。「一床に就く」

〔ぞと〕[取]（名）《「とる」「とる」の約》えさひ。あるたるもの。「とりあるたるもの」

〔ぞと-ぐち〕[出口]（名）❶えだうちうちの部。又、うちなる部。❷ふとうちをなげうて修ちする部。又は、ふとうちをなげうて修ちする部。——**くわいぶ**[出口怪事]（名）《昔の皇帝の故事に出づ》怪なるもの。けしからぬ事柄。——**ぶんに**[出口文]（名）其さまの如何にも無物なることなるさまにいふ。「ら」

ぞ-ぐち[外口]（名）口を開きたる入口。

〔ぞ-ぶ[突破]（名）❶「ぞぶ」に同じ。❷つきやぶること。「一方を一ぞ」

ぞ-ぶ[頭]（名）甲の部。

〔ぞ-ぶ-ぐつ[結兵]（名）昔時、精鋭なる兵士の部。えりぬきの。

〔ぞ-び[突飛]（名）❶だしぬかにものすること。❷言語などを時をなすこと。「突点」

〔ぞ-ぶり（名'副）❶十分に説明を尽くさず又は説明に間のたるさまにいふ語。❷日のくれはてたるさまにいふ語。「舌」

〔ぞ-べん[説辯]（名）説ずくしてしゃべりたるさま。

〔ぞ-ぶ-ぐち[外宮]（名）❶離宮。❷びんぐう。

〔ぞ-ぶ-ん[凸面]（名）凸起せる面。——**ぞぶ**[凸面鏡]（名）【理】「とつぞぶ」に同じ。

ぞ-レンズ[凸——Convex lens]（名）【理】中央厚く周度に至るに従ひて薄くなりたるレンズ。光線通過すれば其焦点に集折せんとするなり。故に、凸面の正面にある物体等を其後方につくり以て見るべ。凸面鏡・凸面鏡等の光学的効能はこれを以て説ず。

ぞて[沈]（助）《動詞の「ぞ」と「て」との混合りたる語》❶ぞ思ひて。ぞいひて。ぞして。「国を一行く」❷ぞて。ぞてを。ぞいくぞて。「只々ぞ一只々ぞ」「ぞうぞを一」

ぞ-て[十手]（名）❶つゝが。（捕）。❷[魚]の大いなる切身。（東京地方の方言）。

〔ぞ-ていし[徒弟]（名）❶門人。弟子。❷ものぞ。——**がくかう**[徒弟学校]（名）専業学校の一。幼年の学生に職工たるに必要なる学術を教授することを目的とする学校。

〔ぞ-ていつ[沈]（名）すべりかち。——**ぞない**すべりかちにもはず。又、いと間隔けたるさまにいふ。

〔ぞ-ぶ[頭]（名）甲の部。

〔ぞ-ぶ-ぐつ[結兵]（名）昔時、精鋭なる兵士の部。えりぬきの。

〔ぞ-び[突飛]（名）❶だしぬかにものすること。❷言語などを時をなすこと。「突点」

〔ぞ-ぶり（名'副）❶十分に説明を尽くさず又は説明に間のたるさまにいふ語。❷日のくれはてたるさまにいふ語。「舌」

〔ぞ-べん[説辯]（名）説ずくしてしゃべりたるさま。

〔ぞ-ぶ-ぐち[外宮]（名）❶離宮。❷びんぐう。

〔ぞ-ぶ-ん[凸面]（名）凸起せる面。——**ぞぶ**[凸面鏡]（名）【理】「とつぞぶ」に同じ。

ぞ-レンズ[凸——Convex lens]（名）【理】中央厚く周度に至るに従ひて薄くなりたるレンズ。光線通過すれば其焦点に集折せんとするなり。故に、凸面の正面にある物体等を其後方につくり以て見るべ。凸面鏡・凸面鏡等の光学的効能はこれを以て説ず。

ぞて[沈]（助）《動詞の「ぞ」と「て」との混合りたる語》❶ぞ思ひて。ぞいひて。ぞして。「国を一行く」❷ぞて。ぞてを。ぞいくぞて。「只々ぞ一只々ぞ」「ぞうぞを一」

ぞ-て[十手]（名）❶つゝが。（捕）。❷[魚]の大いなる切身。（東京地方の方言）。

〔ぞ-ていし[徒弟]（名）❶門人。弟子。❷ものぞ。——**がくかう**[徒弟学校]（名）専業学校の一。幼年の学生に職工たるに必要なる学術を教授することを目的とする学校。

〔ぞ-ていつ[沈]（名）すべりかち。——**ぞない**すべりかちにもはず。又、いと間隔けたるさまにいふ。

〔ぞば-ら[頭部]（名）はら。頭部。（東京地方の方言）。

〔ぞば-ぶし[度節]（名）昔時、年月とともに新しきものに替り上り新しく出でし節の謂。今流の日にこれを説く。「死」・「離婚」の時は説教する定なり。

ぞば-ら（副）《動詞の「ぞば」に「ら」の語はりたる語》いかやうにもなすとても。いかにしても。どうしても。——**かぞば-ら**（副）つまるところ。ぞんず。所。「所」。

〔ぞば-ら-かぞば-ら（副）ぞんざいかぞんざい。「如何ぞんざい」。

〔ぞば-ら（名）故郷より帰りて見るはじめに住宅に置く器を入れたる箱。箱の類。故郷のたかみ来花の上に寄せ又は置くべき。

〔ぞば[父]（名）「ぞば」の轉。（小兒の語）。

〔ぞば（名）ぞば又は母などの部。（小兒の語）。

ぞば（名'副）ぞばぞばにいふ語。

ぞば（名）【動】大いなる鳥（ぞば）の部。

ドド[切頭]（名）【動】ぞばにおに同じ。

ドド[鳥]（名）【動】「ぞばぞば」に同じ。

〔ぞ-ぶ[度度]（名'副）たび〳〵。ぞば〳〵。

〔ぞ-ぶ[吸吸]（名'副）かぞばぞば又はぞば〳〵。しいふぞばにいふ語。

ぞぶいつ[粉粉]（名）一種の俗曲。ぞ・ぞ・ぞ・ぞ五の四句より成り、唐もひろく流行せるもの。「ぞしこの子」。「粉々語」。

〔ぞ-ぶら[渡頭]（名）わたしば。

〔ぞ-ぶら[粉銚]（名）ぞぞをきわるぞ。ぞぞつかまえること。

ぞぶ-ぶ-にんぶん[沙参]（名）【植】ぞぶぞぶの一名。

〔ぞ-ぶく[粉]（名）❶ぞぞひきのこぞ。ぞぞとり。

ぞ一とふかなる。

ぞぶぶし[鳥]（名）ぞぶぶぞ。

ぞぶぶ-ぶ-ぞぶ[鳥]（他'は下一）❶ぞぶぶぞぶにぞぶりひかれぞぶぞ。❷名を世にひかれぞぶぞ。❸あまねく世にぞぶぞ。「国一はかりなり」。

ぞぶぶ[鳥]（名）ぞぶぶぞ。

ぞぶぶ-ぶ[鳥]（自'は四）❶昔きおたぶぞりひかれぞ。❷名高く世にあらはれぞ。❸あまねく世ゆ。❹設動はげしくなる。

〔ぞぶぶ-ぶぶ[鳥鳥]（名'副）ぞぶぶぞぶにいふ語。

〔ぞぶぶ-ぶか-ぞぶ[鳥]（他'は四）ぞぶ〳〵ぞぶぞぶ。「待ぞ」。

〔ぞぶぶ-ぶ-ぶ[鳥]（自'は四）ぞぶ〳〵ぞぶ。

トナカイ[鳳凰]（名）《アイヌ語 Tonakkai》【動】「ぞぶんぶぶ」に同じ。

どぶた[何方]（代）《どのかたの約》❶いづれの方。いづかた。❷だれ。何人。

どぶ-ぶ[稲]（他'は下一）おいふ。「ぞぶ」。ぞぶぞぶ。

どぶ-ぶ[何]（他'は下一）あまねくぞぶぶし。ぞぶ。

どぶ-ぶ[叫]（他'は下一）❶言ひ出だぞ。いひはじむ。❷うたひ出だぞ。うたひはじむ。❸先んじてぞぶ。ぞしはじむ。❹主張ぞ。いひはじむ。❺ぞぶぞぶ。ぞぶぞぶ。「新しく世これに和ぞ」。❻ぞぶぞぶ。ぞぶぞぶ。❼高く呼ぶ。ぞぶは。ぞ。「道徳ぞ一」。

どぶく[叫]（名）ぞぶぞぶ。

どぶく[稲]（名）ぞぶぞぶ。

〔どぶの-ぶ[鳥]（他'は下一）❶ひとしく。❷ぞぶぞぶ。「貴」。❸全部ぞ。ぞぶぞぶ。❹部類ぞ。ぞぶぞぶ。❺定切ぞ。ぞぶ。❻置子合ぞ。（他）。

どぶの-ぶ[鳥]（他'は下一）❶ひとしくぞぶぞぶ。❷全部ぞぶぞぶ。❸部類ぞ。ぞぶぞぶ。❹定切ぞ。ぞぶ。❺置子合ぞ。（他）。

{どぶのくぶ（他）「どぶのぶ」の轉。

‡**どぶの-ぶ**[鳥]（自'は四）「どぶのぶ」に同じ。

‡**どぶ-ぶ**[鳥]（自'は四）ぞぶ。ぞぶ。（他）。

ドド-ぶつ[鳥]（名）【鳥】ぞぶぞぶに同じ。

どぶぶ-ぶ[止]（自'は四）❶同一の意に帰りて動かず。❷たちとまる。たゝずむ。❸設留ず。ぞぶぞぶ。❹即留ず。とうりうず。❺滞留ず。のこる。

どぶ-ぶ[止]（他'は下一）❶留くてまらしめず。ぞぶ。❷禁留ず。抑止ず。ぞぶぞぶ。❸注意ず。ぞぶぞぶ。「気を一」。❹滞留ず。のこず。

どぶぶ[止]（名）人を殺して其命を制し息の根をとゝめること。——**ぞぶ**[止刺]ぞぶぞぶしあて。轉じて、制御をたしかめあて。

‡**どぶ-ぶ-ぶ**[鳥]（自'は四）❶ぞぶぞぶ。❷おぞ〳〵。「ぞぶ」。支つ。

{**どぶ-ぶ-ぶり**（名）「どぶぶぶり」に同じ。

‡**どぶぶ-ぶり**[禁鳥]（名）【動】禁鳥類の総称。田づ、手・足・嘴を蓄ぶしたるひしとりいふ。「うぶぶ」の語。

{**どぶ-ぶ**[京屋]（名）魚屋の家。（東京地方の方言）。

‡**どぶぶ**[鳥]（名'副）どぶぶぶぶにいふ語。「鳥」。

ぞまるこ。❹全部ぞ。ぞぶぞぶ。❺大部。「鳥大部」。❻同部ぞ。ぞぶぞぶ。十九年に設置せられ同三十七年に廃せられたる最古の全国十二師団を東部・中部・西部に分けて各其一ぞ管轄せしもの。天皇に直隷し陸軍大臣を経て中部を以て現存せられたり。❼一方面に数ひる貴族及び爵を区別する語。「国第一」。

〔ぞ-ぶぶ[京屋]（名）魚屋のぞぶ。

どぶぶ-ぶ[国]（自'は四）いたる。ぞぶぞぶ。達ず。到着ず。

どぶぶ-ぶ[国]（他'は下一）❶いたず。ぞぶぞぶ。❷ぞぶぞぶ。設置ず。❸官に申出づ。

**（どぶぶ-ぶ-ぶぶ-ぶ[都督府]（名）都督官府。

（どぶぶ-ぶ[都督府]（名）都督の事務を管理する所。——**れい**[都督府令]（名）都督が管轄又は特別委任により其管轄内に発する行政命令。

（どぶぶ-ぶ[都督部]（名）東部・中部・西部の各都督部。ぞぶぞぶ。其事務を管理する所。

どぶぶ[国]（名）❶どぶぶぶ。❷どぶぶぶ。書面。——**いで**[国出]（名）官に申出づること。——**ぞき**[国先]（名）どぶぶ設ずべき先方。——**ぞぶ**[国書]（名）どぶぶぶぶ。書面。——**で**[国出]（名）「どぶぶ」に同じ。——**る**（他）「どぶぶ」の語。

どぶ-ぶぶり[治]（名）どぶぶぶぶ。又、どぶぶぶぶりたるもの。「行政の一」。

どぶ-ぶぶ-ぶ[治]（自'は四）《止度》❶どぶぶぶ。❷どぶぶぶ。「国ぶ一」。❸国日暮じ。ぶぶ。❹ぶぶ。「どぶ」。

{**どぶ-ぶ-ぶり**（名'副）はて。ぞぶぞぶ。結局。（到頭）。

どぶの-ぶ[国]（自'は四）❶ひとしく。❷ぞぶぞぶ。「貴」。❸全部ぞ。ぞぶぞぶ。❹部類ぞ。ぞぶぞぶ。❺定切ぞ。ぞぶ。❻置子合ぞ。（他）。

どぶの-ぶ[国]（他'は下一）❶ひとしくぞぶぞぶ。❷全部ぞぶぞぶ。❸部類ぞ。ぞぶぞぶ。❹定切ぞ。ぞぶ。❺置子合ぞ。（他）。

{**どぶのくぶ**（他）「どぶのぶ」の轉。

‡**どぶの-ぶ**[国]（自'は四）「どぶのぶ」に同じ。

‡**どぶ-ぶ**[国]（自'は四）ぞぶ。ぞぶ。（他）。

ドド-ぶつ[鳥]（名）【鳥】ぞぶぞぶに同じ。

どぶぶ-ぶ[止]（自'は四）❶同一の意に帰りて動かず。❷たちとまる。たゝずむ。❸設留ず。ぞぶぞぶ。❹即留ず。とうりうず。❺滞留ず。のこる。

どぶ-ぶ[止]（他'は下一）❶留くてまらしめず。ぞぶ。❷禁留ず。抑止ず。ぞぶぞぶ。❸注意ず。ぞぶぞぶ。「気を一」。❹滞留ず。のこず。

どぶぶ[止]（名）人を殺して其命を制し息の根をとゝめること。——**ぞぶ**[止刺]ぞぶぞぶしあて。轉じて、制御をたしかめあて。

‡**どぶ-ぶ-ぶ**[鳥]（自'は四）❶ぞぶぞぶ。❷おぞ〳〵。「ぞぶ」。支つ。

{**どぶ-ぶ-ぶり**（名）「どぶぶぶぶり」に同じ。

‡**どぶぶ-ぶり**[禁鳥]（名）【動】禁鳥類の総称。田づ、手・足・嘴を蓄ぶしたるひしとりいふ。「うぶぶ」の語。

{**どぶ-ぶ**[京屋]（名）魚屋の家。（東京地方の方言）。

‡**どぶぶ**[鳥]（名'副）どぶぶぶぶにいふ語。「鳥」。

そこうろうき [国語] (名) 「そこうろう」の書。

そこうろう [国語] (名) 「そこうろう」の書。

そこうろう [国語] (名) 「そこうろう」の書。

**そこうろう

の[illegible]。

さびいた 【錆】(名)[illegible]。

さびいたがね 【錆鉄】(名)[illegible]。

さびいたこと 【錆】(名)[illegible]。

さびいたこと 【錆】(名)[illegible]。

さびいたこと 【錆

に。

（そ-ふく［床板］（名）はちをそろえて切断。

（そ-ふく-りゃう［十夜寺］（名）【仏】「きんきらいり（山岡家）」に同じ。

そ-ふこう［戸袋］（名）閉めたる雨戸を納め置くために、軒の間などにつくり設けたるもの。

＋そ-ふさ［鳥瞰］（名）❶古言、鳥夫が山の高を察るために、使（そ）りたる木の端を其様にたてゝ、そなへしもの。❷こずえ。木梢「一ーもたわに」

そ-ふさ-きょう［洗耳除］（名）次様に同じ。

そ-ふさ-ぎょう［洗波］（名）下水を清除してとよどこるを去ること。又其人。

（そ-ブツ［士仏］（名）❶土製の仏像。つちぼとけ。❷（土偶の布袋和尚の姿より転じていふ語）肥えたる人体に婦人を帯びていふ語。「さにいふ語」

{そ-ふん-そふん（名、副）物の水分多くして柔く深きさま。

そ-ぶり［飛鳥］（名）とび行く鳥。——の［飛鳥］（枕）「あすか」に冠らせる詞。——**それざす**　甘藍菜のいとかゝりそめたるさまにいふ語。

そ-ふり-ざう［洗泥］（名）下水の底に沈澱せる土。

そ-ふる-ぬすみ［洗風］（名）❶どぶの石垣などに縋り付き。❷（主人の目をかすめて山海をなす意）頭・手代などの隠。

＋そ-ふ-び［飛火］（名）古言、狼煙などありし時、高く焚きたる篝の上などに、藁を積みて火をを焚き、合図とせしもの。「日ちのうしの刻、一の野守」（蜻火）

そ-ふ-ぼう［坊］（名）ものうる・ぼうまい。

そ-ふ-ぼう［甲］（名）❶死をとぶらふこと。くやみ。❷遺言。遺書。

そ-ふ-ぼう-ふ［訪］（他、は四）安否を問ふ。只訪ふ。あとづる。

そ-ふ-ぼう-ふ［甲］（他、は四）❶人の死をかなしみ其事にある人を見舞ひて、百姓の意を求ず。❷知遇をなす。遺言をなす。

そ-ふ-ぼう［士風堂］（名）士族の風習。

{そ-ふ-ろく［遠離］（名）《徐離は酒の別名》を濃（こ）きさまる清酒。白色にして薄厚なり。多く下戸の人の飲用するもの。もろみ。

（そ-ふん［土墳］（名）つちまんじゅう。つか。

＋そべ［能］（名）孝安。

（そ-ぐい［寸相］（名）北斗星の第七位のもの。

（そ-ぐい［猪牙］（名）かれのこしのかれ。

（そ-ぐい［士兵］（名）其国の兵士。士族の兵士。

（そ-ぐい［士屏］（名）土にてつくりたる塀。

（そ-ぐう-りゃく［士俊］（名）❶土をつゝみ積（こ）みたる壁（ヘキ）。（土壁。❷「ごくうばの略言。——**いり**［士俊人］（名）相撲（スマヒ）にて、力士が化粧廻をつけ土俵場に上り場を整して行ふ儀式。相撲は昔国に於て競馬・太刀持及行司を定くてこれを行ふ。——**宮は**［士俊殿］（名）❶土俵場の土俵の境界。❷物事の際に到来又は成功せんとする際。きはめ。——**ば**［士俊場］（名）相撲を行ふために土俵を以て囲まれたる場。其式のものは内土俵と外土俵とあり、内土俵は十六俵より成り四隅に柱（ハシラ）り、外土俵は其外を囲み二十俵より成り方形にして四方に柱を立てゝ注連（シメ）を張り、花は白色。

そ-ぞ-ぶ-の-き［海桐花］（名）【植】海桐花科に属する大木。葉は常緑にして倒卵形をなし、花は白色にして晩春開花。

そ-ぶ-ぶ［甲］（名）❶死をとぶらふこと。くやみ。❷遺言。遺書。

そ-ぶ-ぶ-ふ［訪］（他、は四）安否を問ふ。只訪ふ。あとづる。

そ-ぶ-ぶ-ふ［甲］（他、は四）❶人の死をかなしみ其事にある人を見舞ひて、百姓の意を求ず。❷知遇をなす。遺言をなす。

そ-ぶ-ぶう［士風堂］（名）士族の風習。

{そ-ぶ-ろく［遠離］（名）《徐離は酒の別名》を濃（こ）きさまる清酒。白色にして薄厚なり。多く下戸の人の飲用するもの。もろみ。

（そ-ぶん［士墳］（名）つちまんじゅう。つか。

＋そべ［能］（名）孝安。

（そ-ぐい［寸相］（名）北斗星の第七位のもの。

（そ-ぐい［猪牙］（名）かれのこしのかれ。

（そ-ぐい［士兵］（名）其国の兵士。士族の兵士。

（そ-ぐい［士屏］（名）土にてつくりたる塀。

（そ-ぐう-りゃく［士俊］（名）❶土をつゝみ積（こ）みたる壁（ヘキ）。（土壁。❷「ごくうばの略言。——**いり**［士俊人］（名）相撲（スマヒ）にて、力士が化粧廻をつけ土俵場に上り場を整して行ふ儀式。相撲は昔国に於て競馬・太刀持及行司を定くてこれを行ふ。——**宮は**［士俊殿］（名）❶土俵場の土俵の境界。❷物事の際に到来又は成功せんとする際。きはめ。——**ば**［士俊場］（名）相撲を行ふために土俵を以て囲まれたる場。其式のものは内土俵と外土俵とあり、内土俵は十六俵より成り四隅に柱（ハシラ）り、外土俵は其外を囲み二十俵より成り方形にして四方に注連を張り、花は白色。

そ-ぞ-ぶ-の-き［海桐花］（名）【植】海桐花科に属する大木。葉は常緑にして倒卵形をなし、花は白色にして晩春開花。

そ-ぶ-ぶ［甲］（名）❶死をとぶらふこと。くやみ。❷遺言。遺書。

そ-ぶ-ぶ-ふ［訪］（他、は四）安否を問ふ。只訪ふ。あとづる。

そ-ぶ-ぶ-ふ［甲］（他、は四）❶人の死をかなしみ其事にある人を見舞ひて、百姓の意を求ず。❷知遇をなす。遺言をなす。

そ-ぶ-ぶう［士風堂］（名）士族の風習。

{そ-ぶ-ろく［遠離］（名）《徐離は酒の別名》を濃（こ）きさまる清酒。白色にして薄厚なり。多く下戸の人の飲用するもの。もろみ。

（そ-ぶん［士墳］（名）つちまんじゅう。つか。

＋そべ［能］（名）孝安。

（そ-ぐい［寸相］（名）北斗星の第七位のもの。

（そ-ぐい［猪牙］（名）かれのこしのかれ。

（そ-ぐい［士兵］（名）其国の兵士。士族の兵士。

（そ-ぐい［士屏］（名）土にてつくりたる塀。

（そ-ぐう-りゃく［士俊］（名）❶土をつゝみ積（こ）みたる壁（ヘキ）。（土壁。❷「ごくうばの略言。——**いり**［士俊人］（名）相撲（スマヒ）にて、力士が化粧廻をつけ土俵場に上り場を整して行ふ儀式。相撲は昔国に於て競馬・太刀持及行司を定くてこれを行ふ。——**宮は**［士俊殿］（名）❶土俵場の土俵の境界。❷物事の際に到来又は成功せんとする際。きはめ。——**ば**［士俊場］（名）相撲を行ふために土俵を以て囲まれたる場。其式のものは内土俵と外土俵とあり、内土俵は十六俵より成り四隅に柱（ハシラ）り、外土俵は其外を囲み二十俵より成り方形にして四方に注連を張り、花は白色。

そえうみ—そぎうしき　そけくきか—もえういも　はへふひは—そぞぶぶ　そぞぶぶ—そぞぶぶ　そぞぶぶ—そぞぶぶ　そぞぶぶ

さほ-ど-し[トオシド][しどし、しどき]〔遠遠〕(形、二)㊀甚だ遠し。いとはるかなり。㊁甚だ疎遠なり。いとうとし。

++**さほ-な**[トオ]〔遠名〕(名) ひろく聞こえたる名。

++**さほ-なげ**[トオ]〔遠投〕(名) とほや。遠矢。

さほ-ね[トオ]〔遠音〕(名) 遠くの方に聞こゆる音。

さほ-の-く[トオ][くがけ、くがけ]〔遠退〕(自、か四)㊀とはざかる。(だゝる。去りぞく。㊁あひを置く。

さほ-の-く[トオ][けがけ、くがけ、くがら]〔遠退〕(他、か下二) とはのかしむ。とほざく。

++**さほ-の-くに**[トオ]〔遠國〕(名) とはき所のくに。

++**さほ-の-みかど**[トオ]〔遠朝廷〕(名)㊀京師より遠く(だゝりたる地の官府。㊁太宰府の古稱。㊂新羅の官家「すめろぎの—とからくにに」。

さほ-のり[トオ]〔遠乘〕(名) 馬に乘りて遠方に遊行すること。えんば。

さほ-ば[トオ]〔遠捧〕(名) よりつかずに隔(ダ)りてとりまくこと。

さほ-ばし[トオ][ばしり]〔遠廻〕(名)㊀とはまはりせさせて送ること。㊁打ちつけならざること。間接にすること。「—にいふ」。

さほ-まはり[トオ][まはり]〔遠廻〕(名) 遠き路をめぐりて行くこと。

さほ-み[トオ]〔遠見〕(名)㊀遠方を見渡すこと。又、遠方より見ること。㊁警戒又は偵察のため、高き所にありて遠方の敵情などをまもり視ること。又、其人。

—**ばん**[遠見番](名) 遠見に出(デ)ぼりてゐるもの。

—**やぐら**[遠見櫓](名) 遠見のために設けたる櫓。

さほ-みち[トオ]〔遠路〕(名)㊀遠き路を歩むこと。えんそく。㊁はるかなる路。遠き路。

さほ-みみ[トオ]〔遠耳〕(名) 遠き所の物事をもよく聞き得ること。

さほ-め[トオ]〔遠目〕(名)㊀遠方より見ること。㊁遠き處のよく見ゆる眼。「—がきく」。

さほ-めがね[トオ]〔遠眼鏡〕(名) 遠方の物を明らかに見する眼鏡。即ち望遠鏡・雙眼鏡等の稱。

++**さほ-めづら-に**[トオ]〔遠珍〕(副) たま〳〵に。たまさかに。まれに。

さほ-ものみ[トオ]〔遠物見〕(名) 物見のため遠き所に出(デ)ぼること。又、其役。

さほ-や[トオ]〔遠矢〕(名) 矢を遠く射ること。とはなに。

++**さほ-やか**[トオ]〔遠〕(名) とはきさまにいふ語。

さほ-やま[トオ]〔遠山〕(名) 遠く(だゝりてある山。

—**けむり**[遠山煙](名) 遠山に立つけむり。

—**ずり**[遠山摺](名) 遠山のさまをすり出だしたる書畫。

さほ-やまざと[トオ]〔遠山里〕(名) 都邑より遠く(だゝりたる山里。

さほ-よせ[トオ]〔遠寄〕(名)㊀「とほまき」に同じ。㊁芝居にて、遠寄のときに打つ太鼓。

++**さほ-よそ**[トオ]〔遠餘所〕(名) (だゝりたる他郷。

さほ-り[トオ]〔通〕(名)㊀とゞくこと。いたること。およぶこと。㊁つちぬき通ずること。つきぬけること。㊂ゆきき。往來。㊃かよひ。流通。㊄あまねくゆきわたること。故障なく行はるゝこと。㊅すぢ。わき。かた。㊆きこえ。評判。㊇もちひ。信用。㊈その如くなること。「前に話したる—」。

—**さほり**[トオ]〔通〕(接尾) くみ。そろひ。「一」「三—」。

さほり[トオ]〔點〕(名) 火のとぼること。火のつくこと。

[**さほり-いっぺん**[トオ]〔通一片〕(名) 通行の途次に宿泊し又は購買したる客にて、平素よりの得意にあらざること。「—の客」。

さほり-かかり[トオ][かかり]〔通掛〕(名) とはりかゝること。「—のもの」。

さほり-かか-る[トオ][かかる]〔通掛〕(自、ら四) 道順にて其所にさしかゝる。

さほり-がけ[トオ][がけ]〔通掛〕(名) とはるついで。「ゝことば」。

さほり-とことば[トオ][ことば]〔通語〕(名) 一般に使用せらるる語。

さほり-ぶみ[トオ][ぶみ]〔通字〕(名) 祖先より代々傳へて實名につくる文字。源氏にて、頼光・頼義・義朝・頼朝・義家・義經などの頼又は義の類。「ゝ名稱。通稱」。

さほり-ぬ[トオ][ぬ]〔通名〕(名) 世に通じて用ひ知らるる名。

さほり-もの[トオ][もの]〔通者〕(名)㊀其名の世間に知れてあるもの。㊁野士。通人。

(**さほ-りよかう**[トオ][かう]〔徒歩旅行〕(名) 徒歩にてとげおほす旅行。

さほ-る[トオ][らり、らる]〔通〕(自、ら四)㊀端より端までとゞく。表より裏までとゞく。徹。㊁往來す。通行す。㊂ぬけ通ふ。つきぬけ通ず。㊃すく。うつる。(透)。㊄經過す。すぎ行く。經。㊅あまねくゆきわたる。故障なく行はる。㊆とゞく。およぶ。ひゞく。㊇室内に入る。座敷に上る。㊈わかる。解せらる。㊉聞こゆ。知らる。

さほ-る[トオ][らり、らる]〔點〕(自、ら四) 火つく。もゆ。ともる。

さほ[佐]〔名) 菅又は茅などにて編み、船などの屋根をおほふ物。とぼ。

ざ-ま[土間](名)㊀家の中に床を張らずして、地面のまゝになりたる處。土場。㊁座居にて、俳臺の正面に設けたる見物人の場席、枡形に區劃したるもの。「の。

さ-ます[斗枡](名) 量一斗を容るゝ枡

さま-すぎ[すぎ、すぐ]〔富〕(他、さ四) とむやうにす。

(**ざ-まつ**[塗抹](名) ぬりつくること。又、ぬり消すこと。「文字を—す」。

ざ-まどひ[マ][戸惑](名)㊀夜中俄に目を覺(サ)まして、方向を失ひ迷ふこと。ねまどひすること。㊁自己の入るべき室又は行くべき家に迷ふこと。

さま-の-や[苫屋](名) 苫にて葺(フ)きたる家。

さま-びさし[苫庇](名) 苫葺のひさし。

さま-ぶき[苫葺](名) 苫にて屋根を葺(フ)くこと。又、其葺(フ)きたる屋根。

—**やね**[苫葺屋根](名) 苫葺の屋根。

さま-ぶね[苫舟](名) 屋根をとまにてゐはひたる舟。

ど-まへ[エマ][戸前](名) 入口の戸のある處。

さま-や[苫屋](名) 苫葺屋根の小屋。

++**さま-やかた**[苫屋形](名) 前條に同じ。

ど-まら(名) ひらき戸のかまちの上下の端に装置し、とぼそにさし入れて閉鎖の用となすもの。

さまり[留、止](名)㊀とまること。又、とまる所。㊁はて。をはり。ためひ。

とまり[泊](名)㊀みなと。ふなつき。(津)。㊁やどり。投宿。㊂やどや。宿屋。㊃とのゐ。宿直。

—**がけ**[泊掛](名) 他に泊まるべき準備にて出かくること。

—**ぎ**[泊木](名)㊀時(ヂ)又は籍に設けたる鳥のとまる横木。宿木。㊁轉じて、裁判所の法廷又は警察署の審問所に、審理を受くるもの丶立てる前に設けたる横木。

—**きゃく**[泊客](名) とまれる客人。(宿客)。

—**ばん**[泊番](名) 交番して官署にとまり夜を守ること。とのゐ。宿直。

—**ぶね**[泊船](名) 碇泊してあるふね。ふながゝりしてあるふね。

—**やど**[泊宿](名) はたごや。やどや。

++—**やま**[泊山](名) 狩獵にて山中に宿すること。

さま-る[ちり、られ]〔留、止〕(自、ら四)㊀動かず。行かず。進まず。移らず。去らず。㊁逗留す。留在す。㊂投宿す。やどる。㊃ふさがる。とゞ。「閉所が—」。

さま-る[ちり、られ]〔泊〕(自、ら四)㊀落に碇泊す。ふながゝりす。かゝる。㊁やどりて、其夜を過ごす。やどる。(宿)。㊂宿直す。とのゐす。

さまれ(副)「ともあれかくもあれ」に同じ。——。

ど-まんぢゆう[土饅頭](名) 土をまんぢゆうの如くに圓く盛り上げたる墓。

さみ[富](名)㊀とむと。㊁集積したる財貨。多大なる財產。㊂一種の賭事。多人數のものより金錢其他の財貨等を醵集し、闔(ガ)を引きて當りたるものに、多額の金錢其他の財貨等を與へて僥倖の利益を得しむると、昔時、我國に行はれたるものは、僧主より富札を配布してこれを買はしめ、一定の期日に其買主を集め、各人の所持せる札と同一記號の札を一切混同して箱に入れ、これを上よりつき刺し、其つき刺されたる札と同一記號の札を有する買主を當籤者と定む。故に富に加はるを富を買ふといひ其籤を引くを富をつくといゝり、而して、籤に當りたるものより、其幾分を他に寄送せしむる定めなりき、現時内地に於ては禁止せらる。

—**をかふ**[とみくじに加入す。

—**をつく** 富の籤を引く。

さみ[頓](名) きふ。にはか。

++**ざ-み**[跡見](名) 狩獵にて、鳥獸の逃(ニ)げたる跡を視て、其行くへを知ること。又其人。「—掘ゑ置き」。

++**ざみ-くさ**[富草](名)【植】稻の異稱。

++**ざみ-かうみ**[カコ][左見右見](副) いろ〳〵さまゝにながめ見て、方々を見て。

ざみ-くじ[富闔](名)「富」(三)に同じ。

ざみ-とうぎやう[ギヤウ][富興行](名) 富闔をもよほし行ふこと。

さみたりう[富田流](名) 槍術の一派、富田牛生を祖とす。

さみ-に[頓](副) きふに。にはかに。

++**ざみ-の-を**[鴟尾](名)「とびのを」に同じ。

++**ざみ-の-を-ごと**[鴟尾琴](名)「とびのをごと」に同じ。

++**ざみ-はた-すすぎ**[富果](自、さ四) 一生有福にてくらす。

ざみ-ふだ[富札](名) 富闔に使用するふだ。各買主にそれを所持して自己の番號札とするもの。

++**ざ-みみ**[敏耳](名) よく聞こゆる耳。

ざみ-もざ[富本](名)「とみもとぶし」の略言。——。

ぶし[富本節](名) 淨瑠璃の一派、もと常盤津節より轉化せしもの。寶暦の頃、富本豐前樣の創始にかゝる。

(**ど-みん**[土民](名) 其土地に定住せる人。土著の民。

ど-むぎ[ぎ、ぎり][富](自、ま四)㊀多く財產を積む。ゆたかに財貨を貯ふ。㊁多く積む。ゆたかに有す。「文才に—」「春秋に—」。

ど-む[ぢ、ぢり、ぢる][止、留、停](他、ま下二)「とどむ」に同じ。

++**ど-む**[ぢ、ぢり、ぢる][尋](他、ま下二) たづぬ。「香をとめて雖折ちざらん梅の花」。

ど-むしろ[藤蓆](名) とうむしろ。

(**ど-むね**[胸](名) とゝろ。むもひ。

ど-むし[蠹](名) 蠹物の一種。

——**をつく** 蠹物を害す。又、びつくりす。おどろく。

どむらひ[トム][訪](名) おとづるゝこと。みまひ。

どむらひ[トム][弔](名)㊀人の死をかなしみ其喪にある人を見舞ひて、哀悼の意を表すること。くやみ。

—どり [共](接尾) 名詞に続いて、比喩をそえる語。「雪—」

どり-あらそい [友争](名) 同士相あらそう。

どり-あれ (副) 如何にもあれ、どうにもあれ。——**かくり-あれ** (副) 前後に同じ。

どり-えり [宿衿](名) 和服にて、衣服と肩に布用を襟の上にかけたもの。

‡**どり-かがみ** [共鏡](名) ❶あはせかがみ。❷鏡と鏡とを重照すること。「とらしあはせ」

どり-がき [友垣](名) ともだち。

どり-かくり [究竟](副) 如何にもあれ、どうにもあれ、とにもかくにも。(東俗)

どり-がしら [作頭](名) 作業の監督する役。

どり-かせぎ [共稼](名) 夫婦又は夫婦が共にかせぎて一家の生計を支へて行くこと。相共に稼ぐこと。

どり-がち [雨](名) 雨ばかりがちなこと。(雨勢)

どり-ぐい [共食](名) ❶同類相食すること。❷一部屋の住民の賃貸料として、互に相利し互に生計を支へゆくこと。

どり-し [燈](名) ❶ともしび。燈火。❷‡古語、貴人が夏の切火田(ジタ)に燈を燃(ト)やして虫を焼き、これを捕ったりしも。(源氏物) ——**ぶち** [燈淵](名) 「ことばしあるように同じ。

‡**どり-し** [天](形シク) ❶珍らしくしてあるべき程。❷良し。‡——**つ-ぶち** [天美](名) ❶いつまでも珍らしく思はるゝ事。最美の事。❷「たなばたつめ(織女)の異稱」「天の川くらしかれたる一」

どり-び [燈火](名) ともしたる火。あかり。あかし。ともし。——**の** [燈火](枕) 「あかし」に続く。「思ふ」

‡**どり-し-ぶち** [天](自ナ変) ともしく

る場所。❹天皇の本名。即ち足はり帝の居る處。❺ことわざ。「所」ことわざ。

どり-ばり [宿針](名) ❶縫物のとき、所目ごとに別に刺(サ)しぬく針。「一を打つ」❷物を縫に刺しとめるに用ふる針。頭部に赤珠(シ)をつけたもの。

どり-やま [宿山](名) 狩猟又は伐木などを業とする山。たてやま。

{**どり-ゆ** [宿湯](名) 浴場にて、月毎に時講の順番をなしあきて、同時入浴すること。(東京の方言)

{**どり-ゆ** (他) 「ことわる」の音。

{**どり-ゆけ** [宿桁](名) 浴場にて、ながしに用ふる小物形の桁。(東京の方言)

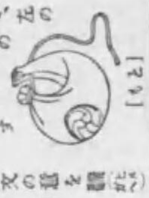
どり [侶](名) ❶ともがら。なかま。(徒) ❷ともづれ。同行。(伴) ❸同類。同僚。(僚)

どり [友](名) ❶親しく交はる人。ともだち。ともがき。(親密)。同友。❷志を同じうする人。同士。

どり [伴](名) つれ立て行く者。すれ。従者。(徒)

どり [疆](名) 船のへり。

どり [柄](名) 古語、弓を射るとき、左の胸(ムネ)に受けたる弦を弦の物。己の身を蔽ひ、矢羽に当て矢ともに弦の胸に触るゝを防ぐためのものにして、又隠れて射を之と、威容を示すものなりといふ。


[もと]

どり [雖](助) 用句を連接して、上文の意を譲(ユズ)る語。未定の場合に用ふ。「況ん—」

どり— [共](接頭) 動詞に冠して、「ともに」の意を表はす語。「一緒」「一同」

{**どり** [吃](名) 「ともり」の略音。

どり [雖](助) 用句を連接して、上文の意を譲(ユズ)る語。既定の場合に用ふ。「況れ—」「況ん—」

どり-ぐち [共口](名) 同じ口。即ち足はり帝の居る處。

どり-ぐま [共熊](名) 同類の木口。即ち足はり帝の居る處。

どり-ぐり [共栗](名) 同類の栗。

どり-ぐるま [共車](名) 同類の車。

どり-ぐるみ (副) 一緒に。

どり-ぐるみ [共](接尾) 名詞に続いて、比喩をそえる語。「一家—」

どやき[土焼](名) つちやき。すやき。

どや-ともり[鳥屋籠](名) とやにこもると。

どや-すがた[鳥屋出](名) 打つなどする。

++どや-たし[鳥屋出](名) とやどもりせる鷹を出すと。「にいふ語。

{どや-どや(名、副) 多人數の一時に入り來るさま。

どや-やま[外山](名) 巡(ゆき)の山。「—のかすみ」。

どやま-がくかう[戸山學校](名) 教育總監の管理に屬し、各師團より選出したる規定の學生に、戰術・射擊・劍術(下士の學生にも授く)の訓練をなし各隊教育の進歩を圖り、諸科學術の調査研究をなし且つ携帶火兵の研究及試驗を行ふ學校。

どや-まさり[鳥屋勝](名) 鷹が羽の脱けかはりたる以後、前よりも勢づよくなると。

どゆき-かりゆき[左行右行](副) あちこちに行きこちこちに行きて。あちらこちらに行きて。

どよ[豐](名) ㊀充分にてあると。ゆたかなると。㊁五穀のみのりよきこと。ほうねん。「—年」。

++どよ—[豐](接頭) 或語に冠して嘆美の意を表はす語。「—氏人」「—宮人」。「の美稱。

++どよ-あきつ-しま[豐秋津島](名) 我日本國の稱。

どよ-あしはら[豐葦原](名) 我日本國の稱。

—の-なかつくに[豐葦原中國](名) 前條に同じ。

—の-みづほのくに[豐葦原瑞穗國](名) 前條に同じ。

(どよ-より[土用](名) ㊀暦にて、十八日を一期としたる季節の稱にして、一年に四度あり、春は清明後十三日より立夏に至るまで、夏は小暑後十三日より立秋に至るまで、秋は寒露後十三日より立冬に至るまで、冬は小寒後十三日より立春に至るまでをいふ。㊁專ら夏の土用の稱。

—きりか[土用三郎](名) 夏の土用の始めより三日目、古來、此日の氣候にて、其年の豐凶をトふべしといへる尼日。

—たけ[土用竹](名) 【植】瓜瓜竹の異稱。

—ねみ[土用涙](名) 夏の土用中、雨に風なくして浪の起こること。

—ばき[土用袴](名) 土用中の煖はちひ。

—ぼし[土用乾](名) むしぼし。

—やすみ[土用休](名) なつやすみ。

++どよ-うぢびと[豐氏人](名) 氏人の美稱。

++どよ-ぐ[自、カ四] 「とよむ」に同じ。

++どよ-さか-のぼ-る[豐榮登](自、ら四) 朝日など盛んに榮えのぼる。

どよとみ-おだい[豐臣時代](名) 天正十三年豐臣秀吉が關白に任ぜられてより慶長三年北堂去に至るまでの間。

++どよ-の-あかり[豐明](名) 《豐は美稱、あかりは酒を飲みて顏の照り赤らむ義》 ㊀朝廷の宴會の總稱。㊁宮。㊂特に新嘗祭の翌日の節會の稱、前日神に供へし稻を、豐樂院にて主上聞こし召し、群臣にも賜はりたり。

—の-せちゑ[豐明節會](名) 前條(二)に同じ。

++どよ-の-あそび[豐遊](名) 豐のあかりのあそび。

++どよ-の-とし[豐年](名) ほうねん。

++どよ-の-みそぎ[豐御秡](名) 大嘗會の後、河原にて行はせらる、御祓。

++どよ-の-みや[豐宮](名) 伊勢の外宮の稱。

++どよ-の-みやびと[豐宮人](名) 宮人の美稱。

++どよま-すがた(他、さ四) とよむやうにす。

++どよ-みき[豐御酒](名) 御酒の美稱。

++どよ-みてぐら[豐御幣](名) 幣(ぬさ)の美稱。

++どよ-むぐらむ(自、ま四) とゞろきひゞく。鳴りひゞく。「よます。

++どよ-むらむ(他、ま下二) とよむやうにす。

どよめか-す(他、さ四) どよめくやうにす。

どよめき(名) どよめくこと。どよめくひゞき。

どよめ-く(自、か四) 鳴り響く。とゞろきひゞく。

++どよも-す(他、さ四) どよめかす。「行く。

++どよ-る(自、ら四) 外の方へ響り

どら[虎](名) 【動】食肉類中猫科に屬する獸、全身黃色にして黑色の斑文を有す、口闊大にして銳利なる牙を有し、趾頭の爪は鉤狀をなして銳し、眼光閃々として性甚だ獰猛なり、「アジア」大陸に產し深林などに棲む、毛皮は珍重せらる。

—をやしなひてうれひをのこす[養虎遺患]諺の勢を養成して、後日のうれひをのこすにいふ。

—をふがきていぬにるるす[畫虎類狗]いとすぐれたる物事をまね、成功せずして甚だ見苦しきにいふ。

どら[寅](名) ㊀十二支の第三。㊁時の名、今の午前四時。㊂方角の名、東と東北との間。

(ど-ら[銅鑼](名) かちかねにてつくりたる盤狀の器、ばちにて擊ち鳴らすもの、今は多く佛家にて用ふ。

[ちど]

{どら(名) はうたう。だらく。「—息子」。

{どら(感) 「どりや」に同じ。

(ど-らい[波來](名) ㊀水をわたり來ると。㊁外國より渡りこえて來ること。「り。

(ど-らう[走勞](名) 無益の勞苦。むだぼねを

(ど-らう[怒涙](名) いかりくるふなみ。

{どらう-つ(他、た四) はうたうにふける。だらくをなす。

どらか-すがた[盪](他、さ四) ㊀迷はして本心をうしなはす。たぶらかして迷ひこます。「男を—」。㊁金屬を熱火にかけてとかす。とかす。「金を—」。「鑄」。

どら-く[盪](自、か下二) 「とろく」に同じ。

ドラクマ(名) 「ダラクマ」に同じ。

どら-げ[虎毛](名) 虎の背上の毛の如く黃赤色にして太き黑線の斑文あるもの。とらふ。

ドラゴーまゆき[—主義=Drago doctrine](名) 《千九百二年の「ヴェネズエラ」事件に因緣して、「アルゼンチナ」の外務大臣「ドラゴー」が主張せし主義》國家は自國民が他國に對して有する債權の強行に、武力を使用すべからずといふこと。

どら-す(他、さ下二) 「取」に同じ。㊁受け收めさす。受けとらす。㊂あたふ。たまふ。「ひまを—」。㊃持ち來らしむ。とり寄せしむ。㊄とり去らしむ。持ち行かしむ。

トラスト["Trust](名) 數個の會社の株主が、株券を擧げて數名の業務擔當者に委托し、業務擔當者が其會社の役員の選定又は業務の經營等をすべて自己の監督の下に統一するをもいひ、又、新に設立せられたる一大會社が、數個の會社の一切の資產權利を買收し、これを支拂ふに新會社の株券を以てするをもいひ、又、數個の會社が一切の資產權利を擧げ、合同して新に一大會社を組織するをもいふ、要するに企業家の合同の稱にして、獨占の傾向を有し利少なからざれど害もまた多し。

トラック["Truck](名) 荷物を運搬する列車。

++どらでん[闘亂旋](名) 「とらんでん」に同じ。

(どら-ねと(名) 飼主なく、さまよひあるきて、よくぬすみぐひなどする猫。のら猫。

どら-の-くち[虎口](名) 「ここう」に同じ。

{どら-の-こ[虎子](名) 《いとけなき虎の義》大切にして手許を離さゞるものにたとへいふ語。

どら-の-まき[虎卷](名) ㊀六輪の一、兵法の部傳を志るせるもの。㊁轉じて、講義又は設計などの根據となるたね本の稱。

どら-の-ゐ[虎威](名) 《とらの威勢の義》いとたけき威光。又、貴人の威光。

—をかるきつね自分のつき志たがふ人の權威を笠に着て、はゞを利かす小人などにいふ。

どら-の-を[虎尾](名) ㊀【植】櫻草科に屬する草、遇地などに生ず、葉は長楕圓形又は披針形にして周端尖り、短き葉柄を具す、花は小形五瓣にして淡紫色を呈し、夏の末に開く、花序は密生せる花より成り、其上部は下垂す、觀賞用として栽培せられ、又、葉は食用に供せらる。「珍珠菜」。㊁虎の有する長き尾。

—をふむ甚しき危險を犯すにいふ。

どらは-る[囚](名) ㊀とらへられたるもの。めしうど。とりこ。

—もの[囚者](名) 前條に同じ。

どらはれ[囚](名) ㊀とらへられたるひと。めしうど。とりこ。

—びと[囚人](名) とらはれたるもの。めしうど。とりこ。

—いし(自) 「とらはる」の訛。

{どら-ひげ[虎鬚](名) 鬚(ひげ)にして虎斑の如き斑文ある

どらふ[虎斑](名) 「とらげ」に同じ。

{どらふ[虎斑石](名) 黃色にして虎斑の如き斑文ある石。

—たけ[虎斑竹](名) 【植】竹の一種、幹に虎斑のあるもの。まだらだけ。(斑竹)。

どら-ふ[捕](他、は下二) ㊀きびしく持つ。かたく握む。㊁とり抑ふ。おさへ取る。㊂罪人をとりおさへて其自由を奪ひ、これをつなぎとゞむ。かちめとる。「斑のあるもの。

どら-ふぐ[虎河豚](名) 【動】ふぐの一種、皮に虎斑あり。

どらへ-どころ[執處](名) とらへて論點となし又は證據となすべき側所。

どらへ-びと[捕人](名) とりこ。又、めしうど。

トラホーム["Trachoma](名) 一種の眼病、眼瞼の內面に白色若しくは灰白色の顆粒を生じ次第に蔓延增大して遂に角膜を侵し、甚しきに至りては失明するとあり、傳染す。

ドラム["Dram](名) 「ダラム」に同じ。

どら-らん-でん[闘亂旋](名) 舞樂の曲。

トランプ["Trump](名) 西洋より傳來したる一種の遊戲、又、其遊戲に使用する骨牌(ふだ)、骨牌はスペード、ハート、「クラブ」、「ダイヤモンド」の四つに分れ、各〳〵王・女王・兵卒の像あるもの三枚と一點より十點に至る十枚と組合十三枚あり、これを各人に配りて行ふ、種々の方法あり。

どり[鳥](名) ㊀【動】鳥類に屬する動物の稱。(禽)。㊁鶏の特稱。

どり[酉](名) ㊀十二支の第十位。㊁時の名、今の午後六時。㊂方角の名、西方。

どり—[取](接頭) 或語に冠して、語勢を強むるに用ふる語。「—あつかふ」。

どり[取](名) とること。

{どり(名) 鳥又は兎などの肺臟、紅血色を呈す、俗に霜分を含めるものといふは誤りなり。「鳥は食ふともーくふな」。

えりがしら—**えりくび**

えりがしら[襟頭部から肩に掛けて用いる]

えりがしら[襟頭部の肩の部分]

えりがしら[襟頭部の肩の部分]

えりがしら[襟頭部の肩の部分

う[ー]〔取越苦勞〕(名) 將來の事をあれこれと考へ迷ひて、徒に心をいためくるしむること。(杞憂)。

とり-と-す[ー]〔取越〕(他、さ四) 一定の期日又は通例よりも早くとりあつかふ。

とりと-とりよめ〔取子取飯〕(名) 息子も其嫁(ヨメ)も共に自分の子にあらずして、他家より迎へたるもの。夫婦養子。

とり-とはし[ー]〔取毀〕(名) とりこはすこと。

とり-とは-す[ー]〔取毀〕(他、さ四) こはしてとりのぞく。

とり-とみ〔取込〕(名) ㊀收入。收穫。㊁ごたごた。「混雜」。

とり-と-む〔取込〕(他、ま四) ㊀とりて內に入る。とりて內に收む。㊁我手に取り入る。

とり-と-む〔取込〕(自、ま四) 事件集まりつどふ。忙しくあり。

とり-と-む〔取籠〕(他、ま下二) ㊀ゐしこむ。入れこむ。㊁とりかこむ。かこむ。「八騎が中にとりこめられ」。

†**とりとめる**(他) 前條の訛。

とり-とも-る〔取籠〕(自、ら四) 《「とり」は接頭語「こもる」に同じ。

とり-とろ-す〔取殺〕(他、さ四) 崇(タタリ)りて命をとる。たゝりて殺す。「與ふるもの。

とり-ざかな〔取肴〕(名) 酒の肴、篋(ハシ)にとりて

†**とり-ざか**〔鶏冠〕(名) 「とさかに同じ。——の

り〔鶏冠菜〕(名) 【植】「とさかのり」に同じ。

とり-さ-ぐ〔取下〕(他、か下二) 官に差し出し又は預け置きたるものをとりもどす。

とり-さげ〔取下〕(名) とりさげること。†——る(他)「とりさげる」の訛。

とり-さし〔鳥刺〕(名) ㊀細長き竿の端に鳥黏(モチ)をつけ、小鳥を刺して捕ふること。又、其人。さいとりさし。㊁一種の遊戲、殿樓・用人・鳥刺及各異なる鳥を畫きたる札を一枚づゝ各人に分配し、殿樓の札を持てるものが、用人の札を持てるものに鳥を刺せと命ずれば、命を受けたるものは、更に鳥刺の札を持てるものにこれを傳ふ、斯くて鳥刺の札を持てるものは、各自鳥の札を秘して持てるものをいひあつり、指定せられたる鳥の札を持てるものなり。——**さを**〔鳥刺竿〕(名) 鳥刺に用ふる竿。

とり-さた〔取沙汰〕(名) 世上の評判。世間のうはさ。「物騷、風說」。

†**とり-さ-ふ**〔取支〕(他、は下二) 相撲ふもの丶間に立ち入りて、これをさゝへ止む。仲裁す。(取遮)。

とり-さを〔鳥竿〕(名) 「とりさしざを」に同じ。

†**とり-さで-て**〔取垂〕(副) たれさがらせて。垂だれしめて。「木綿ー」。懸。

†**とり-さば-る**〔取縛〕(他、ら四) いときびしくとる。かたくにぎる。(急縛)。

とり-さまり〔取締〕(名) ㊀とりしまりやくしの略言。——**やく**〔取締役〕(名) 【法】株式會社の重役、會社を代表し會社の業務を執行するもの。

とり-さま-る〔取締〕(他、ら四) きびしく統(ス)べ治む。堅くとゝめいましむ。管理す。

とり-さら-ぶ〔取調〕(他、は下二) 《「とり」は接頭語「つゝ」に同じ。

とり-さらべ〔取調〕(名) とりさらぶること。——る(他)「とりさらぶる」の訛。

†**とり-すぶ**〔執〕(他、さ變) 心をとゞむ。執心す。「とりする事ども」。

とり-すが-る〔取縋〕(自、ら四) 《「とり」は接頭語「すがる」に同じ。

とり-す-つ〔取捨〕(他、た下二) すて除く。とりのぞく。

とり-すて〔取捨〕(名) とりすつること。†——る(他)「とりすつる」の訛。

とり-す-ぶ〔取總〕(他、は下二) 《「とり」は接頭語「すぶ」に同じ。

とり-そ-ふ〔取添〕(他、は下二) 《「とり」は接頭語「そふ」に同じ。

†**とり-そへる**(他) 前條の訛。

とり-ぞめ〔取染〕(名) 五色の橫糸を押しよせたる「赤ぼり織」。

とり-そろ-ふ〔取揃〕(他、は下二) もちろくあつめよす。もれなくそろへあつむ。

とり-そろへ〔取揃〕(名) とりそろふること。†——る(他)「とりそろふる」の訛。

とり-だか〔取高〕(名) ㊀收入の高。收穫の高。㊁俸給の高。扶祿の高。

とり-だ-す〔取出〕(他、さ四) 「とりいだす」に同じ。

とり-だすき〔鳥襷〕(名) 鷹などの鐵模樣の名。經橫の波線の中に尾の長き鳥の二羽相向かひたる形を織り出だしたるもの。

とり-た-つ〔取立〕(他、た下二) ㊀帶頭す。ひいきす。㊁強制して集む。催促して集む。徵收す。㊂登用す。あげもちふ。㊃推薦す。とりもつ。㊄あたつ。をしふ。㊅あげ說く。かぞへ言ふ。

とり-たて〔取立〕(名) ㊀強制してとること。催促してとること。「年貢の—」。㊁あげもちふること。登用。「太閤の—」。㊂とりもち。推薦。㊃あたこみ。數學。㊄ひいき。愛顧。㊅取りて閒のなきこと。——**めいれ**

い〔取立命令〕(名) 【法】裁判所が差押債權者に對し其申請により、債務者に代はりて其債權を第三債務者より取立つることを得る權を與ふる命令。

†——**る**(他)「とりたつ」の訛。

トリチェリーの-まんくう〔—眞空〕=Torricellian vacuum)(名) 【理】「「メートル」許の「ガラス」管に水銀を充(ミ)て、これを水銀槽中に倒立するとき、內部の水銀降りて、上部に生ずる眞空の稱。「イタリー」國人「トリチェリー」の考案による實驗なるが故に此名あり。

とり-ちが-ふ〔取違〕(他、は下二) ㊀あやまり取る。あやまり持つ。㊁あやまり聞く。あやまり解す。

とり-ちがへ〔取違〕(名) とりちがふること。

†——**る**(他)「とりちがふる」の訛。

とり-ちら-す〔取散〕(他、さ四) ㊀そこゝに亂し散らす。㊁片附けず。擴除せず。

とり-つき〔取附〕(名) ㊀とりつくこと。㊁はじめ。初手。——**まんしゃり**〔取附身上〕(名) 新所帶。あら所帶。

とり-つぎ〔取次〕(名) ㊀とりつぐこと。㊁とりつぎ人。——**まよ**〔取次所〕(名) 取次をなす所。——**にん**〔取次人〕(名) 取次をする人。

とり-つ-く〔取附〕(自、か四) ㊀すがり寄る。たよる。すがる。㊁なし始む。着手す。㊂くみつく。引きくむ。㊃端緒を得。手がゝりを得。㊄職業を得。職務を得。㊅たゝる。遷(ヨ)る。「孤がー」。——**まば**〔取附島〕(名) とりつく所。

とり-つ-くろ〔取附〕(他、か下二) ㊀其物を他物の上に裝置す。㊁自分の手許にをさめとる。

とり-つ-ぐ〔取次〕(他、か四) ㊀其物に立ちて物事を傳へ、致す。紹介す。㊁語質す。小質す。㊂來客の趣を主人に告ぐ。㊃上申の事を主君に傳ふ。

とり-つくろひ〔取繕〕(名) とりつくろふこと。

とり-つくろ-ふ〔取繕〕(他、は四) 《「とり」は接頭語「つくろふ」に同じ。㊁生計を立てゝ行く。

†**とり-ちと**〔取止〕(名) とりとまること。

とり-ちと-む〔取止〕(他、ま下二) ㊀たしかに取る。たしかと取る。㊁たしかなることを證す。たしかに認む。㊂まとむ。つゞむ。

とり-ざめ〔取留〕(名) ㊀とりとむること。㊁まとまり。つゞまり。「ーのない事をいふ。」——**る**(他)「とりとむる」の訛。

とり-ざ-ま〔取止〕(名) とりとまること。

とり-ざま-る〔取止〕(自、ら四) ㊀とまる。とゞまる。㊁まとまる。つゞまる。

とり-ざ-む〔取止〕(他、ま下二) ㊀たしかに取る。たしかと取る。㊁たしかなることを證す。たしかに認む。㊂まとむ。つゞむ。

とり-ざ-ま〔取止〕(自、ら四) ㊀とまる。

とり-ざ-る〔取止〕(自、ら四) ㊀とまる。

とり-ど〔取取〕(名、副) 思ひ〳〵。いろ〳〵。「うとりとむ」の訛。

とり-ねし〔執成〕(名) とりなすこと。

とり-ね-す〔執成〕(他、さ四) ㊀此物を夏へて敎の物とす。㊁よきやうにはからふ。うまくいひなす。㊂推薦す。すゝめあぐ。㊃仲裁す。あつかふ。㊄媒介す。とりもつ。

とり-ねは[ー]〔捕繩〕(名) 人を捉(ツ)へて縛る繩。「はやなは。

とり-ねほ-す〔取直〕(他、さ四) ㊀あらためなほす。あらためかふ。「氣をー」。㊁持ちたるさまをかふ。もちなほす。「刀をー」。

とり-ならーぶ〔取並〕(他、は下二) 《「とり」は接頭語「ならぶ」に同じ。

とり-にが-す〔取逃〕(他、さ四) 捕へかけて逃(ニ)げらる。又、捕へて逃げらる。

とり-にげ〔取逃〕(名) 他人の物をうばひとりてにげ去ること。

†**とり-の-あそび**〔鳥遊〕(名) 鳥獵のあそび。

とり-の-あと〔鳥跡〕(名) ㊀鳥のあしあと。㊁支那の黃帝の時、蒼頡といふ人、鳥の跡を見て文字を作りたりといふ故事に出づ。國字又は其手蹟にいふ語。

とり-の-いち〔酉市〕(名) 酉町に同じ。

とりのき-むぶん〔取退無盡〕(名) 富籤に類し

ばりーきゅ [野球] (名) 野球。

ばりーぜる [バリーゼル] (名) 馬具の一。

ばりーと [バリート] (名) 低い音。

ばりーとん [バリトン] (名) 中音。

ばりーの [バリーノ] (名) 楽器の一。

ばりかた [バリカタ] (名) 硬い。

ばりかたーぱん [バリカタパン] (名) 硬い。

ばりかたーぱん [バリカタパン] (名) 硬い。

ばりかたーぱん [バリカタパン

「主人を—」。㊁己の顧客とす。己の旦那とす。(妾又は藝妓などにいふ)。

ドル[弗](名)「ドルラル」に同じ。

トルイヂン[Toluidine](名)【化】「トルエン」を硝酸にて處理したる後、水素にて還元して得るもの。これを適當なる方法にて酸化するときは、美麗なる數多の染料を生ず。

トルエン[Toluene](名)【化】石炭「タール」より得る稀薄なる無色の液體。

トルコ-たま[土耳古玉](名)【鑛】燐酸礬土の非結晶物。青色又は綠色にして装飾用に供せらる。

トルコ-ぼうし[土耳古帽子](名)「トルコ」國人の多くかぶる帽子。圓壔狀をなし、上平かにして其中央にふさをつく。

ドル-さうば[弗相場](名)内國の金銀貨と外國の金銀貨との空相場。又、其空相場を利用してなす取引。明治維新の際、横濱などにて盛んに行はれしもの。

ドル-ばと[弗匣](名)㊀金庫(二)に同じ。㊁[俗]者などの旦那と仰ぎ[ア]ぐ人。

ドルラル[Dollar](名)「アメリカ」合衆國及「メキシコ」の銀貨の名。凡そ我國の一圓餘に當たる。(弗)

どれ[何](代)㊀いづれ。どちら。(數)。㊁だれ。たれ。

どれ(感)いざ。いで。「—見やう」。

どれい[奴隷](名)㊀おもゝ。やつこ。下男。(徒隷)。㊁自由を束縛せられ、牛馬同樣に使役せられて、國法の保護を受くることを得ざる人。㊂其ものゝ、ために束縛使役せられてあると。「金錢の—」。——**せいど**[奴隷制度](名)奴隷に國法の保護を與へず、これを牛馬同樣に使役することを許可する制。

どれう[塗料](名)ものに塗(ス)る材料。[度。

どれき-せい[土瀝青](名)【鑛】石炭の所在地より出づる一種の鑛物。多くは塊狀をなし、質緻密にして黑色を呈す。黑煙をあげ臭氣を發して燃燒す。諸種の用に供せらる。

どれつ[駑劣](名)にぶきと。おとると。

どれ-もの[取物](名)とりか。收入。

どろ[澤](名)河水の波靜かなると。又、其所。

どろ[泥](名)自己の意見をのべあらはすと。

どろ-ろ[吐露](名)水に雜(ゼ)りて柔かくなりたる土。(游泥)。

どろ(名)「どろぼう」の略言。

どろ-い(形)のろし。

トロイ-オンス[Troy ounce](名)「トロイ」衡の單位。四八〇グレインに等(ヒ)しく、我國の八・二九四匁に當る。

トロイ-かう[—衡](名)=Troy weight](名)「イギリス」國にて、金銀・寶石等を量る衡量。

トロイ-ポンド[Troy pound](名)「トロイオンス」の十二倍。我國の九九・五三匁に當る。

どろ-うみ[泥海](名)泥水をたゝへたる海。

どろか-す(他、さ四)とろくるやうにす。とろけしむ。とろかす。

どろ-がめ[泥龜](名)【動】「すっぽん」に同じ。

どろ-く[澤蕩](自、か下二)㊀本心うせて茫然となる。心亂れて茫だちなくなる。㊁固體とけて流動體となる。(鑄、鑄)。

どろける(自)「とろくる」の訛。

どろ-ろ(形、二)にぶし。のろし。よわし。

どろ-たらけ(名)泥にまみるゝこと。

どろ-つく(名)とろぼう。

どろ-どろ(名、副)㊀固體とけて流動體となりたるさまにいふ語。㊁[俗]事をかくす妖術。にんにゝ。

どんがらか-す[尖](他、さ四)「とがらかす」に同じ。

どんぐり[殿](接尾)《どの》の音便》下輩を呼び又は奴婢などの相呼ぶに、其名の下に添ふる語。地方によりては同輩にも用ふ。「權助—」。

どんあい[貪愛](名)㊀むさぼりをしむこと。㊁[佛]愛情に執著すること。「と。

どんいつ[遯逸](名)世の中をのがれかくるゝこと。

どんえい[屯營](名)兵士のたむろする營所。たむろ。陣屋。

どんえい[曇翳](名)くもり。かげ。

どんえふ[嫩葉](名)わかば。ふたば。

どんか[嫩芽](名)わかめ。

どんかく[鈍角](名)【數】九十度以上百八十度以下の角度。——**さんかくけい**[鈍角三角形](名)【數】一つの角が鈍角なる三角形。

どんがめ[團龜](名)【動】《どろがめ》の轉》「すっぽん」に同じ。——**さる**[團龜笊](名)「かめのこざる」(龜子笊)に同じ。

どんかふ[遁甲](名)人目をまぎらはして身體をかくす妖術。にんにゝ。ちくしゅつ。

どんがらか-す[尖](他、さ四)「とがらかす」に同じ。

どんき[鈍才](名)にぶき才。おろかなる才。

どろ(名)「とろろ汁」の略言。——**おろ**[擂蘿汁](名)《とろ〳〵する汁の義》一種の料理、寒預(イセエビ)を擂(ス)り、味噌汁などにて煮(ト)かしたるもの。とろゝ。

どろろ-く(自、か四)「とろくる」に同じ。

どろん(名)ずりぬけてにげること。

どろ-わた-る[雁](名)「雁の羽風」。

どろ-わた-る[疾渡](自、ら四)はやく渡る。「—課訪の—」。

どろ-わた-る[門渡](自、ら四)瀬戸を渡る。

どろ[土居](名)城のまはりの土の堤(ヒ)。つちゐ。城壁。——**ふき**[土居葺](名)こけらを粗く葺(フ)きて、其上に瓦を葺くもの。

どろ-ろ-きん[斗篷巾](名)琴の第十一絃を斗といひ、第十二絃を篷といひ、第十三絃を巾といふ。

どろ-ろん-さつ[兎園冊](名)㊀俗人の解し得るほどのやくざの冊子。㊁自分の著書などの謙稱。

どを[十](名)(數)五の二倍。ぢふ。

どを-か[十日](名)㊀十晝夜の日數。(盈旬)。㊁朔日より第十日目の日。——**-えびす**[十日惠比壽](名)正月十日に行ふ攝津大阪今宮の蛭子神社の祭事。——**-の-きく**[十日菊](名)《九月十日即ち菊節句の翌日の菊の義》機會におくれたる物事にいふ語。

どを-だんご[十團子](名)駿河國宇都谷峠の龍にて賣る名代の團子。種々の色に染めたる小さき團子を十個づゝ一串につけたるもの。「同じ。

どを-の-いましめ[十戒](名)【佛】「ぢっかい」に

どを-む(他、ま四)「たわむ」に同じ。

どを-よ-る(他、ら四)「たわむ」に同じ。

どを-に(副)「たわわに」に同じ。

トン[楯](名)《字の唐音》陶製の支那風の腰掛。

トン[噸=Ton](名)「アヴォイルヂュポイス」衡の單位。即ち二二四〇「ポンド」の稱にして、我國の二百七十一貫に當る。「アメリカ」にては二〇〇〇「ポンド」を一トンといひ、二二四〇「ポンド」のものを「ロング、トン」(長噸)と稱す。

どん[鈍](名)にぶきと。のろきと。

どん[貪](名)㊀むさぼると。をしむと。㊁[佛]事物に執著してこれに親近せんとする妄念。

どん(名)㊀銃砲の彈丸を發射するもと。つゝもと。㊁師團などの所在地にて、砲發して正午を知らせるより、轉じて、午砲の稱。

—どん[殿](接尾)《どの》の音便》下輩を呼び又は奴婢などの相呼ぶに、其名の下に添ふる語。地方によりては同輩にも用ふ。「權助—」。

どん-あい[貪愛](名)㊀むさぼりをしむこと。㊁[佛]愛情に執著すること。

どん-いつ[遯逸](名)世の中をのがれかくるゝこと。

どん-えい[屯營](名)兵士のたむろする營所。たむろ。陣屋。

どん-えい[曇翳](名)くもり。かげ。

どん-えふ[嫩葉](名)わかば。ふたば。

どん-が[嫩芽](名)わかめ。

どん-かく[鈍角](名)【數】九十度以上百八十度以下の角度。——**さんかくけい**[鈍角三角形](名)【數】一つの角が鈍角なる三角形。

どん-がめ[團龜](名)【動】《どろがめ》の轉》「すっぽん」に同じ。——**さる**[團龜笊](名)「かめのこざる」(龜子笊)に同じ。

どん-かふ[遁甲](名)人目をまぎらはして身體をかくす妖術。にんにゝ。ちくしゅつ。

どん-がらか-す[尖](他、さ四)「とがらかす」に同じ。

どん-ぐり[團栗](名)【植】殼斗科に屬する植物の果實の稱。堅果にして總苞の變態なる殼斗につゝまる。(無食子、櫟子)。——**-まなこ**[團栗眼](名)まるくしていやしげなる眼。——**のたけくらべ**すべて凡庸にして、彼此高下なきにいふ。「なると。

どん-ぐわん[鈍頑](名)のろくしてかたくなな

どん-けん[豚犬](名)《「ぶた」と「いぬ」との義》魏の曹操が劉表昇兒子若豚犬耳といひし言に出づ》あろかなるこども。ばかなせがれ。「たる見。

どん-けん[貪見](名)【佛】順境の物事に執著し

どん-ど[頓悟](名)にはかにさとりのひらくること。たちまち智見ひらめきて眞理を洞觀すること。

どん-とう[敦厚](名)正直にして親切なること。人情のあつきこと。

どん-とん[鈍根](名)才智のするどからざること。智能のにぶきこと。

どん-ざ[頓挫](名)㊀にはかに勢のくじけよわること。㊁漢文にて、文勢の急に轉折すること。

どん-さい[頓才](名)機に應じ變に處してはたらく才。さそくのきく才。

どん-さい[鈍才](名)にぶき才。おろかなる才。

又、其才の人。

(さん-ざい[屯在](名) たむろしてあると、あつまりあると。

(さん-ざん[遯竄](名) のがれかくるゝと。「竄」。

(さん-ざ[頓死](名) にはかに死ぬると。急に死ぬると。(暴死、卒死)。

(さん-ざ[遁辭](名) 関係又は答辯などをまぬかれんためにいふことば。のがれことば。にげ口上。

(さん-ざ[豚兒](名) ㊀あろかなるこども。ばかなせがれ。㊁他に對して、我が子の謙稱。

どんざう-の-うを[呑舟魚](名) 《舟をも呑むほどの巨大なる魚の義》大人物。又、大奸魁。

(さん-ざき[屯食](名) 古昔、下臈に與へし強飯。握飯などの稱。

(どん-ざき[鈍色](名) にび色。

(どん-ざつ[鈍質](名) にぶき性質。

(さん-ざふ[屯集](名) たむろすると。あつまりあると。

(どん-ざまひ[マイ](名) 最後。どん尻。

(さん-ざや[頓舍](名) 軍隊などのやどり。

(さん-ざやう-ボダイ[頓生菩提](名) 【佛】事機に際會して急ち菩提に入ると。

(さん-ざゆ[頓首](名) ㊀支那の禮式、頭にて地を叩(タタ)き又は頭を地まで さげて拜禮すると。㊁書簡又は上書等に用ひて、深き敬意を表する語。「—再拜して白す」。

(さん-ざゆ[屯聚](名) あつまりあると。たむろすると。

(さん-ざゆ[屯守](名) あつまりまもると。

(さん-ざゆ[屯戍](名) 兵士のたむろして邊地をまもると。又、其兵士の營所。

(さん-ざゆつ[遁出](名) のがれいづると。にげいづると。

(さん-ざゆつ[遁術](名) 「とんかふ」遁甲」に同じ。

(さん-ざよ[屯所](名) たむろ所。たむろ。

(さん-ざよく[疊色](名) くもれる色。又、鮮明ならざる色。

(さん-ざよく[貪食](名) むさぼりくらふと。

(どん-ざり[マイ](名) をはり。どん尻。

(さん-すぜ[ずせ]ず[ずせず]する。[屯](自、さ變) あつまりまもる。あつまりとゞまる。

(さん-すぜ[ずせ]ず[ずせず]する。[屯](他、さ變) あつめまもる。あつめとゞむ。

ドン-ス[緞子](名) 《字の唐音》錦絲にて織りたる織物、地厚くして光澤多し、多くは紋織なり。

トン-すう[噸數](名) 船舶の容量、軍艦のは排水量にてはかり、商船のは載積量にてはかる。

トン-ぜい[噸稅](名) 入港したる外國貿易船に對し、其噸數に賦課する租稅。

(さん-せい[逝世、遁世](名) ㊀世をのがれて佛門に入ると。㊁戸主たる地位を去りて世事に關せざると。隱居。

(どん-ぜい[呑噬](名) かみくらふと。

(さん-せい-ぢゃ[遁世者](名) 遁世したる人。

(さん-そう[遁走](名) のがるゝと。にぐると。しると。逃走。

(さん-だ(形) 意外なり。案外なり。

(さん-たう[遁逃](名) のがるゝと。にぐると。

(どん-たう[鈍刀](名) 切味にぶき刀。なまくら刀。

ドンタク(名) 《オランダ語、Zun dag の訛》日曜日。轉じて休日。

(どん-ち[頓智](名) 機に應じ變に處してはたらく智識。さとくのちゑ。機智。

(どんちき[頓痴氣](名) まぬけ。のろま。

ドン-ちやう[緞帳](名) ㊀だんだら染のある幕。㊁上より吊りおろす下等なる幕。㊂「ドンちやう芝居」又は「ドンちやうやく芝居」の略言。——-ぢばる[緞帳芝居](名) 《昔時、下等の芝居は引幕を用ふることを許されず皆な垂幕を用ひしよりいふ》下等の芝居。——-やくぢや[緞帳役者](名) 緞帳芝居の役者。又、下手な役者。

(さん-ちやく[頓着](名) 《次條の轉訛》拘念、心配。顧慮。「—無し」。

(どん-ちやく[貪着](名) 【佛】足るを知らずして、ますゝ進みてやまざると。

(さんちんかん(名) 《鍛冶の槌の音に出づ》事物の齟齬又は前後すると。

(どん-つく[鈍突](名) 下等なる布子。——-ぬのこ[鈍突布子](名) 前條に同じ。

(どん-づまり(名) 物事のはて。とゞのつまり。どん尻。最後。

(どん-づめ(名) 前條に同じ。

(さん-でん[屯田](名) 兵士を土着せしめ、平時は農耕に從事し、有事のときは軍隊を組織して戰爭に從事せしむると、即ち兵農相兼ねしむる間。

(どん-てん[曇天](名) くもりたるそら。

(さんでん-がへし[エシ](名) まつさかさまに物事をかへすと。「かへると。

(さんでん-がへり[エリ](名) まつさかさまに物事のさんでん-へい[屯田兵](名) 屯田の制によりて設けおく兵、我國にては明治三十七年迄北海道に設置せられたり。

(さん-ど(副) ㊀一向に。すこしも。たえて。「一氣が付かぬ」「頓」。㊁「どんと」に同じ。

(さん-ど[爆竹](名) 「さぎちやう」左義長」に同じ。

(どん-ど(副) ㊀強く擅(ヅ)くさまにいふ語。㊁彈丸を發射するさまにいふ語。㊂物の落ちひゞくさまにいふ語。㊃十分に。澤山に。

ドンドル(名) 《「オランダ」語 Donder》小鼓の笞に塗りたる藥、打てば火を發するもの。

(さん-どん(名、副) ㊀雙方同一なるさまにいふ語。㊁板敷などを勢よく履(フ)む音などにいふ語。㊂戸を叩(タタ)く音などにいふ語。㊃物事のさはりなく進むさまにいふ語。——-ぢやう[ヒヨウ](名) 仕合よく物事のさはりなく進み行くと。

(どん-どん(名、副) ㊀太鼓を打つ音のさまにいふ語。㊁彈丸をつゞけて放つ音のさまにいふ語。㊂板敷などを強くふみ又戸を強く叩(タタ)く音のさまなどにいふ語。㊃水の勢よく流れ落つるさまにいふ語。㊄ためらはず進みなすさまにいふ語。——-ばし(名) 歩めばどん〳〵と音する木のそり橋。

(どん-な(形) どのやうな。いかなる。何樣。「—に(副) どのやうに。如何に。

(さん-に[頓](副) にはかに。きふに。

(さん-にく[豚肉](名) ぶたの肉。

トンネル[隧道=Tunnel](名) 山腹又は河底などを掘(ホ)り貫きて造りたる道路。鐵路又は水路。

さん-ばら[ヒヨウ][蜻蛉](名) 【動】蜻蛉目類中蜻蛉科に屬する昆蟲、眼は大にして三個の單眼を有し、口部よく發達して觸角は針狀をなす、種類多し、概して雄雌大いに其彩色を異にし、雌には美麗なるもの多し、夏秋の頃隨處に飛行す、幼蟲は水中にありて「たいこむし」といふ。

(さん-ばら[ヒヨウ][遯亡](名) にげうすると。

(さん-ぼく[敦樸](名) 正直にしていつはりかざりのなきこと。すなほ。《敦朴》。

(さん-ま[頓馬](名) とんちき。まぬけ。

(どん-よく[貪欲](名) むさぼり欲すること。慾深きこと。あき足ることを知らざること。

(さん-び[豚尾](名) 《「ふだ」の尾の義》支那人の辮髮の蔑稱。——-かん[豚尾漢](名) 支那人の男子の蔑稱。

(さん-び[鳶](名) ㊀【動】「とび」の音便。㊁通りかゝりて、店先のものなどをぬすむこと。〳〵どろぼう。㊂「とんびガッパ」の略言。——-がっぱ[鳶合羽](名) 羅紗製の合羽、其製西洋より傳はる、袖長くして鳶の翅(ツバサ)に似たればいふ。——-たと[鳶凰](名) 鳶の形のいかのぼり。

(さん-びやう[ヒヨウ][頓病](名) 急病。

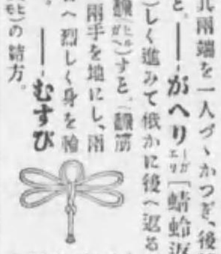
(さん-ぶく[頓服](名) 一劑を一回に服用すること。——-やく[頓服藥](名) 頓服する藥劑、多くは解熱劑若しくは下痢劑なり。

(どん-ぶつ[鈍物](名) 才のにぶき者。

どん-ぶり[丼](名) ㊀稍々深くして厚き陶製の鉢(深盃)。㊁かみいれのあはひ。㊂丼に盛りたる食物。——-めし[丼飯](名) 丼鉢に盛りたる飯。

(どん-ぶり(名、副) 物の水中にはまり入るさまにいふ語。——-わらだやう[ヨウ](名) みなげ、投身。

さんぼ[蜻蛉](名) ㊀【動】「とんぼう」の約言。㊁「とんぼが(り)の略言。㊂物をかつぐに、棒の前端に横木を渡(タ)して其兩端を一人づゝかつぎ、後棒を一人にてかつぐと。——-がへり[エリ][蜻蛉返](名) ㊀蜻蛉の烈(ハ)しく進みて低かに後へ返るが如く、輕く身を後に飜(ヒラ)すこと。「體操」。㊁一種の遊戯、兩手を地にし、胴脚を空にして、左右へ烈しく身を捻の如くに廻るもの。——-むすび[蜻蛉結](名) 紐(ヒモ)の結方。



[びすむぼんと]

な

(なゐ 偽的鼻音N即ち舌頭を硬口蓋の前部に觸れて發する鼻音と、母音「ア」との綴音。

な[名](名) ㊀事物の稱呼、即ち言語を用ひて概念を代表するものにして、其事物と他の事物とを分別表顯す。㊁姓氏に對して、實名・通稱をいふ。又、姓氏と實名・通稱とを合してもいふ。㊂人倫上の區別の稱號。「恐也正」—乎」。㊃みやうもん。きとえ。評判。聲聞。「一高し」「一有り」。

な[菜](名) ㊀食料とすべき草本植物の汎稱。㊁「あをな」及「たうな」の特稱。

++な[字](名) も。文字。「假—」「眞—」。

++な[魚](名) 食用とするうを。「一屋」「眞—」「酒—」。

++な[儺](名) おにやらひ。つゐな。「—やらふ」。

++な[汝](代) 對稱の人代名詞。なれ。なんぢ。いまし。

な[勿](副) ㊀動詞に添へて、其動作を禁止する語。「これ見るな」「恨むな」。㊁本條(一)と同上にして用法古く、必ず動詞の前に立つ。又下に「そ」といふ詞を置きて相照應すること多し。「—行き」「暮—わすれそ」。

な[七](數) なゝつ。なゝ。

な(感) ㊀希望の意を表する感動詞。「あそびくちさ—」「たまもかりて—」。㊁感歎の意を含みたる感動詞。「はかなし—」「聞くと—」。——**あ**(感) 前條(二)に同じ。

な-あて[名宛](名) 指定したる先方の人の名。

——-にん[名宛人](名) 名宛せられてある人。

ない[内](名) うち。なか。

ない(感) 應對又は同意の感動詞。(奥州・近江・肥前などにて用ふ)。

ない[無](形) 「なし」の音便。

ない[不](助動) 「ぬ」の轉。「見—」「知ら—」。

ない[内](接頭) 或語に冠して、おもてむき又は公然にあらざる意を表する語。「—談」。

ない-い[内意](名) ㊀心中の思慮。㊁祕密の意向。「—を承る」。「憂思」。

(ない-いう[内憂](名) ㊀内部の憂患。㊁國内の

(ない-いうせい[内遊星](名) 【天】其軌道が地球の軌道の内にある遊星、即ち火星・金星これなり。

(ない-えつ[内謁](名) ない〳〵の謁見。

(ない-えっけん[内謁見](名) 前條に同じ。

(ない-えん[内宴](名) ㊀古昔、禁中にて、正月二十一日に仁壽殿にて行はれし公事、内々の節會にして、文人に題を賜はりて詩を作らしめ、御前にて披講し終へて宴を賜はれり。㊁うち〳〵のものゝみの酒宴。

(ない-えん[内緣](名) おもてむきの結婚によらずして夫婦となりたること。「—の妻」「—の夫」。

(ない-えう[内應](名) ひそかに敵に通ずること。うちぎり。内通。「寇國」。

(ない-かい[内界](名) ㊀心中の現象。㊁内方の

(ない-かい[内海](名) 【地】兩陸の内に彎入せる海、即ち中海。

(ない-かう[内項](名) 【數】一つの比例にて、第二及第三に立つ二つの量の稱。

(ない-かく[内角](名) 【數】二つの直線が一つの直線と會するとき、二線の内側にある角。又、三角形の外角に對して、其内部の各角の稱。

(ない-かく[内殼](名) 内部にある介殼。

(ない-かく[内閣](名) 國務大臣を以て組織する合議制の官府、重要なる國務を審議する行政上の最高機關なり。——**-そうりだいおん**[内閣總理大臣](名) 内閣の首班にして機務を奏宣し、官を承けて行政各部を統一する國務大臣、須要と認むるときは、行政各部の處分又は命令を中止して勅裁を待たしむるとを得。

ないがしろ[蔑](名) ㊀其人あれども、侮(アナ)りて輕んじて、怜もなきが如くにふるまふこと。あなどりかろんずること。なみすること。㊁☆たどけなきこと。とりみだしたること。「ひもうちときー—なるけしき」。

(ない-かん[内感](名) 【心】内界より起る感覺。

☆(ない-き[内記](名) 「うちのふるまひつかさ」に同じ。

(ない-き[内規](名) 部内の規定。

(ない-ぎ[内議](名) ない〳〵の評議。

(ない-ぎ[内儀](名) 德川時代の末、町家の妻女をよびたる稱呼。うちかた。ないはう。れいけい。

(ない-きゃく[内客](名) 公然ならぬ來客。うち〳〵の客人。(來賓)。

(ない-きょ[内虛](名) 内部のよわりつかるゝこと。内部のゐとろ(ゐなしきこと。

(ない-きん[内勤](名) 内部の勤務。「宮の對。

(ない-くう[内宮](名) 伊勢の皇太神宮の稱。外國(ゲコク)に對ふ。

(ない-くわ[内科](名) 身體の内部の病氣を治療する醫術。——**-いしゃ**[内科醫者](名) 内科を專門とする醫者。

(ない-がい[内外](名) うちとそとと。「—合擊」。

(ない-くわひ[内果皮](名) 【植】果實の内部にありて、直接に種子を包被する果皮。

(ない-くわん[内觀](名) 【佛】精神を收斂し、想像の作用によりて體氣を常に臍下・丹田以下に集注せしめ、有無にわたらず動靜に關せず、打成一片以て眞理を觀ずること。

(ない-くわん[内官](名) 京師に在勤せる官。又、宮中に奉仕する官。

(ない-くわん[内患](名) 内部のうれひ。「—外憂」。

(ない-くわんりゃう[内管領](名) 鎌倉の執權北條氏の執事。「令」。

(ない-くん[内訓](名) 内々のさとし。内密の訓

(ない-くん[内君](名) 他人の妻の敬稱。(内室)。

(ない-げ[内外](名) うちとそとと。ないぐわい。

(ない-けう[内教](名) 【佛】佛道の稱。

(ない-けうばう[内教坊](名) 古昔、禁中にて、舞妓を置き女樂を教へたる所。「ん」。

(ない-けん[内見](名) 内々にて見ること。ないらん。

(ない-けん[内檢](名) 内々にてとり糺ぶること。

(ない-こ[内顧](名) 内部の事を氣にかけておもふこと。「—のうれひなからしむ」。

(ない-こう[内攻](名) 疾病の外部にあらはれずして、内部の機關などを犯すこと。「め」。

(ない-こう[内訌](名) 内部のさわぎ。うちわもめ。

(ない-こう[内公](代) 「ないこう」に同じ。

(ない-こく[内國](名) 其國のうち。我國のうち。くにのうち。こくない。國中。——**-かはせ**[内國爲替](名) 爲替上の權利關係が一國内にて辨

濟せらるゝもの、即ち支拂ふ義務あるものとこれを受取る權利あるものとの共に内國にある爲替、外國爲替の對。——**-さい**[内國債](名) 内國に於て募集せられ、其債權者の全部若しくは大部が内國人なる公債。——**-ぶん**[内國人](名) 其國内の人民。——**-ぼうえき**[内國貿易](名) 一國内に於ける各地方の間に行はるゝ貿易、彼此の土地の生産物の多寡・良否・有無等によりて生ず。

(ない-さい[内債](名) 「ないこくさい」(内國債)に同じ。

(ない-さい[内濟](名) 公にせずに事を濟(ス)ますこと。表沙汰にせずにない〳〵にてすますこと。(私和)。

(ない-さう[内爭](名) 内部のあらそひ。うちわもめ。ないこう。

(ない-ざう[内臟](名) 動物の胸腔及腹腔の中に包まれたる諸種の機關。即ち、さうふ。

(ない-じ[内侍](名) ㊀内侍司の女官。㊁ないしのかみよう。

(ない-し[乃至](接) ㊀數の上下を舉(ア)げて、其中を略するときにいふ語。「五—七」。㊁あるひは。また。「結・無明・亦無・無明盡、—乃至老死・亦無・老死盡」。「とも」。

(ない-ぶ[内事](名) 内部に關する事柄。うちのこと。

ない-ぶうげん[内親言](名) 内々にて婚禮の式をあぐること。

(ない-ぶつ[内宝](名) 他人の妻の敬稱。おくがた。「令閨」。

(ない-ぶつ[内實](名) 内部の事實。うちまく。

ない-ぶどころ[内侍所](名) ㊀古昔、禁中の温明殿の別名。即ち八咫(タ)鏡を安置せられし所。今の賢所に同じ。㊁轉じて、八咫鏡の稱。

☆ない-ぶの-かみ[尚侍](名) 内侍司の長官。

☆ない-ぶの-おより[掌侍](名) 内侍司の判官。

☆ない-ぶの-すけ[典侍](名) 内侍司の次官。

☆ない-ぶの-つかさ[内侍司](名) 古昔、宮内省の被官に屬し、後宮に關する一切のことを掌りし司。(ツカ)で、今は皇后宮職に屬す。

ない-ぶは[乃至](接) あるひは。または。

(ない-ぶやう[内症](名) 體内の病氣。

(ない-ぶやう[内相](名) 内務大臣の異稱。

(ない-ぶやう[内情](名) 自己自らの心的狀況。

(ない-ぶやう[内省](名) 自己自らの心的狀況。

(ない-ぶやう-がん[内障眼](名) 一種の眼病、即ちそこひ。

(ない-ぶやう-ふ[内相府](名) 内大臣の異稱。

(ない-ぶやく[内借](名) ㊀まへがり。うちかり。㊁内密に借用すること。

(ない-ぶゆ[内豎](名) 古昔、禁中に何候して、蘊役を辨ぜし小童。——**-どころ**[内豎所](名) なほゆのつめ居りし所。

☆ない-ぶよ[内證](名) 「ないしように同じ。

(ない-ぶよ[内助](名) 内部より與ふる輔助。(あもに妻の夫を助くるといふ)。

(ない-ぶより[内證](名) ㊀[俗]妾(ゼ)に顯示せざる至極の妙理。㊁内密。祕密。㊂うちわ。家内。

——-と[内證子](名) 祕密にしておく私生子。

(ない-ぶよく[内職](名) ㊀本職の外に營む生業。㊁婦人などが、家事のひまになす賃仕事。

(ない-ぶん[内心](名) ㊀こゝろのうち。ふたごころ。そこい。「—に異圖を懷く」。㊁【數】内接圓の中心。

(ない-ぶん[内人](名) ㊀國内の人民。内國人。㊁「細君」。つま。

(ない-ぶんわう[内親王](名) 古昔は、親王の宣下ありし皇女の稱。現今は皇子乃至皇玄孫に至るまでの女性の稱方の稱。うちものみこ。

(ない-せい[内政](名) ㊀内部のまつりごと。㊁内務行政。

(ない-せき[内戚](名) 父方の親族。

(ない-せつ-ぶん[内接圓](名) 【數】一つの直線形の各邊に切し且つ其直接形の全く内にある圓。

(ない-せつ-ぶん[内切圓](名) 【數】一つの圓の内にありて、且つこれとたゞ一つの點に於て出會ふ圓。「のつかさ」に同じ。

☆ない-ぜん-ぶ[内膳司](名) 「うちのかしはで」に同じ。

(ない-そ[乃祖](名) そせん。せんぞ。

(ない-そ[内訴](名) 内々にうったふること。

(ない-そう[内奏](名) 内々にて奏聞すること。

(ない-そう[内層](名) 内部のかさなり。

(ない-そく[内則](名) 家内に於けるのり。うちのわの規則。

(ない-そん[内損](名) 腹のうちをそこなふこと。腸胃をそこなふこと。

(ない-たい[内帶](名) 【地】彎曲せる山脈の凹面。

(ない-だいおん[内大臣](名) ㊀☆うちのおほいまうち。㊁柳營國臺を高擧し且つ天皇に常侍して輔翼する親任官。

☆ない-たちちゃう[内道場](名) 古昔、禁中に設けおかれし眞言宗の道場。

(ない-たく[内諾](名) ないしゃうなふと。

(ない-たつ[内達](名) ないしゃうのたつし。

ばらせん 一

ばらせん 一

ばらせんけつ（名）[腹膜] 腹の内側の膜。

ばらせんやく（名）[腹痛] 腹に起こる痛み。

ばらそ（名）[腹囊] 腹の皮。

ばらそう（名）[腹囊] 腹の皮。

ばらそうこ（名）[腹囊] 腹の皮。

ばらそうこ（名）[腹囊] 腹の皮。

**ばらそうこ

の-てう[ー-ヨウ]**ぎ**[長柄銚子](名) 柄の長き銚子。「—蝶花形」。——**-もち**[長柄持](名) 長柄の傘を持つもの。

なが-れひ[ナガ-ヒ]**き**[長迫](名) 「くと」にゞる歌を遠く追ひゆ

なか-がき[中垣](名) 隣家との〈だての垣。

なか-がひ[ナカ-ガイ]**い**[仲買](名) 物品又は權利の賣買の媒介、即ち需用者と供給者との間に立ち、物品又は權利を彼より買ひて此に賣り、以て營利を圖ること。又、其人。さいとり。(牙保。——**-げふ**[ヨウ]**にん**[仲買人](名) 仲買業をいとなむ商人。(牙商)。

なが-かみ[天一神](名) 《長神の義》陰陽家にて祭る神の名。己酉の日天より下りて東北の隅に居ること六日、轉じて正東に居ること五日、漸くて順次に南西北を廻(ワ)り、四隅に居ること六日四方に居ること五日都合四十四日にして、癸巳の日正北より天に上り、再び己酉の日天より下りて前の如くに廻る。此神の居る方を「ふたがり」といひてこれに向ひ犯すことを忌(イ)む。

なが-がみ[ナガ-ガミ]**ぢも**[長上下](名) 昔時、肩衣(カタギヌ)の下に同じ色の長袴を用ひしもの。

[もがみがながな]

なか-き[中着](名) 表衣の下に重ねて着る衣服。

なが-き-よ[長夜](名) ㊀日出までの時間多き夜。㊁よみぢ。冥土。

なが-き-わかれ[長別](名) 永にわかれ、死別。

なが-くさ[ナガ-クサ](名) 〔植〕「ながなぐさ」に同じ。

なが-くし[名隱](名) 名をかくすこと。匿名。

なか-ぐち[中口](名) 雙方の中間に立ちて、相互の交情を損ずるが如き言語を發すること。

なが-ぐつ[長靴](名) 深くして脛を掩(オホ)ふ靴、雨中又は騎馬などに用ふ。「かぶく。

なか-くぼ[中窪](名) 中央の窪(ヘコ)みてあること。な

なか-くみ[中汲](名) 濁酒の一種、うはずみとよ

なか-ぐろ[中黑](名) 紋所の名、輪の中に橫に一どみとの間を汲み取りたること。

線を引きたるもの、新田氏の家紋なり。

なか-くれなゐ[中紅](名) 濃淡其宜しきを得たる紅色。「けき宮」。

なが-げ-し[ナガ-ケ-シ]**き**[長](形、一) 長し。「我國のな

なか-ど[中子](名) ㊀中心。中部。㊁菓果又は木實などの內部の柔き部分。㊂刀心の櫻(カ)の中に入りたる部分。㊃組入につくりたるものゝ中なるもの。㊄〔佛〕の稱。齋宮の忌詞。

なか-とと[中言](名) なかぐち。

なが-とと[長言](名) 長々しきことば。

なが-ともり[長籠](名) 長き間外出せざること。

なか-ところ[中頃](名) ㊀なかはどの時。(中世) ㊁なかはどの所。中途。

なが-さ[長](名) 〔數〕二點間の距離。又、立體若しくは平面形の最長なる徑。

なが-ざ[長座](名) 「ちやうざ」に同じ。

なが-ささげ[長豇](名) 〔植〕「ながふるささげ」の中央に插(サ)す矢。㊁女髻の中央に橫に插す簪(カミ)の類。

なが-ざし[中差](名) ㊀蔓(ツル)の中央に插(サ)す

なか-さだ[中定](名) 手跡の稍や劣れるをいふ。

なが-し[流](名) ㊀ながすこと。㊁家所に設けて物を洗ふ所。隅に水を流し漏す孔(アナ)ある淺き槽(フネ)なるもあり、地に板を張りて水を流しやる樋を設けたるもあり。はしり。㊂〔夜三味線を彈(ヒ)きながらあるく人。㊃湯屋にて、三助に背を洗はしむと。東京の方言。——**-ぎ**[流木](名) 山より伐(キ)り出して川に流し下す木材。

なが-し[ナガ-シ]**き**[長](形、一) ㊀短からず、ながけし。㊁低からず、たけたかし。㊂近からず、とほし。㊃永久なり、ひさし。

なか-おき[中島](名) 水中の島。

なが-め[流目](名) ひとみを斜にして見ること。よこめ。「流眄、斜視」。

なが-おゆばん[長襦袢](名) 長くして衣服と殆ど同上丈に仕立てたる襦袢。

なが-がしら[名頭](名) 苗字即ち源・平・藤・橘等の稱。又、これを記して兒童に教ふるもの。

なが-おり[長尻](名) ながく座(スワ)りこみて容易にかへらぬこと。

なが-す[ナガ-ス]**ぎ**[流](他、サ四) ㊀流るゝやうにす。㊁放ち浮かべうかす。はなつ。㊂走たゝらす。たらす。「鼻を—」。㊃流罪に行ふ。ながしにす。㊄あしき風聞を世上に弘(ヒロ)む。「浮名を—」。㊅期限に至り賀を讃(ホ)けもどさずして、其所有權を失ふ。㊆其まゝにして心中にとめず。「聞き—」。㊇〔入浴者の背をこすり洗ふ。「東京の方言」。㊈〔夜三味線を彈(ヒ)きながら顧客を求めつゝ往來をあるく。

なか-ズハウ[ナカ-ズハウ]**ぢ**[中蘇枋](名) 濃淡其中を得たる紫枋色。

なが-すびつ[長炭櫃](名) ながき炭櫃。「の稱。

なか-ずみ[中墨](名) 硯箱にて、物の眞中の部分

なか-ずり[中剃](名) 「なかぞり」に同じ。

なか-せ[仲背](名) 米などをかつぎはこぶことを業とするもの。〔關西地方の方言〕。

なか-せんだう[ナカ-センダウ]**ぢ**[中仙道](名) 京都より近江・美濃・信濃・上野を經て東京に通ずる街道。

なが-そで[長袖](名) ㊀昔時、武士に對して、僧侶又は醫師・神主などの如き、長き袖の衣服を着する者の稱。方外。㊁公卿の稱。

なか-ぞら[半空](名) ㊀空中。虛空。㊁うはのそら。有頂天。㊂何れともきまらぬこと。何れにもつかぬこと。㊃はんば。半途。

なか-ぞり[中剃](名) 頭髮の中央のみを剃(ソ)り去ること。なかずり。

なか-だえ[中絕](名) まじはりのたゆること。

なか-だか[中高](名) 中央高くして四邊低きこと。なかびくの對。(凸)。

なか-たがひ[ナカ-タガイ]**ぢ**[中違](名) 交情の惡しくなること。「と。不和になること。

なか-だち[仲立](名) ㊀雙方の中に立ちて周旋すること。又、其人。媒介。媒妁。㊁〔法〕他人間の商行爲の媒介。——**-ぐち**[仲立口](名) 仲立してうまく雙方の媒介をなすことば。——**-げふ**[ヨウ]**ぎ**[仲立業](名) 〔法〕仲立の營業。——**-にん**[仲立人](名) ㊀媒介者。㊁仲立業を營むもの。

なが-だち[長太刀](名) 古昔の武器、刃は二三尺にして柄長く石突きあり、肩に掛けて撰(ヘ)行き、戰場にて敵の人馬の足を薙(ナ)倒すに用ひしもの。のだち。「なる時。

なか-たび[中度](名、副) なかごろの時。なかば

なが-だんぎ[長談議](名) ながたらしき談議。「下手の—」。「り絕ゆ。

なか-た-ゆ[ナカ-タユ]**ぢ**[中絕](自、ヤ下二) まじはりたゆ。

なが-たら-し[ナガ-タラシ]**き**[長](形、二) 倦むほど長し。ながきに過ぎていとはし。「のむすと。

なか-ち[仲子](名) 三人の兄弟にて、第二番目

なが-ち[長血](名) 婦人の分泌物に血液の混じて下る子宮病。

なか-ち[長路](名) ながきみち。とほきみち。

なか-ちがひ[ナカ-チガイ]**ぢ**[中違](名) なかたがひ。

なか-つ-え[中枝](名) なかのえだ。

なか-つかさ[中務省](名) 古昔、八省の一、最上の重職なり、文官にして帶劍、至尊に侍從し、可否を獻替し、詔勅の文案を審署し、上表を受け、國史を監修し、女官の考選及五位以上の位記を司りし所。

なが-づかへ[ナガ-ツカエ]**ぢ**[長仕](名) 交替せずしてとのゐすること。ひちずめ。

なか-つ-かみ[中津神](名) 八將神の豹尾神の一名。轉じて、豹の古稱。

なか-つぎ[仲次](名) ㊀とりつぎ。紹介。㊁抹茶の茶入、蓋(フタ)と體と高さ相同じくして、中央にて合ふもの。

なか-つぎ[中續](名) ㊀幼年なる相續者が生長するまで、其家督を續ぐもの。㊁三味線の棹又は尺八の管などの中間を切りて續ぎ合はすやう作れる所。㊂すべて中間にてつぎあはすもの。

なが-つき[長月](名) 陰曆九月の異稱。——**-ば**[長月花](名) 〔植〕菊の異稱。

なか-つ-と[仲子](名) 「なかぢ」兄に同じ。

なかっせば[微] 「なかりせば」の音便。(漢文の訓讀にいふ。

なが-つぼね[長局](名) 宮中又は殿中にて、局の多く連なりたる所。つぼねまち。

なか-づみ[中積](名) 荷の中程に積むこと。又、中程に積みてある荷。

なか-て[中手](名) ㊀早稻の次に熟する稻。㊁しりのつぎに出づる蔬菜。㊂圍碁にて、敵の目を詰(ク)てくため、其目の中に石を着すること。

なが-て[長手](名) ㊀長き袋。㊁長き方。——の

なが-てん[長點](名) 秀歌につくる點。〔箱。

なか-ぞと[中床](名) 中央のとこ。

なか-なか[中中](副) ㊀をゝずして。はてすして。㊁なまなか。なまじひ。㊂かへつて。けつく。㊃すこぶる。隨分。㊄容易に。たやすく。㊅どうして。なんとして。「—左樓の義に候はず」。㊆さう。さやう。〔然りと應ふる任言詞〕。

なが-なが[長長](名、副) いと長きさまにいふ。

なが-なが-し[長長](形、二) いと長し。

なか-なか-に[中中](副) 「なかなか」に同じ。

なが-なき[長泣](名) 長く泣きてやまざること。

なが-なき[長鳴](名) 鷄などの長くつゞきて鳴くこと。——**-どり**[長鳴鳥](名) 〔動〕鷄の異稱。

なか-なほり[ナカ-ナオリ]**ぢ**[中直](名) 中たがひせしものゝとけあひて好みを結ぶこと。和睦。和解。(和懇)。

なか-に[中](副) 多きものゝ中に。——**-ついて**[就中](副) 多き中にとりわけて。なかにすぐれて。——**-つきて**[就中](副) 前條に同じ。

なが-にし[長螺](名) 〔動〕「へなたり」に同じ。

なか-にだん-くわつよう[中二段活用](名) 〔文法〕上二段活用に同じ。「る庭。

なか-には[ナカ-ニワ](名) 家の室と室との間にある

なか-ぬき[中拔](名) ㊀なかのものをぬきとること。㊁うろぬくこと。——**-ざうり**[ナカ-ヌキ-ゾウリ]**ぢ**[中拔草履](名) 藁の心にてつくりたる草履。——**-だいとん**[中拔大根](名) うろぬきたる大根。

なか-の-ゆびぬきぬびと[ナカ-ノ-ヨビ-ヌキ-ヌビ-ト](名) 左中辨及右中辨の稱。

なか-の-ゆび[中指](名) なかゆび。「將指」。

なか-の-くち[中口](名) 玄關と憂所との間に設

「に着る衣。

++なかの-ころも[中衣](名) 上着と下着との間に着る衣。

なかの-さをか[仲十日](名)「ちゅうぢゅん」(中旬)に同じ。

なが-のび[長延](名) 碁盤にて、溝・垣・路などの長さの稱。

++なか-の-まつりごと-の-つかさ[中務省](名)「なかつかさ」に同じ。

++なか-の-みや-の-つかさ[中宮職](名)「ちゅうぐうしき」に同じ。

++なか-の-もの-まうす-つかさ[中納言](名)「ちゅうなごん」に同じ。

なか-ば[半](名) ㊀二分したる一。半分。㊁ま中。中央。㊂もなか。最中。

なが-ばれり[長羽織](名) 書生羽織の如く、普通よりもたけの長き羽織。

なが-ばかま[長袴](名) 裾長く足を包みて、猶は一尺餘も後に引くはかま。素袍・大紋・長上下などに用ふるもの。

++なが-はし[長橋](名) 古昔、禁中の朝殿より南殿へわたせる廊下。

なか-ばしら[中柱](名) 中央のはしら。

なかば-すぎ[半過](名) なかばをすぎてあると。「春の—」。

なが-はた[長機](名) 普通よりも長きありもの。

なか-ばたらき[仲働](名) 奥と勝手との間に召し使はる、女中。

なが-ばなし[長話](名) 長時間はなすと。

++なかば-の-つき[半月](名)《琵琶の面に半月の孔あるよりいふ》琵琶の異稱。「—にわれも忘れと」。

ながはま-ちりめん[長濱縮緬](名) 近江國長濱地方より產出する縮緬。濱ちりめん。

なが-び[長日](名) 日くれまでの時間長き日。

なか-びく[中低](名) 中央低くして四邊の高さと、なかくぼ。

なが-び-く[長引](自、か四) おそくなる。おくる。ながくなる。おそなはる。延引す。「延延」。

なが-びつ[長櫃](名) 形の長き櫃、即ち長持の類。

なか-ひとつき-れき[中一月置](名) 間に一月を へだておくと 隔月。

++なか-ひと[仲人](名) なかうど。媒介。

++なが-ひと[長人](名) いのちながき人。

++なが-ひバチ[長火鉢](名) 長方體の箱火鉢、居間などにおきて常に使用するもの。

なが-ふえ[長笛](名) 管の最も長き笛。

なが-かへ[名替](名) よび名をかふると。

なか-へだて[中隔](名) 中間を へだつると。又、中間のへだり。

ながぼう-かご[長棒駕籠](名) 歌人にて舁(カ)く棒の長き乘物、武家時代に官位あるもの、用ひしもの。

なか-ほど[中程](名) 中央、中間、なかば。

なか-ま[仲間](名) ㊀ともくみ。同志。㊁ともがら。たぐひ。等儕。——**いり**[仲間入](名) 其仲間に加はり入ると。——**ぐみ**[仲間組](名) 仲間。くみ。

なが-まき[長卷](名) 一種の太刀、刃は三尺許、鞘(サヤ)なく、柄の四尺許にして布にて卷きたるもの。

なか-まく[中幕](名) 在來の芝居にて、一番目狂言と二番目狂言との間若しくは二番目狂言と大切との間に演ずる狂言、多くは舞踊面のはなやかなるもの を選ぶ。

なが-まくら[長枕](名) 二人共用の長き枕。

なが-まき-る[長居](自、ら四) 身體をのばしてよとたはる。

++なか-みち[中道](名) 道のなかば。

なが-みち[長路](名) ㊀ながきみち。とはき行程。㊁長き旅行。長き間の歩行。

なが-む[眺](仙、ま下二) ㊀打ち守りて見る。見つむ。㊁遠くのぞむ。みわたす。

++なが-む[長](仙、ま下二) ながくす。

++なが-む[詠](仙、ま下二) ながく聲を引きて吟ず。「ながめこる」。

なか-むかし[中昔](名) 上古と近古との間。中古。

なが-むし[長蟲](名)[動]蛇の異稱。

なが-むしろ[長筵](名) 普通よりも長きむしろ。

ながめ[眺](名) ㊀打ち守りて見つむると。㊁見渡すと、遠くのぞむと。㊂見渡したるながめ。

++ながめ[詠](名) 聲を長くひきて吟ずると。——**ごゑ**[詠聲](名) 長くひく聲。

++ながめ[霖](名)「ながあめ」の約言。

++ながめ[長目](名) 長き工合、長き程。

ながめる(他)「ながむ」の訛。

なが-もち[長持](名) ㊀長く保つと。久しくもつと。㊁物を入れにひて運搬する長き櫃。

なが-ものがたり[長物語](名) ながながしきものがたり。

なが-や[長屋、長家](名) ㊀棟長く建て列ねたる家。「長房」。㊁數多の家を一棟の下に建て列ねたるもの。「連房」。

++なが-やか[長](名) 長きと。

なか-やぎ[中屋敷](名) 上屋敷の總稱。

なか-やすみ[中休](名) ㊀事業の中間にて休息すると。㊁途中にて休息すると、又、場所。(小頓)。

なが-やすみ[長休](名) 日數多き休暇。

なが-やだて[長屋建](名) 次條に同じ。

なが-やづくり[長屋造](名) 長屋のつくりかた。又、其建物。

なか-やど[中宿](名) なかやどり。

なか-やどり[中宿](名) ㊀旅行中のやどり。㊁途中のやどり。

なか-やま[中山](名) けし坊主。(相模の方言)。

なかやま-どんにやく[中山蒟蒻](名) 常陸國中山より產出し、下總國行徳附近にて製造する蒟蒻、小判形にして普通のものより扁小なり、種々の色に染む。

なが-やみ[長病](名) 久しき間の病氣。

なが-やもん[長屋門](名) 兩側の長屋づくりになりたる門。

なが-ゆ[長湯](名) 入浴の時間の長きと。

なか-ゆひ[中結](名) ㊀衣服の襟(ヱリ)を撫(ツ)ふるため、紐(ヒモ)を腰のあたりにあめ結ぶと。又、其あめ結ぶに用ふる紐。㊁包物の中程を紐にて結びくゝると。又、其結びくゝるに用ふる紐。

なか-ゆび[中指](名) 五本の指の眞中のゆび。たかゝゆび。たけたかゆび。「將指」。「ひをなす。

++なか-ゆ-ふ[中結](自、は四) なかゆひをなす。

なが-よ[長夜](名) 夜あけまでの時間多き夜。「ながき—」。

なか-よし[中好](名) ㊀交情の睦(ムツ)ましきと。たたしきと。(和好)。㊁睦ましき友。たたしき友。

++なか-よどみ[中淀](名) 中部のよどむと。

なか-ら[半](名)《ら」は接尾語》半分。なかば。

ながら[乍](接) とはいふものゝ、であるが。なれども。「身—心にも之任せまじくなんありける」。

ながら[隨](接尾) ㊀名詞又は動詞に附屬して、「其まゝ」の意を表する語。「昔—の山櫻かな」。㊁動詞の下につきて、彼をなすと同時に此をもなす意を表する語。つゝかつ。「讀み—行く」。㊂共に。ぐるみ。「親子—擧ち留む」。

なが-らく[長](副) 久しく。ながく。「一逗留して」。

なか-らひ[仲合](名) 雙方の交情。たがひのまじはり。あひだがら。

++ながら-ふ[流](自、は下二) 《ながるの轉言》降る。散る。「時雨の—見れば」。「櫻花散りながらふる」。

ながら-ふ[乍](自、は下二) 生命をたもてあり。いきてあり。生存す。「ながらふの訛。

ながらへ(名) ながらふると、存命。——**る**(自)

++なかから-むすこ[半息子](名) 蛭(ヒル)の異稱。

なかり せば かくあらざちんには、ないならば。かつたら。

なが-る[流](自、ら下二) ㊀水など低き所にあもむきゆく。㊁すくだる。ふる。ちる。「雪のなほ降る」。㊂うかび行く。たゞよひ行く。㊃そる。はづる。「ながれ矢」(逸)。㊄ひろまる。ふく。布。㊅めぐる。きはる。㊆さまよふ。さすらふ。(放浪)。㊇かたよる。すぐ。「あごりに—」(個)。㊈いひつたふ。評判あり。㊉なゝめに視る。よこ目に視る。「視—」。㊊生存す。ながらふ。「妹が名は千代にながれむ」。㊋流產す。㊌賣物を請け出だすべき期限過ぎて、其物の所有權なくなる。㊍〔やめになる。行はれず。

なかれ[莫、毋](助)《「なくあれ」の約》所業を禁止する語。

ながれ[流](名) ㊀ながるゝこと。ながるゝもの。㊁ながるゝ川。ながるゝ水。「—を亂りて渡る」。㊂酒の酒のたゝり。(瀝)。㊃つゞき。系統。「源氏の—」。㊄流派。流義。㊅たぐひ。比類。㊆たゞな。品等。㊇かたむき。傾向。㊈賣物を請け出すべき期限過ぎて賣却せらるゝこと。㊉やめ。廢止。㊊遊女の增過。「—の身」。——**をくむ** 流儀を學ぶ。

ながれ-え[流江](名) 水のながれうごく入江。

ながれ-ぎ[流木](名) ㊀水流に浮きて流るゝ材木。㊁流人の稱。

ながれ-くわんちやう[流灌頂](名) 水邊に四本の牽都婆を立てゝ柱とし、白布を吊りさげ綱(ツナ)藻などを添へ、無緣の亡者又は水死人などの供養とし若しくは難產の亡靈の手向とするもの。

ながれ-ぶち[流賞](名) ながれの時期到來したる賞物。又、ながれて賞權者の所有に歸したる賞物。

ながれ-だま[流丸](名) それて飛ぶたま。それだま。「たり。

++ながれて-の-ものがたり(名) 後々のものがたり。「ヒ。

++ながれて-の-よ(名) のちの世。

++ながれの-カハラけ[流杯](名) 次條に同じ。

ながれの-さかづき[流杯](名) 酒宴のとき、貴人が自ら飲みたる杯を其臣下に差(サ)すと。

ながれ-の-み[流身](名) 遊女づとめする身。

ながれ-ぼし[流星](名) よばひぼし。

ながれ-みづ[流水](名) ながれ行くみづ。

ながれ-め[流女](名) 遊女の異稱。

ながれ-もの[流物](名) ながれたる賞物。

ながれ-や[流矢](名) それ飛ぶ矢。それや。

なが-わきざし［長脇差］(名) 昔時、關東にて、長き脇差を帶せし博徒の異稱。轉じて、博徒の異稱。

なが-わた［中綿］(名) 布團などの中に入るゝわた。

なが-わづらひ［長煩］(名) ながやみ。［た。

なか-ゐ［仲居］(名) ㊀家内に使はるゝ下女。㊁遊廓の下婢、遊女を扶けて遊客をとりなすもの。

なが-ゐ［長居］(名) ㊀久しく同じ所にとゞまり居ると。㊁ながく座にあると、長座。

なが-ゑぼし［長烏帽子］(名) 立烏帽子に似たる烏帽子。

［ながゑぼし］

なか-をれ［中折］(名) ㊀中央のをれてまがり又はくぼむと。㊁「なかをれ」の略。

げた又は「なかをれば うき」の略言。——**げた**［中折下駄］(名) 畳の中央のをれて自在にまがる下駄。——**ぼうし**［中折帽子］(名) 頂の中央のをれくぼむ鍔廣き帽子。

なかん-づく［就中］(副) 「なかにつき」の音便。

なき［水葱］(名) 【植】南久花科に屬する草、水田などに生ず、葉は通常卵形若しくは披針形をなし、厚くして深綠なり、秋の頃、五瓣碧色の花開く。「鴨舌草、藍草」。

なき［椰］(名) 【植】公孫樹科に屬する喬木、葉は對生し常綠にして形竹の葉の如し、老ゆれば樹皮脱落す。「仙勤木、竹柏」。

なき［凪］(名) 風止みて波靜かなること。なぐと。「和」。

なき-あか-す［泣明］(自、さ四) 泣きて夜をあかす。

なき-あと［亡後］(名) 死にたる後。なき人となりたるあと。

なき-い-る［泣入］(自、ら四) 甚しく泣く。もだえたゞしく泣く。

++**なき-かげ**［亡影］(名) なき人のかげ。

なき-かず［亡數］(名) なき人の數。「—に入る」。

++**なき-かへ-る**［泣返］(自、ら四) 「なきいるに同じ。

なき-がほ［泣顔］(名) 泣かんとする顔色。又、泣きつゝある顔色。なきつら。

なき-がら［亡軀］(名) なき人のかばね。死かばね。

なき-くづ-る［泣崩］(自、ら下二) 正體なく泣く。

なき-くら-す［泣暮］(他、さ四) 泣きて日を送る。

なき-とが-る［泣焦］(自、ら下二) こがれもゐて泣く。

なき-とさ［泣言］(名) 自家の不運若しくは困難をかこちかたること。かこちごと。

なき-どゑ［泣聲］(名) ㊀涙にうるめる聲。なみだごゑ。㊁なく聲。

なきさ［渚］(名) 【波際淺の義】波の打ち寄する所。なみうちぎは。「く。「汀」。

なき-さけ-ぶ［泣叫］(自、は四) 聲高くなき

++**なき-ぞ-る**［泣頽］(自、ら四) はげしく泣く、泣きりに泣く。

なき-ぞづ-む［泣沈］(自、ま四) 泣きてふしかゞむ、正體なく泣く。

なき-ぞやりど［泣上戸］(名) 酒に醉(エ)ひて、泣く癖せある人。

なき-ぞを-る［泣萎］(自、ら下二) 泣きてよわりひるむ。

〔**なき-ぞをれる**〕(自) 前條の訛。

++**なき-すきもの**［無數奇者］(名) 他に比類なき數奇者。

++**なき-そほづ**［泣濡］(自、た上二) 泣きてなみだにぬる。

++**なき-た-つ**［薙立］(他、た下二) 勢はげしく多くのものをなぎ倒す。

〔**なき-たてる**〕(他) 前條の訛。

なき-たふ-す［薙倒］(他、さ四) 横さまに排ひてたふす。

なき-たま［亡魂］(名) 此世に亡(ナ)き人のたましひ。ぼうこん。「亡靈、死靈」。

〔**なき-つら**〕［泣面］(名) 泣きがほ。——**にはち**仕合わるき事のかさなるにいふ。

++**なき-とよ-む**［泣響］(自、ま四) 多くの人泣聲あげてとよめく。

なき-な［無名］(名) 無根の評判、無實の取沙汰。「惡名」。

なき-なた［泣泣］(副) なきながら、なきつゝ。

なき-なた［長刀］(名) 一種の兵器、刃は反りて廣く長く、柄もまた長し、人を薙(ナ)ぎ拂ふもの。「薙刀、尖刀、眉尖刀」。——**ほほづき**［長刀酸漿］(名) 長刀の刃の形をなしたるうみほほづき。

なき-ぬら-す［泣濡］(他、さ四) 泣きてなみだにぬらす。

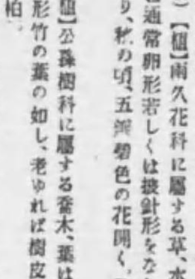
なき-ね［泣寐］(名) 泣きながら寐ること。

なき-ねいり［泣寐入］(名) ㊀泣きながら寐入ること。㊁不滿足ながら其儘になすこと、不平を鳴らしながら、致方なく默して止むこと。

なき-の-き［椰木］(名) 【植】「なぎ」椰に同じ。

〔**なきの-なみだ**〕［泣涙］(名) ㊀なくこと。㊁いとつらく思ふこと。

++**なきのはな-の-みとし**［葱花輦］(名) 「そうくわれん」に同じ。


［ななぎたな］

なき-はら-す［泣腫］(他、さ四) いたく泣きて目をはらす。

なき-はら-ふ［薙拂］(他、は四) 横さまに切る。拂ひ倒す。「なはらぐ。

なき-ひと［亡人］(名) 死にたる人。今は存命せざる人。

なき-ふ-す［泣伏］(自、さ四) 泣きてふし沈む。「づむ。

なき-ふ-す［薙伏］(他、さ下二) なぎたふす。

〔**なきふせる**〕(他) 前條の訛。

++**なき-まさ-る**［泣勝］(自、ら四) 次第にはげしく泣く。

++**なき-まど-ふ**［泣惑］(自、は四) 前後をもわきまへぬまでいたく泣く。「そらなき。

なき-まね［泣眞似］(名) 泣くさまをよそほふと。

++**なき-むし**［泣蟲］(名) よく泣く人をあざけりて。「いふ語。

〔**なき-め**〕［泣女］(名) 那式のとき、泣きさけぶわざをなし、女子。「哭女」。

なき-もの［亡者］(名) 存命せざる人。

なきやう-へんかく［奈行變格］(名) 【文法】「な・に・ぬ・ぬる・ぬれ・ね」と活用するものにして、「いぬ」(往)と「さぬ」(死)との二語のみなり。

な-きり［菜切］(名) 「なきりばうちやう」の略言。——**ばうちやう**［菜切庖丁］(名) 專ら野菜を刻(キ)むに用ふる庖丁、刃薄くしてさきの尖らざるもの。うすば。

なき-わらひ［泣笑］(名) 泣きながら笑ふと。

なき-わかれ［泣別］(名) わかれを悲しみてなく。

なき-をさと［泣男］(名) よく泣く男。

な-く［泣］(自、か四) 感極まりて涙を流し聲を發す。

な-く［啼］(自、か四) 乳兒・禽獸・鳥・蟲など聲を發す、さけぶ。

++**な-く**［不］(助動) 「ぬ」の延言「見—に」。

な-ぐ［薙］(他、か四) 横さまに切る。拂ひ倒す。「はらぐ。

な-ぐ［和］(自、か四) 靜かになる。凪づまる。

な-ぐ［和］(自、か上二) 前條に同じ。

な-ぐ［凪］(自、か上二) 風やみて波凪づまる。

な-ぐ［投］(他、か下二) 取りてはふりだす。持ちて飛ばしやる。なげうつ。「抛」。

++**なぐさ**［慰］(名) なぐさみ。「心—」。

なぐさみ［慰］(名) ㊀うさはらし。うつさん。㊁たのしみ。あそび。「放鷹の—」。

なぐさ-むし［慰］(自、ま四) おもひをやすらかにす。うさをはらす。たのしみあそぶ。

なぐさ-むる［慰］(他、ま四) ㊀もてあそびて樂しむ。㊁強姦す。

なぐさ-む［慰］(他、ま下二) ㊀他人の心をやすめたのしむ。他人にうさを忘れさす。「慰藉」。㊁すかす。なだむ。㊂ねぎらふ。いたはる。——**ぐさめ**［慰］(名) 人をなぐさむること。

なぐさ［慰種］(名) なぐさむるたねとなるもの。

〔**なぐ-すきもの**〕(他) 「なぐさむ」の訛。

なく-なく［泣］(副) なきながら。なき〳〵。

なく-なく［泣泣］(副) ㊀なきやうになく。

なく-なす［亡］(他、さ四) なくなす。うしなふ。

なく-なる［亡］(他、ら四) ㊀なきやうになる。うしなふ。㊁死なす。

なげ［投］(名) ㊀なぐること。㊁相撲(スマ)の手にて、腰にかけて敵を倒すもの。「下手—」、「上手—」。㊂囲碁又は將棋などにて、結局に到らざる前、敗勢已に分明にして挽回の途なきとき、其持つ碁子をなげ出して負くること。㊃心をこめてなさゞること。なはざりになすこと。

はこ-ぶね【箱船】(名)箱の形をした船。

はこ-ぼり【箱彫】(名)箱の形に彫ること。

はこ-まく【箱膜】(名)箱の形をした膜。

はこ-まち【箱町】(名)箱の形をした町。

はこ-まつり【箱祭】(名)箱の形をした祭。

はこ-まる【箱丸】(名)箱の形をした丸。

はこ-むき【箱向】(名)箱の形に向いていること。

はこ-もち【箱持】(名)箱を持つこと。

はこ-やま【箱山】(名)箱の形をした山。

はこ-やり【箱遣り】(名)箱の形をした遣り。

はこ-やん【箱屋】(名)箱の形をした屋。

はこ-やん-ぶし【箱屋節】(名)箱の形をした節。

はこ-やん-ぶね【箱屋船】(名)箱の形をした船。

はこ-やん-ぶん【箱屋分】(名)箱の形をした分。

はこ-やん-ぶん-ぶし【箱屋分節】(名)箱の形をした分の節。

はこ-やん-ぶん-ぶね【箱屋分船】(名)箱の形をした分の船。

はこ-やん-ぶん-ぶん【箱屋分分】(名)箱の形をした分の分。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶし【箱屋分分節】(名)箱の形をした分の分の節。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶね【箱屋分分船】(名)箱の形をした分の分の船。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん【箱屋分分分】(名)箱の形をした分の分の分。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶし【箱屋分分分節】(名)箱の形をした分の分の分の節。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶね【箱屋分分分船】(名)箱の形をした分の分の分の船。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん【箱屋分分分分】(名)箱の形をした分の分の分の分。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶし【箱屋分分分分節】(名)箱の形をした分の分の分の分の節。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶね【箱屋分分分分船】(名)箱の形をした分の分の分の分の船。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん【箱屋分分分分分】(名)箱の形をした分の分の分の分の分。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶし【箱屋分分分分分節】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の節。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶね【箱屋分分分分分船】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の船。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん【箱屋分分分分分分】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶし【箱屋分分分分分分節】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の節。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶね【箱屋分分分分分分船】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の船。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん【箱屋分分分分分分分】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶし【箱屋分分分分分分分節】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の節。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶね【箱屋分分分分分分分船】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の船。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん【箱屋分分分分分分分分】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶし【箱屋分分分分分分分分節】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の節。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶね【箱屋分分分分分分分分船】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の船。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん【箱屋分分分分分分分分分】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶし【箱屋分分分分分分分分分節】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の節。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶね【箱屋分分分分分分分分分船】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の船。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん【箱屋分分分分分分分分分分】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶし【箱屋分分分分分分分分分分節】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の節。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶね【箱屋分分分分分分分分分分船】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の船。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん【箱屋分分分分分分分分分分分】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶし【箱屋分分分分分分分分分分分節】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の節。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶね【箱屋分分分分分分分分分分分船】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の船。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん【箱屋分分分分分分分分分分分分】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶし【箱屋分分分分分分分分分分分分節】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の節。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶね【箱屋分分分分分分分分分分分分船】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の船。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん【箱屋分分分分分分分分分分分分分】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶし【箱屋分分分分分分分分分分分分分節】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の節。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶね【箱屋分分分分分分分分分分分分分船】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の船。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん【箱屋分分分分分分分分分分分分分分】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶし【箱屋分分分分分分分分分分分分分分節】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の節。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶね【箱屋分分分分分分分分分分分分分分船】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の船。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶし【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分節】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の節。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶね【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分船】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の船。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶし【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分節】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の節。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶね【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分船】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の船。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分分】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶし【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分分節】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の節。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶね【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分分船】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の船。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分分分】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶし【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分分節】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の節。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶね【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分分船】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の船。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分分分】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶし【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分分節】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の節。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶね【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分分船】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の船。

はこ-やん-ぶん【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分分分】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶし【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分分節】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の節。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶね【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分分船】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の船。

はこ-やん-ぶん【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分分分分】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶし【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分分分節】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の節。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶね【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分分分船】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の船。

はこ-やん-ぶん【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶし【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分分分節】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の節。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶね【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分分分船】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の船。

はこ-やん-ぶん【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶし【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分分分節】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の節。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶね【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分分分船】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の船。

はこ-やん-ぶん【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶし【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分分分節】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の節。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶね【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分分分船】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の船。

はこ-やん-ぶん【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶし【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分分分節】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の節。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶね【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分分分船】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の船。

はこ-やん-ぶん【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶし【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分分分節】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の節。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶね【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分分分船】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の船。

はこ-やん-ぶん【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶし【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分分分節】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の節。

はこ-やん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶん-ぶね【箱屋分分分分分分分分分分分分分分分分分分船】(名)箱の形をした分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の分の船。

はこ-やん-ぶん【箱屋分

ふ。せむ。たゞす。(諮問)。

++なまろ[名代](名) 古昔、高貴の方の郷名を後世に殘さんため、郷名を冠らせたる都民を設けたること。

なす[茄子](名)【植】なすび」の略言。

なす[爲](他、さ四) ㊀行ふ。す。 ㊁つくる。こしらふ。 ㊂この物をかゝてかの物とす。

なす[成](他、さ四) ㊀こしらふ。つくる。 ㊁とゞ。はたす。(遂)。 ㊂すます。をふ。 ㊃とゝのふ。そろふ。 ㊄足む。きむ。 ㊅でかす。生ず。

なす[生](他、さ四) うむ。產す。

なす[濟](他、さ四) 借りたるをかゝす。かゝす。すます。つぐのふ。

++なす[鳴](他、さ四) ならす。「かき—琴の聲にさ(ま)」。

++なす[寐](自、さ四)「いぬ」に同じ。「なせる—」

++なす(接尾) 或語に添へて、似たる義を表する語。のごとき「さば〳〵—蝦夷等」「眞玉—わがそふいも」。

なすび[茄子](名) ㊀【植】茄科に屬する草、莖の高き二三尺に達す、葉は大形にして卵狀若しくは楕圓狀をなし、花冠は紫色を帶ぶ、漿實は大形にして通常紫黑色を帶ぶ、漿實にし、又は煮て若しくは燒きて食ふ。 ㊁病氣のため、子宮の陰部の外にあらはれ出でたるもの。

なずら・ふ[準](他、は下二) なぞらふ。たぐふ。准、擬。

なず・る[擦](他、ら四) ㊀望抹す。ぬりつく。すりつく。 ㊁貴又は譽を他人にかゝけもはす。(擬)。

++なせ[汝兄](名) 古昔、女子の男子を親しみて呼ひし語。(夫君)。

++なせ[何故](副) どういふわけで。なにゆゑに、どうして。 ——**に**[何故](副) 前條に同じ。

なぞ[謎](名) ㊀なぞ〳〵」の略言。 ㊁轉じて、あちはにいはずして、とはまはしに氣の附くやうにいふと。 ㊂意義不明にして解釋むづかしきこと。 ——**をかく** なぞ〳〵の題を出して問ひかく。又、とはまはしにいひかく。 ——**をさく** なぞ〳〵の意を解す。又、とはまはしの言を解す。

++なぞ[何故](副) なにゆゑぞ。なにゆゑに。

——なぞ[等](接尾)「などの訛。

なぞ・がけ[謎掛](名) なぞをかくること。

なぞ・だて[謎立](名) なぞの如くに語ること。

なぞ・づけ[謎附](名) 俳諧の前句附の一種、點者より題を出し、これを前句として讀むもの。

なぞ・さき[謎解](名) なぞの意を解くこと。

なぞ・なぞ[謎謎](名) 《何ぞ何ぞの義》意義を直接にいひあらはさず、つゝみ隱したる問ひを掛け、これを推察して對へさすること。なぞ。 ——**あはせ**[謎謎合](名) 互になぞ〳〵をかけあひ又はときあひて優劣を爭ふこと。

++なぞ・ふ[準](他、は下二)「なぞらふ」の略言。

++なぞへ(名) なゝめ。はす。傾斜。

なぞら・ふ[準](他、は下二) ㊀たぐふ。なずらふ。 ㊁にる。

なぞら・ふ[準](他、は下二) ㊀くらぶ。たぐふ。 ㊁擬す。にす。

++なそり[納蘇利](名) 雅樂の曲名、高麗樂に用ふるもの。なっそり。

なた[鉈](名) 幅廣く厚くして稍や弓形をなせる刀、薪などを斷ふつに用ふるもの。(彎刀)。

なた[灘](名) 陸より遠くして波のあらき海路。あらうみの船路。(洋)。

なた・たい[名題](名) ㊀姓名を表題に掲ぐること。 ㊁名だかきこと。著名。(名代)。 ㊂「なだいやくえや」の略言。 ——**・おた**[名題下](名) 芝居にて、名題役者の下なること。又、其役者。 ——**・やくえや**[名題役者](名) 故人の名跡を承繼し得る資格の役者、即ち格位高きものにして番附などに大字にて出るまゝ。

++なたいめん[名對面](名) ㊀古昔、宿直の侍(サムラヒ)などが互に其名を名告(ノ)りあひしこと。(名謁)。 ㊁戰場にて、名告り合ふこと。

なたかし[名高](形、二) 名ひろく世に聞こゆ。名著(ハク)れてあり。

なた・ざけ[灘酒](名) 攝津國灘地方より產出する精酒、日本酒の中にて最も佳良なるものと稱せらる。かみざけ。

なた・ざより[灘鎭](名)【動】たつ」の一名。

++なた・たし[名立](形、二) 名あらはるべくあり。名だかくなるべし。

なた・たる[名立](名)《名立ちてあるこの約》名に聞こえてあり。名立ちてあり。名に負ふ。「—宿」。

++なた・たて[名立](名) 評判の立つやうにすること。浮名の立つやうにすること。名をれ。「花の—の身ならずば」。

なた・たね[菜種](名) あぶら菜の種子。 ——**・あぶら**[菜種油](名) 菜種より採取したる油。たねあぶら。 ——**・ね**[菜種菜](名)【植】「あぶらな」に同じ。

なた・ぶね[灘船](名) なだをこすふね。

なた・まめ[鉈豆](名)【植】豆科に屬する草、莖蔓にして葉はさゝげよりも大いなり、莢(サヤ)は長大扁

平にして形鉈(ナタ)に似る、種子と共に漬け又は煮ニて食す。たちはき。刀豆、白刀豆、狹劍豆。 ——**・ギセル**[鉈豆煙管](名) 扁平にして鉈豆の莢に似たる短かき煙管。

なた・むけ[宥](他、ま下二) ㊀和らげをさむ。柔げ去づむ。 ㊁ゆるして賞めず。もいて問はず。(寬恕)。 ㊂機嫌をとる。すかす。「だむ」の訛。

なだめ[宥](名) なだむること。 ——**る**(他)「なだめざけ」に同じ。

なだめ・ざけ[灘目酒](名)「なだざけ」に同じ。

なたらか(名) ㊀あだやか。平穩。 ㊁勾配ゆるきと。傾斜少なきこと。

++なたらか・す(他、さ四) なだらかにす。

++なたら・む(他、ま下二) なだらかにす。

なた・る(自、ら下二) ㊀斜に傾く。かたむく。(傾)。 ㊁斜に崩る。くづる。(頹)。

なたれ(名) ㊀なだるゝこと。 ㊁なだれ落つる雪。(頹雪)。

なち・ぐろ[那智黑](名) 紀伊國那智の海邊より產出する純黑の石、蕊石などに用ふ。

なつ[夏](名) 四季の一、春の後にして秋の前なる三個月間の稱、最もあつきとき。

なつ・づ[撫](他、た下二) ㊀なだらかに擦(ス)る。やさしくさする。 ㊁慰め安んず。いたはる。あはれむ。いつくしむ。「天下の民を—」。 ㊂雜(ナ)きはらふ。 ㊃打つ。(齋宮忌詞)。

なつ・あづき[夏赤豆](名)【植】あづきの一種、果實の夏熟するもの。

なつ・いちご[夏苺](名)【植】いちごの一種、果實の夏熟するもの。とっくりいちご。

(なつ・いん[捺印](名) 印形をおすこと。

なつ・うめ[夏梅](名)【植】(ロ)蕊羅樹の一名。(ろ)「またたびの」の一名。

なつ・がき[夏蠣](名)【動】「ころびがき」(轉蠣)に

++なつ・かぐら[夏神樂](名) みなづきのはらへに行ふ神樂。

なつ・かげ[夏陰](名) 夏の繁(シ)りたる木陰。

なつか・し[懷](形、二) ㊀睦まし。ふたし。 ㊁かはゆし。いとはし。「衣」。

なつ・き[夏季](名) 夏の時。なつ。

なつ・ぎ[夏着](名) 夏の頃に着る衣服。夏衣。(暑

++なづき[腦](名)「なう」の古稱。

なづき[名簿](名) 我姓名を記したる札、古昔、降參又は入門の證などにもせりといふ。みやうぶ。

なつ・ぎく[夏菊](名)【植】菊の一種、夏の頃早く咲くもの。(鞠覆花)。

なつ・きぬ[夏衣](名) なつごろも。なつぎ。

なつ・く[懷](自、か四) 《馴れ附く義》 ㊀親しみ從ふ。なれむ。 ㊁ふたひ從ふ。ふたがふ。

なつ・く[懷](他、か下二) なつくやうにす。なつかしむ。

なつ・ぐ・く[名附](他、か下二) ㊀名をつく。命名す。 ㊁稱す。呼ぶ。となふ。いふ。

なつ・ぐさ[夏草](名) 夏季にもひたげれる草。

なつ・ぐみ[夏茱萸](名)【植】胡頹子(グミ)科に屬する木、葉は小形楕圓狀にして互生し、冬季落葉す。通常葉腋に一花を生じ、赤色楕圓狀の果實を結ぶ、食用とすべし。(木半夏)。

なつけ[懷](名) なつけたがはゝること。

なつ・げ[夏毛](名) 鹿の毛の夏の半過ぎて黃色になり斑の出でたるもの。「冬毛又は行縢(ムカバキ)とするに」「燒藥」。

なつ・づけ[菜漬](名) 鹽漬にしたる菜。もはづけ。

なつ・づけ[名附](名) 生兒に名をつくること。生後七日目に行ふものとす。(命名)。 ——**・おや**[名附親](名) 生兒に名をつくる人、從來主(ヌシ)に母方の祖父これに當るを例とす。なおや。

なつける[懷](他)「なつく」の訛。

なづける[名附](他)「なづく」の訛。

なつ・と[夏蠶](名) かひこの一種、夏時かゝるもの。「の」。

なつ・とたち[夏木立](名) 夏の頃の生(オ)ひ繁れる木立。

なつ・ざぶき[座夏敷](名) 諸方をあけひろげたる夏の座敷。「の略言」。

++なづさは・る[馴れ來](自、ら四) 《なづさふ》波に漂(ヨヒ)ふ。ひたる。たゞよふ。「沖に—」。 ㊁なる。なじむ。「親れ來て—」。

なつ・ぞよ[納所](名) ㊀年貢などをとりをさむる所。 ㊁寺院にて、寺務を取扱ふ僧。 ㊂寺院にて、寺務を取扱ふ所。

なつ・せみ[夏蟬](名)【動】蟬の一種、小形にして體色黑く、翅は透明にして美なり、夏の半頃、朝より暮れまで鳴きつゞく。

++なっそり[納蘇利](名)「なそり」に同じ。

なつ・だいだい[夏橙](名)【植】「なつみかん」(夏蜜柑)に同じ。

なつ・だいとん[夏大根](名)【植】大根の一種、夏生ず、根細くして辛味多し。(夏蘿蔔)。

なつ・つばき[夏椿](名)【植】(ロ)蕊羅樹の一名。

(なっ・とう[納豆](名) 一種の食品、古製なるは濱名納豆を稱し、現時のはもに煮たる白大豆をねかして粘分の生ずる頃藁に包み貯へおきたるものを

なたなべ 苗字。

なたねがき [菜種油] (名) 菜種から採った油。

なたねづき [菜種月] (名) 旧暦三月の別称。

なたねばな [菜種花] (名) 菜の花。

なたねぼし [菜種干し] (名) 菜種を干すこと。

なたねまき [菜種蒔き] (名) 菜種を蒔くこと。

なたねゆ [菜種油] (名) 菜種から採った油。

なたのもの [なたの物] (名) 鉈。

なたまめ [刀豆] (名) 豆の一種。

なたまめ [刀豆] (名) 豆の一種。

なたまめ [刀豆] (名) 豆の一種

なはのこ

なはのこ【名】（動）❶自ら出る。❷自ら出て行く。

なはのこ【名】（動）❶なはの子。❷なはの子。

なはのこ【名】（動）❶なはの子。❷なはの子。

なはのこ【名】（動）❶なはの子。❷なはの子

なふへ

(なふ・へい[ノウ][納幣]**)**(名) 幣物ををさむると、又、をさむる幣物。

(なふ・ほん[ノウ][納本]**)**(名) 書物を官にをさむる「と。

なぶり・ごろし[鬪殺]**)**(名) 直に殺さずに苦しめなやまして殺すと。(虐殺)。

(なふ・りやう[ノウリヤウ][納涼]**)**(名) すゞみ。

なふる[ならりる、なられる][鬪]**(他、ら四)** ■戯言もて困(ク)しめなやます。いぢめひやかす。嘲弄す。■もてあそぶ。

なへ[ナエ][苗]**(名)** ■草木の苗(モ)え出てたるもの。めばえ。■稲のめばえの稱。「早—」。

なべ[鍋]**(名)** 《煮(ナ)る(ベ)の義》食物を煮るに用ふる金屬製又は陶器製の器、底は釜よりも淺くして開き、つる又は柄などを設く。(鍋)。——**がね**[鍋鐵]**(名)** 鍋又は柄などを設ける鐵即ち銑鐵。づく。

なへ・ぎ[ナエ][苗木]**(名)** 樹木のなへ。

なへ・ぐ[ナエ][せげ、ぜげ][塞]**(自、か四)** 足自由に利(キ)かずして歩行になやむ。

なべ・ぎやき[鍋鳴焼]**(名)** 一種の料理、輪切にしたる茄子を油にていため、これを味噌と醤油とにて煮(ニ)たるもの。

なへ・ごろ[ナエ][苗代]**(名)** 「なはごろ」に同じ。

なべ・ぎんやき[名]「なべぎやき」に同じ。

なべ・すう[ならべすう、ならべすう][並据]**(他、わ下二)** ならべすう。「すゑ。

なべ・ずみ[鍋墨]**(名)** 鍋又は釜などの底につく

なべ・せん[鍋錢]**(名)** なべがねにて鑄造したる錢。づくせん。

なべ・づる[鍋鶴]**(名)** 【動】まなづるの一種、羽毛の灰色を帶ぶるもの。(灰鶴)。

なべ・づる[鍋鉉]**(名)** 鍋のつる。

なべて[並]**(副)** ■しなべて。■しくなべて。■しくるめて、概して。■はかた。

なへ・ざと[ナエ][苗床]**(名)** 苗を仕立つるはたけ。立つる所。

なへ・はた[ナエ][苗圃]**(名)** なへのはた。

なへ・ぶた[鍋蓋]**(名)** なべのふた。

なへ・に[並]**(副)** それと共に。それにつけて。「日ごろしのなきつる—日はくれぬ」。

なへ・やき[鍋焼]**(名)** 食物を鍋に入れてよく煮(ニ)ると。——**うどん**[鍋焼饂飩]**(名)** 小さき土鍋にて煮饂飩を煮たるもの、多く冬夜街上を賣りあるく。

なへ・わり[鍋破]**(名)** 【植】百部科に屬する草、高さ一尺許、葉は楕圓形にして紫色の縱線あり、花は小形白色にして葉間に下垂す、果實は茶褐色にして得あり。(黄精葉鉤吻)。「れ」。

なほ[ナオ][猶]**(副)** ■もとのやうに。やはり。まだ。(仍)。■其上に。さらに。(尚)。■あたかも。丁度。

なほ・さら[ナオ][尚更]**(副)** 其上に。いよ〳〵。ことに。

なほざり[ナオザリ][等閑]**(名)** 打すて、氣に掛けざること。輕々しく見て心を注(ツ)がざること。かりそめ。

なほざ・る[ナオザル][もちりる、もられる][等閑]**(他、ら四)** なほざりにす。

なほし[ナオシ][直]**(名)** ■なほすもの。■なほすこと。■なほすもの。■なほすを業とする人。■燒酎と味醂とを混合したる酒、甘くして氣弱し。■婚禮などにて、衣服を衣更ふること。

なほし[ノオシ][直衣]**(名)** 古昔の服、其制殆ど袍と同じく、たゞ紋と地とに差あるのみ、烏帽子・指貫を用ふ、四位以上にても許可を受けざれば著用するを得ざりしもの、すそづけのこるも、襴衫、襴衣。

[しはな]

なほ・し[ナオシ][けれ、しき][直]**(形、二)** ■曲ちず、屈まず、ますぐなり。■頑かず、平かなり。ひらたし。■邪たらず、私なし。すなはなり。「なありさま。

なほし・すがた[ナオシ][直衣姿]**(名)** 直衣をつけたなりさま。

なほしじた・つ[ナオシジタ][つてて、つれて、つれる、つれよ][直立]**(他、た下二)** わざはひをのぞく。

なほし・の・くらゐ[ナオシ][直衣位]**(名)** 直衣を著用するとを得る官位。「し。

なほし・の・とろも[ナオシ][直衣]**(名)** 「なほし」に同

なほし・ばひ[ナオシ][直灰]**(名)** 酒の腐敗を直すに用ふるもの、本石灰一斗に豐後灰四升を入れ熬(イ)りて製す。

なほし・もの[ナオシ][直物]**(名)** ■ものをなほすこと。又、なほすべきもの。■古昔、除目の後、召名などの錯(ナ)まり漏れたるを書直はすをいふ。

なほ・す[ナオス][すせ、せ][直]**(他、さ四)** ■たゞしくす。なほくす。■修補す。つくろふ。■訂正す。たゞす。■修正す。あらたむ。■掃削す。「詩文を—」。■病氣を療治す。いやす。■正しき座に就(ク)かす。「上座に—」。

なほ・なほ[ナオナオ][尚尚、猶猶]**(副)** ■ますます。いよ〳〵。■そへて。加へて。——**がき**[尚尚書]**(名)** 手紙の本文の後に書き添ふる文句、多くは其冒頭に「なほ〳〵」と書くよりいふ。(追啓、二伸)。

なほ・なほ・し[ナオナオ][しけれ、しき][直直]**(形、二)** なんのこともなし、普通なり。つねなり。

なほ・なほ・に[ナオナオ][直直]**(副)** あだやかに、あだやかに。

なほ・びさ[ナオ][直人]**(名)** 家柄の普通なる人。たゞびと。「父は—にて母なん藤原なりける」(素人)。

なほ・もって[ナオ][尚以]**(副)** なほさら。ことに。

なほらひ[ナオライ][直會]**(名)** 古昔、祭事をはりて後に僅(ワヅカ)しい宴會。

なほ・る[ナオル][らりる、られる][直]**(自、ら四)** ■正しくなる。なはくなる。■あらたまる。かはる。■舊の如くになる。■病氣癒(イ)ゆ。■正しく座に就(ク)く。■死す。(齊宮の忌詞)。

なま[生]**(名)** ■動植物の採取したる儘にて、煮(ニ)も焙きも又は乾しも賈(ウ)けもせざるもの。■新鮮なること。あたらしきこと。■成熟せざること。十分ならざること。「—煮」。■經驗少なきこと。年功足らざること。「—侍」。■なまいき。■げんなま、即ち現金。

なま—[生][接頭] ■或語に冠して、多く時を經(ヘ)ざる意を表する語。「—あたらしく」。■或語に冠して、「すこし」又は「やや」の意を表する語。「—恥し」。■或語に冠して、「うはべ」又は「かりそめ」の意を表する語。「—覺え」「—兵法」。

なま・あたら・し[しくしく、しき][生新]**(形、二)** 未だ時を經(ヘ)ずして新し。

なま・あらあら・し[しくしく、しき][生荒荒]**(形、二)** やゝあらゝし。

なま・いえ[生癒]**(名)** 病氣のやゝ快方に向ふこと。病氣の未だ十分に癒(イ)えざること。

なま・いき[生生]**(名)** 半ば死にてゐること。

なま・いき[生意氣]**(名)** ■聞いた風をすること。物知り顔すること。■さしいでゝなすこと。でしゃばり。

ナマイダ(名)「ナムアミダブツ」の訛。

なま・いたはり[ツリ][ツリ](名) うはべばかりのいたはり。

なま・いとほ・し[しけれ、しき][生憎]**(形、二)** いさゝいとはし。

なま・いどま・し[しけれ、しき][生挑]**(形、二)** いさかいどまし。

なま・いど・む[むまれむ][生挑]**(自、ま四)** かりそめにいどむ。

なま・いわけな・し[けれ、しき][生稚]**(形、二)** まだ「年少し。若し。

なま・うしろめた・し[けれ、しき][生後痛]**(形、二)** やゝうしろめたし。

なま・うらめ・し[しけれ、しき][生恨]**(形、二)** やゝうらめし。「鳥。

なま・り[生]**(名)** とりたての魚。あたらしき

なま・ぼえ[生覺]**(名)** 未かともぼえざること。うろ「ざること。

なま・がくもん[生學問]**(名)** 學問の未だ成熟せざること。

なま・かじり[名] ■十分にかまぬこと。■なまがくもん。なまものかじり。

なま・かた[生方]**(名、副)** わづか。いさゝか。

なま・がてん[生合點]**(名)** 十分にのみこまざるに合點すること。はやのみこみ。

なま・がね[生鐵]**(名)** 未だきたへざる鐵。

なま・かは[ワカ][生皮]**(名)** ■皮のまだあたらしきもの。■一種の料理、酢に漬(ツ)けたる鳥の皮をにたてたる醬油につけて食ふもの。

なま・がひ[イガ][生貝]**(名)** ■なまの貝。■一種の料理、鮑(アハビ)のなまの肉を細みて水に浸(ヒ)したるもの、三杯酢などにして食ふ。みゞがひ。

なま・かべ[生壁]**(名)** ■塗りていまだ乾かぬ壁。■なまかべいろ」の略言。——**いろ**[生壁色]**(名)** 淡き藍鼠色。

なま・き[生木]**(名)** いまだ枯れざる木。——を

なま・きき[生聞]**(名)** ■よくは聞かざること。よくは知らぬこと。■よくは知らずして物知りがほすること。

なま・きず[生傷]**(名)** あたらしききず。「と。

なま・ぐさ・し[けれ、しき][生臭]**(形、二)** ■生なる魚肉のくさみあり。(腥)。■生なる血の臭ひあり。

なまぐさ・ばらず[ボ][生臭坊主]**(名)** 魚肉・獸肉等生臭きものを食ふ坊主。品行修まらざる坊主。

なま・くちを・し[しくしく、しき][生口惜]**(形、二)** やゝくちをし。「〳〵し。

なま・くび[生首]**(名)** 斬りたるまゝの首級。きりたての首級。

なま・くら[鈍]**(名)** ■きれ味のにぶきこと。又、其刃物。■意氣地なく役に立たざること。又、其人物。——**がたな**[鈍刀]**(名)** なまくらなる刀。——**ぶし**[鈍武士]**(名)** 役に立たざる武士。

なま・ぐら・し[しけれ、しき][生暗]**(形、二)** やゝくらし。ほのぐらし。「るし。

なま・ぐる・し[しくしく、しき][生苦]**(形、二)** やゝくるし。

なまけ[懶]**(名)** なまけること。又、なまけるもの。——**もの**[懶者]**(名)** ■[動]貧倉鼠に屬する獸、全身に半毛生じ、喙短く顱圓くして形猴に類す、前肢は後肢よりも長く、肢に長大なる鉤狀の爪を具す、南「アメリカ」の特產にして、密林の樹上に棲息す、行歩極めてのろく、性遲鈍にして怯懦なり。(樹懶)。■[動]貧倉鼠。

なまける[けれ、けろ、けよ][懶]**(自、か下一)** はげみつとめず、をこたる。ずるける。

なま-と［海鼠、沙噀］(名) ㊀(動)沙噀類に屬する動物、海に產す、體扁は扁平にして軟滑なり、背面は蒼黑色にして多くの突起を有し、腹面に吸盤を具する歩足三綫帶をなす、酢に漬(ひ)して生食し、又、乾して海參(イリ)とす、其腸も「このわた」と稱し食用に供せらる。㊁なまこかべ。なまこもち。なまこ。なまぼり」の略言。——**ガハラ**(ガワ)［海鼠瓦］(名) 「なガハラ」に同じ。——**かべ**［海鼠壁］(名) 壁の塗方、方形の平瓦を密接し、其隙間を漆喰にて雲鉢形に盛り上げたるもの。——**ぼり**［海鼠絞］(名) 根掛などの括絞にしたるもの。——**もち**［海鼠餅］(名) 雲鉢形にしたる餅、端より切りて羹餅となすもの。——**るゐ**［沙噀類］(名) 【動】棘皮動物の一、體扁は概ね扁平若しくは圓筒狀にして、骨片皮膚の中に散在す、口は前端にあり、其周圍に數多の觸手環生し、肛門は後端に開く、淺海に棲み、歩足又は筋肉によりて匍匐す。

なま-ごころ［生心］(名) いろけ。春心。

なま-ごひ-し(イシ)［生戀］(形、二) ゃゝこひし。

なま-ごろし［生殺］(名) はんごろし。

なま-さか-し(しけれ)［生賢］(形、二) こざかしし。

なま-ざかな［生肴］(名) なまうを。

なま-ざむらひ(ライ)［生侍］(名) あをざむらひ。

なま-まし［助動］(助動詞「ぬ」の變化なる「な」に「ましの添はりたる語)未來を推量する意の助動詞。

なまじ(副) むしろ。かへって。——**なまなか**(副) 前條に同じ。

なまし-がたな［生刀］(名) なまくらがたな。

なま-ぞく［生氏族］(名) ゃゝよき家筋。

なま-おひ-に(イシ)［慙］(副)(生強(ナヒ)の義)㊀心に副(ツ)はざるに強ひて。㊁手出しせずとも善きに手を出して。

なま-おめり［生渦］(名) なまおめると。又、なまおめるもの。

なま-おめ-る(られれ)［生渦］(自、ら四) ゃゝおめる。

なま-おろ-し(しけれ)［生白］(形、二) ゃゝおろし。すこしおろし。

なます［膾］(名) ㊀古昔は魚肉を細く切りたるもの、轉、現今は細く切りたる魚肉を酢に和したるもの、轉。㊁大根・胡蘿蔔などを細く切りて、酢・醬油などに浸(ひ)したるもの。「れて煮(ク)ふ。

なま-す(させ)［焼］(他、さ四) 燒きたる鐵を水に入

なま-ずりやう(リヤウ)［生受領］(名) 受領したりとて其かひなきもの。

なま-たけ［生竹］(名) 切りてまだほど經(ヘ)ぬなまゝしき竹。

なま-たまご［生卵］(名) なまのたまご。

なま-ち［生血］(名) 新鮮なる血。いきち。せいけつ。(鮮血)。

なまづ［鯰］(名) ㊀【動】硬鱗類中なまづ科に屬する魚、頭部は扁大にして尾部は側扁なり、皮膚は鱗なくして粘質に富み、背部蒼黑色にして腹部白色なり、口邊に大いなる鬚あり、體長尺餘に達す、湖沼河水等の淡水に產す。(鯰鰌、慈魚。㊁(立派なる鯉を鯰(ハタ)ふるもの又は高地位の官吏をの、しりていふ語。

［なまづ］

なまづ［鰹］(名) 一種の皮膚病。絶して、皮膚に觸き斑點を生ずるもの。癩風。——

はだ［瘧肌］(名) 前條に同じ。

なま-つ-ま-し(しけれ)［生慎］(形、二) ゃゝつゝましし。

なま-つば［生唾］(名) 酸味あるものを見たるときなどに、自ら口中に出づる唾の轉。「刺がす」。

なま-づめ［生爪］(名) 指に生えてある爪。「—を

なま-なか［生半］(副) ㊀なまじひに。「—留めて」㊁半途に。「—達はねば。

なま-なま［生生］(名) ㊀いと新鮮なること。

なま-なま-し(しけれ)［生生］(形、二) なま〳〵なるさまなり。——**み**［生生身］(名) なま〳〵しき身、なまみ。「又、其もの。

なま-にえ［生煮］(名) よく煮えのとほらざること。

なま-にく-し(しけれ)［生憎］(形、二) ゃゝにくし。

なま-はづか-し(しけれ)［生恥］(形、二) ゃゝはづかし。

なま-はら-だ-つ(たちつて)［生腹立］(自、た四) ゃゝはらだつ。「いふ語。

なま-はんか(名、副) 物事の十分ならざるさまに、はちだつ。

なま-はんぶ-やく(名、副) 前條に同じ。「の。

なま-び［生乾］(名) 十分に乾かざること。又、其も

なま-びやうほふ(ヒヨウホウ)［生兵法］(名) ㊀少しく兵法を知りてあること。㊁未熟、不鍛錬。——**れぼ**

きず のもと 少しく其道を心得たるものは、これをたのむ心あるより却って大失敗を招くにいふ。

なま-ふ［生鈍］(名) 燒き又は乾かしてなき鈍。

なま-へ(エマ)［名前］(名) 人の名稱、姓名。——**わけ**［名前別］(名) 人々の名前の區別。

なま-まばゆ-し(しけれ)［生眩］(形、二) ゃゝまばゆし。

なま-み［生身］(名) 生きてある身。

〔ナマミダ(名)「ナムアミダブツ」の轉訛。

なま-みやづかへ(カエ)［生宮仕］(名) 宮仕したりといふ程にもなき身分。

なま-むつか-し(しけれ)(形、二) ゃゝむつかし。

なま-め［生海藻］(名) なまの海藻。

なまめか-し(しけれ)(形、二) ㊀あてやかなり。なやかなり。うつくし。(嫵媚)。㊁なまめきて見ゆ。(ロ)ある體にてあり。いろめかし。(媚嫵)。㊂心ゆかし。おくゆかし。

なま-め-く(かきくけけ)(自、か四) ㊀なま〳〵しくあり。なまにてあり。㊁あてやかに見ゆ。美(ウツ)しく見ゆ。㊂こびをふくむ。いろめく。

なま-めど-る(られれ)［生目留］(自、ら四) ゃゝ眼にとまる。ちよっと目につく。

なま-もの［生物］(名) 生のもの。

なま-もの［生者］(名) 未熟なるもの。

なま-ものおり［生物識］(名) 學問の未熟なるに熟達したるさまをてらふと。多く知らざるにものたり顔すること。「の。

なま-やけ［生燒］(名) よく燒けざること。又、其も

なま-よひ(ヨイ)［生醉］(名) 「なまるひ」の訛。

なま-よみ-の(枕)「かひ」甲斐に冠らする詞。

なまり［鑑］(名) なまると。

なまり［鉛］(名) 【化】柔かき青白色の金屬、多くは化合物となりて存在し、濕氣中にては表面薄く錆びてくもる、重くして展性に富み、火に鎔(ト)け易し、合金又は化合物は國々の工業用に供せらる。——**ガラス**［鉛硝子］(名) 【化】主として鉛及「カリウム」の硅酸鹽より成る硝子。「フリントガラス」。

なまり［訛］(名) なまると。又、なまりたる語。「國—」。——**とばし**［訛語］(名) なまりたる言語。

方言。——**どる**［訛聲］(名) だみごゑ。

〔**なまり**(名)「なまりぶし」(生節)の略言。——**ぶし**［生節］(名) 鰹(カツ)の身を火に炙(ア)りて、肉の水分を取りたるもの、更にこれを乾(ホ)して鰹節となす、食用に供せらる。なまり。

なま-る(られれ)［訛］(自、ら四) 言語正しからず。發音正しからず。

なま-る(られれ)［鈍］(自、ら四) ㊀切味鈍(ニブ)くなる。なまくらとなる。㊁志望くじけ弱る。㊂論鋒によりひるむ。

なま-わ(られれ)［鰐］(自、ら四) かくる。

なま-わか-し(しけれ)［生若］(形、二) いとわかし。

なま-わづらはし(しけれ)［生煩］(形、二) ゃゝわづらはし。

なま-ゐ［澤瀉］(名) 【植】おもだかの古稱。

なま-ゑ［生餌］(名) なまもの、餌、いきゑ。すりゑの對。

なま-ゑひ(エ)［生醉］(名) ㊀酒に醉ひたる人。よっぱらひ。醉客。㊁醉はずして醉を裝ふ人。

なま-ぢか-し(しけれ)(形、二) ゃゝをかし。

なま［並］(名) ㊀ならび。つら。れつ。㊁よのつね。あたりまへ。通常。

なみ［波］(名) ㊀水の平均を失し、動搖して凸凹起伏するもの。浪、濤。㊁年老いて皮膚に生ずる皺(ワ)。㊂【理】媒體內にて、各部に振動の順次に傳播する現象。㊃すべて物事の凸凹起伏する狀態。「髮に—打たせて」。㊄水流。「汪々たる千頃の—」。

なみ［無］(副) なきがために。なさに。

なみ［並］(接尾) 或語に添(て、時每に又は物每にする意を表する語。「門(カド)—」「町—」。

なみ-あし［並歩］(名) 普通の足なみ。

なみ-あと［波跡］(名) 波の打ち寄せたる痕跡。

なみ-うち-ぎは(ワギ)［波打際］(名) 波の打ち寄する所。なぎさ。みぎは。

なみ-う-つ(たちつて)［波打］(自、た四) 波寄せ來る。波おこり起つ。

なみ-かぜ［波風］(名) ㊀波と風と。又、風吹きて波立つこと。㊁いさかひ。あらそひ。もめ。

なみ-き［並木］(名) 街道の兩側に一列に植ゑつけたる樹木。列樹、樹。

なみ-きる-ひれ［切涙比禮］(名) 波を去けむる功ありといふ神代の寶物。

なみ-くら［並藏］(名) ならびつゞきたる倉庫。

なみ-す(せしすす)(自、さ變) 輕蔑して其人あれども無きが如くに見る。ないがしろにす。あなどる。「上を—」。

なみ-せん［涙錢］(名) 涙の形ある錢、即ち寶永錢。

なみ-だ［涙］(名) 《眼の水の義》眼球の上部にある涙腺より分泌する液、感情の激したる時に出づるもの。(淚)。㊁悲しくなること。泣(ナ)くこと。㊂轉じて、情愛。人情。「—のない人」。

なみだ-かたて-に［涙片手］(副) 泣きながら。なく〳〵。

なみだ-がち［涙勝］(名) ㊀涙のもよほし易きこと。㊁悲のもよほし易きこと。

なみだ-がは(ガワ)［涙川］(名) 甚しく涙の流るゝを川にたとへいふ語。

なみだ-きん［涙金］(名) 其人と從來の關係を絕つとき、與へずともよきに、人情上より曲げて與ふる金。

なみだ-ぐま-し(しけれ)(形、二) 涙ぐみたり。

涙を含めるさまなり。

なみだ-ぐむ[涙含](自、ま四) 眼に涙を含む。涙をもよほす。なかんとす。

なみだ-ごゑ[涙聲](名) なかんとする聲。なきつゝある聲。なきごゑ。「む。

なみだ-ぶむ[涙染](自、ま四) なみだにそむ。

++**なみだ-たり**[承泣](名) 眼の下の炎處。

なみ-た-つ[波立](自、た四) 波起こる。波生ず。

なみ-た-つ[並立](自、た四) ならびたつ。

〔**なみだ-たっぽろい**[涙脆](形)「なみだもろし」に同じ。

なみだ-ばや-し[涙早](形、一) ㊀涙を流しやすし。なき易し。㊁同情し易し。感動し易し。

++**なみだ-もろ**[涙脆](名) なみだもろきこと。

なみだ-もろ-し[涙脆](形、一) なみだぱ「やし。

なみ-ぢ[波路](名) ふなぢ。航路。

++**なみ-ざ**[波音](名) なみのおと。

なみ-さう[並等](名) なみの等級。

++**なみ-なざ**[波音](名) なみのおと。

なみ-なみ[波波](名、副) 遂(ア)れこぼれんとするさまにいふ語。(滿滿)。

なみ-なみ[並並](名) ひととほり。世のつね。つねなみ。つね。通例。尋常。

なみ-の-あわ[波沫](名) 波のあや。波紋。

なみ-の-はな[波花](名) ㊀波の物に衝突して白く見ゆるを花にたとへいふ語。(浪華)。㊁〔食鹽の異稱。(東京の方言)。

なみ-の-ほ[波穂](名) 波のおこりあがる端末。

++**なみ-ふる-ひれ**[波振比禮](名) 波を起こす功ありきといふ神代の寶物。

なみ-ま[波間](名) ㊀波の間。㊁波の立たぬ間。

なみ-まくら[波枕](名) 船路の旅。

++**なみ-やか**[並](名) ならびつゞくこと。

なみ-よけ[波除](名) ㊀波を避(サ)くるたよりとなるもの。㊁海中に築きて海波をふせぐ堤。防波。——ぐひ[波除杙](名) 波除に立てつらねたる杙(ビ)。

++**なみ-よ-る**[並依](自、ら四) ならび寄る。

なみ-ゐ-る[並居](名) なみゐるること。

なみ-ゐ-る[並居](自、わ上一) ならびて居る。列座す。

++**な-むま**[並](自、ま四) つらなる。ならぶ。

++**な-むめ**[並](他、ま下二) ならぶ。つらぬ。

な-むめ[嘗](他、ま下二) ㊀舌にて嘗ぐ。ねぶる。㊁賞味す。あぢはふ。㊂經驗す。ためす。

なむ(助動) ㊀過去の助動詞「ぬ」の變化なる「な」に未來の助動詞「む」の加はりたる語。未來を想像する意の助動詞。「行きー」。㊁願ひ望む意を表する助動詞。「行かー」。

ナム[南無](感)《梵語 Namah 又は Namo》 圓合、「圓觀」又は眞實と譯す。【佛】佛に祈る時冒頭に用ふる語。「ー阿彌陀佛」。

なむ(助) 物事を指し示す語。「ぞ」に似て、意すこしゆるし。「かたくーありける」。

ナム-アミダ-ブツ[南無阿彌陀佛](名) 【佛】淨土宗及一向宗にて唱(ト)ふる六字の名號。

ナム-さん[南無三](名) 次條(二)に同じ。

ナム-さんぼう[南無三寶](名) ㊀【佛】佛法僧の三寶に歸依すること。㊁俄かに失錯を感じたるときにいふ語。ちまった。

++**な-むぢ**[汝](代)「なんぢ」に同じ。

ナム-めうほふれんげきやう[南無妙法蓮華經](名) 【佛】日蓮宗にて唱(ト)ふる七字の題目。

++**なめ**[屋脊](名) 瓦具。「はだつり」に同じ。

++**なめ**[白癩](名) 癩病の古稱。

なめ[緩面](名) 鏡の裏の文字なくして滑(ラ)かなる部分。

なめ-くぢ[蛞蝓](名) 【動】胴足類中有肺類に屬する軟體動物。濕暗陰濕の地に棲息す。介殼無く、灰色にして觸角あり。物に這ひ(ば)粘液の痕跡を殘留す。(括詰蟲、土鱗)。

なめ-くぢら[蛞蝓](名) 【動】前條に同じ。(關西地方の方言)。

な-めし[菜飯](名) 菜・大根の葉などを刻み入れ、味をつけて炊(ク)きたる飯。「し。

++**なめ-し**[無禮](形、一) ぶれいなり。ぶぶな

なめし-がは[革](名) なめしたる皮。つくりがは。(鞣革、韋革)。

なめ-す[鞣](他、さ四) 毛皮の毛と脂とを去りて柔かくなす。

なめ-ず-る[舐](他、ら四) 舌にて度々舐をねぶる。

なめて[並](副)「なべて」に同じ。

なめもの[嘗物](名)「ひたは」の異稱。

なめらか[滑](名) ㊀摩擦なくしてよくすべると。すべ〳〵すると。つる〳〵すると。㊁滑稽せずしてよく通ずると。よどみなきこと。つかへざると。「舌ー」。

++**なめり**(助動)《「なるめり」の略》なんめり。「ーあり。「是れー」。

なめ-る[滑](自、ら四) すべる。

〔**な-めるる**(他、ら下一) ㊀「なむ」に同じ。㊁私かに目下の女に通ず。㊂のむ。あなどる。「ーる。

++**なも**(助)「なむに同じ。「願しきことのかぎりにーありける」。

なもみ(名) 【植】卷耳(ワナ)及蒼葵(モナ)を合したる稱。

なや[魚屋](名) さかなや。

なや[納屋](名) ものおきどや。ものおき。

++**なや-うや**[諸否](名) いやおうの返辭。

なや-す[萎](他、さ四) なゆるやうにす。

なや-ま-し[惱](形、二) くるし。つらし。

なや-ま-す[惱](他、さ四) 思ひわづらはす。惱め苦しむ。なやましむ。

なやみ[惱](名) ㊀思ひわづらふこと。思ひみだるゝこと。㊁やまひ。病氣。

なや-む[惱](自、ま四) ㊀思ひわづらふ。思ひみだる。㊁いたみ苦しむ。やむ。

なや-む[惱](他、ま下二)「なやます」に同じ。

〔**なやめる**(他)「なよむ」の誤。

++**なや-らか**(名) なよ〳〵してあること。

++**なや-らひ**[追儺](名) まめまき。つゐな。おにやらひ。「ひを行ふ。

++**な-やら-ふ**[追儺](自、は四) なやらひを行ふ。

な-ゆ[萎](自、や下二) ㊀ちをる。ちなゆ。ちなぶ。㊁力失(セ)せて利(キ)かず。はたらき衰へてすたる。(痿)。

++**なゆ-たけ**[萎竹](名)「なよたけ」に同じ。

++**な-ゆみ**[繩弓](名) 古昔、鼠を射るに用ひし一種の装置。(鼠牙)。

な-よし[名吉](名) 【動】いなに同じ。

な-よせ[名寄](名) 名所の名を寄せあつめたるもの。「き竹。

なよ-たけ[弱竹](名) なよやかなる竹。又、わかいふ語。㊁ちなやかなるさまにいふ語。

なよ-なよ(名、副) ㊀なえてよわ〳〵しきさまに

++**なよび-か**(名) なよびたるすがた。

++**なよ-ぶ**(自、ば上二) ㊀なえたるさまなり。㊁ちなやかなり。

++**なよ-めか-し**(形、二) なよ〳〵としてあり。なよやかなり。

++**なよ-やか**(名) なよめかしきこと。

++**なよ-る**[駿寄](自、ら四) なびみよる。

なら[楢](名) 【植】殼斗科に屬する木、葉は長倒卵形にして長さ四五寸、鋸邊に鋸齒を有し下面に灰白色の綿毛密生す、種子は食用に櫪皮は染料に供せられ、木材は薪炭又は香蕈を作る料に用ひらる。こばうそ。ながし。(柞、柁)。

++**なら**[屍](名) へ。おなら。

ナラク[奈落](名) ㊀【佛】《梵語 Naraka》地獄。㊁芝居の舞臺の下に設けたる穴、舞臺の足音をよく響かすためのもの。——**の-そこ**[奈落底](名) ㊀地獄のそこ。㊁そこひの知れぬふかき所。九地の下。㊂浮ぶ瀾のなき所。

++**ならく**(助動)「なり」の延言、副詞の如く用ふ。「聞くー」。「言ふー」。

なら-ざらし[奈良晒](名) 麻布の上品なるものにして、大和國奈良地方より產出す、苧(ヲ)の纖維たまひしより、延曆十三年に桓武天皇が山城國平安城(今の京都)に遷都したまひたる迄の稱、當時韓・唐との交通又は佛法の興隆等につれて、我國の文化・藝術は大いに進捗したり。

++**ならし**[鏟](名) 木を削りて平かにする具。せん。

ならし[馴](名) なれしむること。

ならし[平](名) ならすこと。平均にすること。

ならし[平](副) すべてを平均して。ならして。

++**な-らし**(助動)「なるらし」の約言。

++**なら-ま-ば-どり**[楢芝鳥](名) 【動】鷹の異稱。

なら-す[平](他、さ四) ㊀高低凸凹のなきやうにす。たひらかにす。㊁多少大小を合して其中を取る。「れしむ。

なら-す[馴](他、さ四) なるゝやうにす。な

なら-す[鳴](他、さ四) ㊀音聲を發せしむ。鳴るやうにす。「笛をー」。㊁弘く知らしむ。あまねく聞こえさす。「評をー」。㊂[評判を取る。はゞを利(キ)かす。「一時はならしたもの」。㊃[說く。語る。「不平をー」。

なら-す-ず[生](他、さ四) 果實を結ばしむ。

なら-ず-もの(名) ㊀一定の職業なく、常に放浪して惡行をなすもの。どろつき。無賴漢。(破落戶)。㊁よく惡事をたくらむもの。わるもの。

なら-ちやがゆ[奈良茶粥](名) 次條に同じ。

なら-ちやめし[奈良茶飯](名) 今和國奈良の東大寺・興福寺等にて炊(ク)き初めたるよりいふ。大豆・小豆・栗などを加へたる茶飯。

なら-づけ[奈良漬](名)《大和國奈良より製し出だせるより此名あり》一種の食品、酒糟になはしの燒酎を加へて瓜又は大根などを漬(ク)けたるもの。

なら-てう[奈良朝](名) 和銅三年に元明天皇が大和國平城(現今の奈良)に遷都したまひしより、延曆十三年に桓武天皇が山城國平安城(今の京都)に遷都したまひたる迄の稱、當時韓・唐との交通又は佛法の興隆等につれて、我國の文化・藝術は大いに進捗したり。

ならにんきやう[奈良人形](名) 大和國奈良にて作り出す人形。春日の社の舊材を用ひて彫刻し、種々の彩色を施せるもの。緒を通はす穴ありて、多くは根附とす。

なら-の-ゐち-たいゐ[奈良七大寺](名) 大和國奈良地方にある七個の大寺。即ち東大寺・西大寺・法隆寺・藥師寺・大安寺・元興寺・興福寺の稱。「華嚴」

++なら-の-は-がしは[楢葉柏](名) 楢の木の葉。「ならはす」に同じ。

ならはし[習](名) ㊀ならはすこと。なれしむること。㊁ならひ。ふうぎ。風習。++——もの[習物](名) ならはしによりてかはるもの。「心をば——といふなれど」

ならはす[習](他、さ四) ㊀くりかへして修め行はしむ。㊁學ばしむ。㊂馴れしむ。「秘言」

{ならはせる(他)「ならはす」の訛。

++ならば-ふ[習](名) ㊀ならふこと。㊁ならはし。志きたり。風習。習慣。㊂世の常態。つね。きまり。——せいとなる[習與性成] ならひは遂に其人の性質をも變化す。ならひつゝ行けば、遂に性質となる。

ならひ[並](名) ㊀ならぶこと。又、ならびたるさま。なみ。つら。れつ。㊁たぐひ。比類。

ならひ-れと-る[並起](自、ら四) きそひてあこる。つゞきてあこる。(暫起)。

ならび-かた[並方](名) ならびたるさま。

ならひ-とま-す[習込](他、さ四) ならひに志きたり。ならひつゝ行けば、遂に性質となる。

ならひ-と-む[習込](他、ま四) 十分にならひ覺ゆ。ならひてよく熟練す。

ならび-な-し[並無](形、ク) ならぶべきものなし。たぐひなし。比類なし。(無雙)。

ならび-に[並併](接) 相ならぶ上下の物事を連接する語。および。かつ。また。

ならび-やう[並樣](名) ならびかた。

ならし-ふ[習](他、は四) 從ひて行ふ。まねてなす。

ならし-ふ[習](自、は四) ㊀軟くを受く。まなぶ。て修め行ふ。ならはしなす。㊁列をなす。列を作る。なむ(列)。㊂つゞく。つらなる。(併)。㊃匹敵す。比類す。たぐふ。(比)。

ならし-ふ[並](他、は下二) ㊀ならばしむ。なむ。つらぬ。ついで。(併)。㊁たくらぶ。くらぶ。(比)。㊂のぶ。いふ。「ことたくを—」

ならべ[並](名) ならぶること。又、ならぶるさま。——かた[並方](名) ならぶる仕方。ならべたるさま。——やう[並樣](名) 前條に同じ。

{——る(他)「ならぶ」の訛。

ならし-ほふ[奈良法師](名) 古昔、奈良の鄙禪寺・東大寺などにやしなひおきし僧兵。

ならし-ぼり[奈良彫](名) 彫刻の一派。最も花鳥などに巧なるもの。奈良宗貞を祖とす。

なり[形](名) ㊀さま。かたち。狀態。㊁みえ。よそほひ。服裝。(名) なりはひ。仕事。

++なり[業](名) ㊀なると。㊁ころ。もと。

なり[鳴](名) 將碁にて、金以外の駒が敵の陣地に入りて金の資格を得たると。又、其駒。

{なり[爲](名) 將碁にて、金以外の駒が敵の陣地に入りて金の資格を得たると。又、其駒。

一なり[生](名) 果實のなると。

{なり(名) かたゐ。癲癇。

なり[也](助動)(「にあり」の約)事物を指定し又は解說する語。「これ—」「命の親—」。

なり[也](助動) 動作をいひ終(ア)はりて制を設(ム)ける。疑歎の意を表する語。「雷の音聞こゆ—」。

なり[也](助) にても。でも。「首—命—柳隨意に」。

なり-あがり[成上](名) ㊀なりあがること。(立身出世)。㊁なりあがりたるもの。——もの[成上者](名) なりあがりたる人。なりあがり。

なり-あが-る[成上](自、ら四) 貧賤より富貴となる。出世す。立身す。なりさがるの對。

++なり-あ-ふ[成合](自、は四) 成りとゝのふ。

なり-い-づ[成出](自、た下二) ㊀出世す。立身す。昇進す。㊁うまれ出づ。生出す。

++なり-おさ-る[成劣](自、ら四) 漸次に劣り行く。

なり-かかり[爲掛](名) なりかゝると。又、其物。

なり-かか-る[爲掛](自、ら四) 化して其物とならんとす。「ていひきわぢ。

++なり-かか-る[鳴掛](自、ら四) 呼びかけ

なり-かたち[形姿](名) みえ。ふり。みなり。

なり-かは-る[成代](自、ら四) 其人に代はる。代理す。「親に—」

なり-かぶら[鳴鏑](名) 「かぶちや」に同じ。

{なり-くだもの[生果物](名) 「くだものこに同じ。(東京の方言)。

なり-さがり[成下](名) ㊀なりさがること。(零落、墮落)。㊁なりさがりたるもの。

なり-さが-る[成下](自、ら四) 富貴より貧賤となる。零落す。墮落す。なりあがるの對。

++なり-すがた[形姿](名) なりかたち。物事そひ加はる。

なり-たち[成立](名) ㊀なりたつこと。㊁なりたちたる過程。㊂成分。要素。

なり-た-つ[成立](自、た四) ㊀成就す。できあがる。なる。㊁生出す。なりいづ。いづ。

なり-つまど[鳴雲戸](名) あけたてに音のする雲戸。

++なり-どころ(名) ㊀出物の產出する所。㊁志も。

なり-どさの-ふ[成調](自、は四) できあがる。なる。

なり-なん-ど-す[垂](自、さ變) 將にならんとす。將に及ばんとす。なん〳〵とす。(尙)。

なり-のぼ-る[成上](自、ら四) 「なりあがる」に同じ。

なり-はず[鳴弭](名) 弓射るとき鳴るやうにしたる弭。

なり-はた[成上](自、ら四) なりひゞく。なりわたる。

なり-は-つ[成果](自、た下二) うつりゆきてなはりとなる。なりゆきてはてとなる。

{なり-はて-る(自)「なりはつ」の訛。

なり-はひ[生業](名) ㊀よすぎ。渡世。生活。㊁すぎはひ。家業。農業。

++なり-ひさご[生瓢](名) 【植】「ひさご」に同じ。

なり-ひび-く[鳴響](自、か四) ㊀鳴る聲あまねく聞こゆ。ひゞき渡方に聞こゆ。㊁名聲あまねく聞こゆ。名高くあり。

なり-ふり[形振](名) ㊀みなり。みえ。すがた。㊁世間のもやう。他のふりあひ。

なり-まさ-る[成優](自、ら四) 次第に優るやうになりゆく。まさりゆく。

なり-もの[鳴物](名) 音樂に用ふる鐘・太鼓・弦器などの總稱。即ち、樂器。——いり[鳴物入](名) 歌舞などに、鳴物をならして調子をとり又はにぎはすこと。——ちやうおし[鳴物停止](名)「ちやうおし」に同じ。

なり-もの[生物](名) ㊀田畠の收獲。㊁食用となる果實。——のき[生物樹](名) 果實を結ぶ樹木。果樹。

++なり-や[鳴矢](名) かぶちや。

なり-ゆき[成行](名) なりゆく過程。又、なりゆく。

なり-ゆ-く[成行](自、か四) 次第に移り行く。漸次に進み行く。

{なりん-ぱう(名) 癲癇やみの人をあざけりて「いふ語。

なり-わた-る[鳴渡](自、ら四) ㊀鳴る聲あまねく聞こゆ。㊁名聲あまねく聞こゆ。

な-る[生](自、ら四) ㊀ゐひ田づ。生出す。㊁實を結ぶ。みのる。「實梢が—」。

な-る[成](自、ら四) ㊀できあがる。志あがる。(成)。㊁をはる。すむ。(終)。㊂さだまる。きまる。(成)。㊃と、のふ。そろふ。(調)。㊄あらはる。生ず。㊅個出あらせらる。㊆(奬)ふるとを得「奴等に經き廻されて—ものか」。㊇(意)を遂ぐるとを得「—とならぬとはさて置いて」。

な-る[爲](自、ら四) 「なり」に同じ。

な-る[成](自、ら四) 「なり」に同じ。

な-る[鳴](自、ら四) 「なり」に同じ。

な-る[成](自、ら四) 「なり」に同じ。

な-る[成](自、ら四) 「なり」に同じ。

な-る[成

あ い う え お　か き く け こ　さ し す せ そ　た ち つ て と　な に ぬ ね の

あり。

なれ[慣](名) なるゝこと。習慣。

++**なれ**[汝](代) なんぢ。

なれ-あひ[馴合](名) なれあふこと。——**-をとこ**[馴合間夫](名) 夫妻なれあひの上にて、妻をして他の男子と姦通せしめ、其男子を強迫して財貨を取ること。つゝもたせ。

なれ-あ-ふ[馴合](自、は四) ㊀互になれ親たしむ。相親しむ。㊁姦通す。密通す。㊂騙かに誘し置きて他を欺く。ぐるになる。「と」。

++**なれ-がほ**[馴顔](名) なれたるさまをなす。

++**なれ-きぬ**[褻衣](名) ふだんぎ。又、ふだん。(狎)

++**なれ-ごろも**[褻衣](名) 前條に同じ。〔衣〕。

なれ-つ-く[馴附](自、か四) なれてつき親たがふ。なつく。

なれ-ども[然](接) 去かれども。されども。

なれ-なれ-し[馴馴](形、二) さもなれ親たしみてあるさまなり。いと心易きさまなり。

なれ-の-はて(名) おちぶれはてたる極度。ちくは〔くの結果。

なれる(自)「なる」の訛。

++**なゐ**(名) 地震。——**-ふ-る**(自、ら四) 地震ふるひうごく。地震す。「—」。

++**な-をり**[波折](名) 波の高く立つこと。「潮頭の

な-をり[名折](名) 名譽をそこなふこと。名譽のきず。なをれ。

な-を-る[名折](自、ら四) 名譽をきずつく。名譽をそこなふ。

な-をれ[名折](名)「なをり」に同じ。

なん[難](名) ㊀わざはひ。災難。㊁そしり。非難。㊂くるしみ。患苦。㊃とひ。詰問。㊄かたきと。むづかしきこと。

なん[軟](名) ㊀やはらか。㊁おだやか。㊂よわ〔きこと。

なん[男](名)「だん」に同じ。

なん[何](代)「なにの音便」「—のため」。

なん—[何](接頭) いくら。いくばく。「—度」。

なん(助動)「なむ」に同じ。

なん-い[難易](名) むづかしきとやすきと。

なん-か[何](副) 何事か。何ものか。「—あらん」。

—なんか(接尾) など。等。「私—」。

なん-かい[難解](名) 解釋しがたきこと。わかりにくきこと。

なん-かい[南海](名) ㊀南方のうみ。㊁「なんかいだう」の略言。——**-だう**[南海道](名) 紀伊・淡路・阿波・讃岐・伊豫・土佐の六個國の總稱。

なん-か-の-ゆめ[南柯夢](名)「くわいむ」槐夢に同じ。

なん-かん[難緩](名) ㊀かたきと。むづかしきと。㊁くるしみ。なやみ。㊂〔あらくして手にあはぬこと。鳳驚。〔——**-もの**[難緩者](名) なんかんなる人。鳳起者。「き意義。

なん-き[難義](名) 解しがたき義理。わかりにく

なん-き[難儀](名) くるしみ。なやみ。

なん-きやう[難行](名) 極めてつらき修行。

なん-きやう-だう[難行道](名)【佛】自力難儀なる修行。「—苦行」。

なん-きやく[難局](名) 處理のむづかしき事により、修行の功を積みて證果を得んとする教法。

なん-きよく[難局](名) 處理のむづかしき事局。むづかしき場合。

なん-きよく[南極](名) ㊀〔地〕地軸の南端。㊁〔理〕磁針の南に向くる端。㊂〔天〕天球の軸の南端。

——-きより[南極距離](名)【天】天球上、南極より天體に至る角距離。——**-けん**[南極圏](名)〔地〕地球の南極より二十三度半の地を通過して地軸に直角なる小圓。——**-せい**[南極星](名) 支那の昔時の天文にて、天の南極にありて人の壽命をつかさどるといふ星。「老人星」。——**-らうおん**[南極老人](名) 壽老人の一名。

(なんきやく-る-る[軟鱗類](名)〔動〕硬骨類の一、鯛(は軟(やは)かくして胸鰭の前方に棘刺あるもの、たち・さより等これに屬す。

ナン-キン[南京](名)《支那江蘇省の揚子江南岸にある江寧の一名》㊀支那より渡來せるものにつけていふ語。㊁「ナンキンまめ」の略言。㊂〔植〕「たうなす」の一名。(大阪地方の方言)。——**-らさき**[南京兎](名)〔動〕栗の一種、稍々小形にして毛色種々あり、家に飼ふ。かひうさぎ。——**-かいだう**[南京海棠](名)〔植〕海棠の一種、花の濃赤色なるもの。——**-ざくろ**[南京石榴](名)〔植〕石榴の一種、樹幹長大ならずして花の深紅色なるもの。——**-ぶゆす**[南京繻子](名) 繻子の一種、支那より渡來するもの。——**-ぶん**[南京人](名) 支那人の稱。——**-だけ**[南京竹](名)〔植〕竹の一種、幹細くして低きもの。——**-たま**[南京珠](名) 硝子製の小さき珠、中に孔あるもの、其孔に絲を通しつゝけあはせて種々の装飾となす。——**-はぜ**[南京黄櫨](名)〔植〕大戟科に屬する木、葉は圓形にして互生し、秋に至りて紅葉す、夏の頃、黄白色の花開く、果實は圓形にして熟すれば黑褐色となる、中に數個の種子あり、種子を包める白粉より蠟を採取すべく、種子より燈油を製すべし、もと支那種を移植したるものなり。たうはぜ。「鳥臼木」。——**-ばと**[南京鳩](名)

は ひ ふ へ ほ　ま み む め も　や い ゆ え よ　ら り る れ ろ　わ ゐ う え を

〔動〕鳩の一種、羽毛美麗にして多く人家に飼養せらる。——**-まい**[南京米](名)「インド」及支那等より我國に輸入する一種の米、味我國のものより劣(は)る。——**-まめ**[南京豆](名)〔植〕豆科に屬する草本、葉は羽狀複葉にして通常四個の小葉より成る、花は黄色小形なり、莢は地中にありて成熟し、種子は食用に供せらる、もと南「アメリカ」産のものなり。「落花生」。——**-むし**[南京蟲](名)〔動〕昆蟲類に屬する小蟲、扁平にして楕圓形をなし赤褐色を帶び、床又は壁などに棲み、人の皮膚を刺す。「句。

(なん-く[難句](名) むづかしき句。わかりにくき

なん-くせ[難癖](名) 非難すべき點。きず。

(なん-くわ[南瓜](名)〔植〕「たうなす」に同じ。

(なん-くわ[軟化](名) ㊀やはらかくなること。やはくなること。㊁強硬なる意見を唱へざるやうになること。反對の主張をやむること。

(なん-ぐわ[南畫](名) 南宗畫に同じ。北畫の對。

(なん-くわん[難關](名) 通過し易からざる所。

(なん-けん[難險](名) ㊀いとむづかしきこと。㊁いとけはしきこと。

(なん-けん[難件](名) 處置のむづかしき事件。

なん-こ(名) 一種の遊戯、歌人もの〳〵寶(だ)かに物を握りて差出だし、互に其總數を言ひ中(ア)てゝ勝負するもの。「藏鉤、倩拳」。

(なん-ご[喃語](名) べちゃ〳〵かたること。「語。

(なん-ご[難語](名) むづかしき語。わかりにくき

(なん-ごうがい[軟口蓋](名) 口蓋のやはらかなる部分、硬口蓋とつゞく、其端に懸壅垂(けしやう)あり。

(なん-こつ[軟骨](名) ㊀有機質より成り柔軟にして彈力ある骨、人類の關節の兩硬骨の接合面には必ずこれありて、其劇しき衝突を防ぎ、又、鼻頭・外耳などの部を成す。やはらかきはね。㊁強硬に主義を守り得ざること。意思の弱きこと。——**-かん**[軟骨漢](名) 節操なきもの。意思弱きもの。——**-る**[軟骨類](名)〔動〕鳥類の一、骨骼はすべて軟骨より成り、口は頭部の腹面に開き、腮は普通五個あり、卵生又は胎生なり、さめ・えひ等これに屬す。

(なん-とん[男根](名) 陰莖。

(なん-さん[難産](名) 胎兒のやすく〳〵とうまれくること。いはゆる「逆—」。

(なん-さん[南山](名)《南山壽より轉ずることば。書經文に用ふ》。——**の-ことぶき**[南山壽](名)《詩經に出ず》いのちながきことをいはひていふ語。「をのこ。

(なん-ぢ[男子](名) ㊀せがれ。むすこ。㊁をとこ。

(なん-ぢ[難事](名) むづかしき事。かたき事。

(なん-ぢ[難字](名) むづかしき文字。

(なん-ぢふ[難澁](名) ㊀すら〳〵と通ぜざること。なやみ苦しむること。㊁なんぎ。くるしみ。困難。

(なん-ぢやう[難症](名) なほりにくき病氣。

(なん-ぢやく[軟弱](名) よわくして事に堪へざること。柔弱。

(なん-ぢゆう[南宗](名)【佛】禪宗にて、靈能の流派の稱、形式よりも精神を主とするもの。北宗の對。——**-ぐわ**[南宗畫](名) 我國及支那の在來の畫風にて、形式よりも精神を主とする流派の稱。北宗畫の對。

(なん-ぢよ[難所](名) 險惡なる所。けはしき所。

(なん-ぢよく[男色](名) 男子間の姦通。(鶴)。

(なん-ず[難](仙、さ變) ㊀せむ。なじる。㊁非難す。そしる。

なん-すれ-ぞ[何爲](副)《「なにすれぞ」の音便》

(なん-する[軟水](名)【化】石灰質又は石膏などを含有せずして飲料に適せる水。

(なん-せい[軟性](名) やはらかき性質。

(なん-せん[難戰](名) くるしきたゝかひ。

(なん-せん[難船](名) 船舶が海上にて風波に遭ひ、破損又は覆沒などすること。又、其船。

(なん-せん-ぶ-ぢう[南贍部州](名)【佛】「エンブダイ」(閻浮提)に同じ。

(なん-せん-ほくば[南船北馬](名)《南の方(船にて行き又北の方(馬を馳する義)方々(絶えず旅行するといふ語。

なん-ぞ[何](副)《「なにぞ」の音便》㊀何として。いかで。㊁如何なる物事か。何にか。「——**-さいふ-ぞ**(副) やゝもすれば。ともすれば。よく。

(なん-たい[男體](名) をとこの體。

(なん-だい[難題](名) ㊀詩歌文章の題の作るにむづかしきもの。㊁むづかしき問題。難問。㊂應じがたきいひがゝり。承諾しにくきいひかけ。

(なんたい-どうぶつ[軟體動物](名)〔動〕體内に骨骼を有せずして體質の柔軟なる動物。體軀は外套膜の中に包まれ、其外面に石灰質の介殼を具するを常とす。かひ・かたつむり・いか等これに屬す。

(なん-ち[難地](名) 困難なる場所。

(なん-ぢ[難治](名) をさまりがたきこと。又、なほりにくきこと。

なんぢ[汝、爾](代)《「なむぢ」の轉》同輩若しくは其以下に用ふる對稱の人代名詞。

(なん-ちゆう[南中](名)【天】天體の天頂より南方に於ける子午線經過の稱。

(なん-で[何](副) ㊀何事にて。㊁何故に。

なん-つ-く（なんづく）。つく。「つゆ—べくもあらず」。

(なん-てい)［南庭］（名）古昔、禁中の殿上の庭の称。

(なん-てう)［南朝］（名）㊀延元元年後醍醐天皇が京師より吉野に遷幸したまひてより、元中九年後亀山天皇が神器を北朝の後小松天皇に傳へたまひしまで、三代五十六年間の吉野の朝廷の称。㊁支那にて、後紀元九百七十七年東晉の興りてより、宋・齊・梁・陳と傳へ、同紀元千二百四十八年に陳の滅に亡さるゝまで、五朝二百七十一年間の称。

なん-でふ（なんぢう）（副）如何にして、どうして。なでふ。

(なん-てつ)［軟鐵］（名）純粋の鐵の約百分の一の炭素を含有するもの。

(なん-でも)［何］（副）㊀如何なる物事にても。どのやうな物事にても。㊁如何にあるとも。どうあちうとも。

(なん-てん)［南天］（名）【植】「なんてんぢく」に同じ。

(なん-でん)［南殿］（名）紫宸殿の一名。なでん。

(なん-てん-ぢよく)［南天燭］（名）【植】小喬木に屬する木、葉は二三回の羽狀複葉をなし、花は五瓣白色にして圓錐花序に排列す、果實は小形球狀にして叢生し、熟すれば赤色となる、觀賞用として栽培せられ、木材もまた種々の用に供せらる。

［くよぢんてんな］

(なん-てん-ちく)［南天竹］（名）【植】前條に同じ。

なん-ど［納戸］（名）㊀衣服・調度を納(サ)め置く部屋。（書房）。㊁轉じて、其家の財物の供給所。

—なんど［抔］（接尾）「など」の轉。

(なん-ど-なく)［何無］（副）これと擧げていふべかちざれど、どことなく。

なん-ど-なれ-ば［何者］（接）上を受けて、其理由を下に說きおこすときにいふ語。何故といへば。なぜといへば（何問）。

(なん-ど-ぶぎやう)［南都奉行］（名）南都（奈良）の東大寺・興福寺等の事を掌りし武家の職名。

(なん-ど-も)［何］（副）何事とも。如何にとも。

(なん-なく)［難無］（副）格別の事なく。たやすく。

(なん-なん)［喃喃］（名、副）べちやくちやくはなしふきさにいふ語。

なん-なん-ど-す（なんなんどする）。［垂］（自、サ變）「なりなんとす」の音便。

(なん-に-も)［何］（副）㊀何事にも。何物にも。㊁「何事も、何物も。」

(なん-に-よ)［男女］（名）をとこをんな。——

どうけん［男女同權］（名）「だんぢよどうけん」に同じ。

なん-の［何］（副）如何でか。なんでふ。——**か-の-ど**［何彼］（副）かれこれと、とやかくと。——

その［何其］（副）何程の事のあるべきや、意となすに足らず。

なん-ば［難場］（名）あやふき場所。（難所）。

(なん-ば)［軟派］（名）㊀軟弱なる意見の黨派。㊁新聞又は雜誌に手強き主張をなし得ざるもの。㊂新聞又は雜誌にて、文學又は記物を擅當せるもの。

(なん-ば)［難破］（名）難風にあひて、破船すること。

——-せん［難破船］（名）難破したる船。

(なん-ばら)［南方］（名）みなみのかた。

なん-ば-に［難波煮］（名）一種の料理、小鯛とゞみなどを合せ煮(ニ)たるもの。

(なん-ば-ん)［南蠻］（名）㊀南方のえびす。㊁昔時、「シヤム」・「ルソン」其他南洋諸島を指しての稱。又、其地を經(ヘ)て來航せし西洋人等に「ポルトガル人」・「スペイン」人等を指しての稱。㊂南蠻より船來したる物事。㊃【植】「なんばんがらし」の略言。㊄「なんばんに」の略言。「鴨—」・「蕃—」。——-**がらし**［南蠻辛］（名）【植】「たうがらし」の一名。——-**きび**［南蠻黍］（名）【植】「たうもろこし」の一名。——-**ずな**［南蠻砂］（名）珊瑚の異稱。——-**てつ**［南蠻鐵］（名）昔時、舶來の精錬したる鐵の稱。鉄砲などに用ひたり。——-**に**［南蠻煮］（名）一種の料理、一寸五分許に切りてたちわりたる蕈に味をつけ、魚又は鳥など、合せ煮たるもの。

(なん-びやう)［難病］（名）なほりにくき病氣。

(なん-ぶ)［南部］（名）㊀南方の所。㊁「なんぶつむぎ」の略言。

(なん-ぷう)［雌風］（名）船舶をなやます暴風。

(なん-ぷう)［軟風］（名）㊀靜かに吹く風、わづかに感ぜらるゝほどの風。㊁【地】海邊にて、晝夜溫度の差高きときに吹く風、晝間は陸上の土砂高熱を受けて空氣上騰するが故に海より陸に向つて吹き、夜間は土砂早く熱を放散するにより、陸より海に向つて吹く、前者を海軟風といひ後者を陸軟風といふ。

(なん-ぷう)［南風］（名）㊀南より吹く風。㊁夏季の風。（薰風）。㊂南方の歌謠。——**きそはず**［南風不競］（左傳に出づ）南方の勢の劣るにいふ。

なんぶ-ぎま［南部縞］（名）陸中國南部地方より產出する精好なる縞織の絹。「にくきもの」。

(なん-ぶつ)［雜物］（名）手にあまるもの。取扱ひ

なんぶ-つむぎ［南部紬］（名）「なんぶぎま」に同じ。

(なん-ぶん)［雜文］（名）むづかしき文章。「ヒ」。

なん-ぶん［何分］（副）「なにぶん」に同じ。

なん-べん［何遍］（名、副）いくたび、いくど。

(なん-ぼ)（名、副）なにほど。いくち。「此品—ぢや」。

(なん-ぼく)［南北］（名）みなみときた。——-**てう**［南北朝］（名）南朝と北朝と。又、其相對立せる時代。（南朝・北朝の條を見よ）。

ナンマミダ（名）【佛】「ナムアミダブツ」に同じ。

ナンマミダブ（名）【佛】「ナムアミダブツ」に同じ。

＋なん-めり（助動）「なるめり」の音便。

(なん-めん)［南面］（名）（支那にて、王者は南に面して坐する定なりしよりいふ）君主となり國内ををさむること。君主の位につくこと。

(なん-もん)［難問］（名）答へ難きとひ。なんだい。

(なん-やう)［南洋］（名）我國より「マレイ」群島及大洋洲一帶を指していふ稱。

なん-ら［何等］（代）なにらの音便。

(なん-りよ)［南呂］（名）「なんろ」に同じ。

(なん-れう)［南鐐］（名）㊀美(カツ)しき銀。質のよき銀。㊁銀の異稱。㊂昔時の貨幣、銀一兩の八分の一、即ち二朱銀の稱。「の異稱。

(なん-ろ)［南呂］（名）㊀十二律の一。㊁陰曆八月

(なん-ろ)［難路］（名）けはしきみち。

に

に 齒的鼻音N即ち舌端を硬口蓋の前部に觸れしめて發する鼻音と、母音「イ」との結音。

＋に［瑣］（名）たま。

＋に［土］（名）つち。「赤—」・「白—」。「堊」。

＋に［丹］（名）㊀赤色の土。㊁赤き顏色。あか。「—

(に)［荷］（名）㊀になひもち又はたづさへもつ物品。㊁むくりやち又はうけをさむべく包裝したる物品。

(に)［貳］（名）太宰府の次官。

(に)［二］（名）㊀三絃の中の絃。㊁つぎ。あと。次。㊂ならび。たぐひ。㊃もむくと。たがふと。

ニ［尼］（名）アマ。「つ。

(に)［二］（數）一に一を加へたる數。ふた。ふた

(に)（助動）㊀動作の歸着する地位を示す語。「山—登る」。

(に)（助動）㊀過去の助動詞「ぬ」の變化。「來—けり」。

(に)（助動）㊀打消の助動詞「ず」の變化。「見らくを知ら—」。

(に)（助）㊀動作の歸着する地位を示す語。「山—登る」。㊁附き添ふ意を示す語。「月—叢雲」。㊂「にて」の意の語。「途—暮く」。㊃「のために」の意の語。「犬—噛まる」。㊄重ねたる動詞の間にをきて、勢を強むる語。「ふり—ふる」。㊅比較の意を示す語。「人—優る」。㊆「然るに」の意を表する語。「月は待たぬ—出てぬれど」。

に-あがり［二上］（名）三味線のひき方、本調子に比して二の絃の調子を高くすること。

に-あげ［荷揚］（名）積荷を船より陸に揚(ア)でること。——-**は**［荷揚場］（名）荷揚する所。あげば。

にあげ-ざる［煮揚笊］（名）煮たるものを揚げあきて液をたらす笊。

に-あは-し（しくとしき）［似合］（形、二）ふさはし。似つかはし。

に-あ-ふ（にあふ）［似合］（自、は四）よくつりあふ。よくうつる。相應す。相當す。ふさふ。

に-あへ（にあふ）［煮瀝］（名）一種の料理、鮭皮・梅干・田作・椎茸・銀杏・麩・黑豆などの甘煮(ニマ)に玉子をかけたるもの。

(に-い)［兄］（名）（あにに）に同じ、（子供の語）。

(に-いう)［二酉］（名）（支那の大酉小酉の二山の石穴内に書千卷ありきといふ故事に出づ）書籍の集積してある所。

＋に-いし［丹石］（名）㊀黃土。㊁代赭石。

＋に-いち-てんさく-の-と［二一天作五］（名）（珠算にて、割算の割聲、一を二にて割るとき、桁(ケタ)の上の珠を一つあらすの義）勵定。算用。

(に-う)［乳］（名）「にゆう」に同じ。

(に-う-おやく)［柔弱］（名）氣力弱く物事に堪(タ)へざること。進取の氣象の缺(カ)けたること。よわうよわく。

に-うけ［荷受］（名）送り來りたる荷を受取ること。

——-にん［荷受人］（名）荷受する本人。

ニウトン-くわん［—環 Newton's ring］（名）【理】一面は平面にして他面は彎曲の甚だ小なる凸面より成れる「レンズ」の凸面の方を下にして、平面の「ガラス」上に載(ノ)するとき、光の干渉によりて見ゆる美麗なる縞の環。

に-うま［荷馬］（名）荷物を負ひはこぶ馬。にひ

に-うめ［煮梅］（名）砂糖煮にしたる梅の實。

に-うめん［煮麵］（名）一種の料理、中にいろ〳〵の具を入れてさうめんを煮たるもの。（入麵）。

に-うり［煮賣］（名）菜又は肴などを煮て賣ること。——-**や**［煮賣屋］（名）にうりする店。——-**さかや**［煮賣酒屋］（名）居酒屋・料理屋の煮賣屋。下等なる飲食店。

(に-う-わ)［柔和］（名）やさしくおだやかなること。ものやはらかなること。（溫和）。

にえ［鍼］（名）刀の燒きにあやの現はれたるもの。

にえ［煮］（名）にえたること。にえたる度合。

にえ・あが・る[ちりる、れれる]「煮騰」(自、ら四) 煮えて揚(ア)き立つ。にえたつ。
にえ・かへ・る[エル、ちりる、れれる]「煮返」(自、ら四) 前條に同じ。
にえ・とぼ・る[ちりる、れれる]「煮溢」(自、ら下二) にえあがりて外にこぼる。
にえこぼれる(自) 前條の誤。
にえ・たぎ・る[ちりる、れれる]「煮滾」(自、ら四) 「にえあがる」に同じ。
にえ・た・つ[たちて、て]「煮立」(自、た四) 「にえあがる」に同じ。
にえ・ぶ[ばびて、べ]「呻吟」(自、は四) によぶ。うなる。「大なる聲してにえびけり」。
にえ・ゆ[煮湯](名) 煮立ちたる湯。ねったう。
にえる[煮](自) 「にゆ」の訛。
に・れくり[荷送](名) 先方へ荷を送出すこと。——人。
にん[荷送人](名) 荷送する本人。
に・れもひ・うま[イオ]「荷負馬」(名) にうま。
に・れ・みづ[イオ]「煮御水」(名) つくりみづ。
にが—[苦](接頭) 或語に添(て)、にがき意を表する語。
(に・かい[二階](名) ㊀廚子の中に設けたる棚。㊁平家の上に一層かさねたる家づくり。——**づくり**[二階建](名) 二階を設けたる建築。又、其家。——**づくり**[二階造](名) 前條に同じ。——**はしご**[二階梯子](名) 二階に上るためにかけたる梯子。{——**まはし**[ワシ][二階廻](名) 遊女屋にて、遊客の事を取扱ふ使男。
に・がい・かほ[カ][苦顔](名) 苦よげち。
に・がい・いろ[苦色](名) かさねの色目、表は濃き香色にして、裏の二藍なるもの、若しくは表の黒色を帶びて裏の二藍なるもの。
(に・かう[ワコ][二更](名) 初更と三更との間、即ち今の午後十時・十一時。
(に・かう・ぶき[ワコ][二項式](名) 【數】二つの項より成る整式。
(に・かう・ていり[ワコ][二項定理](名) 【數】二項式の冪を展開する方法、開する定理。「に同じ。
にがうり[苦瓜](名) 【植】つるれいし。蔓荔枝)
にがき[苦木](名) 【植】苦木科に屬する木、葉は羽狀複葉にして小葉は鋸齒を具す、苦味に富み藥用に供せらる。
{に・がぐち[苦口](名) 氣に入らぬ言。にくまれぐち。〈いそく、ごくい。
にがし[苦](形、二) ㊀苦に不快の味を感ず。㊁つらし、くるし。
にがぶほ[オ][苦鹽](名) 食鹽の糊解し液體となり、苦味ある硫酸「マグネシウム」(醫藥、鹵汁)。
に・がす[さしす、せせ][逃](他、さ四) ㊀にげしむ。のがれしむ。㊁とりにがす。にげらる。
に・かた[煮方](名) ㊀ものを煮る方法。㊁煮るにあたる料理人。
に・が・たけ[苦竹](名) 【植】「まだけ(眞竹)」に同じ。
に・が・て[苦手](名) ㊀其人の弱點に乘ずる方法又は敵手。㊁互に氣性相合はずして忌み嫌ふもの。
に・が・つち[苦土](名) 耕鍬の違せざる下部の土。
に・が・な[苦菜](名) 【植】(いヽリンダウ)の一名。(ろ)菊科に屬する草、路傍に生ず、葉は二三寸許にして其基部は廣がりて莖を抱く、春に芽を出だして黃色の頭狀花を開く。(黃瓜菜)。

[(ろ)ながに]

に・がに・し[苦しき、しく][苦苦](形、二) いと嫌はしいといとはし。
に・がに・し[苦蝦](名) 【動】蝦の一種、殼は長大にして黃赤色なり、膠甚だ苦し。
にかは[ハ][膠](名) 《豆皮の義》牛の皮又は魚の鰾(ウキ)などを煮たる液を乾して固(カタ)めたるもの、物を粘着せしむるに用ふ。
に・かはせ[カセ][荷爲替](名) 荷送人が荷物を送り出すとき、其荷物が先方に到着して後其代金を受取る代はりに、荷物を擔保品として、其地の銀行などより代金相當の金額を受取り、該銀行などを受取人とし荷受人を支拂人として振出したる爲替手形、若し支拂人より支拂はざるときは、手形所持人は其荷物を處分するとを得。——**てがた**[荷爲替手形](名) 前條に同じ。
{に・がはだ[苦膚](名) 風などの生ぜぬ膚。
にかは・づけ[ハヅケ][膠附](名) 膠にて物をつぎあはすこと。又、膠にてつぎあはしたる物。
に・がふ[ゴ][二合](名) 昔時、二字の名稱の上の一字を普通の字體に書き下の一字を花押にて書きたるもの。——**の・はん**[二合判](名) 前條に同じ。
に・かへし[エシ][煮返](名) にかへすこと、又、にかへしたるもの。——**ず**[煮返酢](名) 少しく鹽を入れて煮立てたる酢、漬物などに便用す。
に・かへ・す[エス][さしす、せせ][煮返](他、さ四) 一旦煮たるものを更に再び煮る。
に・がほ[オ][似顔](名) 其人のかほをうつし似せたるもの。
に・がみ[苦味](名) ㊀にがき味、にがき度合。㊁容貌の凶としたるさま。——**き・る**[ちりる、れれる][苦味切](自、ら四) いとにがゝしきさまをなす。——**ばし・る**[ちりる、れれる][苦味走](自、ら四) 容貌に憂鬱たる所あり。

に・が・む[むむめ、め][苦](自、ま四) 心中に快からず思ふ。にがゝしく思ふ。
に・が・む[むめる、めむ][苦](他、ま下二) にがゝしきさまをあらはす。たかむ。
に・がむ・に・がむ[苦苦](副) にがゝしく思ひなす。
{に・が・むし[苦蟲](名) つねににがゝしきことをいふ人。——**をかみつぶしたやうな**[ヽとにがゝしき容貌をなすにいふ語。
に・かよ・ふ[ヨカ][似通](自、は四) 彼と此と互によく似てあり。
にがり[苦鹽](名) 「にがぶほ」に同じ。
{に・がり・き・る[ちりる、れれる][苦切](自、ら四) きはめてにがゝしきさまをなす。
に・が・る[ちりる、れれる][苦](自、ら四) にがむ。「と。
に・が・わらひ[ワイ][苦笑](名) にがりながら笑ふ。
に・が・わら・ふ[ワウ][苦笑](自、は四) にがわらひをなす。
++に・き[日記](名) 「にっき」に同じ。
(に・き[二氣](名) 陰と陽との氣。兩儀、二儀)。
(に・き[二季](名) 春と秋と、又は夏と冬と、若しくは盆と暮と。
に・き(助動) 過去の助動詞「ぬ」の變化なる「に」に過去の助動詞「き」の縮はりたる語。「行き—」。
(に・ぎ[二儀](名) 天と地と、又、陰と陽と。
++に・ぎ—[和](接頭) 或語に冠して、精しき又は柔かき若しくはと、のひたる等の意を表する語。「十布」「—魂」。
++に・ぎ・ぶれ[和稻](名) 米にしたる稻。
++に・ぎ・たへ[エタ][和栲](名) 穀(カウ)の木の皮にて織れる布。あらたへの對。
にきて[幣](名) 和紙にてつくりたる幣。みてぐら。〈いそく、ごくい。
++に・ぎ・ぎり[二季島](名) 【動】雁の異稱。
{に・ぎ・にぎ[握握](名) ㊀にぎりめしをこしらふること。又、にぎりめし。(小兒の語)。㊁に同じ。
に・ぎ・に・ぎ・し[しくしく、しき][賑賑](形、二) にぎはし。
に・ぎ・に・ぎ・さ[賑賑](副) にぎはしく。
に・ぎは・し[ワシ][賑](名) にぎはすこと。
に・ぎは・し[ワシ][しくしく、しき][賑](形、二) 盛んなり。繁昌す。
に・ぎは・す[ワス][さしす、せせ][賑](他、さ四) ㊀ゆたかにす。盛んにす。にぎやかにす。㊁はどこす。めぐむ。たすく。(敬助)。
++に・ぎは・は・し[ワシ][しくしく、しき][賑](形、二) にぎやかなり。にぎはしくあり。
にぎは・ひ[ワヒ][賑](名) にぎはふこと。にぎはふさま。
にぎは・ふ[ハフ][はひふへほ][賑](自、は四) ㊀富みてあり。足りてあり。豐かにてあり。㊁さかゆ。さかる。はんぜやうす。
にぎび[面皰](名) 面部に生ずる小さき瘡、白色にして化膿せざるもの。(面瘡、粉刺)。
++に・ぎ・ぶ[ばびて、べ][和](自、は上二) にぎはふ。やはらぐ。「にぎびにし家もゆいて、」。
(にぎふ・せんきょ[ケイ][二級選擧](名) 職員の選擧者を納稅額によりて、二二の階級に分け、其各級によりて選擧せしむる制度。
++にぎほ・ふ[ホフ][はひふへほ][賑](他、は下二) にぎはす。
++にぎみ[面皰](名) 「にきび」に同じ。
++に・ぎ・みたま[和魂](名) にぎびさきはふみたま。あらみたまの對。
++にぎみ・ばな[皰鼻](名) ざくろばな。
++に・ぎ・む[むめる、めむ][和](自、ま四) 「にぎぶ」に同じ。
++に・ぎ・め[和布](名) 【植】「わかめ」に同じ。
にぎ・やか[賑](名) 盛んなること、繁昌すること。にぎはしきこと。
にぎり[握](名) ㊀にぎること。㊁にぎる長さ。にぎる量。「二—半」。㊂にぎりかは。ゆづか。㊃すべて物のにぎりもつ所の稱。㊄「にぎりずし」又、「にぎりめし」の略言。——**かた・む**[むめる、めむ][握固](他、か下二) にぎりてたかかたむ。{——**かためる**(他) 「にぎりかたむ」の訛。——**かは**[ハ][握革](名) ゆづかにまきたる皮。——**かみ**[握上](名) 弓のにぎりより上の方。{——**ぎんだま**[握寧丸](名) 手を油にして何事をもなさゞること。——**とぶし**[握拳](名) ㊀こぶしを握ること。こぶし。(搦手、拳)。㊁「てぶち、かちで。——**ぶた**[握下](名) 弓のにぎりより下の方。——**ぶ・む**[むめる、めむ][握緊](他、ま下二) ㊀力を入れて握る。かたくにぎる。㊁持ちて離さず。とりこみて出さず。{——**ぶめる**(他) 「にぎりぶむ」の訛。——**ずし**[握鮨](名) すしの一種、にぎり固めて、こしらふるもの。——**つぶし**[握潰](名) にぎりつぶすこと。——**つぶ・す**[さしす、せせ][握潰](他、さ四) ㊀握りぶめてつぶす。㊁手許にとゞめおきて他に傳へず、遂に其まゝになしおく。{——**べ**[握屁](名) 屁を手に受けて漏れぬやうににぎりたるもの。——**めし**[握飯](名) 握りかためたる飯。おすび。
にぎ・る[ちりる、れれる][握](他、ら四) ㊀手の指を內へかゞむ。㊁手の指を內へかゞめて物を持つ。㊂占有す。領有す。「政權を—」。㊃にぎりずしをこしらふ。

又、にぎりめしをこしらふ。

(**にく**[肉](名) ㊀筋と共に動物體の筋肉を形成し、皮膚に蔽はれて骨骼を包みたる柔軟質のもの。み。ししむら。㊁鳥獸特に獸類のししむら。「一を好む」。㊂果實又は菜蔬の柔軟質の部分。㊃からだ。肉體。身體。㊄ちつゞき。血族。血筋。㊅あつみ。あつさ。「紙の一」。㊆にくづき。にくあひ。㊇印肉。

(**にく**[褥](名) ㊀ししむら。ししもの。㊁[動]「かもしか」の異稱。

にくげなる。[遁逃](自、か下二) ㊀のがれ去る。まぬかれ去る。㊁去りてあとをくらます。逃亡す。

にくあひ[肉合](名) にくつき。

にくいれ[肉入](名) 印肉を入る、器。肉池。

にくいろ[肉色](名) 黄色を帶びたる淡紅色。「一のシャツ」。

(**にくぐう**[二宮](名) ㊀皇族櫛二方の稱。㊁特に東宮と中宮との稱。

(**にくえん**[肉緣](名) 血のつゞきたる間柄。ちつゞき。「隣界の對。

(**にくかい**[肉界](名) 身體及身體の作用の範圍。

(**にくかう**[肉交](名) 男女の交合。

(**にくかう**[肉羹](名) 鳥獸の肉を入れたるあつもの。

にくがる。[憎](他、ら四) 憎く思ふ。にくむ。

(**にくかん**[肉感](名) 身體の感覺。

(**にくがん**[肉眼](名) ㊀眼鏡に對して、人類の具有するつねの眼の稱。㊁心眼に對して、眼球により見わくるとの稱。

にくきり[肉切](名) ㊀肉をきると。又、肉をきる人。㊁「にくきりばうちやう」の略言。——**ばうちやう**[肉切庖丁](名) 牛肉などを料理する庖丁。

(**にくくわい**[肉塊](名) ㊀にくのきれ。にくのかたまり。ししむら。㊁人類の身體の賤稱。

(**にくくわん**[肉冠](名) とさか。

(**にくけい**[肉刑](名) 身體の一局部を毀傷する刑罰。切ちいれずみ、きり等の類。

(**にくけい**[肉桂](名) [植]樟科に屬する喬木、葉は革質にして三大脈を有し常綠なり、綠黃色の花開く、根皮は稍々辛味を帶びたる甘味と一種の香氣とを有し藥用に供せらる、熱帶地方に產するものは、其樹皮を枝枝と稱し、また藥用に供せらる。

(**にくさ**[肉叉](名) 「ホーク」に同じ。

(**にくさう**[憎相](名) にくさげなるさまをなすと。——**もの**[憎相者](名) にくさげなるもの。

(**にくさげ**[憎氣](名) にくらしきさま。

(**にくさし**[肉叉](名) 「ホーク」に同じ。

(**にくさび**(名) 船の舷を蔦(ツタ)にて負(ヒ)み、波のあたりを和らぐると。

(**にくざね**[肉肆](名) 鳥獸の肉をうるみせ。

(**にくし**[憎、惡](形、一) ㊀にくむべし。いまはし。きらはし。㊁篤し難し。むづかし。「讀み一」。

(**にくずき**[肉食](名) 動物體を食用となすと。にくたよく。「一妻帶」。「ヒ」。

(**にくしる**[肉汁](名) 「にくかう」(肉羹)に同じ。

(**にくしみ**[憎](名) にくむと。にくみ。

(**にくずまやう**[肉漿](名) 赤赤び赤は。

(**にくずまやう**[肉障](名) 多くの美人などを周圍にならべたゝすると。「情。

(**にくずまやう**[肉情](名) 男女間の慾情。色

(**にくずまやう**[肉瘴](名) 肉色の「シャツ」。

(**にくずまよく**[肉色](名) ㊀肉のいろ。㊁皮膚のいろつや。

(**にくずまよく**[肉食](名) ㊀動物體を食物となすと。殊に鳥獸の肉を食物となすと。㊁美味のものを食すると。美食。——**ぶう**[肉食獸](名) 肉食類に屬する動物。——**のゞ**[肉食徒](名) 常に肉食するともがら。轉じて、富貴なるともがら。——**るる**[肉食類](名) [動]動物性のものを食とする哺乳動物、爪牙銳利にして且つ感覺銳く行動敏捷なり、性兇暴にして通常猛獸と稱せらるゝものこれに屬す。

(**にくずん**[肉身](名) 肉體、色身。

(**にくずん**[肉親](名) 血族の關係ある人。

(**にくたい**[肉體](名) 靈魂又は精神に對して、物質的身體の稱。からだ。——**てき**[肉體的](形) 肉體に關するにいふ語。

(**にくたい**(名) にくらしきと。「すと。

(**にくたん**[肉袒](名) はだぬぎて身體をあらはす。

(**にくち**[肉池](名) 印肉を入れ置く器。にくいれ。

(**にくちゆう**[肉柱](名) 只のはしら。「れ。

(**にくちん**[肉陣](名) 「にくずまやう」(肉障)に同じ。

にくつき[肉附](名) からだの肉の肥え又は痩せたるほど。肉のつきぐあひ。

にくづき[肉月](名) 漢字の偏の名、即ち肉・肌等の字の左方にある月の字、即ち肉と同字にして月の字に似たればいふ、字書にて肉部に屬す。

(**にくづく**[肉豆蔻](名) [植]肉豆蔻科に屬する木、熱帶地方に產す、葉は桃の如く花は薔薇に似て雌雄異株なり、果實は大さアンズの如く黃色にして香氣つよく蜜などに漬けて食品とす、仁は藥用に供せらる。

にくづ・**く**[肉附](名) 身體肥えふとる。

にくてい[憎體](名) にくらしきさま。

(**にくてき**[肉笛](名) くちぶえ。

(**にくてぐち**(名) にくまれぐち。

(**にくてん**[肉店](名) にくや。にくや。

にくにくし[憎憎](形、二) きはめて憎むべし。さもにくらし。いとにくし。

にくにくさ[憎憎](副) さもにくらしきさまに。いとにくげに。

(**にくはく**[肉薄](名) 城塞にせやにむに突擊すること。「る。

(**にくひつ**[肉筆](名) 其人の眞實かきたる筆蹟。

(**にくびやうぶ**[肉屏風](名) 「にくずまやう」(肉障)に同じ。

(**にくブトン**[肉蒲團](名) 同衾する女を賤しみていふ語。

(**にくべい**[肉餅](名) 《肉類にて製したるもちの義》かまぼこ又は鋼せんべいなどの如きもの。

(**にくへん**[肉片](名) 肉のきれはし。

(**にくまれぐち**[被憎口](名) 人のにくしみを受くることば。人に快からず思はすることば。

(**にくまれ**・**ど**[被憎子](名) 人ににくまるゝこと。

(**にくみ**[肉味](名) 肉のあぢ。

(**にくみ**[憎](名) にくむと。又、にくむ念。

(**にくむ**[憎、惡](他、ま四) ㊀いむ。きらふ。㊁ねたむ。そねむ。㊂己に害あるものと思ふ。仇とむもふ。

にくや[肉屋](名) 鳥獸の肉を販賣する家。

(**にくよく**[肉慾](名) ㊀肉體上より來る慾。㊁色慾。情慾。

にくら[荷鞍](名) 荷馬に置く鞍。

にくらか[憎](名) 憎むべきさまなること。

にくらし[憎](形、二) にくむべし。にくし。

(**にくりう**[肉瘤](名) 身體に生ずること。

(**にくりん**[肉林](名) 大宴會などの酒の肴の淨山あると。

にぐるま[荷車](名) 荷物を運送する車。

(**にぐるみ**[煮黑](名) 「にくるめ」に同じ。

(**にぐろ**[土黑](名) ㊀土のくろきと。㊁土の如くくろきと。

(**にぐろし**[土黑](形、一) ㊀土の色くろし。㊁土の色の如くくろし。

にぐろめ[煮黑](名) ちろめ三十匁と銅百匁との合金、其色黑し。にぐるみ。《島銅》。

(**にぐわつ**[二月](名) 年の第二の月。

にげ[逃](名) にぐると。

にげあし[逃足](名) 逃げ走るあしどり。にげあし。

にげうす[逃亡](自、さ下二) にげて行くへ知れずなる。

にげかくす[逃隱](自、ら下二) のがれてひそむ。さけてかくる。

にげかくれ[逃隱](名) にげかくるゝこと。

る(自) 「にげかくる」の訛。

にげかた・**むきやう**[逃口上](名) 返答又は實任若しくは關係をのがれさけんためにいふことば。

にげ・**とさぼ**[逃辭](名) 前條に同じ。

にげ・**と**・**むきやう**[逃込](自、ま四) にげて其中にはいる。のがれて其中にかくる。「意。

にげ・**ぞたく**[逃支度](名) にげ去らんとする用りてにげうす。

にげ・**ぞ**・**る**[逃散](自、ら四) ちり〳〵になる。

にげ・**な**・**し**[似氣無](形、一) 似つかはしからず。ふさはしからず。つりあはず。

にげ・**のうま**[二毛馬](名) あしげの馬、即ち白と黑との毛のまじりたる馬。

にげのびる(自) 「にげのぶ」の訛。

にげ・**のぶ**[逃延](自、は上二) にげ去りて遂にまぬかる。

にげ・**まはる**[逃廻](自、ら四) にげてあちらこちらへ行く。

にげ・**みち**[逃路](名) ㊀逃げ得べき路。《血路》。㊁のがれ得べき手段。「つかふ」。

にげ・**め**[逃目](名) にげんとするめつき。「一を

にげ・**みづ**[逃水](名) 古昔、春より夏にかけて、武藏野にあひ茂れる若草の葉末の遠くよりは水の流るゝが如く見え近づけば見えずなりぬる狀をいひし語。

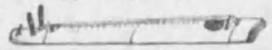
にげ・**ゆ**・**く**[逃行](自、か四) にげてゆくへ。にげ走る。

にげる(自) 「にぐ」の訛。

(**にげん**[二言](名) 「にごん」に同じ。

(**にげん**・**きん**[二絃琴](名) 絃の二條ある琴、やくもの」とも稱す。

(**にげん**・**ろん**[二元論=Dualism](名) 《哲》宇宙の現象は二個の本體に歸すといふ論、又、二個の原理を立てゝ一切を說明する說。



[にげんきん]

にこ—[和](接頭) 「にぎ」に同じ。

(**ニ**・**とう**[尼公](名) 尼となれる貴婦人の敬稱。

にこ・**ぐさ**[和草](名) わかくさ。

にこ・**げ**[和毛](名) ㊀鳥獸のやはらかなる毛。むくげ。「毳」。㊁やはらかき毛髮。

にこ-とごり[煮凝](名)㊐魚などを煮たる汁の寒氣にてこほりたるもの。㊑一種の料理。魚多くは鮫を煮たる汁の中に、いろ〳〵の具を入れてこはらせたるもの。

にこ-どしらへ[荷拵](名)荷づくり。

にこ-すみ[濁](他、さ四)にごるやうにす。にごらす。

++にこ-ずみ[和炭](名)消炭の類。

ニコチン[Nicotine](名)煙草の葉に含有せらるゝアルカロイド、無色油狀の毒物にして、空氣中にては直に褐色に變ず。

[++にこ-つ-く(自、か四)にこ〳〵してあり。

[++にこ-にこ[莞爾](名)㊐少しく笑ふさまにいふ語。㊑さもうれしさうなる顏つきにいふ語。——**おほ**[莞爾顏](名)㊐にこ〳〵してある顏。㊑さもうれしさうなる顏つき。

にこ-とみ[煮込](名)にこむこと。又、其もの。

にこ-む[煮込](他、む四)㊐種々の物をまぜて煮る。㊑よく煮る。

++にこ-むにこむ[和](自、ま四)「なごむ」に同じ。

++にこ-もの[和物](名)やはらかきもの。

にこ-やか(名)㊐顏つきのものやはらかにして、愛相よきさまなること。(和)。㊑笑みを含みにこ〳〵してあること。「莞爾」。

++にこ-よか(名)「にこやか」に同じ。

++にこ-よ-す[煮凍](他、さ四)にこゞらしむ。

[にこ-らか-す[濁](他、さ四)次條に同じ。

にこら-す[濁](他、さ四)㊐にごるやうになす。にごらしむ。㊑まぎらす。ごまかす。

にこり[莞爾](名、副)「にっこり」に同じ。

にごり[濁](名)㊐にごること。すみてあらざること。㊑けがれ。よごれ。㊒煩惱、情慾。㊓さる、淡季。「一の世」。㊔なまり。だみごゑ。㊕濁音のはっきりせざること。㊖濁音の符號、゛。㊗濁音の右肩に記するもの即ち「が」をいふ。㊘「にごりざけ」の略言。——**え**[濁江](名)水のにごれる江。——**こゑ**[濁聲](名)きわやかなちぬ聲。だみごゑ。——**ざけ**[濁酒](名)醪を濾(こ)さずして飲用する酒、即ち、どぶろく。——**み**[濁井]づ[濁水](名)濁りたる水。——**ゐ**(名)水のにごりたる井。

にごり-ぐち[飲口](名)船に荷を積み込む口。

ニコル[Nichols](名)【理】方解石を其鋭角の部に沒(ひ)ひて切り、其二つを透明なるセメント」にて附著せしめたるもの、偏光を得るにも又は偏光を檢するにも用ふ。前者を偏光(二)コルといひ、後者を分析ニコルといふ。

にご-る[濁](自、ら四)澄まず。濁れて清からず。㊐混亂す。みだる。㊑汚穢す。けがる。㊒音聲さわやかならず。だむ。㊓濁音にてあり。㊔返濁はっきりせず。言語去ぶる。

に-どろ[煮頃](名)㊐煮て食するに適當なること。㊑【動】「にどろぶな」の略言。——**ぶな**[煮頃鮒](名)琵琶湖產の鮒。源五郎鮒に次ぎて大なるもの。

に-ところ-す[煮殺](他、さ四)極罪の四人などを釜に入れ、煮てころす。

[に-ところばし[煮薄](名)芋の子又は慈姑などの根葱を煮たるもの。

(に-どん[二言](名)㊐ふたことば。いつはり。「武士に—はない」。㊑いひなほし。いひかへし。

(に-さい[二歲](名)㊐生まれて二年を經過せるもの。㊑少年をのゝしりていふ語。「青—」。

[に-ざい(名)重複すること。かさなること。

(に-ざうり[二藏](名)【佛】大乘と小乘との經。

に-ざかな[煮肴](名)「煮物」又は味醂などにて煮たる魚。

に-さまし[煮冷](名)㊐にますこと。又、にましたるもの。㊑煮冷したる湯の特稱。「す」。

に-さま-す[煮冷](他、さ四)にたる後さましむ。

(に-さん-けいそ[二酸化硅素](名)【化】硅素の化合物、石英・水晶等すべてこれなり。

(に-さん-たんそ[二酸化炭素](名)【化】無水炭酸に同じ。

(に-さん-くわ-ちっそ[二酸化窒素](名)【化】赤褐色の氣體、硝酸鹽を熱すれば生ず、冷却すれば液體となり、更に強く冷却すれば無色の結晶體となる。

に-さん-くわ-マンガン[二酸化滿俺=Manganese dioxide](名)【化】天然に多量に存する灰黑色若しくは黑色の固體、酸化劑として種々の用に供せらる。

(に-さん-くわ-ゆわう[二酸化雄黃](名)【化】無色の氣體、雄黃を空氣中にて燃燒するとき臭を發するはこれが發生するによる。漂白用又は防腐用に供せらる。「ゆ」。

に-さん-せう[煮山椒](名)山椒の實の煮たもの。

にし[西](名)㊐日の入る方角。東に反對せる方向。㊑西より吹き來る風。西の風。㊒西方淨土。「秋」。

にし[螺](名)【動】「あかにし」・「ながにし」等の總稱。

にし(助動)過去の助動詞「ぬ」の變化なる「に」に過去の助動詞「き」の變化なる「し」の縮はりたる語。「去

り—人」。

にじ[虹](名)細雨の際(ま)れんとするとき、太陽と反對の空に見ゆる鏡(ゆ)しき弓形のもの、日光の水粒内に入りて屈折反射の際分散するがために生ずる「スペクトル」の排列なり、内部紫にして外圍の赤なるを普通とす、これを第一の虹といふ、又、内部赤く外圍紫にして色稍々薄く第一虹を圍むものあり、これを第二の虹といふ。「霓」。

(に-ぢ[二字](名)實名。名乘。

(に-ぢ[二時](名)一時の次にして、三時の前なる時刻。

にし-あかり[西明](名)日沒後西天のあかるき

にし-らけ[西受](名)にしむき。

にし-おもて[西面](名)西の方面。

にし-かぜ[西風](名)西の方角より吹きくる風。

にしき[錦](名)㊐數種の色に染めたる絲にて、種々の紋樣を織り出だしたる地質厚き絹織物。(羅)。㊑紋樣の麗(ゆ)しきもの。あやの美なるもの。「都は春の—なりけり」。——**がは**[錦革](名)紫地に白く文(ぜ)を染め出だしたる革。——**がひ**[錦貝](名)介殼にうつくしきあゝるる貝。——**ぎ**[錦木](名)㊐【植】衝孝科に屬する木、葉は楕圓狀尖頭にして緣邊に細かき鋸齒を有し對生す、初冬の頃紅又は紫に染わが故に此名あり、花は綠黃色にして、果實は熟すれば微紅色を呈し裂開す、觀賞用として栽培せられ、又、木材は種々の用に供せらる。まゆみ。「衝孝」。㊑++一尺ばかりの木を彩色したるもの、古昔、奥州地方にて、男の女に逢はんとするとき、これをその戶口にたてゝ女逢はんと思へばとり入れたりといふ。——**ぐさ**[錦草](名)【植】い大戰科に屬する草、莖は平臥す、葉は小形にして緣邊に細かき鋸齒を有す、花は五瓣黃色にして小形なり、夏の頃開く、種子は年稻なり、(ろ)

++**もみぢ**の異稱。——**たひ**[錦鯛](名)【動】硬鱗類中たひ科に屬する魚、形鯛に似て大きく錦の如き鱗あるもの。——**づた**[錦蔦](名)【植】きづたの葉の邊の紅白になりたるもの。——**で**[錦手](名)五彩の模樣を描(え)きたる染附の磁器。——**どり**[錦鳥](名)【動】「あかきじ」に同じ。——**の-みはた**[錦御旗](名)「きんき」(錦旗)に同じ。——**へび**[錦蛇](名)【動】「にしき〳〵み」に同じ。——**へみ**[錦蛇](名)【動】(い)雖帶地方に棲む一種の蛇、長さ二三丈、全身に錦の斑文あり、人畜を害す、北陸は藥用とすべし。「蟒蛇」。南蛇。「ろ」すべてうつくしき模樣ある蛇の稱。

——-めがね[錦眼鏡](名)小兒の玩具、筒の一端に種々の色に染めたる玻璃片を裝置したるもの、これを廻轉して他端の小孔より望めば、うつくしき模樣見ゆ。——**ゑ**[錦繪](名)美麗なる彩色繪、古來東京の名產なり。えどゑ。——**をか**

ざる美しき衣服を著る。又、功名を成して故郷にかへる。——**をきてよるゆく**[衣錦夜行]立身出世したれども故郷にかへりずして、其さまを故舊に知らしめ得ざるにいふ。「と」。

に-ぶき[二貫](名)一日の食事を二度に制限する。

にし-きた[西北](名)西と北との間。いぬゐ。

にし-ぢん-ねり[西陣織](名)京都市西陣より織り出だす織物の總稱、又、其精巧なる錦・緞・絹布等の特稱。

にし-どち[復蛸](名)【動】蛾類の幼蟲の蛹となれる。

++にし-の-あるじ[西主](名)西方淨土の主、即ち、阿彌陀佛の稱。

にし-の-うち[西內](名)「にしのうちがみ」の略言。——**がみ**[西內紙](名)紙一尺五分横一尺五寸にして、美濃紙より稍々厚く且つ強靭なる紙、楮の皮に小豆の米粉を加へて製するもの、もと常陸國西內より產出せしが故に此名あり。

++にし-の-ひかり[西光](名)西方淨土の光明。

ニシパ(代)《アイヌ語 Nishpa》對稱の代名詞。

(に-おはうてい-おふ[二次方程式](名)【數】未知數の最高羃が二次なる項を有する方程式。

にし-び[西日](名)西天にかたむきたる日、夕日。

(に-おふ[二十](數)十の倍、はたち。

(に-おふいちだい-おふ[二十一代集](名)八代集と十三代集とを合はせての稱。

(に-おふいっ-おふ[二十一史](名)支那の上古より元に至るまでの二十一部の歷史、即ち史記・前漢書・後漢書・三國志・晉書・宋書・南齊書・梁書・陳書・魏書・北齊書・周書・隋書・南史・北史・唐書・五代史・宋史・遼史・金史・元史の稱。

++にし-の-ひかり[西光](名)西方淨土の光明。

ニシパ(代)《アイヌ語 Nishpa》對稱の代名詞。

(に-おはうてい-おふ[二次方程式](名)【數】未知數の最高羃が二次なる項を有する方程式。

にし-び[西日](名)西天にかたむきたる日、夕日。

(に-おふ[二十](數)十の倍、はたち。

(に-おふいちだい-おふ[二十一代集](名)八代集と十三代集とを合はせての稱。

(に-おふいっ-おふ[二十一史](名)支那の上古より元に至るまでの二十一部の歷史、即ち史記・前漢書・後漢書・三國志・晉書・宋書・南齊書・梁書・陳書・魏書・北齊書・周書・隋書・南史・北史・唐書・五代史・宋史・遼史・金史・元史の稱。

++にし-ぼ-とけ[二十五菩薩](名)【佛】二十五の菩薩、即ち觀音・勢至・藥王・藥上・普賢・法自在・獅子吼・陀羅尼・虛空藏・德藏・寶藏・山海慧・金藏・金剛藏・光明王・華嚴王・珠寶王・日照王・月光王・三昧王・定自在王・大自在王・白象王・大威德王・無邊身の稱。

(に-おふ-おふ-かう[二十四孝](名)支那にて、孝行を以て著名なりし二十四人、即ち舜・漢文帝・曾參・閔損・仲由・董永・剡子・江革・陸績・唐夫人・吳猛・王祥・郭巨・楊香・朱壽昌・庾黔婁・老萊子・丝順・黃香・姜詩・王寢・丁蘭・孟宗・黃山谷の稱。

(に-おふ-おふ-ぜ[二十四氣](名)曆にて、五日を一候とし、三候を一氣としたるもの、一年間の總數の稱、即ち春は立春二月三日・雨水二月十八日・

暦書(三月五日・春分(三月二十日・清明(四月五日)・穀雨(四月二十日)、夏は立夏(五月五日・小満(五月二十一日・芒種(六月五日・夏至(六月二十一日・小暑(七月七日・大暑(七月二十三日)、秋は立秋(八月七日・處暑(八月二十三日)・白露(九月七日・秋分(九月二十三日・寒露(十月八日・霜降(十月二十三日)、冬は立冬(十一月七日・小雪(十一月二十二日・大雪(十二月七日・冬至(十二月二十二日・小寒(一月五日)・大寒(一月二十日)なり。「月日は陽暦」。　「七。

(におふ-せつ)[二十四節](名) 前條に同

(におふ-ばん-くわ-ん-ふう)[二十四番花信風](名) 二十四氣の小寒より穀雨までの間各氣各候に於ける花の咲く順序、即ち左圖の如し。

(におふ-ど-う)[二四不同](名) 漢詩にて、七言の近體の句法、二字目と四字目との平仄必ず相異なるべきもの。

(におふに-ま)[二十二史](名) 二十一史に明史を加へての稱。

(におふに-まや)[二十二社](名) 京都の宮城の守護神と定められ、圓融天皇以後、時々幣帛を奉ちれし二十二個所の神社、即ち、伊勢・石清水・加茂・松尾・平野・稲荷・春日・大原野・石上・大神・大和・廣瀬・龍田・住吉・日吉・梅宮・吉田・廣田・祇園・北野・丹生・貴船の稱。

(におふはっ-まや)[二十八將](名) ㊀徳川家康の功臣にして日光東照廟に配祀せられたる二十八人、即ち松平康忠・酒井忠次・井伊直政・榊原康政・大須賀康高・大久保忠世・内藤信成・酒井正親・大久保忠教・伊奈忠俊・内藤家長・伊奈忠政・大久保忠佐・米津清忠・平岩親吉・奥平信昌・本多忠勝・鳥居元忠・菅沼定盈・渡邊守綱・岡部長盛・高木性順・蜂屋貞次・服部正成・安藤直次・本多康高・松平伊忠・水野勝成の稱。　㊁後醍の光武帝の功臣にして、其儀を雲臺に描かれたる二十八人、即ち鄧禹・馬成・吳漢・王梁・賈復・陳俊・耿弇・杜茂・寇恂・傅俊・岑彭・堅鐘・馮異・王霸・朱祐・任光・祭遵・李忠・景丹・萬脩・蓋延・邳彤・銚期・劉植・耿純・岑尭・馬武・劉隆の稱。

(におふはっ-ぐゆく)[二十八宿](名) 支那古昔の星學にて、星宿を二十八に區分したるもの、東方は、角(スボ)・亢(アシ)・氐(モト)・房(ヒ)・心(オキ)・尾(ヤマ)・箕(ミ)、北方は斗(ヒツ)・牛(イナ)・女(ウミ)・虛(ナミ)・危(ウミ)・室(ハツ)・壁(ナヤマ)、西方は、奎(トカ)・婁(タテ)・胃(ヒツ)・昴(スバ)・畢(アメ)・觜(トロ)・參(カリ)、南方は、井(リチ)・鬼(タマ)・柳(スリ)・星(ホトリ)・張(ヤリ)・翼(タス)・軫(ミツ)をいふ。

(におふ-れう)[二十寮](名) 古昔の官制にて、省に附屬せる二十の寮、即ち大舍人・圖書・内藏・縫殿・内匠・大學・雅樂・玄蕃・諸陵・主計・主税・木工・左右馬・兵庫・陰陽・主殿・典藥・大炊・掃部・齋宮の稱。

(におふろく-や)[二十六夜](名) 「におふろくやまち」の略言。——**まち**[二十六夜待](名) 陰暦正月及七月の二十六日の夜半に、月の出を待ちて拜すること、其月の出は三更の彌陀の像を現ずといひ傳ふ。　「る。

にし-みなみ[西南](名) 西と南との間。ひつじさ

に-む-むめ[煮染](他、ま下二) 煮汁の浸(シ)み入るまで煮る。

に-む-む[煮染](他、ま四) 色染みて亂れ散る。

に-め[煮染](名) 肉又は菜などを醤油にて煮染めたるもの。——**る**(他) 「にそむ」の訛。

(に-ま-や)[二障](名) 【佛】無明の妄染が正見を障(サヘ)ふると即ち理障と、無明の蔽障が證果を障ふると即ち事障との稱。又、煩惱の心神を亂すと即ち所知障との稱。

にしや-どっち[復痢](名) 【動】「にしども」に同じ。

(に-ま-ゆ)[二竪](名) 《晉の景公が病にかゝりしとき、病の神が二人の豎子(コド)となりてあらはれたる夢を見たりといふ故事に出づ》やまひ・病氣。

(に-ま-ゆう)[二乘](名) 【佛】比丘と比丘尼との稱。

(に-ま-ゆ-きん)[二朱金](名) 昔時の金貨、金一兩の八分の一にあたりたるもの。

(に-ま-ゆ-ぎん)[二朱銀](名) 昔時の銀貨、銀一分の二分の一にあたりたるもの。

(に-ま-よう)[二乘](名) ㊀【數】「にまよう」自乘に同じ。　㊁【佛】豎閣と錢覓と。——**び**[二乘比](名) 【數】相等しき二つの比の相乘比。

++にまよ-そうべう[二所宗廟](名) 伊勢大神宮と石清水八幡宮との稱。

にまふろく-や[二十六夜](名) 「にまふろくやまち」の略言。——**まち**[二十六夜待](名) 陰暦正月及七月の二十六日の夜半に、月の出を待ちて拜すると、其月の出は三更の彌陀の像を現ずといひ傳ふ。

にし-みなみ[西南](名) 西と南との間。ひつじさ

に-む-むめ[煮染](他、ま下二) 煮汁の浸(シ)み入るまで煮る。

に-む-む[煮染](他、ま四) 色染みて亂れ散る。

に-め[煮染](名) 肉又は菜などを醤油にて煮染めたるもの。——**る**(他) 「にそむ」の訛。

(に-ま-や)[二障](名) 【佛】無明の妄染が正見を障(サヘ)ふると即ち理障と、無明の蔽障が證果を障ふると即ち事障との稱。又、煩惱の心神を亂すと即ち所知障との稱。

にしや-どっち[復痢](名) 【動】「にしども」に同じ。

(に-ま-ゆ)[二竪](名) 《晉の景公が病にかゝりしとき、病の神が二人の豎子(コド)となりてあらはれたる夢を見たりといふ故事に出づ》やまひ・病氣。

(に-ま-ゆう)[二乘](名) 【佛】比丘と比丘尼との稱。

(に-ま-ゆ-きん)[二朱金](名) 昔時の金貨、金一兩の八分の一にあたりたるもの。

(に-ま-ゆ-ぎん)[二朱銀](名) 昔時の銀貨、銀一分の二分の一にあたりたるもの。

(に-ま-よう)[二乘](名) ㊀【數】「にまよう」自乘に同じ。　㊁【佛】豎閣と錢覓と。——**び**[二乘比](名) 【數】相等しき二つの比の相乘比。

++にまよ-そうべう[二所宗廟](名) 伊勢大神宮と石清水八幡宮との稱。

にしり-がき[跋書](名) 跋(ハツ)するがごとくに筆をあさへつけて運び、辛(カラ)うじて文字を書くこと、又、其書きたる筆のあと。

にしり-よ-る[躙寄](自、ら四) 座しながらすり寄る。ゐざりよる。

に-ま-る[煮汁](名) ものを煮たる汁。

にじ-る[躙](他、ら四) ㊀足にてふみ去だく。　㊁壓へつゝすり動かす。

(に-ま-ん)[二親](名) ふたおや。ちゝはゝ。(雨親)。

(に-ま-ん)[貳心](名) ㊀あだごゝろ。ふたごゝろ。　㊁うたがひ。ぎねん。

にしん[鯡](名) 【動】喉鰾類中にしん科に屬する魚、體は長くして多少側扁なり、背部は藍色にして腹部は銀白色なり、體長大なるは一尺餘に達す、我國にては北海道樣に東西南の沿岸に産す、多くは呑を開きて乾魚となす。

(ニス)(名) 「ワニス」に同じ。

に-す[似](他、さ下二) ㊀似しむ。似るやうにす。　㊁擬作す。贋造す。「贋。

に-すす[煮煤](名) 煮たる煤、板などの色附に用ふる赤き色の土にてすりたる衣。　「ふるもの。

++に-ずり[丹摺](名) 「ふるもの。

(に-する)[二水](名) 「ふるもの。

の字の左方にあるンの稱。　「もの。(偽、擬)。

にせ[贋](名) 本物にまがふやうにつくること、又、其

(に-せ)[二世](名) 現世と來世と。「一の夫婦」。

にせ-いん[贋印](名) にせの印形。偽造の印。

にせ-がね[贋金](名) まことのものにあちざる偽造の貨幣。

にせ-くび[贋首](名) その人の首級にあちずして、その人の首級と稱せらるゝもの。

にせ-きちがひ[偽狂](名) いつはりて狂人のさまをよそふこと。又、其人。(陽狂)。

にせ-さつ[贋札](名) 本物にあちざる偽造の紙幣。　「はりの證文。

にせ-おようもん[贋證文](名) 偽造せるいつ

にせ-の-ちぎり[二世契](名) 夫婦のちぎり。

にせ-の-やくそく[二世約束](名) 前條に同

にせ-はん[偽判](名) にせいん。　「ヒ。

にせ-ふだ[贋札](名) 「にせさつ」に同じ。

にせ-もの[贋物](名) にせてつくれるもの。いつはりもの。偽造のもの。

(に-せる)(他) 「にす」の訛。

にせ-ゑ[似絵](名) 其容貌に似せて寫したる繪。

(にせ-ん)[二渐經](名) 【動】「なまづ」

(に-ま-ん)[貳心](名) 「にしん」に同じ。

**にせ-ぎやう

にち-にち[日日](名、副) 日ごと。ひび。毎日。
——**くわ**[日日花](名)【植】はげいとう」の異稱。
にち-ぼ[日暮](名) ひぐれ。ゆふかた。
にち-ぼつ[日没](名) 太陽の地平面以下に沒すること。光線屈折のため、夜となる時刻はこれより遲し。日のいり。
にち-や[日夜](名、副) ⊜ひるとよる。よるひる。⊜つね。始終。
にちや-つ-く(自、か四) にちや〳〵す。
にちや-にちや(名、副) ものゝねばりつくさまにいふ語。
に-ぢゆう[二重](名) ⊜ふたかさね。ふたへ。⊜ちようふく。にざい。
——**-ぞこ**[二重底](名) 器物の底の上に更に一つの底あるつくり。又、其つくりの底。
——**-ていたり**[二重抵當](名) 已に抵當となりたるものを更に抵當となすこと。
ふた[二重蓋](名) 器物の蓋の内に更に蓋あるつくり。又、其つくりの蓋。
——**-まはし**[二重廻](名) 蓋合弱の一名。
に-よう[日用](名) 日々用ふること。又、其もの。
——**-ひん**[日用品](名) 日用の品物。
——**-ぶん**[日用文](名) 書簡文。往復文。
に-りん[日輪](名) 太陽の稱。
——**-さう**[日輪草](名)【植】「ひまはり」の一名。
にちれん-しゅう[日蓮宗](名)【佛】佛教の一派、法華經二十八品を所依とし、草木國土悉皆成佛の義を取り、七字の題目即ち南無妙法蓮華經を唱ふるもの。僧日蓮の創始にかゝる。法華宗。
に-ち-ろく[日錄](名) ひゞの事を志るすこと。又、其志るしたるもの。「いふ稱呼。
に-ち-ゐき[日域](名) 支那より日本國を指して

に-つかは-し[しくじ心しき](似附)(形、二) 似合はし。似合ひてあり。
に-つ-かん[日間](名) ひるま。ひる。
に-つ-かん[日刊](名) 日々刊行すること。「—新聞」。
に-つ-き[日暑](名) ひかげ。
に-つ-き[日記](名) 日毎の事を書きのすること。又、其記錄。——**-ちやう**[日記帳](名) 一日若干と定めたる給料。
に-つ-きふ[日給](名) 一日毎に出でゝ、勤務に服すること。
に-つ-く(自、か四) 日毎に出でゝ、勤務に服すること。
に-つ-く[煮附](他、か下二) 汁の志みこむまで煮る。にまむ。「り。にあふ。
に-づくり[荷作](名) 物を束ね又は包みて荷物をつくること。にごしらへ。
に-つ-くわ[日課](名) 毎日きめてする仕事。
に-つ-くわう[日光](名) ⊜太陽の光線。ひのひかり。⊜「にっくわうぬり」の略言。
——**-たり**
がらし[日光唐辛](名) 下野國日光町より初めて製し出だしたる雲母卷のたうがらし。
ぬり[日光塗](名) 下野國日光町より產出する一種の塗物。
——**-ヤウカン**[日光羊羹](名) 下野國日光町より產出する羊羹、細長き箱に入れたるもの。
——**-らふせき**[日光螺石](名) 下野國日光山足尾邊より出だす螺石。
に-つけ[煮附](名) につけたるもの。「——る(他)「につく」の訛。
に-つ-ら[似面](名) にがは。
に-て(助) 助詞の「に」と「て」との間に或語の略せられたる語、即ち「にあいて」「によりて」「にあり て」「にあらざると」なして等の意を表するもの。
にてひ[似而非](名) よく似てあれど、まことのものにあらざること。
にさう-ぶん[二等親](名) 五等親の條を見よ。
にさう-だて[二頭立](名) 馬車などの二頭びきなること。
にさう-ひき[二頭挽](名) 馬車などを馬二頭にて挽くこと。
にさうへん-さんかくけい[二等邊三角形](名)【數】二つの邊の相等しき三角形。
にど-がり[二度刈](名) 一年の中に二度刈カリとること。
にど-ざき[二度咲](名) かへりざき。「回。
にど-さんど[二度三度](名、副) たびたび。數
にど-の-つとめ[二度勤](名) ⊜一旦廢業したる遊女が、再び遊女となること。⊜一旦新開又は鑑誌などに掲載せしものを、更に一の冊子として刊行すること。
にど-びっくり[二度喫驚](名) ⊜初に見て感歎したるにひきかへて、其物の意想外に醜惡なること。⊜婦人の後姿の好くして面貌の醜きこと。又、男女に拘はらず香聲の甚だ麗はしくして面貌の醜きこと。
に-さり[煮取](名)「いろり」に同じ。
に-さろか-す(他、さ四) 煮て ぐたぐたとやわらかにする。「煮蕩」。
ニトロ-グリセリン[Nitro-glycerin](名)【化】グリセリンと硝酸及硫酸の混合物との反應により生ずる硝酸「エステル」、無色の液體にして甘味を有す、速かに熱するか又は打擊すれば爆發性を有す、通常の溫度にては空氣中にて光彩を失はず、銅・眞鍮・鐵などの鍍金に用ひられ、又、種々の合金を製するに用ひらる。
にっこ-ざ[晃爾](副) にこ〳〵と。にこやかに。
につこら-し[しくじ心しき](形、二)「にっかはし」に同じ。
にっこり-ざ[晃爾](副)「にっこと」に同じ。「ビ。
にっ-さん[日參](名) 毎日神社又は佛閣などへ參詣すること。
に-っ-き[日誌](名)「にっき」「日記」に同じ。
に-っ-き[日子](名) ひかず。日數。
に-っ-き[日次](名) 日どり。
に-っ-き-や[日者](名) ⊜曆數を推算するもの。曆博士。⊜さきごろ。先日。
に-っ-きゃう[入聲](名) 漢字の四聲の一、屋・沃・覺・質・勿・月・曷・黠・屑・陌・錫・職・緝・合・葉・洽の十七に分つ、これに屬する字はすべて仄字なり。
に-っ-きゃう[日章](名) 日の丸のしるし。——**-き**[日章旗](名) 日章のはた、即ち我國の國旗。
に-っ-きゃ-びゃう[日射病](名) 日光の熱にあたりて、腦充血を起し卒倒すること。
に-っ-きゆつ[日出](名) 太陽の地平面に出づること、光線屈折のため夜明は此時刻より早し。ひので。
——**-の-くに**[日出國](名) 日本國の異稱。
に-っ-くよく[日蝕](名)【天】太陰が太陽と地球との間に來りて太陽を蔽ふこと、地上の位置によりて皆既蝕・分蝕・金環蝕等見ゆ。
に-っ-くよく[日色](名) 太陽のいろ。
に-っ-くん[日新](名) 日々に新になりゆくこと。
に-っ-くん[日進](名) 日々に進歩すること。——**げっぽ**[日進月歩](名) 日々に進歩すること。
に-っ-すう[日數](名) ひかず。「ること。

に-っ-そく[日蝕](名)【天】「にっしょく」に同じ。
に-っ-たい-そく[日帶蝕](名)【天】日蝕。に同じ。
に-っ-たり[日當](名) 一日若干と定めて給する手當。
に-っ-たり[入唐](名) 古昔、唐國へ行くこと。「いひし語。
に-つち[丹土](名) 赤色のつち。
に-っ-ち-も-さっ-ち-も[二進三進](副) 如何にも。どうにも。「ま。ひる。
に-っ-ちゆう[日中](名) ⊜まひる。正午。⊜ひる
に-っ-てい[日程](名) 其日になす仕事のほど。
に-っ-てん-し[日天子](名)【佛】日輪。
に-っ-とう[日東](名) 日本國の別稱。
に-っ-ぱい[日牌](名) 日々佛前に物を供(ク)へて禮拜すること。
に-っ-ぽん-いち[日本一](名) 我國にて他に比すべきものなきこと。「—の季團子」。
にっぽん-がた[日本形](名)「にほんがた」に同じ。
——**-せんばく**[日本形船舶](名)「にほんがたせんばく」に同じ。
にっぽん-きんかう[日本銀行](名)「にほんぎんかう」に同じ。
に-っ-ぽん-たち[日本刀](名) 我國固有の法によりてきたひつくりたる刀劍。「ましひ。
にっぽん-だましひ[日本魂](名) やまとだましひ。
にっぽん-ばれ[日本晴](名) ⊜空に一點の雲だになき好天氣。⊜疑念などの全く解るゝこと。「ビ。
にっぽん-ふう[日本風](名)「にほんふう」に同じ。
にっぽん-まい[日本米](名)「にほんまい」に同じ。「ビ。
に-づみ[荷積](名) 荷を積むこと。
に-つ-むだ(他、ま下二) 煮て ぐたぐたとやわらかにする。「煮詰」。
に-つめる(他) 前條の訛。

に-つら[似面](名) にがは。
に-て(助) 助詞の「に」と「て」との間に或語の略せられたる語、即ち「にあいて」「によりて」「にあり て」「にあらざると」なして等の意を表するもの。「あらざると」。
にてひ[似而非](名) よく似てあれど、まことのものにあらざること。
にさう-ぶん[二等親](名) 五等親の條を見よ。
にさう-だて[二頭立](名) 馬車などの二頭びきなること。
にさう-ひき[二頭挽](名) 馬車などを馬二頭にて挽くこと。
にさうへん-さんかくけい[二等邊三角形](名)【數】二つの邊の相等しき三角形。
にど-がり[二度刈](名) 一年の中に二度刈カリとること。
にど-ざき[二度咲](名) かへりざき。「回。
にど-さんど[二度三度](名、副) たびたび。數
にど-の-つとめ[二度勤](名) ⊜一旦廢業したる遊女が、再び遊女となること。⊜一旦新開又は鑑誌などに掲載せしものを、更に一の冊子として刊行すること。
にど-びっくり[二度喫驚](名) ⊜初に見て感歎したるにひきかへて、其物の意想外に醜惡なること。⊜婦人の後姿の好くして面貌の醜きこと。又、男女に拘はらず香聲の甚だ麗はしくして面貌の醜きこと。
に-さり[煮取](名)「いろり」に同じ。
に-さろか-す(他、さ四) 煮て ぐたぐたとやわらかにする。「煮蕩」。
ニトロ-グリセリン[Nitro-glycerin](名)【化】グリセリンと硝酸及硫酸の混合物との反應により生ずる硝酸「エステル」、無色の液體にして甘味を有す、速かに熱するか又は打擊すれば爆發す。
ニトロ-セルローズ[Nitro-cellulose](名)【化】綿の如き「セルローズ」を強硫酸及強硝酸の混合液にて處理するときに生ずる硝酸「エステル」。
ニトロ-ベンゼン[Nitro-benzene](名)【化】淡黃色の液體、一種の香氣を有す、「ベンゼン」を強硝酸にて處理すれば得。
に-ぬ[鯰](名)【動】腹足類中前鰓類に屬する軟體動物、形は田螺に似、介殼黑色にして細長なり、川・溝などに棲む。「河貝子」。
——**-いろ**[鯰色](名) ⊜かさねの色目、表は黃色にして、裏の青色なるもの。⊜黃黑き染色。「なり。
に-ぬ-し[二無](形、一) 他に比なし。無類の略言。
にぬはり[荷繩](名) 荷にかくる繩。
にぬひ[擔](名) ⊜になふこと。⊜「になひをけ」の略言。
——**-かご**[擔籠](名) 物を入れてになふ籠。
——**-つむじ**[擔旋毛](名) 二つなりにてある旋毛。
——**-ぼう**[擔棒](名) 物をになふ棒。てんびんぼう。あふこ。
——**-をけ**[擔桶](名) 水をいれて擔ふ桶。
にぬ-ふ[擔](他、は四) ⊜肩にかけてかつぐ。かたぐ。⊜負擔す。あふ。
にぬ-のり[二人乘](名) 二人共に乘らるゝ人力車などの稱。
——**-ぐも**[布雲](名) 布を積(ツ)みたるが如くにたなびきたる雲。
に-ぬき[煮拔](名) ⊜水を多くして炊(カ)きたる飯の粘液を取りたるもの。あねば。⊜「にぬきたまご」の略言。
——**-たまご**[煮拔玉子](名) ゆでたまご。

あ　い　う　え　お　か　き　く　け　こ　さ　し　す　せ　そ　た　ち　つ　て　と　な　に　ぬ　ね　の

に・ぬ・く[ニヌ]（煮抜）（他、か四）よく煮る。にむ。

に・ぬし[ニヌ]（荷主）（名）荷物の所有者、荷物の送出人。

++**に・ぬり**[ニヌ]（丹塗）（名）赤き土にて塗りたるもの。又赤き色に塗りたるもの。「一の矢」。

（に・ねん[ニネン]（二念）（名）㊀二心。㊁餘念。

（にねん・とん[ニネン]（二年根）（名）【植】二年生の根。

（にねん・せい[ニネン]（二年生）（名）【植】㊀二年間生長して枯死すること。㊁學校の第二年級に屬する生徒。

に・の・あし[ニノ]（二足）（名）ためらふこと。躊躇すること。

——をふむ　ためらふ。

に・の・うで[ニノ]（二腕）（名）肩と肘との間。

に・の・く[ニノ]（二句）（名）つぎのことば。「一も出でず」。

++**に・の・ひと**[ニノ]（二人）（名）掘歌・謡曲に亞ぐ人。

++**に・の・ほ**[ニノ]（丹穂）（名）稻穗の成熟して赤色を帶びたるもの。

に・の・まち[ニノ]（二町）（名）㊀局町にて、一の町につぎたる町。㊁轉じて、第二位。

に・の・まひ[ニノ]（二舞）（名）㊀安摩といふ舞樂の次に舞ふ滑稽の舞曲。㊁人の失敗にならふこと。人の惡しき振舞を眞似ぬること。

に・の・まる[ニノ]（二丸）（名）本丸の外をかこむ郭。

に・の・みや[ニノ]（二宮）（名）一の宮のつぎの宮。

に・の・や[ニノ]（二矢）（名）一度目に射(イ)る矢。

に・は[ニワ]（庭）（名）㊀邸内又は隣前の空地。㊁邸内に樹木を栽(ウ)ゑ又は景石を設けなどしてある所。㊂物事を行ふ地、場所。「合戰の一」。「場」。㊃波乱づかなるときの海上。

に・は・いし[ニワ]（庭石）（名）庭のかざりにする丸く石。又、庭に設けたる飛石。

——・づたひ[ニワ・タイ]（庭石渡）（名）庭の飛石の上をつたひ行くこと。

に・は・い・す[ニワ]（二杯酢）（名）醬又は醋油をまぜたる酢。食物の調理に用ふ。

に・は・うめ[ニワ]（庭梅）（名）【植】雪柳科に屬する木、葉は廣披針形をなし、花は小形にして五瓣白色なり、春の頃開く、果實は小形球狀にして熟すれば食ふべし。こうめ。（季）。

に・は・か[ニワ]（俄）（名）㊀だしぬけ。突然。㊁きふ。急。

（に・は・ぎ[ニワ]（坐興）のため俄にする滑稽なる所作。——**・あめ**　【俄雨】（名）俄に降り出だした雨。——**・かぜ**　【俄風】（名）俄に吹き起りたる風。——**・ぶば**　**ゐ**【俄芝居】（名）座興のためにする道化芝居。——**・たりぶん**[ワド]（俄道心）（名）急に發心して出家すること。又、其人。——**・びより**[ワド]（俄日和）（名）雨天の俄かに晴天となること。——**・ぶげん**　【俄分限】（名）俄かの間に富有となること。又、其人。——**をどり**[ワド]（俄踊）（名）座興のためにする滑稽なる踊。

に・は・き[ニワ]（庭木）（名）庭園に植ゑうる樹木。

に・は・きど[ニワ]（庭木戸）（名）庭園に設けたる木戸。

に・は・くさ[ニワ]（庭草）（名）庭に生じたる草。

++**に・は・くな・ぶり**[ニワ]（鶺鴒）（名）【動】「せきれい」の古稱。

に・は・げた[ニワ]（庭下駄）（名）庭園を歩むための下駄、齒廣く低くして粗末なるもの。

に・は・と[ニワ]（庭子）（名）農家の奴婢が夫婦となりて生みたる子の、雨親につぎてまた其家に仕ふるもの。

に・は・ごけ[ニワ]（庭苔）（名）庭の面に生ずる苔。

に・は・とぶ[ニワ]（庭瘤）（名）土間などの自然に凸凹を生じたるもの。「えんきき。

に・は・さき[ニワ]（庭前）（名）室の前に近き庭の部分。

に・は・ざくら[ニワ]（庭櫻）（名）【植】い庭前に植ゑたる櫻。いへざくら。（季）。にはうめの一種、重瓣白色の花開くもの。櫻桃、桃含。

に・は・そ[ニワ]（甘遂）（名）【植】大戟科に屬する草、莖は短小にして、葉は莖端に叢生す。「に同じ。

++**に・は・たたき**[ニワ]（鶺鴒）（名）【動】「にはくなぶり」

++**に・は・たち**[ニワ]（庭立）（名）㊀庭にありたつこと。㊁「かくりだち」に同じ。

に・は・たづみ[ニワ]（行潦）（名）雨などふりて地上に溜(マ)り流るゝ水。（淺、淵）。

に・は・たづみ[ニワ]（行潦）（枕）にはたづみはながるゝものなれば「ながるる」に冠らする詞。「溜」。

++**に・は・ちやう**[ニワチヤウ]（庭帳）（名）年貢を記載する帳

に・は・つくり[ニワ]（庭作）（名）庭の樹木景石などをつくること。又、其業の人。「行くこと。

に・は・づたひ[ニワ・タイ]（庭傳）（名）庭より庭とつたひ

++**に・は・つつ**[ニワ]（地膽）（名）【動】「はんめう」に同じ。

++**に・は・つ・ざり**[ニワ]（庭津鳥）（名）《庭常の義》【植】忍冬科に屬する木、枝條雲形に垂し樹幹淵曲す、葉は羽狀複葉にして緣邊に鋸齒を有し對生す、花は小形白色にして、果實は赤豆に似る、觀賞用として栽培せられ、花は藥用に供せらる。

[ことはに]

++**に・は・つ・ざり**[ニワ]（庭津鳥）（枕）「かけ」に冠らす

++**に・は・とこ**[ニワ]（接骨木）（名）《庭常の義》【植】忍冬科に屬する木、枝條雲形に垂し樹幹淵曲す、葉は羽狀複葉にして緣邊に鋸齒を有し對生す、花は小形白色にして、果實は赤豆に似る、觀賞用として栽培せられ、花は藥用に供せらる。

に・は・ざり[ニワ]（鵲）（名）《庭津鳥の轉》【動】鶺鴒類に屬する鳥、雄は美麗且つ大形にして、頭に肉冠（カサ）あり、雌は雄小にして文彩に乏し、時をつげて

は　ひ　ふ　へ　ほ　ま　み　む　め　も　や　い　え　よ　ら　り　る　れ　ろ　わ　ゐ　ゑ　を

鳴く、現時これを飼養せざる地なし、種類太だ多けれどすべて「ジャバ」及「インド」に產する野雞を原產とす、肉及卵は廣く食用に供せらる。かけ。（雞香、司晨鳥、德禽）。——**をさくにぎりたちをもちふ**[割雞用牛刀]　鷄の肉を料理するに牛をはふる刀を用ふる義にして、小事を處理するに、大器量の人物又は大仕掛の手段を使用するに

に・ばな[煮花]（名）茶のてばな。「いふ。

++**に・はね・へ**[ニワエ]（新嘗）（名）「にひなめ」に同じ。

に・はの[ニワ]（庭騎）（名）庭さきなどにて馬を乘り廻(ナ)らすこと。

に・はの・をしへ[ニワオシエ]（庭訓）（名）家庭の教訓。

に・はは・き[ニワ]（庭掃）（名）庭を掃除すること、又、其人。

に・は・び[ニワ]（庭火）（名）庭上にて焚(タ)く火、庭燎。

に・は・ふぢ[ニワ]（庭藤）（名）【植】「いはふぢ」の一名。

に・は・まはり[ニワマ]（庭回）（名）庭の周圍。

に・は・み・ぐさ[ニワ]（庭見草）（名）【植】萩の異稱。

++**に・ば・むらさき**[ニワ]（鈍）（自、ま四）にびいろとなる。

++**に・は・も・せ**[ニワモセ]（庭狹）（名）㊀庭も狹くなるほどなること。㊁誤りて、庭の面。

に・は・やなぎ[ニワ]（庭柳）（名）【植】蓼科に屬する草、多く路傍などに生ず、莖の高さ數寸、葉はうき草に似て互生す、花は小形にして赤白色を呈し、夏の頃葉間に生ず。いはやなぎ。「たる井戸

に・は・ゐど[ニワ]（庭井戸）（名）庭園のかざりに設け

にばん・どり[ニワ]（二番鳥）（名）夜明に一番鳥よりもやゝ後れて鳴く雞。「る語。

にひ[ニイ]（新）（接頭）或語に冠して新しき意を表す

++**に・ひ・いと**[ニイ]（新絲）（名）今年とりたる絲。

++**に・び・いろ**[ニビ]（鈍色）（名）薄黑き綠色、古昔、喪服に用ひしもの。

++**に・ひ・くさ**[ニイ]（新草）（名）今年生ひたる草。

++**に・ひ・くは・まゆ**[ニイ]（新桑繭）（名）今年の蠶のつくりたる繭。「る衣。

++**に・ひ・ごろも**[ニイ]（新衣）（名）あたらしく仕立た

++**に・ひ・さきもり**[ニイ]（新防守）（名）新に報道せられたる防人。

++**に・ひ・ぞほり**[ニイ]（新搾）（名）新に醸造せる酒。

に・びたし[煮浸]（名）一種の料理、鮑・鮎などを煮き、更にこれを醬油と味醂とにて柔く煮たるもの。

++**に・ひ・たまづさ**[ニイ]（新玉章）（名）始めて其人にもくりやる書狀。

++**に・ひ・ねへ**[ニイエ]（新嘗）（名）「にひなめ」に同じ。

++**に・ひ・なめ**[ニイ]（新嘗）（名）昔時は陰曆十一月中の卯の日に行はれ、現今は十一月二十三日に行はる、祭事、天皇親ら民間より獻納せし新穀を諸神に供せられ且つ親らも聞こしめしたまふこと。——**・まつり**[ニイ]（新嘗祭）（名）前條に同じ。——**・ざい**[ニイ]（新嘗祭）（名）前條に同じ。

++**に・ひ・ばり**[ニイ]（新治）（名）新に開墾したる田。——**・みち**[ニイ]（新治道）（名）あたらしき道路。

に・ひ・まくら[ニイ]（新枕）（名）男女始めて同衾すること。

++**に・ひ・まゐり**[ニイ]（新參）（名）いまゝゐり。まんざん。「又、其もの。

++**に・ひ・むすび**[ニイ]（新結）（名）始めてむすぶこと。

++**に・ひ・むろ**[ニイ]（新室）（名）新につくりたる室、新菌の室。——**・いはひ**[ニイワイ]（新室祝）（名）ざえき。

に・ひ・め[ニイ]（新喪）（名）前條に同じ。「新室宴」（名）前條に同びらき。——**・うたげ**[ニイ]（新室宴）（名）あたらしき喪。「に。

に・ひ・もの[ニイ]（新物）（名）あたらしきもの。

にびやく・さを・か[ニビヤク]（二百十日）（名）立春より二百十日目に當たる日、其頃は、早稻花ざかりなれば、農家にて當日の風雨を大に忌む。

にびやく・はつ・か[ニビヤク]（二百二十日）（名）二百十日より十日目に當たる日、其頃はなかての花ざかりなれば、二百十日と同じく農家にて當日の風雨を大に忌む。

にひ・よね[ニイ]（新米）（名）えんまい。

にひ・わかぐさ[ニイ]（新若草）（名）わかぐさ。

++**に・ふ**[ニフ]（二府）（名）左近衛府と右近衛府との稱。

に・ぶ・いろ[ニブ]（鈍色）（名）「にびいろ」に同じ。

（に・ふ・えい[ニフ]（入營）（名）軍隊の營所に入りて兵士となること。入隊。「ること。入學。

（に・ふ・かう[ニフ]（入校）（名）學校に入りて生徒となること。

（に・ふ・かう[ニフ]（入港）（名）船舶の港に入り來ること。——**・ぜい**[ニフ]（入港稅）（名）入港せる船舶に賦課する稅金。「と。

（に・ふ・かく[ニフ]（入格）（名）一定のかたにはまること。

（に・ふ・かく[ニフ]（入閣）（名）國務大臣に任ぜられ內閣に列すること。

（に・ふ・がく[ニフ]（入學）（名）㊀入校に同じ。㊁先生の許に弟子入りすること。にふもん。「、と。

（に・ふ・かん[ニフ]（入監）（名）囚徒の監獄に入れらること。

（に・ふ・きやう[ニフキヤウ]（入京）（名）京地に入り來ること。「と。

（に・ふ・ぎよ[ニフ]（入御）（名）大內へ入らせたまふこと。

（に・ふ・きん[ニフ]（入金）（名）㊀內金を拂ひ入るゝこと。㊁金錢を收入せること。「時代の語」。

（に・ふ・きん[ニフ]（入銀）（名）前條（一）に同じ。德川

（に・ふ・きん[ニフ]（貳分金）（名）昔時の金貨、金貳分に當たれり。

(**にふ・くわ**ニウ[入花](名) 俳諧などの添削料。
(**にふ・くわい**ニウ[入會](名) 會に加はりいると。會員となると。
(**にふ・くわん**ニウ[入棺](名) 死者のむくろを棺にをさめいるゝこと。
(**にふ・とう**ニウ[入買](名) 外國より入朝して貢物を奉ること。
(**にふ・とう**ニウ[入寇](名) 攻め入ること。侵(オカ)し入ること。あだすること。
(**にふ・とく**ニウ[入國](名) 領主の其領地に入ること。
(**にふ・ごく**ニウ[入獄](名) 獄につながるゝこと。
(**にふ・さつ**ニウ[入札](名) 貸借・賣買乃至請負等に關し、最も利益多き價格の申出をなしたるものと契約すべき條件にて、多人數のものに各見込の價格を札に出るして申出をなさしむること。いれふだ。——**ばらひ**ハライ[入札拂](名) 入札によりて賣拂ふこと。
にふ・しニウシ[鈍](形、一) ㊀鋭利ならず。するどからず。㊁敏捷ならず。のろし。
(**にふ・ぜい**ニウ[入市稅](名) 市に輸入する貨物に對して、其輸入者に賦課する組稅。
(**にふ・だつ**ニウ[入室](名) ㊀古昔、貴顯の門跡となりて寺院に入ちせらるゝこと。㊁其道の奥儀に達すること。「はり入ること。
(**にふ・しゃ**ニウ[入社](名) 社員となること。社に加はること。
(**にふ・しゃう**ニウジ[入城](名) 城中にはいること。
(**にふ・しゃく**ニウ[入寂](名) 【佛】死ぬること。
(**にふ・しゅ**ニウ[入手](名) ㊀我物として手に入るゝこと。㊁深く造詣すること。よく會得すること。
(**にふ・しゅく**ニウ[入塾](名) 塾に入りて寄宿すること。塾生となること。
(**にふ・しん**ニウ[入津](名)「にふかう」[入港]に同じ。
(**にふ・せき**ニウ[入籍](名) 或家の戸籍に屬するもの、轉じて他家の戸籍に加はり入ること。
(**にふ・せん**ニウ[入船](名) いりふね。「る札。
に・ふだ[荷札](名) 荷主の名を記して、荷につく
(**に・ふた**ニウ[入隊](名) 軍隊に入ること。兵士となること。
(**にふ・たう**トウ[入湯](名) 湯に入ること。入浴。
(**にふ・だう**ドウ[入道](名) ㊀佛道に入ること。佛門に入ること。㊁古昔、佛道に入りたる三位以上の人の稱。㊂坊主頭のものをのゝしりていふ語。——**ゐんわう**ワウ[入道親王](名) 昔時、入道し給ひし親王の稱。「法親王」。——**むし**[入道蟲](名)【動】「ずむし」及「にしどち」の一名。
(**にふ・ぢやう**ヨウ[入定](名)【佛】(い)禪定に入ること。(ろ)轉じて、死ぬること。
(**にふ・ぢやう**ヨウ[入場](名) 其場にはいること。
——**きつぷ**[入場切符](名) 入場せさする切符。——**けん**[入場券](名) 前條に同じ。
に・ふつニウ[入津](名) 船舶の港に入ること。
(**に・ふて**ニウチ[入朝](名) 外國の使臣などの來りて、朝廷に參内すること。
(**にふ・ない**ニウ[入内](名) ㊀「ぢゆだい」に同じ。㊁古昔、外位より進みて内位に入りしこと。——**すめ**[入内雀](名)【動】雀の一種、甚だ小形にして嘴胸灰色なり、雄は頭背共に赤く、雌は頭背共に黄色なり。(黄雀)。
に・ぶ・にぶ・しニウ[鈍鈍](形、二) いとにぶし。
に・ぶね[荷船](名) 荷物の運送船。
(**にふ・ねん**ニウ[入念](名) 念の入ること。ねんいり。
(**にふ・ばい**ニウ[入梅](名) 梅雨の節に入ること。又、梅雨の節。(「つゆ」の條を見よ)。
にふばく・の・ひんニウ[入幕賓](名) 《晉の謝安の語に出づ》特別に懇意にする客。
(**にふ・ひ**ニウ[入費](名) 金錢をつひやすこと。いりめ。かゝり。
(**にふ・ふ**ニウ[入府](名) ㊀みやこに入ること。㊁入
(**にふ・ふ**ニウ[入夫](名) 戸主たる女子と結婚して其家に入りたる男子。いりむこ。——**とんいん**[入夫婚姻](名) 戸主たる女子がなす結婚。
(**にふ・ぶ**ニウ[入部](名) 入國。
(**にふ・ぶ**ニウ[入峰](名) 山伏が修行のため高山などにのぼること。「市稅」に同じ。
(**にふふ・ぜい**ニウ[入府稅](名)「にふぢぜい」入
(**にふ・ブツ**ニウ[入佛](名) 佛像を寺院に迎へ入るゝこと。——**くやう**クヨウ[入佛供養](名) 入佛のために營む法會。「う」に同じ。
(**にふ・ぼく・だう**ニウ[入木道](名)「ぢゆぼくだ
(**にふ・ぼつ**ニウ[入沒](名) はいりぢづむこと。
にふ・むつニウ[入滅](名)【佛】死ぬること。「じ。
(**にふ・めん**ニウ[入麵](名)「にうめん」(素麵)に同
(**にふ・もん**ニウ[入門](名) 學校又は塾などに入りて、其生徒となること。——**きん**[入門金](名) 入門の去るしとして差出す金。
(**にふ・よう**ニウ[入用](名) ㊀いりよう。もちひ。㊁いりめ。つひえ。
(**にふ・らい**ニウ[入來](名) いりくること。いりきたること。「ぢゆらい。
(**にふ・らう**ニウ[入牢](名) 牢に入ること。ぢゆらう。
(**にふ・ろん**ニウ[鈍](自、ら四) にぶくなる。

(**にふ・ゐん**ニウ[入院](名) ㊀僧侶などが寺院に入りて其主となること。㊁療治を受くるため、病院に入ること。
に・へエ[新贄](名) 《にひあへの約》新しき物を神にそなへ又は人に饗すること。
に・へエ[贄](名) ㊀朝廷又は神明などに奉る土産物。㊁おくりもの。つかひもの。禮物。
に・べ[鱧](名)【動】硬鱗類中いしもち科に屬する魚、體は側扁、銀灰色にして黑點を有し、腹部は淡黄色なり、灰色の脊鰭を有す、體長一尺餘、深海の泥底に棲息し、其鰾大にして且つ良好なるを以て、鰾膠(ニカワ)を取る料に供せらる。
に・べ[鱧膠](名) おもにべのふえより製する膠、又、鱧はも等の皮よりも製す、粘着力甚だ強し。
に・へ・がりエ[贄狩](名) にへにする魚鳥などを捕ふること。
に・へさ・にサエ[多](副) 澤山に、多く。
に・へ・どのエ[贄殿](名) 古昔、禁中にて諸國より奉れる魚鳥を料理せし所。
に・へ・の・はつかりエ[贄初刈](名) 新穀を朝廷又は神に奉らんため、はじめてかりとること。
に・へ・びさエ[贄人](名) にへかりをなす人。
(**に・べん**[二便](名) 大便と小便と。
(**に・ほ**オ[鳩](名)【動】「かいつむり」の一名。
(**に・ほ・どり・の**オ[鳩鳥](枕) 鳩は水を潜(グ)るものなるより「かづく」に續らする詞。
に・ほ・の・うきすオ[鳩浮巣](名) 鳩の巣、其蒸問などにつくり、うきて見ゆるよりいふ。「り。
に・ほは・しニオシ[匂](形、二)にはやかなり。
に・ほは・すニオス[臭](他、さ四) くさきかを發す。

(**に・ふ・ゐん**ニウ[入院](名) ㊀僧侶などが寺院に入りて其主となること。㊁療治を受くるため、病院に入ること。
に・へエ[新贄](名) 《にひあへの約》新しき物を神にそなへ又は人に饗すること。
に・へエ[贄](名) ㊀朝廷又は神明などに奉る土産物。㊁おくりもの。つかひもの。禮物。
に・べ[鱧](名)【動】硬鱗類中いしもち科に屬する魚、體は側扁、銀灰色にして黑點を有し、腹部は淡黄色なり、灰色の脊鰭を有す、體長一尺餘、深海の泥底に棲息し、其鰾大にして且つ良好なるを以て、鰾膠(ニカワ)を取る料に供せらる。
に・べ[鱧膠](名) おもにべのふえより製する膠、又、鱧はも等の皮よりも製す、粘着力甚だ強し。
に・へ・がりエ[贄狩](名) にへにする魚鳥などを捕ふること。
に・へさ・にサエ[多](副) 澤山に、多く。
に・へ・どのエ[贄殿](名) 古昔、禁中にて諸國より奉れる魚鳥を料理せし所。
に・へ・の・はつかりエ[贄初刈](名) 新穀を朝廷又は神に奉らんため、はじめてかりとること。
に・へ・びさエ[贄人](名) にへかりをなす人。
(**に・べん**[二便](名) 大便と小便と。
(**に・ほ**オ[鳩](名)【動】「かいつむり」の一名。
(**に・ほ・どり・の**オ[鳩鳥](枕) 鳩は水を潜(グ)るものなるより「かづく」に續らする詞。
に・ほ・の・うきすオ[鳩浮巣](名) 鳩の巣、其蒸問などにつくり、うきて見ゆるよりいふ。「り。
に・ほは・しニオシ[匂](形、二)にはやかなり。
に・ほは・すニオス[臭](他、さ四) くさきかを發す。

(**に・ほは・す**ニオス[匂](他、さ四) ㊀つやゝかにす。はえあらしむ。㊁香を發す。かをらす。㊂はのめかす。讓示す。
(**にほはせる**(他)「にほはす」の訛。
(**にほひ**ニオ[臭](名) あしきかをり。くさき氣。
にほひニオ[匂](名) ㊀つや。いろ。艷。㊁かをり。か。(香)。㊂もむき。氣韻。㊃いきはひ。威勢。㊄研(ト)ぎあげたる刀の刃のももて生ずる文理。㊅染色又はかさねの色合などに、色のほんのりとくまどれるやうなること。ぼかし。——**あぶら**[匂油](名) よきかをりのある髮飾用の油。かうゆ。(香油)。——**ぶくろ**[匂袋](名) 香料を包みて携帶する袋、悪臭をけすためのもの。——**もの**[匂物](名) にほひよきもの。香料。——**やか**[匂](名) つやゝか。にはやか。
(**にほ・ふ**ニオ[臭](自、は四) くさき氣發す。
にほ・ふニオ[匂](自、は四) ㊀あざやかにあり。はゆ。㊁つやゝかにあり。つやめく。㊂香發す。かをる。㊃風韻あり。おもむきあり。㊄いきはふ。ひかる。
(**にほ・やか**[匂](名) にはひ高きこと。にはひ多きこと。にはひあちはるゝこと。
(**に・ほん**[二品](名) ㊀昔時、親王に賜はりし位階の一。㊁二位。
にほん・いち[日本一](名)「にっぽんいち」に同じ。
にほん・がた[日本形](名) ものゝ形の日本風なること。西洋形の對。——**せんばく**[日本形船舶](名) 我國在來の構造による船舶、帆櫓によりて航走するもの。和船。

(**にほん・きんかう**カウ[日本銀行](名) 我國の金融機關の中心たる中央銀行、資本の供給を潤澤にし、兌換の基礎を堅固にし、金利を按排し、金融を調理する等の責務を有し、普通の銀行業務の外、國庫金の取扱・兌換券の發行等をなす。
(**にほん・ざし**[二本差](名) ㊀昔時、武士の稱、刀と脇差とを差し、よりいふ。㊁燒豆腐又は豆腐田樂等の稱、其二本の串を差すよりいふ。
にほん・ざ[日本紙](名) 我國在來の製法による紙。「よる酒。
(**にほん・ざゆ**[日本酒](名) 我國在來の釀造法に
(**にほん・たう**トウ[日本刀](名)「にっぽんたう」に同じ。「ましひ。
(**にほん・だましひ**シイ[日本魂](名) やまとだ
(**にほん・ふう**[日本風](名) 我國在來のならはし又はかたち。
(**にほん・ぼう**[二本棒](名) ㊀昔時、二本差即ち武士をあざけりていひし語。㊁漢(カン)をたちしゐる小供をあざけりていふ語。㊂女房にあきき亭主をあざけりていふ語。㊃まぬけたる人をあざけりていふ語。
にほん・まい[日本米](名) 我國より産出する米。南京米などの對。
にまい・ぢた[二枚舌](名) ㊀虚言を吐くこと。うそをつくこと。㊁中間に立ちて、彼此に矛盾したる言を吐くこと。
に・まめ[煮豆](名) 大豆・黑豆などを砂糖と醬油とにて煮染めたるもの。
(**にめん・かく**[二面角](名)【數】相會する二つの平面のなす角。
に・もち[荷持](名) 荷物をもち行く人。

にもつ[荷物](名) 持ちはこぶ物品。運送する貨物。に。——**ぐるま**[荷物車](名) 荷物をのせてはこぶ車。にぐるま。——**れっしや**[荷物列車](名)「くわぶつれっしや」貨物列車に同じ。

にもの[煮物](名) 食物をにたむるなどして、又、にためたる食物。

にやき[煮焼](名) にたき。「東京の方言」。

にやく[荷役](名) ㊀船の荷の揚卸しをなすこと。

㊁自己の負担とし持ちあつかふこと。

にやくだち[若道](名) 男色。鶏姦。

にやける[自、か下一]柔弱にして色めかしくあり。軟弱、軽佻。

にやけさこ(名) にやけたる男。「軽薄兒」。

にやこ[煮奴](名) 奴にきりたる豆腐をにためたるもの。

にやにや(名、副) 微かに且つ絶えず笑ひをふくむさまにいふ語。

にゆにゆす[煮]〔自、や下二〕㊀にられて煮とはり黙す。㊁水腐膨して褐となる。

にゆう[乳](名) ㊀ち、ち、。㊁「くわんにゆう」(貫乳)に同じ。

にゆうかう[乳香](名) 黨陵(タウロウ)の一種、形の乳首に似たるもの。「氣」。

にゆうがん[乳癌](名) 乳房に癌の發生する病。

にゆうと[乳虎](名) 兒をうみこれにちゝのまするときの虎、最も猛烈なりといふ。

にゆうさん[乳酸](名)【化】砂糖・澱粉等より醗酵のために生ずる一種の酸。牛乳の腐敗して酸味を帶ぶるは、乳汁中の糖分よりこれが發生するによる。糊・飯・餅等の腐敗する際にも生ず。

にゆうむ[乳薗](名) 小兒の出生後六七個月の頃より生じ始め十歳前後に至りて脱(ぬ)け去る齒。

にゆうむ[乳兒](名) ㊀ちゝのみご。

にゆうむう[乳臭](名) ㊀經驗の足らざること。ちくさきこと。㊁「ぢうちく」牛臭に同じ。「語」。

にゆうむす[乳臭兒](名) 未熟なるものをあざけりていふ語。

にゆうむふ[乳汁](名) ちゝ。ちゝ。

にゆうむやう[乳漿](名) 乳汁中の一成分。

にゆうめい[乳名](名) 乳のみ兒のときの名。即ち蛋白質及脂肪を除きたる他は皆なこれなり。

にゆうめん[乳首](名) ちくび。「石英」。

にゆうせきえい[乳石英](名)【鑛】乳白色の分泌する酸。

にゆうせん[乳腺](名) 乳房内にありて乳汁を

にゆうたう[乳糖](名)【化】哺乳動物の乳汁の中に存在する一種の砂糖。蔗糖に比すれば水に溶(と)け難く又甘味少し。乳汁の主成分なり。

にゆうなん[乳軟](名) ちゝなるの十分に出でざること。

にゆうばう[乳房](名) ちぶさ。——**くわぎん**[乳房火山](名)【地】乳房の狀をなす間火山。「き白き色」。

にゆうはくきよく[乳白色](名) ちゝなるの如き白色。

にゆうハチ[乳鉢](名) 藥をすりて細末となすに用ふる陶器又は硝子製の鉢。

にゆうび[乳糜](名)【生】食物の消化せられてなりたる營養液、乳狀をなし帶黄白色にして少しく鹹味あり。——**えき**[乳糜液](名) 前條に同じ。

にゆうぼ[乳母](名) めのと。うば。

にゆうぼう[乳棒](名) 乳鉢にて藥をすり棒。

にゆうぼく[乳木](名) 護摩にたく木。

にゆうめい[乳名](名) 乳のみ兒のときの名。

にゆうやう[乳養](名) ちゝをのませそだてやしなふこと。

にゆうらく[乳酪](名)「ぎうらく」牛酪に同じ。「語」。

にゆつと(副) 突然にあらはれいづるさまにいふ。

によ[如](名)【佛】一切處にあまねくして不變なること。即ち、眞如。

によい[如意](名) ㊀物事の我が思の如くなること。㊁佛家にて用ふる具、玉・鐵・竹などにてつくり、長さ一尺許、わらびのごとき形をなす。——**はうぢゆ**[如意寶珠](名) 靈妙なる珠。

によいりん[如意輪](名)【佛】「によいりんくわんぜおん」の略言。——**くわんぜおん**[如意輪觀世音](名)【佛】觀世音の一、六臂にして、如意寶珠を持ちたるもの。

[によいりんくわんぜおん]　[(二)によい]

によう[女官](名) 宮中に奉仕する婦人の總稱。官女。

にようご[女御](名) ㊀親王・三公の女より入内ありて未だ皇后の宣下あらせたまはぬ程の稱號。㊁中宮に次ぐ女官の稱。——**だい**[女御代](名) 女御の代として奉仕する女官。——**や**[女御屋](名) 女御のつぼね。

にようぢゆ[女孺](名) 古昔、内侍司に屬したる女官。掃除・點燈などの事をつかさどるもの。

にようばう[女房](名) ㊀古昔、禁中の官女の稱。㊁貴族の家の侍女の稱。㊂現今は、平人の妻の稱。(内儀、細君、内室。——**とことば**[女房詞](名) 禁中の女房などの用ひし一種の言語、後

土御門帝の頃より起り、もと下ざまのものを供御に調じたるに始まるといふ、團子をいしいし」といひ豆腐を「おかべ」といふ類。

++**により**[女房](名)「にようばう」の音便。

によりぼん[女院](名) 皇太后の佛門に入りたまひて門院の號ある御方の稱。一條天皇の皇太后藤原の詮子の東三條院と號せられ、後一條天皇の母后藤原の彰子の上東門院と號せられしより起る。

によりがくせい[女學生](名)「ぢよがくせい」に同じ。

によりがくかう[女學校](名)「ぢよがくかう」に同じ。

によりかん[女監](名)「ぢよかん」に同じ。

++**によりくらうど**[女藏人](名) 古昔、地下(ぢ)の人の女などの官仕せしもの、稱。

によりくわん[女官](名)「にようくわん」に同じ。

によりけい[女系](名) 女子の系統。

によりご[女御](名)「にようご」に同じ。

によりこう[女工](名)「ぢよこう」に同じ。

によりこの・おしま[女護島](名) ㊀女子のみ居るといふ想像上の御島。㊁八丈島の異稱。

によりさう[女相](名) 女のかたち。よたい。

によりさう[女裝](名)「ぢよさう」に同じ。

によりし[女子](名)「ぢよし」に同じ。

によりし[女兒](名)「ぢよし」に同じ。

によりしう[女囚](名)「ぢよしう」に同じ。

によりしき[女色](名)「ぢよしき」に同じ。

によりつ[如實](名)【佛】眞理にたがはざること。

によりしやう[女性](名) 女とうまれたること。

そんな。「今のは確かに—の聲」。

によりよる[女叙位](名) 古昔、女官に位階を賜はりし公事。

によりぜ[如是](名) ㊀かくのごときこと。そのとはりなること。㊁【佛】法門、眞理、佛說。㊂ゆるすこと。うべなふこと。——**がもん**[如是我聞](名)《かく我はきゝたりといふ意》如來の指教に從ひて阿難これを諸經の佛說の冒頭に冠らせし語。

によせい[女壻](名)「ぢよせい」に同じ。

によせいご[女生徒](名)「ぢよせいと」に同じ。

によソウ[女僧](名) 比丘尼。アマ。

によぞく[女賊](名) ㊀女性の盜賊。㊁【佛】女色の善心を害すること。

によたい[女體](名) 女性のからだ。「語」。

++**によつきり**(名、副) 高くおこり出づるさまにいふ語。

++**によてい**[女帝](名) 女性の皇帝。

++**によさうぐう**[女春宮](名) 春宮に立たせ給へる皇女。「と」。

によによ[如如](名)【佛】常住にして平等なる

によにん[女人](名) をんな。女子。婦人。——**きんせい**[女人禁制](名) 寺院などに、婦人の入ることを禁ずること。

++**によぬ**[呻](自、は四) うなる。うめく。

++**によべつたち**[女別當](名) 古昔、齋宮に奉仕せし女官。

++**によほう**[女奉書](名) 古昔、勾當内侍お納をうけて書きたる文。

によほう[如法](名) ㊀實貨なること。

によほふ[如法](副) ㊀かたのごとく。㊁ふさでもなく。

によほふあんや[如法暗夜](名) まっくらやみ。ふんのやみ。

によほふのやみ[如法暗](名) 前條に同じ。

によぼん[女犯](名)【佛】僧侶が女人と同交をなすこと。邪淫戒を犯すこと。

によらい[如來](名)【佛】《法身にては不生不滅にして依りて來る所なく去る所なき義、報身にては第一義を如として正覺を來となす義、應身にては、如實の道に乘じ來りて正覺を成したる義》佛の稱。

により[似寄](名) によりてあると。

によるる[似寄](自、ら四) 似て居る。よくにてあり。

によろ(名、副) 長きものゝ、ながにうどめくさまなどにいふ語。

++**によろり**(名、副) 前條に同じ。

によわう[女王](名)「ぢよわう」に同じ。

によゐん[女院](名)「にようゐん」に同じ。

にら[韮](名)【植】百合科に屬する草、形は葱に似、葉は扁平にして臭氣多く、食用に供せらる。夏の頃六瓣白色の花開く。ふたもと。とみら。「韮」。

にらき[苣](名) 菜を鹽又は酢に漬けたるもの。

にらま・ふ[睨](他、は下二)「にらむ」の延言。

にらまへる(他)「にらまふ」の訛。

にらみ[瞰](名) ㊀にらむこと。にらむさま。㊁他をにらみつくる威勢。おし。「—がきく」。——**あ・ふ**[瞰合](名)(自、は四) ㊀互ににらむ。㊁たゝかふ者互に持重して手を下さず。——**くら**[瞰競](名) 小兒の遊戯、にらみあひて、まづ笑ひたる方を負けとするもの。——**つ・く**[瞰附](他、か下二) 勢つよくにらむ。

にらむ

——つける（他）「にらみつく」の語。

にら・む（ら四）［瞰］（他、ま四）㊀目を怒らして見つむ。目かどを立てゝ見つむ。㊁ながしめに見る。ぢろりと見る。睨。㊂目ぼしをつく。

（に・りん）［二輪］（名）㊀二つの車輪。㊁二つの花冠。「一咲」。——**ぢや**［二輪車］（名）二輪の装置ある車。

にる（に・ぬ・ぬる・ぬれ・ぬれ・ぬれ）［似］（自、な上一）互に同じ様なり。

にる（に・ぬ・ぬる・ぬれ・ぬれ・ぬれ）［煮、烹］（他、な上一）㊀火にかけて沸かす。㊁沸けるもの丶中に入れて熟をとほす。

にれ［楡］（名）［植］「あきにれ」秋楡」に同じ。

にれ・が・むち［鞭］（名）［動］「もみ」の一名。［ふ。

にれ・もみ［楡樫］（名）［植］「もみ」の一名。

（にろく・ぢゆう）［二六時中］（名）《十二時の間の義》一晝夜、又、終日。

（にろく・つる）［二六對］（名）漢詩にて、近體の七言の句の第二字と第六字との平仄の相對すること。

（に・わうり）［仁王］（名）［佛］「こんがうぢん」金剛神に同じ。——**もん**［仁王門］（名）仁王の像をゑがきたる社寺の門。

［うわに］

（に・ゐん）［二院］（名）上院と下院と。——**せい**［二院制］（名）國會が上院と下院とより組織せらる、制度、我帝國議會は二院制なり。「一に赴く」。

（に）［任］（名）㊀つとめ。せめ。㊁職務を行ふ所。

（に）［仁］（名）果實の核中にある種子。たね。

（に）［忍］（名）㊀ぢのぶと。たふると。㊁［佛］自ら憤恚せず、また他人をして憤恚せしめざると。

（に）［人］（名）ひと。ひとがち。「一を見て法を說け」。

—に［人］（接尾）人數を數ふるにいふ語。「百—」。「千—」。

（に・い）［任意］（名）其人の思ふまゝにせさすること。其人の自由意思に任ずること。隨意。——**さい む**［任意債務］（名）［法］債務者が其債務の目的外の物を給付して辨濟するとを得る債務。——**ぢ ゆっさう**［任意出頭］（名）任意に或所に出頭すること。

（に・か）［認可］（名）㊀可なりと認めて許すこと。（許可）。㊁［法］其事の實行を許可する行政處分。——**えいげふ**［認可營業］（名）認可を得るにあらざればなすとを得ざる營業。——**ぢや り**［認可狀］（名）認可したるとの證明書。——**ぢより**［認可證］（名）前條に同じ。

（に・が）［人我］（名）他人と自己と。

（に・かい）［人界］（名）［佛］人間の社會。

（に・き）［任期］（名）職務にある一定の年限。

（に・き）［「八氣」］（名）「ぢんき」に同じ。

（に・きやう）［人形］（名）㊀人の形に擬して作りたる玩弄物。㊁「にんぎやうぢたて」の略言。——**ぢたて**［人形仕立］（名）人形に着する衣服の仕立、即ち腰下をあげて袖をつけたる仕立。——**ぢばゐ**［人形芝居］（名）人形を操りてをどらしむる芝居。——**つかひ**［人形遣］（名）人形をあやつりて踊（ゐ）らしむる人。——**で**［人形手］（名）唐子人形を染め出だしたる上品の更紗又は陶器の稱。——**まはし**［人形廻］（名）みとめゆるすと。

（に・ん）［認］（名）㊀［法］共事の實行を許可する行政處分。

（に・ん）［認識］（名）心が外界及內界の對象を感知又は認知し若しくは斷定すること。知ること。——**ろん**［認識論＝Epistemology］（名）［哲］認識の起原・本質及範圍等に就て研究する哲學、古來實在論と觀念論とに分れ、又、經驗論と純理論とに分る。

（に・ぎよ）［人魚］（名）㊀［動］「さんせうを」の一名。㊁胴以上は人身にして胴以下の魚體なりといふ想像上の動物。

（に・ぐわい）［人外］（名）㊀人倫の道にそむきたること。㊁普通人同樣のとりあつかひを受くること能はざる下賤のもの、即ち穢多の類。

（に・くわん）［任官］（名）㊀官吏に任ずること。㊁官職に任ずること。（拜命）。

（に・けふ）［「仁俠」］（名）弱きを扶け強きをくじく氣性に富むこと。をとこぎ。をとこだて。（任俠）。

（に・げん）［任限］（名）「にんき」任期」に同じ。

（に・げん）［人間］（名）㊀よのなか、世間。㊁ひと。人類。——**かい**［人間界］（名）人類の生息する此世界。——**なみ**［人間並］（名）人類一般の狀態。ひと丶はりのありさま。

（に・とく）［任國］（名）國司の任命せられて、赴任する地方。ぢゆりやう。

（に・さう）［人相］（名）㊀ひとの容貌。さうがう。㊁ひとの容貌を見て、其運命吉凶を占ふこと。——**がき**［人相書］（名）人を搜索するため、其容貌の他人と識別するに足るべき特點等を記載して、四方に配布するもの。——**み**［人相見］（名）人相によりて其人の運命吉凶を判斷することを業とする人。（相者、風鑑者）。——**めがね**［人相眼鏡］（名）人相を見るに用ふる眼鏡、即ち天眼鏡。

（に・ぢき）［認識］（名）心が外界及內界の對象を感知又は認知し若しくは斷定すること。知ること。——**ろん**［認識論＝Epistemology］（名）［哲］認識の起原・本質及範圍等に就て研究する哲學、古來實在論と觀念論とに分れ、又、經驗論と純理論とに分る。

（に・ぢやう）［刃傷］（名）刃物にて人を傷つくること。

（に・ぢやう）［人情］（名）㊀人類の具有する愛憐。いつくしむこゝろ。なさけ。㊁人心自然の情狀。「苦を避け樂に就くは—なり」。——**ぼん**［人情本］（名）男女の痴情を記したる小說。

（に・ぢゆ）［忍受］（名）たゑぢのびて受くること。「恥辱を—す」。

（に・ぢゆつ）［仁術］（名）「ぢんぢゆつ」に同じ。

（に・ぢゆつ）［忍術］（名）身をかくして敵陣などに忍び入る術。ぢのびの術。

（に・ぢよ）［任所］（名）赴任する地方。任務を行ふ所。

（に・ぢよ）［認證］（名）其物事をみとめてこれを證明すること。

（に・ぢよう）［認承］（名）みとめうけなふと。

（に・ぢよう）［人稱］（名）［文法］人代名詞のとなへ。第一人稱・第二人稱・第三人稱に分つ。

（に・ぢよう）［人證］（名）［法］證人を以てする證據方法。「もち（棟班）」。

（に・ぢん）［妊娠］（名）はらむと。みごもること。

（に・ぢん）［人參］（名）［植］（い）纖形科に屬する草本、葉は細裂し、花は白色小形にして複繖形花序に排列し、總苞は羽狀葉より成る、根は肥大にして黃赤色を呈す、葉根共に食用に供せられ、廣く各地に栽培せらる。（葫蘆巴）。（ろ）五加科に屬する草本、葉は掌狀複葉にして、花は小形白色なり、根は藥用に供せられ、其人形をなすものを殊に佳品とす、朝鮮產のもの最も有名なり。——**ぎ**［人參座］（名）昔時、藥用の人參を取扱ひし所。——**ぼく**［人參木］（名）［植］十字花科に屬する木、葉は人參に似、花は總狀花序をなす、枝幹は初め方形綠色なれど後に圓形褐色に變ず、幹を折れば中に方形の心あり、實は胡麻に似て色黑し、小笠原島に產す。

（に・ず）［人數］（名）㊀ひとのかず。にんとう。㊁多數の人。

にん・ず（ぜ・じ・ずる・ずる・ずれ・ずれ）［任］（自、さ變）つとめとす。せめとす。引受く。「責に—」。

にん・ず（ぜ・じ・ずる・ずる・ずれ・ずれ）［任］（他、さ變）㊀雇當せしむ。まかす。㊁官職に就かしむ。

にん・ず（ぜ・じ・ずる・ずる・ずれ・ずれ）［妊］（自、さ變）はらむ。

にん・だて［人數立］（名）人數の配列。

にん・せん［人選］（名）人をよりえらぶと。

にん・そく［人足］（名）㊀荷物の運送などに屬はる、勞働者。かるこ。（運夫、雇夫）。㊁人をあざけりていふ語。

（に・ん・たい）［忍耐］（名）たゑぢのぶと。こらへたふると。

（に・ん・たい）［妊帶］（名）いはたゐび。

（に・ん・たい）［人體］（名）「にんていに同じ。（——）。

ら・し（しく・しく・しき・しけれ）（形、二）ひとがちゝし。

（に・ん・だく）［認諾］（名）㊀よしとみとめてうべなふと。（承認）。㊁［法］口頭辯論にて、當事者の一人が相手方の主張を承認すること。

（に・ん・ち）［任地］（名）任務を行ふ地。任所。

（に・ん・ち）［認知］（名）㊀みとめ知ること。わきまへること。㊁［法］規定の法式により、私生子の父又は母たることを任意に自白すること。

にん・ぢやう（ぢや・ぢや・ぢや・ぢや・ぢや・ぢや）［人長］（名）神樂の舞人の長。

にん・ぢやう（ぢや・ぢや・ぢや・ぢや・ぢや・ぢや）［人定］（名）人の寢ねづまる時刻、即ち午後十時。

（に・ん・ちゆう）［人中］（名）㊀多人數のなか。㊁はなみぞ。（鼻溝）。——**はく**［人中白］（名）漢法にて、小便の垢（ぢ）を藥用となすときの稱。——**わう**［人中黃］（名）漢法にて、大便の液を藥用となすときの稱。

（に・ん・てい）［認定］（名）みとめてきめ定むること。

（に・ん・てい）［人體］（名）ひとがち。ぢんぢん。——。

ら・し（しく・しく・しき・しけれ）（形、二）ひとがちゝし。

（に・ん・とう）［人頭］（名）ひとかず。人數。——。

ぜい［人頭稅］（名）人頭に賦課する租稅。

（に・ん・どう）［忍冬］（名）［植］忍冬科に屬する植物、山野に生ず、纏繞性を有し、葉は橢圓狀をなして對生す、花は二花を生じ、花は大形にして葉狀をなす、花は蕾のとき淡黃色を呈し開けば淡黃色となり終に白色となる、花冠は唇形に分裂す、葉は藥用に供せられ、茶にも代用せらる。（金銀花、老翁藥）。

（に・ん・ぢく）［人德］（名）其人に自然そなはれる德。

（に・ん・ぢく）［仁德］（名）仁愛深き德。

（に・ん・ぢく）［忍辱］（名）［佛］恥辱を忍びて怨みを報ぜざること。——**がい**［忍辱鎧］（名）［佛］裝束の異稱。

にん・にく［大蒜］（名）［植］百合科に屬する草本、特異の臭氣を有す、葉は扁平なり、花は繖形花序をなして莖頂に着生す、根は皮赤くして藥用に供せらる。

（に・ん・にん）［人人］（名、副）ひと〻〻。めい〻〻。

（に・ん・のう）［人皇］（名）「にんわう」の連聲。

（に・ん・ば）［人馬］（名）人とうまと。ぢんば。

（に・ん・ぴ・にん）［人非人］（名）《人にして人にあらずとの義》不義非道の人を賤しみていふ語。

（に・ん・ぷ）［人夫］（名）㊀公役に使用せらる丶人民。役夫。㊁荷物の運搬などに使はる丶勞働者。かるこ。人足。

（に・ん・ぷ）［妊婦］（名）懷妊せる婦人。はらみをん

な。みもちをんな。(孕婦)。

(にん-べつ[人別](名) ㊀人毎にわり當つること。人毎にものすること。「一に賦役を充て」。㊁人名。㊂戸籍。㊃人口。——**-ちやう**[人別帳](名) 人別を志るしたる帳簿。

(にん-べん[人偏](名) 漢字の偏の名、即ち仙・供等の字の左方にある「イ」の字、字書にては人部に屬す。

(にん-む[任務](名) つとめ。やくめ。

(にん-めい[任命](名) 官職を命ずること。職務を命ずること。

(にん-めん[任免](名) 官職に任ずると官職を免ずること。

(にん-めん[人面](名) ひとのかは。——**-さう**[人面瘡](名) 頭に生ずる一種の腫物、腐爛して人面の狀をなすといふ。——**-おう-ぢん**[人面獸心](名)《面は人にて心は獸のごとき義》義理をわきまへぬと。恩義を知らぬと。

(にん-よう[任用](名) 職務を授けて使用すること。「ゆるすと。あげもちふること。

(にん-よう[認容](名) 可としてゆるすこと。みとめ

(にん-わう[人皇](名) 神代と區別して神武天皇以後の天皇を申し奉る語。

++にんわう-ゑ[仁王會](名) 古昔、毎年三月及七月に大極殿・紫宸殿・清涼殿等にて行はれし公事。朝家の御所のため、仁王護國般若經を講説せしめられたり。

ぬ

ぬ 擬音的鼻音N即ち舌端を硬口蓋の前部に觸れしめて發する鼻音と、母音「ウ」との結合。

++ぬ[環](名)「に」に同じ。「一なともゆちに」。

++ぬ[野](名)「の」に同じ。「一の神」。

++ぬ[沼](名)「ぬま」に同じ。「こもり—」。「田—」。

ぬ[癪](名)「ぬ」に同じ。「こもり—」。

ぬ[癪](名)(自、な下二) いぬ。「—」。

ぬ[助動] 過去をあらはす助動詞。「春行き

ぬ[不](助動) 打消の助動詞「ず」の變化。「思は—夢」。

ぬえ[鵺](名) ㊀【動】このはづくの一種、大いさ鳩の如く、嘴は黄色にして羽毛に黑斑あり、霊伏し夜出づ、其聲幼兒の泣聲に類す。とらつぐみ。ぬえつぐみ。㊁近衛帝の時、源頼政が紫宸殿上より射落したりといふ怪獸。首は猴・身は虎・尾は蛇の如く、聲はぬえに似たりといへり。㊂轉じて、種々の形をなして一致せざる異體のもの、稱。「—文章」。

++ぬえ-くさ[萎草](名) 去をれたる草。去なやかなる草。——**-の**[萎草](枕) 舞人のたをやかなるさまを萎草にたとへて、「め」に冠らする詞。「—の女にしあれば」。

++ぬえ-と-どり[鵺子鳥](名)

++ぬえ-と-どり[鵺子鳥](枕)「かたこひ」に冠らする詞。

++ぬえ-ふ-すま(自、さ四)「のえふす」に同じ。

ぬか[糠](名) もみがちの中に米を包みたる搗き皮、又、其搗皮の碎けて細粉となれるもの。(糠餅、米なきにいふ。

ぬか[額](名) ㊀ひたひ。「—づく」。㊁「ぬかどり」の表する語「一兩」「一蚊」。

ぬか—[糠](接頭) 或語に冠して、いと細かき意を

ぬか-あめ[糠雨](名) いと細かき雨。きりあめ。

ぬか-えび[糠蝦](名)【動】蚊の一種、細小白色にして頭部に羽毛あり、雨前などは道路を塞ぎて群飛す。「浮塵子、蝦子」。「に落くるもの。

++ぬか-がき[樓額](名) 馬具の名、馬の額の飾飾。

++ぬか-がみ[額髮](名) きへがみ。ひたひがみ。

ぬか-くぎ[糠釘](名) 極めて小さき釘。

++ぬかご[零餘子](名)「むかご」に同じ。

ぬか-こ[糠子](名)【動】「ぬかが」に同じ。

ぬか-す[抜](他、さ四) ㊀あとす。もらす。(脫)。㊁言ふ。去やべる。「何を—」。(吐)。

++ぬか-づき[酸漿](名)【植】「ほほづき」に同じ。

++ぬかづき-むし[叩頭蟲](名)【動】「こめつきむし」の一名。

++ぬか-づく[叩頭](自、か四)(額突く義)頭を地につけて拜禮す。「頭首、稽首」。

ぬか-づけ[糠漬](名) 糠に鹽を和し、野菜類を漬けたるもの。

ぬか-どり[額鳥](名)【動】鳥類中すゞめ科に屬する鳥、形ひばに似て小さく、羽毛背灰色にして よく囀ずる。

++ぬか-ば[板歯](名)「むかば」に同じ。

ぬか-ばへ[糠蠅](名)【動】「ぬかが」に同じ。

ぬか-ぶくろ[糠袋](名) 糠を入れてゆあみするとき肌を洗ふ袋。

ぬか-ぶるひ[糠篩](名) 糠をふるふに用ふるふるひ。「さ篩」。

ぬか-ぼし[糠星](名) 大空に見ゆる無數の小さき星。

ぬか-ミソ[糠味噌](名) ㊀糠に鹽を加へて貯へおき、野菜などを漬けくるもの。——**-づけ**[糠味

噌漬](名) ぬかミソに漬けたる漬物。

ぬかり[泥濘](名) 泥深き所。ぬかること。——**-み**[泥濘](名) 路上泥深きこと。ぬかること。

ぬか-る[泥濘](自、ら四) 地上泥深くして歩み難くあり。

ぬか-る[抜](自、ら四) 氣附かずして仕損ず。油斷して失策す。(怪、呆)。

ぬかる-み[泥濘](名)「ぬかりみ」に同じ。

ぬき[抜](名) ㊀ぬくこと。㊁ぬきて其處をあけぬくこと。㊂「どぶやうなどの骨をぬきて料理すること。㊃汁の實を入れざること。㊄昔時、人の佩びたる小刀などを抜き取りし風。

ぬき[緯](名) ㊀織物の横絲。㊁たてのものと横に打ち違ひたるもの。

ぬき[貫](名) 横に柱を貫く材。

ぬき-あし[抜足](名) 音を立てぬやうに足をあげて歩むこと。「—差足」

ぬき-あつ-む[抜集](他、ま下二) 抜きとりてよせあつむ。

[ぬきあつめる(他)「ぬきあつむ」の訛。

ぬき-あは-す[抜合](他、さ下二) 相學ふもの互に刀を抜く。

[ぬきあはせる(他)「ぬきあはす」の訛。

ぬき-い-だす[抜出](他、さ四) ㊀ひきぬきて出だす。「抽」。㊁よりいだす。「擢」。

ぬき-い-づ[抜出](自、た下二) ㊀あらはれ出づ。おこり立つ。「抽」。㊁すぐれ出づ。ひいづ。

ぬき-い-づる[抜出](他、た下二)「ぬきいだす」に同じ。「錐」。

ぬき-いと[抜絲](名) 古箭より抜き取りたる羽

ぬき-いと[緯絲](名) 織物の横絲。

ぬき-うち[抜擊](名) 刀を抜くと同時に切りつくること。(抜打)。

ぬき-うつし[抜寫](名) 書中の處々をぬきてうつしとること。

ぬき-えもん[抜衣紋](名) 衣紋を後の方へ押しさげて衣服を着てあること。のけくび。「ゐすと。

ぬき-がき[抜書](名) 處々をぬきとりてかき出

ぬき-かざ-す[抜翳](他、さ四) 刀を抜きて頭上にふりかざす。

++ぬき-かぶり[縱車](名)「いとぐるま」に同じ。

++ぬき-かぶる[縱車](名) 前條に同じ。

ぬき-さし[抜差](名) ㊀抜出だすと差込むこと。くとさすこと。㊁減(と)くと加ふること。㊂とりかへ。やりかへ。

ぬき-ぞろ[緯白](名) 白の緯絲の織物。

++ぬき-す[買簀](名) 古昔、鹽(タク)の上にかけおきたる簀、手洗水などの飛び散らぬためのもの。

ぬき-す-つ[脫棄](他、た下二) ぬぎたるまゝにてすてゝもく。「脫捨」。

[ぬきすてる(他) 前條の訛。

++ぬき-すべ-す[脫滑](他、さ四) 衣服などをすべらしてぬぐ。

ぬき-つら-ぬ[貫連](他、な下二) つらぬきて長くつちぬ。

ぬき-つ-る[抜連](他、ら下二) 多人數共に刀を抜く。

[ぬきつらねる(他) 前條の訛。

ぬき-で[抜手](名) 用手をかはる〳〵水上に抜き出だして泳ぎて。「—を切る。

[ぬきぬ

ぬき-で[抜出](名) ㊀ぬき出だすこと。㊁++古昔、相撲(スマ)の面に於ける選抜の力士の取組。——**-わた**[抜出綿](名) 布團などよりぬき出だしたるわた。ぬきわた。

ぬき-さほ-す[貫通](他、さ四) つちぬきとほす。つきぬく。

ぬき-さ-る[抜取](他、ら四) ㊀其中より或物だけを取る。㊁彼方より此方にぬきてとる。㊂えらび取る。

ぬき-はな-す[抜放](他、さ四) 刀を鞘(サヤ)より一氣に抜き出す。「ヒ。

ぬき-はな-つ[抜放](他、た四) 前條に同

++ぬき-ほ[抜穗](名) 稻の穗をぬきとること。又、ぬきとりたる稻の穗。「一の使」。「冊子。

ぬき-ぼん[抜本](名) 抜萃したるものを綴りたる

ぬき-み[抜身](名) 鞘(サヤ)より抜きあらはしたる刃。白刃。「一の槍」。「鞘刃」。

++ぬき-れ[貫入](名) 數珠の稱。

ぬき-わた[抜綿](名) 布團又は古箭等に入れたる綿を抜き取りたるもの。ぬきでわた。

ぬき-をき[緯筬](名) 緯絲をとほすをさ。

ぬきん-づ[抽](自、た下二)《抜き出づの音便》㊀群に秀づ。衆に抜く。すぐる。まさる。ひいづ。「才學衆に—」。㊁すゝみ出でゝものす。先んじてものす。

ぬきん-づ[抽擢](他、た下二)《抜き出づの音便》擢び出す。よりぬく。

[ぬきんでる(自)「ぬきんづ」の訛。

ぬ-く[抜](自、か下二) ㊀はなれ出づ。うごき出づ。㊁離れ落つ。とれ去る。「齒—」。「髮—」。㊂すぐれ出づ。ぬきんづ。(抽)。㊃もる。もつ。(漏)。